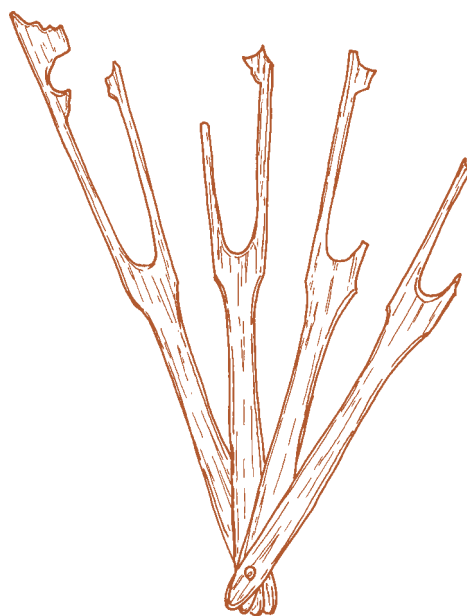


林口遺跡Ⅱ・蓮池城跡北面遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ



2001.8

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

林口遺跡Ⅱ・蓮池城跡北面遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

2001.8

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

土佐市は高知県のほぼ中央部、高知県第二の河川である仁淀川の右岸に位置しています。温暖な気候に恵まれた土地であり、旧高岡郡内でも遺跡数の最も多い地域です。この土佐市域では近年まで大規模な開発がなく、発掘調査例も多くありませんでしたが、土佐市バイパスや四国横断自動車道建設に伴って多くの発掘調査が実施され、土佐市の歴史が少しずつ明らかになってきました。

本書は平成11年度に発掘調査が実施された林口遺跡第Ⅱ調査地区と蓮池城跡北面遺跡の報告書です。林口遺跡第Ⅱ調査地区では林口城跡の東山麓部で確認された土橋とそれに伴う遺構・遺物、屋敷を区画するとみられる溝跡と土坑から出土した多量の土器と県内初になる蝙蝠扇など中世を中心とする多くの遺構・遺物が確認されています。また、蓮池城跡北面遺跡では中世畑作の名残とみられる畝状遺構などが検出されており、土佐市の中世を考えるうえで多くの資料を新たに蓄積することができました。

これらの資料は土佐市の歴史を解明していくうえで貴重なものであると共に、地域の方々に埋蔵文化財の重要性をご理解いただく資料になると思われ、ぜひ多くの方々に活用して頂きたいと願っております。

最後に、調査にあたり多大な御理解と御協力を頂いた国土交通省高知工事事務所、土佐市都市計画課、地元関係者の方々、発掘調査に従事してくださった作業員の皆様には心より御礼申し上げます。

平成13年8月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 門田 伍朗

例言

1. 本書は土佐市バイパス建設に伴い平成11年度に発掘調査を実施した林口遺跡第Ⅱ調査地区(Ⅱ区とも略記し、Ⅱ-A区と表記した箇所もある。)と蓮池城跡北面遺跡の発掘調査報告書である。なお、土佐市バイパス建設に伴う調査の経緯と経過、確認調査、調査の方法及び遺跡の地理的・歴史的環境については平成12年度に刊行した『光永・岡ノ下遺跡』—土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—に記している。
2. 本調査は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局(現国土交通省四国整備局)から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 林口遺跡は高知県土佐市高岡町に所在する縄文時代から近代にかけての複合遺跡である。今回報告する調査区からは林口城跡に関連するとみられる土橋や中世の屋敷跡などが確認された。発掘調査はA区からD区の4区に分けて行い、発掘調査延べ面積は、A区が1,587m²(一部2面で延べ調査面積1,875m²)、B区が1,098m²(1面)、C区が975m²(1面)、D区が1,392m²(1面)であった。また、本調査と併行して一部確認調査(調査面積40m²)を行った。一方、蓮池城跡北面遺跡は平成5・6年度に実施された高知県遺跡詳細分布調査の際発見された高知県土佐市蓮池に所在する遺跡である。今回の調査区からは掘立柱建物跡など中世の集落の一部や畝状遺構などが確認された。発掘調査はA区からC区の3区に分けて行い、発掘調査延べ面積はA区が762m²、B区が64m²、C区が265m²であった。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

平成11年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 河崎正幸

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦，同主任調査員 伊藤 強・
島中宏一，同調査員 田中涼子・下村 裕，技術補助員 大原直美

臨時職員：福留美穂，市村敏江

平成12年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦・岩本繁樹，同主任調査員
伊藤 強・江戸秀輝，同調査員 田中涼子・下村 裕，技術補助員 大原直美

臨時職員：原真由美，福留美穂

平成13年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 中城英人

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同主任調査員 中山真司・籠尾泰輔，同調査員 田中
涼子・下村 裕，技術補助員 大原直美

臨時職員：福留美穂

5. 本書の執筆は調査を担当した廣田、伊藤、田中、下村が分担し、編集等は廣田が行った。現場写真は4名(発掘調査を担当した廣田・伊藤・田中・下村)が行い、遺物写真は廣田が撮影した。
6. 遺構については、SB(掘立柱建物跡)、SA(塀・柵列跡)、SK(土坑)、SD(溝跡・暗渠)、P(ピット)、SU(畝状遺構)、SX(性格不明遺構)等の略号も併用している。遺構番号は調査区ごと(A区：遺構101～、遺物1001～、B区：遺構201～、遺物2001～、C区：遺構301～、遺物3001～、D区：遺構401～、遺物4001～)に通し番号とした。また、掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位Nは公共座標におけるGNであり、遺跡付近(国土基本図IV-ID18)の真北はGNに対し東に $0^{\circ} 1' 6''$ 、磁北はGNに対し西に $5^{\circ} 48' 35''$ 振っている。なお、林口遺跡のほぼ中心F8(X=55,000, Y=-7, 200)は北緯 $32^{\circ} 30' 14''$ 、東経 $133^{\circ} 25' 24''$ 、蓮池城跡北面遺跡のほぼ中心K5(X=54,500, Y=-7, 500)は北緯 $33^{\circ} 30' 30''$ 、東経 $133^{\circ} 25' 13''$ である。
7. 遺物については、弥生土器を縮尺1/4、それ以外は原則として縮尺1/3で掲載し、一部の遺物については縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は前述のとおり地区ごとに通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。なお、報告書中で土師質土器としているものはロクロないし回転台を使用しない土師器に対しロクロないし回転台を使用した素焼き土器(粘土紐巻き上げロクロ成形またはロクロ水挽成形されたもの)の総称として使用している。所謂「回転台土師器」、「ロクロ土師器」などと云われるものに当たる。
8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって、下記の方々のご指導並びに貴重なご教示、ご助言をいただいた。

鈴田由紀夫(九州陶磁文化館)、森島康雄(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、橋本久和(当時高槻市教育委員会)
9. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また、同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。

整理作業員
島村加奈、岸本洋子、元木恵利子、坂本エリ、竹村小百合、森田直美、松田美香、岩井涼子、吉野絵里、森川 歩、森沢美紀、横山めぐみ、原真由美、西村美喜
10. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局(現国土交通省四国整備局)高知工事事務所、土佐市バイパス監督官詰所、土佐市都市計画課のご協力を頂いた。また地元住民の方々に、遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物は、林口遺跡が「99-6TH」、蓮池城跡北面遺跡が「99-5HK」と註記し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 I 章 序章 (廣田)

1. はじめに	1
2. 遺跡の概要	2

第 II 章 林口遺跡

1. 調査の概要	7
(1) 調査の経過	7
(2) 調査日誌抄	7

2. 調査区の概要

(1) A区 (下村)	12
① 層序	12
② 堆積層出土遺物	16
③ 遺構と遺物	30
i 古代	30
ii 中世1	30
iii 中世2	80
iv 近代	84
(2) B区 (伊藤)	87
① 層序	87
② 堆積層出土遺物	88
③ 遺構と遺物	91
i 中世	91
ii 近世以降	108
(3) C区 (田中)	109
① 層序	109
② 堆積層出土遺物	111
③ 遺構と遺物	115
i 近世以降	115
(4) D区 (田中)	117
① 層序	117
② 堆積層出土遺物	120
③ 遺構と遺物	176
i 中世	176

第Ⅲ章 蓮池城跡北面遺跡

1. 調査の概要	185
(1) 調査の経過	185
(2) 調査日誌抄	185
2. 調査区の概要	186
(1) A区 (田中)	186
① 層序	186
② 堆積層出土遺物	189
③ 遺構と遺物	191
i 中世	191
(2) B区 (下村)	196
① 層序	197
② 堆積層出土遺物	197
③ 遺構と遺物	200
i 中世	200
(3) C区 (下村)	200
① 層序	200
② 堆積層出土遺物	201
③ 遺構と遺物	202
i 中世	202
第Ⅳ章 考察	
1. 林口遺跡	205
(1) 中世 (下村)	205
(2) 近世以降 (伊藤)	206
(3) 林口城跡関連遺構について (田中)	206
(4) 古代から中世の遺物について (田中)	207
(5) 蝙蝠扇について (下村)	211
(6) まとめ (下村)	213
2. 蓮池城跡北面遺跡	213
(1) 中世 (下村)	213
(2) まとめ (下村)	214
3. 結語 (廣田)	215
第Ⅴ章 自然科学分析 (古環境研究所)	
1. 林口遺跡	217
(1) 花粉分析	217
① はじめに	217

② 試料.....	217
③ 方法.....	217
④ 結果.....	217
⑤ 花粉分析から推定される植生と環境.....	223
⑥ まとめ.....	223
(2) 珪藻分析.....	224
① はじめに.....	224
② 試料.....	224
③ 方法.....	224
④ 結果.....	224
⑤ 考察.....	225
2. 蓮池城跡北面遺跡.....	229
(1) 花粉分析.....	229
① はじめに.....	229
② 試料.....	229
③ 方法.....	229
④ 結果.....	229
⑤ 花粉分析から推定される植生と環境.....	230
(2) 珪藻分析.....	231
① はじめに.....	231
② 試料.....	231
③ 方法.....	231
④ 結果.....	231
⑤ 考察.....	231

挿図目次

Fig. 1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡位置図.....	1
Fig. 2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S=1/100,000).....	2
Fig. 3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図(S=1/10,000).....	3
Fig. 4 発掘調査風景.....	8
Fig. 5 発掘調査風景.....	9
Fig. 6 発掘調査風景.....	11
Fig. 7 発掘調査風景.....	12
Fig. 8 林口遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1/2,500).....	13

Fig. 9	林口遺跡調査区設定図(S=1/2,000) (公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す).....	14
Fig. 10	A区南壁セクション図	15
Fig. 11	A区第I層出土遺物実測図(土師質土器・瓦器・青磁ほか).....	16
Fig. 12	A区第III層出土遺物実測図(須恵器・土師質土器).....	17
Fig. 13	A区第III層出土遺物実測図(土師質土器).....	19
Fig. 14	A区第III層出土遺物実測図(瓦質土器・東播系須恵器・常滑焼ほか).....	20
Fig. 15	A区第V層出土遺物実測図(須恵器・土師器).....	21
Fig. 16	A区第V層出土遺物実測図(土師質土器1).....	23
Fig. 17	A区第V層出土遺物実測図(土師質土器2).....	24
Fig. 18	A区第V層出土遺物実測図(土師質土器3).....	25
Fig. 19	A区第V層出土遺物実測図(瓦器).....	26
Fig. 20	A区第V層出土遺物実測図(白磁・青磁・東播系須恵器ほか).....	27
Fig. 21	A区第VI層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師質土器ほか).....	29
Fig. 22	SD-101	30
Fig. 23	A区古代遺構平面図(S=1/400).....	30
Fig. 24	SK-101・102出土遺物実測図	31
Fig. 25	SK-109	32
Fig. 26	SK-112	33
Fig. 27	SK-112出土遺物実測図1	35
Fig. 28	SK-112出土遺物実測図2	37
Fig. 29	SK-112出土遺物実測図3	39
Fig. 30	SK-112出土遺物実測図4	41
Fig. 31	SK-112出土遺物実測図5	43
Fig. 32	SK-114出土遺物実測図	44
Fig. 33	SD-105・108	46
Fig. 34	SD-103・105出土遺物実測図	46
Fig. 35	SD-106出土遺物実測図	47
Fig. 36	SD-108出土遺物実測図	49
Fig. 37	SD-112・124・162・163・165	50
Fig. 38	SD-112出土遺物実測図1	51
Fig. 39	SD-112出土遺物実測図2	53
Fig. 40	SD-115	54
Fig. 41	SD-115・122出土遺物実測図	55
Fig. 42	SD-122	57
Fig. 43	SD-124出土遺物実測図1	59
Fig. 44	SD-124出土遺物実測図2	61

Fig. 45	SD-124出土遺物実測図3	62
Fig. 46	SD-124出土遺物実測図4	63
Fig. 47	SD-125出土遺物実測図	64
Fig. 48	SD-141	67
Fig. 49	SD-126・127・132・138・141出土遺物実測図	67
Fig. 50	SD-144・148・150・151出土遺物実測図	69
Fig. 51	SD-153・154	71
Fig. 52	SD-153出土遺物実測図	71
Fig. 53	SD-154出土遺物実測図	73
Fig. 54	SD-155	74
Fig. 55	SD-155出土遺物実測図1	75
Fig. 56	SD-155出土遺物実測図2	77
Fig. 57	SD-155出土遺物実測図3	78
Fig. 58	SD-156出土遺物実測図	80
Fig. 59	A区遺構平面図第1次検出面(S=1/200)	81
Fig. 60	SD-157	83
Fig. 61	SK-117・118, SD-157出土遺物実測図	83
Fig. 62	SD-161・162・165・167・168出土遺物実測図	86
Fig. 63	B区西壁セクション図	87
Fig. 64	B区第I層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器・青磁ほか)	88
Fig. 65	B区第V層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器・瓦質土器ほか)	89
Fig. 66	B区第VI層出土遺物実測図(弥生土器・瓦器・土師質土器)	90
Fig. 67	SB-201	92
Fig. 68	SB-202	93
Fig. 69	SB-203	94
Fig. 70	SA-201	95
Fig. 71	SA-202	95
Fig. 72	SA-203	95
Fig. 73	SK-201	96
Fig. 74	SK-202	96
Fig. 75	SD-201	96
Fig. 76	SD-201遺物出土状態	97
Fig. 77	SD-201出土遺物実測図1	98
Fig. 78	SD-201出土遺物実測図2	99
Fig. 79	SD-201出土遺物実測図3	100
Fig. 80	SD-201出土遺物実測図4	102

Fig. 81	SD-203~205	103
Fig. 82	SD-206	104
Fig. 83	SD-202・204~206出土遺物実測図	105
Fig. 84	SP-201	107
Fig. 85	SP-202	107
Fig. 86	P-201~203, SP-201・202出土遺物実測図	107
Fig. 87	C区南壁セクション図	110
Fig. 88	C区第Ⅱ層出土遺物実測図(磁器・銅製品).....	111
Fig. 89	C区第Ⅲ層出土遺物実測図(弥生土器・東播系須恵器・土師質土器ほか).....	113
Fig. 90	C区第Ⅵ・Ⅷ層出土遺物実測図(縄文土器・弥生土器・土師質土器).....	115
Fig. 91	SD-301・302	116
Fig. 92	SD-303・304	116
Fig. 93	SK-302, P-301出土遺物実測図	116
Fig. 94	D区セクション図	119
Fig. 95	D区第Ⅰ層出土遺物実測図(土師質土器・磁器).....	120
Fig. 96	D区第Ⅱ層出土遺物実測図(弥生土器・瓦器・土師質土器ほか).....	121
Fig. 97	D区第Ⅲ層出土遺物実測図(弥生土器・土師器・瓦器ほか).....	123
Fig. 98	D区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師質土器1).....	125
Fig. 99	D区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師質土器2).....	127
Fig.100	D区第Ⅲ層出土遺物実測図(瓦質土器・白磁・青磁ほか).....	128
Fig.101	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(弥生土器).....	129
Fig.102	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器).....	130
Fig.103	D区第Ⅺ層出土遺物実測図(弥生土器).....	130
Fig.104	D区第Ⅺ層出土遺物実測図(土師器・瓦器・東播系須恵器).....	132
Fig.105	D区第Ⅺ層出土遺物実測図(土師質土器1).....	133
Fig.106	D区第Ⅺ層出土遺物実測図(土師質土器2).....	135
Fig.107	D区第Ⅺ層出土遺物実測図(土師質土器3).....	136
Fig.108	D区第Ⅺ層出土遺物実測図(土師質土器・白磁・土製品).....	138
Fig.109	D区第Ⅺ層出土遺物実測図(石製品).....	139
Fig.110	D区第Ⅻ層出土遺物実測図(弥生土器).....	139
Fig.111	D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師器・須恵器・黒色土器).....	140
Fig.112	D区第Ⅻ層出土遺物実測図(瓦器).....	141
Fig.113	D区第Ⅻ層出土遺物実測図(東播系須恵器).....	142
Fig.114	D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器1).....	143
Fig.115	D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器2).....	145
Fig.116	D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器3).....	146

Fig.117	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器4).....	147
Fig.118	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器5).....	149
Fig.119	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器6).....	150
Fig.120	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器7).....	151
Fig.121	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器8).....	153
Fig.122	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器9).....	154
Fig.123	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器10).....	156
Fig.124	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器11).....	157
Fig.125	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器12).....	158
Fig.126	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器13).....	159
Fig.127	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器14).....	160
Fig.128	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器15).....	160
Fig.129	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(白磁・青磁).....	161
Fig.130	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(木製品1).....	162
Fig.131	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(木製品2).....	163
Fig.132	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(木製品3).....	163
Fig.133	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(弥生土器).....	164
Fig.134	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師器).....	164
Fig.135	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(黒色土器).....	165
Fig.136	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(瓦器).....	165
Fig.137	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(東播系須恵器).....	166
Fig.138	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器1).....	167
Fig.139	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器2).....	169
Fig.140	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器3).....	170
Fig.141	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器4).....	172
Fig.142	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器5).....	172
Fig.143	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器6).....	173
Fig.144	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器7).....	174
Fig.145	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器8).....	175
Fig.146	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(白磁).....	175
Fig.147	D区第Ⅷ層出土遺物実測図(石製品).....	176
Fig.148	SK-402	177
Fig.149	SK-402出土遺物実測図1	177
Fig.150	SK-402出土遺物実測図2	177
Fig.151	SD-401	178
Fig.152	SD-401出土遺物実測図1	178

Fig.153	SD-401出土遺物実測図2	179
Fig.154	SD-401出土遺物実測図3	180
Fig.155	SD-402出土遺物実測図	181
Fig.156	P-401~404出土遺物実測図	183
Fig.157	SX-401	183
Fig.158	発掘調査風景	185
Fig.159	蓮池城跡北面遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1/2,500)	187
Fig.160	蓮池城跡北面遺跡の調査区設定図(S=1/2,000)(公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す。)	188
Fig.161	A区セクション図	189
Fig.162	A区第Ⅰ・Ⅲ層出土遺物実測図(青磁・近世陶器・古銭ほか)	189
Fig.163	SB-101	190
Fig.164	SD-101~104	192
Fig.165	SK-101, SD-102~106出土遺物実測図	193
Fig.166	SD-106~110	194
Fig.167	SD-107・108・110出土遺物実測図	195
Fig.168	SU-101	196
Fig.169	P-101, SU-101出土遺物実測図	196
Fig.170	B区西壁セクション図	197
Fig.171	B区第Ⅱ・Ⅲ層出土遺物実測図(土師器・土師質土器・青磁ほか)	198
Fig.172	B区遺構平面図第1次検出面(S=1/100)	199
Fig.173	B区遺構平面図第2次検出面(S=1/100)	200
Fig.174	C区北壁セクション図	201
Fig.175	C区第Ⅴ層出土遺物実測図(備前焼・石製品)	202
Fig.176	C区遺構平面図(S=1/200)	203
Fig.177	SK-301	204
Fig.178	SD-303, SU-301出土遺物実測図	204
Fig.179	林口遺跡第Ⅱ調査地区-D区土師質土器杯・椀分類図	209
Fig.180	林口遺跡第Ⅱ調査地区-B区における花粉ダイアグラム	221
Fig.181	林口遺跡第Ⅱ調査地区-D区における花粉ダイアグラム	222
Fig.182	林口遺跡第Ⅱ調査地区-D区における主要珪藻ダイアグラム	227
Fig.183	サンプリング箇所土層断面写真	228
Fig.184	蓮池城跡北面遺跡-A区における主要珪藻ダイアグラム	233

表 目 次

Tab. 1	平成11年度発掘調査概要一覧	4
Tab. 2	林口遺跡第Ⅱ調査地区－A区土坑計測表	82
Tab. 3	林口遺跡第Ⅱ調査地区－B区掘立柱建物跡計測表	91
Tab. 4	林口遺跡第Ⅱ調査地区－B区堀・柵列跡計測表	93
Tab. 5	林口遺跡第Ⅱ調査地区－B区土坑計測表	94
Tab. 6	林口遺跡第Ⅱ調査地区－C区土坑計測表	115
Tab. 7	林口遺跡第Ⅱ調査地区－D区柵列計測表	176
Tab. 8	林口遺跡第Ⅱ調査地区－D区土坑計測表	178
Tab. 9	蓮池城跡北面遺跡－A区掘立柱建物跡計測表	191
Tab.10	蓮池城跡北面遺跡－A区土坑計測表	191
Tab.11	蓮池城跡北面遺跡－A区畝状遺構計測表	196
Tab.12	蓮池城跡北面遺跡－C区土坑計測表	202
Tab.13	蓮池城跡北面遺跡－C区畝状遺構計測表	204
Tab.14	林口遺跡第Ⅱ調査地区における花粉分析結果1	218
Tab.15	林口遺跡第Ⅱ調査地区における花粉分析結果2	219
Tab.16	林口遺跡第Ⅱ調査地区における花粉分析結果3	220
Tab.17	林口遺跡第Ⅱ調査地区における珪藻分析結果1	225
Tab.18	林口遺跡第Ⅱ調査地区における珪藻分析結果2	226
Tab.19	蓮池城跡北面遺跡における花粉分析結果	230
Tab.20	蓮池城跡北面遺跡における珪藻分析結果	232

図 版 目 次

PL. 1	A区画像平面図(S=1/300)	A区南壁セクション2(北より)
PL. 2	A区調査前全景(北西より) A区調査前全景(南東より)	PL. 7 A区南壁セクション3(北より) A区東壁セクション(西より)
PL. 3	A区遺構検出状態(北西より) A区遺構完掘状態(北西より)	PL. 8 SK-112(南より) SD-112(西より)
PL. 4	A区遺構検出状態(南東より) A区遺構完掘状態(南東より)	PL. 9 SK-109(南より), SK-112(南より), SK-118(南より), SK-112遺物出土状 態(北より), SK-112土師質土器 (1202・1312)出土状態(北より), SK- 112土師質土器(1310)出土状態(北より),
PL. 5	A区完掘状態(南上空より) A区完掘状態(東上空より)	
PL. 6	A区南壁セクション1(北東より)	

- SD-112(南より), SD-112・124(東より)
- PL.10 SD-115(南より), SD-141(南より), SD-148(南より), SD-156(南より), SD-157(南より), SD-124土師質土器(1308)出土状態(南より), SD-155遺物出土状態(南東より), SD-108土師質土器(1256・1257)出土状態(南より)
- PL.11 B区画像平面図(S=1/250)
- PL.12 B区遺構検出状態(南より)
B区遺構完掘状態(南より)
- PL.13 B区遺構検出状態(北より)
B区遺構完掘状態(北より)
- PL.14 B区遺構完掘状態(南上空より)
B区遺構完掘状態(西上空より)
- PL.15 B区西壁セクション(東より)
B区東壁セクション(南より)
- PL.16 SB-201~203, SA-201~203(北より)
SD-201遺物出土状態(北東より)
- PL.17 SD-204遺物出土状態(西より)
SD-206遺物出土状態(東より)
- PL.18 B区下層確認トレンチ北壁1(南より)
B区下層確認トレンチ北壁2(南より)
- PL.19 B区調査前全景(東より), B区南西部完掘状態(北より), B区南東部完掘状態(北より), B区北部完掘状態(南より), SK-201(南西より), SK-203(南より), SD-201・202(南より), SD-201セクション(南より)
- PL.20 SD-203セクション(西より), SD-203(西より), SD-204(南より), SD-204(北より), SD-205(東より), SD-205(西より), SD-206(南より), SD-206(北より)
- PL.21 P-202(東より), B区北部ピット断ち割り状態(南より), SP-201(西より), SP-202(南より), SD-201遺物出土状態(南西より), SD-201白磁(2101)出土状態(西より), SD-201土師質土器(2093)出土状態(北西より), SD-201土師質土器(2087)出土状態(北より)
- PL.22 SD-201土師質土器(2096)出土状態(北西より), SD-201土師質土器(2097)出土状態(西より), SD-201土師質土器(2098)出土状態(西より), SD-201土師質土器(2088)出土状態(北西より), SD-205土師質土器(2106)出土状態(西より), SD-205土師質土器(2107)出土状態(北より), SD-206土師質土器(2108)出土状態(東より), SD-206須恵器(2110)出土状態(南より)
- PL.23 C区画像平面図(S=1/250)
- PL.24 C区調査前全景(北より)
C区調査前全景(東より)
- PL.25 C区遺構検出状態(東より)
C区遺構完掘状態(北東より)
- PL.26 C区遺構検出状態(西より)
C区遺構完掘状態(西より)
- PL.27 C区遺構完掘状態(東上空より)
C区遺構完掘状態(西上空より)
- PL.28 C区南壁セクション1(北より)
C区南壁セクション2(北より)
- PL.29 C区土坑セクション1(東より)
C区土坑セクション2(西より)
- PL.30 SK-301・P-301(南より), SK-302(東より), C区土坑セクション(南より), SD-301(東より), SD-302(南より), SD-302(東より), SD-303(南より), SD-304(東より)
- PL.31 D区画像平面図(S=1/250)
- PL.32 D区第Ⅲ層遺構検出状態(北より)
D区第Ⅲ層遺構完掘状態(北より)

- PL.33 D区第Ⅲ層遺構検出状態(南より)
D区第Ⅲ層遺構完掘状態(南東より)
- PL.34 D区第Ⅲ層遺構検出状態(東より)
D区第Ⅲ層遺構完掘状態(東より)
- PL.35 D区第Ⅲ層遺構完掘状態(東上空より)
D区第Ⅲ層遺構完掘状態(南上空より)
- PL.36 D区第Ⅲ・Ⅳ層完掘状態(北より)
D区第Ⅲ・Ⅳ層完掘状態(北西より)
- PL.37 D区セクション1(南より)
D区セクション2(南より)
- PL.38 SD-401(南より)
SX-401検出状態(東より)
- PL.39 SX-401セクション(北より)
SX-401完掘状態(南東より)
- PL.40 D区第Ⅲ層青磁(4086)出土状態(南より),
D区第Ⅲ層漆器(4087)出土状態(西より),
D区第Ⅳ層土師質土器(4144)出土状態
(東より), D区第Ⅴ層土師質土器(4283)
出土状態1(北西より), D区第Ⅴ層土師
質土器(4283)出土状態2(北西より), D
区第Ⅵ層土師質土器(4449)出土状態(北
西より), SK-401(南より), SK-402
(南より)
- PL.41 木製品(下駄)表
木製品(下駄)裏
- PL.42 木製品(扇)
木製品(箸)
- PL.43 木製品(曲物)
木製品(木錘)
- PL.44 縄文土器(深鉢), 土師器(甕), 瓦器(椀),
土師質土器(杯・椀), 石製品(硯)
- PL.45 弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯・椀),
木製品(曲物)
- PL.46 弥生土器(壺), 土師器(長胴甕), 東播系
須恵器(片口鉢), 土師質土器(羽釜), 白
磁(碗), 青磁(碗), 土製品(土錘)
- PL.47 弥生土器(壺・甕), 瓦器(椀), 青磁(碗),
磁器(蓋・皿)
- PL.48 弥生土器(壺・甕), 土師器(甕), 土師質
土器(釜), 石製品(鍋)
- PL.49 瓦器(小皿), 土師質土器(杯・小皿)
- PL.50 土師質土器(杯・小皿)
- PL.51 瓦器(椀・小皿), 土師質土器(杯・小皿),
石製品(砥石)
- PL.52 土師質土器(杯・皿・小皿)
- PL.53 瓦器(椀), 土師質土器(小皿)
- PL.54 瓦器(椀・小皿), 土師質土器(杯・小皿),
青磁(皿)
- PL.55 瓦器(椀), 土師質土器(杯・小皿)
- PL.56 土師質土器(杯・小皿)
- PL.57 土師質土器(杯・小皿)
- PL.58 瓦器(椀), 土師質土器(杯・小皿)
- PL.59 土師質土器(杯・小皿), 古瀬戸(緑釉小
皿), 青磁(皿)
- PL.60 土師質土器(杯・小皿)
- PL.61 土師質土器(杯・小皿)
- PL.62 須恵器(壺), 土師質土器(杯・小皿)
- PL.63 土師質土器(杯・小皿), 陶器(碗), 磁器
(蓋・紅皿), 青花(皿), 銅製品(煙管)
- PL.64 土師質土器(杯・小皿)
- PL.65 瓦器(椀), 土師質土器(杯・小皿)
- PL.66 瓦器(椀), 土師質土器(杯・小皿・釜),
石製品(鍋)
- PL.67 東播系須恵器(椀), 土師質土器(杯)
- PL.68 土師質土器(杯)
- PL.69 土師質土器(杯)
- PL.70 土師質土器(杯・小皿)
- PL.71 土師質土器(小皿)
- PL.72 土師質土器(小皿)
- PL.73 土師質土器(小皿)
- PL.74 土師質土器(小皿)
- PL.75 瓦器(椀), 東播系須恵器(椀), 土師質土

- 器(杯・椀), 木製品(椀)
- PL.76 土師質土器(杯・小皿)
- PL.77 土師質土器(小皿)
- PL.78 黒色土器(椀), 瓦器(小皿), 土師質土器
(皿・小皿・椀), 白磁(碗)
- PL.79 A区画像平面図(S=1/250)
- PL.80 A区調査前全景(北東より)
A区調査前全景(南西より)
- PL.81 A区遺構検出状態(東より)
A区遺構完掘状態(東より)
- PL.82 A区遺構検出状態(北西より)
A区遺構完掘状態(北西より)
- PL.83 A区遺構完掘状態(北上空より)
A区遺構完掘状態(南上空より)
- PL.84 A区遺構完掘状態(西上空より)
A区遺構完掘状態(東上空より)
- PL.85 A区セクション1(北より)
A区セクション2(北より)
- PL.86 A区北西部遺構完掘状態(北より)
SB-101(東より)
- PL.87 SB-101礎板出土状態1(西より), SB-101
礎板出土状態2(東より), SB-101
礎板出土状態3(西より), SB-101礎板
出土状態4(西より), SB-101礎板出土
状態5(西より), SD-101(南より),
SD-102(南より), SD-102備前焼(110)
出土状態(北より)
- PL.88 SD-103土師質土器(112)出土状態(北
西より), SD-103・104(西より), SD-
104(南より), SD-110(西より), SU-
101(西より), SU-101(東より), SU-
101土師質土器(122・123)出土状態(南
東より), SU-101土師質土器(122・123)
出土状態(北西より)
- PL.89 B区調査前全景(南西より)
B区西壁セクション(東より)
- PL.90 B区第1次遺構検出状態(南より)
B区第1次遺構完掘状態(南東より)
- PL.91 B区第2次遺構検出状態(南西より)
B区第2次遺構完掘状態(南より)
- PL.92 C区調査前全景(東より)
C区北壁セクション(南より)
- PL.93 C区遺構検出状態(東より)
C区遺構完掘状態(東より)
- PL.94 C区拡張部遺構検出状態(東より)
C区拡張部遺構完掘状態(東より)
- PL.95 備前焼(播鉢), 石製品(鍋・石鏃)
- PL.96 土師質土器(杯・小杯・小皿), 石製品
(スクレイパー), 古銭(寛永通宝)
- PL.97 林口遺跡第Ⅱ調査地区の花粉・孢子・
寄生虫卵
- PL.98 林口遺跡第Ⅱ調査地区の珪藻
- PL.99 蓮池城跡北面遺跡の花粉・孢子遺体
- PL.100 蓮池城跡北面遺跡の珪藻

付 図 目 次

- 付図1 林口遺跡第Ⅱ調査地区-A区遺構平面図(S=1/200)
- 付図2 林口遺跡第Ⅱ調査地区-B区遺構平面図(S=1/200)
- 付図3 林口遺跡第Ⅱ調査地区-C区遺構平面図(S=1/200)
- 付図4 林口遺跡第Ⅱ調査地区-D区遺構平面図(S=1/200)
- 付図5 蓮池城跡北面遺跡-A区遺構平面図(S=1/200)

第 I 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局（現国土交通省四国整備局）から業務委託を受けた土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成11年度に実施した林口遺跡（林口遺跡第Ⅱ調査地区）と蓮池城跡北面遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。この一連の調査は建設省四国地方建設局（現国土交通省四国整備局）高知工事事務所が実施している土佐市バイパス建設工事に伴い工事区域内に所在する遺跡（埋蔵文化財）の内、工事の影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い記録保存を図ることを目的としている。

林口遺跡は縄文時代、弥生時代、中世の複合遺跡として従前から周知されていた遺跡で、平成7年度に実施した確認調査¹⁾でその範囲が南側に広がった。本書で報告する箇所は以前から遺跡の範囲となっていた部分で林口遺跡の北半分に当たる。しかし、旧等高線を復元したところ地形の起伏が考えられた市道以西については事前の確認調査を行った上で調査範囲を決定した。調査対象地は市道等によって区切られており、調査区を東からA～D区に分け、平成11年度に発掘調査を実施した。調査は廃土処理の関係等でB区、D区、C区、A区の順に行った。また、ここで報告するのは土佐市バイパスから高知自動車道へのアクセス部分で、平成8・10年度に発掘調査を行い平成12年度に報告した林口遺跡（林口遺跡第Ⅰ調査地区：『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－）は南側に当たる。なお、A・B区とC区間の市道藤並町林口清滝線改良部分については平成8年度に土佐市教育委員会が発掘調査を実施し、平成9年度に報告書（『林口遺跡』－土佐市々道改良工事に伴う発掘調査報告書－）を刊行している。

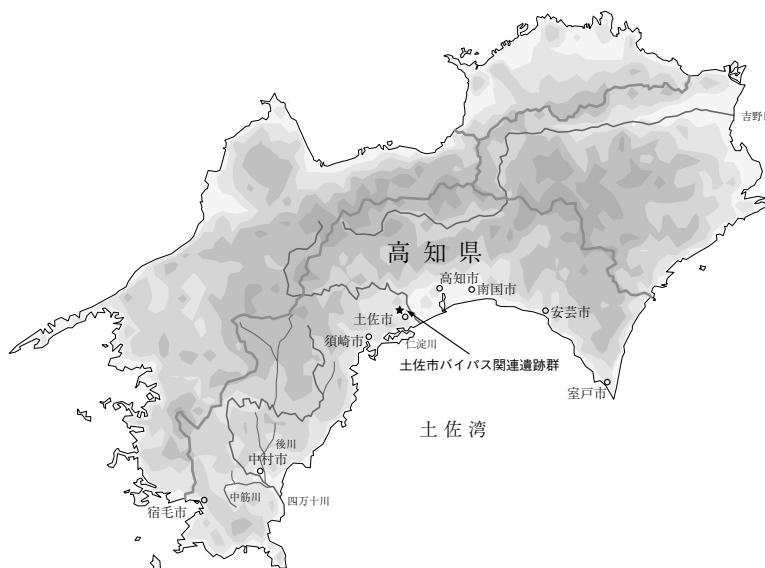


Fig.1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡位置図

2. 遺跡の概要

蓮池城跡北面遺跡は、高知県が平成5・6年度に実施した高知県遺跡詳細分布調査（高岡ブロック）の際確認された遺跡であるが、調査対象となった部分は遺跡の東側に当たり、遺構の遺存状況が不明確であったため平成10・11年度に確認調査を行った。その結果、遺構が確認された部分について平成11年度に本調査を実施した。調査対象地は国道56号線によって南北3箇所に分かれ、北東部をA区、南東部をB区、南西部をC区と呼称し調査を行った。

2. 遺跡の概要

本書で報告する林口遺跡及び蓮池城跡北面遺跡は平成7年度から平成11年度にかけて実施した一連の発掘調査によってその性格が徐々に明らかになってきている。これらの調査は、土佐市バイパスが建設される道路幅34m・50mと国道56号線からのアクセス部分について行われたものであり、両遺跡とも遺跡の範囲が比較的広く、調査箇所が遺跡の全体像を明らかにできた調査区はないが、その性格や遺跡の立地する土佐市高岡町の古環境について多くの資料を得ることができ、仁淀川右岸に展開する土佐市の歴史の空白部分を少なからず埋めることができたものとする。ここでは、両遺跡についてその概要を記す。

(1) 林口遺跡

土佐市バイパス関連では数少ない周知されていた遺跡⁽²⁾で、火渡川右岸に所在する。遺跡は火渡川と林口城跡の所在する低位段丘の残丘（「残丘」という。）との間に位置し、縄文時代、弥生時代、古代、中世の遺構・遺物が残存する複合遺跡となっている。平成7年度に行った試掘調査でその範囲が南に大きく拡大し、東西約200m、南北約300mが遺跡の範囲となり、遺跡の面積は約32,000m²を測る。これまでの調査によってこの範囲すべてが平坦な地形を呈していたわけではなく、現況とは異なり比較的起伏していたことが判明している。生活の痕跡を留めるのは残丘からのびる微高地上で、隣接して低湿地が形成されている⁽³⁾。本書で報告する調査区は平成12年度に『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』（土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ）で報告した調査区の北側に当たる。

なお、平成8年度には市道の改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期前半の土坑と中世の掘立柱建物跡などが確認されている⁽⁴⁾。一連の調査では縄文時代と古代から近代にかけての遺構が確認され、その大半は中世に属するもので、多くは屋敷を構成する遺構の一部とみられる。これら遺構の中で注目されるのは、林口城跡の東山麓部で検出された土橋とそれに伴う遺構と遺物、屋敷を区画する

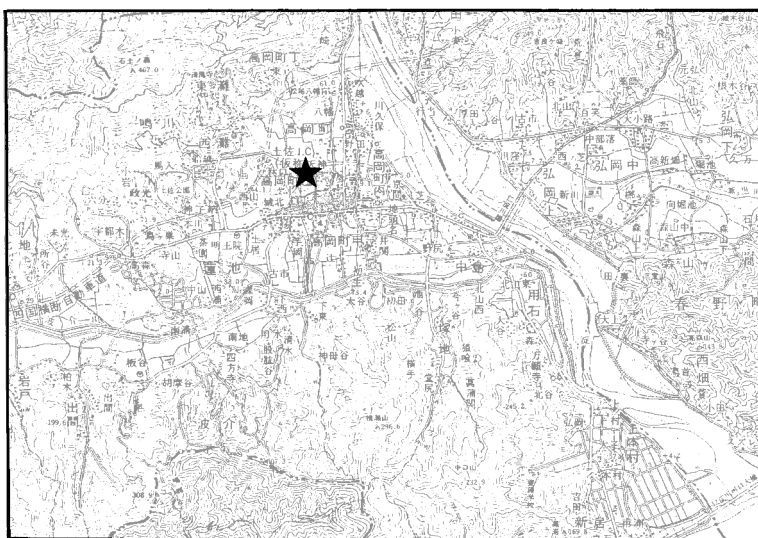


Fig.2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図 (S=1/100,000)

と考えられる溝跡と土坑から出土した多量の土器と県内初出土の蝙蝠扇などの木製品、近世の石組み井戸跡と木製円形桶側を6段重ねた井戸跡などである。一方、遺物では弥生時代前期前半の土器も出土しており、それに伴う集落の所在も注目されよう。なお、本書で報告するのは土橋や蝙蝠扇などが検出された調査区である。

遺跡全体の様相をみてみると、まず、縄文時代では遺跡の南端部の微高地斜面で土坑とピットなどを検出している。その状況から周辺に遺構が広がる可能性もあり、縄文土器が確認された天神遺跡や縄文時代の木製鋏や土偶が出土した居徳遺跡群との関連も注目される。また、後期初頭に位置付けられる松ノ木式土器の出土は高知平野では初めてである。弥生時代では遺物の出土は認められるものの遺構は前述の市道改良工事に伴う調査で確認された土坑1基のみで、集落跡の確認には至っていないが、前述の天神遺跡で検出された後期後半と考えられる竪穴住居跡や祭祀関連遺構との関連も考慮される。なお、第II調査地区D区の遺物包含層から前期前葉の土器が黒色土器、東播系須恵器、瓦器、土師質土器に混じって一定量出土している。今回の調査区からは当該期の遺構は全く確認されなかったが、この出土は周辺部に当該期の集落の存在を暗示するものと考えられ、前述の居徳遺跡群からも遺構は削平されたとみられるものの同時期の遺物が数多く出土しており、近接していることから少なからず何らかの関係がありそうである。古墳時代では、6世紀後半から7世紀初頭の須恵器が数点出土しているが、それ以外に遺構等は確認されな



Fig.3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図 (S=1/10,000)

2. 遺跡の概要

った。数は少ないが市内からは古墳^⑤も確認されており、丁度県内では各地域に主要な古墳が築造される時期でもあり、今後周辺の調査では当該期の遺構も発見されよう。古代では、遺物包含層から黒色土器を含む平安時代後期から鎌倉時代始めにかけての土器類^⑥が比較的まとまって出土している。集落を構成する遺構はみられないものの県内では出土例の少ないもので、当該期の土器編年を行ううえで貴重な資料となっている。中世は本遺跡を特徴付ける時代でありⅠ・Ⅱ区とも屋敷の一角を確認している。本書で報告する調査区（林口遺跡第Ⅱ調査地区をⅡ区と省略する場合もある。）では県内初の蝙蝠扇の出土や土器の廃棄場所の検出など当時の生活様式を考察する資料も得ている。特に、蝙蝠扇は県下初出土であり、かつ、全国的にみても出土例の少ないもので、貴族階級や武士階級が所有していたとみられる。これらのことからこの地域でも有数の権力をもった人物かその人物に関係する者であったことが推察され、その所有者は林口遺跡で確認された屋敷に居住していた人物ではないかとみられる。また、林口城跡残丘裾部で検出した土橋など一連の遺構は城が機能していた時期のものである可能性が強く、城の構成を考えるうえで重要であろう。

一方、Ⅰ区からは屋敷を区画すると考えられる溝跡（規模からすると堀とみた方がよいのかもしれない）、掘立柱建物跡、井戸跡（石組み井戸で井筒に桶側を使用）など比較的多くの遺構を検出しており、今回調査したⅡ区との間にはまだ多くの遺構が存在するものと考えられる。また、長宗我部地検帳に記された土地利用の状況との関連も注目される。近世以降では、Ⅰ区から井戸跡を含む屋敷の一角を確認している。この井戸跡は木組円形桶側を6段積重ねたもので、県内では初めてであり、井戸の変遷を考えるうえで注目されよう。近代では、各地区から天神遺跡でも検出された暗渠が数多く埋設されていた。

このように林口遺跡からは縄文時代後期、弥生時代、古代以降の遺構が確認されており、長期に亘る人間の生活の痕跡を辿ることができる。中でも中世初頭の12世紀後半から13世紀にかけて集落としての最盛期を迎え、Ⅰ区では引き続き近世にかけて集落が営まれる。明治以降は水田等の耕作地となり今日に至ったものと考えられる。

Tab. 1 平成11年度発掘調査概要一覧

調査地区	調査小区	調査面積	調査延べ面積	検出遺構
林口遺跡 第Ⅱ調査地区	A区	1,587m ²	1,875m ²	中世（掘立柱建物跡、土坑、溝跡など、一部2面）
	B区	1,098m ²	1,098m ²	中世（掘立柱建物跡、土坑、溝跡など、1面）
	C区	975m ²	975m ²	中世・近世（掘立柱建物跡、土坑、溝跡など、1面）
	D区	1,392m ²	1,392m ²	中世（土橋、杭列、土坑、溝跡など、1面）
	試掘調査	40m ²	40m ²	遺構なし、ただし弥生土器と土師質土器が出土
蓮池城跡 北面遺跡	A区	762m ²	762m ²	中世（掘立柱建物跡、土坑、溝跡など、1面）
	B区	42m ²	64m ²	中世（土坑、溝跡、ピットなど、2面）
	C区	265m ²	265m ²	中世（畝状遺構）
野田遺跡Ⅰ	試掘調査	189m ²	189m ²	中世（掘立柱建物跡、土坑、溝跡など）
光永・岡ノ下遺跡		70m ²	70m ²	中世（掘立柱建物跡、土坑、溝跡など、1面）
合計		6,420m ²	6,730m ²	

(2) 蓮池城跡北面遺跡

蓮池城跡北面遺跡も以前から周知されていた遺跡であり、平成5・6年度に実施された高知県遺跡詳細分布調査の際にその範囲が明記された。丁度、南には蓮池城跡が所在する。

土佐市バイパスの工事範囲の拡大に伴って平成10年度に実施した遺跡東側の試掘調査で新たに遺構・遺物が確認され、ほぼ同時期で同じ立地にあることから同遺跡の一部と捉え、その範囲が東に拡大した。一方、平成11年度に実施した西隣からは遺構・遺物は確認できなかったものの南西約20mの調査箇所からは遺構並びに遺物を確認することができ、平成11年度に本発掘調査を実施することとなった。

限られた調査箇所であり、全容については判然としないが、発掘調査の結果から一定の状況を垣間見ることが可能である。

まず、その立地についてはすでに土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書第1集で記しているように三島神社が鎮座する残丘以西では氾濫性低地が散見され、扇状地性低地と残丘に伴う微高地とが隣接し、起伏に富む地形を構成しており、本遺跡も遺構が遺存しているのは蓮池城跡が残る残丘からのびる微高地上と考えられる。また、この微高地は一定の高さで広範囲に広がるのではなく、A区の西隣の地形が落ち込んでいることや狭いB・C区でも高低差があることから少なからず起伏していたものとみられる。

このうち一定の遺構が検出されたA区では掘立柱建物跡を始め集落を構成する遺構が散見され、南側に拡がりが見られ、A・C区で畝跡とみられる畝状遺構が確認されている。時期的には3地区ともほぼ同じ12世紀後半から13世紀にかけてと考えられ、集落と耕作地という図式が推察される。ただし、集落の規模や畝跡の拡がりなどは今後の調査を待たざるを得ない。

今回報告する林口遺跡のように縄文後期から近代に至る複合遺跡ではなく、中世になってから集落として開発された部分であったと言え、今回の調査からでは蓮池城跡と直接関係する遺構・遺物は確認されなかったが、城跡に近づくに従ってそれに関連する遺構・遺物も発見されよう。

註

- (1) 『光永・岡ノ下遺跡』－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書I－ 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 平成12年11月の中で確認調査として一項設けてその概要を記している。
- (2) 土佐市バイパス建設が計画され、確認調査を実施した平成7年度までに遺跡が工事範囲にかかっていたのは林口遺跡のみであった。以前から知られていた野田遺跡は、平成11年度に行った確認調査によってその範囲が大きく南側に拡大したことにより発掘調査を行うこととなった。平成5・6年度の高知県遺跡詳細分布調査によって確認された蓮池城跡北面遺跡も平成10・11年度に実施した確認調査によってその範囲が東側に広がったことにより発掘調査を行うこととなった。
- (3) 平成12年度までに土佐市バイパス建設に伴う発掘調査は延長約2.4kmの範囲で実施され、土佐市高岡町付近の旧地形がほぼ判明してきた。すなわち、光永・岡ノ下遺跡以東の野田遺跡、京間遺跡(平成12年度の確認調査によって発見された遺跡)の3遺跡はそれぞれ仁淀川右岸の自然堤防上に立地し、仁淀川が南流していることから自然堤防も南北に細長く、遺跡もそれに沿う形で形成されている。また、その頂部にはそれぞれ

2. 遺跡の概要

江戸時代に造られた用水路が南流している。一方、天神遺跡以西の林口遺跡、蓮池城跡北面遺跡の3遺跡は残丘からのびる微高地上に立地する遺跡であり、隣接して低湿地が形成されていることから起伏に富んだ地形を呈している。自然堤防上に立地する光永・岡ノ下遺跡、野田遺跡、京間遺跡の間は氾濫原となっており、遺構は確認されていないが光永・岡ノ下遺跡と天神遺跡の間は自然堤防の後背湿地となり、水田耕作の可能性を示唆する遺構が確認されている。

- (4) 土佐市教育委員会『林口遺跡』土佐市々道改良工事に伴う発掘調査報告書 1998.1
- (5) 『光永・岡ノ下遺跡』（土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ）の中の「地理的歴史的環境」に記載している。
- (6) 土師質土器を中心に黒色土器、東播系須恵器、瓦器など復元できるものが300点以上出土している。また、土師質土器の成形技法には粘土紐巻き上げロクロ成形のものとロクロ水挽成形のものがみられる。

第Ⅱ章 林口遺跡Ⅱ

林口遺跡第Ⅱ調査地区とした箇所は、火渡川右岸の林口城跡が遺存する残丘(低位段丘の残丘)の尾根からのびる微高地とそれに挟まれた低湿地部分に当たり、調査区をA～D区に分けて調査を実施した。調査区は市道等の現道によって分かれ、東から順にA区、B区、C区、D区と呼称した。A・B区とC・D区の間には市道藤並町林口清滝線が通っている。なお、発掘調査は廃土処理等の関係でB区、C区、D区、A区の順に行った。

1. 調査の概要

(1) 調査の経過

A区は林口遺跡のほぼ中央部に当たり、第Ⅱ調査地区東部の調査区で、林口城跡が遺存する残丘から火渡川に向って南東及び東へのびる二つの微高地との間の斜面部に位置し、検出面の標高は5.800～6.900mを測り、東西約70mの比高差は0.900mであった。調査は、D区の調査が終了してから行い、調査期間は平成11年10月25日から12月24日までの実働36日で、調査面積は1,587m²(延べ調査面積は1,875m²)であった。

B区は林口遺跡第Ⅱ調査地区の中で北東部に位置する調査区で、A区の北隣に当たる。遺物包含層はほぼ調査区全域で認められ、第Ⅶ層上面で溝跡を中心とした遺構を検出した。遺構検出面は比高差約20mで南西部から北東部に傾斜しており、標高の高い北部を中心に柱穴とみられるピット群を検出した。また、近代の暗渠が南北方向を中心に約10条確認された。なお、調査終了時に下層確認のためのトレンチを調査区南西部に設定して、表土下約1.60mまで調査を行った。調査期間は平成11年5月6日から7月14日までの実働42日で、調査面積は1,098m²であった。

C区は中世の屋敷跡が検出されたB区と林口城跡の裾部にあたるD区の中に位置する。調査区全面に暗渠が巡らされており、その後厚さ約0.50～1.40mの客土が盛られていた。地形は西側に向かって傾斜していた。遺構は後世の削平や攪乱を著しく受けており、残存状態は良好とはいえなかった。遺構からは土師質土器片が多数出土しているが細片が多く、B・D区と同時期中世の遺物包含層は近世の段階に削平されたとみられ、確認できなかった。調査はL字状の調査区を設定して行い、また、遺構の調査が終了した後に南壁際に東西トレンチを設定して下層確認を行った。調査期間は平成11年8月25日から9月14日までの実働15日で、調査面積は975m²である。

D区は林口城跡の東の裾部に当たり、林口城跡に関連するとみられる遺構を確認した。また、古代から中世にかけての遺物包含層からは比較的多くの遺物が出土したのを始め、弥生時代前期の遺物も一定量出土しており、周辺部に集落が営まれた可能性も考えられる。調査期間は平成11年6月9日から8月20日までの実働35日で、調査面積は1,392m²であった。

(2) 調査日誌抄

A区1999年(平成11年)10月25日～12月24日(下村).....

10.25 発掘調査を開始する。調査区の周囲に安全柵を打ち、重機による土層掘削を行う。

10.26 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業を行う。

1. 調査の概要 (2) 調査日誌抄

- 10.27 雨天のため現場作業は中止する。
- 10.28 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業を行う。
- 10.29 本日も重機による土層掘削と併行して遺構検出作業を行う。
11. 1 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業を行う。
11. 2 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業を行う。
11. 4 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業を行うと共に写真撮影用のローリングタワーを設置する。
11. 5 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業を行う。
11. 8 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業を行う。
11. 9 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業を行う。
- 11.10 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業並びに杭打ちを行う。
- 11.11 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業並びに杭打ちを行う。
- 11.12 重機による土層掘削のみ行う。
- 11.13 雨天のため現場作業は中止する。
- 11.16 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業並びに杭打ちを行うと共に遺構略図を作成する。
- 11.17 重機による土層掘削と併行して遺構検出作業、精査並びに遺構略図を作成する。遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 11.18 平板測量並びに遺構略図を作成する。
- 11.22 遺構の調査を開始する。主にSD-112・113・157の調査を行う。
- 11.24 SD-112・115・117～119の調査並びに西側第1次検出面の平面測量を行う。
- 11.25 SD-112・115の調査並びに西側第1次検出面の平面測量を行う。
- 11.26 SD-112の調査を行う。
- 11.29 SD-112・122, SK-115の調査並びに西側第

- 1次検出面の完掘状態の写真撮影を行う。
- 11.30 SD-112の調査並びに西側第2次検出面の遺物包含層掘削を行う。
12. 1 主にSD-112の調査並びに西側第2次検出面の遺構検出を行い、遺構検出状態の写真撮影を行う。
12. 2 雨天のため現場作業は中止する。
12. 3 SD-108・112, SK-116の調査を行う。
12. 6 SD-124・155の調査と共に平面測量並びにレベル実測を行う。
12. 7 SD-155, SK-112の調査と共に平面測量並びにレベル実測を行う。
12. 8 SD-155, SK-112の調査と共に平面測量並びにレベル実測を行う。
12. 9 SD-154・155の調査と共に平面測量並びにレベル実測を行う。
- 12.10 SD-153～155の調査と共に平面測量並びにレベル実測を行う。
- 12.13 SD-153～155の調査と共に平面測量並びにレベル実測を行う。
- 12.14 SK-112, SD-153・156の調査と共に平面測量並びにレベル実測を行う。
- 12.15 SK-112, SD-145の調査と共に平面測量並びにレベル実測を行う。
- 12.16 SK-112, SD-145の調査と共に平面測量並びにレベル実測を行った上で、調査区の清掃作業を行う。
- 12.17 遺構完掘状態の写真撮影と共に航空写真撮影並びにレベル実測を行い、調査区中央部で確認された遺物包含層の掘削を行う。



Fig.4 発掘調査風景

12.20 下層確認のトレンチを東壁、南壁沿いに設定し、調査する。調査区中央部で確認された遺物包含層の掘削を行う。

12.21 トレンチで確認されたSD-101並びに新たに検出されたSD-125と共に南壁沿いに下層確認トレ

B区1999年(平成11年)5月6日～7月14日(伊藤)

5.6 本日より調査を開始する。調査区の周囲に安全柵を設置する。

5.7 調査区中央に層序確認のためトレンチを設定し、土層確認を行ったところ地表下約50cmに中世の遺物包含層を確認するが、出土遺物は少量である。暗渠が多く湧水がある。

5.8 暗渠からの湧水でトレンチは水没状態になる。午前中排水作業を行う。午後から重機を使用し表土を除去する。溝跡を1条を検出する。

5.9 遺物包含層の広がりを確認し、トレンチ調査を終了する。

5.12 本日より本格的に土層掘削を開始する。表土が除去できた所から人力で遺物包含層の掘削に移る。依然、暗渠からの湧水が多い。

5.13 重機による土層掘削と併行して、遺物包含層の掘削と遺構検出を続ける。土坑4基、溝跡4条を確認するが、溝跡はほとんど暗渠と考えられる。南西部に幅3mほどの溝跡(SD-206)を検出する。調査区外に写真撮影用のローリングタワーを設置する。

5.14 重機による土層掘削と併行して、遺物包含層の掘削と遺構検出を続ける。南西部に不整形の広い土坑を検出する。水溜り状の遺構とみられる。

5.17 調査区南部の遺構検出はほぼ終了する。遺構は溝跡が中心である。検出面は調査区中央部に近づくに連れて、次第に灰色に近くなる。

5.18 昨夜の降雨の影響で、現場作業は重機による土層掘削のみ行うが、正午前の激しい降雨により作業を中止とする。

5.19 昨日の降雨の影響で調査区が水没し、午前中排水作業を行う。排水後も現場状況が悪く発掘作業を中止する。

5.20 昨日も降雨があり、午前中は排水作業を行う。

ンチを設定し調査する。

12.22 SD-101・125の完掘写真撮影並びに平面測量と共に南壁の土層断面図を作成する。

12.24 南壁の土層断面図を作成し、すべての現場作業を完了する。

午後から遺構検出を始める。本日で重機による土層掘削は終了する。

5.21 連日の降雨の影響で暗渠より湧水があり、午前中は排水作業を行う。その後、遺構検出を進める。遺構検出が終了した部分には測量用のグリッド杭を設置する。

5.24 雨天のため作業を中止し排水作業を行う。

5.25 昨日の降雨の影響で、現場作業は中止し排水作業のみ行う。午後から測量用のグリッド杭を設置する。

5.26 午前中に遺構検出を終了する。午後は再精査の後、検出写真を撮影する。

5.27 昨日の降雨のため現場作業を中止し、排水作業を行う。

5.28 遺構の調査を開始する。まず、暗渠から調査する。

5.31 遺構の調査を行う。暗渠と調査区北部のピット群から調査する。調査区北部は検出面の土層の下に灰色粘土の層がありピットの底が判別し難い。灰色粘土の層には遺構埋土に比べ、若干マンガン粒が多く入るので、それをピットの底と見極める。

6.1 作業員を2グループに分け、調査区北部ピット群と南西部の溝跡を調査する。

6.2 SD-206中央部にトレンチを設置する。途中



Fig.5 発掘調査風景

1. 調査の概要 (2) 調査日誌抄

から降雨のため現場作業を中止とする。

6.3 雨天のため現場作業を中止し、排水作業を行う。

6.4 遺構の調査を続ける。SD-206から青磁碗、須恵器壺が出土する。SD-206は埋土が5層に分層できるので、1層ずつ調査を行う。

6.7 雨天のため現場作業を中止する。

6.8 遺構の調査を続ける。南は溝跡(SD-204・205等)を中心に調査する。SD-205より土師質土器小皿が出土する。北はピット群の調査を行う。

6.9 本日より須崎市教育委員会の研修生を一名受け入れる。SD-205から土師質土器杯が出土する。SD-201からは遺物が多量に出土する。ほとんど土師質土器である。

6.10 遺構の調査を続ける。

6.11 SP-202は溝跡として検出したが、水溜り状の遺構と考えられる。北部ピットの一つを縦に断ち割り、遺構の埋没状態を調査し、写真撮影を行う。

6.14 SD-206より土師質土器杯・羽釜が出土する。SD-201も遺物出土状態の写真撮影を行う。西壁南半分のセクションの写真撮影を行う。SD-202を完掘する。

6.15 SD-206のバンク南壁の写真撮影を行い、断面図を作成する。SD-201は南の肩が不明確であるので、南端にトレンチを設定し調査する。SD-201以西も遺構の調査を行う。

6.16 遺構の調査を続ける。調査区北東部を中心に行う。SD-201は土器集中箇所を精査し、写真撮影を行う。

6.17 調査区北東部で検出面が灰色に変色した場所を10cmほど掘り下げたところ水溜り状の遺構(SP-201)を検出した。SP-201の中央にトレンチを設定し調査する。SD-201の遺物出土状態の平面図を作成する。

6.18 SD-201からまとまって出土した遺物については完形に近いものにはナンバーを付けて取り上げ、遺構を完掘する。SP-201も調査を続ける。併行して北から精査するが、途中で降雨があり中止す

る。市内の小中学校教員が発掘調査の見学に来る。

6.21 SP-201のバンクの写真撮影と断面図作成を行う。西壁北半分のセクションの写真撮影を行い、断面図を作成する。SD-205と201の切り合いを確認し、写真撮影を行う。

6.22 雨天のため現場作業を中止する。調査区北部の遺構平面図を作成し、合わせて平板測量も行う。

6.23 雨天のため現場作業を中止する。調査区東壁の一部が崩壊する。

6.24 崩壊した壁面の土砂を取り除く。調査はほぼ終了し、調査区の再精査を始めるが、途中で降雨のため現場作業を中止する。

6.25 雨天のため現場作業を中止する。

6.28 調査区を全面再精査し、午後完掘写真を撮影する。

6.29 雨天のため現場作業を中止する。調査区は全面水没する。

6.30 昨日の水が引かず、現場作業を中止とする。

7.1 調査区の全面再精査を行う。

7.2 航空撮影の予定であったが、曇りで光量不足のため撮影を中止する。平面図を作成するが、降雨のため途中で現場作業を中止する。

7.5 明日、航空撮影の予定であり、終日調査区の再精査を行う。東壁セクションの写真撮影を行い、断面図を作成する。

7.6 航空撮影、航空測量を行う。引き続き完掘写真を再度撮影する。遺構平面図及び東壁断面図を作成する。

7.7 遺構平面図を作成する。

7.8 遺構平面図の作成が終了し、レベル測量を行う。

7.9 レベル測量を終了する。

7.12 雨天のため現場作業は中止。

7.13 下層確認のため、トレンチを設定する。灰色の粘土層が東へ傾斜しながら続く。下層部の一部に炭化物や葦のような植物遺体が約50cmの厚さで堆積しており、遺構の可能性も考えられたが、一点の遺物も出土しなかったため写真撮影を行って終了し

た。

7.14 下層確認トレンチの断面図作成を行い、調査

C区1999年(平成11年)8月25日～9月14日(田中)

- 8.25 北東隅より重機による土層掘削を始める。
- 8.26 北部の重機による土層掘削を行う。
- 8.27 重機による土層掘削と併行して遺構検出を始める。
- 8.30 東部の重機による土層掘削を行う。
- 8.31 南部の重機による土層掘削を行う。
- 9.1 引き続き重機による土層掘削を行う。
- 9.2 重機による土層掘削を終了する。
- 9.3 遺構検出を終了し、グリッド杭を設置する。
- 9.6 遺構検出状態の写真撮影、遺構配置図の作成を行い、遺構の調査を始める。
- 9.7 南東部を中心に遺構の調査を行う。
- 9.8 北部の遺構の調査を行う。また、併行して平面実測を始める。

D区1999年(平成11年)6月9日～8月20日(田中)

- 6.9 調査区北西部に試掘トレンチを設定する。中世の遺物包含層と遺構を確認する。
- 6.10 調査区西部に試掘トレンチを設定する。中世の遺物包含層と遺構を確認する。
- 6.14 調査区北東部に試掘トレンチを設定する。中世の遺物包含層を確認する。
- 6.15 調査区東部に試掘トレンチを設定する。中世の遺物包含層と遺構を確認する。
- 6.17 草刈り、安全柵の設置を行う。
- 6.18 引き続き草刈り、安全柵の設置を行う。
- 6.21 調査区北西部より重機による土層掘削を始める。
- 6.22 調査区南西部の重機による土層掘削、遺構検出を始める。
- 6.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.24 調査区南西部の重機による土層掘削を行う。
- 6.25 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.28 調査区南部の重機による土層掘削を行う。
- 6.29 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.30 雨天のため現場作業を中止する。

区西壁・東壁の土壌サンプルを採取する。以上でB区の調査は終了する。

- 9.9 西部の遺構の調査を行う。
- 9.10 遺構の調査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 9.13 平面実測、レベル測量、土層断面実測を行う。
- 9.14 下層確認のためトレンチを設定する。C区の調査をすべて完了する。



Fig.6 発掘調査風景

- 7.1 調査区南部の重機による土層掘削を行う。
- 7.2 調査区北部の重機による土層掘削を行う。途中から雨のため現場作業を中止する。
- 7.5 調査区北部の重機による土層掘削を行う。遺構配置図の作成を始める。
- 7.6 調査区北東部の重機による土層掘削を行う。
- 7.7 調査区南東部の重機による土層掘削を行う。
- 7.8 重機による土層掘削を終了する。ローリングタワーを設置する。
- 7.9 遺構検出、グリッド杭の設置を行い、遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 7.12 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.13 遺構の調査を始める。
- 7.14 中央バンクを機械で掘削し、遺構検出を行う。
- 7.15 調査区南半の遺構の調査を行う。
- 7.16 斜面部の遺構の調査を行う。
- 7.19 遺構の調査を行う。途中から雨のため現場作業を中止する。
- 7.20 雨天のため現場作業を中止する。

2. 調査区の概要 (1)A区

- 7.21 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.22 SD-401の調査を行う。
- 7.23 SD-401の調査を行う。
- 7.26 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.27 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.28 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.29 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.30 雨天のため現場作業を中止する。
- 8.2 雨天のため現場作業を中止する。
- 8.3 雨天のため現場作業を中止する。
- 8.4 SD-401の調査を行う。
- 8.5 雨天のため現場作業を中止する。平面実測、レベル測量を始める。
- 8.6 雨天のため現場作業を中止する。
- 8.9 調査区中央部の遺構の調査を行う。
- 8.10 斜面部の遺構の調査を行う。
- 8.11 航空測量を行う。
- 8.12 第XI～XII層の調査を行う。
- 8.13 第XI～XII層の調査を行う。
- 8.16 SX-401の調査を行う。遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 8.17 雨天のため現場作業を中止する。
- 8.18 雨天のため現場作業を中止する。
- 8.19 平面実測、レベル測量を行う。
- 8.20 調査をすべて完了し、埋め戻しを行う。



Fig.7 発掘調査風景

2. 調査区の概要

(1) A区

本調査区は林口遺跡第Ⅱ調査地区の中で最も東側に位置する調査区である。本調査区の東側には火渡川が南流し、調査区全体の地勢が火渡川に向かって傾斜しているため調査区西部と東部では土層の堆積状況は大きく異なる。遺物包含層は薄く全面に広がっているが、東に行くに従って遺物の包含量は少なくなり、遺物包含層自体もほとんど確認されなかった。一方、比較的標高の高い西側では中世の遺構検出面が2面確認され、遺構もまとまって検出されたが、東側は遺構密度も低く中世の遺構検出面は1面のみであった。また、下層確認のトレンチでは古代と考えられる溝跡1条が調査区東側で確認された。

① 層序

調査区で認められた基本層位(南壁)は以下の通りである。

- 第Ⅰ層 表土層
- 第Ⅱ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト層
- 第Ⅲ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト層で炭化物を含む。
- 第Ⅳ層 黄褐色(2.5Y5/3)シルト層
- 第Ⅴ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層で炭化物を含む。
- 第Ⅵ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層で炭化物を多く含む。
- 第Ⅶ層 灰黄褐色(10YR4/3)シルト層
- 第Ⅷ層 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト層

- 第IX層 黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト層
- 第X層 灰色(5Y4/1)粘土質シルト層
- 第XI層 オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト層
- 第XII層 灰色(5Y4/1)粘土質シルト層
- 第XIII層 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質粘土層
- 第XIV層 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土層
- 第XV層 灰色(7.5Y4/1)シルト質粘土層
- 第XVI層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層
- 第XVII層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト層で炭化物を含む。
- 第XVIII層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘土質シルト層
- 第XIX層 灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質シルト層



Fig.8 林口遺跡の範囲と調査対象区域図 (S=1/2,500)

2. 調査区の概要 (1) A区

第Ⅱ層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト層

第Ⅲ層 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト層でマンガン粒を含む。

層位中、遺構が検出されたのは第Ⅴ層、第Ⅵ層及び第Ⅺ層上面であった。

第Ⅰ層の表土層は現在の水田の耕作土であり、厚さ20~30cmを測り、下層部には鉄分の沈澱が認められる部分もある。

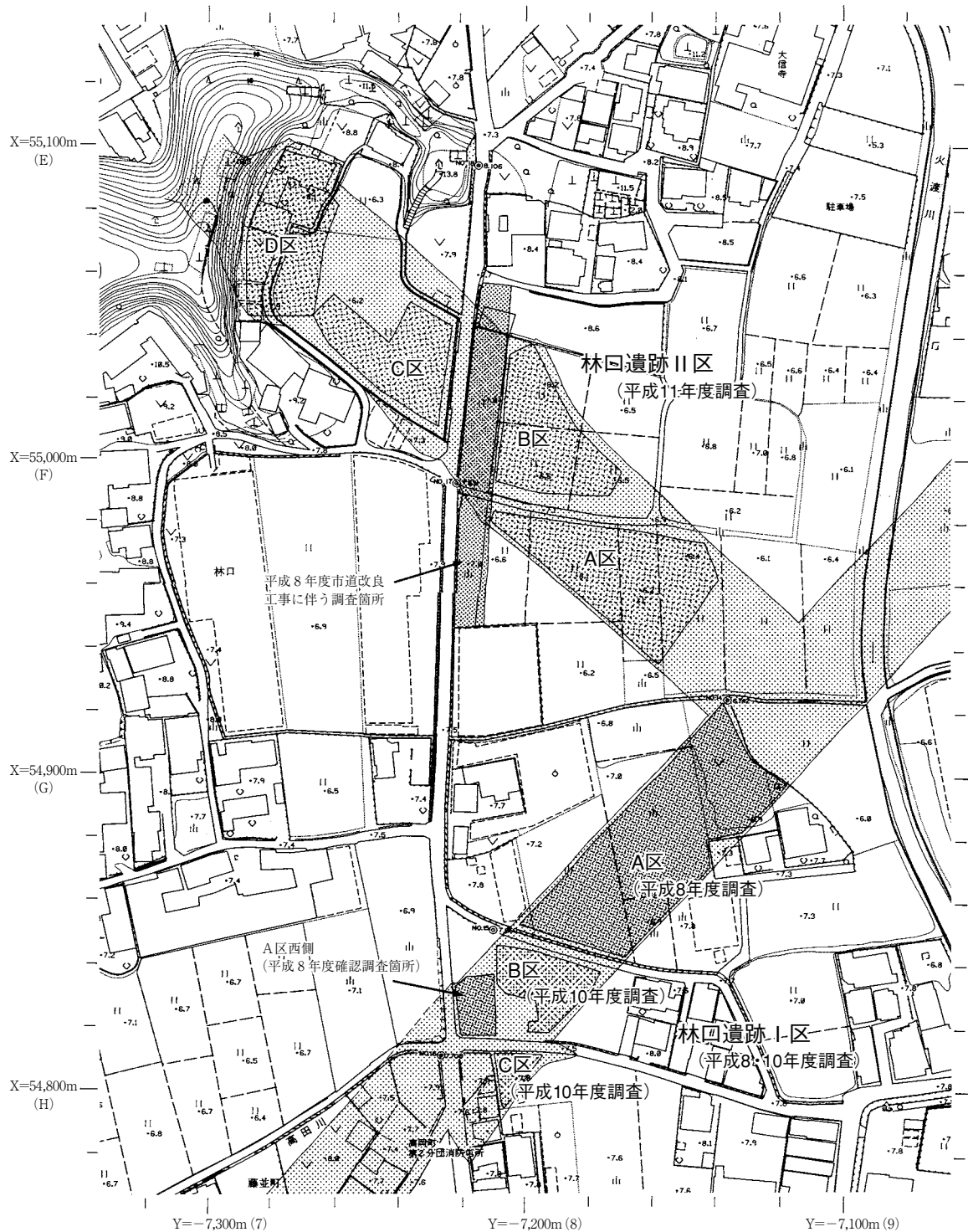


Fig.9 林口遺跡調査区設定図 (S=1/2,000) (公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す。)

第II層は厚さ16~20cmの自然堆積層で西部のみ認められた。

第III層は中世の遺物包含層であり，西部のみ認められた。堆積は厚さ8~12cmであった。

第IV層は厚さ20~40cmの自然堆積層で西部のみ認められた。

第V層は調査地区全体で認められた中世の遺物包含層で東部に行くに従って包含する遺物量は少なくなり，色調も薄くなる。

第VI層は調査区中央部の一部でのみ認められた中世の遺物包含層であるが，第VII層上面では遺構は検出できなかった。

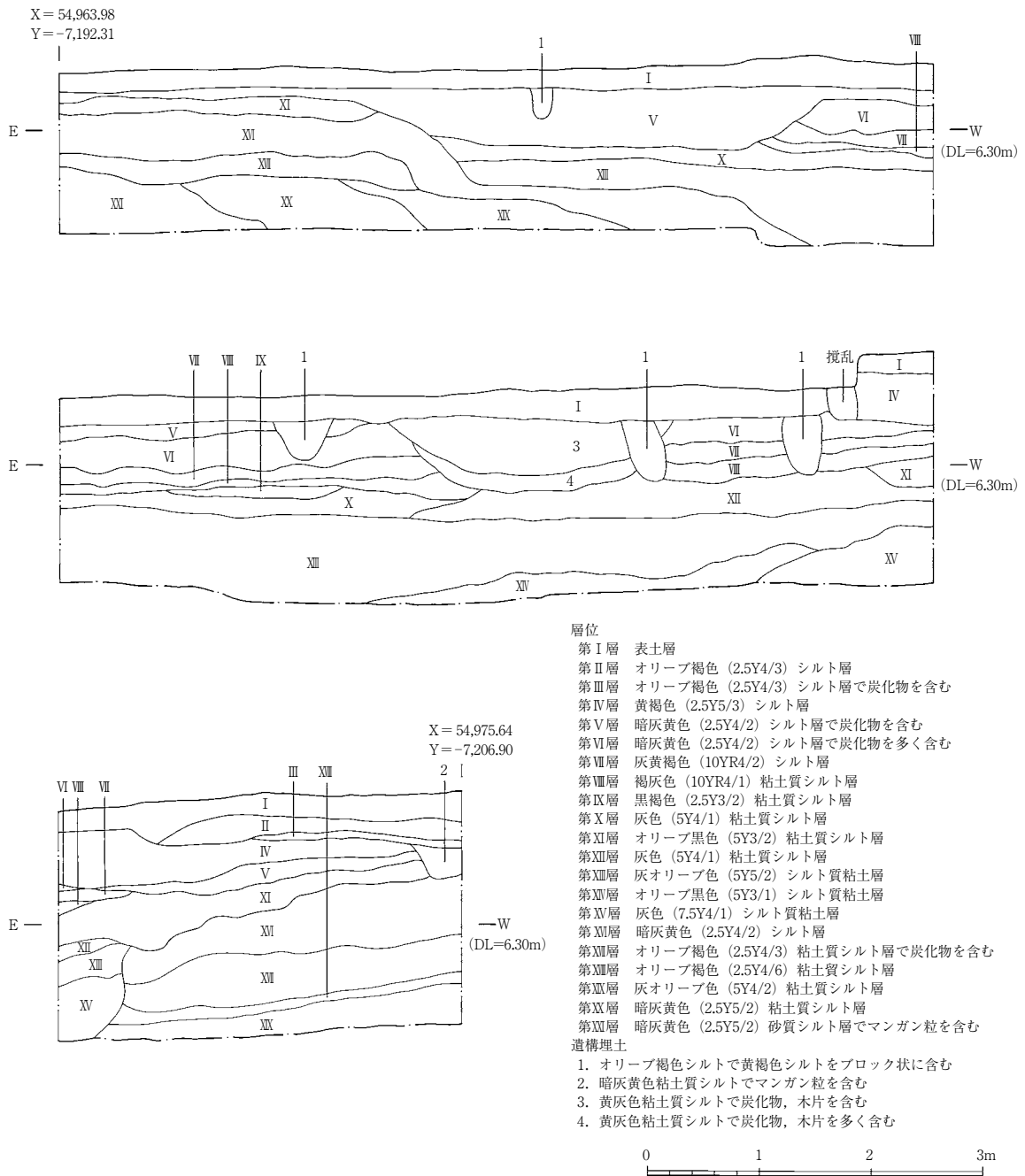


Fig.10 A区南壁セクション図

2. 調査区の概要 (1)A区

第Ⅶ層から第Ⅸ層は自然堆積層である。第Ⅶ層から第Ⅸ層にかけては下層に行くに従って粘土化が著しく低湿地の様相を呈していた。第Ⅳ層から第Ⅸ層までは湿地の基盤層と考えられ、下層に行くに従って砂質が強くなる。

② 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

土師質土器 (Fig.11-1001・1002)

2点とも杯の底部破片である。1001は底径は8.0cmを測り、体部はほとんど残存していない。器面は摩耗しており、調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りとみられる。色調は内外面とも浅橙色を呈する。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。1002は底径は8.0cmを測り、体部はほとんど残存していない。器面は摩耗しており、調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りとみられる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

瓦器 (Fig.11-1003)

1003は小皿で、口径9.2cm、底径6.8cmを測る。口縁部は斜め上方に短く内湾して立ち上がり、端部はやや外反し、丸く仕上げる。口縁部内外面はヨコナデ調整で内底面はナデ調整を施し、底部と体部外面には指頭圧痕が残る。体部内面下半、内底面には円圈状のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも灰色ないし灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

青磁 (Fig.11-1004)

1004は碗である。底部破片で、底径は6.2cmを測る。器面にはオリーブ黄色の釉を施釉した後に蛇ノ目状の釉ハギを行う。高台部畳付及び高台内は露胎である。胎土は精良で、焼成も良好である。

近世陶器 (Fig.11-1005)

1005は碗である。底部破片で、底径4.7cmを測る。体部外面の一部と内面に暗赤灰色の釉を施釉するが、見込には施釉していない。胎土は精良で、焼成も良好である。

石製品 (Fig.11-1006)

1006は石臼の上臼部分で、約4分の1が残存する。径は32cmとみられ、その内約25cmを窪ませる。

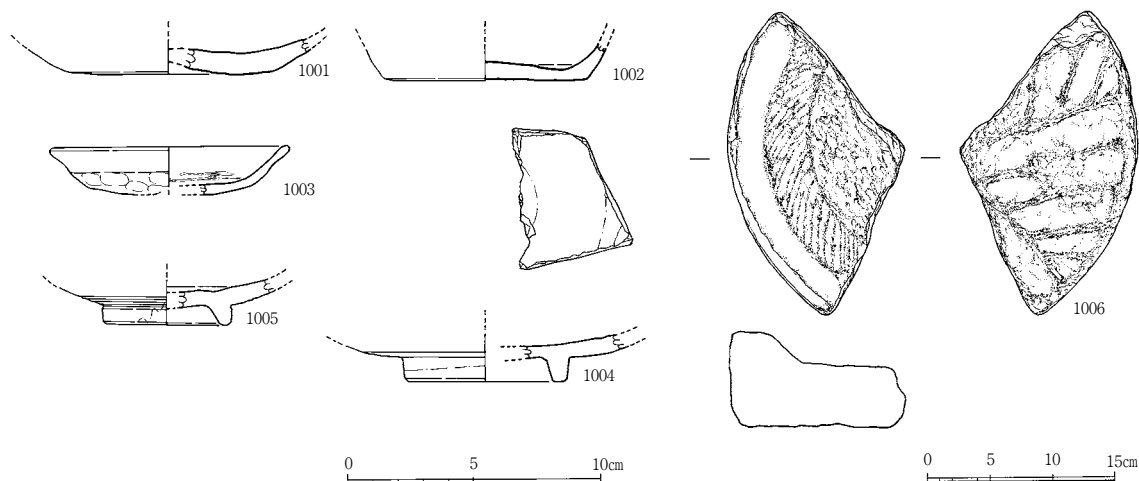


Fig.11 A区第Ⅰ層出土遺物実測図(土師質土器・瓦器・青磁ほか)

斜行する5本単位の条線が認められる。石材は砂岩である。

第Ⅲ層出土遺物

須恵器 (Fig.12-1007)

1007は椀である。底部破片で、体部はほとんど残存しない。底径は5.7cmを測る。外底面にはハの字状に開く高台が付く。内外面とも回転ナデ調整で、内面にはナデ調整を加える。色調は、内面が灰色、外面が灰色ないし灰白色を呈する。胎土は精良で、焼成も良好である。

土師質土器 (Fig.12・13-1008~1029)

1008~1022は杯である。1008は口径11.4cm, 器高4.2cm, 底径6.8cmを測るが, 底部は欠損する。体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 調整は一部摩耗している部分もあるが, 回転ナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1009は口径14.6cm, 器高3.5cm, 底径6.0cmを測る。体部が斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁端部を細く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で

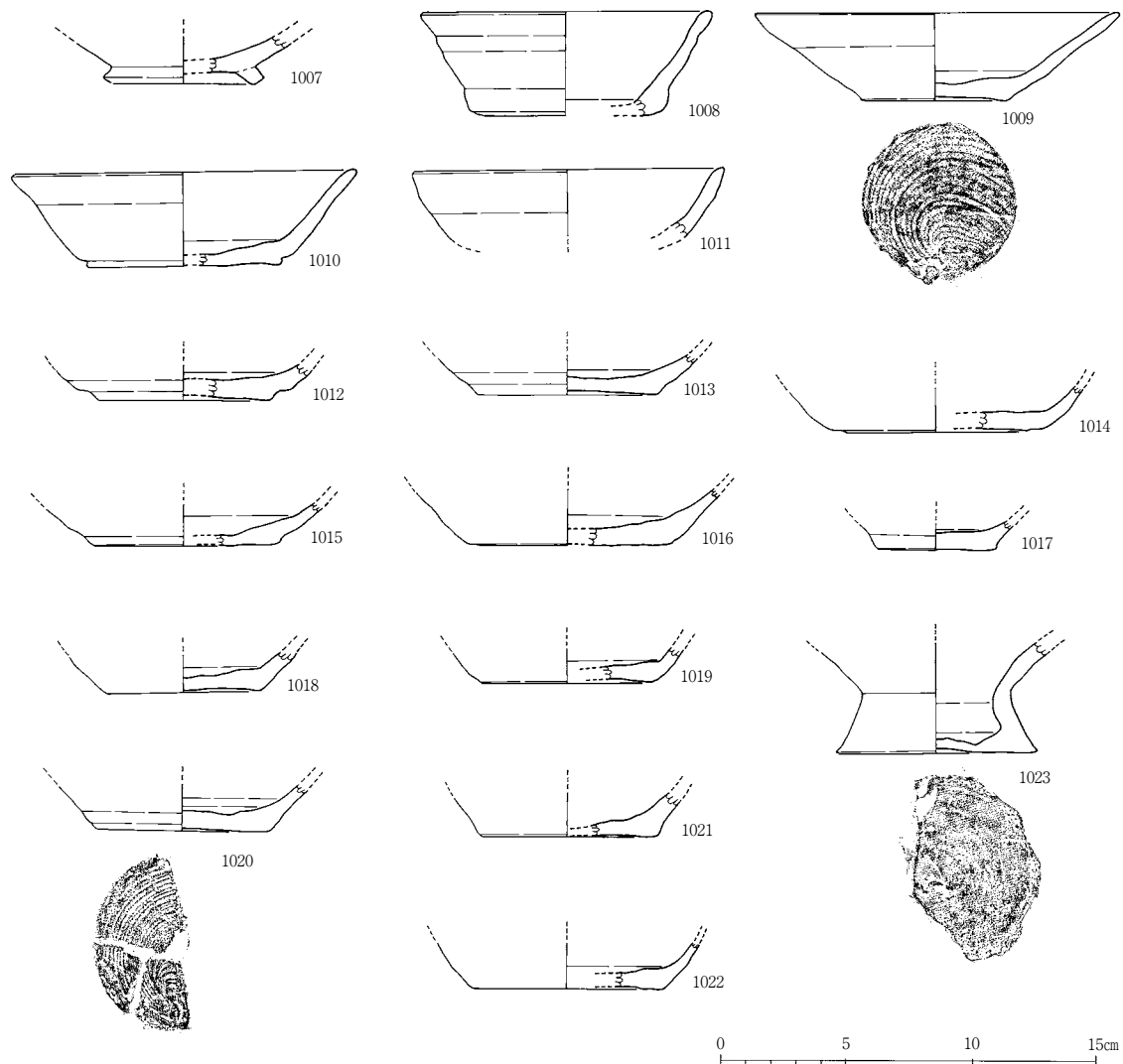


Fig.12 A区第Ⅲ層出土遺物実測図(須恵器・土師質土器)

2. 調査区の概要 (1)A区

ある。内面は摩耗が著しく調整は不明であるが、外面には回転ナデ調整の痕が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が浅黄橙色、外面がにぶい橙色ないし暗灰色を呈する。胎土には細かな砂粒を含み、焼成は良好である。1010は口径13.8cm、器高3.7cm、底径7.6cmを測る。外底面はほぼ平らで、体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁部は外反し、端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は回転ナデ調整で、内底面には回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1011は口縁部破片で、口径12.4cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を細く仕上げる。外面は摩耗が著しく調整は不明であるが、内面には回転ナデ調整の痕が残る。色調は、内面が浅黄橙色、外面が灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1012～1022は底部破片で、1012～1016は体部が内湾して立ち上がるとみられるものである。1012は底径6.8cmを測る。調整は摩耗が著しく不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1013は底径7.0cmを測り、内外面とも摩耗するが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1014は底径7.2cmを測り、器面は摩耗するが、外底面は回転糸切りとみられる。色調は、内面が灰白色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土には少量砂粒を含み、焼成もやや不良である。1015は底径7.4cmを測る。調整は、内面が回転ナデ調整で、外面と外底面は摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1016は底径8.0cmを測り、器面は摩耗するが、内面には回転ナデ調整の痕跡が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい赤橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1017～1022は体部が斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がるとみられるものである。1017は底径4.8cmを測り、調整は内外面とも摩耗が著しく不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1018は底径6.0cmを測り、調整は内外面とも摩耗が著しく不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1019は底径6.8cmを測り、調整は内外面とも回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が灰褐色、外面が褐灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1020は底径6.8cmを測り、調整は内外面とも回転ナデ調整で、内底面は回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が褐灰色ないし黒褐色、外面が灰黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1021は底径7.0cmを測る。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1022は底径7.6cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。

1023は柱状高台の杯で、底径8.0cmを測る。体部は中空の柱状高台からラッパ状に開く。成形はロクロ水挽成形で、内外面とも回転ナデ調整を施し、内面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1024～1029は小皿である。1024は口径8.5cm、器高1.8cm、底径5.2cmを測り、口縁部はやや内湾気

味に短く立ち上がる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1025は口径7.3cm、器高1.1cm、底径5.2cmを測り、内面に回転ナデ調整が残るが、外面は摩耗が著しく調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1026は口径7.3cm、器高1.7cm、底径4.8cmを測る。外面には回転ナデ調整が施される。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともいぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1027は口径7.6cm、器高1.5cm、底径5.5cmを測る。調整は外面に回転ナデ調整が残るが、内面は摩耗が著しく不明である。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1028は口径8.0cm、器高1.6cm、底径5.8cmを測り、器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともいぶい黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1029は口径8.4cm、器高1.2cm、底径6.2cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

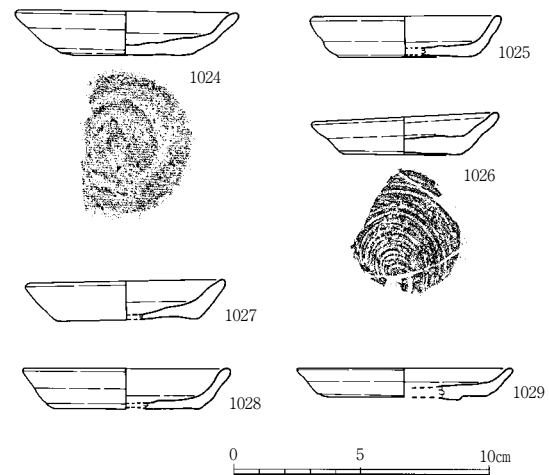


Fig.13 A区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師質土器)

瓦質土器 (Fig.14-1030~1032)

1030は椀で、底径は5.4cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、外底面には断面蒲鉾状の高台が付く。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面が灰白色、外面が灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1031は羽釜で、口径26.0cmを測る。胴部は内湾して立ち上がり、口縁端部は内傾する凹面をなす。口縁端部から2.7cm下方に鏝を有する。口縁部内面は斜め方向のハケ調整の後にヨコ方向のハケ調整、体部内面は斜め方向のハケ調整、外面にはナデ調整をそれぞれ施す。色調は、内面が灰白色、外面が灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1032は三足釜の脚部の一部である。摩耗が著しく調整は不明であり、器面には煤が多く付着する。色調は暗灰色を呈し、胎土は細かな砂粒を含み、焼成はやや不良である。

東播系須恵器 (Fig.14-1033)

1033は片口鉢の口縁部破片で、口径25.0cmを測る。口縁端部は肥厚する。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰白色ないし灰色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。

常滑焼 (Fig.14-1034)

1034は甕の口縁部破片で、N字状口縁をなす。器面にはヨコナデ調整を施す。色調は、内面が黒褐色、外面が暗褐色を呈し、胎土は細かな砂粒を含み、焼成は良好である。

2. 調査区の概要 (1)A区

青磁 (Fig.14-1035・1036)

1035は碗の口縁部破片で、口径8.2cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。口縁部内面にヨコ方向の2本の沈線、体部内面に飛雲文を片彫りし、器面にはオリーブ灰色の釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。

1036は香炉の体部破片で、外方にやや開きながらほぼ真直ぐ立ち上がる。外面と内面上端の一部に灰オリーブ色の釉を施し、内面は無釉である。胎土は精良で、焼成も良好である。

土製品 (Fig.14-1037)

1037は紡錘形の土錘で、一部が欠損する。外面には成形時の指頭圧痕が残る。色調はにぶい橙色ないし橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成もやや不良である。

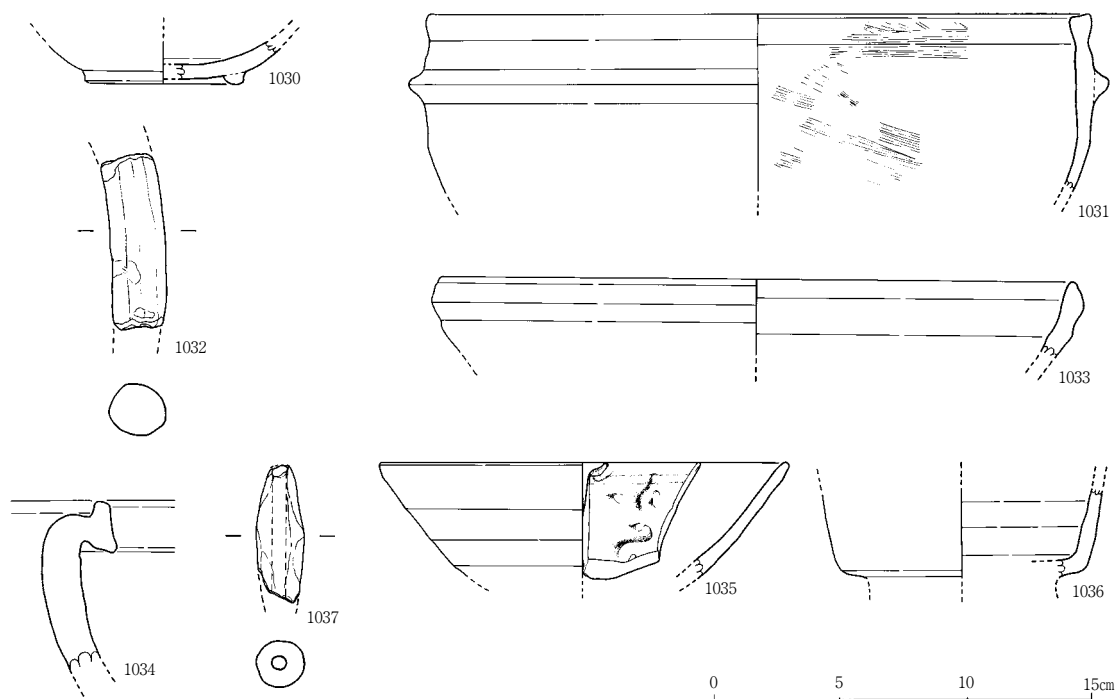


Fig.14 A区第Ⅲ層出土遺物実測図(瓦質土器・東播系須恵器・常滑焼ほか)

第Ⅴ層出土遺物

須恵器 (Fig.15-1038)

1038は小皿の口縁部破片で、口径9.0cmを測る。口縁部は大きく肥厚し、端部を丸く仕上げている。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

土師器 (Fig.15-1039~1041)

1039は甕で、口径16.1cmを測る。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部を丸く仕上げる。口縁部内面にはヨコ方向、外面には斜め方向のハケ調整を施す。体部内面はハケ調整の後にヘラ削りを施し、外面は斜め方向のハケ調整の後にタテ方向のハケ調整を施す。色調は内外面ともにぶい褐色を呈し、胎土は細かな砂粒を含み、焼成は良好である。1040・1041は長胴甕の口縁部破片で、共に胴部は直立気味に立ち上がり、口縁部はくの字状に外反する。1040は口径34.4cmを測り、口縁部内外面はヨコナデ調整で、一部ヨコ方向のハケ調整を施す。胴部にはナデ調整を施す。色調は内外面と

も灰褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。1041の口縁部もヨコナデ調整が施される。色調は内外面ともにぶい褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。

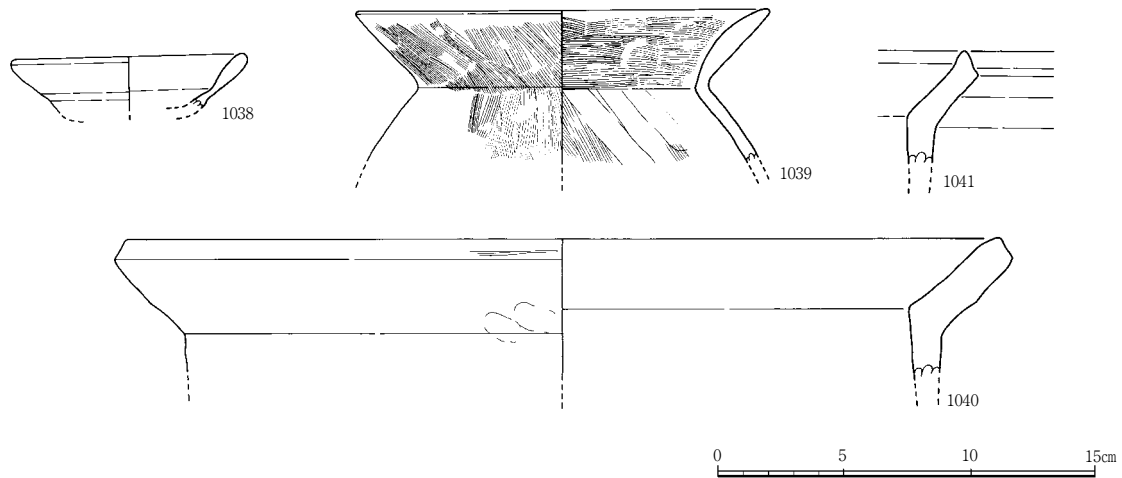


Fig.15 A区第V層出土遺物実測図(須恵器・土師器)

土師質土器 (Fig.16~18-1042~1091)

1042~1047は椀である。1042・1043は口縁部破片で、1042は口径15.6cmを測り、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰白色ないし灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1043は口径15.7cmを測り、口縁部を外反させ、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面がにぶい橙色、褐灰色、外面が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1044~1047は底部破片で、体部はすべて内湾して立ち上がる。1044は底径4.4cmを測り、外底面にハの字状に開く高台が付く。調整は外面の一部に回転ナデ調整の痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1045は底径5.4cmを測り、外底面には小さな蒲針状の高台が付く。外面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗が著しく不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1046は底径5.9cmを測り、外底面には断面方形の高台が付く。外面に回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1047は底径6.0cmを測り、外底面には断面方形の高台が付く。外面に回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗が著しく不明である。色調は内外面とも褐灰色、にぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。

1048~1076は杯である。1048は口径13.0cm、器高6.2cm、底径6.0cmを測る。外底面はやや窪み、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1049は口径13.6cm、器高4.6cm、底径8.0cmを測る。外底面は窪み、体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反し、口縁端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、内底面は摩耗が著しく調整は不明であるが、他は回転ナデ調整の痕が残る。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は、内面が橙色、外面が橙色ないし浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1050は口径

2. 調査区の概要 (1)A区

15.4cm, 器高3.5cm, 底径9.4cmを測る。外底面はほぼ平らで, 体部は外反して立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は砂粒を含み, 焼成は不良である。1051は口径12.9cm, 器高4.4cm, 底径7.2cmを測る。外底面は窪み, 体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形, 調整は回転ナデ調整で, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし暗灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1052は口径13.4cm, 器高4.0cm, 底径6.6cmを測り, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。外底面は窪み, 体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁部を外反させ, 端部を丸く仕上げる。調整は器面の摩耗が著しく不明である。色調は, 内面が橙色, 外面が黄橙色を呈し, 胎土には砂粒を含むが, 焼成は良好である。1053~1056は口縁部破片である。1053は口径13.0cmを測り, 体部は内湾して立ち上がり, 口縁部は外反する。成形はロクロ水挽成形で, 器面には回転ナデ調整を施す。色調は, 内面は灰白色ないしにぶい橙色, 外面が灰黄色ないし橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1054・1055は体部が外反気味に立ち上がるものである。1054は口径13.2cmを測り, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は, 内面が橙色, 外面がにぶい橙色ないし橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1055は口径13.4cmを測り, 器面には回転ナデ調整を施す。色調は, 内面が褐灰色, 外面が褐灰色ないしにぶい黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1056は口径13.6cmを測り, 体部はほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁部は丸く仕上げる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1057~1076は底部破片で, 1057~1070は体部が内湾して立ち上がるとみられるものである。1057は底径5.8cmを測る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。1058は底径6.4cmを測り, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りで, 板状圧痕が残る。色調は, 内面が橙色, 外面がにぶい橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1059は底径6.6cmを測り, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で焼成も良好である。1060は底径7.0cmを測り, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は, 内面が浅黄橙色ないし灰白色, 外面が浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1061は底径6.5cmを測り, 成形はロクロ水挽成形とみられる。器面が摩耗しており調整は不明であるが, 底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し, 胎土には砂粒が多く含まれるが, 焼成は良好である。1062は底径6.6cmを測り, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し, 胎土には砂粒を含むが, 焼成は良好である。1063は底径6.6cmを測り, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は, 内面が黄灰色, 外面がにぶい黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1064は底径6.6cmを測り, 成形はロクロ水挽成形とみられる。調整は回転ナデ調整で, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1065は底径6.8cmを測る。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1066は底径7.0cmを測り, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 調整は器面が著し

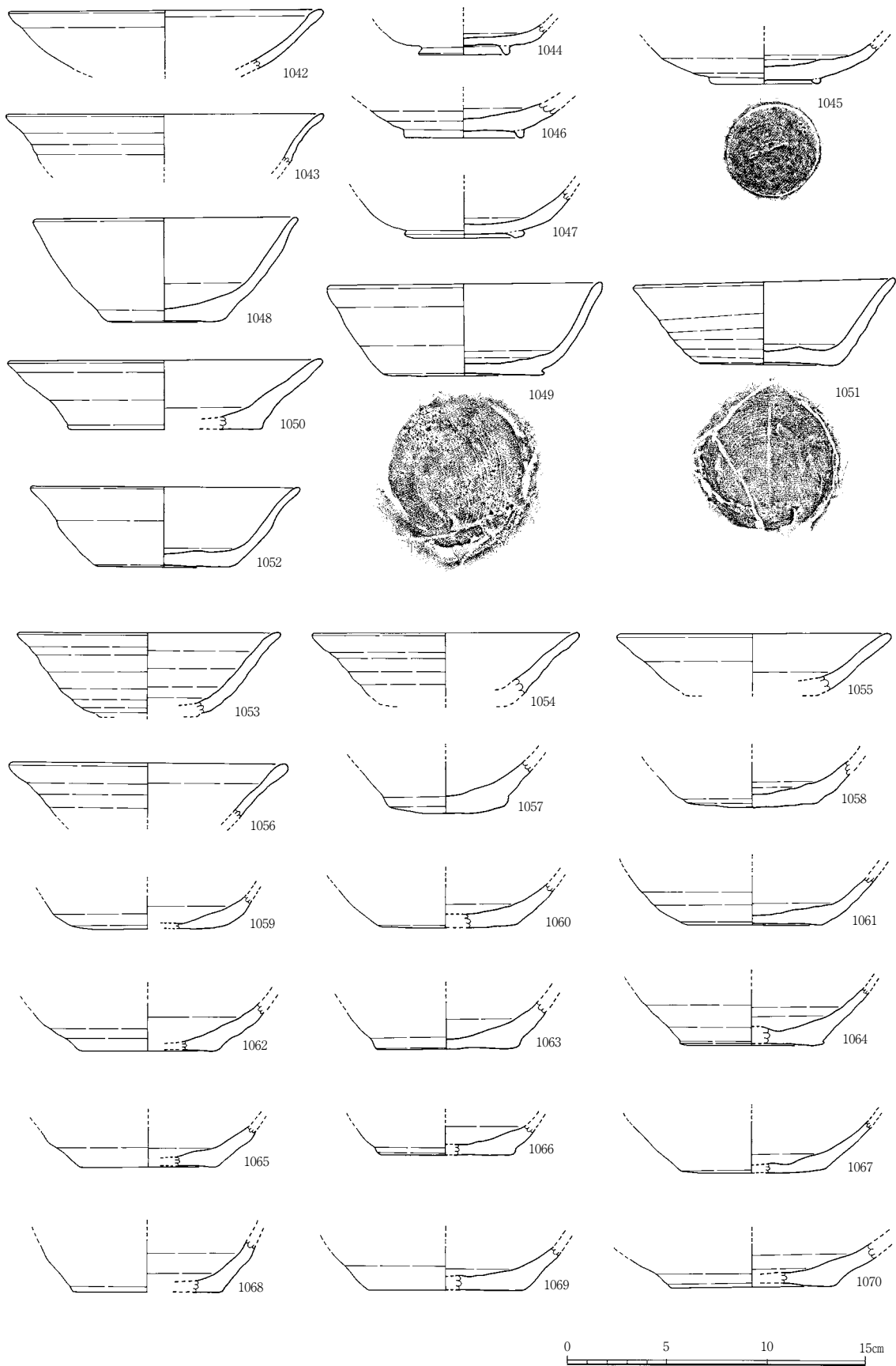


Fig.16 A区第V層出土遺物実測図(土師質土器1)

2. 調査区の概要 (1)A区

く摩耗するため不明である。色調は、内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色、橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1067は底径7.2cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は器面が著しく摩耗するため不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1068は底径7.4cmを測り、調整は器面が著しく摩耗するため不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1069は底径7.8cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が橙色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1070は底径8.0cmを測り、調整は器面が著しく摩耗するため不明である。色調は、内面が橙色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1071～1076は、体部がほぼ真直ぐ立ち上がるとみられるものである。1071は底径5.0cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面には回転ナデ調整を施す。外底面は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。色調は、内面がにぶい黄橙色ないしにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1072は底径5.1cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。外底面は摩耗するが、断面の形状からみて回転糸切りとみられる。色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1073は底径6.2cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が灰白色、外面が灰白色ないし灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1074は底径6.6cmを測り、調整は器面が著しく摩耗するため不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1075は底径7.6cmを測り、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1076は底径7.6cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1077は柱状高台の杯で、底径6.0cmを測る。体部は中空の柱状高台からラッパ状に開く。成形はロクロ水挽成形で、外面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗しており不明である。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。1078は柱状高台の皿で、底径7.0cmを測る。中実の柱状高台部のみ残存しており、部分的に

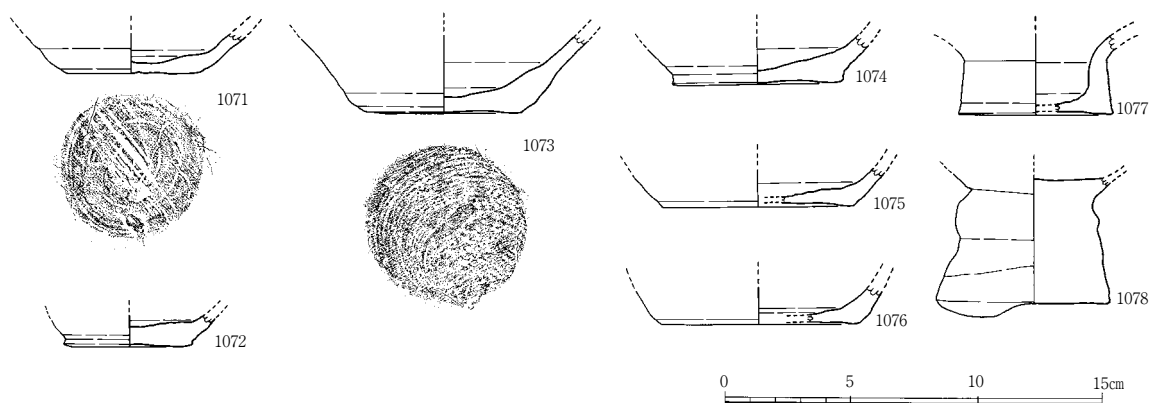


Fig.17 A区第V層出土遺物実測図(土師質土器2)

被熱し、肥大する。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい赤褐色、外面が灰色ないしにぶい黄橙色・赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。

1079～1091は小皿である。1079～1082は口縁部がやや内湾気味に立ち上がるものである。1079は口径6.6cm、器高1.7cm、底径4.0cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1080は口径8.0cm、器高1.3cm、底径6.0cmを測る。調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1081は口径8.0cm、器高1.6cm、底径6.2cmを測る。調整は器面が摩耗しており不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1082は口径8.1cm、器高1.6cm、底径4.2cmを測る。成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1083～1091は口縁部が短くほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1083は口径6.8cm、器高1.3cm、底径5.0cmを測る。器面には回転ナデ調整を施すが、外面は摩耗する。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1084は口径7.2cm、器高1.2cm、底径5.6cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、外面は摩耗する。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1085は口径7.6cm、器高1.5cm、底径5.4cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が橙色、にぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。1086は口径7.8cm、器高1.4cm、底径4.9cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1087は口径8.0cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1088は口径8.4cm、器高1.5cm、底径6.0cmを測り、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。1089は口径8.4cm、器高1.4cm、底径6.4cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1090

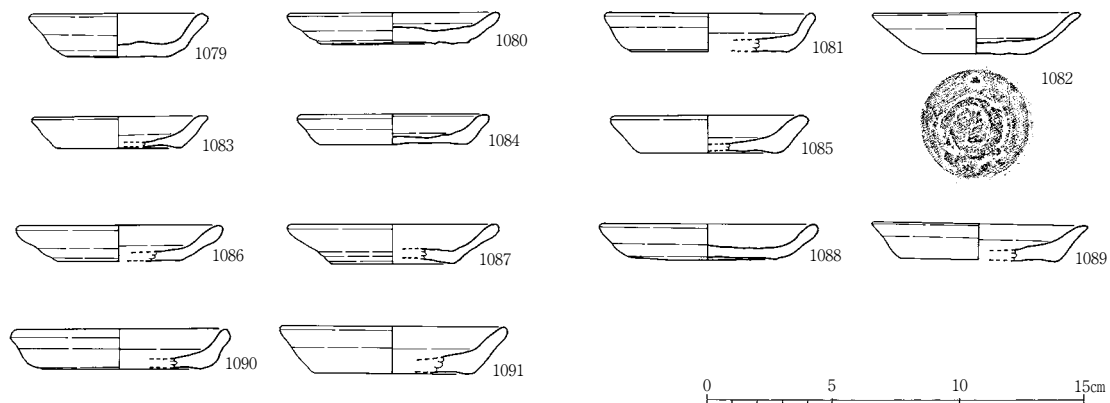


Fig.18 A区第V層出土遺物実測図(土師質土器3)

2. 調査区の概要 (1)A区

は口径8.4cm, 器高1.5cm, 底径6.4cmを測る。調整は回転ナデ調整で, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1091は口径8.7cm, 器高1.9cm, 底径6.3cmを測り, 体部は短くほぼ真直ぐ立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施すが, 外面は著しく摩耗する。外底面は静止糸切りとみられる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

瓦器 (Fig.19-1092~1097)

1092~1096は碗である。1092~1094は口縁部破片で, 3点とも体部は内湾しながら立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。1092は口径13.0cmを測り, 内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面下半には指頭圧痕が残る。また, 体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1093は口径13.7cmを測り, 内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面下半には指頭圧痕が残る。また, 体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1094は口径13.8cmを測り, 内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面下半には指頭圧痕が残る。また, 体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1095・1096は底部破片で, ともに体部は内湾しながら立ち上がり, 外底面にはしっかりした高台が付く。1095は底径4.4cmを測り, 体部外面に指頭圧痕, 体部内面にはヘラ磨きが残るが全体的に摩耗が著しい。色調は内外面とも暗灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1096は底径4.5cmを測り, 調整は内外面ともにナデ調整を施し, 外面には指頭圧痕が残る。また, 内底面には不定方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも灰色ないし灰白色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

1097は小皿で, 口径7.8cm, 器高1.7cmを測る。底部は丸く, 口縁部は斜め上方に短く立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。口縁部内外面にはヨコナデ調整, 内底面にはナデ調整を施し, 外底面には指頭圧痕が残る。色調は内外面とも灰白色, 灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

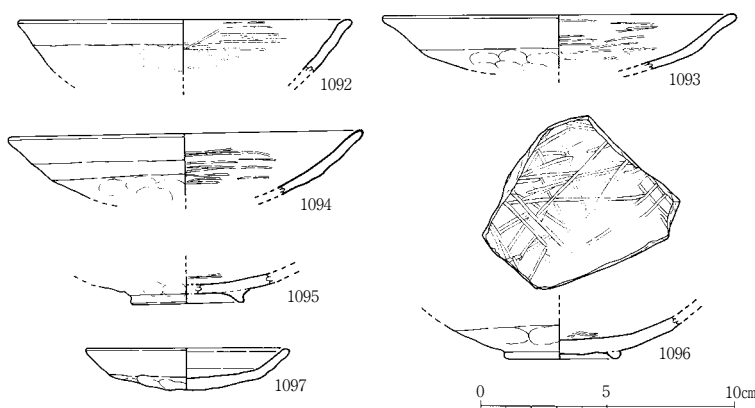


Fig.19 A区第V層出土遺物実測図(瓦器)

白磁 (Fig.20-1098・1099)

2点とも碗である。1098は口縁端部に小さな玉縁を持ち, 器面には灰白色の釉を施す。胎土は精良で, 焼成も良好である。1099は口縁端部に大きな玉縁を持ち, 体部の器肉も厚い。器面には浅黄色の釉を施す。胎土は精良で, 焼成も良好である。

青磁 (Fig.20-1100・1101)

1100は碗の底部破片で, 底径5.6cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり, 外底面に断面四角形

の高台を削り出す。見込に沈線を配し、草花文を片彫りしているとみられる。器面にはオリブ灰色の釉を施し、高台は露胎である。胎土は精良で、焼成も良好である。

1101は皿の底部破片で、底径4.8cmを測る。口縁部は体部から屈曲し、斜め上方に立ち上がる。外面には回転ヘラ削りがみられ、内面と体部外面下半には緑灰色の釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。

東播系須恵器 (Fig.20-1102・1103)

2点とも碗の底部破片で、体部はともに斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がるとみられる。1102は底径4.5cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。1103は底径4.8cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

常滑焼 (Fig.20-1104)

1104は甕の底部破片である。器面にはナデ調整を施す。色調は、内面が暗青灰色、外面が褐色ないし青灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

石製品 (Fig.20-1105・1106)

2点とも砥石で、石材は砂岩である。1106は片側を欠損し、4面とも使用痕が残る。残存長14.8cm、全幅3.7cm、全厚2.3cm、重量194.0gを測る。1105は大半を欠損するが、4面とも使用痕が残る。残存長6.1cm、残存幅6.0cm、厚さ5.6cm、重量328.0gを測る。

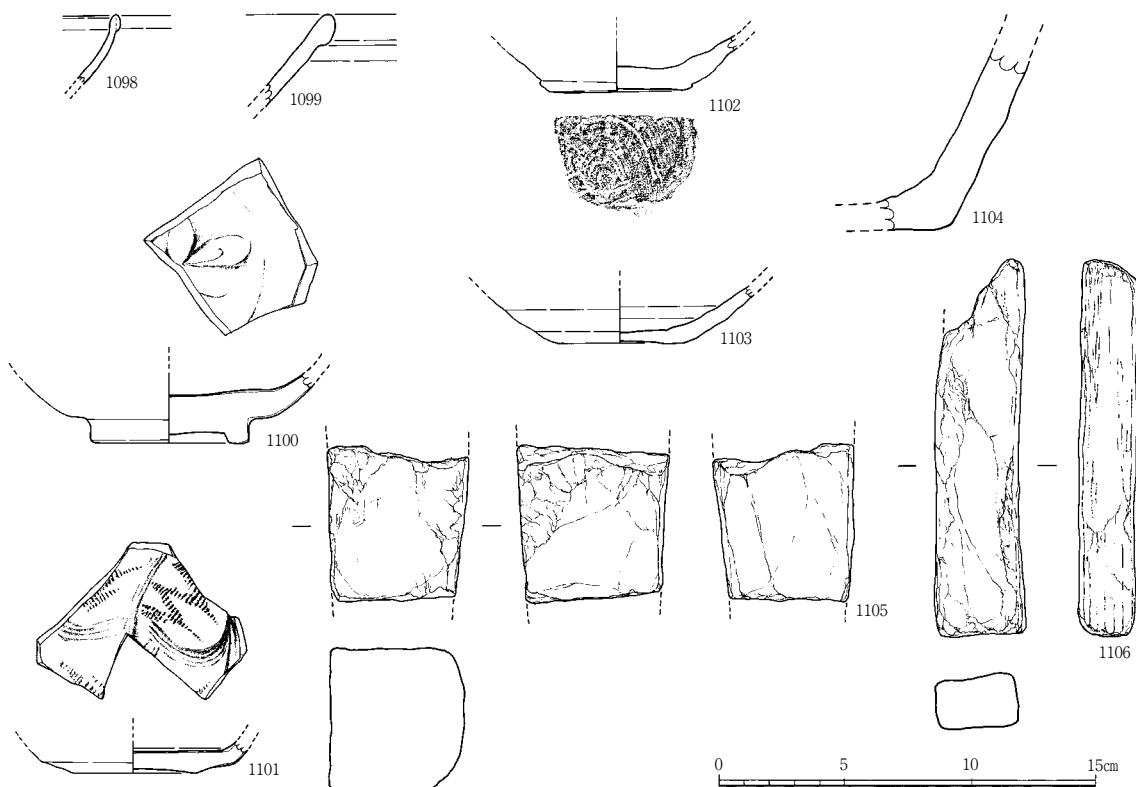


Fig.20 A区第V層出土遺物実測図(白磁・青磁・東播系須恵器ほか)

第VI層出土遺物

弥生土器 (Fig.21-1107)

1107は壺の口縁部破片で、口径16.4cmを測る。口縁部は外反して上がり、口縁端部を外側に折り曲げる。口縁部内外面にハケ目が残るが全体的に摩耗が著しい。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

須恵器 (Fig.21-1108)

1108は短頸壺の底部から胴部にかけての破片で、胴径13.8cm、底径5.2cmを測る。上胴部と下胴部の境に1条の凹線を巡らす。調整は回転ナデ調整で、下胴部外面は回転ヘラ削りを施す。色調は、内面が青灰色、外面が青灰色ないし灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

土師質土器 (Fig.21-1109~1120)

1109は椀の底部破片で、底径6.0cmを測る。体部は内湾して立ち上がるとみられ、外底面にはハの字状をなす高い高台が付く。内外面とも摩耗が著しいが、高台外側には回転ナデ調整の痕が残る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良である。

1110~1118は杯である。1110は口縁部破片で、口径13.6cmを測る。体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。1111~1118は底部破片で、1111~1114は、体部が内湾して立ち上がるとみられるものである。1111は底径5.8cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは静止糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1112は底径5.8cmを測り、内面には回転ナデ調整の痕が残るが、外面は摩耗が著しい。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は、内面が灰色、灰黄色、外面が灰色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。1113は底径6.4cmを測り、外面には回転ナデ調整の痕が残るが、外面は摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は精良で、焼成も良好である。1114は底径6.6cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1115~1118は、体部がほぼ真直ぐ立ち上がるとみられるもので、成形は1115が不明である以外全て粘土紐巻き上げロクロ成形である。1115は底径6.8cmを測る。調整は器面が摩耗しており不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。1116は底径7.5cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色、にぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1117は底径7.6cmを測り、調整は器面が摩耗しており不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1118は底径8.0cmを測り、調整は器面が摩耗しており不明である。色調は、内面が灰黄褐色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1119・1120は小皿である。1119は口径8.8cm、器高1.2cm、底径5.4cmを測る。口縁部は短く内湾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形である。器面は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。外底面は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面とも黄橙色を

呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1120は口径9.4cm、器高1.7cm、底径7.0cmを測る。調整は器面が摩耗しており不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。

黒色土器 (Fig.21-1121)

1121は椀の底部破片で、底径7.8cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、外底面にはしっかりした断面四角形の高台が付く。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも暗灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

瓦器 (Fig.21-1122・1123)

2点とも椀である。1122は口径16.0cm、器高5.5cm、底径4.9cmを測る。体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。外底面には断面三角形の比較的しっかりした高台が付く。内面はナデ調整、口縁部外面はヨコナデ調整を施し、体部外面下半には指頭圧痕が残る。また、体部内面にはヨコ方向のヘラ磨き、体部外面には不定方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも黒褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1123は底部破片で、底径5.2cmを測る。体部は内湾して立ち上がる。底部にはしっかりとした断面逆台形の高台が付く。内面はナデ調整を施し、外面には指頭圧痕が残る。また、体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

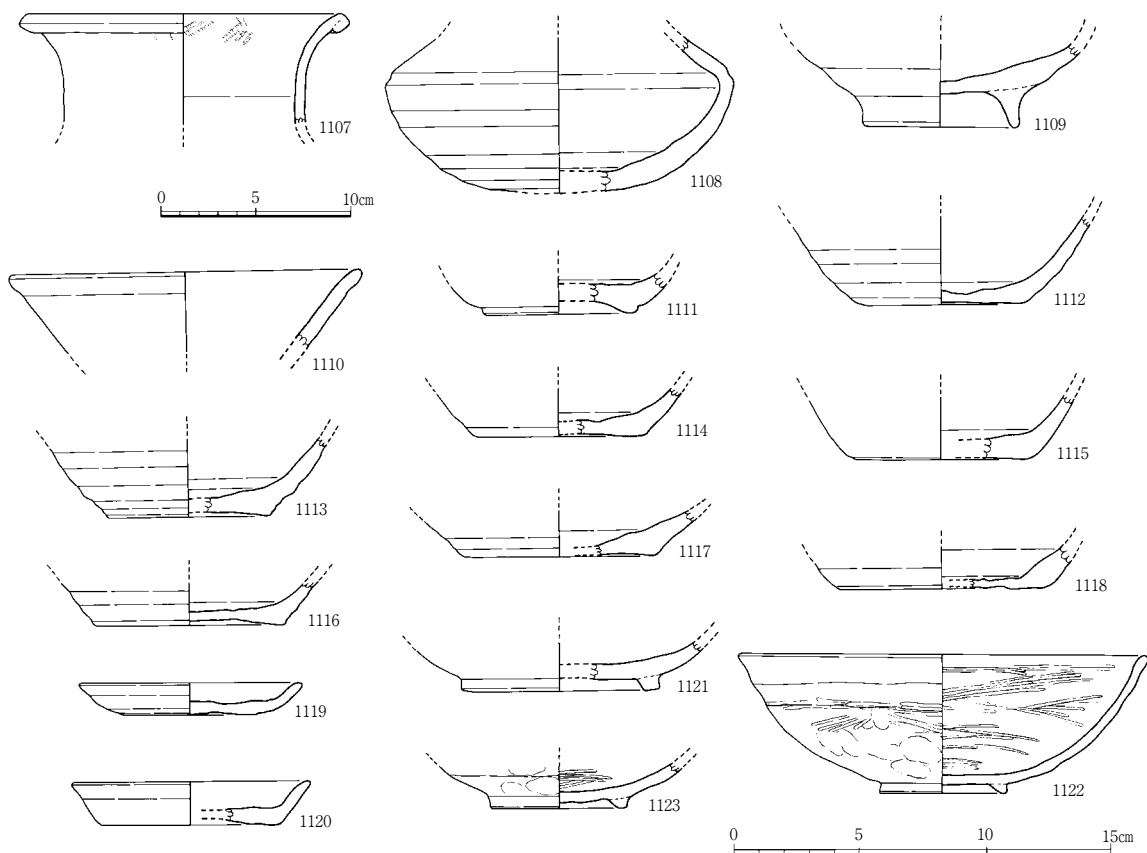


Fig.21 A区第Ⅵ層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師質土器ほか)

2. 調査区の概要 (1) A区

③ 遺構と遺物

i 古代

a. 溝跡

SD-101 (Fig.22)

調査区東部、中世の遺構検出面下約52cmで検出した東西溝である。幅0.62~0.84m、深さは4~23cmで、約8.20mを検出した。主軸方向はN-66°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は黒褐色粘土質シルトに木片を多量に含むものであった。出土遺物には土師器片1点、須恵器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

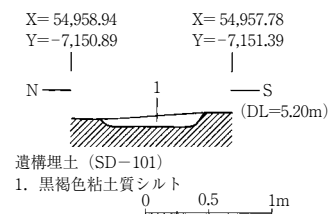


Fig.22 SD-101

ii 中世1

調査区全面で検出された第2次検出面の遺構について以下に記す。

a. 土坑

SK-101

調査区西端北側のSD-102の底面で検出された土坑である。SD-102に切られ、大部分が調査区外にあるため、詳細は不明である。埋土は黒褐色粘土質シルトに炭化物を多く含むものであった。出土遺物には土師質土器片2点、瓦器片1点がみられ、瓦器1点(1124)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.24-1124)

1124は碗の口縁部破片で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。内面にはナデ調整、口縁部外面にはヨコナデ調整を施し、体部外面下半には指頭圧痕が残る。また、内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SK-102

調査区西端で検出した隅丸方形とみられる土坑で、SD-102の南側に位置する。北側をSD-102、東側をSD-105に切られていたため、長辺、短辺は不明であるが、深さは0.33mを測る。断面は舟底状を呈するとみられる。埋土は黒褐色粘土質シルトで炭化物を多く含むものであった。出土遺物には土師質土器片31点、瓦器片5点がみられ、土師質土器2点(1125・1126)が図示できた。

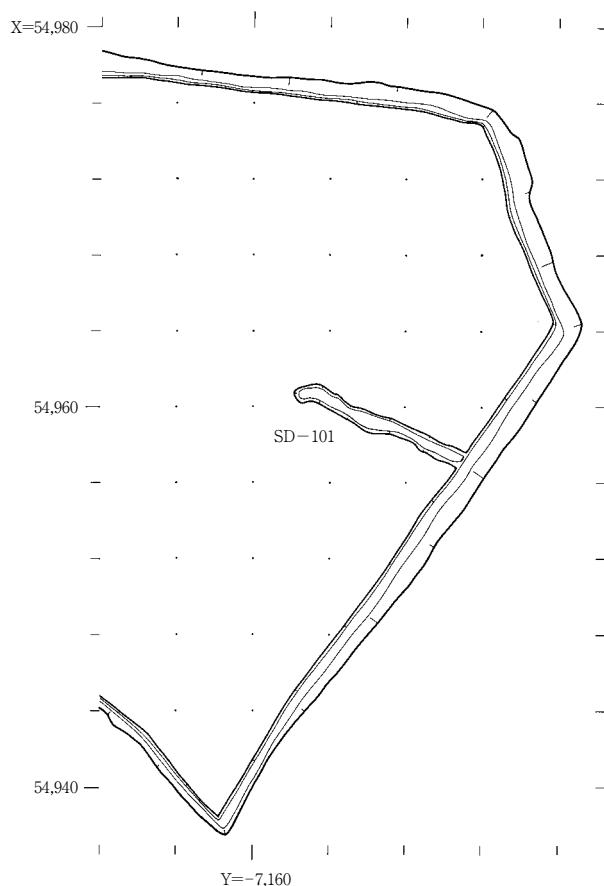


Fig.23 A区古代遺構平面図 (S=1/400)

出土遺物

土師質土器 (Fig.24-1125・1126)

共に杯である。底部破片であり、体部は2点とも内湾して立ち上がるものとみられる。成形は1125が粘土紐巻き上げロクロ成形で、1126はロクロ水挽成形とみられる。1125は底径5.6cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が黄橙色、外面が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1126は底径8.0cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は、内面が橙色、外面が黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

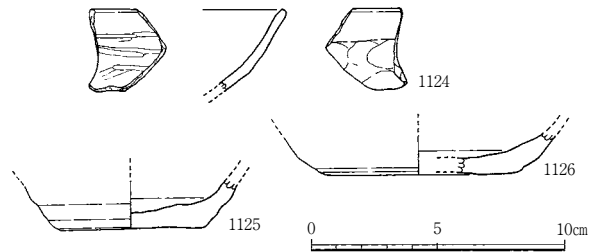


Fig.24 SK-101・102出土遺物実測図

SK-103

調査区西端のSD-102の底面で検出された土坑で、東側をSD-107に切られ、大部分は調査区外に続くため、詳細は不明である。埋土は暗灰黄色粘土質シルトに炭化物を多く含むものであった。出土遺物には土師質土器片17点、瓦器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-104

調査区西端南側で検出した土坑で、南東側をSD-110に切られ、西側は調査区外へ続くため長辺、短辺は不明であるが、深さは0.57mを測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトに炭化物を多く含むものであった。出土遺物には土師器片2点、土師質土器片27点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-105

調査区西部中央で検出した長楕円形の土坑でSD-107の南側に位置する。西側をSD-161に切られ、長辺は不明であるが、短辺は0.98m、深さは17cmを測る。断面は舟底状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトに炭化物を多く含むものであった。出土遺物には弥生土器片1点、土師質土器片11点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-106

調査区中央部北側で検出した長楕円形とみられる土坑で、SD-165の北側に位置する。SD-112を掘り込んでおり、遺構の大部分が調査区外にあったため、長辺、短辺は不明であるが、深さは10cmを測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SK-107

調査区中央部で検出した方形の土坑で、SK-108の北側に位置する。長辺0.72m、短辺0.64m、深さ約11cmで、長軸方向はN-4°-Wとほぼ真北を向く。断面は台形状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SK-108

調査区中央部で検出した方形の土坑で、SK-107の南側に位置する。長辺1.38m、短辺0.68m、深

2. 調査区の概要 (1)A区

さ4cmで、長軸方向はN-7°-Wとほぼ真北を向く。断面は台形状を呈する。埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SK-109 (Fig.25)

調査区南部で検出した不整形の土坑で、SD-166の西側に位置する。長辺1.91m、短辺1.48m、深さ12cmで、長軸方向はN-5°-Wとほぼ真北を向く。断面は台形状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

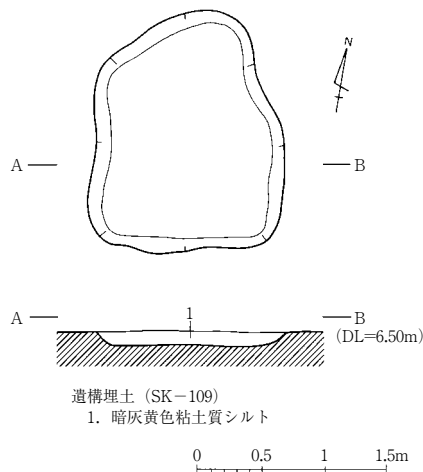


Fig.25 SK-109

SK-110

調査区南部で検出した不整形の土坑で、SD-140を切っていた。長辺2.36m、短辺1.08m、深さ11cmで、長軸方向はN-7°-Wとほぼ真北を向く。断面は台形状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片5点、白磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-111

調査区中央部で検出した長楕円形とみられる土坑で、東側をSD-132、南側をSD-137、北側をSD-133に切られていたため、長辺、短辺は不明であるが、深さは14cmであった。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで、出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片26点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-112 (Fig.26)

調査区中央部北側で検出された不整形の土坑で、SD-155の北側に位置する。南側をSD-155に切られていたため、長辺は不明であるが、短辺は3.76m、深さ0.66mで、長軸方向はN-5°-Wとみられる。出土遺物には弥生土器片1点、土師質土器片2,352点、瓦器片62点、東播系須恵器片7点、青磁片3点、白磁片1点がみられ、土師質土器97点(1127~1223)、瓦器7点(1224~1230)、東播系須恵器1点(1231)、青磁1点(1232)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.27~30-1127~1223)

1127は小杯の底部破片で、底径4.2cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。

1128~1201は杯である。1128は口径12.6cm、器高4.4cm、底径6.5cmを測る。外底面はやや窪み、体部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクろ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1129は口径13.1cm、器高4.0cm、底径7.0cmを測る。外底面は窪み、体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形

はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし灰色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1130は口径13.8cm、器高4.3cm、底径7.2cmを測る。外底面はやや窪み、体部は内湾して立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1131は口径13.6cm、器高3.7cm、底径6.4cmを測る。外底面は大きく窪み、体部は中程でやや外反して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1132は口径14.1cm、器高4.2cm、底径7.2cmを測る。外底面はやや窪み、体部は中程でやや外反して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が灰色ないしにぶい黄橙色、外面が浅黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1133は口径13.0cm、器高3.9cm、底径6.6cmを測る。外底面は窪み、体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1134は

口径13.8cm、器高3.8cm、底径8.1cmを測る。外底面はほぼ平らで、体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には大粒の砂粒を含み、焼成はやや不良である。1135は口径14.0cm、器高3.9cm、底径6.8cmを測る。外底面はやや窪み、体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁端部を細く仕上げる。成形はロクロ水挽成形とみられ、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が浅黄橙色、外面がにぶい橙色ないし浅黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

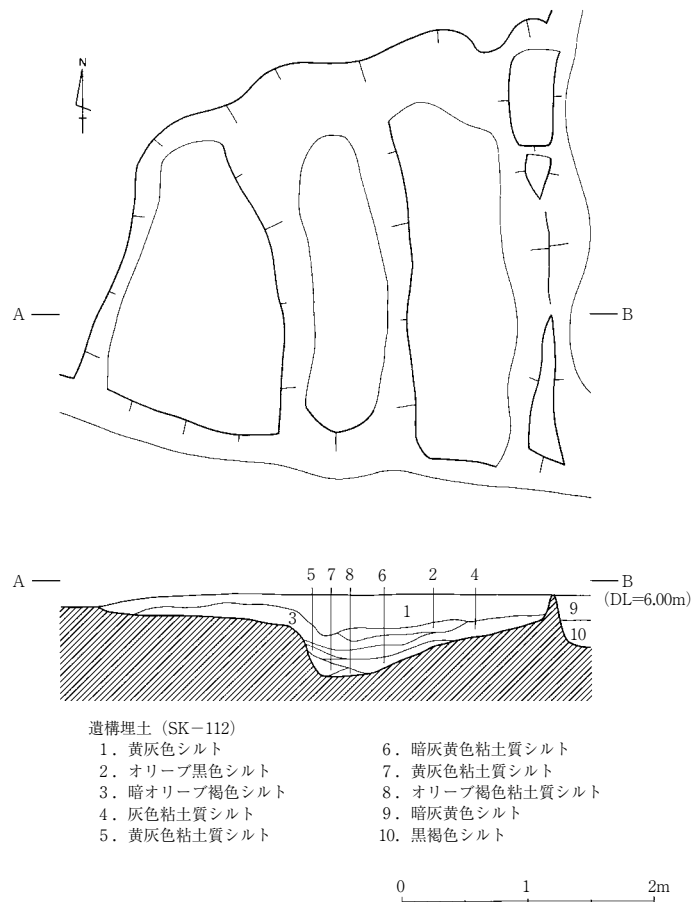


Fig.26 SK-112

2. 調査区の概要 (1)A区

1136は口径13.8cm, 器高4.2cm, 底径7.4cmを測る。外底面は大きく窪み, 体部は歪みが大きく内湾気味に立ち上がる部分と外反気味に立ち上がる部分とがある。口縁端部は丸く仕上げられる。成形はロクロ水挽成形で, 器面には回転ナデ調整を施すが, 内底面は摩耗が著しく調整不明である。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は, 内面が橙色, 外面が黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成はやや不良である。1137は口径14.6cm, 器高3.6cm, 底径8.4cmを測るが, 底部はほとんど残存しない。外底面はやや窪み, 体部は外反気味に立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。口縁端部外面には沈線状の窪みが1条巡る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 器面には回転ナデ調整を施す。外底面は摩耗が著しく不明であるが, 断面の形状からすると底部の切り離しは回転糸切りとみられる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し, 胎土には砂粒を含み, 焼成は良好である。1138は底部の大半を欠くが, 口径13.1cm, 器高4.1cm, 底径7.2cmを測る。体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 器面には回転ナデ調整を施すが, 全体的に摩耗が著しい。外底面は不明である。色調は, 内面が浅黄橙色, 外面が黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1139も底部の大半を欠くが, 口径13.4cm, 器高3.9cm, 底径6.7cmを測る。体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁端部を細く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で, 器面には回転ナデ調整を施すが, 全体的に摩耗が著しい。色調は, 内面がにぶい橙色, 外面がにぶい橙色ないしにぶい黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成はやや不良である。1140は底部から体部にかけての破片で, 底径7.2cmを測る。外底面は窪み, 体部は内湾気味に立ち上がる。成形はロクロ水挽成形で, 器面が著しく摩耗するため調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1141も底部から体部にかけての破片で, 底径6.8cmを測る。外底面はほぼ平らで, 体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁部はやや外反する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 器面には回転ナデ調整を施し, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色, 灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1142~1151は口縁部破片である。1142・1143は体部が内湾して立ち上がるものである。1142は口径11.4cmを測り, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成はやや不良である。1143は口径13.0cmを測り, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。1144~1148は体部から外反して立ち上がるものである。1144は口径12.0cmを測り, 成形はロクロ水挽成形とみられ, 器面には回転ナデ調整を施す。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい黄橙色ないし灰白色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1145は口径13.0cmを測り, 器面には回転ナデ調整を施すが, 全体的に摩耗が著しい。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1146は口径13.8cmを測り, 成形はロクロ水挽成形とみられ, 器面には回転ナデ調整を施す。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい橙色ないし暗灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1147は口径14.2cmを測り, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は, 内面がにぶい黄橙色, にぶい橙色, 外面がにぶい橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1148は口径14.2cmを測り, 器面には回転ナデ調整の痕が一部残るが, 全体的に摩耗が著しい。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

1149～1151は体部が斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1149は口径13.2cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1150は口径14.0cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。また、外面には墨書が残るが、摩耗が著しく書かれた文字は不明である。1151は口径14.4cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面がぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1152～1201は底部破片である。1152～1174は体部が内湾して立ち上がると考えられるものである。成形は、1155・1158・1162・1167・1170・1174・1176・1183・1189・1191・1194・1196・1197・1199が粘土紐巻き上げロクロ成形、1153・1156・1161・1163・1165・1168・1169・1171～1173・1175・1182・1186～1188・1190・1193・1201がロクロ水挽成形とみられる以外は不明瞭である。1152は底径5.6cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面が灰色、外面がにぶい橙色

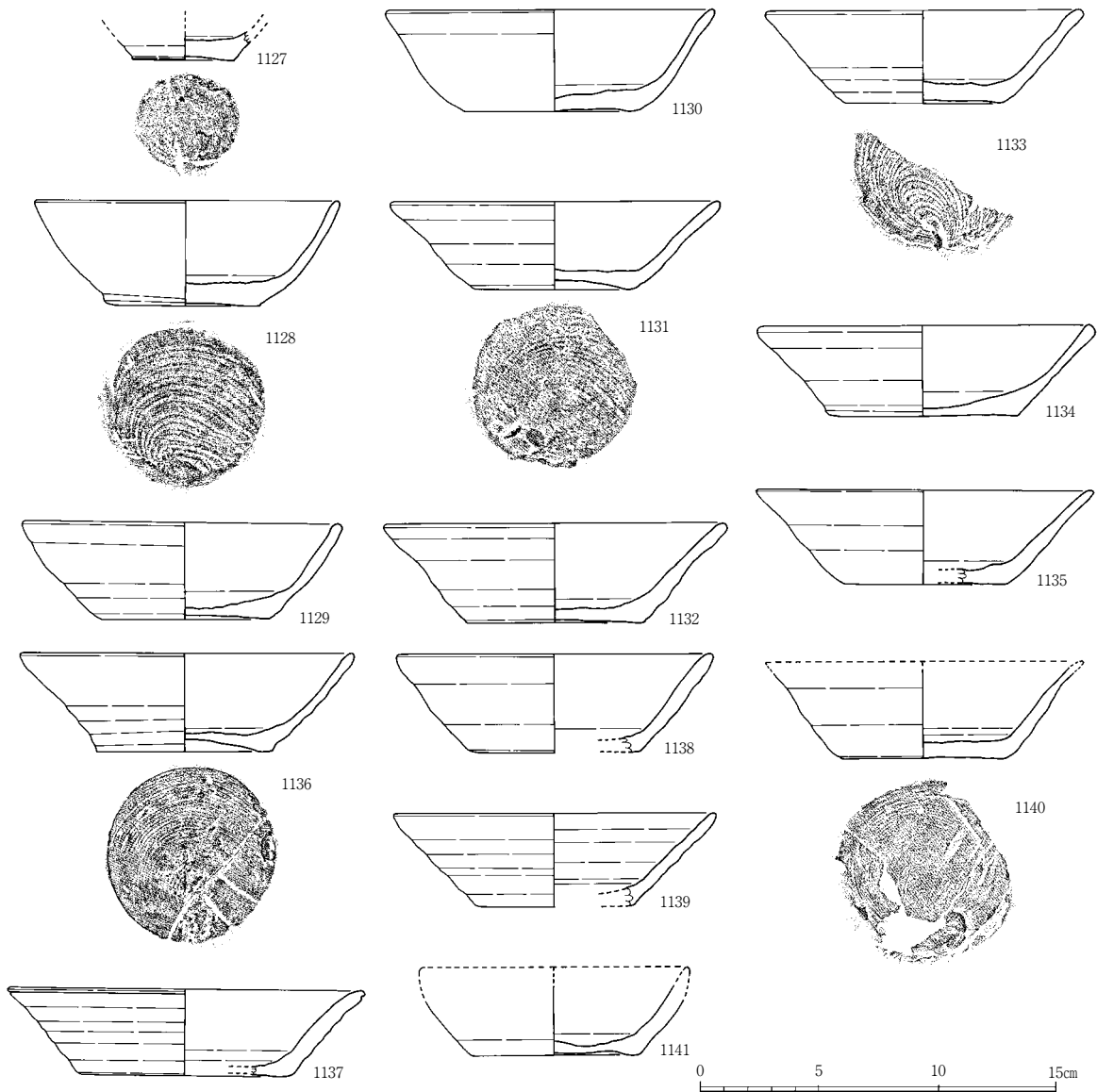


Fig.27 SK-112出土遺物実測図1

2. 調査区の概要 (1)A区

を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1153は底径5.6cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は、内面が灰白色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1154は底径6.0cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は、内外面とも橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1155は底径6.6cmを測り、器面は著しく摩耗し、調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1156は底径6.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1157は底径5.2cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1158は底径5.6cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし灰色、外面が暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1159は底径6.4cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし灰白色、外面が灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1160は底径6.4cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1161は底径6.8cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色、灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1162は底径6.8cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が灰白色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1163は底径6.8cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1164は底径7.2cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1165は底径7.2cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1166は底径7.4cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1167は底径7.4cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1168は底径7.4cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1169は底径7.4cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1170は底径7.8cmを測り、調整は摩耗が著しく不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1171は底径6.6cmを測り、器面の一部に回転ナデ調整の痕が残るが、全体的に摩耗が著しく調整は不明瞭である。底部の切り離しは断面形態からすると回転糸切りとみられる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1172は底径6.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1173は底径6.8cmを測り、器面は

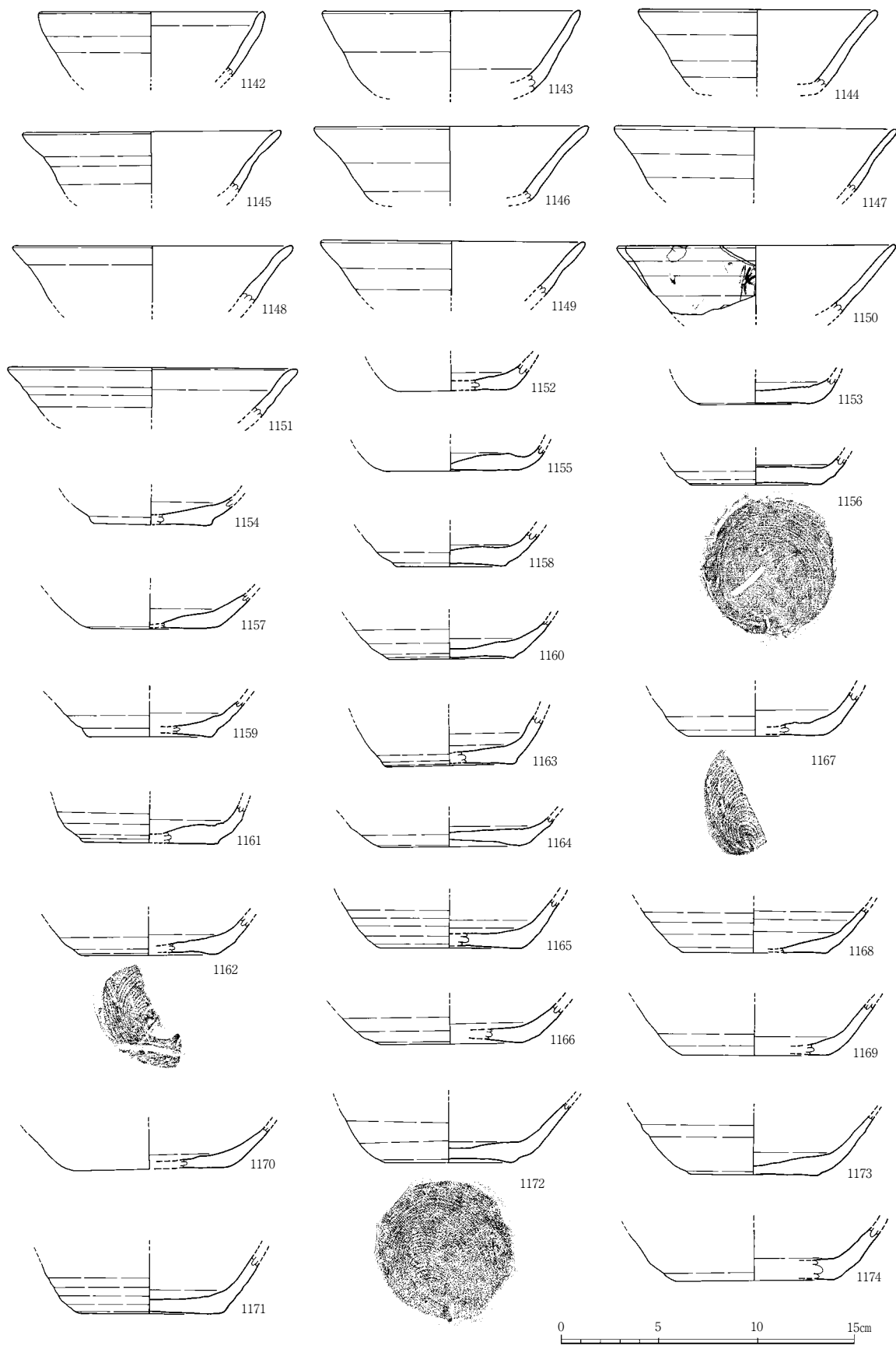


Fig.28 SK-112出土遺物実測図2

2. 調査区の概要 (1)A区

著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色ないし橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1174は底径8.2cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面が橙色、外面が橙色ないしにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1175～1177は口縁部が外反して立ち上がるとみられるもので、成形は1175がロクロ水挽成形である以外は粘土紐巻き上げロクロ成形である。1175は底径6.6cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1176は底径7.8cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1177は底径8.8cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1178～1201は体部がほぼ真直ぐ立ち上がるとみられるものである。成形は、1179・1183・1189・1191・1194～1196・1199が粘土紐巻き上げロクロ成形、1182・1186～1188・1190・1193・1197・1201がロクロ水挽成形とみられる。これ以外については残部が少なく不明瞭である。1178は底径5.0cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は、内面が灰白色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1179は底径5.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1180は底径7.0cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1181は底径7.5cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1182は底径5.4cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色、灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1183は底径5.5cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加えるが、外面は摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1184は底径5.8cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1185は底径5.9cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面が灰黄色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1186は底径6.0cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1187は底径6.0cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1188は底径6.4cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が灰色ないし灰白色、外面が淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1189は底径6.6cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1190は底径6.6cmを測り、調整は器面の一部に回転ナデ調整が残るが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調

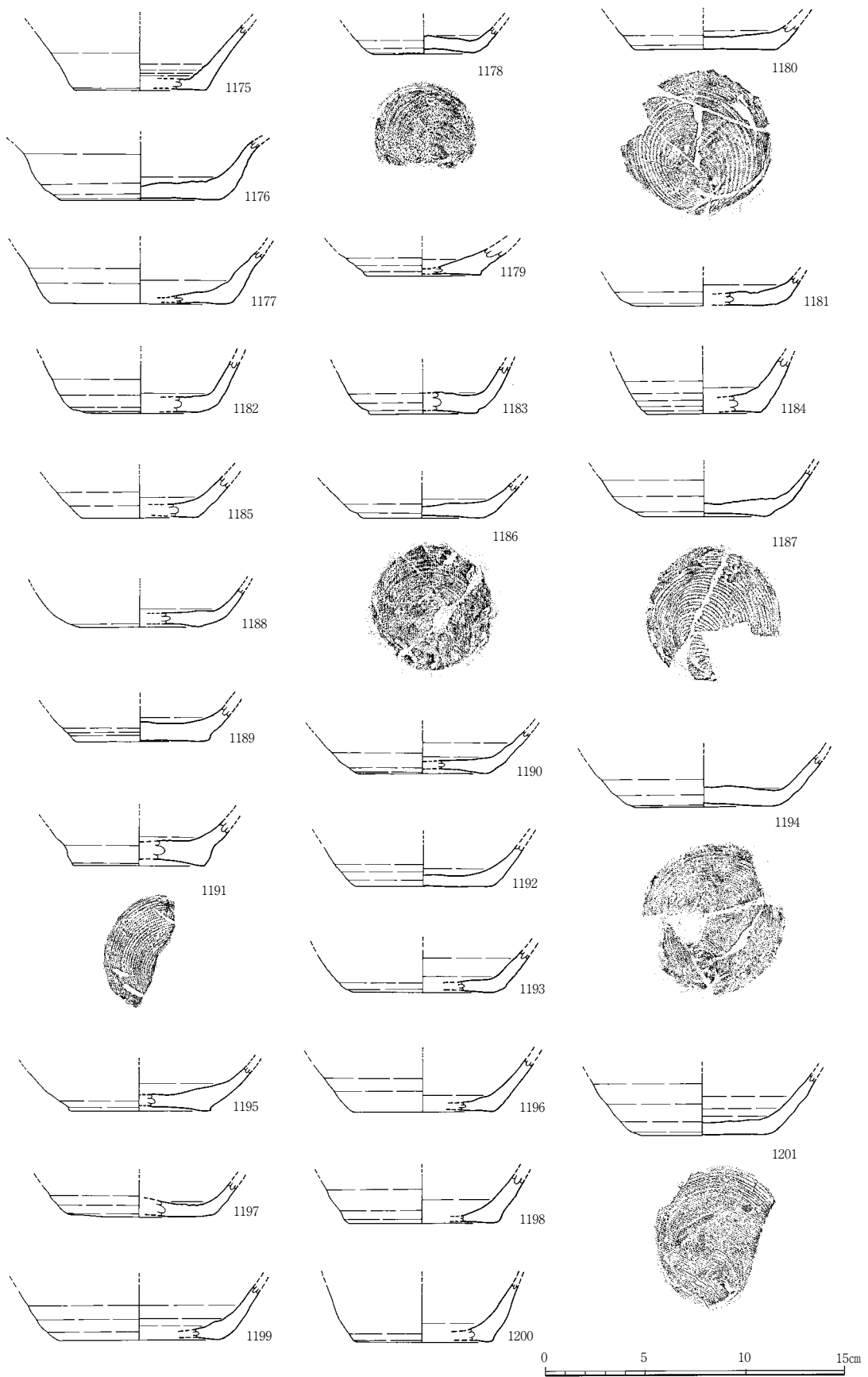


Fig.29 SK-112出土遺物実測図3

2. 調査区の概要 (1)A区

は内外面とも灰白色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1191は底径6.6cmを測り、内面には回転ナデ調整の痕が残るが、外面は摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1192は底径6.8cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1193は底径7.0cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面ともいぶき黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1194は底径7.0cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1195は底径7.0cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1196は底径7.0cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1197は底径7.4cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともいぶき橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1198は底径7.4cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は、内面が橙色ないし浅黄橙色、外面が灰白色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1199は底径8.0cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともいぶき橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1200は底径7.0cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1201は底径7.0cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともいぶき橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1202は柱状高台の皿で、口径11.8cm、残存高8.5cmを測る。底部は外下方にラップ状に開く中空の柱状高台が付き、口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。外面と柱状高台内面下半には回転ナデ調整を施すが、上半は未調整である。皿部内面は摩耗しており調整は不明である。色調は内外面ともいぶき橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。

1203～1223は小皿である。1203～1206は口縁部が内湾気味に立ち上がるものである。1203は口径6.7cm、器高1.4cm、底径4.8cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともいぶき黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1204は口径8.0cm、器高1.4cm、底径6.0cmを測り、調整は回転ナデ調整であるが、外底面は著しく摩耗する。色調は、内面がいぶき黄橙色、外面が褐灰色ないしいぶき黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。また、外面には煤が付着しており、灯明皿として使用されていたものとみられる。1205は口径8.0cm、器高1.9cm、底径4.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がいぶき橙色、外面がいぶき黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1206は口径8.2cm、器高1.3cm、底径5.8cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。また、内面には煤状のものが

付着しており、灯明皿として使用されていたとみられる。1207・1208は口縁部がやや外反気味に立ち上がるものである。1207は口径7.2cm、器高1.4cm、底径4.2cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1208は口径7.8cm、器高1.6cm、底径5.6cmを測り、調整は回転ナデ調整である。外底面は摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1209～1221は口縁部がほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1209は口径6.4cm、器高1.4cm、底径3.0cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。器面は摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が橙色、外面が橙色、にぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1210は口径6.6cm、器高1.5cm、底径5.3cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは静止糸切りである。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1211は口径7.0cm、器高1.6cm、底径5.3cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1212は口径7.2cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1213は口径7.2cm、器高1.5cm、底径5.0cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。1214は口径7.2cm、器高1.8cm、底径4.0cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1215は口径7.2cm、器高1.7cm、底径5.4cmを測り、調整は回転ナデ調整である。外底面は摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明で

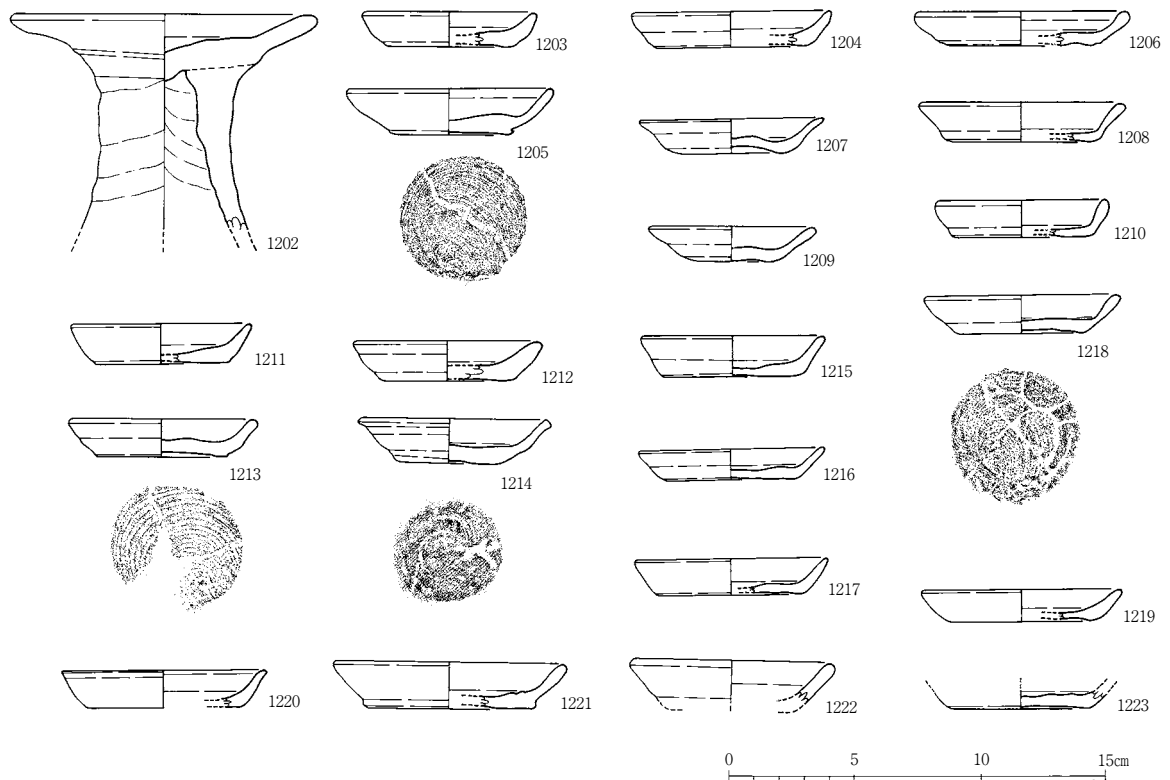


Fig.30 SK-112出土遺物実測図4

2. 調査区の概要 (1)A区

ある。色調は内外面とも橙色ないしにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1216は口径7.3cm, 器高1.2cm, 底径5.0cmを測り, 調整は回転ナデ調整である。外底面は摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。1217は口径7.5cm, 器高1.4cm, 底径5.8cmを測り, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。1218は口径7.6cm, 器高1.5cm, 底径5.0cmを測る。調整は摩耗が著しく不明であるが, 底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1219は口径7.8cm, 器高1.3cm, 底径5.7cmを測り, 調整は回転ナデ調整で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1220は口径8.0cm, 器高1.5cm, 底径6.0cmを測り, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は, 内面が橙色, 外面がにぶい黄橙色, 浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1221は口径9.0cm, 器高1.8cm, 底径6.8cmを測り, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。器面が摩耗しており調整は不明であるが, 底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は, 内面が浅黄橙色, 外面がにぶい黄橙色, 橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1222は口縁部破片で, 口径7.8cmを測る。体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1223は底部破片で, 底径5.4cmを測り, 外底面は摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。

瓦器 (Fig.31-1224~1230)

1224~1228は椀である。1224は口径14.5cm, 器高3.9cm, 底径3.6cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。外底面には断面三角形の高台が付く。内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面下半にかけては指頭圧痕が残る。また, 体部内面には円圈状のヘラ磨き, 体部内面にはジグザグ状のヘラ磨きを加える。色調は内外面とも灰白色を呈し, 胎土には砂粒を含み, 焼成は良好である。1225は口径14.5cm, 器高4.0cm, 底径4.3cmを測る。体部から口縁部にかけて徐々に厚さを増しながら内湾して立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。外底面には形骸化した断面三角形の高台が付く。内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面下半にかけては指頭圧痕が残る。また, 体部内面には円圈状のヘラ磨き, 内底面には平行線状のヘラ磨きを加える。色調は, 内面が暗灰色, 灰白色, 外面が暗灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1226・1227は体部から口縁部にかけての破片で, ともに体部は内湾気味に立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。1226は口径12.4cmを測り, 内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面下半には指頭圧痕が残る。また, 内面にはヨコ方向のヘラ磨きを加える。色調は内外面とも暗灰色ないし灰白色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1127は口径14.2cmを測り, 内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面下半には指頭圧痕が残る。また, 内面にはヨコ方向のヘラ磨きを加える。色調は, 内面が黒色, 外面が暗灰色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。1228は底部破片で, 底径は4.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がり, 外底面には形骸化した高台が付く。内面にはナデ調整を施し, 外面には指

頭圧痕が残る。また、体部内面にはヨコ方向のヘラ磨き、内底面には平行線状のヘラ磨きを加え、体部外面下半にもヘラ磨きの痕跡が残る。色調は内外面とも暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1229は小皿の口縁部破片で、口径8.2cmを測る。体部は斜め上方に短く内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。内底面にはナデ調整、口縁部内外面にはヨコナデ調整を施し、外底面には指頭圧痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1230は皿の口縁部破片で、口径10.2cmを測る。体部は斜め上方に短く内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。内底面にはナデ調整、口縁部内外面にはヨコナデ調整を施し、底部内外面には指頭圧痕が残る。また、口縁部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを加える。色調は内外面とも暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

東播系須恵器 (Fig.31-1231)

1231は片口鉢の口縁部破片で、口径24.2cmを測る。体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がる。口

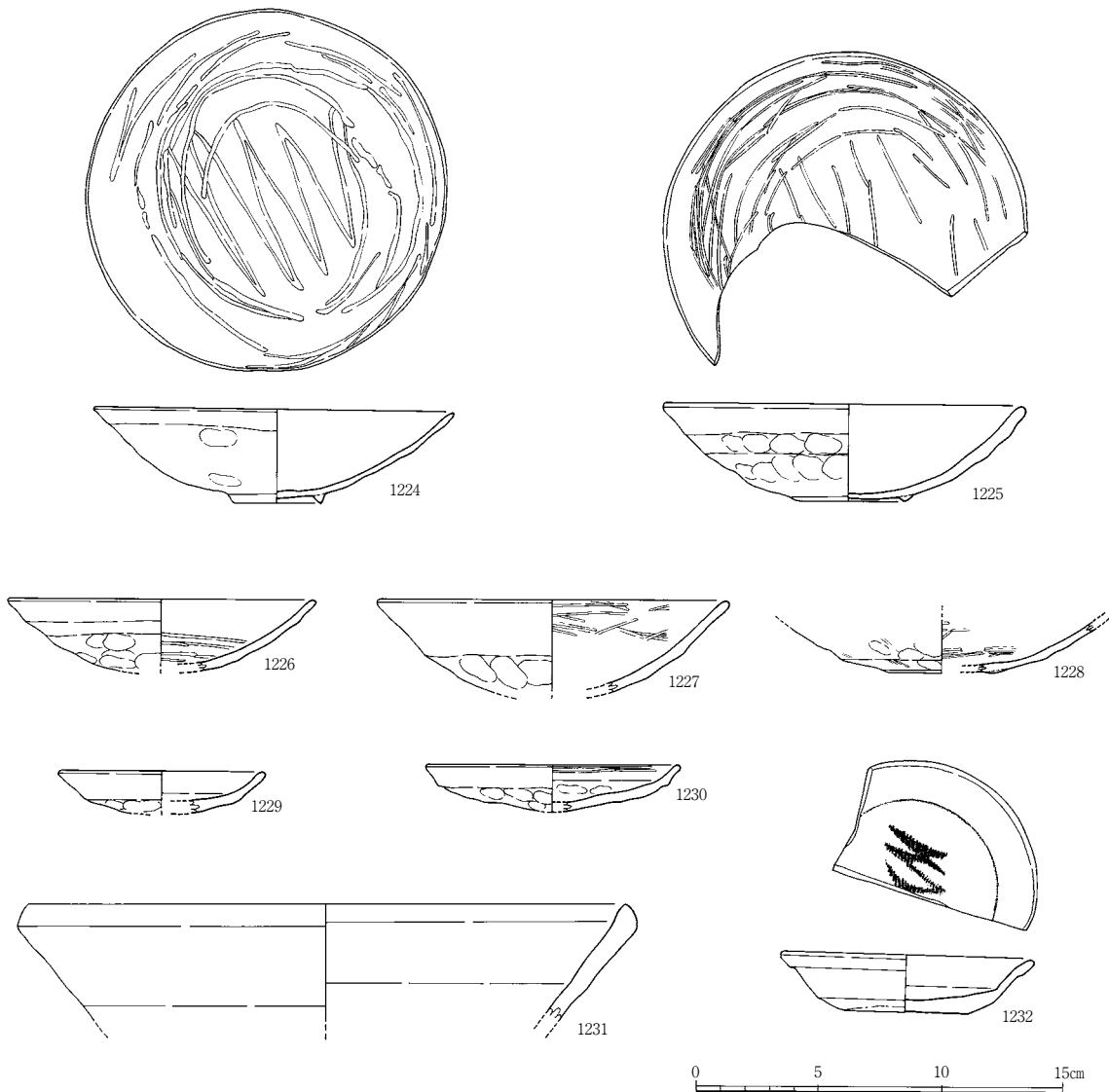


Fig.31 SK-112出土遺物実測図5

2. 調査区の概要 (1)A区

縁部はやや肥厚し、端部を上方へ拡張する。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

青磁 (Fig.31-1232)

1232は皿で、口径10.0cm、器高2.4cm、底径5.0cmを測る。口縁部は体部から屈曲して外反し、端部を丸く仕上げる。体部外面下半から外底面にかけては回転ヘラ削りが施される。器面には灰オリーブ色の釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。

SK-113

調査区中央部北側で検出された隅丸方形とみられる土坑で、SK-112の北側に位置する。東側をSD-156・167に切られていたため、長辺は不明であるが、短辺0.88m、深さ6cmを測り、長軸方向はN-60°-Wを示す。断面は台形状を呈する。埋土は灰オリーブ色粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-114

調査区中央部北側で検出された楕円形とみられる土坑で、SK-112の東側に位置する。東側をSD-154、西側をSD-156に切られていたため規模は不明であるが、深さは0.40mを測る。埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片11点、瓦器片2点がみられ、土師質土器3点(1233~1235)、瓦器1点(1236)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.32-1233~1235)

すべて杯である。1233は口径15.4cm、底径9.4cmを測る。体部は斜め上方にはほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、外面は摩耗が著しく調整は不明であるが、底部から体部にかけての内面は回転ナデ調整の痕が残る。外底面は摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明である。色調は、内面が橙色、外面が黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1234・1235は底部破片である。1234は底径6.4cmを測り、体部はほぼ真直ぐ立ち上がる。成形はロクロ水挽成形、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1235は底径6.8cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がる。成形はロクロ水挽成形とみられるが、外底面は摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。

瓦器 (Fig.32-1236)

1236は椀で、口径14.8cm、器高4.2cm、底径3.2cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。外底面には断面三角形の高台が付く。内面底部から体部にかけてはナデ調整、口縁

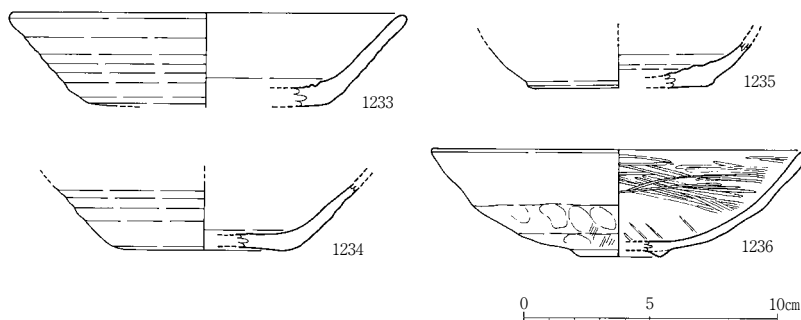


Fig.32 SK-114出土遺物実測図

部外面はヨコナデ調整を施し、体部下半には指頭圧痕が残る。また、体部内面には円圈状のヘラ磨き、内底面には平行線状のヘラ磨きを加える。色調は内外面とも暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SK-115

調査区東部北側で検出された長楕円形とみられる土坑で、SD-153の北側に位置する。南側をSD-153に切られていたため、短辺は不明であるが、長辺は1.42m、深さ6cmを測り、長軸方向はN-69°-Wを示す。断面は台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-116

調査区東部北側で検出された土坑で、SD-153の北側に位置する。北側をSD-112、南側をSD-153に切られていたため、長辺、短辺は不明である。深さは9cmで、断面は舟底状を呈するとみられ、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。出土遺物には土師器片1点、土師質土器片14点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

b. 溝跡

SD-102

調査区西部で検出した東西溝である。調査区外に北の肩があるため幅は不明であるが、深さは0.20mで、約3.10mを検出した。主軸方向はN-84°-Wを示す。断面は舟底状を呈するとみられ、埋土は黒褐色シルトにマンガン粒、炭化物を多く含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SD-103

調査区西部で検出した東西溝である。幅0.34~0.60m、深さは7cmで、約5.80mを検出した。主軸方向はN-85°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は黒褐色シルトにマンガン粒、炭化物を多く含むものであった。出土遺物には縄文土器片1点、弥生土器片1点、土師質土器片73点、瓦器片1点、東播系須恵器片1点がみられ、土師質土器1点(1237)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.34-1237)

1237は杯の底部破片で、底径7.0cmを測り、体部は内湾して立ち上がると考えられる。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-104

調査区西部で検出した東西溝である。幅0.36~0.48m、深さは15cmで、約2.10mを検出した。主軸方向はN-51°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は黒褐色シルトにマンガン粒、炭化物を多く含むものであった。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-105 (Fig.33)

調査区西部で検出した東西溝である。幅1.20~1.50m、深さは0.38mで、約2.90mを検出した。主軸方向はN-56°-Eで、断面は舟底状を呈する。埋土は3層に分層され上層からオリーブ褐色砂質シルト、暗オリーブ褐色砂質シルト、黒褐色砂質シルトであった。出土遺物には須恵器片3点、土師

2. 調査区の概要 (1)A区

質土器片70点, 瓦器片11点, 石製品1点がみられ, 土師質土器1点(1238), 石製品1点(1239)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.34-1238)

1238は杯の底部破片で, 底径8.0cmを測り, 体部は内湾して立ち上がるとみられる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。器面は外

底面を中心に摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面ともに濃い黄橙色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。

石製品 (Fig.34-1239)

1239は叩石で, 全長11.7cm, 全幅10.4cm, 全厚3.4cm, 重量598.0gを測る。石材は砂岩で, 中央部と側面に敲打痕が残る。

SD-106

調査区西部で検出した東西溝である。北の肩が調査区外にあるため幅は不明であるが, 深さは0.27~0.37mで, 約8.70mを検出した。主軸方向はN-82°-Eである。断面は台形状を呈するとみられ, 埋土は黒褐色シルトにマンガン粒, 炭化物を多く含むものであった。出土遺物には

縄文土器片4点, 弥生土器片3点, 土師質土器片256点, 瓦器片15点, 東播系須恵器片4点, 備前焼片1点, 白磁片1点, 青磁片8点がみられ, 土師質土器7点(1240~1246), 瓦器1点(1247), 東播系須恵器2点(1248・1249), 備前焼1点(1250), 白磁1点(1251), 青磁4点(1252~1255)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.35-1240~1246)

1240~1245は杯である。1240は口縁部破片で, 口径13.4cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐ立ち上がり, 端部を丸く仕上げる。調整は全体的に摩耗が著しく不明である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1241~1245は底部破片である。1241は底径6.4cmを測り, 体部は外反して立ち上がる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1242~1245は体部がほぼ真直ぐ立ち上がるとみられるものであ

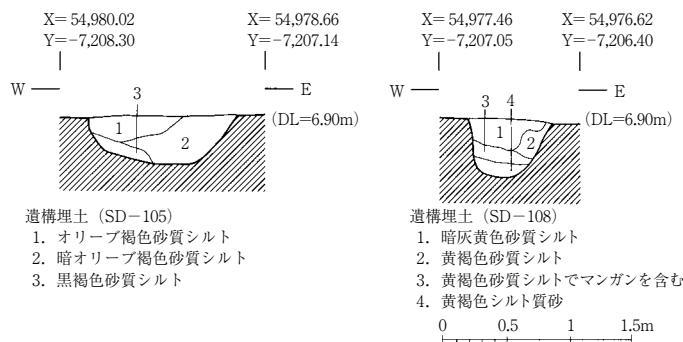


Fig.33 SD-105・108

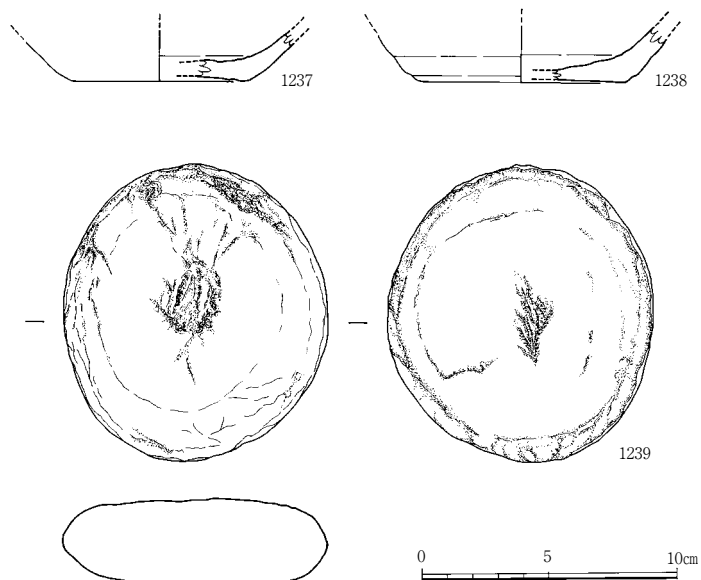


Fig.34 SD-103・105出土遺物実測図

る。1242は底径5.8cmを測り、成形はロクロ水挽成形、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1243は底径6.0cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は摩耗するが、底部の切り離しは断面形態から回転ヘラ切りとみられる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1244は底径6.8cmを測り、器面は著しく摩耗し、調整は不明であるが、底部の切り離しは断面形態から回転糸切りとみられる。色調は内外面ともいび橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。1245は底径7.8cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。調整は摩耗が著しく不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。

1246は小皿で、口径7.0cm、器高1.8cm、底径4.8cmを測る。口縁部は斜め上方に短く外傾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色、にいび橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

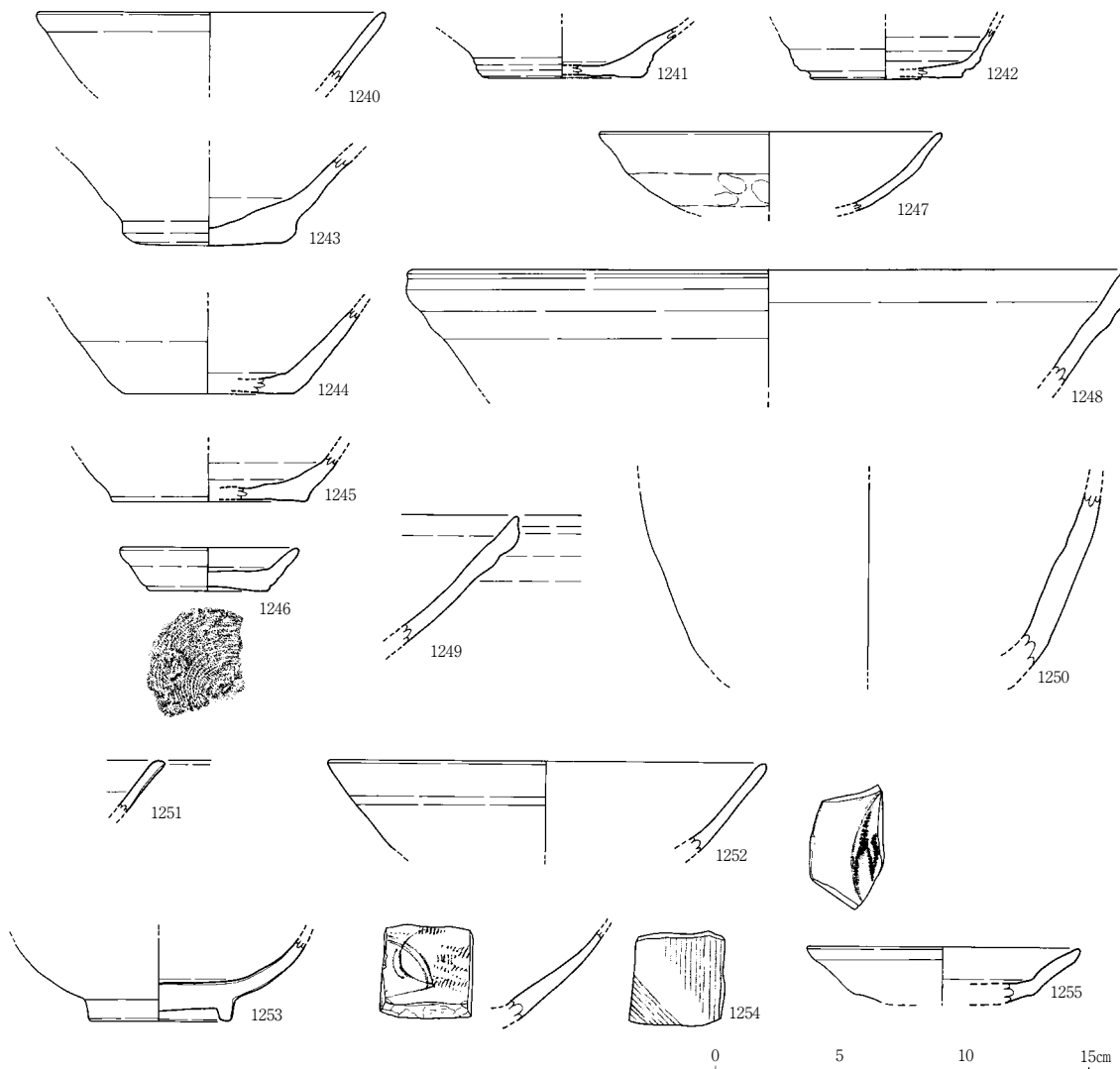


Fig.35 SD-106出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1)A区

瓦器 (Fig.35-1247)

1247は碗の口縁部破片で、口径13.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。調整は全体的に摩耗が著しく不明瞭であるが、体部外面下半に指頭圧痕が残る。色調は、内面が黄褐色、外面が灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

東播系須恵器 (Fig.35-1248・1249)

2点とも片口鉢の口縁部破片である。1248は口径28.6cmを測り、体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁部は肥厚され、端部を上方へ拡張する。器面には回転ナデ調整を施し、体部内面には回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。色調は、内面が灰白色、外面が灰白色ないし灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1249は体部がほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁部は肥厚され、上方へ拡張される。器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面が灰白色ないし黄灰色、外面が灰白色ないし灰色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。

備前焼 (Fig.35-1250)

1250は壺の体部破片で、調整は外面がナデ調整、内面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は黒色砂粒を含み、焼成は良好である。

白磁 (Fig.35-1251)

1251は碗の口縁部破片で、口縁端部を短く摘み出す。内面に1条の沈線を有し、器面には灰オリブ色釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。

青磁 (Fig.35-1252~1255)

1252~1254は碗である。1252は口縁部破片で、口径17.4cmを測る。体部はほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面は摩耗するが、灰オリブ色釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。1253は底部破片で、底径5.4cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、外底面には断面四角形の高台を削り出す。器面にオリブ黄色釉を施し、畳付から高台内は露胎である。胎土は精良で、焼成も良好である。1254は体部破片で、やや内湾気味に立ち上がる。外面には細かい櫛目、内面にはジグザグ状の櫛描文とヘラ状工具による片彫りを施す。器面には灰オリブ色の釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。

1255は皿の口縁部破片で、口径10.8cmを測る。口縁部は体部から屈曲してのび、端部を細く仕上げる。見込にはジグザグ状の櫛描文を施す。器面にはオリブ灰色釉を施し、外底面は釉ハギする。胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-107

SD-106の底面で検出した東西溝で、約4.90mを検出したが、SD-106に大部分を切られており、詳細は不明である。主軸方向はN-79°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は黒褐色シルトにマンガング粒、炭化物を含むものであった。出土遺物には縄文土器片1点、土師質土器片7点、瓦器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-108 (Fig.33)

調査区西部で検出した東西溝である。幅0.50~0.56m、深さ0.38~0.45mで、約2.90mを検出した。主軸方向はN-55°-Eである。断面はU字状を呈し、埋土は1層が暗灰黄色砂質シルト、2層が黄褐

色砂質シルト, 3層が黄褐色砂質シルトでマンガンを含み, 4層が黄褐色シルト質砂であった。出土遺物は土師器片2点, 土師質土器片51点, 瓦器片2点がみられ, 土師質土器5点(1256~1260)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.36-1256~1260)

1256~1259は杯である。1256は口径13.4cm, 器高4.0cm, 底径7.3cmを測る。外底面はやや窪み, 体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクろ水挽成形で, 器面には回転ナデ調整を施すが, 内底面は摩耗する。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は, 内面がにぶい橙色, 黄橙色ないし褐灰色, 外面がにぶい橙色ないし灰色を呈し, 胎土には砂粒を多く含み, 焼成は良好である。1257は口径13.9cm, 器高4.0cm, 底径7.5cmを測る。外底面は窪み, 体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁部を外反させ, 端部を細く仕上げる。成形はロクろ水挽成形で, 体部外面には回転ナデ調整を施すが, 内面は摩耗する。底部の切り離しは回転糸切りで, 板状圧痕が残る。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し, 胎土には砂粒を多く含むが, 焼成は良好である。1258は口縁部破片で, 口径14.8cmを測る。体部は内湾して立ち上がり, 口縁部は外反し, 端部は内傾する平面をなす。成形はロクろ水挽成形とみられる。内面は摩耗するが, 外面には回転ナデ調整の痕が残る。色調は, 内面が浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1259は底部破片で, 底径7.1cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクろ成形で, 器面には回転ナデ調整を施し, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

1260は小皿で, 口径7.0cm, 器高1.3cm, 底径4.8cmを測る。口縁部は斜め上方に短く立ち上がり, 端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

SD-109

調査区西部で検出した南北溝である。幅0.26~0.40m, 深さは4~10cmで, 約7.60mを検出した。主軸方向はN-9°-Eである。断面は舟底状を呈し, 埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒, 炭化物を多く含むものであった。出土遺物は皆無であった。

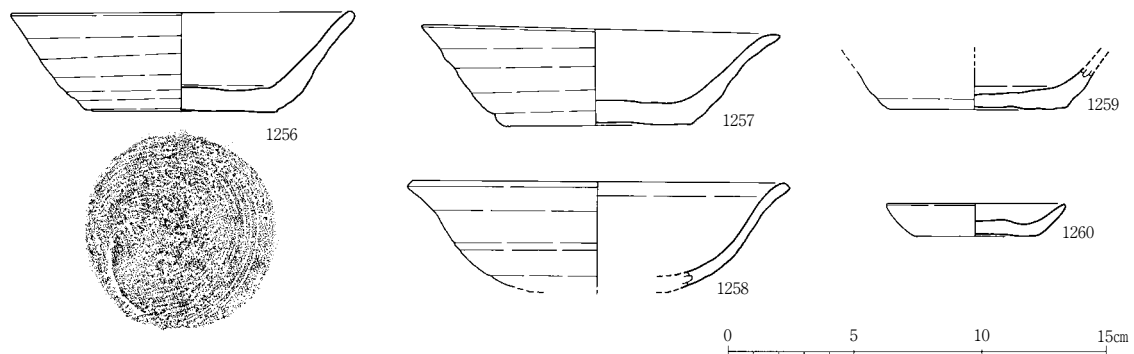


Fig.36 SD-108出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1)A区

SD-110

調査区西部で検出した東西溝である。西の肩をSD-104に切られていたため幅は不明であるが、深さは9~11cmで、約2.90mを検出した。主軸方向はN-69°-Eである。断面は台形状を呈するとみられ、埋土は暗灰黄色シルトに黄褐色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片12点、瓦器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-111

調査区西部で検出した東西溝で、SK-105の北側に位置する。幅0.46~0.64m、深さは0.28~0.33mで、約3.50mを検出した。主軸方向はN-82°-Eである。断面はU字状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒、炭化物を多く含むものであった。出土遺物には縄文土器片2点、弥生土器片3点、須恵器片2点、土師質土器片78点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-112 (Fig.37)

調査区西部から東部にかけて検出した屋敷を区画するとみられる溝である。調査区西部では調査区を南北に縦断し、調査区北側で向きを東方向に変え、調査区を横断して調査区外へさらにのびる。幅1.98~3.16m、深さは0.19~0.37mで、約59.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は基本的に黄灰色粘土質シルトに炭化物、木片を含むもので、溝の西側では黄灰色粘土質シルトの下層に黄灰色粘土質シルトに炭化物、木片を多量に含む層が確認された。出土遺物は

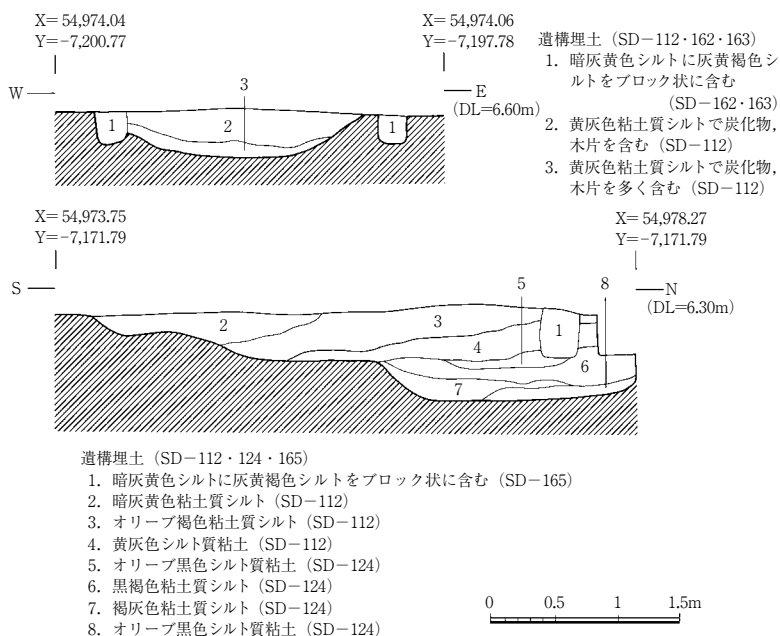


Fig.37 SD-112・124・162・163・165

縄文土器片1点、弥生土器片6点、土師器片5点、須恵器片15点、土師質土器片1,399点、瓦器片19点、瓦質土器片2点、備前焼片4点、白磁片7点、青磁片9点、石製品1点がみられ、土師質土器22点(1261~1282)、瓦器2点(1283・1284)、瓦質土器1点(1285)、備前焼1点(1286)、青磁3点(1287~1289)、石製品1点(1290)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.38・39-1261~1282)

1261~1277は杯である。1261は口径10.6cm、器高3.8cm、底径6.6cmを測る。外底面はほぼ平らで、体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクろ水挽成形とみられ、器面は著しく摩耗し底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1262は口径13.2cm、器高3.9cm、底径6.8cmを測る。外底面は

やや窪み、体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は細く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が橙色、にぶい橙色、灰白色、外面が橙色、灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1263は底部から体部にかけての破片で、底径6.4cmを測る。円盤状の高台を有し、体部は内湾気味に立ち上がる。成形はロクロ水挽成形とみられ、器面は著しく摩耗し底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1264～1268は体部から口縁部の破片で、1264・1265は内湾気味に立ち上がるものである。1264は口径13.8cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし暗灰色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1265は口径14.2cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

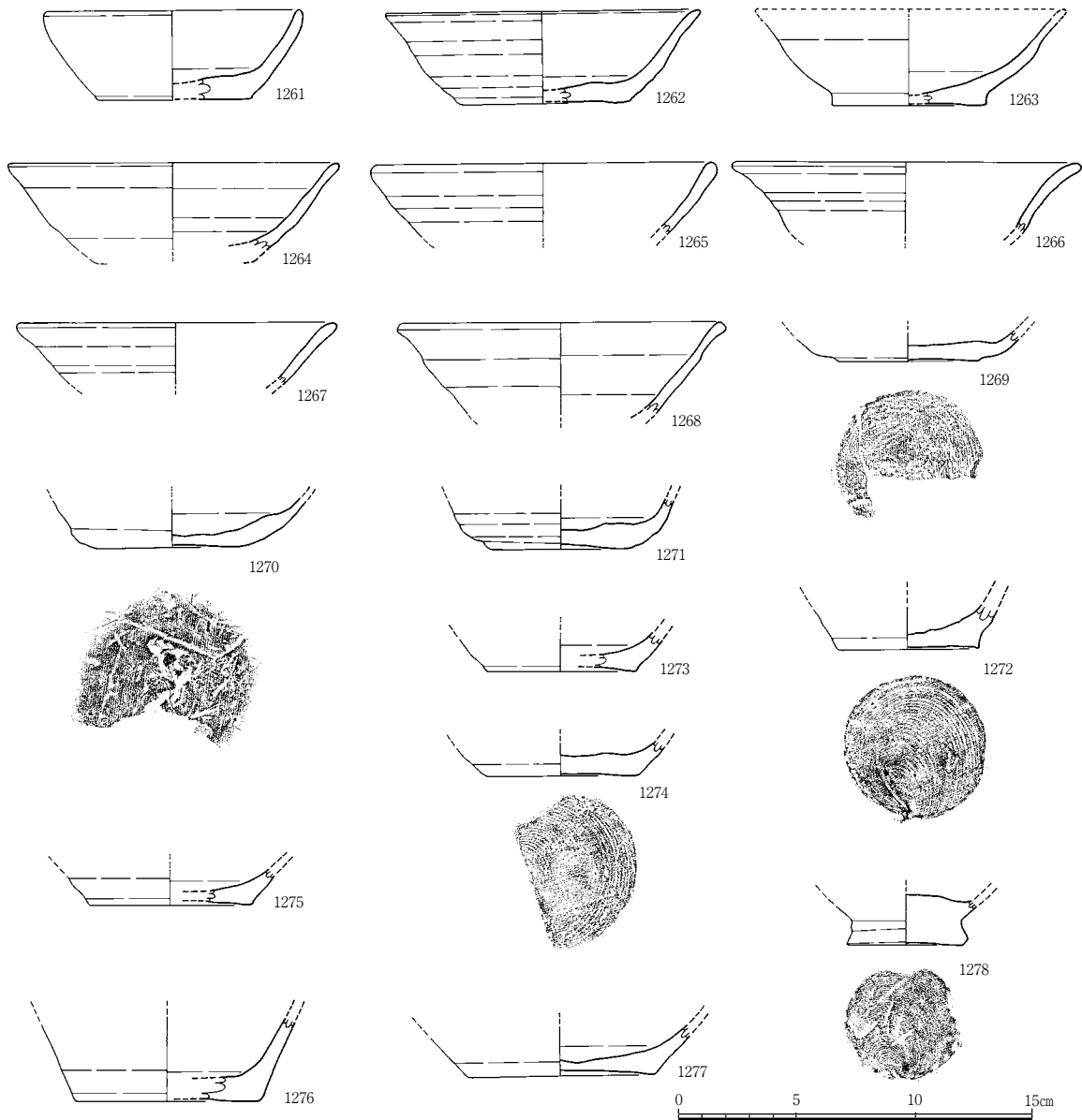


Fig.38 SD-112出土遺物実測図1

2. 調査区の概要 (1)A区

1266は口径14.4cmを測り、口縁部は外反して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面が灰黄色、外面が浅黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1267・1268はほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1267は口径13.3cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面にぶい橙色、外面が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1268は口径13.5cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面が灰白色、外面が灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1269～1277は底部から体部にかけての破片で、成形は1269～1272・1277が粘土紐巻き上げロクロ成形とみられるが、他は不明瞭である。1269・1270は体部が内湾して立ち上がるものである。1269は底径5.9cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色、浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1270は底径6.2cmを測り、歪みが大きい。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1271～1277は体部がほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1271は底径5.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。外底面は摩耗が著しく全く痕跡を留めないが、断面形態から底部の切り離しは回転糸切りとみられる。色調は、内面にぶい橙色、にぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成はやや不良である。1272は底径6.0cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面にぶい橙色、灰白色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1273は底径6.4cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1274は底径6.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1275は底径6.8cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1276は底径7.8cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1277は底径7.9cmを測り、調整は回転ナデ調整である。外底面は摩耗するが、断面形態から底部の切り離しは回転糸切りとみられる。色調は内外面ともぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1278は柱状高台の杯で底径4.9cmを測る。成形はロクロ水挽成形とみられ、内底面は摩耗が著しいが、外面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1279～1282は小皿で、すべて口縁部がほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1279は口径6.6cm、器高1.6cm、底径3.4cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1280は口径7.3cm、器高1.7cm、底径4.7cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面ともぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1281は口径7.8cm、器高1.4cm、底径5.4cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面にぶい橙色ないしにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色ないし褐灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好

である。1282は口径7.8cm，器高1.7cm，底径6.0cmを測り，器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りで，板状圧痕が残る。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土は精良であるが，焼成はやや不良である。

瓦器 (Fig.39-1283・1284)

2点とも椀である。1283は口径14.2cm，器高3.7cm，底径3.4cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり，口縁端部を丸く仕上げる。外底面には形骸化した高台が付く。体部から底部にはナデ調整，口縁部外面はヨコナデ調整を施し，体部下半には指頭圧痕が残る。また，内底面には平行線状のヘラ磨き，体部内面には円圈状のヘラ磨きを施す。色調は，内外面とも灰白色ないし暗灰色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。1284は口縁部破片で，口径13.6cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり，口縁端部を丸く仕上げる。全体的に摩耗が著しいが，体部外面下半には指頭圧痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し，胎土には砂粒を含むが，焼成は良好である。

瓦質土器 (Fig.39-1285)

1285は片口鉢の口縁部破片で，口径22.8cmを測る。体部はほぼ真直ぐ立ち上がり，口縁部は外傾

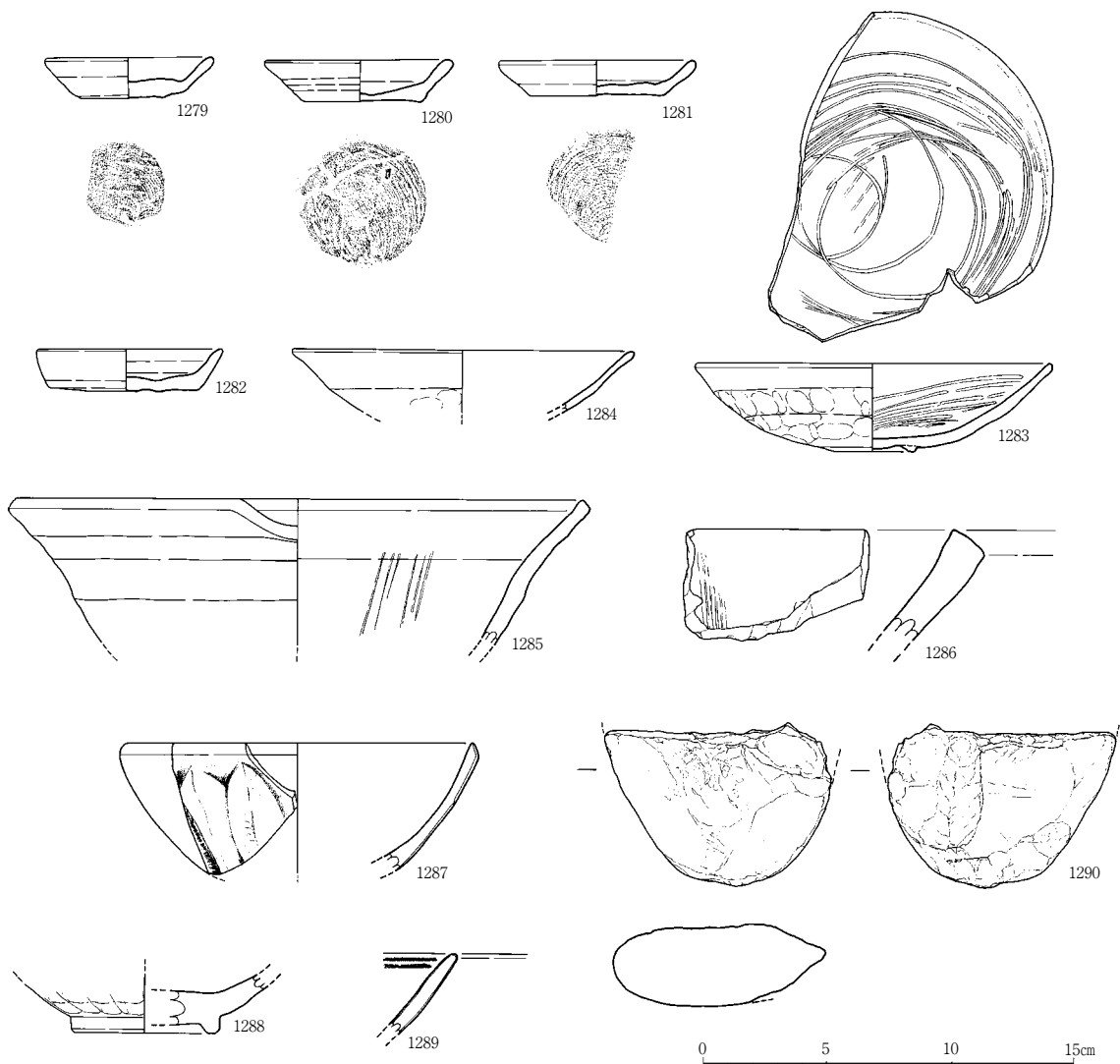


Fig.39 SD-112出土遺物実測図2

2. 調査区の概要 (1)A区

し、端部は内傾する平面をなす。内面にはヨコナデ調整、外面には粗いナデ調整を施す。また、体部内面には条線が残る。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

備前焼 (Fig.39-1286)

1286は播鉢の口縁部破片で、口縁端部は内傾する平面をなす。調整は内外面とも回転ナデ調整で、内面に条線が認められるが、単位は不明である。色調は内外面とも褐灰色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。

青磁 (Fig.39-1287~1289)

3点とも碗である。1287は口縁部破片で、口径14.0cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は細く仕上げる。体部外面に鎬蓮弁文を片彫りする。器面には灰オリーブ色の釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。1288は底部から体部にかけての破片で、底径5.7cmを測る。体部外面には鎬蓮弁文が認められる。外底面には断面四角形の高台を削り出す。器面には灰オリーブ色釉を施すが、高台内及び畳付は露胎である。胎土は精良で、焼成も良好である。1289は口縁部破片で、口縁端部を丸く仕上げる。口縁端部内面には2条の沈線を片彫りし、器面には明緑灰色釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。

石製品 (Fig.39-1290)

1290は叩石で、残存長6.5cm、残存幅9.2cm、残存厚3.3cm、残存重量215.0gを測る。石材は砂岩である。大部分が欠損しており、中央部のみ敲打痕が残る。

SD-113

調査区西部で検出した東西溝で、SD-115の西側に位置する。幅12~24cm、深さ3~7cmで、約3.80mを検出した。主軸方向はN-87°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片127点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-114

調査区西部で検出した南北溝で、SD-115の西側に位置する。幅14~18cm、深さは4~6cmで、約3.60mを検出した。主軸方向はN-15°-Eである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD-115 (Fig.40)

調査区西部で検出した南北溝で、SD-117の西側に位置する。幅2.44~3.18m、深さは0.28~0.31mで、約13.90mを検出した。主軸方向はN-5°-Eである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトにマンガング粒、炭化物を含むものであった。出土遺物には弥生土器片2点、須恵器片3点、土師質土器

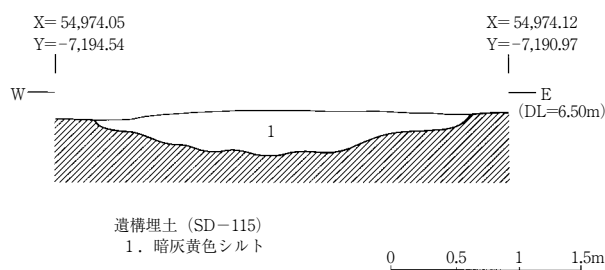


Fig.40 SD-115

片430点、黒色土器片1点、瓦器片7点、白磁片2点、青磁片2点がみられ、土師質土器10点(1291~1300)、黒色土器1点(1301)、瓦器1点(1302)、青磁1点(1303)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.41-1291~1300)

1291は碗の底部破片で、底径6.0cmを測る。外底面にはしっかりした断面四角形の高台をハの字状に貼り付ける。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1292~1300は杯である。1292は口径12.8cm, 器高4.2cm, 底径7.2cmを測る。口縁部はやや外反して立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。器面は著しく摩耗し底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成はやや不良である。1293は口径13.0cm, 器高3.8cm, 底径7.6cmを測る。口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁端部は細く仕上げる。器面は著しく摩耗し底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良であるが, 焼成は不良である。1294は口縁部破片で, 口径13.2cmを測る。口縁部は外上方を向く体部から外傾し, 口縁端部を細く仕上げる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成はやや不良である。1295~1300は底部から体部にかけての破片で, 1295・1296は体部が内湾して立ち上がるものである。1295は底径7.3cmを測り, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面が摩耗しており調整は不明であるが, 外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し, 胎土には砂粒を含むが, 焼成は良好である。1296は底径8.6cmを測り, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調

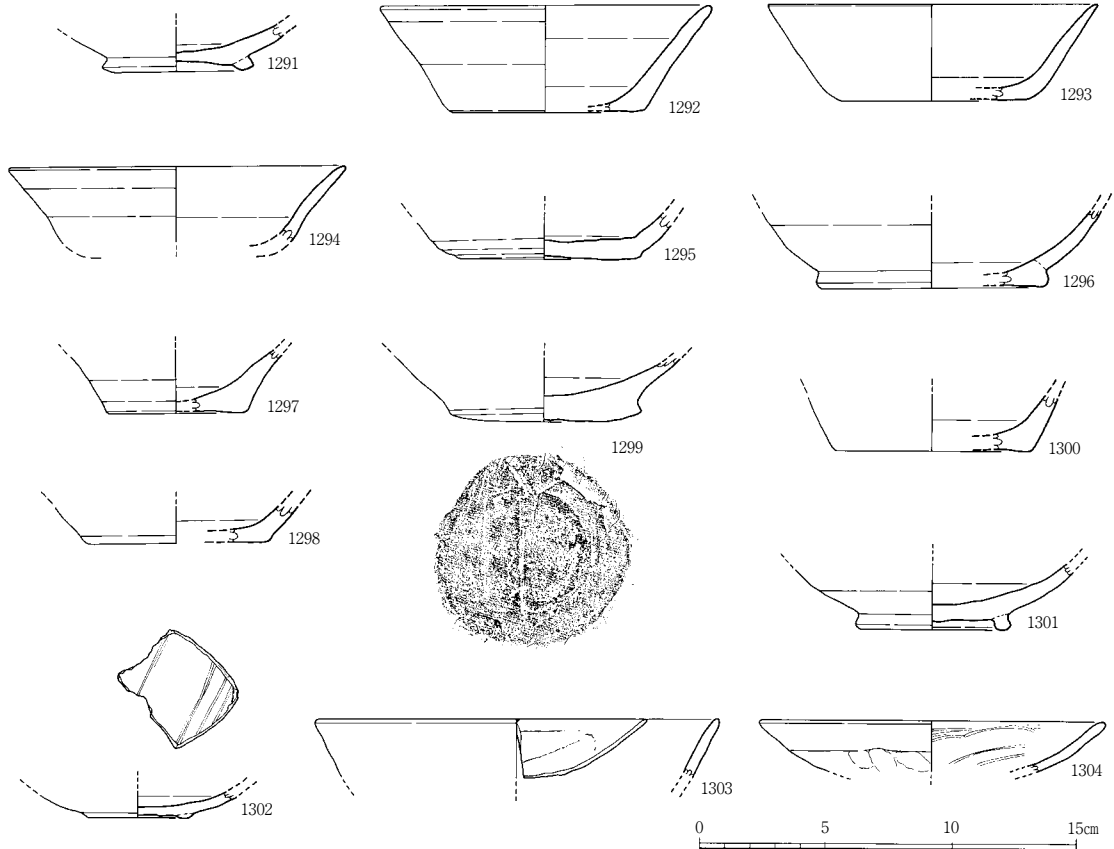


Fig.41 SD-115・122出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1)A区

は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1297は底径5.4cmを測り、体部は外傾する。成形はロクロ水挽成形とみられる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも黄橙色ないし橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1298～1300は体部がほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1298は底径7.2cmを測り器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。1299は底径7.5cmを測り、焼成時の歪みがみられる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面が摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1300は底径7.8cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は不良である。

黒色土器 (Fig.41-1301)

1301は碗の底部破片で、底径5.8cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、外底面には断面四角形の高台が付く。調整は全体的に摩耗が著しく不明であるが、高台内には高台貼り付け時の指ナデの痕が残る。色調は、内面が黒色、外面がオリーブ黒色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

瓦器 (Fig.41-1302)

1302は碗の底部破片で、底径4.0cmを測る。外底面には形骸化した断面逆台形の高台が付く。調整は内面がナデ調整で、外面は摩耗が著しく不明である。また、内面にはヘラ磨きを施す。色調は、内面が暗灰色、外面が灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

青磁 (Fig.41-1303)

1303は碗の口縁部破片で、口径15.8cmを測る。口縁端部を丸く仕上げる。口縁部内面にヨコ方向の沈線、体部内面には草花文を片彫りしているとみられる。器面にはオリーブ灰色の釉を施し、胎土は精良で、焼成は良好である。

SD-116

調査区中央部で検出した東西溝で、SD-118の北側に位置する。幅0.28～0.38m、深さは4～7cmで、約2.70mを検出した。主軸方向はN-80°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD-117

調査区中央部で検出した南北溝で、SD-115の東側に位置する。幅0.28～0.52m、深さは5～10cmで、約5.40mを検出した。主軸方向はN-1°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-118

調査区中央部で検出した東西溝で、SD-117の東側に位置する。幅0.18～0.38m、深さは8～13cmで、約16.00mを検出した。主軸方向はN-84°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器片8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-119

調査区中央部で検出した東西溝で、SD-118の南側に位置する。幅0.26～0.34m、深さは5～7cm

で、約16.00mを検出した。主軸方向はN-84°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-120

調査区中央部で検出した東西溝で、SD-119の南側に位置する。幅0.82~1.46m、深さは8~13cmで、約8.50mを検出した。主軸方向はN-86°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器片22点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-121

調査区中央部で検出した溝で、SD-120の南側に位置する。幅は0.28~0.42m、深さは13~16cmで、約3.50mを検出した。南側は調査区外へ続く。主軸方向はN-63°-Eである。断面はU字状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD-122 (Fig.42)

調査区中央部で検出した南北溝で、SD-112を切っており、SD-118の北側に位置する。幅1.88~2.06m、深さは0.27mで、約3.30mを検出した。北側は調査区外へ続く。主軸方向はN-9°-Eである。断面はU字状を呈し、埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を多く含むものであった。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片177点、瓦器片2点、備前焼片1点、青磁片1点がみられ、瓦器1点(1304)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.41-1304)

1304は椀の口縁部破片で、口径13.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。内面にはナデ調整、口縁部外面にはヨコナデ調整を施す。体部外面下半には指頭圧痕が残る。また、体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

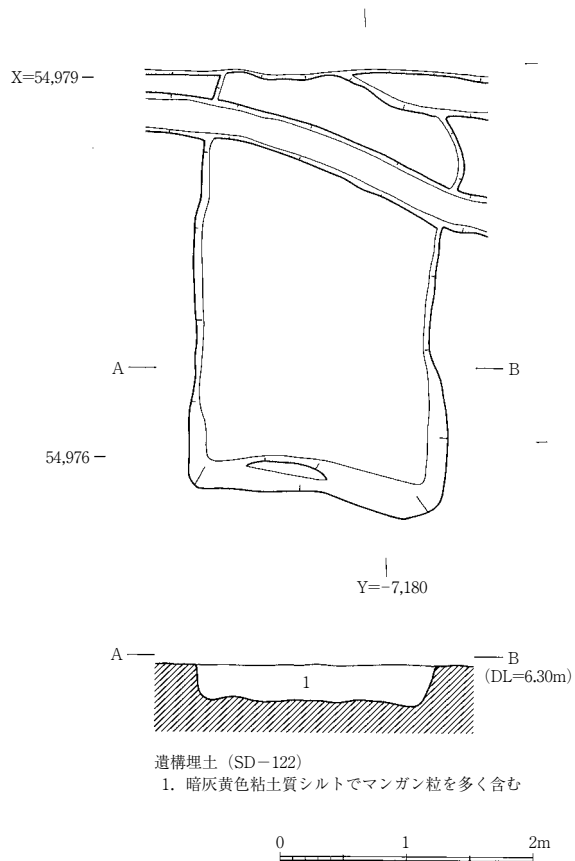


Fig.42 SD-122

SD-123

調査区中央部で検出した南北溝で、SD-112を切っており、SD-122の東側に位置する。幅0.24~0.34m、深さは7~9cmで、約0.80mを検出した。北側は調査区外へ続く。主軸方向はN-23°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物

2. 調査区の概要 (1)A区

は皆無であった。

SD-124 (Fig.37)

調査区東部で検出した東西溝である。SD-112の底面で検出された溝で、北肩は調査区外にあり、詳細は不明であるが、約15.10mを検出した。断面は舟底状を呈するとみられ、埋土は1層がオリーブ黒色シルト質粘土、2層が黒褐色粘土質シルト、3層が褐灰色粘土質シルト、4層がオリーブ黒色シルト質粘土であった。出土遺物は縄文土器片1点、土師器片1点、土師質土器片772点、瓦器片5点、東播系須恵器片1点、白磁片3点、青磁片3点がみられ、土師質土器27点(1305~1331)、瓦器2点(1332・1333)、東播系須恵器1点(1334)、白磁2点(1335・1336)、青磁2点(1337・1338)、木製品2点(1339・1340)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.43・44-1305~1331)

1305~1322は杯である。1305は口径11.7cm、器高4.1cm、底径7.4cmを測る。外底面はやや窪み、口縁部はやや内湾して立ち上がり、端部を細く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、内底面は摩耗が著しく調整は不明であるが、他の器面には回転ナデ調整の痕が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1306は口径13.5cm、器高3.9cm、底径7.4cmを測る。体部は外反して立ち上がり、口縁端部を細く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色、にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1307は口径13.6cm、器高4.2cm、底径7.4cmを測る。外底面はやや窪み、口縁部は外反して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、底部から体部にかけての内面は摩耗が著しく調整は不明であるが、体部外面には回転ナデ調整の痕が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が浅黄橙色ないし橙色、外面がにぶい橙色ないし橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1308は口径13.6cm、器高4.4cm、底径8.0cmを測る。外底面は窪み、体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げるが、焼成時の大きな歪みがみられる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1309は口径12.9cm、器高3.7cm、底径5.8cmを測る。外底面はやや窪み、体部は底部から内湾して立ち上がる。口縁部はほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。1310は口径13.7cm、器高4.6cm、底径7.6cmを測るが、焼成時の大きな歪みがみられる。外底面は大きく窪み、口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、調整は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内外面とも灰黄色ないしにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1311は口径13.7cm、器高4.2cm、底径7.2cmを測る。外底面は窪み、体部はほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁部は外傾し、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい橙色ないし灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。1312は口径14.2cm、器高4.3cm、底径6.9cm

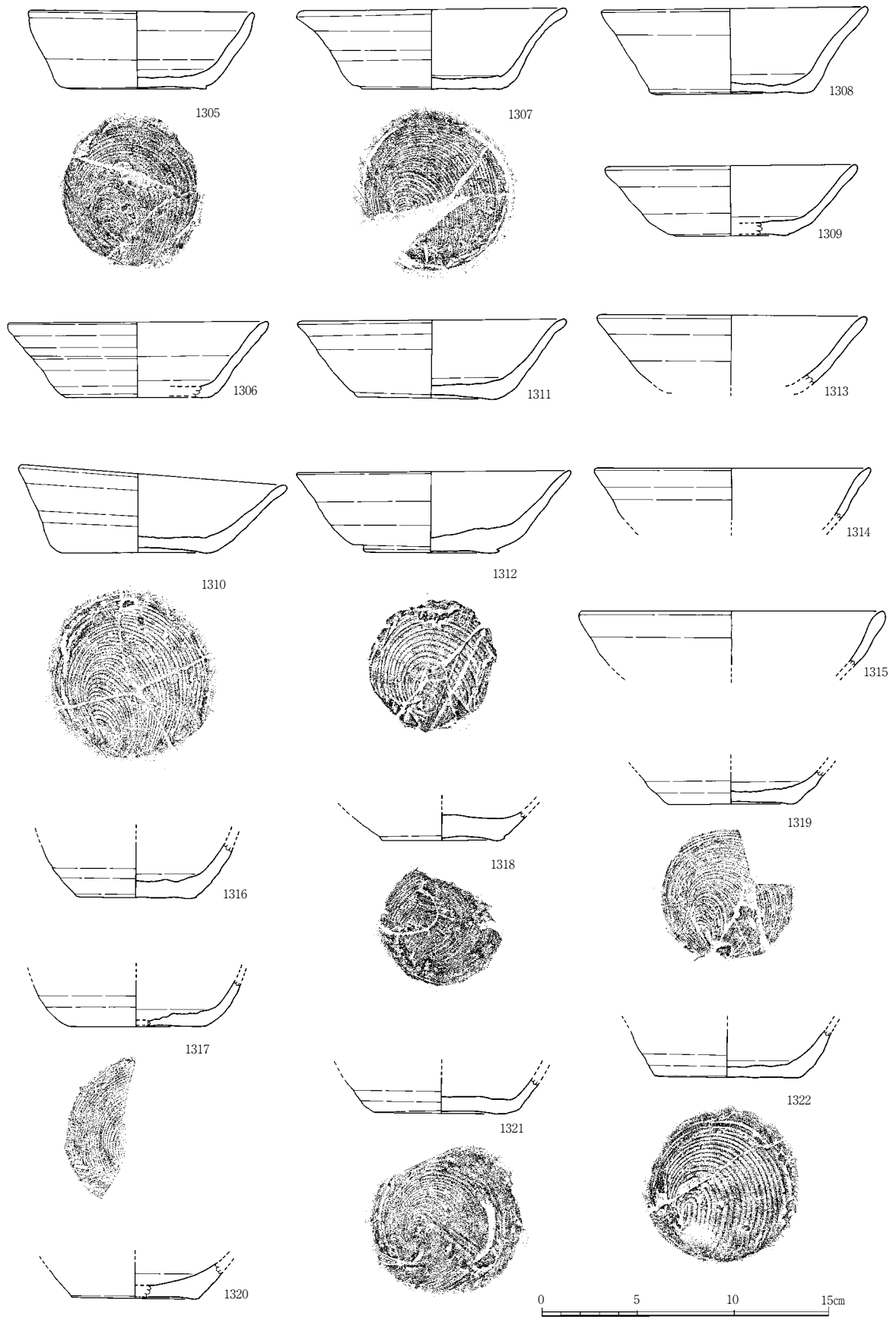


Fig.43 SD-124出土遺物実測図1

2. 調査区の概要 (1)A区

を測る。外底面はやや窪み、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部が外上方を向き、端部を細く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、調整は回転ナデ調整であり、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は、内面が灰黄色ないし灰色、外面が灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1313～1315は体部から口縁部の破片である。1313は口径14.0cmを測り、体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は外上方を向く。器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい橙色ないし橙色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。1314・1315は口縁部が斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1314は口径14.3cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が明褐灰色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1315は口径15.8cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1316～1322は口縁部が欠損するもので、1316・1317は口縁部が内湾して立ち上がるとみられるものである。成形は1316が粘土紐巻き上げロクロ成形、1317はロクロ水挽成形である。1316は底径6.4cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし灰色、外面がにぶい黄橙色ないし灰黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1317は底径7.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1318～1322は体部がほぼ真直ぐ立ち上がるものである。成形は1318が粘土紐巻き上げロクロ成形、1319～1322がロクロ水挽成形とみられる。1318は底径6.2cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともににぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1319は底径6.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が灰黄色ないし灰色、外面が灰白色ないし暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1320は底径6.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は、内面が灰白色、外面が灰白色ないし黒褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1321は底径6.9cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色ないしにぶい橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1322は底径7.6cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1323は柱状高台の杯とみられるもので、底径6.0cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、器面は摩耗が著しいが、断面形態から底部の切り離しは回転糸切りとみられる。色調は灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。

1324～1331は小皿で、すべて口縁部が短くほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1324は口径6.9cm、器高1.6cm、底径4.2cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面ともににぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1325は口径7.4cm、器高1.8cm、底径4.2cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面ともににぶい黄

橙色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。1326は口径7.4cm、器高1.4cm、底径5.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は、内面がにぶい橙色ないし橙色、外面が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1327は口径7.4cm、器高2.3cm、底径4.0cmを測り、歪みが大きい。調整は回転ナデ調整である。外底面は摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも灰黄色ないしにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1328は口径7.7cm、器高1.6cm、底径4.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。1329は口径7.8cm、器高1.3cm、底径4.2cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい橙色ないし橙色、外面

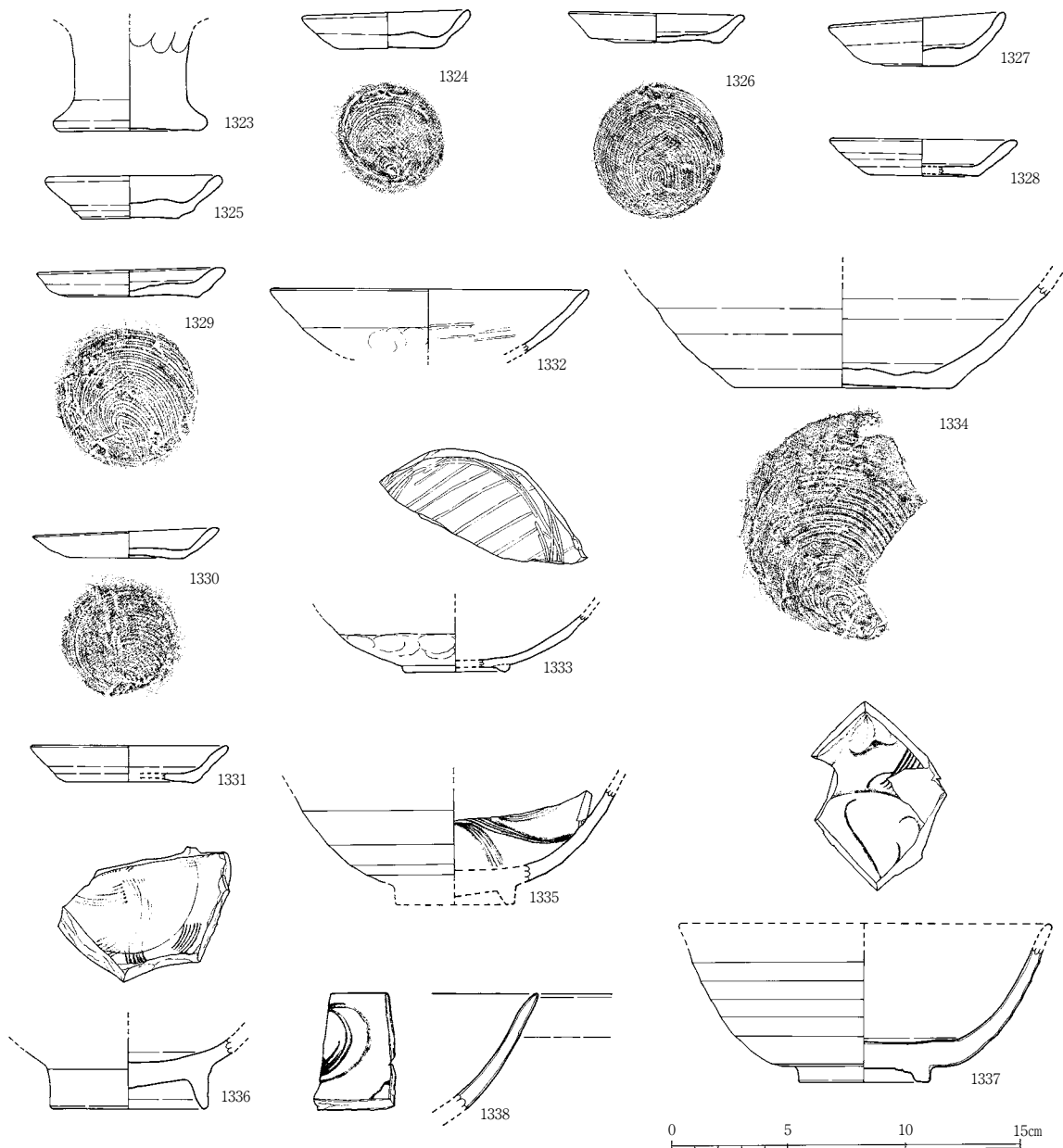


Fig.44 SD-124出土遺物実測図2

2. 調査区の概要 (1)A区

が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。1330は口径8.0cm、器高1.3cm、底径4.6cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、内底面にはナデ調整が観察される。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色ないし橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。1331は口径8.4cm、器高1.6cm、底径5.4cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし褐灰色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。また、内面には煤が付着しており、灯明皿として使用されていた可能性が考えられる。

瓦器 (Fig.44-1332・1333)

2点とも碗である。1332は口縁部破片で、口径13.4cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。体部内面にはナデ調整、口縁部にはヨコナデ調整を施し、体部外面下半には指頭圧痕が残る。また、体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は、内面が暗灰色ないし灰色、外面が灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1333は底部破片で、底径4.4cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、外底面には断面蒲鉾状高台が付く。内面にはナデ調整を施し、外面には指頭圧痕が残る。また、内底面に平行線状のヘラ磨き、体部内面下半には円圈状のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰色ないし灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

東播系須恵器 (Fig.44-1334)

1334は片口鉢の底部から体部にかけての破片で、底径9.2cmを測る。外底面は窪み、体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面にはナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

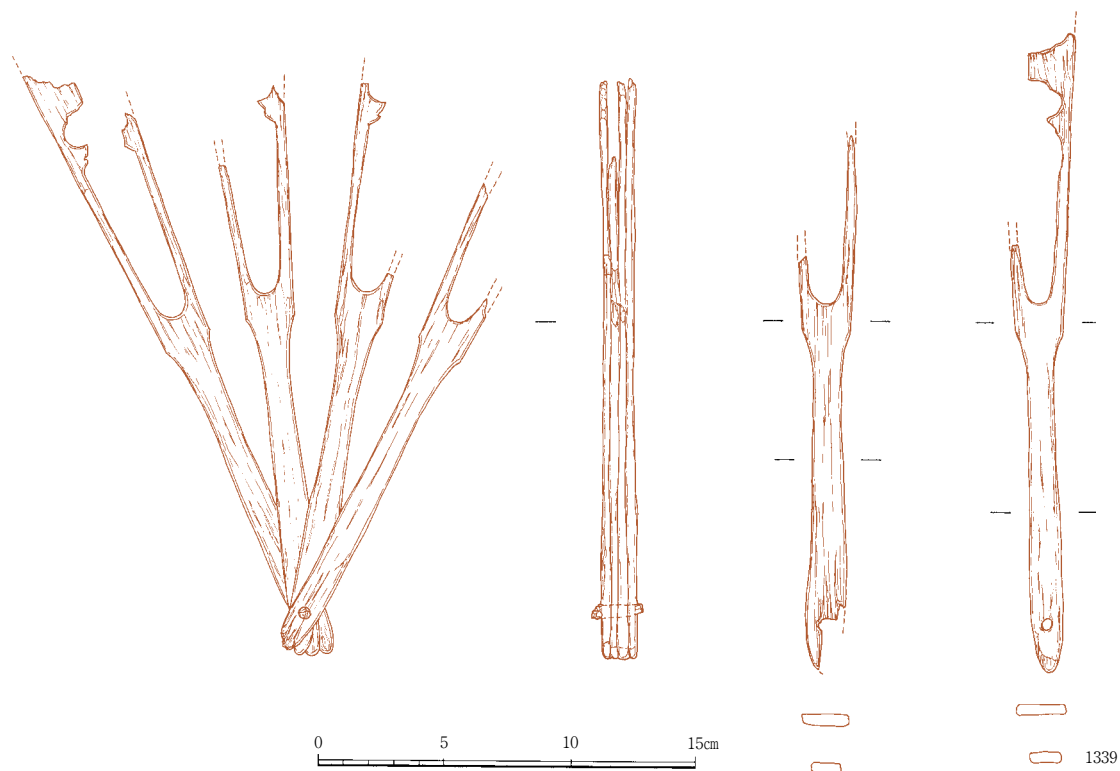


Fig.45 SD-124出土遺物実測図3

白磁 (Fig.44-1335・1336)

2点とも碗である。1335は体部破片で、内湾しながら立ち上がる。内面には櫛描文がみられ、器面にはオリーブ灰色の釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。1336は底部破片で、底径6.6cmを測る。外底面には細く高い高台を削り出す。見込には櫛描文を施す。器面には灰白色の釉を施釉し、胎土は精良で、焼成も良好である。

青磁 (Fig.44-1337・1338)

2点とも碗である。1337は底径5.4cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、外底面には断面四角形の高台を削り出す。体部内面から見込にかけては蓮華文を片彫りしているとみられる。器面には緑灰色の釉を施すが、高台内及び畳付は露胎である。胎土は精良で、焼成も良好である。1338は底部が欠損するもので、口縁部は体部から内湾気味に立ち上がり、端部を細く仕上げる。体部内面には草花文を片彫りしているとみられる。器面にはオリーブ灰色の釉を施し、胎土は精良で、焼成も良好である。

木製品 (Fig.45・46-1339・1340)

1339は蝙蝠扇の皆彫骨扇で、6枚の骨が残存する。骨は厚さ約0.4cmで、末端から約1.7cmの所に要孔をあけ、中に要が残る。骨の中ほどまでは徐々に幅を減じ、中ほどから先は幅を広め「格狭間の形」の彫透しをいれる。末端は先を減じ、細く仕上げていく。

1340はこの板目材を使用した下駄である。平面形は長楕円形を呈し、全長22.7cm、全幅11.1cm、全厚1.9cmを測る。前壺は前歯

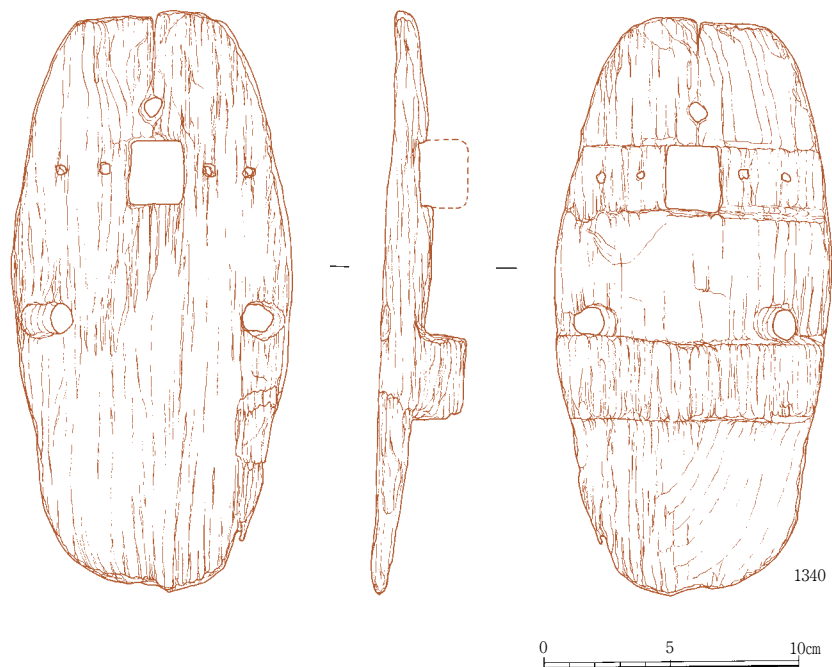


Fig.46 SD-124出土遺物実測図4

の約0.9cm前の中央、後壺は後歯内側に接してあける。前歯は差歯であるが、歯は欠失している。後歯は削り出しており、断面方形を呈する。

SD-125

調査区東部で検出された東西溝で、SD-124の南側に位置する。幅0.40～0.60m、深さが0.21～0.32mで、約6.20mを検出した。主軸方向はN-17°-Eである。断面は台形状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物は縄文土器片2点、土師質土器片137点、瓦器片15点がみられ、土師質土器3点(1341～1343)、瓦器3点(1344～1346)が図示できた。

2. 調査区の概要 (1)A区

出土遺物

土師質土器 (Fig.47-1341~1343)

3点とも杯である。1341は口縁部破片で、口径14.2cmを測る。口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1342は底部破片で、底径5.0cmを測る。調整は摩耗が著しく不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1343も底部破片で、底径7.0cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は摩耗が著しいが、断面形態から底部の切り離しは回転糸切りとみられる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。

瓦器 (Fig.47-1344~1346)

3点とも椀で、底部が欠損する。1344は口径13.8cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面にはナデ調整を施し、外面下部には指頭圧痕が残る。また、内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1345は口径14.2cmを測る。器面は内湾しながら立ち上がり、口

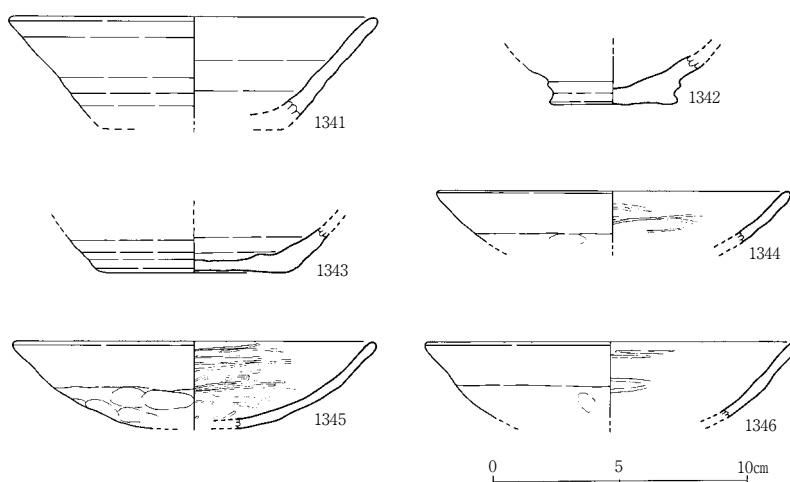


Fig.47 SD-125出土遺物実測図

縁端部を丸く仕上げる。内面にはナデ調整、口縁部外面はヨコナデ調整を施し、外面下半には指頭圧痕が残る。また、体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は、内面が暗灰色、黒色、外面が黒色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1346は口径14.6cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。内面にはナデ調整、口縁部外面はヨコナデ調整を施し、外面下半には指頭圧痕が残る。また、内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。

SD-126

調査区中央部で検出した南北溝で、SD-127の西側に位置する。幅は16~26cm、深さは6~9cmで、約4.80mを検出した。南側は調査区外へ続く。主軸方向はN-5°-Eである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点がみられ、須恵器1点(1347)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.49-1347)

1347は甕の胴部破片で、内面にはナデ調整、外面に格子状のタタキを施す。色調は内外面ともにぶい褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良である。

SD-127

調査区中央部で検出した溝で、SD-126の東側に位置する。幅0.42～0.58m、深さは0.15～0.20mで、約6.30mを検出した。南側は調査区外へ続く。主軸方向はN-41°-Eである。断面は台形状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点、土製品1点がみられ、土製品1点(1348)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.49-1348)

1348は土錘で、紡錘形とみられるが、約半分が欠損する。外面には成形時の指頭圧痕が残る。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。

SD-128

調査区中央部で検出した溝で、SD-127の東側に位置する。幅0.42～0.54m、深さは0.18～0.21mで、約7.50mを検出した。南側は調査区外へ続く。主軸方向はN-33°-Eである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には弥生土器片1点、土師質土器片10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-129

調査区中央部で検出した溝で、SD-128の東側に位置する。幅0.36～0.44m、深さは7～9cmで、約3.20mを検出した。溝は北方向にのびた後、途中で北西方向へ向きを変える。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD-130

調査区中央部で検出した東西溝で、SD-128の東側に位置する。幅0.46～0.52m、深さは0.10～0.20mで、約2.80mを検出した。主軸方向はN-80°-Eである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD-131

調査区中央部で検出した東西溝で、SD-155の南側に位置する。幅14～16cm、深さは7～9cmで、約1.10mを検出した。主軸方向はN-83°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-132

調査区東部中央で検出した南北溝で、SD-131の東側に位置する。SK-111、SD-133に西の肩、SD-135に東の肩を切られているため幅は不明であるが、深さは10cmで、約5.10mを検出した。主軸方向はN-5°-Wである。埋土は灰オリーブ色シルトであった。出土遺物には土師質土器片35点、青磁片1点がみられ、土師質土器1点(1349)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.49-1349)

1349は杯の底部破片で、底径5.5cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐ立ち上がるとみられる。調整は摩耗が著しく不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

2. 調査区の概要 (1)A区

SD-133

調査区東部中央で検出した南北溝で、SD-132の東側に位置する。幅0.72～0.88m、深さは0.17～0.37mで、約2.10mを検出した。主軸方向はN-8°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片20点、白磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-134

調査区東部中央で検出した南北溝で、SD-133に切られているため幅は不明であるが、深さは4～9cmで、約1.90mを検出した。主軸方向はN-5°-Wである。断面は舟底状を呈するとみられ、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトにマンガン粒を少量含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SD-135

調査区東部中央で検出した南北溝で、SD-132の東側に位置する。幅0.18～0.28m、深さは10～17cmで、約3.60mを検出した。主軸方向はN-5°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できるものではなかった。

SD-136

調査区東部中央で検出した東西溝で、SD-135の東側に位置する。幅0.22～0.38m、深さは8cmで、約1.60mを検出した。主軸方向はN-86°-Eである。断面は舟底状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものではなかった。

SD-137

調査区東部中央で検出した南北溝で、SD-138の西側に位置する。幅0.32～0.52m、深さは5～16cmで、約11.60mを検出した。主軸方向はN-5°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片14点、瓦器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-138

調査区東部中央で検出した南北溝で、SD-137の東側に位置する。幅0.30～0.70m、深さは15～17cmで、約12.10mを検出した。主軸方向はN-6°-Eである。断面は台形状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片15点、瓦器片1点がみられ、土師質土器2点(1350・1351)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.49-1350・1351)

2点とも杯である。1350は口縁部破片で、口径13.4cmを測る。口縁部はやや内湾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面がにぶい橙色、外面が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1351は底部破片で、底径6.8cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、内面は摩耗が著しく不明であるが、外面は回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-139

調査区東部南側で検出した溝で、SD-140の西側に位置する。幅14~18cm、深さは7cmで、約3.30mを検出した。主軸方向はN-37°-Eである。断面はU字状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できるものではなかった。

SD-140

調査区東部南側で検出した南北溝で、SD-137の西側に位置する。幅0.28~0.36m、深さは6cmで、約6.00mを検出した。主軸方向はN-15°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD-141 (Fig.48)

調査区東部南側で検出した南北溝で、SD-137の南側に位置する。幅0.80~1.10m、深さは0.43~0.52mで、約6.10mを検出した。主軸方向はN-4°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が暗灰黄色砂質シルト、2層が黄褐色砂質シルト、3層がオリーブ褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片25点がみられ、土師質土器4点(1352~1355)が図示できた。

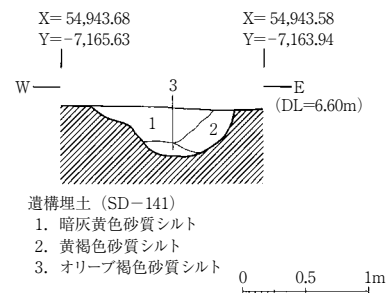


Fig.48 SD-141

出土遺物

土師質土器 (Fig.49-1352~1355)

4点とも杯である。1352は口径13.1cm、器高4.4cm、底径7.1cmを測る。外底面はほぼ平らで、器面は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、調整は回転ナデ調整、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面

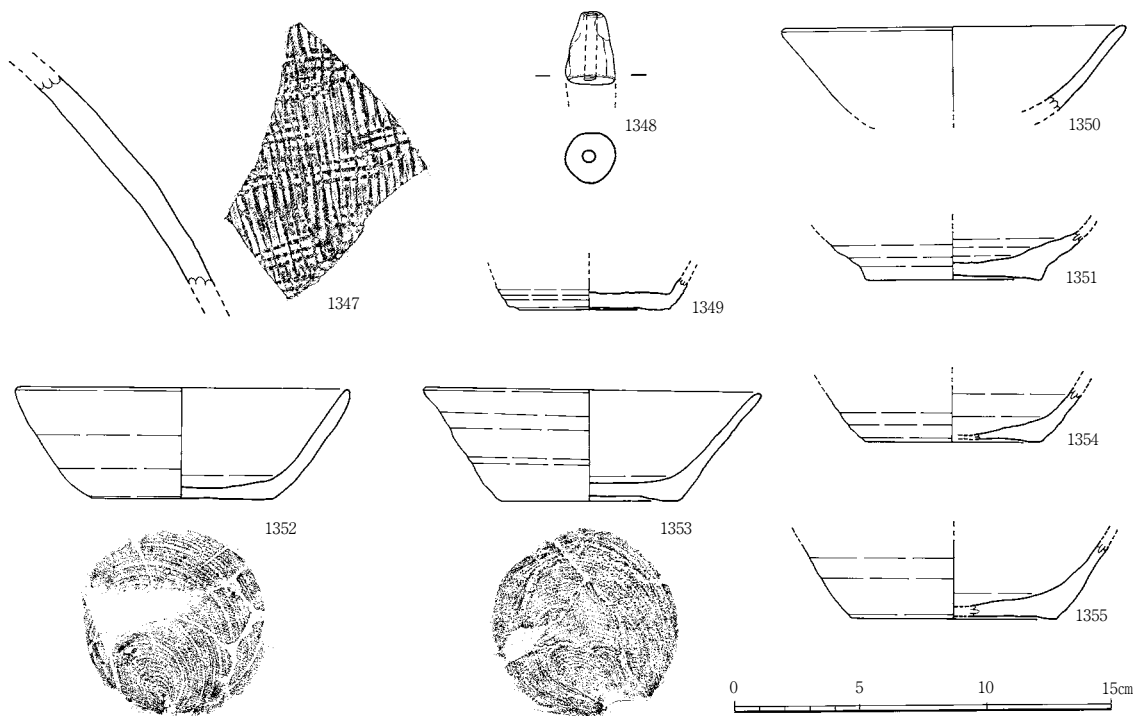


Fig.49 SD-126・127・132・138・141出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1)A区

ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1353は口径13.3cm、器高4.5cm、底径7.0cmを測る。外底面は大きく窪み、口縁部は斜め上方にはほぼ真直ぐ立ち上がる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1354は底部破片で、底径6.8cmを測る。外底面はやや窪み、体部はほぼ真直ぐ立ち上がる。成形はロクロ水挽成形とみられ、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が灰白色ないし灰色、外面が灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1355は底部破片で、底径8.2cmを測る。外底面はやや窪み、体部は斜め上方にはほぼ真直ぐ立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。

SD-142

調査区東部南側で検出した南北溝で、SD-141の東側に位置する。幅0.48~0.92m、深さは10cmで、約3.70mを検出した。主軸方向はN-8°-Eである。断面は台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD-143

調査区東部南側で検出した南北溝で、SD-138の東側に位置する。幅0.26~0.42m、深さは8cmで、約2.30mを検出した。主軸方向はN-8°-Eである。断面は台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD-144

調査区東部中央で検出した南北溝で、SD-167の西側に位置する。幅0.50~0.90m、深さ5~14cmで、約9.40mを検出した。主軸方向はN-2°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片55点がみられ、土師質土器1点(1356)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.50-1356)

1356は杯の底部破片で、底径6.4cmを測る。調整は摩耗が著しく不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-145

SD-144の底面で検出した南北溝であり、幅は不明であるが、深さは0.26mとみられ、約4.70mを検出した。主軸方向はN-8°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土はオリーブ褐色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD-146

調査区東部中央で検出した南北溝で、SD-148の北側に位置する。幅0.26~0.34m、深さ3cmで、約8.20mを検出した。主軸方向はN-6°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-147

調査区東部南側で検出した南北溝で、SD-148の東側に位置する。幅0.42~0.96m、深さは3~9cmで、約5.30mを検出した。主軸方向はN-10°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片30点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-148

調査区東部南側で検出した南北溝で、SD-167の西側に位置する。幅0.70~1.20m、深さ0.30~0.34mで、約14.10mを検出した。主軸方向はN-5°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には弥生土器片1点、土師質土器片101点、青磁片1点がみられ、土師質土器1点(1357)、青磁1点(1358)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.50-1357)

1357は杯で、口径14.2cm、器高4.3cm、底径7.6cmを測る。外底面はやや窪み、口縁部は外反して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色ないし橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

青磁 (Fig.50-1358)

1358は碗の体部破片で、内湾気味に立ち上がる。内面には飛雲文を片彫りしているとみられる。器面には灰オリーブ色の釉を施し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-149

調査区東部南側で検出した南北溝で、SD-167の西側に位置する。SD-167に東の肩を切られているため幅は不明であるが、深さは6cmで、約10.80mを検出した。主軸方向はN-2°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片21点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-150

調査区東部南側で検出した南北溝で、SD-167の東側に位置する。SD-167に西の肩を切られているため幅は不明であるが、深さは7cmで、約9.70mを検出した。主軸方向はN-2°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片10点がみられ、土師質土器1点(1359)が図示できた。

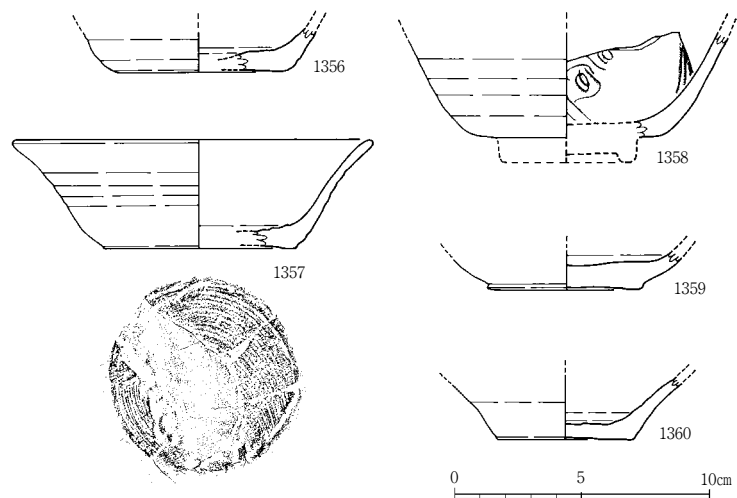


Fig.50 SD-144・148・150・151出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1)A区

出土遺物

土師質土器 (Fig.50-1359)

1359は杯の底部破片で、底径6.0cmを測る。全体的に摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内面がにぶい橙色、外面が橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。

SD-151

調査区東部中央で検出した南北溝で、SD-167の西側に位置する。幅0.30~0.40m、深さは3cmで、約3.20mを検出した。主軸方向はN-3°-Wである。断面は舟底状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片9点がみられ、土師質土器1点(1360)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.50-1360)

1360は杯の底部破片で、底径5.3cmを測る。外底面はやや窪み、体部は外反して立ち上がる。成形はロクろ水挽成形で、器面は摩耗が著しいが、断面形態から底部の切り離しは回転糸切りとみられる。色調は、内面が橙色、外面が橙色ないし浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-152

調査区東部北側、SD-112の底面で検出した東西溝である。幅は不明であるが、深さは0.44mとみられ、約3.40mを検出した。主軸方向はN-78°-Eである。断面は舟底状を呈するとみられ、埋土はオリーブ褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-153 (Fig.51)

調査区東部北側で検出した東西溝で、SD-112の南側に位置する。幅2.80~3.00m、深さは0.33~0.37mで、約11.10mを検出した。東側は調査区外へ続く。主軸方向はN-21°-Eである。断面は舟底状を呈し、埋土は上層が暗オリーブ褐色粘土質シルト、下層が黄灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片2点、土師質土器片79点、白磁片1点、青磁片1点がみられ、土師質土器7点(1361~1367)、白磁1点(1368)、青磁1点(1369)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.52-1361~1367)

1361~1365は杯である。1361は口径14.8cm、器高4.2cm、底径8.0cmを測る。口縁部は体部からほぼ真直ぐ立ち上がる。成形はロクろ水挽成形で、器面は著しく摩耗し底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面とも黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1362は口径14.8cm、器高5.0cm、底径6.4cmを測る。体部はほぼ平坦な底部から内湾気味に上がり、口縁部は外上方を向き、端部を丸く仕上げる。成形はロクろ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施すが、内底面は摩耗が著しく不明である。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともなぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1363は口縁部破片で、口径13.8cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を上方へ摘み上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともなぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。1364も口縁部破片で、口径14.4cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良

好である。1365は口縁部を欠損する。底径7.3cmを測り、成形はロクロ水挽成形で、調整は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

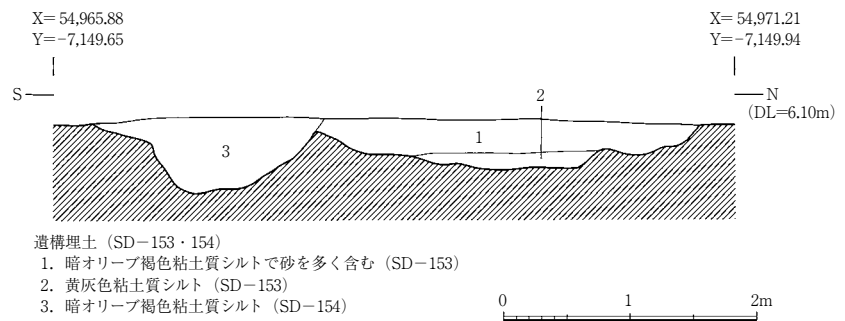


Fig.51 SD-153・154

1366・1367は小皿である。1366は口径7.6cm，器高1.7cm，底径5.6cmを測る。外底面は窪み，口縁部は斜め上方に短く外反して立ち上がり，端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施すが，内底面は摩耗が著しく不明である。底部の切り離しは回転糸切りで，板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。1367は口径8.0cm，器高1.6cm，底径5.6cmを測る。外底面はやや窪み，口縁部は斜め上方に短く立ち上がる。調整は回転ナデ調整で，内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は，内面がにぶい黄橙色，外面が浅黄橙色を呈し，胎土は精良で，焼成も良好である。

白磁 (Fig.52-1368)

1368は碗の底部破片で，底径6.2cmを測る。外底面には細く直立した高台を削り出す。器面には灰白色の釉を施し，胎土は精良で，焼成も良好である。

青磁 (Fig.52-1369)

1369は碗の口縁部破片である。内面には蓮華文を片彫りしているとみられる。器面には灰オリーブ色の釉を施釉し，胎土は精良で，焼成も良好である。

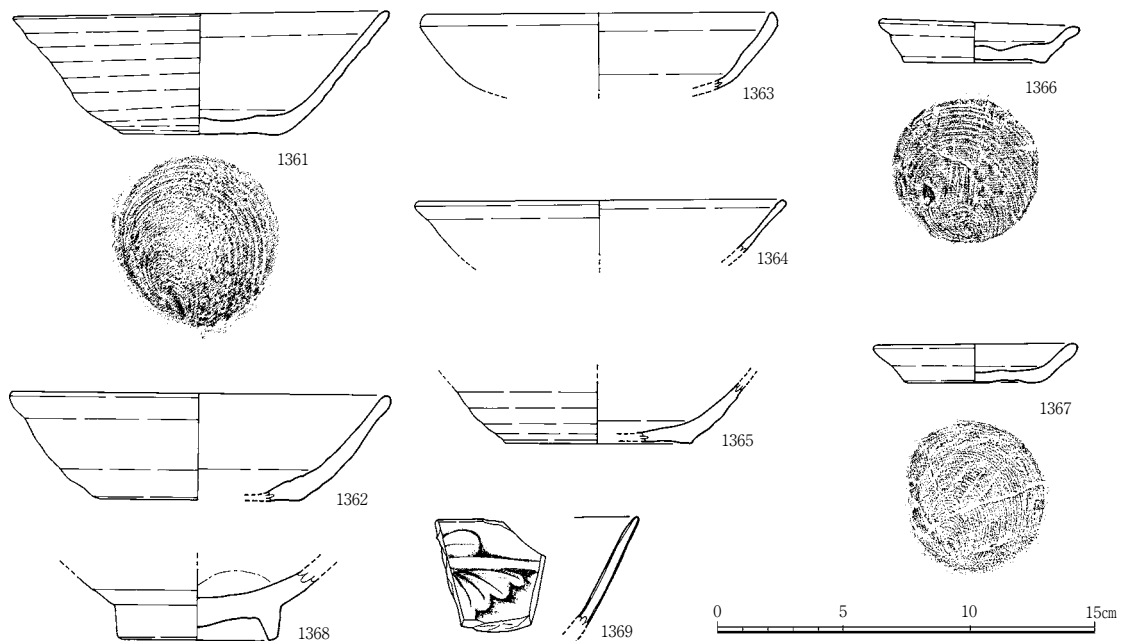


Fig.52 SD-153出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1)A区

SD-154 (Fig.51)

調査区東部北側で検出した東西溝で、SD-153の南側に位置する。幅1.50～1.80m、深さは0.50～0.58mで、約13.20mを検出した。東側は調査区外へ続く。主軸方向はN-6°-Eである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗オリーブ褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片1点、須恵器片3点、土師質土器片48点、瓦器片6点がみられ、須恵器1点(1370)、土師質土器17点(1371～1387)、瓦器1点(1388)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.53-1370)

1370は甕の体部破片である。内面にはナデ調整を施し、外面にはタタキ目が残る。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

土師質土器 (Fig.53-1371～1387)

1371～1379は杯である。1371は口径13.7cm、器高4.5cm、底径7.1cmを測る。外底面はやや窪み、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を細く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、内底面は摩耗が著しく調整は不明であるが、他は回転ナデ調整の痕が残る。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし灰色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。1372は口径13.6cm、器高5.7cm、底径7.2cmを測る。外底面は窪み、口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げるが、焼成時の歪みがみられる。成形はロクロ水挽成形で、内面は摩耗が著しく調整は不明であるが、体部外面には回転ナデ調整の痕が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1373は口径14.4cm、器高4.8cm、底径7.3cmを測る。外底面は窪み、口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、内底面は摩耗が著しく調整は不明であるが、他は回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1374は口径15.2cm、器高3.5cm、底径8.1cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形であるが、器面は著しく摩耗し底部の切り離し方法は不明である。色調は、内面が黄橙色、外面が明黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1375は口縁部破片で、口径12.1cmを測る。口縁部はやや外反して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1376～1379は口縁部を欠損するもので、体部はすべてほぼ真直ぐ立ち上がるものである。成形は1379が粘土紐巻き上げロクロ成形、1376～1378がロクロ水挽成形とみられる。1376は底径6.4cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転ナデ調整の痕が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1377は底径7.0cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転ナデ調整の痕が残る。色調は、内面が浅黄橙色、外面が橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1378は底径7.2cmを測り、摩耗が著しく調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1379は底径7.5cmを測り、器面が摩耗しており調整は

不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は、内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。

1380~1387は小皿で、形態的に大きな違いはみられない。1380は口径6.6cm、器高1.4cm、底径4.8cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が暗灰色ないし橙色、外面が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1381は口径7.0cm、器高1.4cm、底径5.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1382は口径7.4cm、器高2.2cm、底径4.0cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1383は焼成時の歪みがみられるもので口径7.5cm、器高1.6cm、底径5.2cmを測る。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈

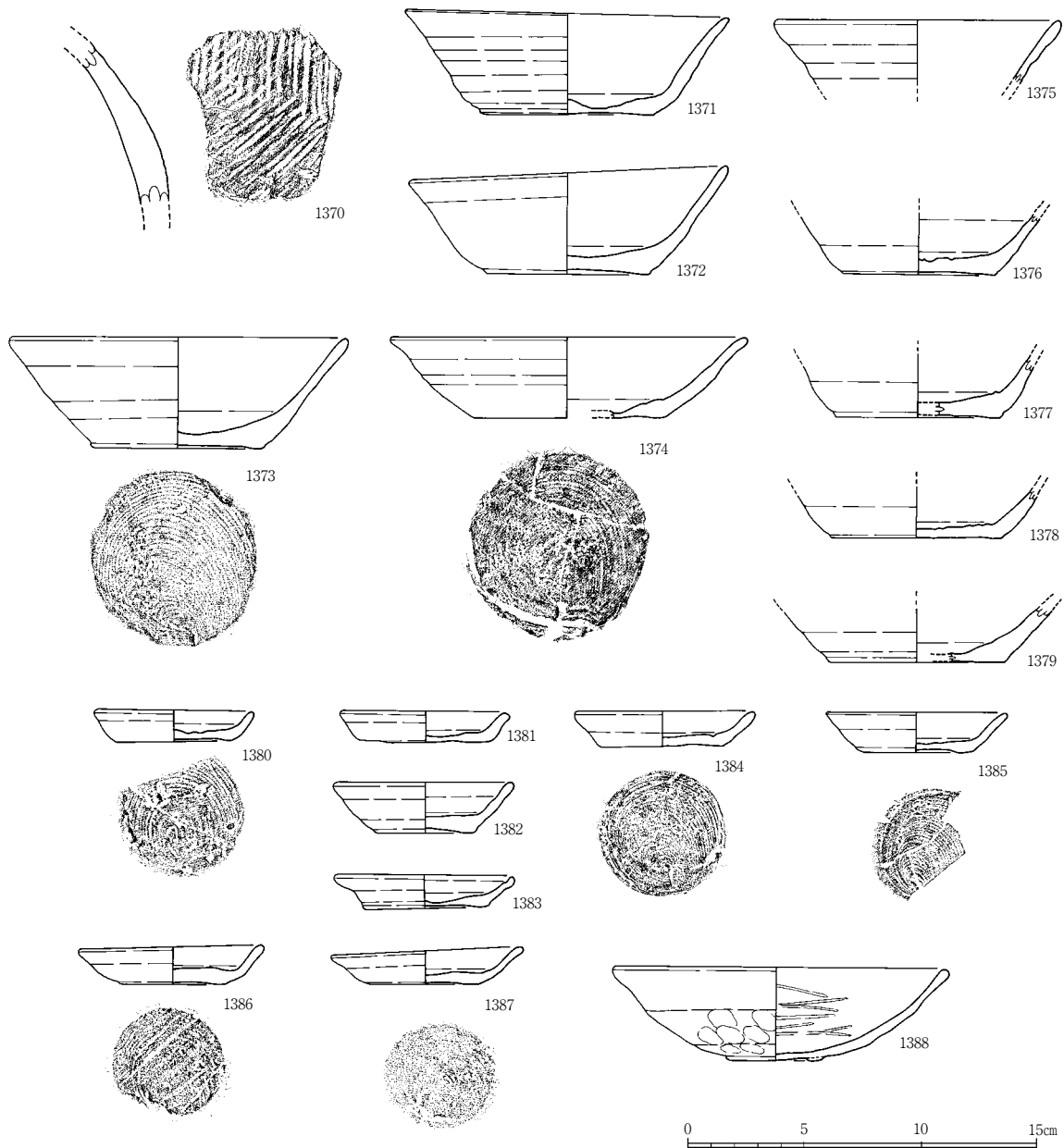


Fig.53 SD-154出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1)A区

し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1384は口径7.6cm, 器高1.6cm, 底径5.4cmを測り, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。調整は回転ナデ調整で, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1385は口径7.7cm, 器高1.7cm, 底径4.8cmを測り, 調整は回転ナデ調整で, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は, 内面が褐灰色, 外面が黒褐色ないしにぶい黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1386は口径7.8cm, 器高1.7cm, 底径4.6cmを測り, 器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りで, 板状圧痕が残る。色調は, 内面がにぶい橙色, 外面がにぶい黄橙色を呈し, 胎土には砂粒を含むが, 焼成は良好である。1387は口径8.2cm, 器高1.6cm, 底径4.6cmを測り, 器面が摩耗しており調整は不明であるが, 外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面ともいぶい黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

瓦器 (Fig.53-1388)

1388は椀で, 口径14.2cm, 器高4.0cm, 底径3.9cmを測る。口縁部は体部から内湾しながら立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げる。外底面には形骸化した高台が付く。内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面下半には指頭圧痕が残る。また, 体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰色ないし灰白色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

SD-155 (Fig.54)

調査区東部北側で検出した東西溝で, SD-154の南側に位置する。幅1.40~3.10m, 深さは0.27~0.46mで, 約31.20mを検出した。東側は調査区外へ続く。主軸方向はN-6°-Wである。断面は舟底状を呈し, 埋土は上層が暗灰黄色シルト, 下層が黄灰色砂質シルトであった。出土遺物には縄文土器片1点, 弥生土器片7点, 須恵器片6点, 土師質土器片1,275点, 瓦器片34点, 東播系須恵器片2点, 白磁片1点, 青磁片4点がみられ, 土師質土器42点(1389~1430), 瓦器3点(1431~1433), 東播系須恵器2点(1434・1435)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.55~57-1389~1430)

1389は小杯の底部破片で, 底径4.4cmを測る。成形はロクロ水挽成形とみられ, 調整は回転ナデ調整で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し, 胎土には砂粒を含むが, 焼成は良好である。

1390~1421は杯である。1390は口径13.0cm, 器高3.1cm, 底径6.6cmを測る。外底面はやや窪み, 口縁部は内湾しながら立ち上がり, 端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で, 調整は回転ナデ調整, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1391は口径13.8cm, 器高4.0cm, 底径7.6cmを測る。外底面はやや窪み, 口縁部は内湾しながら立ち上がり, 端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で,

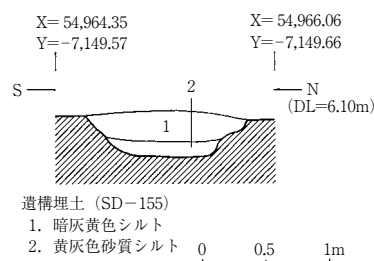


Fig.54 SD-155

器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が橙色、外面が黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。1392は口径14.4cm、器高5.1cm、底径7.8cmを測る。外底面は窪み、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ、体部内外面は摩耗が著しく調整は不明であるが、内底面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは断面形態から回転糸切りとみられる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1393は口径13.8cm、器高4.6cm、底径7.8cmを測る。外底面はやや窪み、口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1394は口径13.9cm、器高4.3cm、底径8.0cmを測る。外底面は窪み、口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を細く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1395は口径14.2cm、器高4.0cm、底径5.8cmを測る。外底面は大きく窪み、口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を細く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色ないし灰色を呈し、胎土には砂

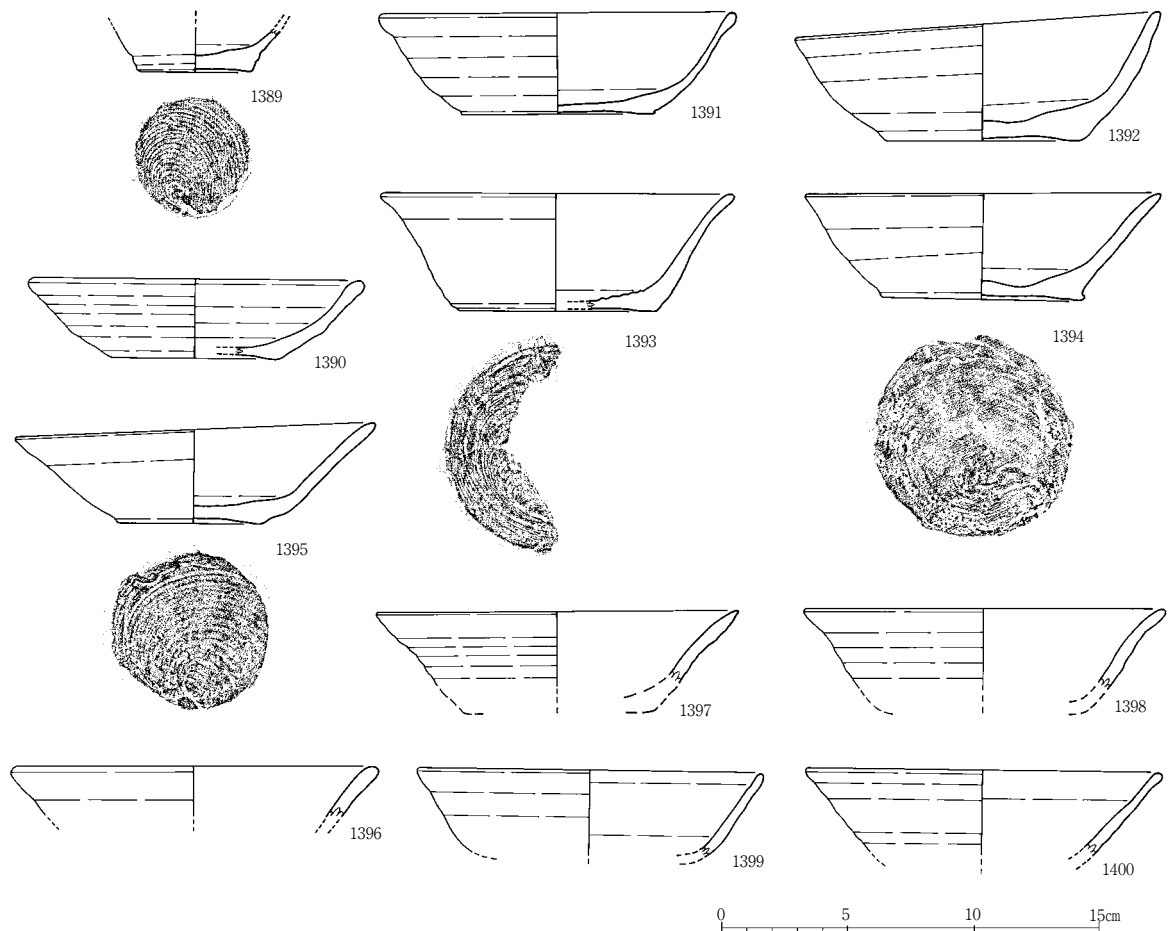


Fig.55 SD-155出土遺物実測図1

2. 調査区の概要 (1)A区

粒を含むが、焼成は良好である。1396～1400は口縁部破片である。1396～1398は口縁部が外反気味に立ち上がる。1396は口径14.2cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1397は口径14.2cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられ、器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1398は口径14.2cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられ、器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい橙色ないし灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1399・1400は口縁部が斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1399は口径13.6cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。1400は口径13.9cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられ、器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1401～1421は口縁部を欠損するもので、1401～1407は体部が内湾して立ち上がると考えられるものである。1401は底径6.4cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1402は底径5.2cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1403は底径6.0cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられ、色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1404は底径6.4cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色ないし灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1405は底径6.8cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1406は底径7.6cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1407は底径7.6cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1408～1410は体部が外反して立ち上がるもので、成形は、1408が粘土紐巻き上げロクロ成形、1410がロクロ水挽成形とみられる。1408は底径7.2cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が浅黄橙色、外面が淡黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1409は底径7.2cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は、内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色、褐灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1410は底径7.8cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。1411～1421は体部がほぼ真直ぐ立ち上がると考えられるものである。1411は底径6.8cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1412は底径7.4cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1413は底径6.6cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。外底面は摩耗が著しく底部の切り離し方法は不明である。色調は、内面が橙色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好

である。1414は底径7.0cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1415は底径7.2cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1416は底径7.4cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。1417は底径8.0cmを測り、器面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1418は底径8.0cmを測り、器面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は

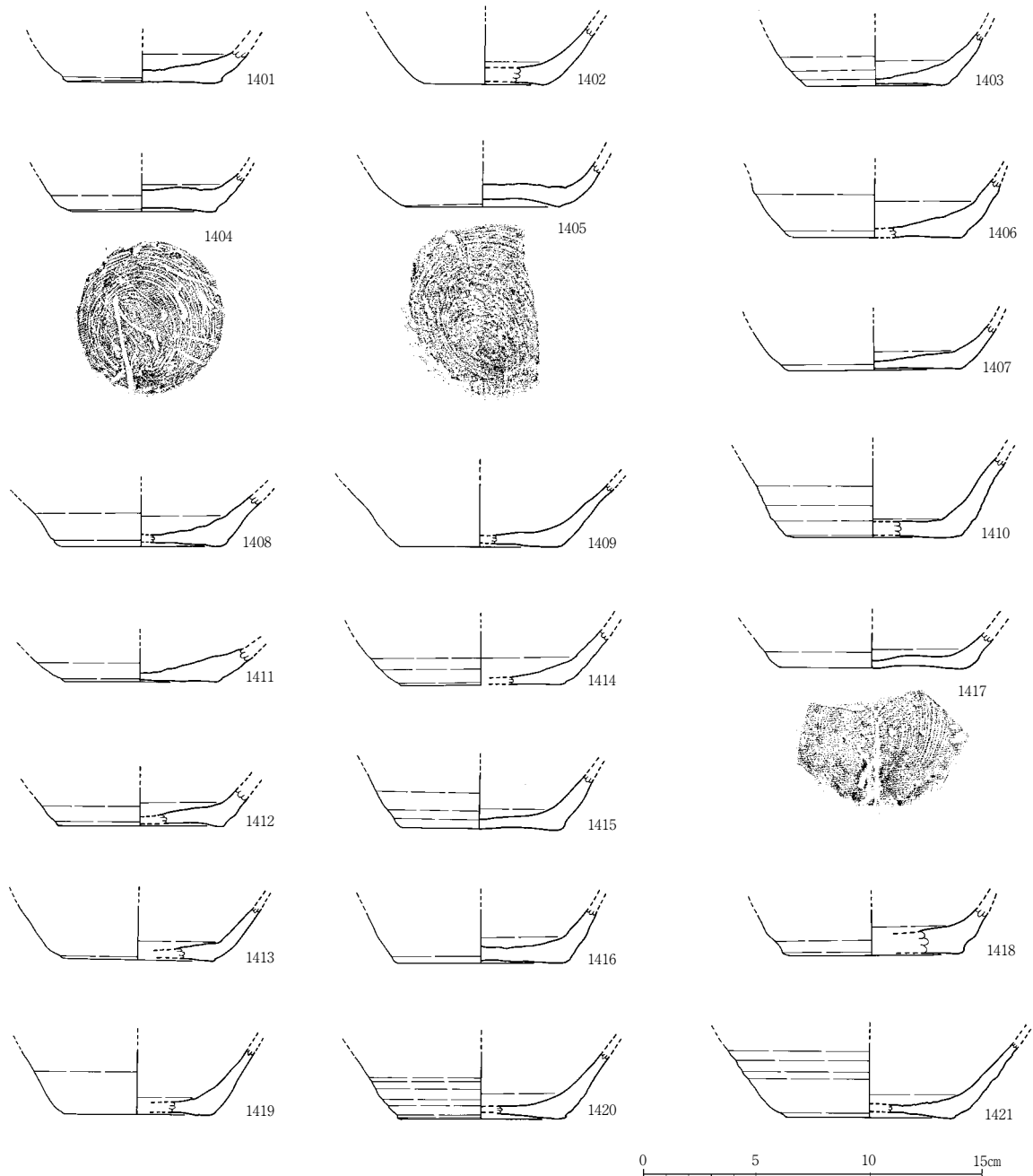


Fig.56 SD-155出土遺物実測図2

2. 調査区の概要 (1)A区

精良であるが、焼成はやや不良である。1419は底径6.6cmを測り、器面が摩耗しており調整は不明であるが、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。1420は底径7.5cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1421は底径7.4cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1422～1430は小皿で、形態的に大きな違いはみられない。1422は口径6.4cm、器高1.7cm、底径4.2cmを測り、器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面が橙色ないし灰色、外面が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1423は焼成時の歪みが残るもので、口径6.9cm、器高1.9cm、底径5.5cmを測る。調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1424は口径7.4cm、器高1.5cm、底径4.0cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面にがにぶい黄橙色、外面が黄灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1425は口径7.6cm、器高1.4cm、底径4.7cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色、暗灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。1426は口径7.8cm、器高1.5cm、底径5.2cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が橙色ないしにぶい橙色、外面が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1427は口径8.1cm、器高1.2cm、底径6.1cmを測り、器面は摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転

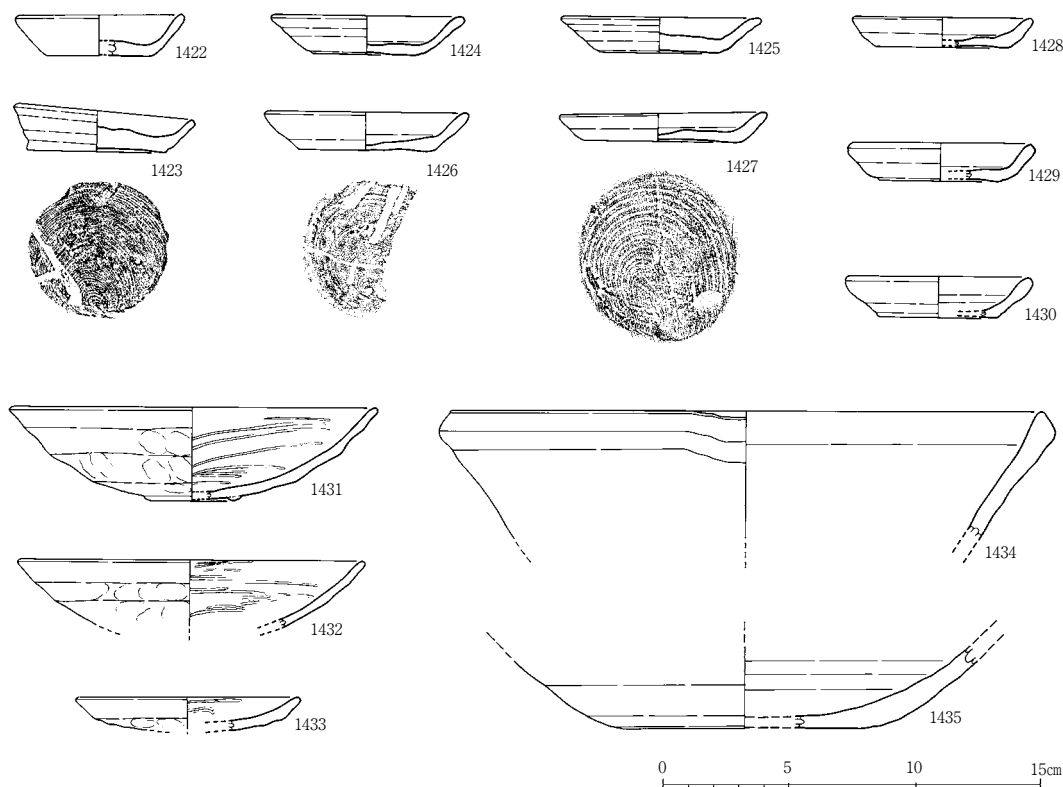


Fig.57 SD-155出土遺物実測図3

糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色ないし暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1428は口径7.0cm, 器高1.2cm, 底径5.2cmを測り, 調整は摩耗が著しく不明であるが, 底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は, 内面が橙色, 外面が浅黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1429は口径7.0cm, 器高1.5cm, 底径4.8cmを測り, 調整は回転ナデ調整で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも灰黄色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1430は口径7.1cm, 器高1.6cm, 底径4.6cmを測り, 調整は回転ナデ調整で, 底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し, 胎土には砂粒を含むが, 焼成は良好である。

瓦器 (Fig.57-1431~1433)

1431・1432は椀である。1431は口径14.4cm, 器高3.7cm, 底径3.8cmを測る。口縁部は体部から内湾しながら立ち上がり, 端部は丸く仕上げ, 外底面には形骸化した高台が付く。内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面下半には指頭圧痕が残る。また, 体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。1432は底部を欠損するもので, 口径13.6cmを測る。口縁部は体部から内湾して立ち上がり, 端部を丸く仕上げる。体部内面にはナデ調整, 口縁部内外面にはヨコナデ調整を施し, 体部外面には指頭圧痕が残る。また, 体部内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも暗灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

1433は小皿で, 底部が欠損する。口径8.8cmを測り, 口縁部は斜め上方に短く立ち上がり, 端部を丸く仕上げる。内面にはナデ調整, 口縁部外面にはヨコナデ調整を施し, 外底面には指頭圧痕が残る。また, 内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は, 内面が暗灰色, 外面が暗灰色ないし灰白色を呈し, 胎土は精良で, 焼成も良好である。

東播系須恵器 (Fig.57-1434・1435)

2点とも片口鉢である。1434は口縁部破片で, 口径23.6cmを測る。口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 端部を肥厚して, 上方へ拡張さす。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土には砂粒を含むが, 焼成は良好である。1435は底部破片で, 底径9.8cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がるものとみられる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。内面は摩耗が著しく調整は不明であるが, 外面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土には砂粒を含むが, 焼成は良好である。

SD-156

調査区東部北側で検出された南北溝で, SK-112の東側に位置する。東側をSK-114, 西側をSK-112に切られ, 詳細は不明であるが, 深さは0.38mで, 約3.80mを検出した。主軸方向はN-1°-Eである。断面は台形状を呈するとみられ, 埋土は, 上層が暗灰黄色シルト, 下層が黒褐色シルトであった。出土遺物には弥生土器片1点, 土師質土器片279点, 瓦器片7点がみられ, 土師質土器10点(1436~1445)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.58-1436~1445)

1436~1442は杯で, 1436~1438は体部から口縁部にかけての破片である。1436は口径11.2cmを測

2. 調査区の概要 (1)A区

り、口縁部はやや内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1437・1438は口縁部が外傾するものである。1437は口径12.8cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1438は口径13.0cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1439～1442は口縁部を欠損するもので、1439は底径6.4cmを測り、体部が内湾して立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。1440～1442は体部がほぼ真直ぐ立ち上がるものである。1440は底径5.8cmを測り、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1441は底径6.0cmを測り、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1442は底径7.2cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられる。器面は著しく摩耗し調整は不明である。色調は、内面が橙色、外面が黄橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。

1443～1445は小皿で、形態的に大きな違いはみられない。1443は口径7.2cm、器高1.5cm、底径4.0cmを測る。器面が摩耗しており調整は不明であるが、内底面には回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内面はにぶい橙色ないし橙色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1444は口径7.4cm、器高1.5cm、底径6.0cmを測る。調整は摩耗が著しく不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1445は口径8.5cm、器高1.5cm、底径6.6cmを測る。調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色、黒褐色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

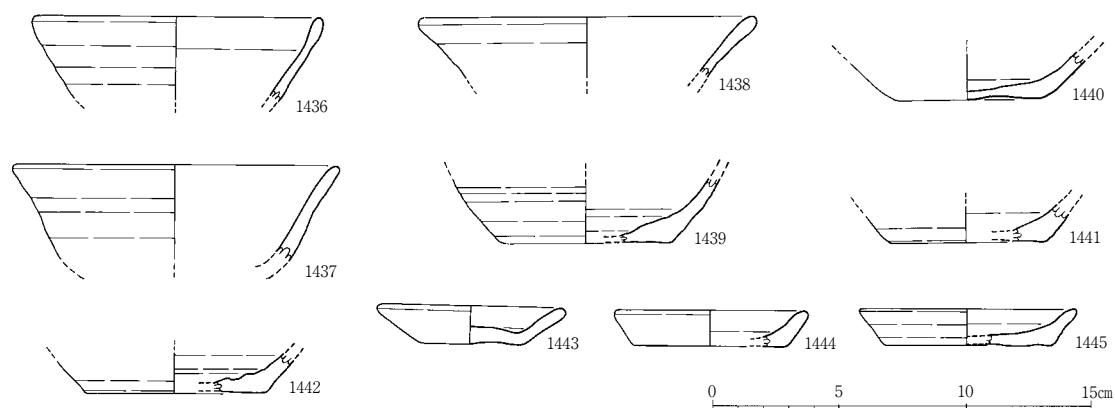


Fig.58 SD-156出土遺物実測図

iii 中世2

次に調査区西部でのみ検出された第1次検出面の遺構について以下に記す。

a.土坑

SK-117

調査区西部で検出した土坑で、SK-118を切っていた。大部分は調査区外へ続くため、規模は不明であるが、深さは0.42mを測る。埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片64点、瓦器片1点がみられ、土師質土器1点(1446)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.61-1446)

1446は小皿で、口径7.4cm、器高1.6cm、底径6.2cmを測る。口縁部は斜め上方に短く立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面は摩耗が著しいが、底部の切り離しは断面形態から回転糸切りとみられる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。

SK-118

調査区西部で検出した楕円形の土坑で、南側は調査区外へ続くため、規模は不明である。深さは0.46mで、長軸方向はN-31°-Eを示す。埋土は3層に分層され、1層が暗灰黄色シルト、2層が褐色シルト、3層が暗灰黄色シルトであった。出土遺物には縄文土器片2点、土師質土器片197点、瓦器片14点、瓦質土器片1点、東播系須恵器片3点、白磁片1点、青磁片2点がみられ、土師質土器3点(1447~1449)、瓦器2点(1450・1451)、青磁2点(1452・1453)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.61-1447~1449)

1447・1448は杯である。1447は口径11.0cm、器高4.1cm、底径6.4cmを測る。外底面はやや窪み、口縁部は外上方にのび、端部は細く仕上げる。器面は摩耗が著しいが、底部の切り離しは断面形態から回転糸切りとみられる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成もやや不良である。1448は底部破片で、底径5.9cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色ないし橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1449は小皿で、口径7.0cm、器高1.4cm、底径4.0cmを測る。口縁部は斜め上方に短く立ち上がり、端部は丸く仕上げる。調整

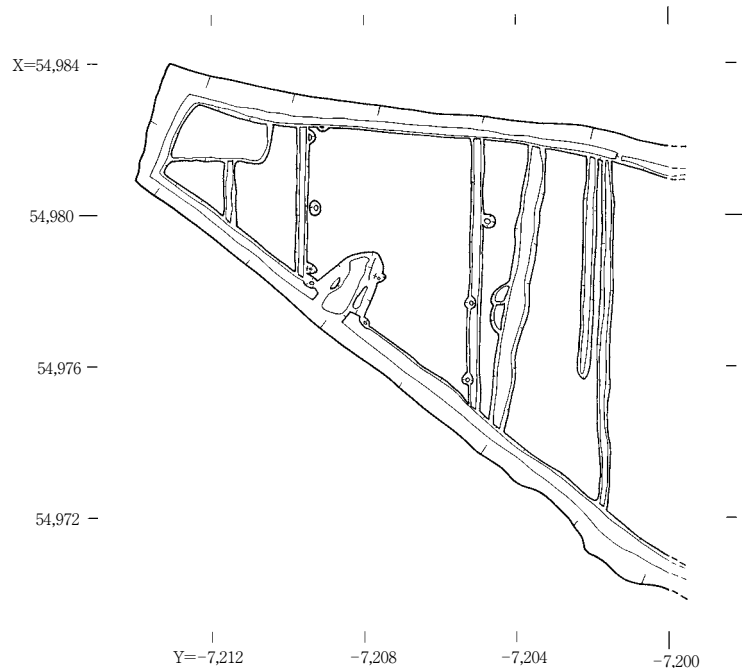


Fig.59 A区遺構平面図第1次検出面 (S=1/200)

2. 調査区の概要 (1)A区

は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

瓦器 (Fig.61-1450・1451)

2点とも碗である。1450は口縁部破片で、口径12.8cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。内面にはナデ調整を施し、体部外面下半には指頭圧痕が残るが、全体的に摩耗が著しい。また、内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は、内面が灰色、外面が灰オリーブ色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。1451は底部破片で、底径3.3cmを測る。外底面には扁平な高台が付く。調整は内面がナデ調整で、外面には指頭圧痕が残り、内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。色調は、内面が灰色、外面が暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

青磁 (Fig.61-1452・1453)

1452は碗の口縁部破片で、口径14.8cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。体部外面に片彫り鎬蓮弁文を施す。器面にはオリーブ灰色釉を施し、胎土は精良で、焼成も良好である。

1453は皿で、体部は中ほどで屈曲して立ち上がり、口縁部は外反し、端部を細く仕上げる。見込

Tab.2 林口遺跡第Ⅱ調査地区-A区土坑計測表

遺構番号	平面形	規 模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (m)			
SK-101	—	—	—	—	—	中世	底面のみ残存
SK-102	隅丸方形	—	—	0.33	—	〃	
SK-103	—	—	—	—	—	〃	底面のみ残存
SK-104	—	—	—	0.57	—	〃	
SK-105	長楕円形	—	0.98	0.17	—	〃	
SK-106	長楕円形	—	—	0.10	—	〃	
SK-107	方 形	0.72	0.64	0.11	N-4°-W	〃	
SK-108	方 形	1.38	0.68	0.04	N-7°-W	〃	
SK-109	不 整 形	1.91	1.48	0.12	N-5°-W	〃	
SK-110	不 整 形	2.36	1.08	0.11	N-7°-W	〃	
SK-111	長楕円形	—	—	0.14	—	〃	
SK-112	不 整 形	—	3.76	0.66	N-5°-W	〃	
SK-113	隅丸方形	—	0.88	0.06	N-60°-W	〃	
SK-114	楕 円 形	—	—	0.40	—	〃	
SK-115	長楕円形	1.42	—	0.06	N-69°-W	〃	
SK-116	—	—	—	0.09	—	〃	
SK-117	—	—	—	0.42	—	〃	
SK-118	楕 円 形	—	—	0.46	N-31°-E	〃	
SK-119	楕 円 形	—	—	0.08	—	〃	
SK-120	楕 円 形	—	—	0.11	—	〃	

に櫛描文を施す。器面にはオリーブ灰色釉を施し、体部外面下半と外底面は釉ハギする。胎土は精良で、焼成も良好である。

SK-119

調査区西部で検出した楕円形の土坑である。東部分をSD-157に切られていたため、規模は不明であるが、深さは8cmを測り、埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

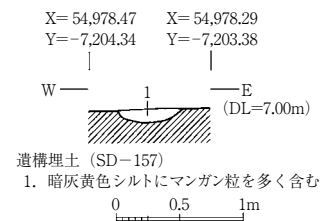
SK-120

調査区西部で検出した楕円形の土坑である。東側をSD-157、南側をSK-119に切られていたため、規模は不明であるが、深さは11cmで、埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

b.溝跡

SD-157 (Fig.60)

調査区西部で検出された南北溝で、調査区を南北に縦断している。幅0.42~0.62m、深さは5~14cmで、約7.50mを検出した。主軸方向はN-3°-Eである。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色シルトにマンガン粒を多く含むものであった。出土遺物には弥生土器片1点、須恵器片2点、土師器片1点、土師質土器片126点、瓦器片1点、古瀬戸焼片1点がみられ、土師質土器1点(1454)、古瀬戸焼1点(1455)が図示できた。



遺構埋土 (SD-157)
1. 暗灰黄色シルトにマンガン粒を多く含む
0 0.5 1m

Fig.60 SD-157

出土遺物

土師質土器 (Fig.61-1454)

1454は杯の底部破片で、底径8.0cmを測る。器面は摩耗するが、底部の切り離しは断面形態から回

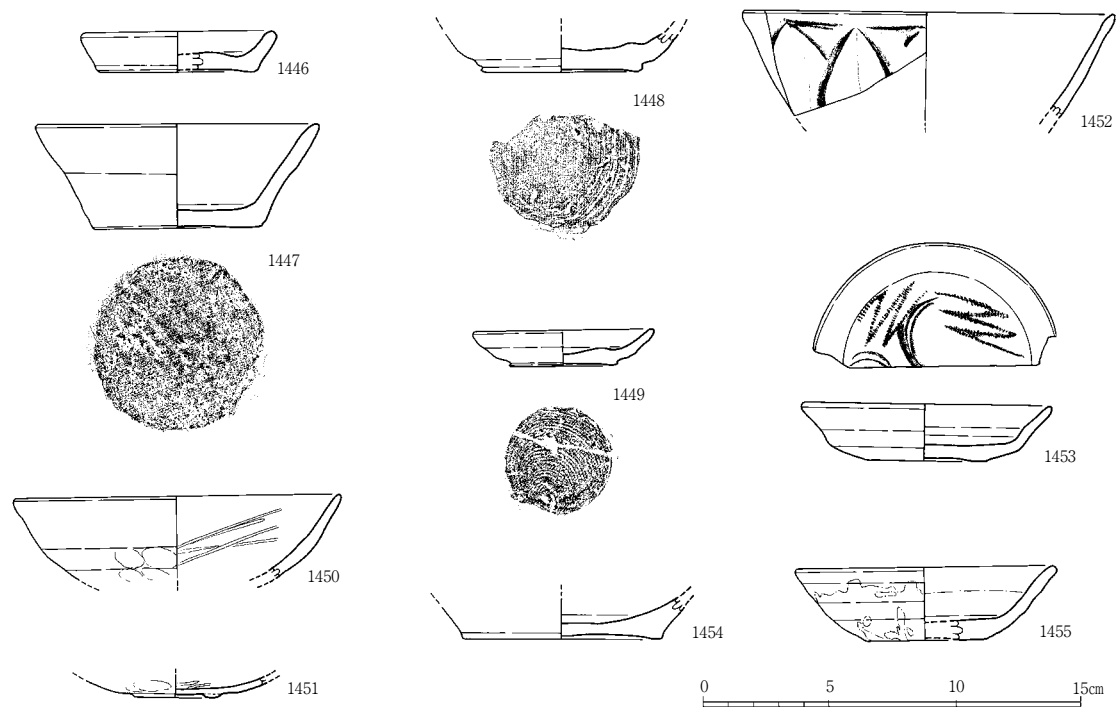


Fig.61 SK-117・118, SD-157出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1)A区

転糸切りとみられる。色調は、内面が橙色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

古瀬戸焼 (Fig.61-1455)

1455は緑釉小皿で、口径10.2cm、器高2.9cm、底径4.8cmを測る。口縁部は平坦な底部から外上方に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施し、内面全体には回転ナデ調整のあとコテを押圧する。また、体部外面下部の一部に回転ヘラ削りを施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。口縁部内面には灰オリーブ色の釉をハケヌリしており、外面にはハケヌリの際垂れ落ちたとみられる灰オリーブ色の釉が付着する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

iv 近代

a. 溝跡

SD-158

調査区西部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは17cmで、約1.80mを検出した。主軸方向はほぼ真北を向く。断面は方形を呈し、埋土はオリーブ褐色シルトに黄褐色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

SD-159

調査区西部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは11cmで、約4.10mを検出した。主軸方向はほぼ真北を向く。断面は方形を呈し、埋土はオリーブ褐色シルトに黄褐色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-160

調査区西部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは17cmで、約7.20mを検出した。主軸方向はほぼ真北を向く。断面は方形を呈し、埋土はオリーブ褐色シルトに黄褐色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片9点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-161

調査区西部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは0.31mで、約9.40mを検出した。主軸方向はほぼ真北を向く。断面は方形を呈し、埋土はオリーブ褐色シルトに黄褐色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片20点、白磁片1点、青磁片1点、近世磁器片1点がみられ、青磁1点(1456)、近世磁器1点(1457)が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.62-1456)

1456は碗の口縁部破片である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部を細く仕上げる。口縁

部内面には飛雲文を施す。器面には灰オリーブ色の釉を施し、胎土は精良で、焼成も良好である。

近世磁器 (Fig.62-1457)

1457は肥前系の染付碗で口縁部を欠損する。底径5.3cmを測り、体部は底部から内湾して立ち上がり、外底面には断面四角形の高台を削り出す。体部外面にはヘラ彫りで縦筋を施し、その間に「福」字文を入れる。器面には明緑灰色の釉を施し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-162 (Fig.37)

調査区西部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは0.28mで、約7.40mを検出した。主軸方向はN-2°-Eである。断面は方形を呈し、埋土は暗灰黄色シルトに灰黄褐色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片14点がみられ、土師質土器1点(1458)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.62-1458)

1458は杯の底部破片で、底径8.0cmを測る。器面は摩耗が著しく調整は不明である。色調は、内面が黄橙色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

SD-163 (Fig.37)

調査区西部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは13cmで、約11.90mを検出した。主軸方向はN-4°-Wである。断面は方形を呈し、埋土は暗灰黄色シルトに灰黄褐色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-164

調査区中央部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは0.21mで、約20.50mを検出した。主軸方向はN-2°-Wである。断面は方形を呈し、埋土は暗灰黄色シルトに灰黄褐色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-165 (Fig.37)

調査区西部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは15cmで、約16.10mを検出した。主軸方向はN-88°-Wである。断面は方形を呈し、埋土は暗灰黄色シルトに灰黄褐色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片8点、瓦器片1点、瓦質土器片1点、近世磁器片1点がみられ、土師質土器1点(1459)、瓦質土器1点(1460)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.62-1459)

1459は杯の口縁部破片で、口径12.2cmを測る。口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。

瓦質土器 (Fig.62-1460)

1460は羽釜の口縁部破片で、口径24.8cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は外傾する

2. 調査区の概要 (1)A区

平面をなす。口縁部外面には幅1.2cmの鋳が巡る。内面にはハケ調整、外面には回転ナデ調整を施すが、全体的に摩耗が著しい。体部外面と鋳直下には煤が付着する。色調は、内面が暗灰色、外面が黒色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-166

調査区中央部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは0.34mで、約25.90mを検出した。主軸方向はN-3°-Wである。断面は方形を呈し、埋土はオリブ黒色シルトに暗灰黄色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片7点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-167

調査区東部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは0.37mで、約31.90mを検出した。主軸方向はN-1°-Wである。断面は方形を呈し、埋土はオリブ黒色シルトに暗灰黄色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片36点、瓦質土器片1点がみられ、土師質土器1点(1461)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.62-1461)

1461は柱状高台の杯の底部破片で、底径4.8cmを測る。中空の柱状高台で、成形はロクロ水挽成形とみられ、内面は摩耗が著しく調整不明であるが、外面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-168

調査区東部で検出した溝跡で、暗渠として使用されていたものである。幅0.30m、残存していた深さは0.22mで、約18.60mを検出した。主軸方向はN-4°-Wである。断面は方形を呈し、埋土はオリブ黒色シルトに暗灰黄色シルトをブロック状に含むものであった。出土遺物には土師質土器片12点、白磁片1点がみられ、白磁1点(1462)が図示できた。

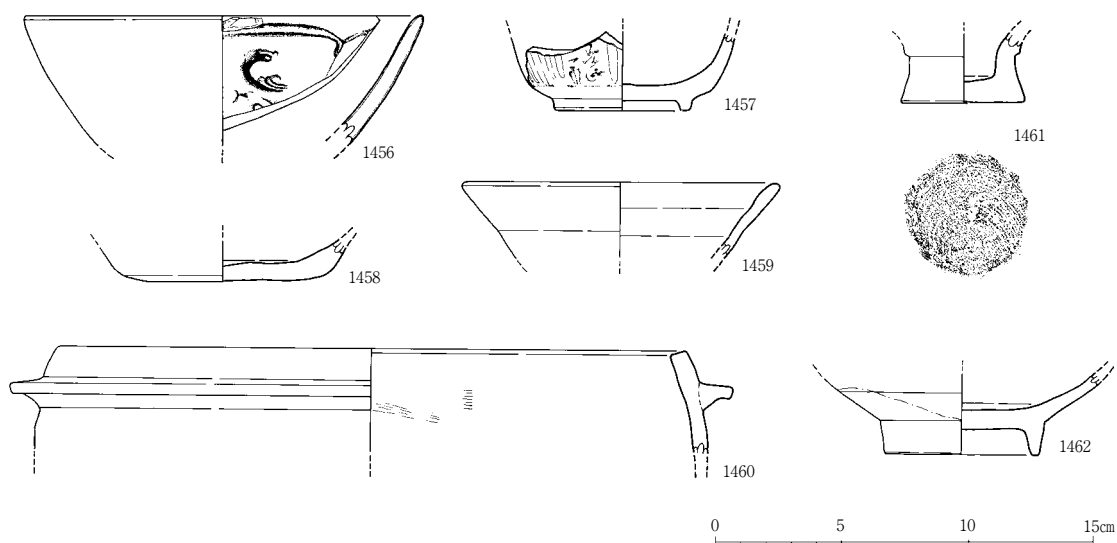


Fig.62 SD-161・162・165・167・168出土遺物実測図

出土遺物

白磁 (Fig.62-1462)

1462は碗の底部から体部にかけての破片で、底径6.1cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、外底面には細く直立した高台を削り出す。体部下半まで灰白色の釉を施す。胎土は精良で、焼成も良好である。

(2) B区

① 層序

B区の地形は南北と西が高く中央部に向かってやや傾斜しており、低い部分は水溜り状になっていたものと推察される。遺物包含層は第V層と第VI層であり、第V層は調査区全体で認められ、第VI層は若干量の遺物が散見される程度である。遺構検出面の土層(褐色シルト層)も中央部は変色しており、褐灰色に近い色合いを呈す。第VIII層以下は下層確認トレンチ(TR-1)で確認した土層である。

第I層 表土層

第II層 黄褐色(2.5Y5/3)シルト層

第III層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト層

第IV層 黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト層

第V層 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト層

第VI層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト層

第VII層 褐色(10YR4/4)シルト層

第VIII層 灰色(5Y4/2)粘土質シルト層

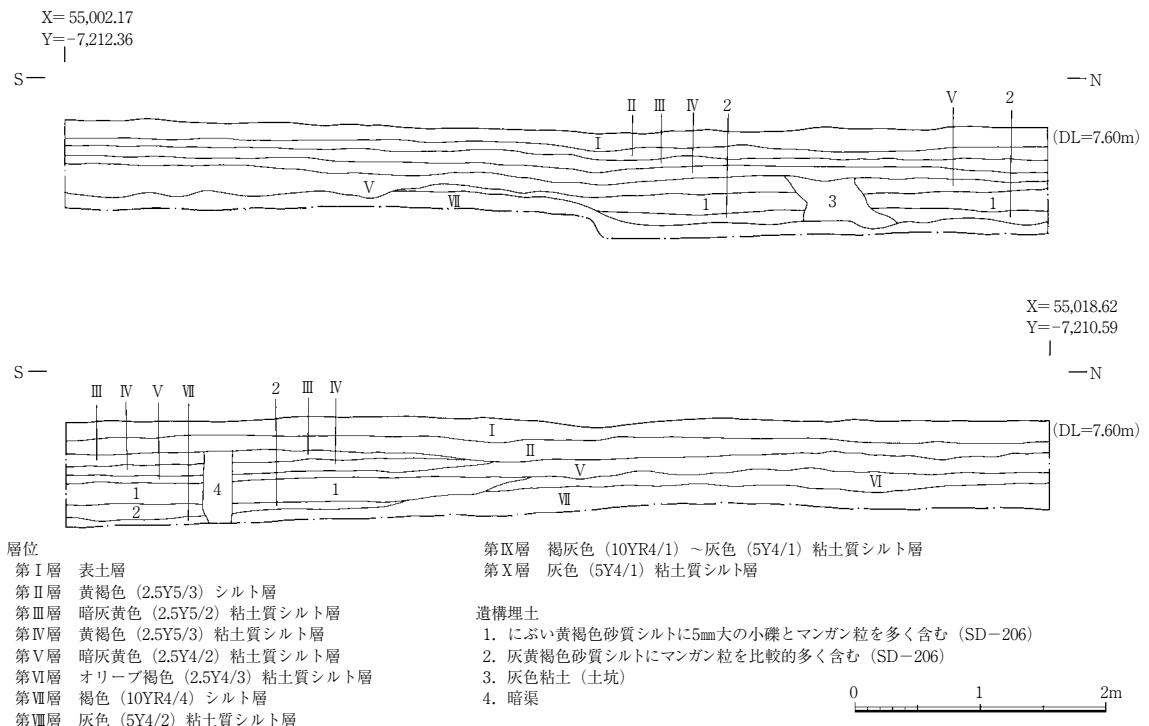


Fig.63 B区西壁セクション図

2. 調査区の概要 (2)B区

第Ⅸ層 褐灰色(10YR4/1)～灰色(5Y4/1)粘土質シルト層

第Ⅹ層 灰色(5Y4/1)粘土質シルト層

第Ⅰ層は暗褐色から灰黄色を呈す表土層で、耕作土である。

第Ⅱ層は黄褐色の小礫を含む10～15cmの厚さに堆積する自然堆積層である。第Ⅰ・Ⅱ層は調査区全体にわたって堆積していた。

第Ⅲ層は二次堆積層と考えられる。特に遺物は含まない。

第Ⅳ層も二次堆積層と考えられる。マンガン粒と若干の炭化物を含むが、遺物は包含しない。第Ⅲ・Ⅳ層は調査区南部にのみ薄く堆積する。

第Ⅴ層は中世の遺物包含層である。マンガン粒を含み調査区全体に10～20cmの厚さで堆積する。

第Ⅵ層は調査区北部の一部で認められた中世の遺物包含層であるが、包含する遺物は僅かであった。

第Ⅶ層は中世の遺構検出面となっており、調査区中央部の低い部分以外で認められた自然堆積層である。中央部より南は砂質が強くなっている。

第Ⅷ・Ⅸ層は下層確認トレンチ壁面で確認した自然堆積層であり、第Ⅷ層は粘性が強い。

第Ⅹ層はマンガン粒及び炭化物を少量ながら含んでおり、2次堆積層と考えられ、堆積は30cmを越える。

第Ⅹ層は自然堆積層と考えられる。

② 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

第Ⅰ層から出土した遺物は、ほとんど細片ばかりであるが約800点を数える。近代以降の削平が第Ⅶ層にまで及んでおり、削平の影響によって、比較的多くの遺物が混入したものと考えられる。

瓦器 (Fig.64-2001～2003)

2001は碗の口縁部から体部にかけての破片であり、口径14.4cmを測る。緩やかに内湾する口縁部であり、外面に強いヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には不明瞭ながら暗文が残る。

2002・2003は小皿である。口縁部にはヨコナデ調整を施し、外底面には指頭圧痕が残る。2002は

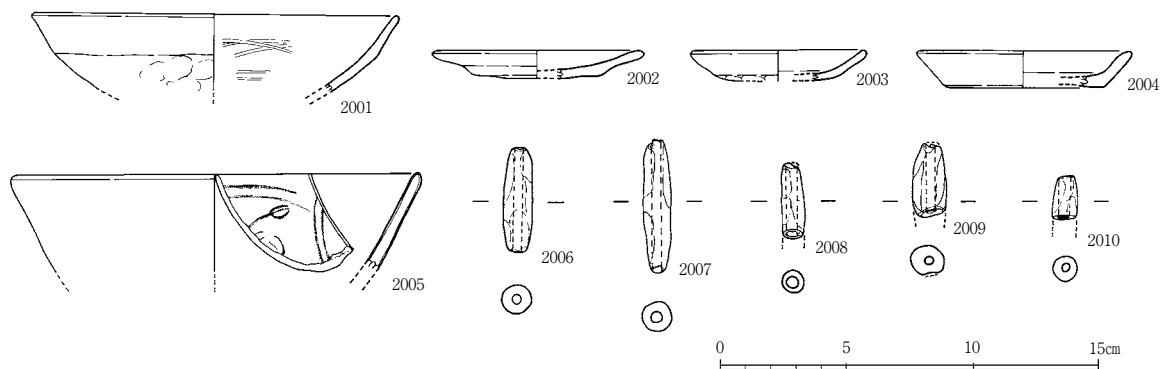


Fig.64 B区第Ⅰ層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器・青磁ほか)

口径8.5cm, 底径5.1cmを測る。2003は口縁部の約1/6が残存し, 口径6.8cm, 底径4.0cmを測る。

土師質土器 (Fig.64-2004)

2004は小皿で口縁部の約1/4が残存し, 口径8.3cm, 器高1.4cm, 底径6.2cmを測る。胎土が軟質であり, 摩耗が著しく器面調整及び, 底部の切り離しは不明である。

青磁 (Fig.64-2005)

2005は龍泉窯系の碗の口縁部破片で, 口径16.0cmを測る。外上方にほぼ真直ぐ立ち上がる口縁部であり, 内面に劃花文を施す。器面には灰オリーブ色釉を約0.3mmの厚さに施す。

土製品 (Fig.64-2006~2010)

すべて土錘で, いずれも外面には指頭圧痕が確認できる。2006は円筒形の管状土錘で完存し, 全長4.1cm, 全幅1.2cm, 孔径0.4cmを測る。2007は紡錘形の管状土錘でほぼ完存し, 全長5.3cm, 全幅1.1cm, 孔径0.4cmを測る。2008は円筒形の管状土錘で約2/3が残存し, 残存長3.0cm, 全幅0.9cm, 孔径0.5cmを測る。2009は紡錘形の管状土錘で約1/2が残存し, 残存長2.9cm, 全幅1.3cm, 孔径0.4cmを測る。2010は紡錘形の管状土錘で約1/3が残存し, 残存長1.7cm, 全幅1.0cm, 孔径0.4cmを測る。

第Ⅴ層出土遺物

土師質土器, 瓦器, 青磁など13世紀代の遺物を中心として約800点が出土している。

瓦器 (Fig.65-2011~2013)

4点とも椀である。2011は口縁部破片で, 口径13.5cmを測る。緩やかに内湾する口縁部であり, 外面には弱いヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が残り, 内面には圈線状の暗文を施す。2012は底部のみ残存するもので, 底径4.3cmを測る。外底面には断面逆三角形の小さな高台が付く。内底面には不明瞭ながら暗文が施される。2013は底部の約3/4が残存し, 底径4.4cmを測る。外底面には断面逆台形で高さ約4mmのしっかりした高台が付く。比較的器壁が厚く5mmを若干越える。内底

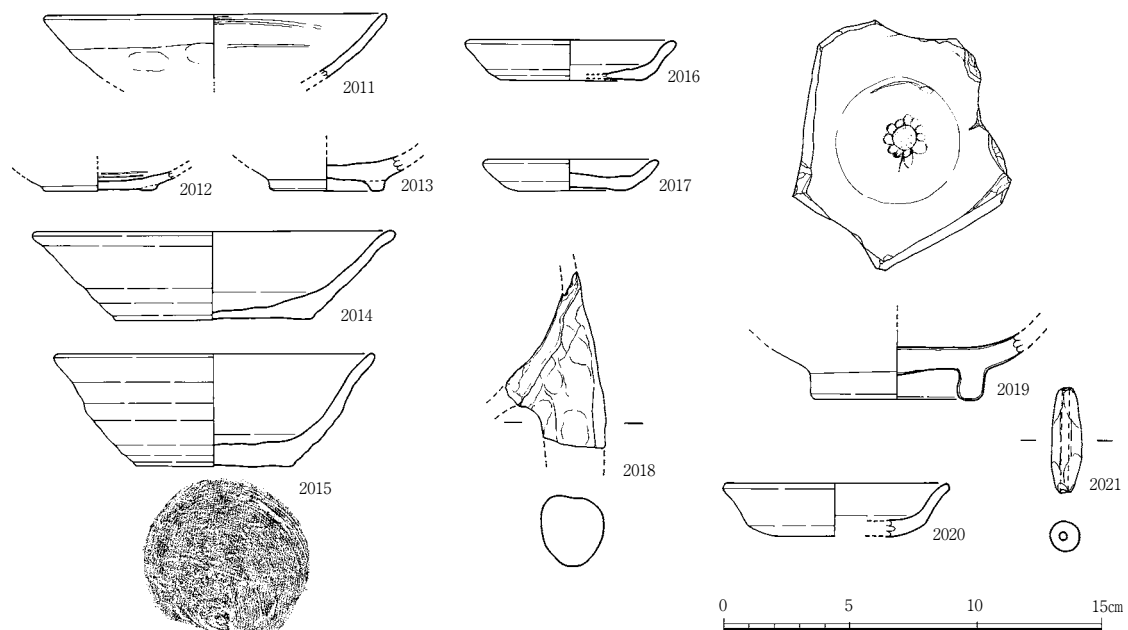


Fig.65 B区第Ⅴ層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器・瓦質土器ほか)

2. 調査区の概要 (2) B区

面は摩耗しており、暗文等は確認できなかった。

土師質土器 (Fig.65-2014~2017)

2014・2015は杯である。2014は外上方にほぼ真直ぐのびる口縁部を有する。約1/4が残存し、口径14.0cm、器高3.5cm、底径7.8cmを測る。胎土は軟質で摩耗が著しく、調整も底部の切り離しも不明である。2015は若干外反気味の口縁部を有するもので、約1/2が残存し、口径12.5cm、器高4.5cm、底径6.2cmを測る。摩耗が著しく調整は不明であるが、内底面、体部外面には顕著なロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。

2016・2017は小皿である。2016は約1/4が残存し、口径8.0cm、器高1.6cm、底径5.5cmを測る。若干外反気味の口縁部であり、胎土は軟質で摩耗しており器面調整、底部の切り離しは不明である。2017も約1/4が残存し、口径6.8cm、器高1.3cm、底径4.2cmを測る。短く上がる口縁部であり、摩耗により調整は不明である。中窪みの底部には回転糸切り痕が確認できる。

瓦質土器 (Fig.65-2018)

2018は三足釜の脚基部の破片で、残存長6.9cmを測る。外面全体に指頭圧痕が残る。

青磁 (Fig.65-2019・2020)

2019は龍泉窯系と考えられる碗で、底部のみが残存しており底径6.6cmを測る。見込には花文を印刻する。内外面ともオリーブ灰色釉を厚く施し、高台内には一部釉剥ぎを施す。

2020は皿の口縁部破片で、口径8.8cm、器高2.1cm、底径4.8cmを測る。やや外反する口縁部で、透明感の強い明オリーブ灰色釉を薄く施す。全体に貫入がみられる。

土製品 (Fig.65-2021)

2021は紡錘形の管状土錘でほぼ完存する。全長4.1cm、全幅1.2cm、孔径0.3cmを測り、外面の両端に指頭圧痕が残る。

第VI層出土遺物

遺物量は少なく、土師質土器を中心に100点余りの遺物が出土している。時期的には第V層と大差ないものとする。

弥生土器 (Fig.66-2022・2023)

2022は壺で胴部から底部にかけて残存する。底径4.2cm、胴径24.8cmを測り、小さな平底の底部と、球体に近い胴部を有す。外面には部分的にハケ目とタタキ目が残る。下胴部から底部にかけてヘラ磨きを施す。内面は底部付近までハケ調整を施し、胴部中位に指ナゲ調整を施す。所々に指頭圧痕が残る。

2023は甕で口縁部の約1/6が残存する。口

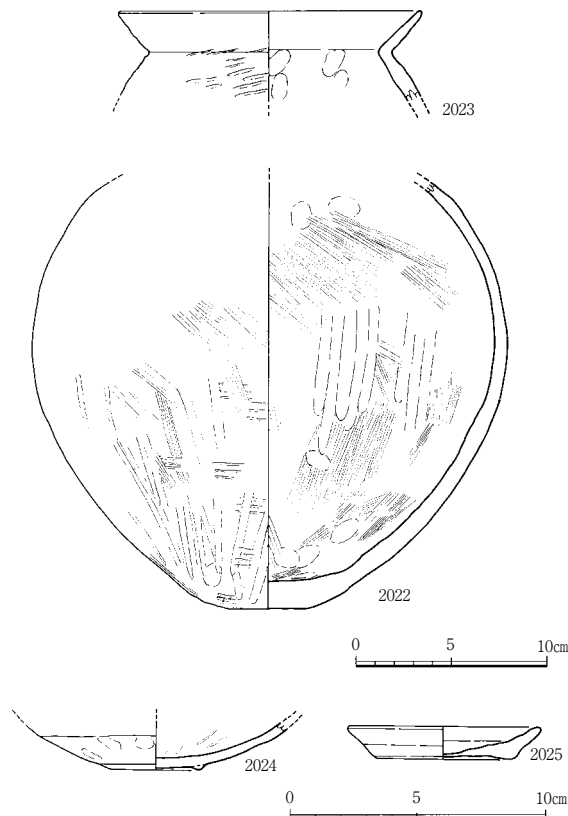


Fig.66 B区第VI層出土遺物実測図(弥生土器・瓦器・土師質土器)

径15.7cmを測り、くの字状に外傾する。外面にはタタキ目が残り、内面には指頭圧痕が残るが共に摩耗が著しく不明瞭である。

瓦器 (Fig.66-2024)

2024は椀で底部の約1/2が残存し、底径3.5cmを測る。体部外面には指頭圧痕が残る、外底面には断面逆三角形の小さな高台が付く。内底面には平行線状の暗文を施す。

土師質土器 (Fig.66-2025)

2025は小皿で約1/2が残存し、口径7.4cm、器高1.3cm、底径5.3cmを測る。短く上がる口縁部で、底部は中窪みである。摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りである。

③ 遺構と遺物

確認した遺構は掘立柱建物跡3棟、塀・柵列跡3列、土坑3基、溝跡6条、柱穴と考えられるピット、水溜り状遺構2基であった。これらの遺構は13世紀の集落の縁辺部を構成するものと考えられ、検出状況は調査区の北と南で様相を異にする。北では約250個を数えるピット群を中心に掘立柱建物跡、塀・柵列跡等を確認しており、南では溝跡や数基の土坑を検出した。これらの遺構の中では、SD-201から土師質土器等が約1,500点出土しており注目される。また、SD-206の西に位置する中世の溝は平成7年度に土佐市教育委員会が発掘調査を行った林口遺跡^①のC区SD-1に繋がるものとみられる。

i 中世

a.掘立柱建物跡

SB-201 (Fig.67)

調査区北部で検出した梁間2間(4.10~4.20m)、桁行2間(4.35~4.50m)のやや歪みのある総柱東西棟建物で、北側柱中央の柱穴は暗渠によって壊されており確認できなかった。SA-201の北、SA-202、SB-202の東に位置し、棟方向はN-85°-Wである。柱間寸法は梁間(南北)が2.00~2.30m、桁行(東西)が2.15~2.25mを測る。柱穴は径20~25cmの円形で、埋土は灰色粘土であり、所々に褐色シルトのブロックや炭化物細片が混入していた。東妻柱中央の柱穴を除くほとんどの柱穴から遺物が出土したが、瓦器及び土師質土器の細片であり復元図示できるものはなかった。

SB-202 (Fig.68)

調査区北部で検出した梁間1間(1.50~1.55m)、桁行2間(3.20~3.30m)の南北棟建物で、SB-203、SA-203の北、SA-202、SB-201の西に位置し、棟方向はN-1°-Eである。柱間寸法は梁間(東西)

Tab.3 林口遺跡第Ⅱ調査地区-B区掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規模				面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
	梁間×桁行	梁間(m)×桁行(m)	柱間寸法				
			梁間	桁行			
SB-201	2×2	4.10~4.20×4.35~4.50	2.00~2.30	2.15~2.25	18.36	N-85°-W	総柱
SB-202	1×2	1.50~1.55×3.20~3.30	1.50~1.55	1.50~1.80	4.96	N-1°-E	
SB-203	2×3	3.20~3.30×5.60~5.90	1.50~1.70	1.70~2.20	18.69	N-74°-E	

2. 調査区の概要 (2)B区

が1.50～1.55m、桁行(南北)が1.50～1.80mを測る。柱穴は径20～35cmの円形で、埋土は灰色粘土であり、ほとんどの柱穴に暗褐色粘土のブロックや炭化物細片が混入していた。北東・北西隅および東側柱中央の柱穴から土師質土器が約10点出土しているがどれも細片であり、復元図示できるものはなかった。

SB-203 (Fig.69)

調査区北部で検出した梁間2間(3.20～3.30m)、桁行3間(5.60～5.90m)の東西棟建物で、東妻柱中央の柱穴は暗渠によって切られている。また、北側柱西から1間目の柱穴も確認できなかった。SB-202, SA-203の南, SA-201の西に位置し、棟方向はN-74°-Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.50～1.70m、桁行(東西)が1.70～2.20mを測る。柱穴は径20～30cmの円形で、埋土は灰色粘土であり、所々に褐色シルトのブロックや炭化物細片が混入していた。4ヶ所の柱穴から土師質土器片6点が出土しているが復元図示できるものはなかった。

b. 扉・柵列跡

SA-201 (Fig.70)

調査区北部で検出したL字形の柵列で、SB-201の南, SB-203の東に位置し、北から1間目の柱穴が暗渠に切られている。7間分(6.45m)を検出しており柱間は0.75～1.10mを測る。柱穴は20cmの円形で、埋土は灰色粘土であり、所々に褐色シルトのブロックや炭化物細片が混入していた。4ヶ

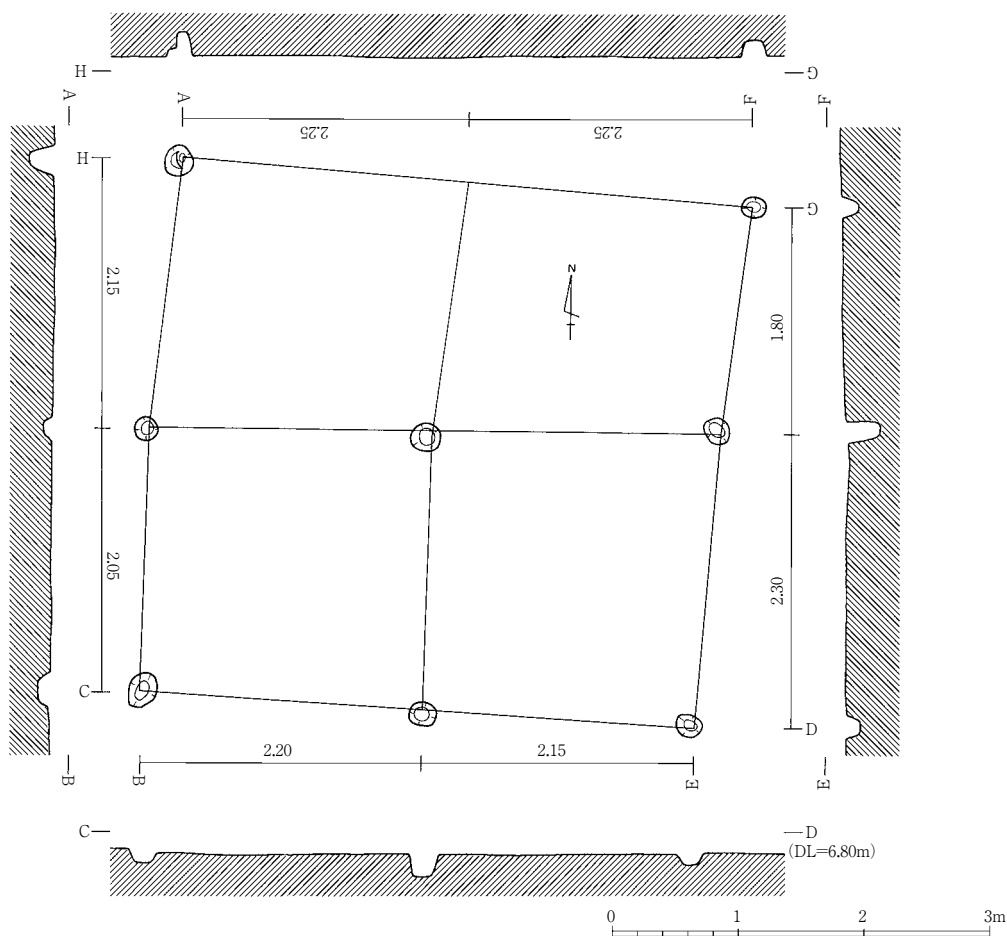


Fig.67 SB-201

所の柱穴より土師質土器片10数点が出土しているが復元図示できるものはなかった。

SA-202 (Fig.71)

調査区北部で検出した堀跡(N-3°-W)である。SB-202の1mほど東に位置し、長軸方向もほぼ同じであることからSB-202に伴う堀跡とみられる。4間分(7.20m)を検出しており、柱間は1.65~1.90mを測る。柱穴は20cmの円形で、埋土は灰色粘土であり、所々に褐色シルトのブロックが混入していた。北側3ヶ所の柱穴より土師質土器片7点が出土しているが復元図示できるものはなかった。

SA-203 (Fig.72)

調査区北部で検出した堀跡(N-72°-E)で、SB-203に伴うものと考えられる。東端の柱穴は暗渠によって切られている。3間分(4.25m)を検出しており柱間は1.25~1.60mを測る。柱穴は20cmの円形で、埋土は灰色粘土であり、所々に炭化物細片が混入していた。2ヶ所の柱穴より土師質土器片数点が出土しているが復元図示できるものはなかった。

c.土坑

SK-201 (Fig.73)

調査区東部で検出した円形と考えられる土坑で、中央部を暗渠に切られており、北東部は調査区外に続く。径2.67m、深さ19cmを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は灰色粘土にやや炭化物を含み、基底面には炭化物が3~4cm堆積していた。出土遺物は須恵器片、瓦器片、土師質土器片等約40点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-202 (Fig.74)

調査区南部で検出した楕円形を呈する土坑で、中央部を暗渠に切られていた。長径1.43m、短径0.74m、深さ0.39mを測り、長軸方向はN-27°-Wで、断面は箱形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで、若干の炭化物を含んでいた。出土遺物は土師質土器片5点がみられたが、復元図示で

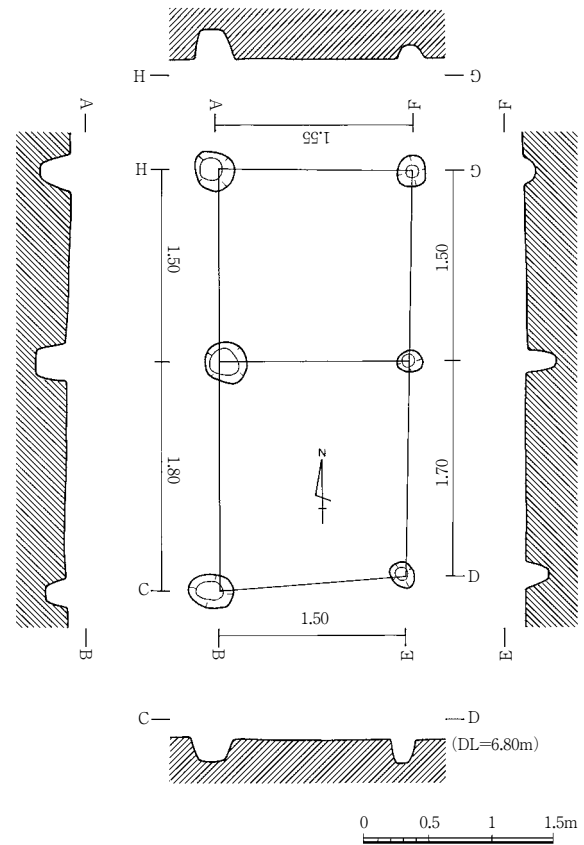


Fig.68 SB-202

Tab.4 林口遺跡第Ⅱ調査地区-B区堀・柵列跡計測表

遺構番号	規模			方向 (NはGN)	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA-201	8	6.45	0.75~1.10	-	L字形
SA-202	5	7.20	1.65~1.90	N-3°-W	
SA-203	4	4.25	1.25~1.60	N-72°-E	

2. 調査区の概要 (2)B区

きるものはなかった。

SK-203

調査区北部で検出した舟形を呈する土坑で、中世のピットと暗渠に切られていた。長径4.58m, 短径0.89m, 深さ8cmを測り, 長軸方向はN-15°-Wで, 断面は逆台形を呈する。埋土は2層に分層でき, 上層が暗灰黄色粘土質シルトでマンガン粒及び炭化物を含むもの, 下層がオリーブ褐色粘土質シルトでマンガン粒を含むものであった。出土遺物は須恵器片1点, 瓦器片2点, 土師質土器片23点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

Tab.5 林口遺跡第Ⅱ調査地区-B区土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			長軸方向 (NはGN)	時期	備考
		長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (m)			
SK-201	円形	2.67	—	0.19	—	中世	
SK-202	楕円形	1.43	0.74	0.39	N-27°-W	中世	
SK-203	舟形	4.58	0.89	0.08	N-15°-W	中世	

d.溝跡

SD-201 (Fig.75)

調査区南東部で15.00mに渡って検出した南北溝で, 南部, 北部ともに調査区外に続く。幅1.73~3.21m, 深さ0.49mを測り, 2ヶ所を暗渠に切られ, SD-202・205を切る。断面はU字状を呈し, 基

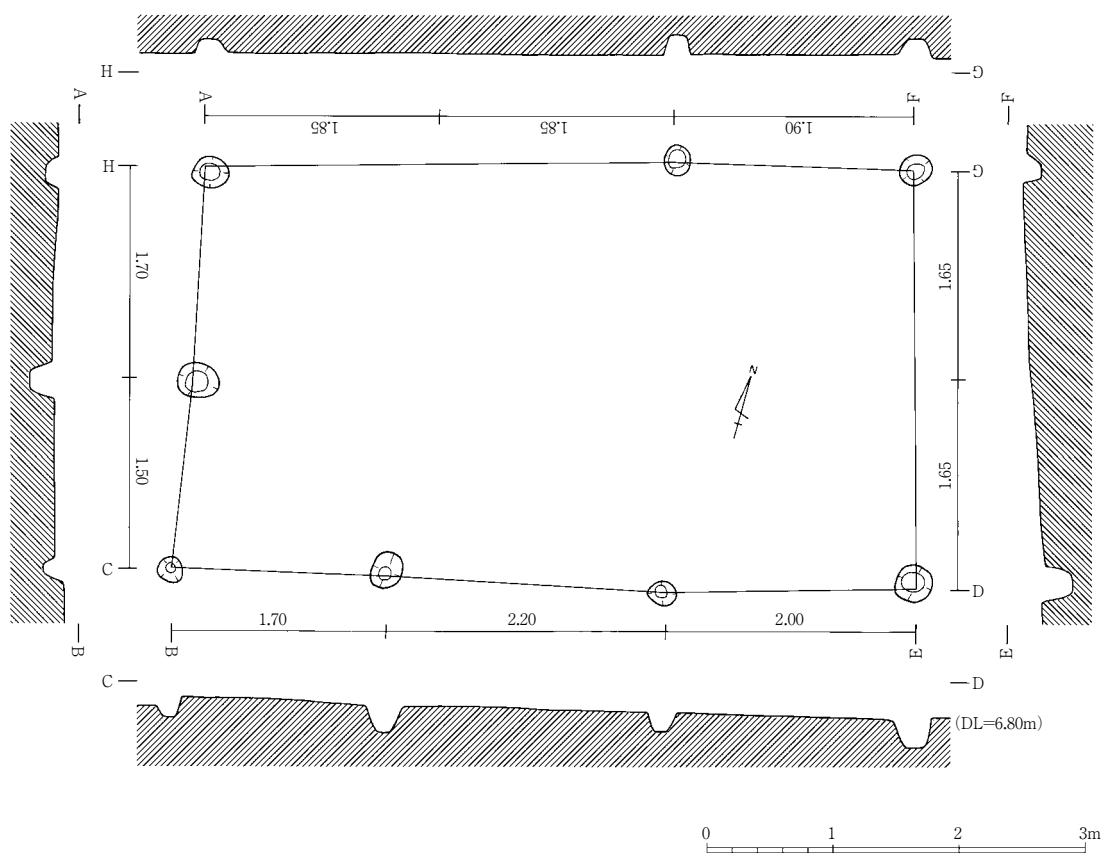


Fig.69 SB-203

底面は北へ傾斜する。埋土は3層に分層でき、1層が暗灰色粘土質シルトで褐色シルトのブロックとマンガン粒を含むもの、2層が黒褐色粘土質シルトで木片等の有機物を多く含むもの、3層が黄灰色粘土質シルトで暗灰色粘土のブロックを含むものであった。本調査区の遺構の中では出土遺物が最も多く、1層からは須恵器片4点、瓦器片26点、土師質土器片約1,100点、瓦質土器片1点が出土した。土師質土器片約1,100点のうち、杯は156点、小皿は123点を数える。復元図示できたものは須恵器1点(2026)、瓦器3点(2027~2029)、土師質土器40点(2030~2069)であった。2層からは須恵器片2点、瓦器片6点、土師質土器片約400点、白磁片1点が出土しており、土師質土器には杯28点、小皿17点を含む。復元図示できたものは土師質土器11点(2070~2080)であった。3層からは須恵器片1点、土師質土器片約70点が出土しており、土師質土器には杯16点、小皿10点を含む。土師質土器20点(2081~2100)、白磁1点(2101)が復元図示できた。

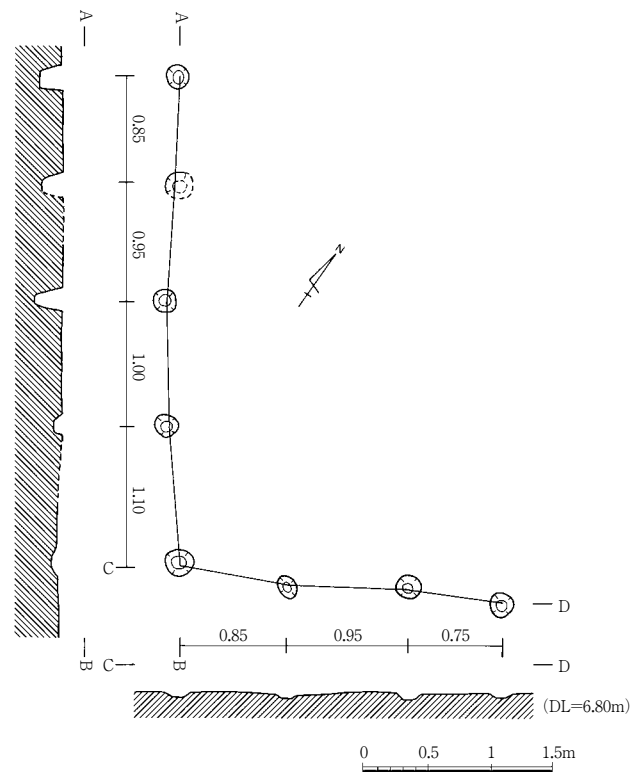


Fig.70 SA-201

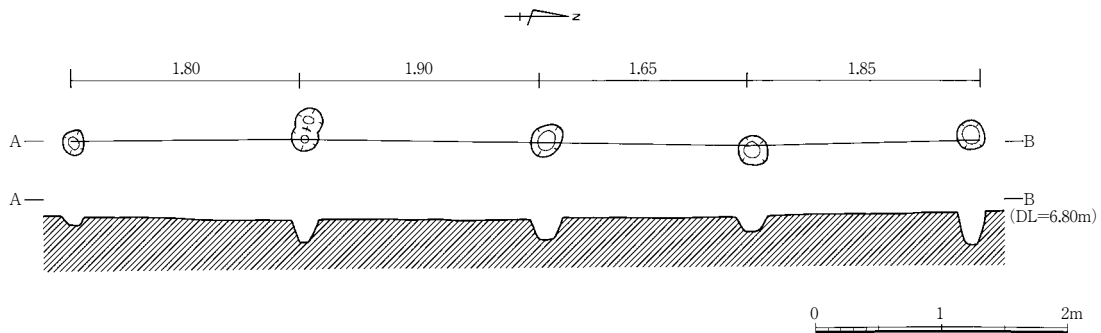


Fig.71 SA-202

出土遺物

須恵器 (Fig.77-2026) : 1層出土

2026は杯で約1/6が残存し、口径14.4cmを測る。底部は欠損しており、口縁部は外上方にほぼ真直ぐ上がる。内外面とも回転ナデ調整を施す。

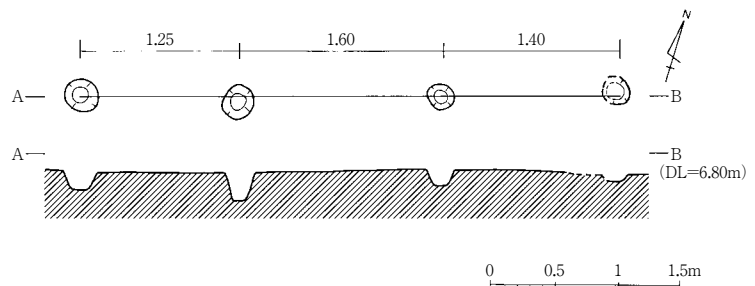


Fig.72 SA-203

2. 調査区の概要 (2)B区

瓦器 (Fig.77-2027~2029) : 1層出土

2027~2029は椀である。2027は口縁部から体部にかけて約1/8が残存し、口径13.6cmを測る。緩やかに内湾する口縁部であり、外面に強いヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には圏線状の暗文を施す。2028は口縁部破片で、口径14.2cmを測る。外上方にほぼ真直ぐのびる口縁部で、ヨコナデ調整はあまり強くない。体部外面には不明瞭ながら指頭圧痕が残る。2029は底部の約1/2が残存し、底径3.8cmを測る。外底面には高さ約1mmの小さな高台が付く。内底面には平行線状の暗文を施す。

土師質土器 (Fig.77・78-2030~2069) : 1層出土

2030~2044は杯である。2030~2032は外上方にほぼ真直ぐ上がる口縁部を有するものである。2030は約1/6が残存し、口径15.1cm, 器高4.5cm, 底径8.7cmを測る。底部は中窪みとなっており、成形はロクロ水挽成形とみられる。胎土が軟質で摩耗が著しく調整も底部の切り離しも不明であるが、体部外面にはロクロ目が顕著に残る。2031は約1/6が残存するが、口縁部はほとんど欠損する。口径14.5cm, 器高3.8cm, 底径8.3cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられる。摩耗が著しく調整は不明であるが、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。2032は約1/2が残存し、口径12.8cm,

器高3.6cm, 底径6.3cmを測る。成形はロクロ水挽成形であり、体部には回転ナデ調整を施すものと考えられる。底部の切り離しは回転糸切りである。焼成は不良で、器面は灰白色を呈す。2033~2035はやや外反する口縁部を有するものである。2033は約1/6が残存し、口径13.8cm, 器高3.7cm, 底径6.8cmを測る。胎土が軟質であり、調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。2034は約3/4が残存し、口径13.4cm, 器高3.7cm, 底径7.0cmを測る。内底面には凹凸がみられ、歪みが激しい。調整は不明であり、底部の切り離しは回転糸切りである。2035は約1/5が残存し、口径13.2cm, 器高3.9cm, 底径5.8cmを測る。胎土が軟質であり、調整も底部の切り離しも不明である。2036~2038はやや内湾する口縁部を有するもので、どれも底部は中窪みである。2036は約1/6が残存し、口径13.6cm, 器高3.4cm, 底径7.5cmを測る。成形はロクロ水挽成形

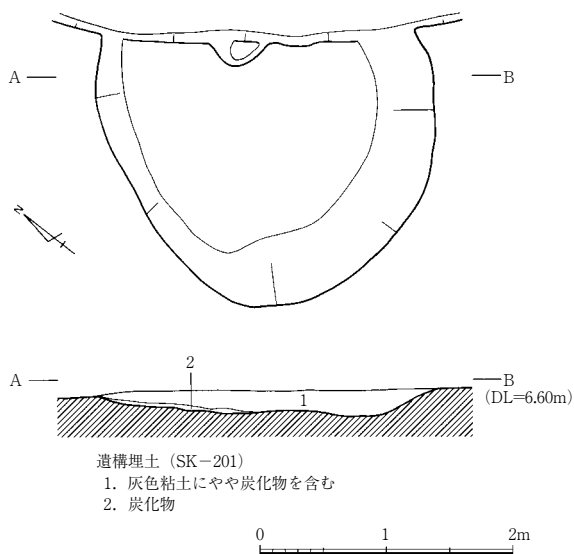


Fig.73 SK-201

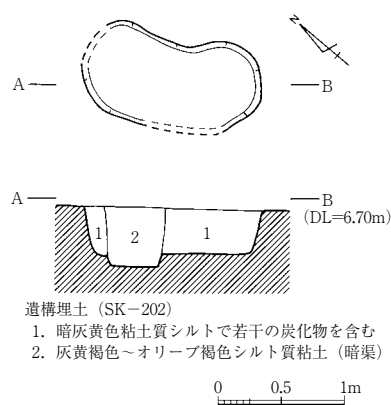


Fig.74 SK-202

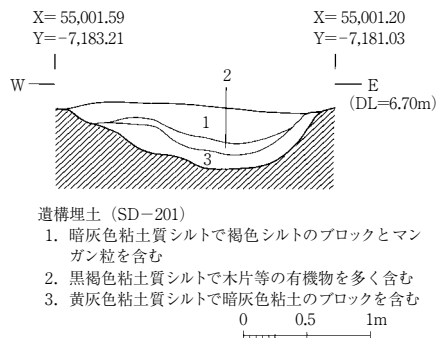


Fig.75 SD-201

とみられる。胎土が軟質で摩耗が著しく、調整も底部の切り離しも不明である。2037は約1/4が残存し、口径13.2cm、器高4.0cm、底径7.2cmを測る。体部内外面には回転ナデ調整を施し、全体にロクロ目が顕著に残る。底部の切り離しは回転糸切りである。焼成が不良で、断面は暗灰色を呈す。2038は約1/3が残存し、口径13.1cm、器高3.9cm、底径6.5cmを測る。成形はロクロ水挽成形とみられる。胎土は軟質で摩耗が著しく調整、底部の切り離しは不明である。2039は口縁部の約1/3が残存するもので、底部は欠損する。やや外反する口縁部で、口径13.8cmを測る。胎土が軟質であり摩耗が著しく、調整も底部の切り離しも不明である。2040・2041は口縁部を欠くもので、体部は外上方へほぼ真直ぐのびる。2040は底部から体部にかけて残存しており、底径6.4cmを測る。摩耗により調整は不明であるが、内外面にロクロ目が顕著に残る。底部の切り離しは回転糸切りである。2041は底部の約2/3が残存し、底径7.2cmを測る。摩耗により調整は不明であるが、内底面にロクロ目が残る。外底面も摩耗しており不明瞭であるが、回転糸切り痕が確認できる。焼成は不良で、器面は灰

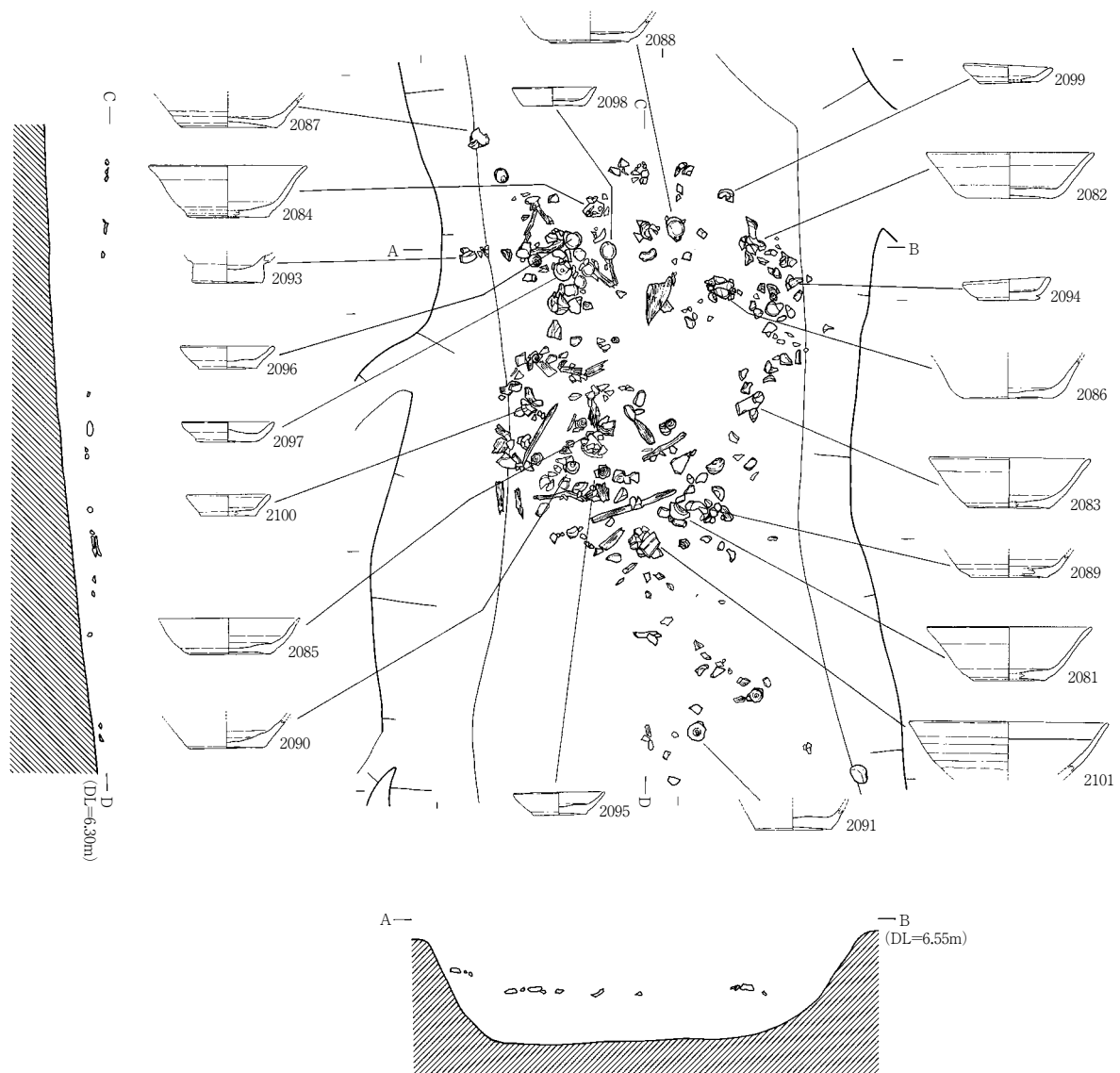


Fig.76 SD-201遺物出土状態

2. 調査区の概要 (2)B区

白色から灰色を呈す。2042～2044は体部がやや内湾しつつのびるものである。2042は底部の約1/3が残存し、底径7.0cmを測る。中窪みであり、器面調整は不明であるが、外底面には回転糸切り痕が残る。2043は底部から体部にかけて残存しており、底径7.0cmを測る。摩耗により調整は不明であるが、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。2044は底部の約1/3が残存し、底径6.8cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。焼成は不良であり、断面は暗灰色を呈す。

2045～2069は小皿である。2045～2051は口縁部が外上方にほぼ真直ぐ上がり、比較的大きく開くものである。2045は約1/3が残存し、口径7.4cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測る。口縁部をやや厚く、

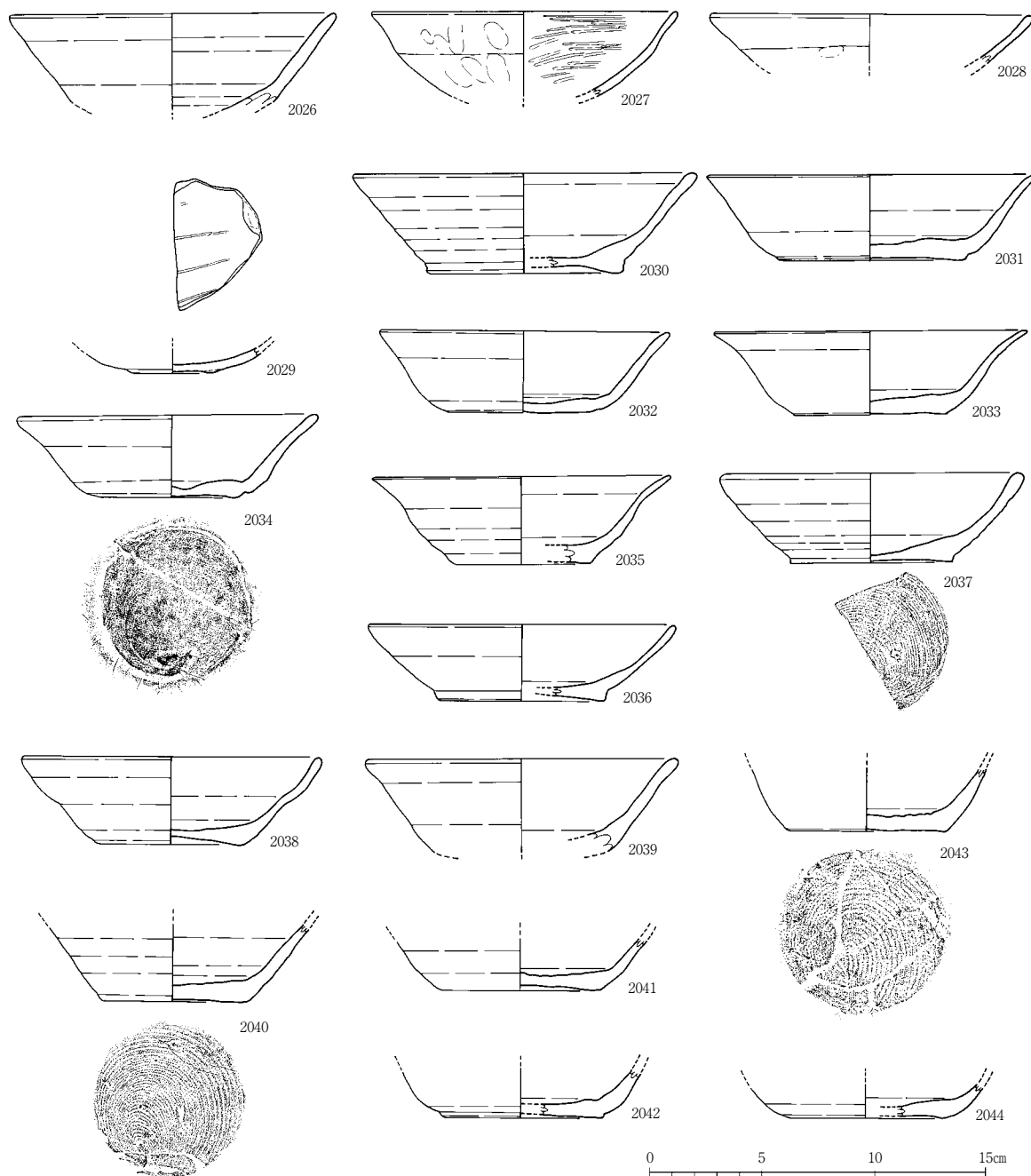


Fig.77 SD-201出土遺物実測図1

丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。2046も約1/3が残存し、口径7.4cm、器高1.7cm、底径5.4cmを測る。これも器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。器壁は厚く、焼成が不良であり内外面とも褐灰色を呈す。胎土には砂粒を多く含む。2047も約1/3が残存し、口径7.0cm、器高1.4cm、底径4.4cmを測る。口縁部が大きく歪むかなり粗雑な製品であるが、回転ナデ調整が確認できる。底部の切り離しは回転糸切りである。2048は約1/5が残存し、口径6.4cm、器高1.5cm、底径3.9cmを測る。これも器面に回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。2049は口縁部の一部を欠損し、口径8.4cm、器高1.8cm、底径6.0cmを測る。口縁部を厚く、丸く仕上げる。摩耗が著しく調整は不明で、底部の切り離しも不明瞭であるが回転糸切り痕が残る。2050も口縁部の一部を欠損し、口径8.0cm、器高2.0cm、底径4.5cmを測る。摩耗しており器面調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。2051は約1/3が残存し、口径8.2cm、器高1.6cm、底径5.6cmを測る。底部は中窪みであり、摩耗が著しく、調整も底部の切り離しも不明である。2052～2060は口縁部が短く上がるものである。2052～2054は器面に回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。いずれも1/2～1/4が残存する。焼成は不良であり、断面が黒褐色から暗灰色を呈す。2052は口径7.4cm、器高1.1cm、底径5.4cm、2053は口径7.2cm、器高1.2cm、底径5.2cm、2054は口径7.2cm、器高1.2cm、底径5.6cmを測る。2055～2060は摩耗が著しく、調整も底部の切り離しも不明である。2055は約1/5が残存し、口径7.8cm、器高1.1cm、底径5.6cmを測り、2056は約1/3が残存し、口径7.8cm、器高1.2cm、底径5.8cmを測る。2057は約2/3が残存し、口径7.6cm、器高1.4cm、底径6.3cmを測る。全体的に作りが雑で口縁部はやや歪み、内底面は凹凸が激しい。2058は約4/5が残存し、口径7.3cm、器高1.4cm、底径5.6cmを測る。2059はほぼ完存するが、底部中央が一部欠損する。口径7.3cm、器高1.1cm、底径5.3cmを測る。2060は約1/3が残存するが、底部はほとんど欠損する。口径6.8cm、器高1.4cm、底径5.4cmを測る。2061～2065は若干外反気味の口縁部を有するものである。2061・2062は口縁部に回転ナデ調整を施しており、底部の切り離しは回転糸切りである。2061はほぼ完存し、口径8.0cm、器高1.6cm、底径4.6cmを測り、2062は約1/2が残存

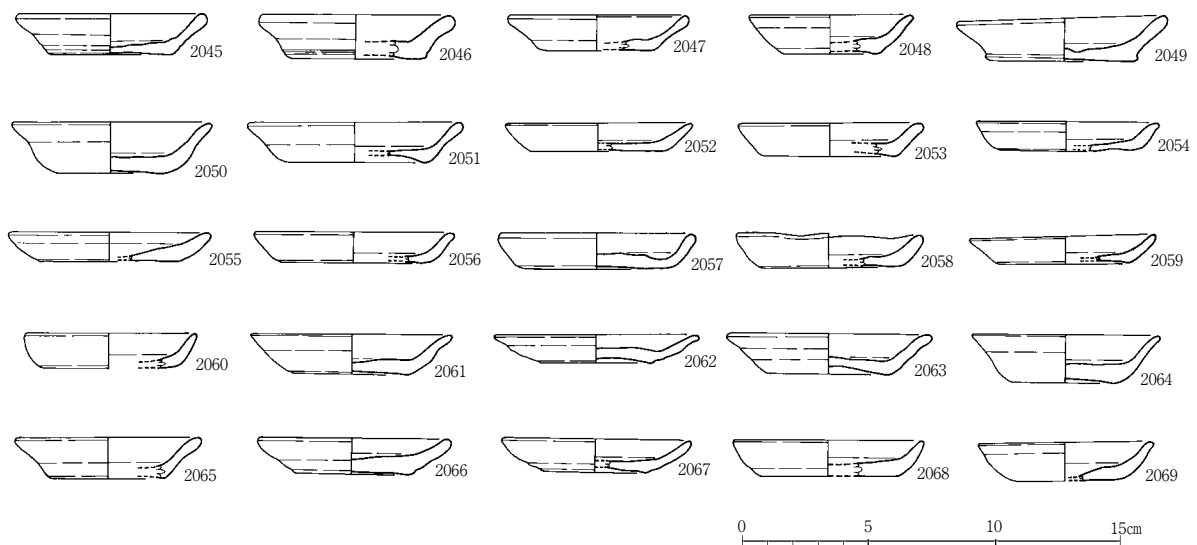


Fig.78 SD-201出土遺物実測図2

2. 調査区の概要 (2)B区

し、口径8.0cm、器高1.1cm、底径4.4cmを測る。底部は中窪みである。2063・2064はともに器面調整は不明であるが、中窪みの底部には回転糸切り痕が確認できる。2063は約1/3が残存し、口径7.8cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測り、2064は約1/5が残存し、口径7.4cm、器高1.9cm、底径4.2cmを測る。2065は口縁部の約1/3が残存するが、底部はほとんど欠損する。口径7.2cm、器高1.7cm、底径4.4cmを測る。摩耗により調整は不明である。2066～2069はやや内湾気味の口縁部を有するものである。2066は完存し、口径7.5cm、器高1.5cm、底径4.6cmを測る。やや摩耗しているが、器面は回転ナデ調整で仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りである。2067は約1/2が残存し、口径7.6cm、器高1.3cm、底径4.2cmを測る。底部は中窪みで、器面調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りである。2068・2069は摩耗が著しく、調整も切り離しも不明である。ともに約1/5が残存する。2068は口径7.4cm、器高1.4cm、底径5.5cmを測り、2069は口径7.0cm、器高1.5cm、底径4.0cmを測る。

土師質土器 (Fig.79-2070～2080) : 2層出土

2070～2073は杯である。2070・2071は口縁部が外上方にはほぼ真直ぐのびる。2070は約1/6が残存し、口径13.6cm、器高4.2cm、底径8.2cmを測る。摩耗が著しく調整、底部の切り離しは不明である。2071も約1/6が残存し、口径12.4cm、器高4.2cm、底径6.0cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。摩耗が著しく調整、底部の切り離しは不明である。2072は約1/2が残存し、口径13.6cm、器高3.9cm、底径6.8cmを測る。若干内湾する体部と、やや外反気味の口縁部を有する。全体的に摩耗しており調整は不明であるが、体部外面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。焼成は不良であり、断面の一部は暗灰色を呈す。2073は底部のみ完存するもので、底径6.2cmを測る。摩耗が著しく調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りである。焼成は不良で、断面は暗灰色を呈す。

2074～2080は小皿である。2074・2075は外上方に比較的大きく開く口縁部を有するもので、器高も高い。2074は約2/3が残存し、口径7.7cm、器高2.3cm、底径4.4cmを測る。底部の切り離しは回転糸

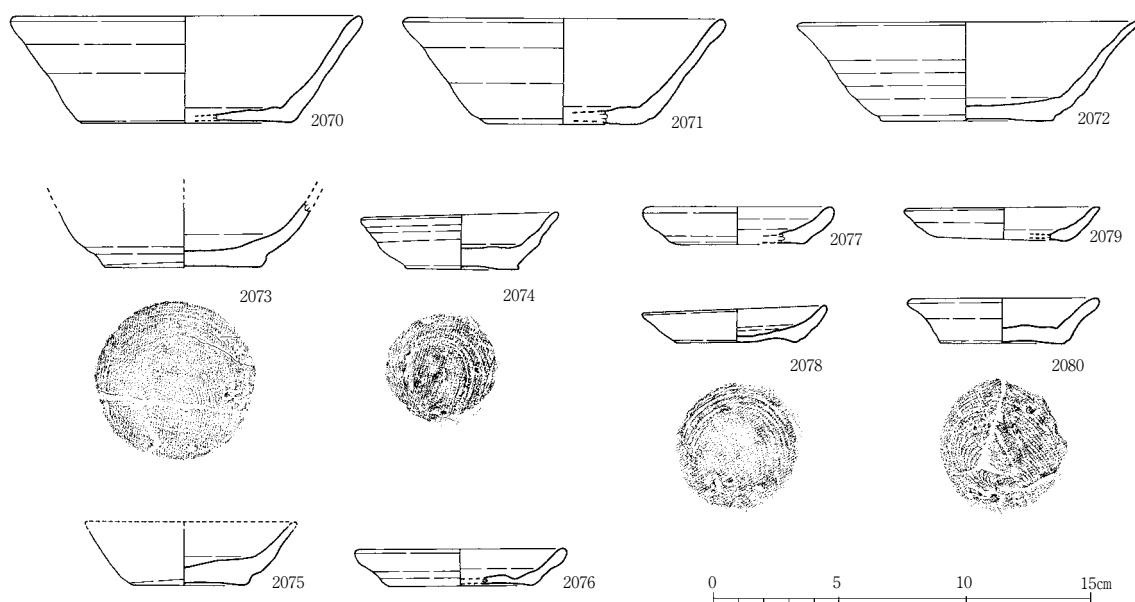


Fig.79 SD-201出土遺物実測図3

切りである。2075は底径4.6cmを測る。口縁端部が欠損するものの、口径は8.0cm、器高は2.5cmを越えると考えられる。摩耗が著しく調整、底部の切り離しについては不明である。2076～2079は口縁部が短く上がるものである。2076は約1/4が残存し、口径8.0cm、器高1.5cm、底径5.6cmを測る。回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。堅緻であるが、焼成不良で断面の一部は黒灰色を呈す。2077は約1/6が残存し、口径7.2cm、器高1.5cm、底径5.0cmを測る。これも回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。内外面、断面とも灰白色を呈す。2078は完存し、口径7.2cm、器高1.5cm、底径4.8cmを測る。胎土が軟質で調整は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りである。2079は約1/2が残存し、口径7.6cm、器高1.3cm、底径5.3cmを測る。摩耗が著しく調整も底部の切り離しも不明である。2080は若干外反気味の口縁部を有する。完存し、口径7.4cm、器高1.8cm、底径4.9cmを測る。器面は摩耗しており、不明瞭であるが回転ナデ調整を施すものと考えられる。底部の切り離しは回転糸切りである。

土師質土器 (Fig.80-2081~2100) : 3層出土

2081～2093は杯である。2081～2083は口縁部が外上方にほぼ真直ぐのびるものである。2081は約1/3が残存し、口径13.8cm、器高4.5cm、底径6.0cmを測る。成形はロクロ水挽成形とみられ、体部外面に回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。焼成が不良で断面は灰色を呈す。2082は約1/2が残存し、口径13.8cm、器高3.8cm、底径7.2cmを測る。底部はやや中窪みとなっており、体部には回転ナデ調整を施し、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。2083は約1/2が残存し、口径13.4cm、器高4.2cm、底径7.0cmを測る。底部はやや中窪みとなっている。成形はロクロ水挽成形とみられる。器面は摩耗するが、底部の切り離しは回転糸切りである。2084は緩やかに外反する口縁部を有するもので、約1/3が残存し、口径13.2cm、器高4.3cm、底径6.8cmを測る。成形はロクロ水挽成形とみられ、内面には回転ナデ調整を施す。体部外面にはロクロ目が顕著に残る。底部の切り離しは回転糸切りである。2085は底部の約1/2が残存し、底径6.6cmを測る。底部は中窪みであり、口縁端部は欠損するが、器高は低いものと考えられる。器面は摩耗するが、底部の切り離しは回転糸切りである。2086～2091は、体部が外上方にほぼ真直ぐ上がるものである。2086は底部の約3/4が残存し、底径7.6cmを測る。摩耗が激しいが、内面には回転ナデ調整を施しており、外底面には回転糸切り痕が確認できる。内底面にはロクロ目が顕著に残る。胎土には砂粒を多く含む。2087は底部の約3/4が残存し、底径8.0cmを測る。中窪みの底部であり、胎土は軟質で摩耗が著しく、調整は不明であるが、外底面には回転糸切り痕が確認できる。2088は底部のみ完存し、底径6.6cmを測る。やや中窪みとなっており、器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土には砂粒を多く含む。2089は底部の約1/2が残存し、底径6.5cmを測る。外面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土には砂粒を多く含む。焼成は不良で、器面は灰白色から灰色を呈す。2090は底部のみ完存し、底径6.1cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。2091も底部のみ完存し、底径6.4cmを測る。摩耗が著しく調整は不明であるが、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。2092は底部の約1/2が残存し、底径6.8cmを測る。体部はやや内湾気味に上がるものと考えられる。摩耗が著しく、調整も底部の切り離しも不明である。内底面には不

2. 調査区の概要 (2)B区

明瞭ながらロクロ目が残る。2093は底部のみ完存し、底径5.8cmを測る。高さ1.5cmの柱状高台であり、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。

2094～2100は小皿で、いずれも口縁部が外上方に真直ぐ上がる。2094は約1/3が残存し、口径7.2cm, 器高1.8cm, 底径5.3cmを測る。器面調整は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。回転ナデ調整が認められるものはこの1点のみで、他は摩耗が著しく器面調整は不明である。底部の切り離しはいずれも回転糸切りである。2095は約2/3が残存し、口径7.8cm, 器高1.9cm, 底径4.6cmを測る。底部は中窪みである。2096は口縁部の一部を欠損し、口径7.7cm, 器高1.9cm, 底径4.8cmを測る。底部は中窪みである。2097も口縁部の一部を欠損し、口径

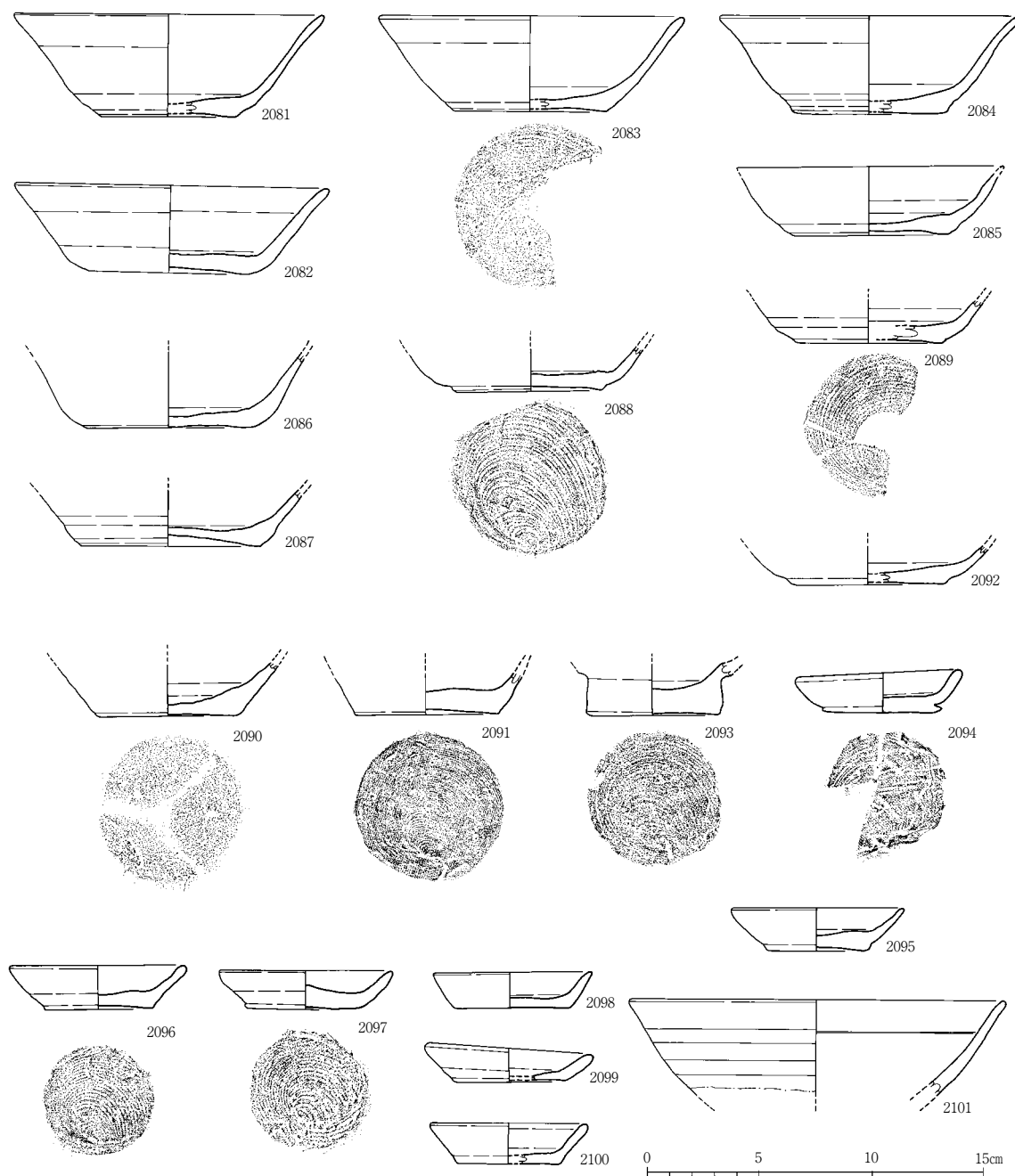


Fig.80 SD-201出土遺物実測図4

7.7cm, 器高1.8cm, 底径5.1cmを測る。内外面, 断面とも灰色ないし灰白色を呈し, 胎土には砂粒を多く含む。2098はほぼ完存し, 口径7.2cm, 器高1.6cm, 底径5.0cmを測る。外底面に5mm大の粘土粒が付着している。2099は約1/2が残存し, 口径7.2cm, 器高1.5cm, 底径4.7cmを測る。焼成が不良で, 断面は灰色を呈す。2100は約1/3が残存し, 口径6.8cm, 器高1.8cm, 底径4.4cmを測る。

白磁 (Fig.80-2101) : 3層出土

2101は碗で口縁部の約1/4が残存し, 口径16.6cmを測る。やや内湾する口縁部で, 端部を丸くおさめ, 内面には1条の沈線を巡らせる。明オリーブ色釉を全体に薄く施すが, 体部外面は一部露胎である。

SD-202

調査区南東部で11.90mに渡って検出した南北溝である。幅0.41~0.69m, 深さ9cmを測り, 溝の北端をSD-201に切られていた。断面はU字状を呈し, 基底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分層でき, 上層が暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を多く含むもの, 下層が灰オリーブ色粘土質シルトにマンガン粒を少し含むものであった。出土遺物には須恵器片2点, 瓦器片2点, 土師質土器片41点がみられ, 土師質土器1点 (2102) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.83-2102)

2102は小皿で口縁部の約1/6が残存し, 口径8.8cm, 器高1.4cm, 底径6.0cmを測る。摩耗が著しく, 調整も底部の切り離しも不明である。胎土には砂粒を多く含む。

SD-203 (Fig.81)

調査区南部で16.30mに渡って検出した東西溝である。幅0.54~0.80m, 深さ11cmを測り, SD-204に切られ, SD-205を切る。暗渠には7ヶ所ほどを切られていた。断面はU字状を呈し, 基底面は東へ緩やかに傾斜する。埋土は灰褐色シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には弥生土器細片10点がみられたが, 復元図示できたものはなかった。

SD-204 (Fig.81)

調査区南西部で21.70mに渡って検出した南北溝で, 南部は調査区外に続く。幅0.42~0.85m, 深さ18cmを測り, 暗渠に6ヶ所ほどを切られ, SD-203・205を切る。断面は逆台形を呈し, 一部に段を有す。基底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰黄色シルト質粘土に褐色シルトのブロックと炭化物を含むものであった。出土遺物には弥生土器細片11点, 瓦器片3点, 土師質土器片32点がみられ, 弥生土器1点 (2103) が図示できた。

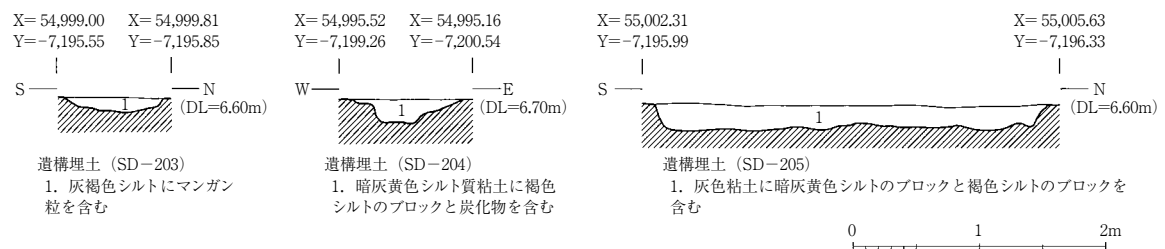


Fig.81 SD-203~205

2. 調査区の概要 (2)B区

出土遺物

弥生土器 (Fig.83-2103)

2103は壺の底部から胴部にかけての破片である。底径4.7cmを測る小さな平底で、胴部は球体に近いものと考えられる。外面にはハケ目とタタキ目が残るが、摩耗が著しく不明瞭である。内面は底部付近まで指ナデ調整を施す。

SD-205 (Fig.81)

調査区中央部で22.00mに渡って検出した東西溝である。幅2.80~3.50m、深さ0.22mを測り、暗渠に9ヶ所ほどを切られ、SD-201・203・204にも切られていた。断面は逆台形を呈し、基底面はほぼ平坦である。埋土は灰色粘土に暗灰黄色シルトのブロックと褐色シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には須恵器片8点、瓦器片4点、土師質土器片約60点がみられ、瓦器1点(2104)と土師質土器3点(2105~2107)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.83-2104)

2104は椀の口縁部破片で、口径13.3cmを測る。緩やかに内湾する口縁部であり、外面にヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には暗文が残る。

土師質土器 (Fig.83-2105~2107)

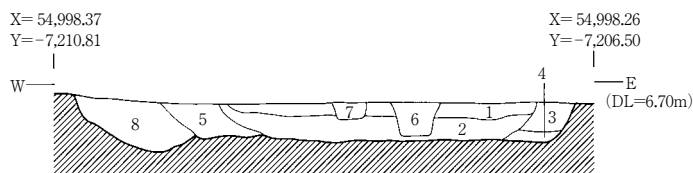
2105は杯で、底部の約1/2が残存し、底径7.2cmを測る。体部は外上方に真直ぐのびる。摩耗が著しく調整は不明であるが、内底面と体部外面には顕著なロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。焼成は不良で器面の一部が暗灰色を呈す。

2106・2107は小皿で口縁部は外上方へほぼ真直ぐ上がる。ともに器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは、回転糸切りである。2106は口縁部がやや欠損し、口径8.2cm、器高1.3cm、底径5.0cmを測る。内面はかなり摩耗する。2107は完存し、口径8.0cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測る。胎土は細砂粒を含み、堅緻である。

SD-206 (Fig.82)

調査区南西部で21.60mに渡って検出した南北溝で南部、北部とも調査区外に続く。幅2.40~3.30m、深さ0.27mを測り、暗渠に2ヶ所を切られ、中世の溝を切っていた。断面は逆台形を呈し、基底面は南へ緩やかに傾斜する。埋土は

5層に分層され、1層がにぶい黄褐色砂質シルトに5mm大の小礫とマンガン粒を多く含むもの、2層が灰黄褐色砂質シルトにマンガン粒を比較的多く含むもの、3層が灰黄褐色シルトにマンガン粒を含むもの、4層が灰黄褐色砂質シルトにマンガン粒を少量含むもの、5層が灰黄褐色砂質シルトに僅かにマンガン粒を



遺構埋土 (SD-206)

1. にぶい黄褐色砂質シルトに5mm大の小礫とマンガン粒を多く含む
2. 灰黄褐色砂質シルトにマンガン粒を比較的多く含む
3. 灰黄褐色砂質シルトにマンガン粒を含む
4. 灰黄褐色砂質シルトにマンガン粒を少量含む
5. 灰黄褐色砂質シルトに僅かにマンガン粒を含む
6. 灰黄褐色~オリブ褐色シルト質粘土に黄褐色粘土のブロックと黄褐色小礫を多く含む (SD-207)
7. 灰黄褐色~褐色シルト質粘土に黄褐色粘土のブロックと黄褐色小礫を多く含む (SD-208)
8. 暗褐色砂質シルト (溝)

Fig.82 SD-206

含むものであった。遺物は1層から弥生土器片1点、須恵器片2点、瓦器片6点、土師質土器片約80点が出土しているが、どれも細片であり復元図示できるものはなかった。2層からは須恵器片1点、瓦器片6点、土師質土器片約70点、土製品1点が出土しており、土師質土器(2108)と土製品(2109)各1点が図示できた。3層からは須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片22点、青磁片1点が出土しており、須恵器(2110)、土師質土器(2111)、青磁(2112)各1点が復元図示できた。4層からは遺物の出土はみられなかった。5層からは須恵器片2点、土師質土器片28点が出土しているが復元図示できるものはなかった。

土師質土器 (Fig.83-2108) : 2層出土

2108は杯で、外上方に真直ぐ上がる口縁部を有する。約2/3が残存し、口径12.5cm、器高4.0cm、底径6.4cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。器面は摩耗が著しいが、底部の切り離しは断面形態から回転糸切りとみられる。

土製品 (Fig.83-2109) : 2層出土

2109は円筒形の管状土錘で完存する。全長3.6cm、全幅0.9cm、孔径0.4cmを測り、外面の両端に指頭圧痕が残る。

須恵器 (Fig.83-2110) : 3層出土

2110は壺で胴部から底部にかけて残存し、底径6.0cmを測る。全般に器壁が厚く1.2cmを測るが、胴部では器壁が0.5cmと薄く、外上方へほぼ真直ぐ立ち上がる。外面には回転ヘラ削り調整を施す。外底面には真下を向く0.5cmの高台が付く。

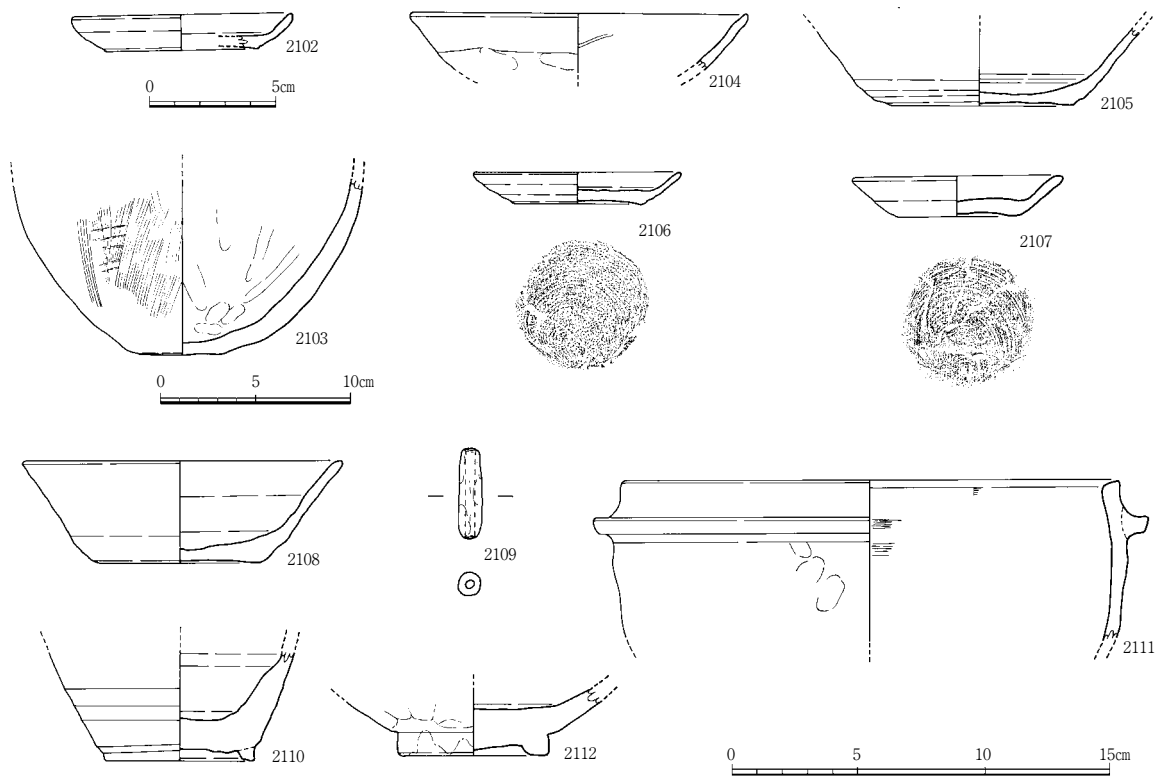


Fig.83 SD-202・204~206出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (2)B区

土師質土器 (Fig.83-2111) : 3層出土

2111は羽釜で口縁部の約1/8が残存し、口径19.6cm、胴径20.4cmを測る。口縁端部から1.2cm下に幅1cmの鍰が付く。口縁部はやや内湾し、外面はヨコナデ調整により仕上げる。内面は摩耗しており不明瞭であるが、ナデ調整を施したものとみられる。また、胴部外面には煤が付着する。

青磁 (Fig.83-2112) : 3層出土

2112は龍泉窯系の碗で底部の約3/4が残存し、底径5.8cmを測る。厚みのある底部で、内面には薄く灰オリーブ釉を施す。釉には細かな貫入がみられる。外底面は基本的に露胎である。堅緻であるが焼成は不良であり、断面はやや変色している。

d.ピット

P-201

調査区北部で検出した円形のピットである。径20cm、深さ8cmを測り、半分を暗渠に切られていた。埋土は灰色粘土で褐色シルトのブロック及び炭化物が混入していた。出土遺物は図示した土師質土器1点(2113)のみであった。

出土遺物

土師質土器 (Fig.86-2113)

2113は碗で、底部のみ完存し、底径5.8cmを測る。体部はやや内湾するものとみられ、外底面には高さ0.4cmの小さな高台が付く。外面には回転ナデ調整、内底面にはナデ調整を加える。

P-202

調査区北部で検出した円形のピットである。径0.25m、深さ0.21mを測る。埋土は灰色粘土で暗褐色粘土のブロック及び炭化物が混入していた。出土遺物は図示した土師質土器1点(2114)のみであった。

出土遺物

土師質土器 (Fig.86-2114)

2114は杯で、底部の約1/2が残存し、底径5.8cmを測る。体部は外上方にはほぼ真直ぐ上がるものとみられる。焼成不良で摩耗が著しく、調整および底部の切り離しは不明である。

P-203

調査区南部で検出した楕円形のピットである。長径0.52m、短径0.46m、深さ15cmを測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで褐色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器5点がみられ、そのうち1点(2115)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.86-2115)

2115は小皿で約1/2が残存し、口径9.2cm、器高1.5cm、底径6.0cmを測る。開き気味の口縁部であり、焼成不良で摩耗が著しく、調整も底部の切り離しも不明である。

e.水溜り状遺構

SP-201 (Fig.84)

調査区中央部で検出した不整形の水溜り状遺構で、全長11.30m、幅6.10m、深さ0.23mを測る。

暗渠や中世ピットに切られていた。埋土は2層に分層され、上層が暗灰黄色シルト、下層が灰黄褐色シルトにマンガン粒を多く含むものであった。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片2点、土師質土器片約80点、瓦質土器片1点、青磁片1点がみられ、土師質土器2点(2116・2117)が図示できた。

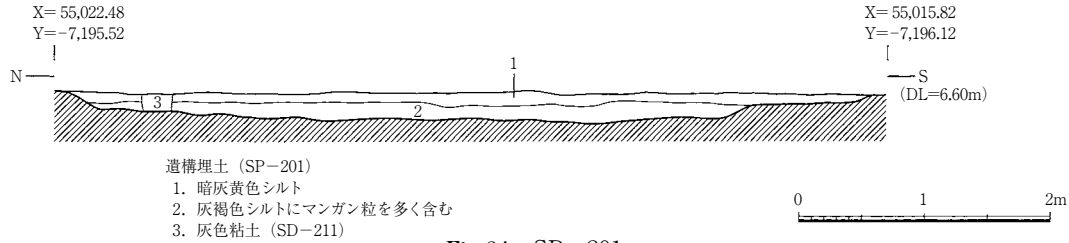


Fig.84 SP-201

出土遺物

土師質土器 (Fig.86-2116・2117)

2116は杯で、外上方に真直ぐ上がる口縁部を有する。約1/2が残存し、口径14.0cm、器高4.1cm、底径7.8cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。体部は内外面とも回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。外底面は摩耗により不明瞭であるが、僅かに回転糸切り痕が確認できる。

2117は小皿で約1/6が残存し、口径7.8cm、器高1.6cm、底径5.5cmを測る。短く上がる口縁部で、摩耗が著しく調整も底部の切り離しも不明である。

SP-202 (Fig.85)

調査区中央部で検出した方形に近い水溜り状遺構で、全長8.30m、幅3.00m、深さ16cmを測る。暗渠に切られており、中世の溝を切っていた。埋土は2層に分層でき、上層が暗灰黄色粘土質シルト、下層が灰色粘土であった。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片32点、瓦質土器片1点、白磁片1点がみられ、瓦器1点(2118)が復元図示できた。

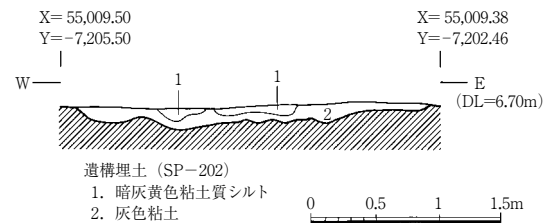


Fig.85 SP-202

出土遺物

瓦器 (Fig.86-2118)

2118は小皿で約1/4が残存し、口径7.8cm、底径6.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施し、外底面には指頭圧痕が残る。

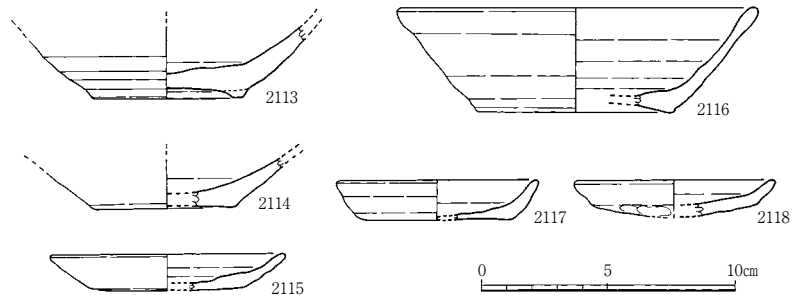


Fig.86 P-201~203, SP-201・202出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (2)B区

ii 近世以降

a. 溝跡 (暗渠)

調査区全域で認められた昭和20～30年頃に布設されたとみられる水田の排水施設である。全部で10条を検出し、一部交差する箇所もあった。実際は、表土層直下で確認できるが、調査の進行上、第Ⅶ層上面で検出し、近世以前の遺構を掘削しているため取りあえずその埋土を取り除いたうえで、近世以前の遺構の調査を行った。なお、暗渠は断面箱形に掘削され、基底面に礫を敷いたうえで、節を刳り貫いた竹や土管を連結して布設していた。埋土(覆土)は第Ⅰ層から第Ⅶ層、場所によっては遺構の埋土がブロック状に堆積するものであった。なお、出土遺物には弥生土器から近代の陶磁器片までみられたが、すべて細片で復元図示できるものはなかった。

SD-207

調査区西部で検出した最も西側に位置する南北の暗渠(N-6°-E)で、南端でSD-208と交差する。幅0.30～0.40m、深さ14～30cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.478～6.689mを測り、42.10mを検出した。

SD-208

調査区西部、SD-207の東隣で検出した南北の暗渠(N-12°-E)で、南端でSD-207と交差する。幅0.25～0.40m、深さ9～26cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.484～6.700mを測り、39.70mを検出した。

SD-209

調査区西部、SD-208の東隣で検出した南北の暗渠(N-6°-E)である。幅0.30～0.50m、深さ4～34cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.464～6.699mを測り、43.60mを検出した。

SD-210

調査区西部、SD-209の東隣で検出した南北の暗渠(N-6°-E)である。幅0.30～0.40m、深さ3～34cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.337～6.626mを測り、39.50mを検出した。

SD-211

調査区中央部、SD-210の東隣で検出した南北の暗渠(N-5°-E)である。幅0.30～0.40m、深さ8～32cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.419～6.608mを測り、32.50mを検出した。

SD-212

調査区中央部、SD-211の東隣で検出した南北の暗渠(N-5°-E)である。幅0.24～0.40m、深さ2～33cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.294～6.618mを測り、30.20mを検出した。

SD-213

調査区中央部、SD-212の東隣で検出した南北の暗渠(N-12°-E)である。幅0.25～1.30m、深さ4～15cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.460～6.578mを測り、21.10mを検出した。

SD-214

調査区中央部、SD-213の東隣で検出した南北の暗渠(N-7°-E)である。幅0.25～0.40m、深さ3～6cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.480～6.587mを測り、13.50mを検出した。

SD-215

調査区東部、SD-216の東端で検出した南北の暗渠(N-11°-E)である。幅0.25~0.40m、深さ3~8cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.482~6.543mを測り、10.00mを検出した。

SD-216

調査区中央部で検出した東西の暗渠(N-69°-W)で、SD-215以外の暗渠と交差していた。幅0.30~0.50m、深さ18~29cmで、基底面は西から東に傾斜しており標高6.292~6.561mを測り、33.30mを検出した。

(3) C区

① 層序

C区の南部で下層確認調査を行った結果、岩盤が確認され、林口城跡がある残丘の尾根が南側に回っていたとみられる。また、C区の北側でも岩盤が確認されており、C区は丘陵によってコの字状に囲まれていたことが判明した。北側と南側の丘陵はそれぞれC区に向かって著しく傾斜しており、以前は谷状に落ち込んでいたものとみられる。近世の遺構検出面においても等高線は調査区の中央部が東西に低くなっている。また、西に隣接するD区は中世段階では湿地であったものとみられC区よりも標高が低く、その状況はC区の中央部付近からみられ、近世以前は調査区西半は西に向かって地形が下がっていたものと判断される。

第Ⅰ層 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト層

第Ⅱ層 灰色(7.5Y5/1)粘土質シルト層

第Ⅲ層 黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルト層

第Ⅳ層 黄灰色(2.5Y6/1)シルト層

第Ⅴ層 灰色(N5/0)粘土質シルト層

第Ⅵ層 灰色(N5/0)シルト層

第Ⅶ層 黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルト層

第Ⅷ層 黒色(2.5Y2/1)シルト質粘土層

第Ⅸ層 灰色(N5/0)シルト層

第Ⅹ層 暗灰色(N3/0)粘土質シルト層

第Ⅺ層 黄橙色(10YR7/8)礫

遺物包含層は第Ⅲ層で、近世の遺物包含層であるが中世の遺物も比較的多く出土した。層位中遺構が検出されたのは第Ⅳ層上面であった。

第Ⅰ層は調査区の中央部で認められた層で、客土直下で確認された。暗渠の時期とみられ、厚さ5~25cmを測る。5mm~1cm大の礫を多く含んでいた。

第Ⅱ層は調査区の東半に認められた層で、客土直下で確認された。旧耕作土で、削平を受け消滅する部分もあるが厚さ5~34cmを測る。5mm大の礫を多く含んでいた。

第Ⅲ層は近世の遺物包含層である。削平を受け消滅する部分もあるが、ほぼ全域で確認した。東半は若干地形が高く削平を受けているが、西半は地形が下がっており、残存状態が良好で客土直下でありながら約25cmの堆積がみられた。5mm大の黄色の礫を多く含んでいた。

2. 調査区の概要 (3)C区

第IV層は遺構が検出された土層である。第III層同様東半は削平を受けているとみられ、厚さは5～10cm程度であるが、西半は約40cmの堆積がみられる部分もあった。上面の標高は東端が7.030m、西端が6.620mを測り、遺構検出面は西に向かって下がっていた。

第V層は調査区西半の地形が低い部分で確認した層である。厚さ8～48cmを測る。黄色の礫を含む層で、一部間層に腐植土が入っていた。

第VI層も調査区西半で確認した層で、ほぼ水平に堆積する。青灰色(10BG6/1)の礫を多く含む。D区の第XI層に対応し、中世の遺物包含層であるが遺物は僅かであった。

第VII～X層は南壁に沿って東西に設定した下層確認トレンチで確認した層である。

第VII層は第V層同様調査区西半の地形が低い部分で確認した。5mm大の礫を非常に多く含み、マ

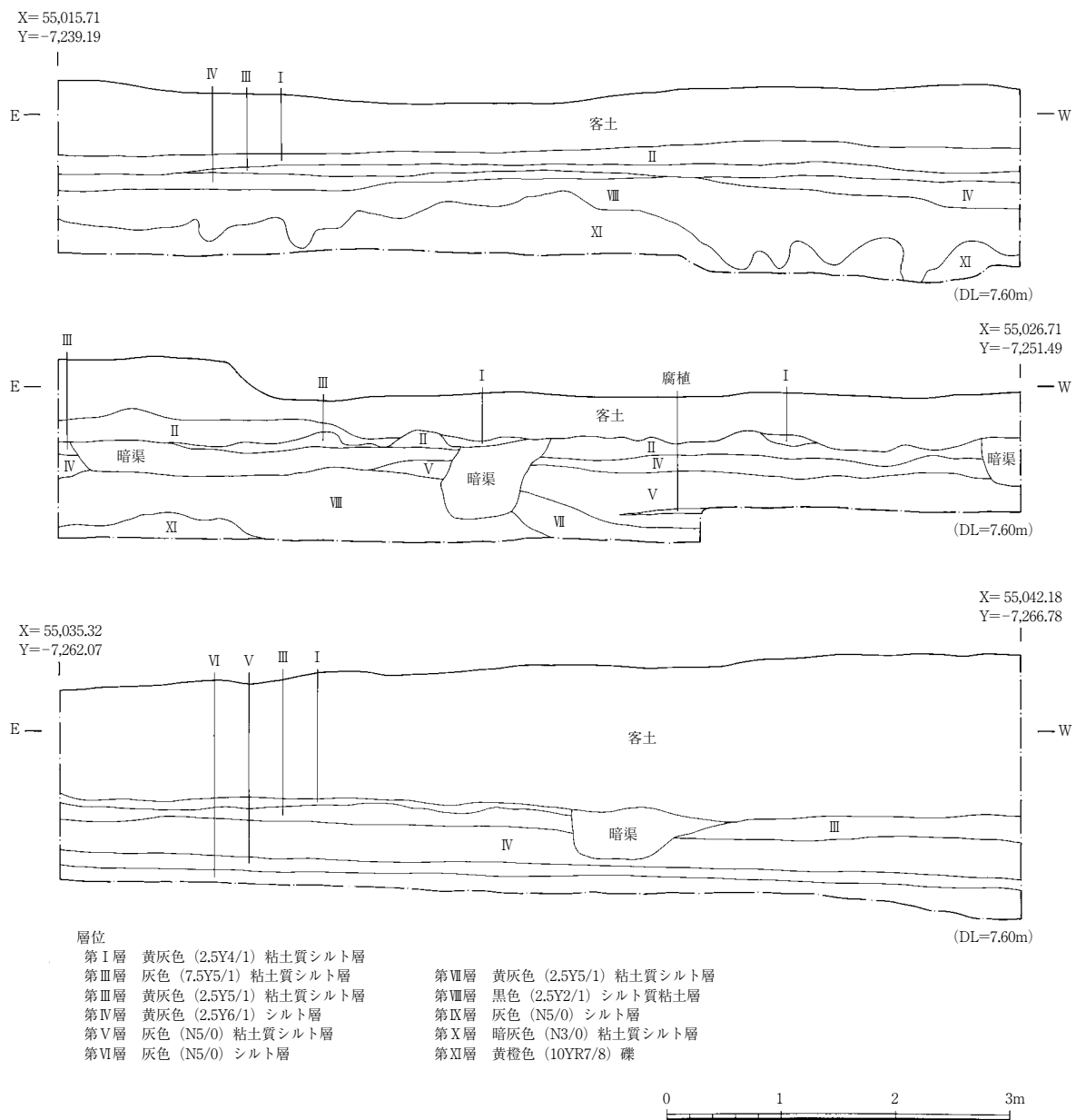


Fig.87 C区南壁セクション図

ンガンを含んでいた。

第VIII層は調査区の東半で確認した。第IX層の岩盤の直上で確認された部分もあり、下面は非常に凹凸があり、北に傾斜するものとみられる。5mm大の黄色の礫を非常に多く含み、縄文土器と弥生土器が僅かに出土しているが、流れ込んだものとみられる。

第IX層は調査区の東部で確認した層で、著しく北に傾斜する。青灰色(10BG6/1)の礫を多く含む。

第X層も調査区の東部で確認した層で、著しく北に傾斜する。青灰色(10BG6/1)の礫を多く含む。

第XI層は岩盤で、調査区東部で認められた。非常に凹凸があり、北に向かって著しく傾斜する。

② 堆積層出土遺物

第II層出土遺物

磁器 (Fig.88-3001)

3001は筒形の小杯で、底径3.0cmを測る。高台は小さな削り出し高台となっている。内外面に直線文の染付がみられる。器面には高台内まで光沢のある透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。18世紀後半の肥前系とみられる。

銅製品 (Fig.88-3002・3003)

2点とも煙管の吸口である。肩のない一体型のもので、青銅色を呈する。3002は先端を欠損する。羅字接続部径は0.9cmを測り、内部には木質が残存する。3003は完形のもので、全長6.6cm、全幅1.0cm、羅字接続部径1.0cmを測る。

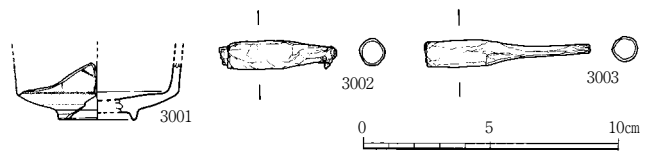


Fig.88 C区第II層出土遺物実測図(磁器・銅製品)

第III層出土遺物

弥生土器 (Fig.89-3004)

3004は壺で、口径12.4cmを測る。体部から滑らかに口縁部に至る。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。内外面ともハケ調整で、頸部外面には沈線が1条めぐる。

東播系須恵器 (Fig.89-3005)

3005は片口鉢である。体部は器壁が薄く、口縁部はほぼ真直ぐのび、口縁端部は上方へ拡張する。著しく磨滅するため調整は不明である。焼成不良で、色調は内面が淡黄色ないし橙色、外面が橙色を呈する。

土師質土器 (Fig.89-3006~3011)

3006・3007は杯である。3006は底径4.8cmを測る小さなもので、底部の器壁は厚く、体部はやや内湾する。著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。3007は口径12.2cm、底径7.2cm、器高3.6cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、口縁部はほぼ真直ぐのび、端部には浅い凹線がめぐる。体部は回転ナデ調整を行うが、その他は磨滅しており、調整は不明である。胎土には砂粒を非常に多く含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。

2. 調査区の概要 (3)C区

3008・3009は小皿である。底径は2点とも4.2cmを測る。著しく磨滅するため調整は不明である。

3010は椀である。口径16.6cmを測り、器高が低く、皿状を呈する。粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ、底部と体部の境で剥離する。調整は回転ナデ調整で、口縁部は強いヨコナデ調整のため内面に僅かに段を有する。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

3011は三足釜の脚部で、先端を欠損する。器面にはナデ調整の痕と指頭圧痕が残る。一部煤が付着する。色調はにぶい黄褐色ないし褐灰色を呈する。

瓦質土器 (Fig.89-3012~3014)

3012は鍋である。非常に器壁が薄いもので、口縁部が短く、胴部が大きく張るタイプのものである。外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は磨滅しており調整は不明である。色調は内外面とも灰白色を呈する。

3013は鉢である。口縁部はほぼ真直ぐのび、口縁端部は外傾する面を有する。内面と口縁部は回転ナデ調整、体部外面はナデ調整で指頭圧痕が顕著に残る。色調は内外面とも灰色を呈する。

3014は播鉢である。体部はほぼ真直ぐのび、口縁部は肥厚し、水平な面を有する。内面は磨滅するが残存部で5条の摺目が残る。外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。器面は著しく磨滅する。色調は内外面とも灰白色を呈する。

白磁 (Fig.89-3015)

3015は碗で、底径6.6cmを測る。やや粗雑なつくりで、断面には巣が多くみられる。底部は厚く、高台は低く、幅が広い。見込と体部の境には1条の沈線が巡る。体部上半には乳白色の釉を薄く施す。

青磁 (Fig.89-3016)

3016は龍泉窯系の碗で、口径14.7cmを測る。体部は内湾し、口縁部は肥厚し、短く外反する。器面にはオリーブ色の釉を約1mmの厚さに施す。

近世陶器 (Fig.89-3017~3026)

3017~3021は肥前系灰釉丸碗である。3017は底径4.9cmを測る。高台は比較的低く、ややハの字状に開く。釉は黄色味を帯びた灰釉を薄く施釉しており、細かい貫入が入る。畳付は釉ハギを行い、僅かに砂粒が付着する。3018は底径5.3cmを測る。高台は低く、直立する。器壁が厚く、比較的高台内の挟りが深い。器面には黄色味を帯びた灰釉を薄く施釉するが透明感はなく、外面は釉が溶けておらず白色を呈する。3019は底径5.0cmを測る。高台は高く、直立する。器面には緑味を帯びた灰釉を薄く施釉しており、細かい貫入が入る。畳付は釉ハギを行う。3020は底部が完存するもので、底径5.1cmを測る。高台は細く高いもので、高台内の挟りは深く、アーチ状を呈する。器面には緑味を帯びた灰釉を薄く施釉し、細かい貫入が入る。畳付は釉ハギを行い、砂粒が付着する。3021は底部が完存するもので、底径4.7cmを測る。高台は細く高い。内面と外面の一部に黄味を帯びた透明釉を薄く施し、見込は蛇ノ目状に釉ハギを行う。

3022~3024は皿で、唐津系である。3022は底部が完存するもので、底径4.0cmを測る。器壁は厚く、高台は低い。見込には4ヶ所の胎土目がみられる。内面と体部外面の一部に薄い茶色の釉を薄く施すが、焼成不良のため溶けていない。体部下半は露胎で、褐色を呈する。3023は底部が完存するもので、底径3.9cmを測る。底部は碁笥底で意図的に摩耗させる。見込には4ヶ所の胎土目がみられる。

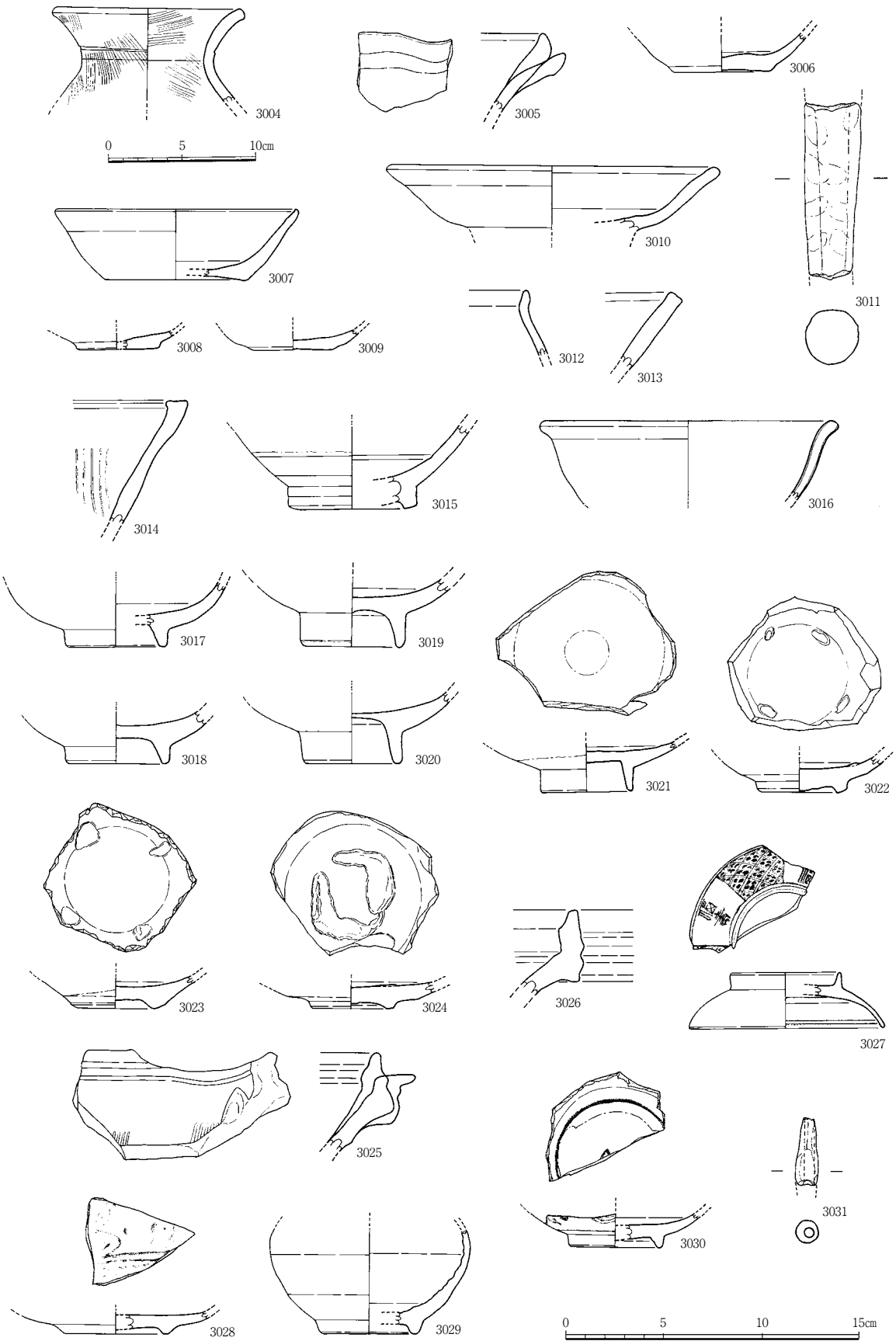


Fig.89 C区第III層出土遺物実測図(弥生土器・東播系須恵器・土師質土器ほか)

2. 調査区の概要 (3)C区

内面と外面の一部に薄く施釉するが、焼成不良のため釉は溶けておらず、白色を呈する。3024は底部が完存するもので、底径4.0cmを測る。器壁は厚く、高台は低い。見込には砂目が円形状に付着し、緑色釉を薄く施すが、摩耗するためほとんど残存しない。

3025・3026は備前焼の挿鉢である。3025は注口を有し、残存部で5条の摺目がみられる。また、口縁部外面の凹線は2条で、顎が張出す。口縁の下には重ね焼痕とみられる粘土が付着する。3026は残存部に1条のみ摺目がみられる。口縁の凹線は2条で、顎部は僅かに張出し、内面には突起状の段を有する。

近世磁器 (Fig.89-3027~3029)

すべて肥前系である。3027は蓋で、口径10.0cm、つまみ径4.5cm、器高2.8cmを測る。つまみは細く、直立する。内面には圈線、外面には「福寿」等の染付がみられる。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。

3028は皿で、底径5.4cmを測る。見込には笹文等の染付がみられる。器面には青味を帯びた透明釉を薄く施し、若干貫入と気泡が入る。畳付は釉ハギを行い、砂粒が付着する。

3029は白磁の瓶で、底径4.8cmを測る。高台は低く畳付は丸くなっており、体部は球形に膨らむ。内面は無釉で、ロクロ目が顕著に残る。外面は乳白色の釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。畳付には砂粒が付着する。

青花 (Fig.89-3030)

3030は漳州窯系の皿で、底径4.3cmを測る。高台は断面三角形を呈する。内外面に染付がみられる。釉は焼成不良のため透明感がなく、灰色を呈する。外面は高台付近まで施釉し、見込は釉ハギを行う。

土製品 (Fig.89-3031)

3031は紡錘形を呈する管状土錘で、約1/2残存する。磨滅するため調整は不明である。色調はにぶい赤褐色を呈する。

第VI層出土遺物

土師質土器 (Fig.90-3032・3033)

2点とも杯である。3032は底径5.4cmを測る。器壁の厚い底部から体部は内湾して立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、体部は回転ナデ調整、その後内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。胎土は比較的精良なものである。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。3033は底径6.8cmを測る。体部は内湾して立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りである。体部には回転ナデ調整を施し、胎土は砂粒を多く含み、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

第VIII層出土遺物

縄文土器 (Fig.90-3034)

3034は深鉢である。器壁は薄く、口縁部は大きく外反し、端部には小さな刻目突帯が付く。著しく摩耗するため調整は不明である。胎土には砂粒を非常に多く含み、色調は、内面がにぶい黄橙色

ないし明褐色，外面が明褐色を呈する。

弥生土器 (Fig.90-3035)

3035は壺で，底径9.0cmを測る。器壁は非常に厚い。摩耗するため調整は不明であるが，外面に僅かにハケ目が残る。色調は，内面がにぶい黄橙色，外面が橙色を呈する。

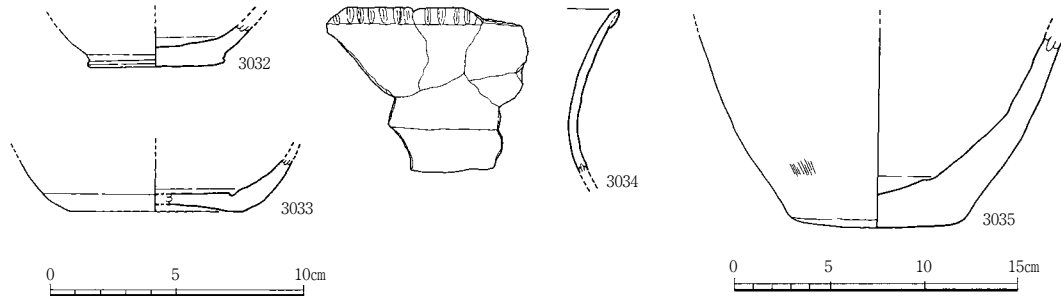


Fig.90 C区第VI・VII層出土遺物実測図 (縄文土器・弥生土器・土師質土器)

③ 遺構と遺物

i 近世以降

a.土坑

SK-301

調査区の東部で検出した溝状の土坑である。検出長4.50m，幅18~31cm，深さ7~15cmを測る。長軸方向はN-69°-Eを示す。断面は舟底状で，埋土は黄灰色シルトで5mm大の黄色の礫を多く含む。出土遺物には土師質土器片12点，18世紀以降とみられる磁器片2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK-302

調査区の南部で検出した溝状の土坑である。攪乱の下から検出した遺構で，削平を受ける。検出長5.78m，幅1.20~1.35m，深さ8~25cmを測る。長軸方向はN-16°-Wを示す。断面は舟底状で，埋土は黄灰色シルトであった。出土遺物には土師質土器片60点，須恵器片2点，陶器片9点，磁器片4点，ガラス片2点がみられ，磁器1点(3036)が図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.93-3036)

3036は18世紀末~19世紀前半の肥前系とみられる小皿で，底径3.4cmを測る。見込には染付がみられる。器面には光沢のある透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。

Tab.6 林口遺跡第II調査地区-C区土坑計測表

遺構番号	平面形	規模			長軸方向	時代	備考
		長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (m)			
SK-301	溝状	4.50	0.18~0.31	0.07~0.15	N - 69° - E	中世	
SK-302	溝状	5.78	1.20~1.35	0.08~0.25	N - 16° - W	〃	

2. 調査区の概要 (3)C区

b. 溝跡

SD-301 (Fig.91)

調査区の北部で検出した湾曲する溝跡である。検出長12.68m, 幅0.76~1.29m, 深さ2~19cmを測る。主軸方向はN-16~52°-Wを示す。断面は舟底状を呈し, 基底面は標高6.550mでほぼ平らである。埋土は黄灰色シルトで5mm

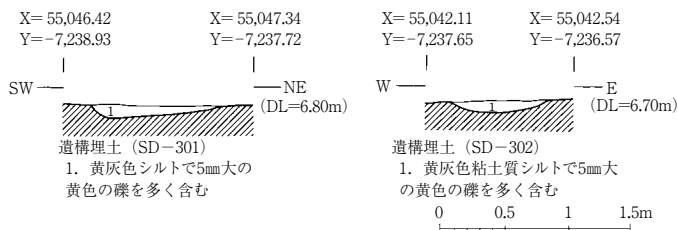


Fig.91 SD-301・302

大の黄色の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片50点, 19世紀頃とみられる陶器片3点, 瓦3点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD-302 (Fig.91)

SD-301の南側を湾曲して平行する溝跡である。検出長10.30m, 幅0.44~1.31m, 深さ5~17cmを測る。主軸方向はN-13~41°-Wを示す。断面は舟底状を呈し, 基底面は標高6.500mでほぼ平らである。埋土は黄灰色粘土質シルトで5mm大の黄色の

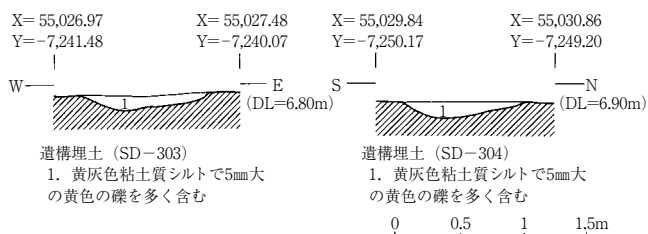


Fig.92 SD-303・304

礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片40点, 陶器片7点, 磁器片5点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD-303 (Fig.92)

調査区の南部で検出した溝跡で, 著しく攪乱を受け削平されていた。検出長7.34m, 幅0.13~1.29m, 深さ7~14cmを測る。主軸方向はN-16~33°-Wを示す。断面は舟底状を呈し, 基底面は標高6.660mでほぼ平らである。埋土は黄灰色粘土質シルトで5mm大の黄色の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片50点, 須恵器片1点, 陶器片2点, 瓦片1点, 鉄滓1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD-304 (Fig.92)

調査区の南部で検出した溝跡で, 著しく攪乱を受け削平されていた。検出長10.40m, 幅0.44~1.29m, 深さ7~14cmを測る。主軸方向はN-47°-Wを示す。断面は舟底状を呈し, 基底面は南(6.737m)から北(6.596m)に傾斜する。埋土は黄灰色粘土質シルトで5mm大の黄色の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片50点, 須恵器片1点, 陶器片2点, 瓦片1点, 鉄滓1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

c. ピット

P-301

調査区の南西部で検出したピットで, 一部SK-301に切られていた。楕円形を呈し, 残存部で長径1.05m, 短径0.45m, 深さ8cmを測る。埋土は黄灰色粘土質シルトで, 5

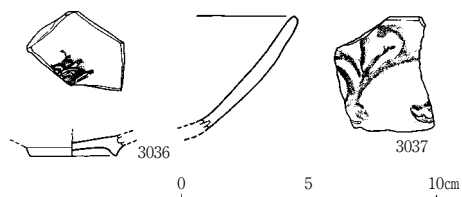


Fig.93 SK-302, P-301出土遺物実測図

mm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には磁器(3037)1点がみられた。

出土遺物

磁器 (Fig.93-3037)

3037は19世紀前半の瀬戸・美濃系とみられる碗である。外面には花文の染付がみられ、全面に光沢のある透明釉を薄く施す。

(4) D区

① 層序

調査区の全域で客土の堆積が認められた。西に林口城跡のある残丘があるため堆積層の大半は東に傾斜するが、遺物包含層はほぼ水平に堆積していた。

- 第Ⅰ層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂層
- 第Ⅱ層 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト層
- 第Ⅲ層 褐灰色(10YR5/1)砂質シルト層
- 第Ⅳ層 黒褐色(10YR3/2)礫質砂層
- 第Ⅴ層 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト層
- 第Ⅵ層 褐灰色(10YR4/1)砂質シルト層
- 第Ⅶ層 黒褐色(2.5YR3/1)砂質シルト層
- 第Ⅷ層 黒色(10YR2/1)シルト層
- 第Ⅸ層 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質礫層
- 第Ⅹ層 暗灰色(N3/0)粘土質シルト層
- 第Ⅺ層 灰色(N5/0)シルト層
- 第Ⅻ層 黒色(5Y2/1)シルト層
- 第Ⅼ層 黒色(N1.5/0)シルト層
- 第Ⅽ層 黒色(10YR2/1)シルト層
- 第Ⅾ層 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト層
- 第Ⅿ層 黒色(N2/0)粘土質シルト層
- 第ⅰ層 黒色(5Y2/1)シルト層
- 第ⅱ層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト層
- 第ⅲ層 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト層
- 第ⅳ層 黒色(7.5Y2/1)シルト質粘土層
- 第ⅴ層 黒色(5Y2/1)シルト質粘土層
- 第ⅵ層 黒色(2.5Y2/1)シルト質粘土層
- 第ⅶ層 黒色(N2/0)シルト質粘土層
- 第ⅷ層 黒色(N2/0)シルト質粘土層
- 第ⅸ層 黄橙色(10YR7/8)礫層

遺物包含層は第Ⅲ層と第Ⅺ～ⅰ層で、遺構が検出されたのは第Ⅲ層の下面であった。

2. 調査区の概要 (4)D区

第Ⅰ層は厚さ約8cmを測る。客土直下で部分的に認められた層で、削平を受けているものとみられる。

第Ⅱ層は厚さ20～40cmを測る。調査区東半で認められた層で1cm大の礫を含んでいた。客土直下であるため削平・攪乱を受ける。

第Ⅲ層は厚さ10～15cmを測る。削平を受けたとみられ、調査区の東部でのみ見られた。主に12～13世紀の遺物を含む中世の遺物包含層で、5mm大の礫を含んでいた。

第Ⅳ層は厚さ約30～45cmを測る。調査区中央部に斜めに堆積する層で、宅地のあった西側は削平を受けたものとみられる。5mm～1cm大の黄色の礫を含んでいた。

第Ⅴ～Ⅷ層は調査区西部で認められた層で、東に傾斜する。第Ⅴ層は厚さ約30～70cmを測り、5mm大の礫を多く含んでいた。

第Ⅵ層は厚さ約10cmを測り、5mm～1cm大の礫を含んでいた。

第Ⅶ層は厚さ約60cmを測り、5mm大の礫を含んでいた。

第Ⅷ層は厚さ約1.00mを測り、5mm大の礫を若干含んでいた。第ⅩⅤ層の岩盤の上に堆積する層で、流れ込みとみられる遺物が出土している。SD-401もこの層によって埋没する。

第Ⅸ層は部分的に認められた層で、厚さ5～10cmを測る。マンガンの堆積である。

第Ⅹ層は調査区西部で僅かに認められた層で、若干西に傾斜する。厚さ約10cmを測る。青灰色(10BG6/1)の5mm～1cmの礫を多く含んでいた。

第Ⅺ層は調査区の東半で認められた層で、厚さ20～30cmを測る。青灰色(10BG6/1)の礫を非常に多く含む。10世紀後半から12世紀の遺物を含む古代から中世初めにかけての遺物包含層である。

第Ⅻ層は調査区の東半でみられた第Ⅺ層と同時期の遺物を含む層で、厚さ10～20cmを測る。1～3cm大の礫を多く含んでいた。

第Ⅼ層は調査区の東半でみられた第Ⅺ層と同時期の遺物を含む層で、厚さ約8cmを測る。腐植を多く含み、1cm大の礫を少し含んでいた。

第Ⅽ層は調査区の東部で認められた層で、厚さ5～20cmを測る。腐植土を多く含み、3cm大の礫を含んでいた。

第Ⅾ層は調査区の中央部で認められた層で、厚さ30～40cmを測る。5mm～1cm大の礫を多く含んでいた。

第Ⅿ層は調査区の中央部の一部で認められた層で、厚さ10～20cmを測る。砂と1～3cm大の礫を含んでいた。

第ⅰ層は調査区の東部で認められた層で、厚さ20～30cmを測る。1cm大の礫と腐植土を含んでいた。

第ⅱ層は調査区の西部で僅かに認められた層で、厚さ40cmを測り、若干東に傾斜する。1～3cm大の礫を含んでいた。

第ⅲ層は調査区の東部で認められた層で、厚さ25～50cmを測り、東に傾斜する。1cm大の礫と腐植を含んでいた。

第ⅳ層は調査区の中央部の一部のみで認められた層で、厚さ約50cmを測る。1～3cm大の礫を含んでいた。

第ⅴ層は調査区の東部で認められた層で、確認した部分で約45cmを測り、東に傾斜する。5mm大

の礫を含んでいた。

第XIII層は調査区の西部で僅かに認められた層で、確認した部分で約30cmを測り、東に傾斜する。5mm大の褐色の礫を含んでいた。

第XIV層は調査区の西部で認められた層で、厚さ40~70cmを測り、5mm~1cm大の褐色の礫を多く含んでいた。

第XV層は調査区の西部で認められた層で、確認した部分で約30cmの堆積がみられ、東に傾斜すると考えられる。5mm~1cm大の褐色の礫を含んでいた。

第XVI層は岩盤で、調査区の西部斜面部の検出面となった層である。著しく東に傾斜する。

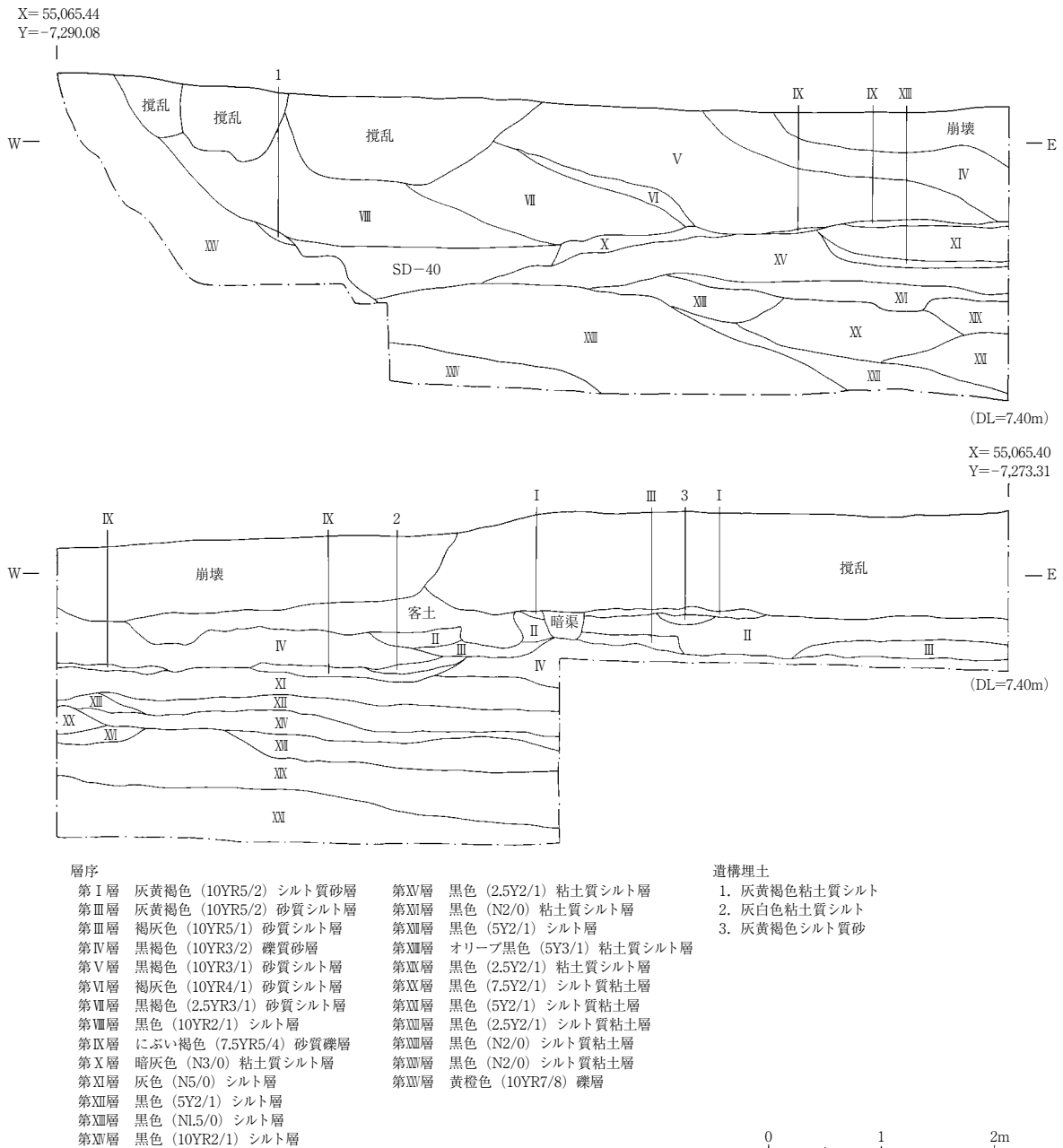


Fig.94 D区セクション図

2. 調査区の概要 (4)D区

② 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

土師質土器 (Fig.95-4001~4004)

4001・4002は杯である。4001は底径8.2cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整である。色調は、内面が橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。4002は底径8.7cmを測る。体部はほぼ真直ぐ外上方にのびる。底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整である。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

4003・4004は椀で、2点とも輪高台を有する。4003は直立する高台を有するが、端部を欠損する。高台内はナデ調整、体部は回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4004は底径6.1cmを測る。高台は断面蒲鉾状を呈し、体部は底部から緩やかに立ち上がる。高台内にはナデ調整、体部には回転ナデ調整、内面には細かいハケ調整を施す。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色ないし橙色を呈する。

磁器 (Fig.95-4005)

4005は19世紀中葉の肥前系とみられる紅皿である。完形で、口径4.7cm、底径1.3cm、器高1.5cmを測る。型成形で、貝殻状に型押しする。底部には小さい高台を有し、口縁部は内湾して立ち上がり、端部は外傾する幅の広い面をなす。内面と一部体部下半までやや青味を帯びた白色釉を薄く施す。

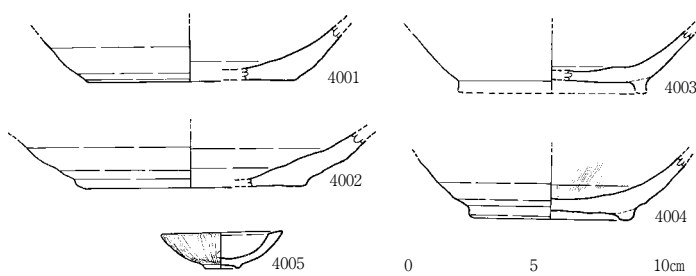


Fig.95 D区第I層出土遺物実測図(土師質土器・磁器)

第II層出土遺物

弥生土器 (Fig.96-4006)

4006は甕で、底径6.6cmを測る。体部は底部からほぼ真直ぐのびる。外底面はナデ調整、体部外面はハケまたは板ナデ調整、内面はナデ調整である。色調は、内面が明赤褐色、外面が明赤褐色ないしにぶい黄色を呈する。

瓦器 (Fig.96-4007)

4007は椀で、口径14.3cmを測る。底部を欠損するが、器高は比較的低い。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段施し、体部はヘラ磨きが見られ、ナデ調整の痕と指頭圧痕が残存する。内面には幅3mmのヨコ方向のヘラ磨きが見られる。

土師質土器 (Fig.96-4008~4016)

4008~4012は杯である。4008は底径6.6cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、体部はやや内湾する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。体部は回転ナデ調整を行う。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が灰色を呈する。4009は底径7.2cmを測る。底部の切り離しは回転

ヘラ切りで、体部は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4010は底径6.4cmを測る。底部は厚く、体部はほぼ真直ぐのびる。底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4011は内底面が高台内に落ち込むもので、底部を欠損する。調整は回転ナデ調整の後一部ナデ調整を加える。色調は内外面とも灰白色を呈する。4012は底径4.3cmを測る。器壁は薄く、体部は底部から滑らかに立ち上がり、口縁部はやや外反する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

4013～4015は小皿である。4013は口径7.5cm、底径4.0cm、器高1.2cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は著しく磨滅するため調整は不明瞭である。内面は一部煤が付着する。色調は、内面が灰黄褐色、外面がにぶい橙色を呈する。4014は口縁端部を欠損する。底径4.5cmを測る。口縁部はやや内湾する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。体部は回転ナデ調整で、内底面はナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4015は完形のもので、口径7.9cm、底径4.9cm、器高1.6cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は外反する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。体部は回転ナデ調整で、内底面はナデ調整を加える。色調は内外

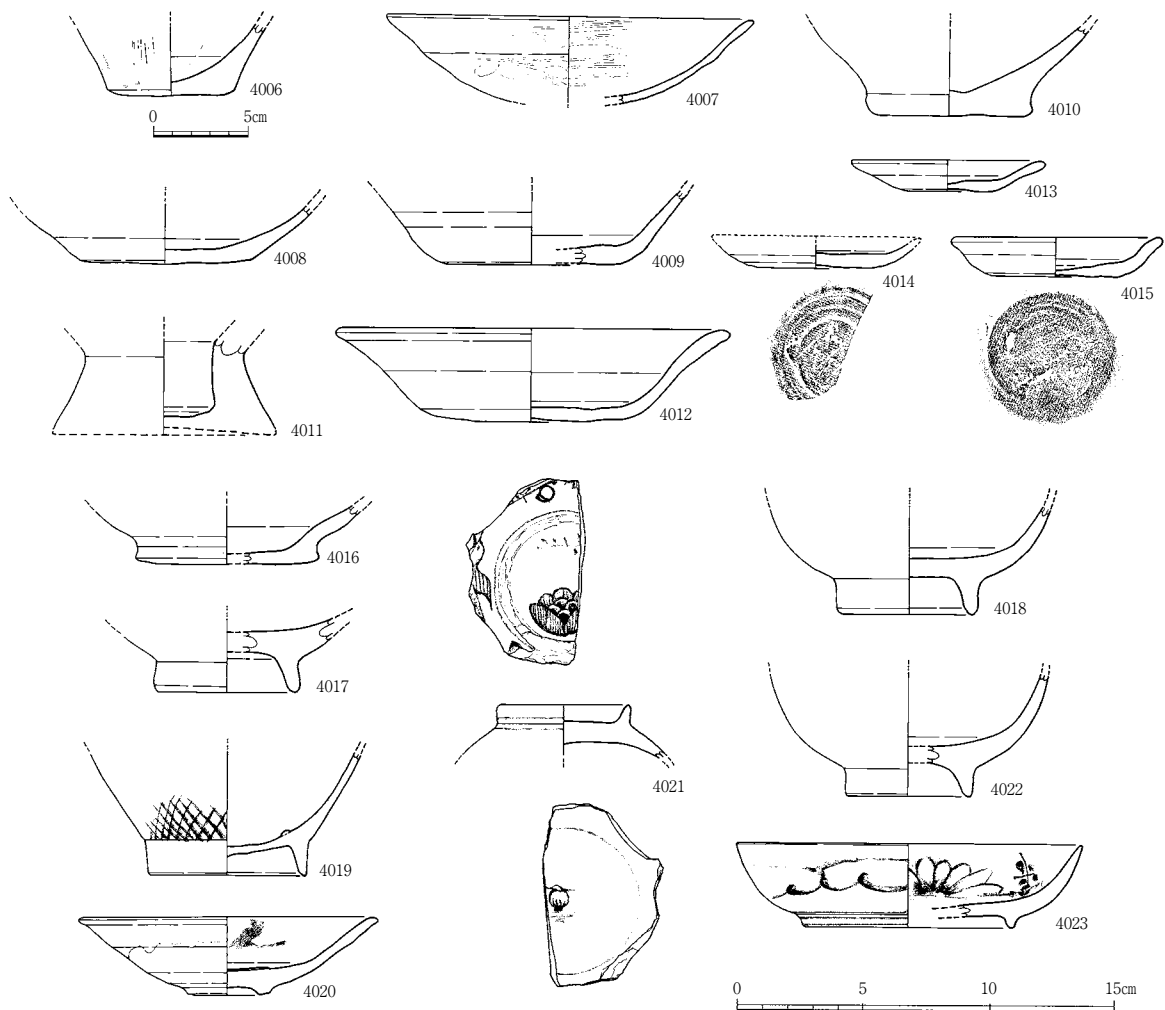


Fig.96 D区第Ⅱ層出土遺物実測図(弥生土器・瓦器・土師質土器ほか)

2. 調査区の概要 (4)D区

面とも橙色を呈する。

4016は碗で、底径7.2cmを測る。円盤状高台を有し、内底面は高台内に落ち込む。底部の切り離しは磨滅するため不明瞭であるが、断面形態から回転ヘラ切りとみられる。体部は回転ナデ調整を行う。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

近世陶器 (Fig.96-4017~4020)

4017~4019は碗である。4017は底径5.4cmを測る。高台はハの字状に開き、高台内の挟りはやや深い。器面には茶色を帯びた黄色釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。釉には貫入が入る。4018は丸碗で、底径5.1cmを測る。高台は直立する。器面には黄色の透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。釉には貫入が入る。4019は広東碗で、底径6.0cmを測る。器壁が薄いものである。見込には足付ハマ痕が3ヶ所残る。外面には鉄釉によって草文が描かれる。器面には光沢のある薄いオリーブ色の釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。釉には細かい貫入が入る。

4020は唐津系の皿で、口径11.5cm、底径3.3cm、器高3.1cmを測る。底部には低い削り出し高台を有し、高台内には砂が付着する。見込には砂目が見られ、体部内面には鉄釉による文様が描かれる。内面と体部外面上半にはやや光沢のある薄いオリーブ色の釉を薄く施す。釉には貫入が入る。体部外面下半は露胎で、こげ茶色を呈し、回転ナデ調整が観察できる。

近世磁器 (Fig.96-4021~4023)

4021は広東碗の蓋である。外面には鶯や花、内面には鷺の染付がみられる。器面には光沢のある透明釉を薄く施す。能茶山焼である。

4022は丸碗で、底径4.8cmを測る。高台は直立し、高台内をアーチ状に挟る。内面には薄い青磁釉、外面には黄色を帯びた透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。釉には貫入が入る。また、畳付には砂が付着する。

4023は皿で、口径13.5cm、底径8.2cm、器高3.3cmを測る。内外面に花文等の染付を施す。器面には光沢のある透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。肥前系である。

第III層出土遺物

弥生土器 (Fig.97-4024)

4024は壺で、底径5.5cmを測る。器壁は薄く、底部から緩やかに立ち上がる。内面はナデ調整、外面は磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

土師器 (Fig.97-4025~4027)

4025は甕で、口径29.0cmを測る。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は内側に肥厚する。内外面ともヨコナデ調整を行う。色調は内外面とも橙色を呈する。

4026は蓋で、口径14.7cmを測る。器高は低く、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。

4027は盤で、口径18.1cm、底径13.0cm、器高3.3cmを測る。体部は底部から僅かに屈曲してほぼ真直ぐのびる。高台は細く、ハの字状に開く。著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。

瓦器 (Fig.97-4028~4033)

すべて椀である。4028は底径4.6cmを測る。高台は断面逆台形のしっかりしたものが付く。外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は見込に幅1mmの平行暗文がみられる。また、見込に重ね焼の際の粘土が付着する。炭素は外面に僅かに吸着するのみである。4029は底径4.2cmを測る。高台は断面三角形を呈する。外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は幅4mmの太いヘラ磨きがみられる。4030は口径13.8cmを測る。外面はヨコナデ調整が1段、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は著しく磨滅するため調整は不明である。4031は口径14.6cmを測る。外面はヨコナデ調整が1段、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は幅2~3mmのヘラ磨きがみられる。炭素は内面のみ吸着する。4032は口径15.4cmを測る。外面はヨコナデ調整が2段で、ヘラ磨きを行い、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は幅3mmのヘラ磨きを行う。焼成は良好で、銀色に発色する。4033は口径15.3cm、底径4.7cm、器高5.3cmを測る。高台は断面逆台形で、ややハの字状に開く。外面はヨコナデ

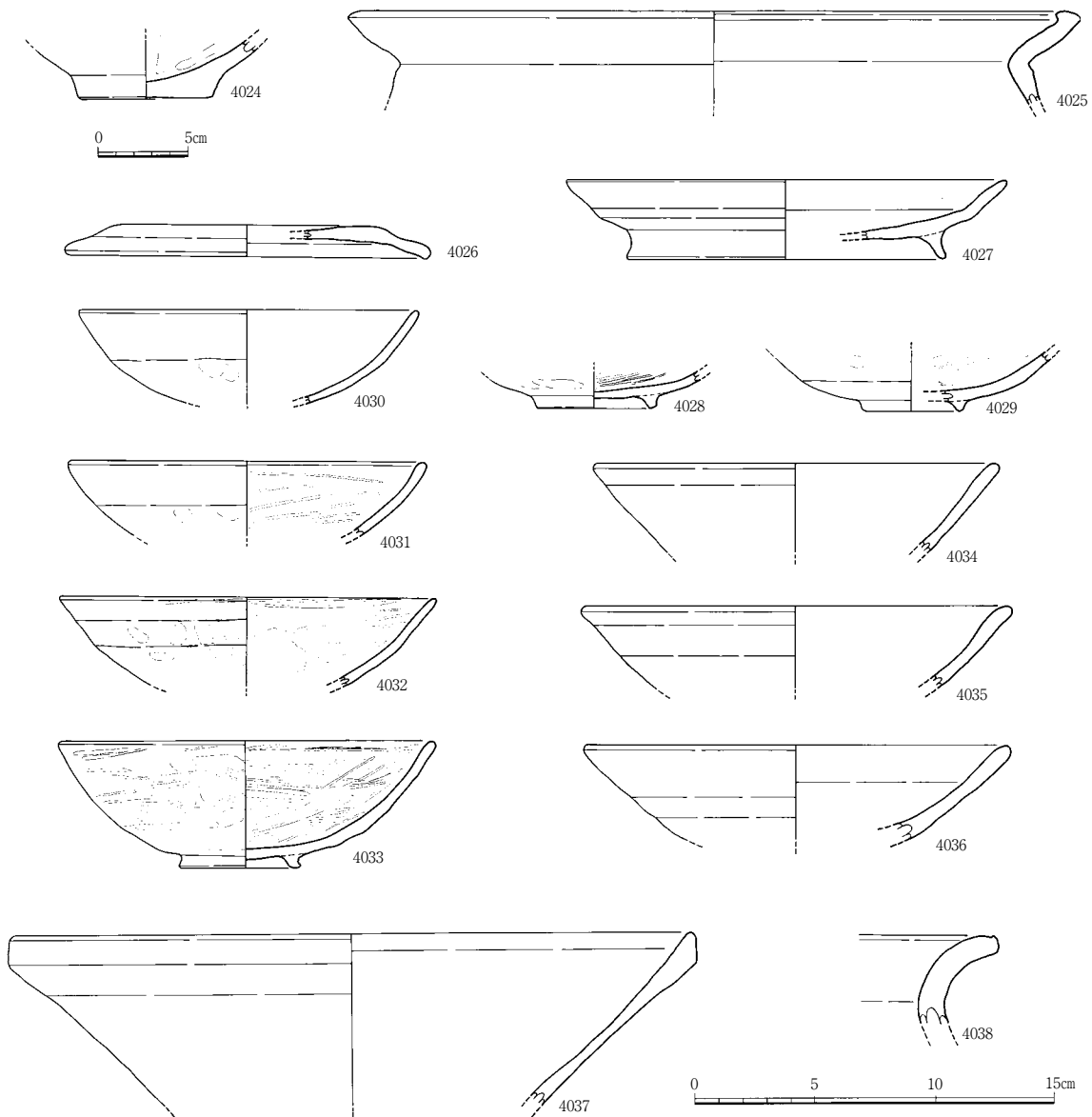


Fig.97 D区第Ⅲ層出土遺物実測図 (弥生土器・土師器・瓦器ほか)

2. 調査区の概要 (4)D区

調整が1段で、ヘラ磨きを行う。体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面はヨコまたは斜め方向のヘラ磨き、見込は平行暗文がみられる。焼成は良好で、銀色に発色する。

東播系須恵器 (Fig.97-4034~4038)

4034~4036は椀で、口径は4034が16.6cm, 4035と4036が17.6cmを測る。いずれも体部はやや内湾気味にのび、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデ調整で、口縁部には重ね焼痕がみられる。色調は褐灰色ないし灰色を呈する。

4037は片口鉢で、口径28.0cmを測る。器壁が薄く、体部はほぼ真直ぐのび、口縁端部は上方に拡張する。器面は著しく磨滅しており調整は不明である。口縁部には重ね焼痕が残る。焼成は不良で、色調は黄灰色を呈する。

4038は甕の口縁部である。大きく外反し、端部は丸くおさめ、内面には凹線がめぐる。調整は回転ナデ調整である。色調は褐灰色を呈する。

土師質土器 (Fig.98・99-4039~4078)

4039~4059は杯である。4039は口縁部の破片である。器壁が厚く、体部は直線的で、端部を丸くおさめる。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰白色を呈する。4040は口径14.4cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、非常に器壁が薄い。体部は直線的で、口縁端部は短く外反し水平にのびる。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともいぶき黄橙色を呈する。4041~4046は底部の切り離しが回転ヘラ切りのものである。4041は底径6.4cmを測る。底部と体部の境が不明瞭で、体部は内湾し、椀に近い形態を呈する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、体部の調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。4042は底径6.8cmを測り、体部は内湾して立ち上がる。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともいぶき橙色を呈する。4043は底径6.4cmを測る。器壁は薄く、体部はほぼ真直ぐのびる。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。調整は回転ナデ調整である。胎土には砂粒を多く含む。色調は内外面とも橙色を呈する。4044は口径13.6cm, 底径6.4cm, 器高3.8cmを測る。器壁は薄く、体部はほぼ真直ぐのびる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。調整は回転ナデ調整である。内外面とも黄橙色を呈する。4045は口径14.1cm, 底径7.0cm, 器高4.0cmを測る。器壁は薄く、体部はほぼ真直ぐのびる。調整は回転ナデ調整である。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。内外面ともいぶき黄橙色ないし灰色を呈する。4046は口径16.7cm, 底径10.3cm, 器高3.1cmを測る。口径が大きく、器高が低く、皿に近い形態である。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。体部はほぼ真直ぐのび、口縁端部を丸くおさめる。調整は回転ナデ調整である。胎土は細砂を多く含む。色調は内外面ともいぶき黄橙色を呈する。4047~4059は底部の切り離しが回転糸切りのものである。4047は底径6.1cmを測る。体部は比較的上方に立ち上がり、ほぼ真直ぐのびる。成形はロクロ水挽成形である。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4048は底径6.8cmを測る。底部の器壁は厚い。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。4049は底径6.6cmを測る。体部はほぼ真直ぐのびる。成形はロクロ水挽成形で、内面にロクロ目が顕著に残る。体部の調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。4050は底径6.4cmを測る。器壁はやや厚い。成形は粘土紐巻き上げ

ロクロ成形である。体部の調整は回転ナデ調整である。色調は、内面が黄灰色、外面が浅黄色を呈する。4051~4057は体部が内湾するものである。4051は底径8.0cmを測るやや大きいものである。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。4052は底径5.6cmを測る。体部の調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。4053は底径6.5cmを測る。器壁は薄い。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。体部の器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色を呈する。4054は底部が完存するもので、底径6.5cmを測る。器壁は薄い。成形はロクロ水挽成形である。体部の調整は回転ナデ調整である。胎土には砂粒を多く含む。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。4055は底径6.8cmを測る。体部の調整は回転ナデ調整である。色調は、内面が黄灰褐色、外面がにぶい橙色を呈する。4056は底径6.0cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともいぶい黄橙色を呈する。4057は口径15.2cm、底径6.2cm、器高4.4cmを測

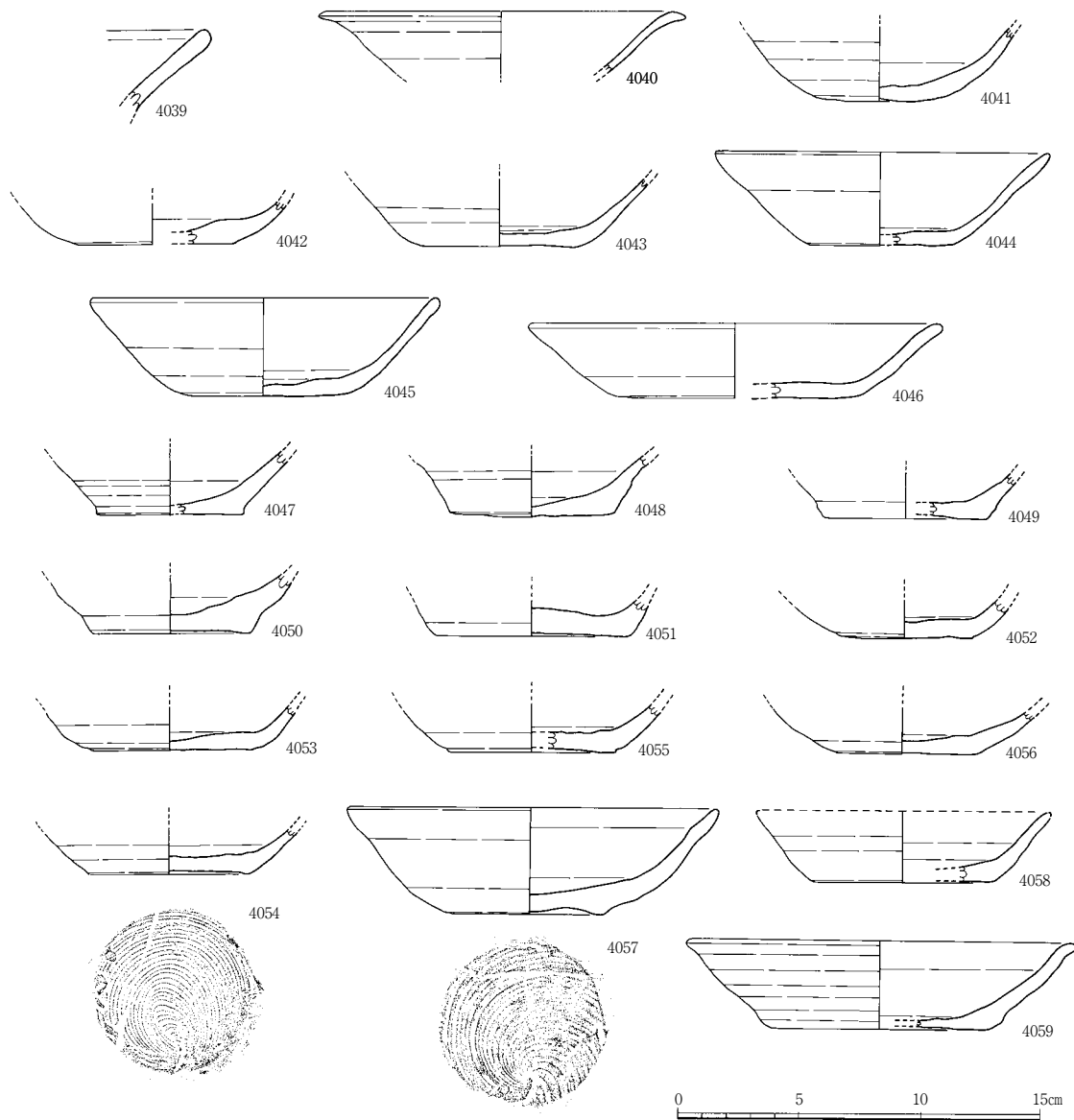


Fig.98 D区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師質土器1)

2. 調査区の概要 (4)D区

る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器壁がやや厚い。体部の調整は回転ナデ調整である。4058・4059は器高が低く、皿に近い形態を呈する。4058は底径7.3cmを測る。粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。胎土は細砂を含む。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4059は口径15.8cm, 底径8.9cm, 器高3.7cmを測る。成形はロクロ水挽成形である。調整は回転ナデ調整で、内底面の一部にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

4060~4075は小皿である。4060~4065は底部の切り離しが回転ヘラ切りのものである。4060は口径8.0cm, 底径5.4cm, 器高5.4cmを測る。口縁部は外反する。外底面には板状圧痕が残る。調整は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。器面は一部煤が付着する。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし褐灰色を呈する。4061は口径8.2cm, 底径5.0cm, 器高1.6cmを測る。口縁部は内湾する。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。4062は口径8.5cm, 底径4.9cm, 器高1.8cmを測る。口縁部はやや内湾する。底部には一部粘土が付着する。外底面には板状圧痕が残る。調整は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4063は口径8.7cm, 底径3.6cm, 器高1.7cmを測る。口縁部は内湾する。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4064は口径8.8cm, 底径6.1cm, 器高2.1cmを測る。口縁部は器壁が厚く内湾する。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4065は口径9.1cm, 底径6.2cm, 器高1.8cmを測る。口縁部は内湾する。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4066~4072は底部の切り離しが回転糸切りのものである。4066は口径7.4cm, 底径4.6cm, 器高1.4cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐ上がる。調整は回転ナデ調整の後内底面に一部ナデ調整を加える。色調は内外面とも橙色ないし灰褐色を呈する。4067は口径7.8cm, 底径5.8cm, 器高1.7cmを測る。やや器壁が厚く、口縁部は短くほぼ真直ぐのびる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも暗灰色ないし褐灰色を呈する。4068は口径7.8cm, 底径6.0cm, 器高1.4cmを測る。口縁部は短く、内湾する。調整は回転ナデ調整で、内底面の一部にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4069は口径8.0cm, 底径5.0cm, 器高1.8cmを測る。口縁部はやや内湾する。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。5070は口径8.3cm, 底径5.0cm, 器高1.6cmを測る。口縁部は外反する。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4071は口径8.6cm, 底径5.9cm, 器高1.7cmを測る。口縁部は外反する。調整は回転ナデ調整であるが、器面は著しく磨滅する。内面は一部煤が付着する。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4072は口径9.3cm, 底径6.7cm, 器高1.1cmを測る。器高が低く、口縁部は大きく外反する。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4073は口径7.6cm, 底径5.0cm, 器高1.5cmを測る。口縁部は内湾する。器面は著しく磨滅するため底部の切り離しと調整は不明である。色調は、内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい黄橙色ないしにぶい赤橙色を呈する。4074は口径8.9cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり, ほぼ真直ぐのびる。調整は回転ナデ調整である。色調は、内面が灰褐色, 外面がにぶい黄橙色を呈する。4075は底径7.1cmを測る。口縁部は器壁が薄く, ほぼ真直ぐのびる。器面は著しく磨滅するため底部の切り離しと調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

4076・4077は椀で、2点とも輪高台を有する。4076は底径8.1cmを測る。高台は断面方形で、ややハの字状に開く。調整は高台内がナデ調整、体部外面が回転ナデ調整で、内面は著しく磨滅するため調整不明である。色調は、内面が褐灰色、外面がにぶい黄橙色を呈する。4077は底径6.0cmを測る。底部の器壁が非常に厚く、断面逆台形の低い高台が付く。底部の切り離しは回転糸切りで、体部下部を削った後、高台を貼り付ける。体部は外面が回転ナデ調整、内面はナデ調整を行う。また、見込には重ね焼の痕が残る。外底面には「得」とみられる文字が墨書される。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

4078は釜で、口径20.0cmを測る。体部は内湾し、口縁端部は外傾する平面をなす。鏝は断面三角形のものを有する。調整は体部外面が斜め方向のタタキ、口縁部がヨコナデ調整、体部内面がヨコ方向のハケ調整である。外面には煤が付着する。色調は、内面がにぶい褐色、外面が橙色ないし黒色を呈する。

瓦質土器 (Fig.100-4079~4082)

すべて釜である。4079は体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。鏝は断面三角形のものを有する。調整は口縁部と内面がヨコナデ調整である。体部外面は煤が付着する。色調は内外面とも灰色を呈する。4080・4081は口縁部は内湾し、端部は外傾する面を持つ。鏝は断面三角形のものを有する。4080は口径16.8cmを測る小型のものである。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整で指

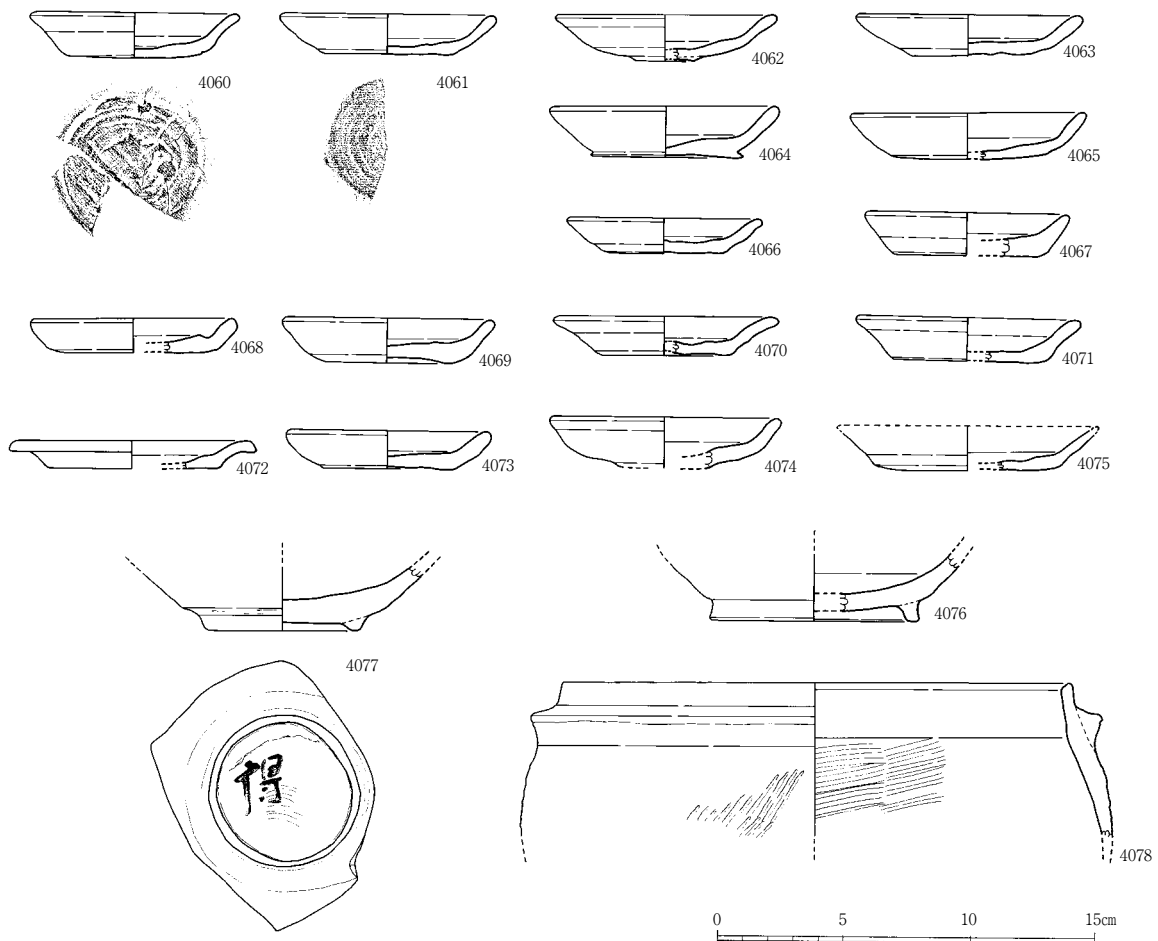


Fig.99 D区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師質土器2)

2. 調査区の概要 (4)D区

頭圧痕が残る。内面はナデ調整である。外面には煤が付着する。色調は、内面がにぶい黄色ないし灰色、外面が灰色ないし黒色を呈する。4081は口径20.0cmを測る。調整は体部外面がナデ調整、口縁部と内面がヨコナデ調整である。色調は内外面とも灰色ないし黄灰色を呈する。4082は口径19.3cmを有する。口縁部は内湾し、端部は外傾する面を持つ。鏝は幅約1cmで、水平にのびる。調整は体部がナデ調整、口縁部がヨコナデ調整である。色調は内外面とも暗灰色を呈する。

白磁 (Fig.100-4083)

4083は皿で、底径4.4cmを測る。外面は僅かに釉が見られるが、底部と体部下半は釉ハギを行い、回転ヘラ削りの痕跡が残る。内面は灰色味を帯びた釉を薄く施す。

青磁 (Fig.100-4084~4086)

すべて龍泉窯系の碗である。4084は底部が完存するもので、底径5.2cmを測る。高台は断面三角形の細く高いものを有する。外面は線描の蓮弁文、見込には花文のスタンプがみられる。釉はオリ-

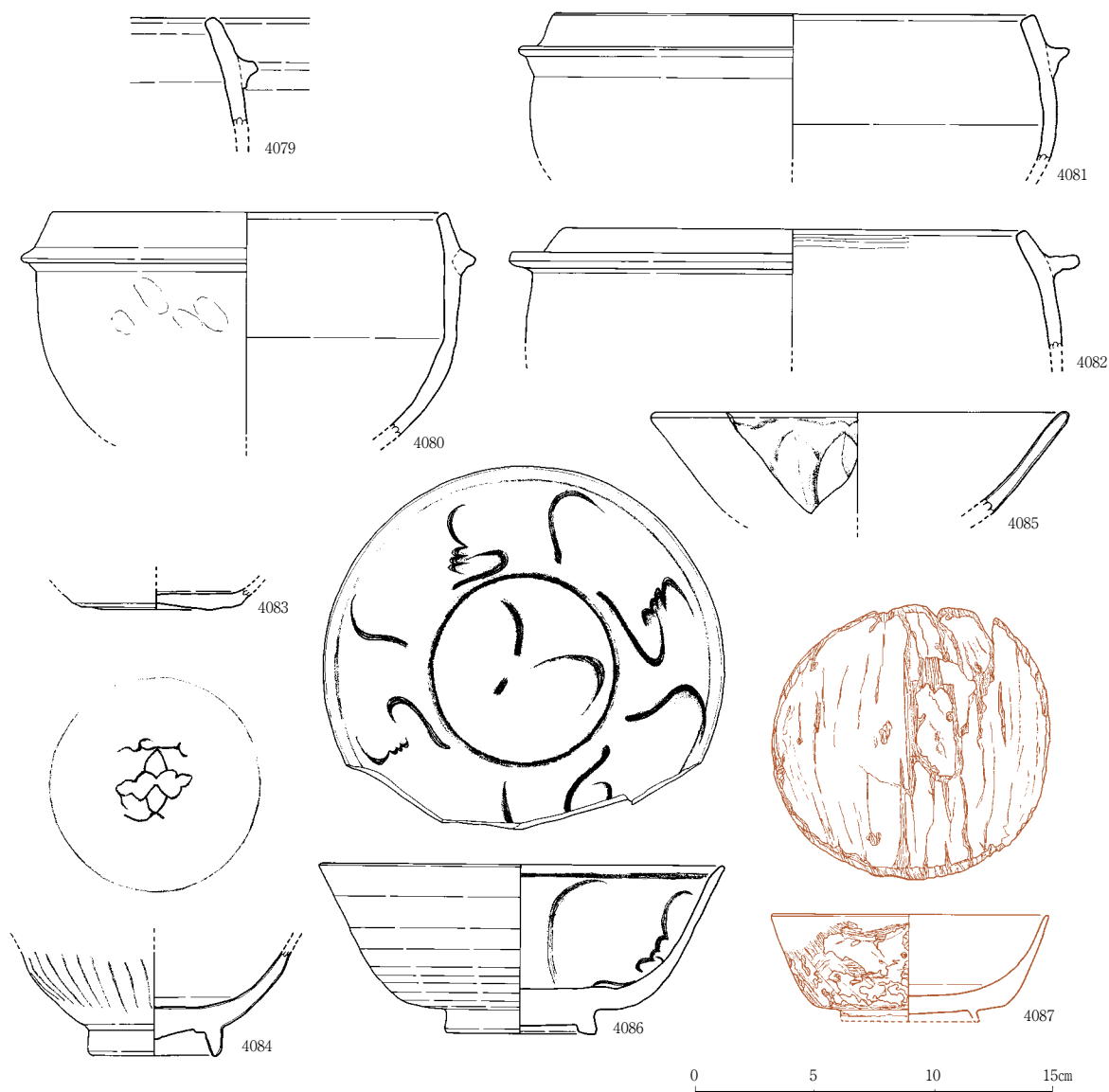


Fig.100 D区第三層出土遺物実測図(瓦質土器・白磁・青磁ほか)

ブ色のものを高台の内側まで薄く施す。4085は口径17.2cmを測る。外面には蓮弁文がみられる。釉はくすんだ水色のものを約0.3mmの厚さに施すが、透明感がなく、ムラがある。4086は口径16.8cm, 底径6.2cm, 器高7.0cmを測る。底部の器壁は非常に厚く、断面方形で低い削り出し高台を有する。外面は無文で、ロクロ目が顕著に残る。内面は櫛状の工具による3条の沈線で4分割し、その間に飛雲文を描く。釉はオリーブ色のものを高台の側面までと、一部高台内にも薄く施す。

木製品 (Fig.100-4087)

4087は漆器の椀で、口径11.5cmを測る。器高が低く、底部は平らで、杯に近い形態である。底部にはハの字状に開く低い高台が付く。総赤色系で、下地は黒色である。木地はモクレン科モクレン属である。

第VIII層出土遺物

弥生土器 (Fig.101-4088~4091)

すべて甕で、如意形口縁である。4088は口縁端部の全面に刻目を施す。口縁部はヨコナデ調整, その他はナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。4089は口縁端部下半に刻目を施す。口縁部はヨコナデ調整, その他はナデ調整で指頭圧痕が残る。色調は、内面が橙色, 外面がにぶい赤褐色を呈する。

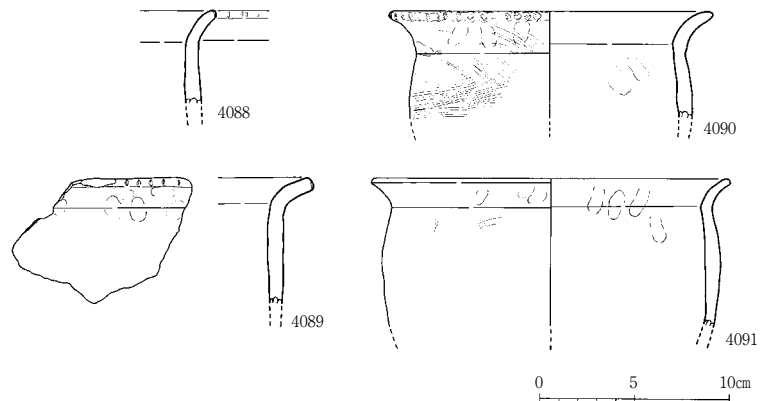


Fig.101 D区第VIII層出土遺物実測図(弥生土器)

4090は口径16.6cmを測る。口縁端部の全面に刻目を施す。口縁部はヨコナデ調整, 外面の頸部から体部かけて斜め方向の後ヨコ方向のハケ調整, 内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。色調は内外面とも橙色を呈する。4091は口径18.6cmを測る。体部は若干膨らみ, 口縁部はやや器壁が薄く, 緩やかに外反する。口縁端部には刻目は認められない。調整は口縁部がヨコナデ調整, その他がナデ調整で, 指頭圧痕が残る。色調は、内面が橙色, 外面がにぶい橙色を呈する。

土師質土器 (Fig.102-4092~4097)

4092~4095は杯である。4092は底径6.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りとみられる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は、内面が橙色, 外面がにぶい橙色を呈する。4093は底径7.9cmを測る。底部は円盤状高台風で底部と体部の境に段を有する。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。4094は口径14.7cmを測る。器壁は薄く, 口縁部は外反する。調整は回転ナデ調整である。色調は、内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい黄橙色ないし黒褐色を呈する。4095は高台を有するもので, 先端を欠損するが, 器高が高い。高台は若干ハの字状に開き, 粗雑に貼り付ける。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。高台内はナデ調整, 器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調

2. 調査区の概要 (4) D区

整を加える。色調は内外面とも橙色を呈する。

4096は小皿で、口径8.5cm、底径5.4cm、器高1.6cmを測る。口縁部は内湾する。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

4097は釜で、口径22.4cmを測る。器壁は厚く、口縁部はやや内湾し、端部を細く仕上げる。鏝は幅約1.8cmを測り、若干下に傾く。調整はヨコナデ調整で、鏝は煤が付着する。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし褐灰色を呈する。

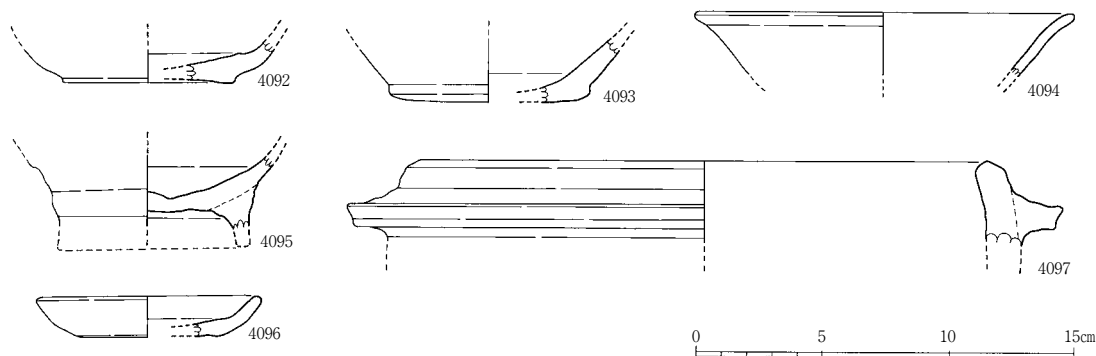


Fig.102 D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器)

第 XI 層出土遺物

弥生土器 (Fig.103-4098~4102)

4098は壺で、口径14.6cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部を丸くおさめる。外面はタテ方向のハケ調整を施した後でヨコ方向のヘラ磨きを加える。内面はナデ調整である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

4099~4101は甕である。4099は口径24.0cmを測る。如意形口縁を有し、口縁端部には全面に刻目を施す。体部にはヘラ描沈線が2条みられる。調整は全面ナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。4100は口径22.0cmを測る。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。体部内面はナデ調整で、その他は器面が著しく磨滅するため調整は不明である。胎土には小礫を多く

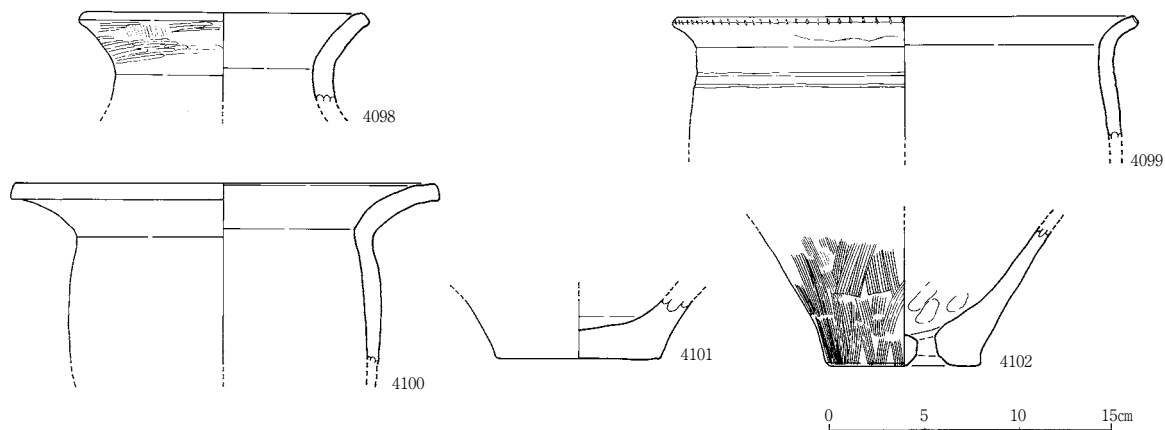


Fig.103 D区第XI層出土遺物実測図(弥生土器)

含む。色調は、内面が灰黄色、外面が灰黄色ないし橙色を呈する。4101は底部が完存するもので、底径8.6cmを測る。調整はナデ調整、内面には指頭圧痕が残る。胎土には小礫を多く含み、色調は、内面が灰白色ないし黄灰色、外面が黄灰色ないし赤色を呈する。

4102は甑である。底部が完存するもので、底径8.0cmを測り、底部には焼成後に内外面から穿孔する。体部はほぼ真直ぐ外上方にのびる。外面はタテ方向のハケ調整、内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が灰褐色を呈する。

土師器 (Fig.104-4103)

4103は甕で、口径25.6cmを測る。体部はほぼ真直ぐ立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は真直ぐのび、端部は上方に摘み上げる。調整は体部外面がタテ方向のハケ調整、その後口縁をヨコナデ調整し、口縁部内面には斜め方向のハケ調整を加える。体部内面はナデ調整の後ヨコ方向のハケ調整を施す。器面は内外面とも煤が付着する。胎土には白色の砂粒を多く含む。色調は、内面が灰褐色ないし黒褐色、外面が褐色を呈する。

瓦器 (Fig.104-4104~4109)

すべて椀である。4104は口径13.3cmを測る。口縁部は歪み、器高が低く、腰が張る形態である。外面はヨコナデ調整が1段で、幅2mmのヘラ磨きがみられる。体部下半はナデ調整で、指頭圧痕が残る。内面にはヘラ磨きを行う。4105は口径13.4cmを測る。外面はヨコナデ調整が1段で、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は体部に圏線状のヘラ磨き、見込に幅2mmの平行暗文を施す。4106は口径13.8cmを測る。口縁部はやや直線的である。外面はヨコナデ調整が1段で、幅2mmのヘラ磨きがみられる。体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面にはヘラ磨きが僅かに残る。炭素は口縁部にのみ吸着しており、重ね焼の痕とみられる。4107は底径4.5cmを測る。高台は断面逆台形の幅の太いものが付く。外面はナデ調整で、指頭圧痕が残る。内面は部分的に幅2mmのヘラ磨きが見られる。4108は口径13.7cm、底径4.9cm、器高3.9cmを測る。高台は断面逆台形を呈する。外面はヨコナデ調整が1段で、体部下半はナデ調整で、指頭圧痕が残る。内面は体部に幅3mmのヨコ方向のヘラ磨き、見込には格子状の暗文がみられる。焼成が良好で、ヘラ磨きが銀色に発色する。また、高台内には墨書がみられ、「新」または「斬」「斯」の可能性が高い。4109は口径15.4cm、底径4.0cm、器高5.6cmを測る。高台は断面三角形を呈する。口縁部のヨコナデ調整は1段で、ヘラ磨きを行う。体部外面下半はナデ調整で、指頭圧痕が残る。内面は体部に幅5~7mmの幅の太いヨコ方向のヘラ磨き、見込には一方向にヘラ磨きを施す。また、体部内面のヘラ磨きは分割されており、4回で1周を回るとみられる。

東播系須恵器 (Fig.104-4110・4111)

4110は椀で、底径5.2cmを測る。体部と底部の境には接合痕がみられ、体部は内湾して立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りで、体部は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰色を呈する。

4111は片口鉢である。器壁は薄く、口縁端部は上方へ摘み上げる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。焼成は不良で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

土師質土器 (Fig.105~108-4112~4169)

4112~4147は杯である。4112は口縁の破片で、若干外反する。調整は回転ナデ調整である。色調

2. 調査区の概要 (4)D区

は内外面とも灰黄褐色を呈する。4113は器壁が非常に薄く、体部がほぼ真直ぐのびる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。4114は口径14.1cmを測る。器高が非常に低いものである。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ、調整は回転ナデ調整である。色調は、内面が灰黄褐色、外面がにぶい黄褐色を呈する。4115は口径14.9cmを測る。体部はやや内湾し、口縁端部を丸くおさめる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともなぶい黄橙色ないし灰褐色を呈する。4116~4118は底径が小さく、体部が比較的上方へ立ち上がるものである。4116は底径6.6cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部と体部の境には接合痕が見られる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともなぶい黄橙色を呈する。4117は底部が完存するもので、底径4.6cmを測る。体部の器壁は薄く、ほぼ真直ぐのびる。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。体部は回転ナデ調整で、内底面にはロクロ目が顕著に残る。胎土には微砂を多く含む。色調は内外面ともなぶい黄橙色を呈する。4118は底径6.8cmを測る。体部は内湾して立ち上がる。焼成が不良で、器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。4119は底径4.8cmを測る。小さな底部から内湾して立ち上がる。底部の切り離しは静止ヘラ切りで、体部は回転ナデ調整である。色調は内外面ともなぶい黄橙色を呈する。4120~4122は底径が大きく、体部がほぼ真直ぐのびる。4120は底径8.1cmを測る。粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、体部と内面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が灰黄褐色を呈する。4121は底径7.4cmを測る。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、著しく磨滅するため不明瞭である。器面は回転ナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。4122は底径6.6cmを測る。

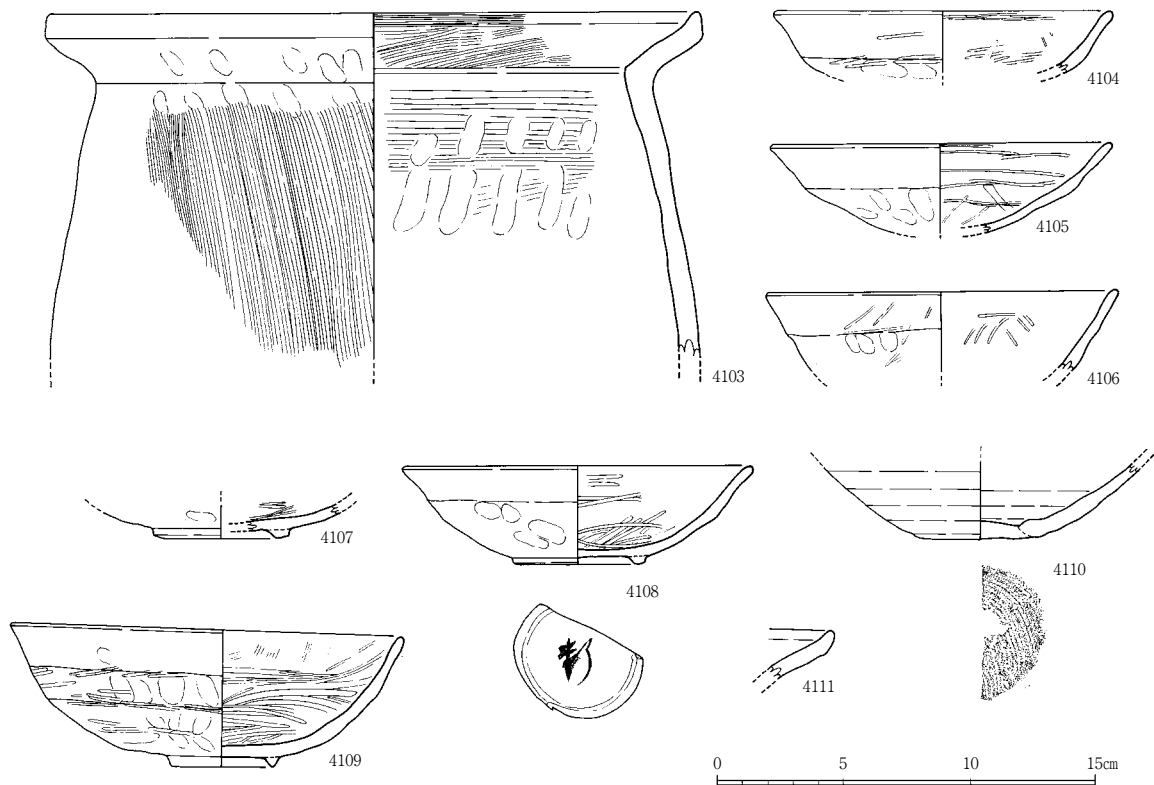


Fig.104 D区第Ⅵ層出土遺物実測図(土師器・瓦器・東播系須恵器)

器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4123は底径7.4cmを測る。底部と体部の境が明瞭で、体部はやや内湾する。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が灰黄褐色を呈する。4124は底部が完存するもので、底径6.3cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りで、体部外面は回転ナデ調整、内面は著しく磨滅するため調整は不明である。胎土には砂粒を多く含む。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4125は底径7.7cmを測る大きいもので、体部は比較的上方に立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4126は底径5.8cmを測る。体部はほぼ真直ぐのびる。底部の切り離しは回転糸切りとみられるが、著しく磨滅するため不明瞭である。胎土には細砂を多く含む。色調は外面が褐灰色、

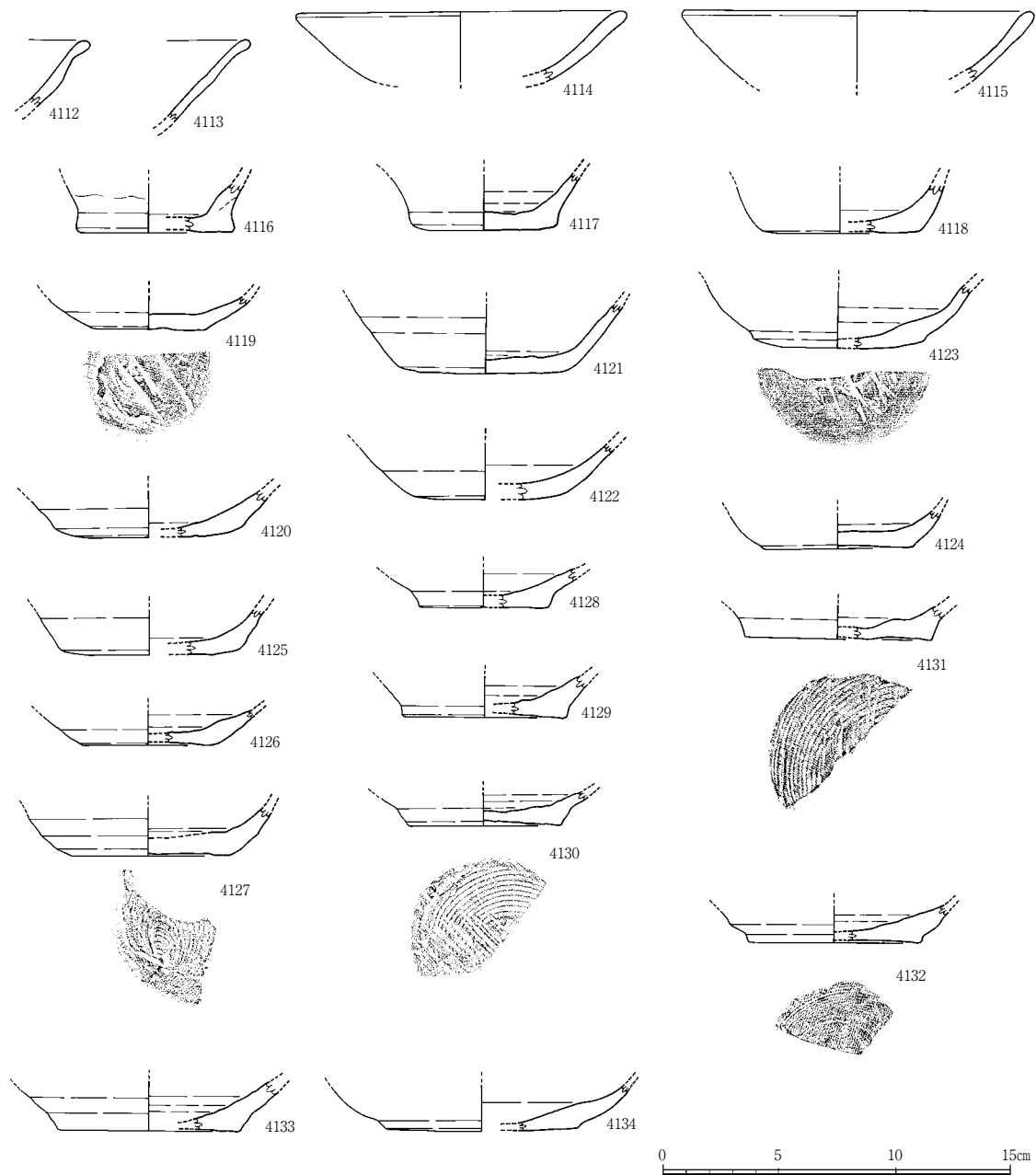


Fig.105 D区第XI層出土遺物実測図(土師質土器1)

2. 調査区の概要 (4)D区

内面が褐灰色ないし浅黄橙色を呈する。4127は底径6.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。内外面とも一部煤が付着する。色調は、内面が黒褐色、外面は褐灰色ないしにぶい褐色を呈する。4128～4132は底部が円盤状高台となるものである。4128は底径5.6cmを測る。体部は若干器壁が薄い。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4129は底径6.9cmを測る。体部はほぼ真直ぐのびる。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。4130は底径6.5cmを測る。若干器壁が薄い。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は、内面が灰白色、外面が褐灰色ないし灰白色を呈する。4131は底径8.0cmを測る、底径がやや大きいものである。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4132は底径7.4cmを測る。体部はやや内湾する。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整である。色調は、内面が浅黄橙色、外面が灰白色を呈する。4133は底径7.8cmを測る。体部はほぼ真直ぐのびる。成形はロクロ水挽成形である。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。4134は底径8.2cmを測る大きいものである。体部は内湾して立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。体部と内面の調整は回転ナデ調整である。底部の切り離しは磨滅するため不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。4135・4136は器高が低く、体部が外上方へ大きく開くもので、4135は底径6.0cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。体部外面は回転ナデ調整である。内面は磨滅するため調整は不明である。外面は一部煤が付着する。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい橙色ないし黒褐色を呈する。4136は底径6.2cmを測る。口縁端部を欠損する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4137は底部が完存するもので、口径12.0cm、底径7.2cm、器高3.8cmを測る。体部は比較的上方にほぼ真直ぐ立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整である。胎土には砂粒を含む。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4138は口径13.8cmを測る。器壁が厚く、腰が張る形態である。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4139は口径13.8cm、底径8.5cm、器高4.2cmを測る。底部は円盤状高台となり、成形はロクロ水挽成形で、器面にはロクロ目が顕著に残る。底部の切り離しは回転糸切りで、体部と外面は回転ナデ調整である。色調は、内面が橙色、外面が浅黄橙色を呈する。4140・4141は器高が高く、体部がほぼ真直ぐのびるものである。4140は口径14.8cm、底径6.8cm、器高5.0cmを測る。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で、その後内底面はナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4141は口径15.6cm、底径7.5cm、器高4.8cmを測る。底部の器壁が非常に厚い。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で、その後内底面はナデ調整を加える。また、内面には火襷がみられる。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし黄灰色、外面がにぶい黄灰色ないし褐灰色を呈する。4142は口径14.1cm、底径8.2cm、器高3.7cm

を測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4143は口径15.0cm、底径8.2cm、器高4.0cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整である。また、外底面には墨書がみられる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4144は口径14.5cm、底径7.2cm、器高3.8cmを測る。体部はほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4145は口径14.8cm、底径6.7cm、器高4.5cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。成形はロクロ水挽成形で、器面にはロクロ目が顕著に残る。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整である。

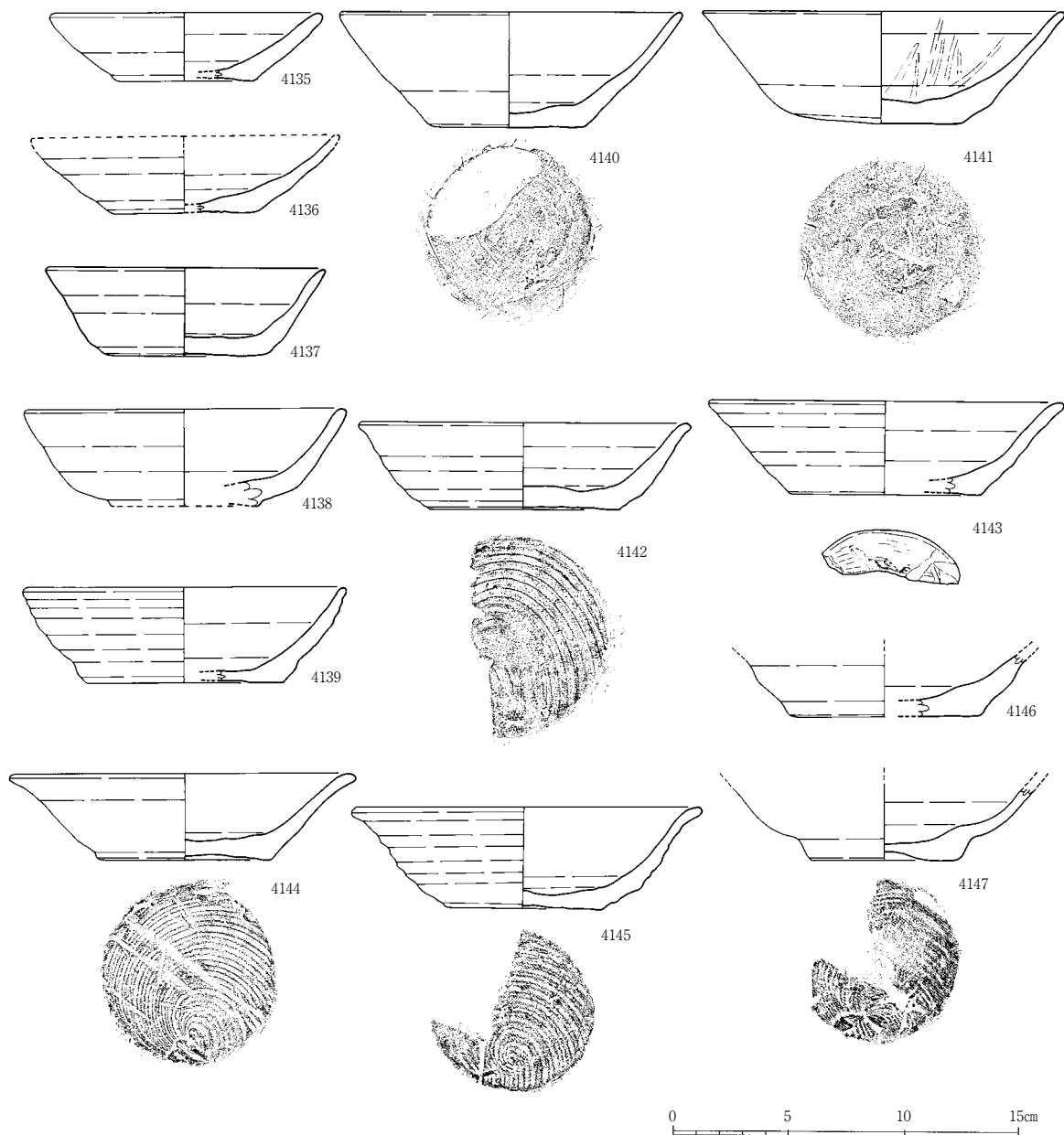


Fig.106 D区第Ⅺ層出土遺物実測図(土師質土器2)

2. 調査区の概要 (4)D区

胎土には微砂を多く含む。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4146は底径8.4cmを測る。底径が大きく、器壁が厚い。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4147は底径6.2cmを測る。底部は円盤状高台風に体部との境に段を有し、体部はやや器壁が薄く、内湾して立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

4148～4162は小皿である。4148は底部が完存するもので、底径5.6cmを測る。口縁部は内湾する。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは著しく磨滅するため不明である。胎土は細砂を非常に多く含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4149は口径7.7cm, 底径4.8cm, 器高1.1cmを測る。口縁部は器壁が薄く、内湾する。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは著しく磨滅するため不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4150は口径8.3cm, 底径5.4cm, 器高1.5cmを測る。口縁部は器壁が薄く、ほぼ真直ぐのびる。器面は回転ナデ調整である。底部の切り離しは著しく磨滅するため不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4151は口径9.0cm, 底径7.2cm, 器高1.0cmを測る。口縁部が短く、器高が低い。器面は回転ナデ調整である。底部の切り離しは著しく磨滅するため不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4152は口径9.2cm, 底径7.4cm, 器高2.1cmを測る。器壁は厚く、口縁部はほぼ真直ぐのび、端部を細く仕上げる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも黄橙色を呈する。4153～4155は底部の切り離しが回転ヘラ切りのものである。4153は完形で、口径7.9cm, 底径5.4cm, 器高1.7cmを測る。口縁部はやや内湾する。器面は回転ナデ調整であり、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4154は完形で、口径9.1cm, 底径6.2cm, 器高1.8cmを測る。口縁部はやや内湾する。外底面には板状

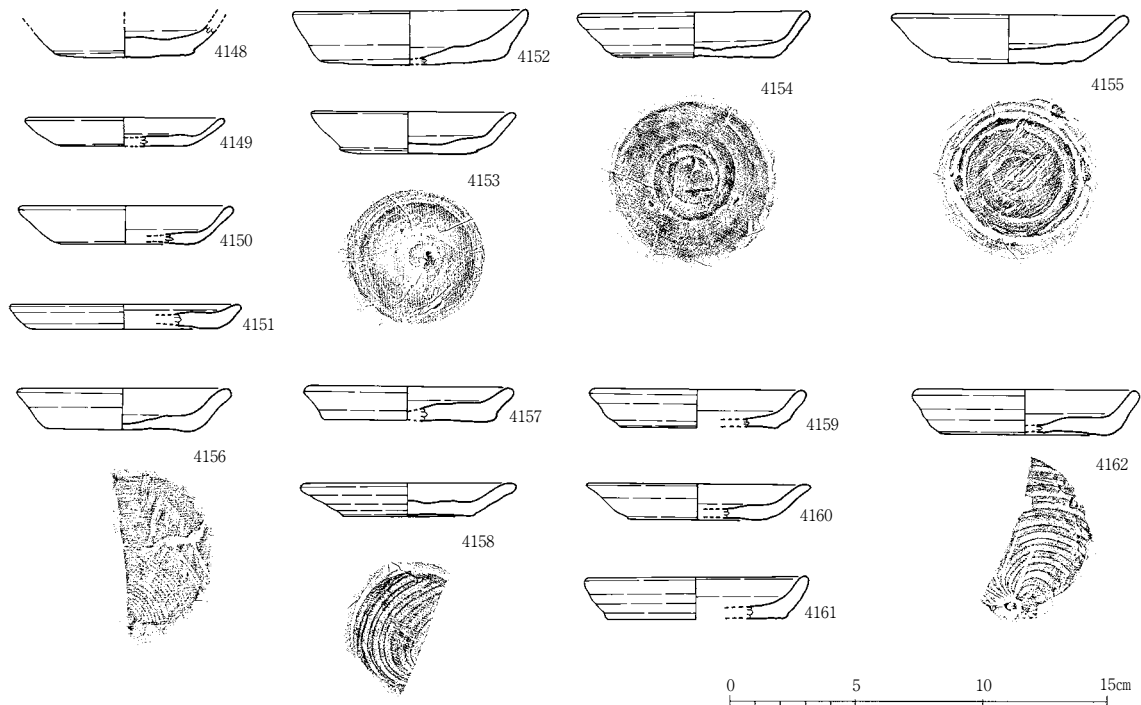


Fig.107 D区第Ⅺ層出土遺物実測図(土師質土器3)

圧痕が残る。器面は回転ナデ調整である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。4155は完形で、口径9.1cm、底径4.5cm、器高2.0cmを測る。器壁が厚く、口縁部はほぼ真直ぐ上がる。外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4156～4162は底部の切り離しが回転糸切りのものである。4156は口径8.0cm、底径6.0cm、器高1.7cmを測る。器壁が厚く、口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は、内面が褐灰色、外面が褐灰色ないしにぶい黄橙色を呈する。4157は口径8.0cm、底径6.8cm、器高1.3cmを測る。器壁が厚く、口縁部が短い。器面は回転ナデ調整である。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4158は口径8.2cm、底径5.1cm、器高1.3cmを測る。器高が低く、口縁部はほぼ真直ぐ上がる。外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。体部内面には煤が付着する。胎土には砂粒を多く含み、色調は、内面が灰白色ないし褐灰色、外面が褐灰色を呈する。4159は口径8.3cm、底径6.2cm、器高1.5cmを測る。口縁部は内湾する。器面は回転ナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4160は口径8.5cm、底径5.6cm、器高1.4cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐのび、端部を細く仕上げる。器面は回転ナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が灰黄褐色を呈する。4161は口径8.6cm、底径7.0cm、器高1.7cmを測る。器壁が厚く、口縁部は上方に立ち上がる。器面は回転ナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4162は口径8.6cm、底径6.4cm、器高1.8cmを測る。器壁が厚く、口縁部はほぼ真直ぐ上がる。外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。胎土は比較的精良で、器面は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

4163～4167は椀である。4163は口径15.7cmを測る。器壁は薄く、口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。4164は口径15.9cmを測る。口縁部はやや内湾し、端部は内側に肥厚する。外面は回転ナデ調整、内面は丁寧なナデ調整を行う。胎土は砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈する。4165・4166は口縁部が外反する。4165は口径14.8cmを測る。器壁は薄く、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。調整は回転ナデ調整である。胎土は砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4166は口径16.8cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部は若干肥厚する。調整は回転ナデ調整である。胎土は精良で、色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4167は底径5.8cmを測る。高台は断面逆台形で、ハの字状に開く。調整は高台内がナデ調整、体部外面が回転ナデ調整で、内面にはナデ調整の後にヘラ磨きを加える。焼成は良好で須恵質に近い。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

4168・4169は釜である。4168は幅1.7cmでやや上方にのびる鏝が付く。外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整である。胎土には礫を多く含み、色調は内外面とも灰褐色を呈する。4169は口径23.7cmを測る。体部はやや内湾し、口縁端部は外傾する平面をなす。口縁部には断面三角形の小さな鏝が付く。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整で、指頭圧痕が残り、一部煤が付着する。内面はナデ調整で、指頭圧痕が残る。胎土は細砂を非常に多く含む。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

2. 調査区の概要 (4)D区

白磁 (Fig.108-4170)

4170は碗で、口径15.8cmを測る。体部は内湾し、口縁部は玉縁をなす。釉は乳白色のものを内面と体部上半に薄く施釉する。体部下半は露胎である。胎土には黒色の砂粒を多く含み、灰白色を呈する。

土製品 (Fig.108-4171)

4171は土錘で、全長4.4cm、全幅1.4cm、孔径0.6cmを測る。全面ナデ調整で、色調は浅黄橙色を呈する。

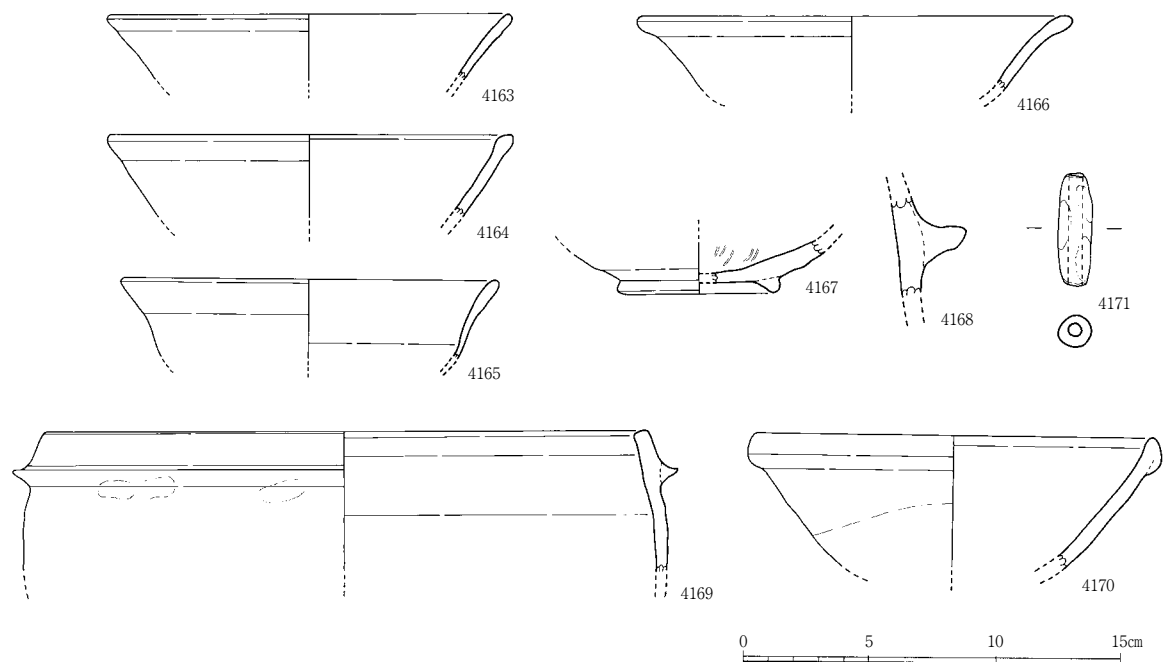


Fig.108 D区第XI層出土遺物実測図(土師質土器・白磁・土製品)

石製品 (Fig.109-4172~4176)

4172・4173は砥石である。4172は1面のみ残存し、割れた後に被熱する。石材は砂岩である。4173は両端を欠損する。4面を使用し、2面に敲打痕が残る。特に側面はよく使用しており著しく磨滅する。石材は砂岩である。

4174は硯である。外縁部は内傾する面をもち、内側に溝を巡らす。外側には幅約2mmの細い沈線が2条巡る。全面に加工痕が見られるが、外縁部から内面にかけては粗雑である。背面はアーチ状に加工し、外側を高台状にする。また、背面は幅3mmのタテ方向の加工痕、側面は斜め方向の加工痕が残る。石材は粘板岩とみられる。

4175・4176は滑石製の石鍋である。4175は口縁部が内湾し、端部は水平な面をなす。外面は残存部で幅2mmのタテ方向の加工痕が3段みられる。口縁端部は細い沈線状に斜め方向の加工痕、内面は幅の広いタテまたは斜め方向の加工痕が残存する。4176は口径25.6cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐのび、端部は水平な面を有する。鏝は断面台形状のものが巡る。鏝の上部と下部には幅1mmの鑿痕が残り、下部には幅の広い加工痕も僅かにみられる。全面に煤が付着する。

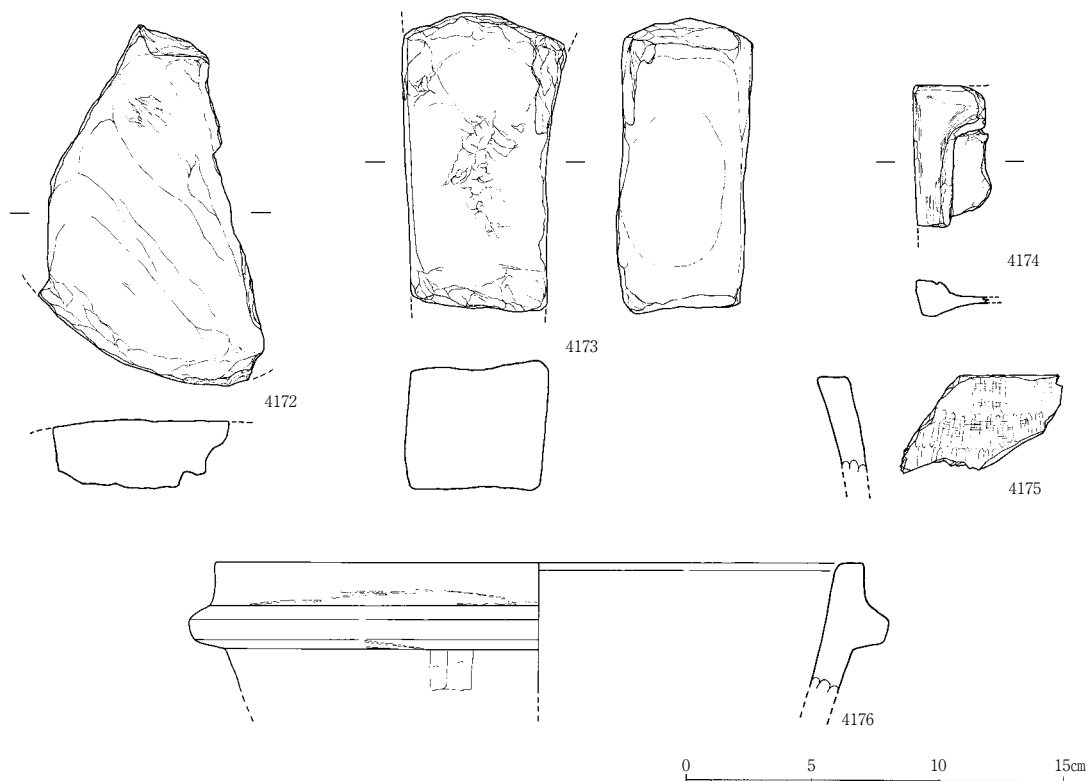


Fig.109 D区第XI層出土遺物実測図(石製品)

第XII層出土遺物

弥生土器 (Fig.110-4177~4181)

4177~4180は壺である。4177は口径12.6cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。外面は幅2mmのヨコ方向のヘラ磨きを行う。口縁端部と内面は著しく磨滅するため調整は不明である。胎土には礫を多く含み、色調は内外面とも橙色を呈する。4178は口径18.1cmを測る。口縁部は外反する頸部から大きく外傾し、端部を丸くおさめる。著しく磨滅するため調整は不明である。胎土には礫を非常に多く含み、色調は内外面ともいふ黄橙色を呈する。4179は底径10.4cmを測る。底部は強い指頭圧痕がみられ一部が凹む。著しく磨滅するため調整は不明である。胎土には礫を多く含む。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が暗灰黄色を呈する。4180は底径8.4cmを測る。胴部は底部から屈曲してほぼ真直ぐのびる。調整は内外面ともナデ調整である。色調は内外面ともいふ黄橙色を呈する。

4181は甕で、底径8.3cmを測る。体部は上方にほぼ真直ぐ立ち上がる。調整はナデ調整、内底面には指頭圧痕が残る。色調は内外面ともいふ橙色を呈する。

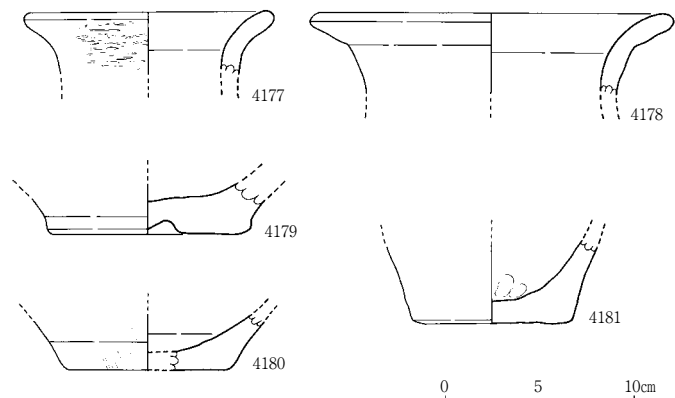


Fig.110 D区第XII層出土遺物実測図(弥生土器)

2. 調査区の概要 (4)D区

土師器 (Fig.111-4182・4183)

2点とも甕である。4182は口径28.6cmを測る。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部はやや内湾する。端部は外面に凹線が巡る。調整は内外面ともナデ調整、その後外面にタテ方向のハケ調整を行う。外面は煤が付着する。胎土は粗く、色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4183は口径34.0cmを測る。体部はほぼ真直ぐ立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲し、口縁部はやや内湾する。端部の外面には面をもち浅い凹線が巡る。外面はナデ調整で、指頭圧痕が残り、その後タテ方向のハケ調整を行う。口縁部はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を行う。外面は煤が付着する。胎土はやや粗く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

須恵器 (Fig.111-4184)

4184は甕で、口径16.8cmを測る。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は外上方にほぼ真直ぐのび、端部は内傾する凹面をなす。調整は内外面とも回転ナデ調整で、体部外面には自然釉が付着する。色調は内外面とも灰色を呈する。

黒色土器 (Fig.111-4185)

4185は内黒の椀で、底径7.3cmを測る。底部には断面方形でハの字状に開く高台が付き、体部は内湾して立ち上がる。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、体部外面は回転ナデ調整とみられる。内面は著しく磨滅するため調整は不明であるが、炭素が吸着する。胎土は白色の砂粒を多く含み、色調は、内面が黄灰色、外面がにぶい橙色を呈する。

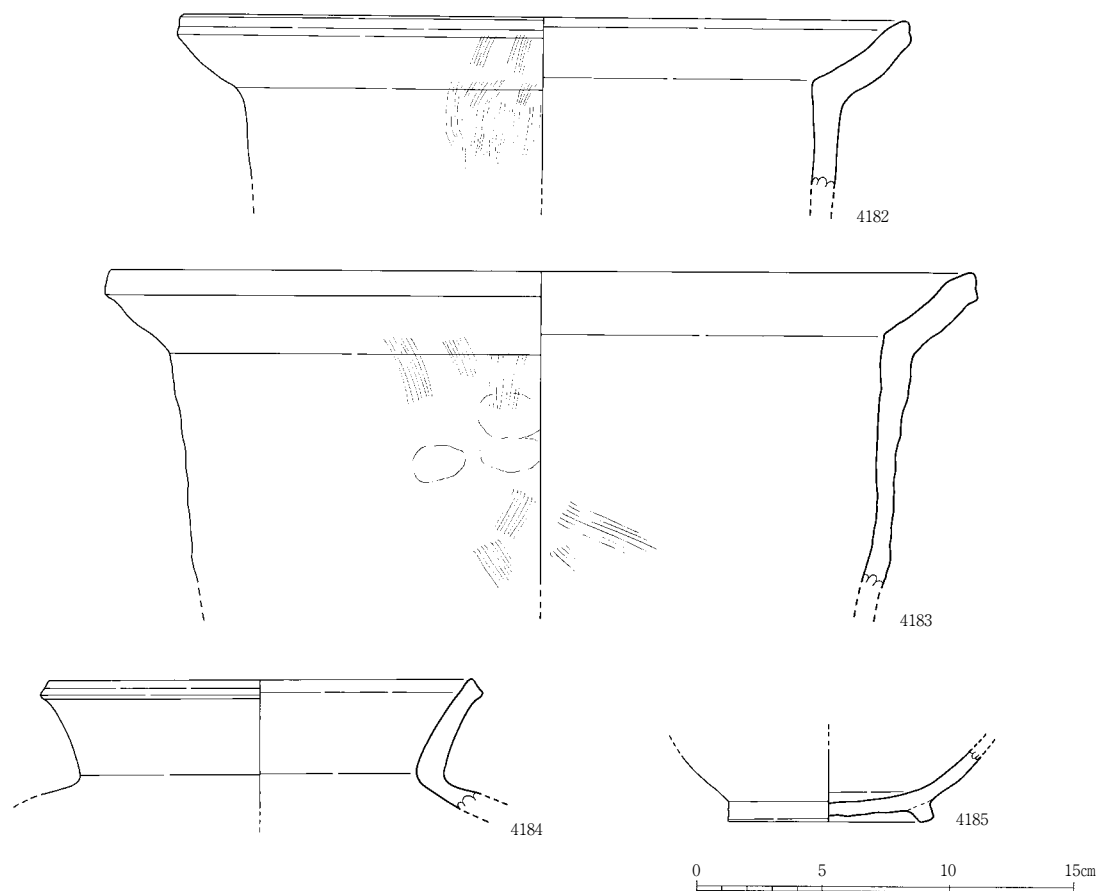


Fig.111 D区第Ⅶ層出土遺物実測図(土師器・須恵器・黒色土器)

瓦器 (Fig.112-4186~4190)

すべて碗である。4186は口径14.4cmを測る。外面はヨコナデ調整が1段で、ヨコ方向のヘラ磨きを行う。体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は体部に幅2~3mmのヨコ方向のヘラ磨き、見込は幅1mmの平行暗文がみられる。4187は口径15.8cmを測る、やや大きいものである。外面はヨコナデ調整を1段施し、体部はナデ調整で、強い指頭圧痕が残る。内面は幅2mmのヨコ方向のヘラ磨きを行う。4188は口径16.1cmを測る大きいものである。外面は弱いヨコナデ調整を1段、体部上半にはヨコ方向のヘラ磨き、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が3段残る。内面には部分的に幅2~3mmのヘラ磨きを行う。内面は一部のみ炭素が吸着する。4189は口径16.0cmを測る。口径が大きく、やや腰の張る形態を呈する。外面はヨコナデ調整が1段で、ヨコ方向のヘラ磨きを比較的密に行う。体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面はヨコまたは斜め方向のヘラ磨きを行う。4190は口径15.1cm、底径5.1cm、器高3.3cmを測る。高台は断面三角形の小さいものが付く。外面はヨコナデ調整が1段で、ヨコ方向のヘラ磨きを行う。体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は幅1~2mmの細かいヘラ磨きを行う。

東播系須恵器 (Fig.113-4191~4199)

すべて碗である。4191は口径16.3cmを測る。体部は比較的直線的で、口縁端部を丸く仕上げる。調整は内外面とも回転ナデ調整である。外面の一部には炭素が吸着する。色調は内外面とも灰色を呈する。4192は口径15.5cm、底径5.0cm、器高4.8cmを測る。底部はほぼ平らで、体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は小さく外反する。底部の切り離しは回転糸切りで、器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。口縁端部には重ね焼の痕がみられる。色調は内外面とも黄灰色を呈する。4193は口径15.8cm、底径5.3cm、器高4.8cmを測る。内底面は凹み、体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りである。調整は回転ナデ調整で、体部外面下半は一部ナデ調整を加える。口縁端部には重ね焼の痕がみられる。焼成はやや甘く、内外面とも黄灰色を呈する。4194は口径16.4cm、底径6.6cm、器高5.0cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りで、その他は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰色ないし褐灰色を呈する。4195は口径16.4cm、底径5.6cm、器高5.6cmを測る。内底面は凹み、体部は内湾する。

底部の切り離しは回転糸切りである。調整は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。焼成が甘く、内外面とも灰黄色ないし黄灰色を呈する。4196は口径16.4cm、底径6.0cm、器高5.0cmを測る。内底面は凹み、体部は内湾し

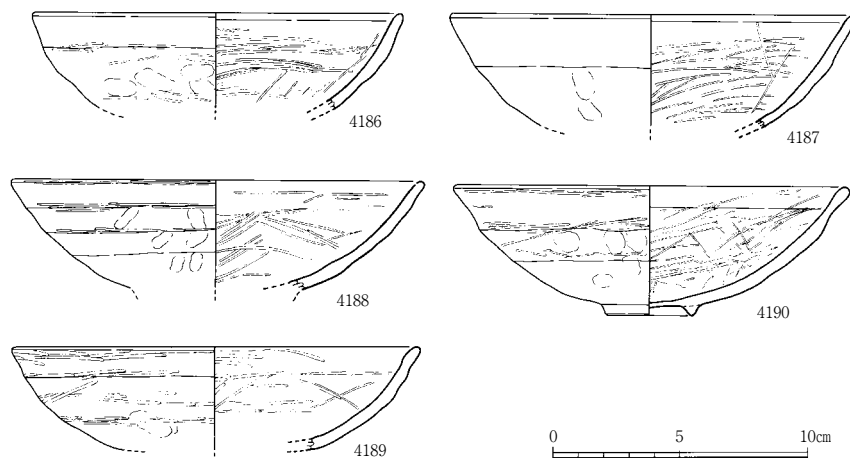


Fig.112 D区第II層出土遺物実測図(瓦器)

2. 調査区の概要 (4)D区

て立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りである。調整は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。口縁端部には重ね焼の痕が残る。色調は、内面が灰白色ないし灰黄褐色、外面が灰白色ないし褐灰色を呈する。4197は口径16.7cm、底径6.2cm、器高5.1cmを測る。体部は内湾し、口縁端部を丸く仕上げる。調整は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転糸切りによる。口縁部には重ね焼の痕が残る。焼成は良好であるが、内外面とも褐色を呈する。4198は口径16.9cm、底径5.9cm、器高5.2cmを測る。内底面は若干凹み、体部は内湾し、口縁端部を丸く仕上げる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。口縁端部には炭素が吸着し、重ね焼痕が残る。焼成は良好で、色調は内外面とも灰白色ないし暗灰色を呈する。4199は口径16.9cm、底径6.7cm、器高4.6cmを測る、器高がやや低いものである。内底面は凹み、体部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。底部の切り離しは回転糸切り、調整は回転ナデ調整で、口縁端部には重ね焼の痕が残る。色調は内外面とも黄灰色を呈する。

土師質土器 (Fig.114~128-4200~4379)

4200~4287は杯である。4200は口径14.6cmを測る。器高が低く、皿状を呈する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、体部は内湾し、口縁部は若干外反する。調整は回転ナデ調整である。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともい黄橙色を呈する。4201は口径14.7cmを測る。器壁は薄く、体部はほぼ真直ぐのび、口縁部は短く外反する。調整は回転ナデ調整である。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともい黄橙色を呈する。4202は口径14.0cmを測る。体部は内湾し、口縁部は外反する。成形はロクロ水挽成形である。胎土には細砂を多く含み、色調は内外面ともい橙色を呈する。4203は口径13.8cmを測る。体部はほぼ真直ぐのびる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともい黄橙色を呈する。4204~4210は体

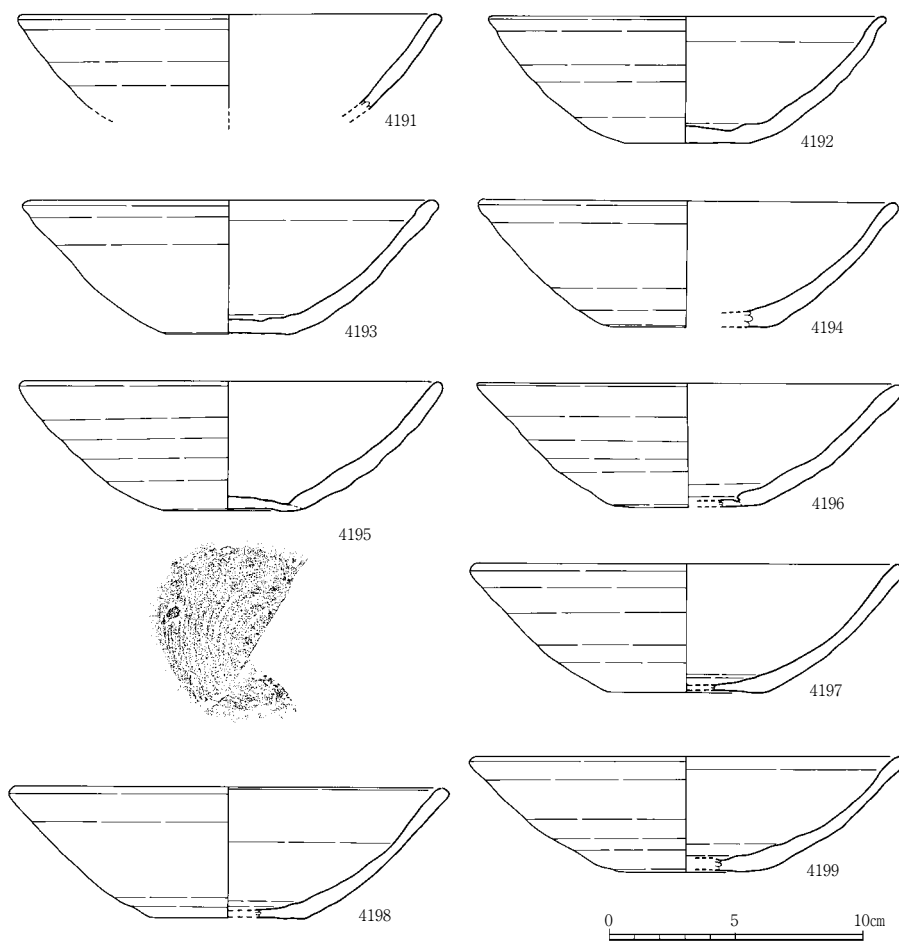


Fig.113 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(東播系須恵器)

部が直線的で、外方へ大きく開くものである。4204は口径13.7cmを測る。口縁部は外反する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部との接合部で剥離する。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰黄色を呈する。4205は口径14.9cmを測る。調整は回転ナデ調整で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4206は口径15.7cmを測る。調整は回転ナデ調整で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4207は口径14.6cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4208は口径15.9cmを測る。口縁部は若干肥厚する。成形はロクロ水挽成形で、調整は回転ナデ調整である。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙色ないし黒褐色を呈する。4209は口径15.4cmを測る。器壁が若干厚い。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整である。胎土は比較的精良で、色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4210は口径15.7cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。調整は回転ナデ調整で、内外面にヨコ方向のヘラ磨きを行う。また、内面には火襷がみられる。焼成は良好で須恵質に近く、胎土は精良である。色調は、内面が灰白色、外面が黄灰色ないし灰色を呈する。4211～4213は底径が小さく、体部が比較的上方に立ち上がるものである。4211は底径6.4cmを測る。外面の底部と体部の境には段を有する。成形はロクロ水挽成形である。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4212は底径6.2cmを測る。体部は滑らかに立ち上がる。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。体部は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも橙色ないし灰褐色を呈する。4213は底径6.6cmを測る。成形はロクロ水挽成形

で、内底面にはロクロ目が顕著に残る。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は、内面が黄灰色、外面が灰黄色を呈する。4214～4234は底部の切り離しが回転ヘラ切りのものである。4214は底径9.3cmを測り、体部はやや内湾する。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4215～4221

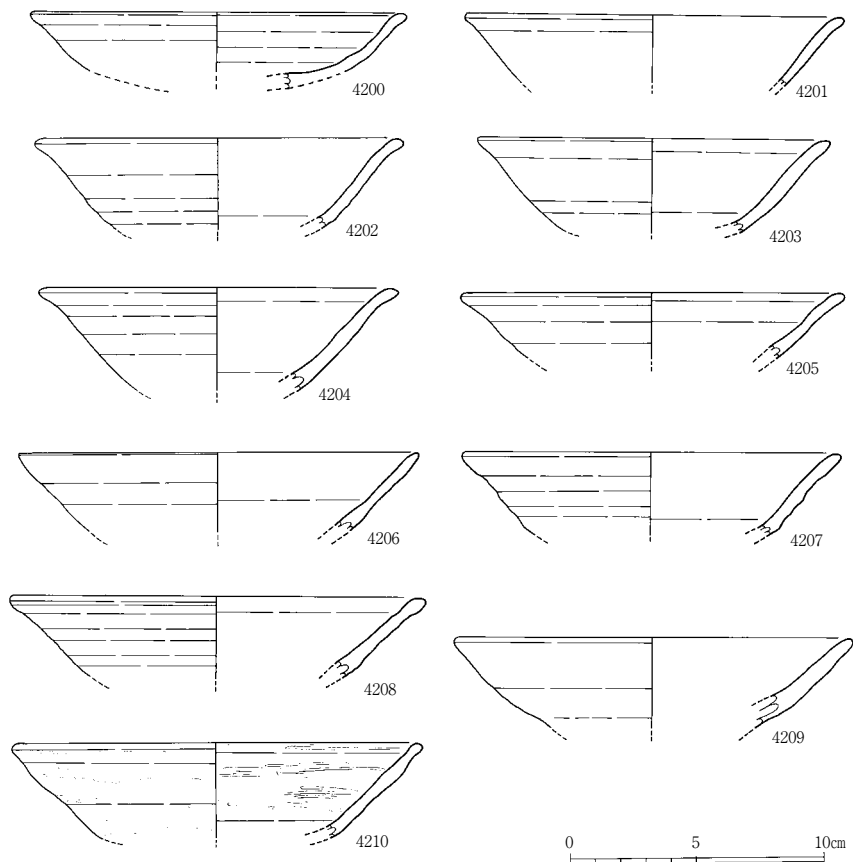


Fig.114 D区第Ⅱ層出土遺物実測図(土師器土器1)

2. 調査区の概要 (4)D区

は体部が内湾するものである。4215は底径5.8cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。胎土には細砂を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4216は底径6.0cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は回転ナデ調整である。色調は内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色ないし灰色を呈する。4217は底径6.5cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、内底面にロクロ目が顕著に残る。器面は回転ナデ調整である。色調は内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色ないし褐灰色を呈する。4218は底径7.0cmを測る。成形はロクロ水挽成形である。器面は回転ナデ調整で内底面にはナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4219は底径6.6cmを測る。やや器壁が厚い。成形はロクロ水挽成形で、調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4220は底径7.6cmを測る。底部は丸味がある。成形はロクロ水挽成形で、調整は回転ナデ調整である。色調は内面は黄灰色ないし灰黄色、外面はにぶい橙色を呈する。4221は底径9.0cmを測る。底部は丸味がある。器面は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4222～4234は体部がほぼ真直ぐのびるものである。4222は底径6.6cmを測る。器面は回転ナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4223は底径6.8cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器壁は薄い。著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。4224は底径6.1cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも浅黄橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。4225は底径7.0cmを測る。非常に器壁が薄く、体部は底部から段をもってほぼ真直ぐのびる。器面は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4226は底径6.8cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面とも黄灰色を呈する。4227は底径6.8cmを測る。体部は外上方にほぼ真直ぐ開く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4228は底径7.0cmを測る。器面は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4229は底径7.2cmを測る。外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面とも灰色ないしにぶい黄橙色を呈する。4230は底径6.8cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は回転ナデ調整である。色調は内外面とも明褐色を呈する。4231は底径8.1cmを測る。体部は底部から滑らかに立ち上がる。外底面には切り離しの際の粘土が付着する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4232は底径6.7cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、器面は回転ナデ調整である。胎土は比較的精良である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4233は底径7.2cmを測る。器壁は厚く、体部は外上方へ開く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整、その後内底面にナデ調整を加える。4234は底径8.3cmを測る大きいもので、器壁はやや薄い。成形はロクロ水挽成形で、器面は回転ナデ調整である。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。4235～4258は底部の切り離しが回転糸切りのものである。4235～4349は体部が内湾するものである。4235は底径6.0cmを測る。底径が小さく、体部は比較的上方へ立ち上がる。器面は回転ナデ調整である。色調は、内面が褐灰色、外面が灰黄褐色を呈する。4236は底径6.7cmを測る。底部は円盤状高台

風となる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4237は底径6.4cmを測る。器面は摩耗するが、底部の切り離しは回転糸切りとみられる。4238は底径6.7cmを測る。底部は円盤状高台風となり、外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は、内面が灰黄色、外面が灰黄褐色を呈する。4239は底径6.5cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は回転ナデ調整で、体部外面の一部にナデ調整を加える。色調は、内面が黄灰色、外面が灰黄褐色を呈する。4240は底部が完存するもので、底径6.4cmを測る。底部が厚く、体部は大きく内湾する。外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は、内面がにぶい橙色な

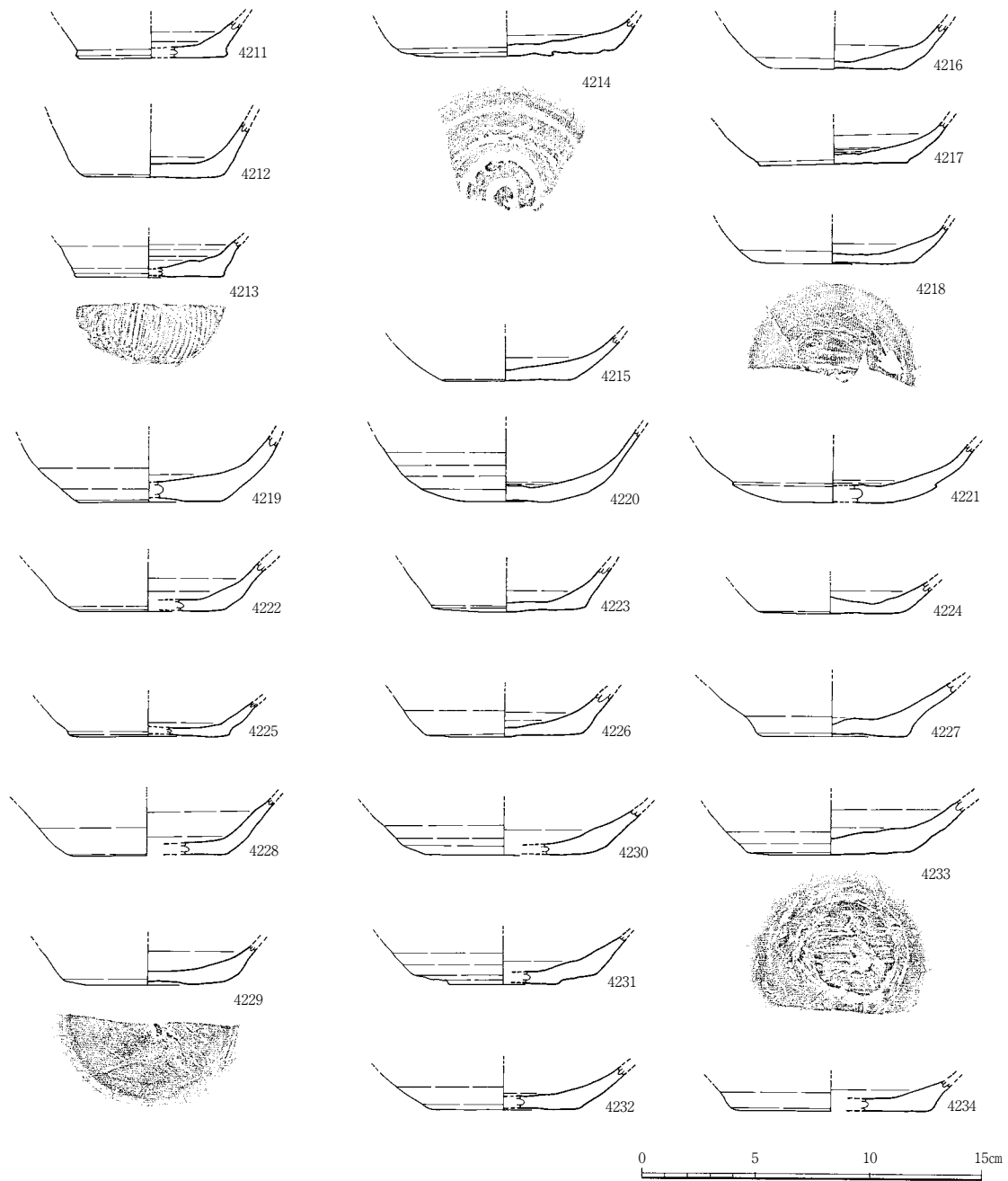


Fig.115 D区第XII層出土遺物実測図(土師質土器2)

2. 調査区の概要 (4)D区

いし褐灰色，外面が灰黄褐色ないし褐灰色を呈する。4241は底径6.8cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で，底部と体部の境には接合痕がみられる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。4242は底径7.2cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で，器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は，内面が黒褐色，外面が黒褐色ないし浅黄色を呈する。4243は底径7.1cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で，体部は回転ナデ調整である。内底面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともいぶい黄橙色を呈する。4244は底径7.4cmを測る。成形はロクロ水挽成形で，器面は回転ナデ調整である。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面とも浅黄色ないしにいぶい橙色を呈する。4245は底径7.4cmを測る。作りが粗雑で，一部剥離する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で，器面は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰白色を呈する。4246は底径7.1cmを測る。体部は底部から大きく内湾する。焼成は良好で，内外面ともいぶい黄橙色を呈する。4247は底径6.8cmを測る。器面は回転ナデ調整で内底面に丁寧なナデ調整を加える。胎土には細砂を多く含む。色調は内外面ともいぶい黄橙色を呈する。4248は底径6.0cmを測る。体部は底部から内湾して立ち上がり，ほぼ真直ぐのびる。成

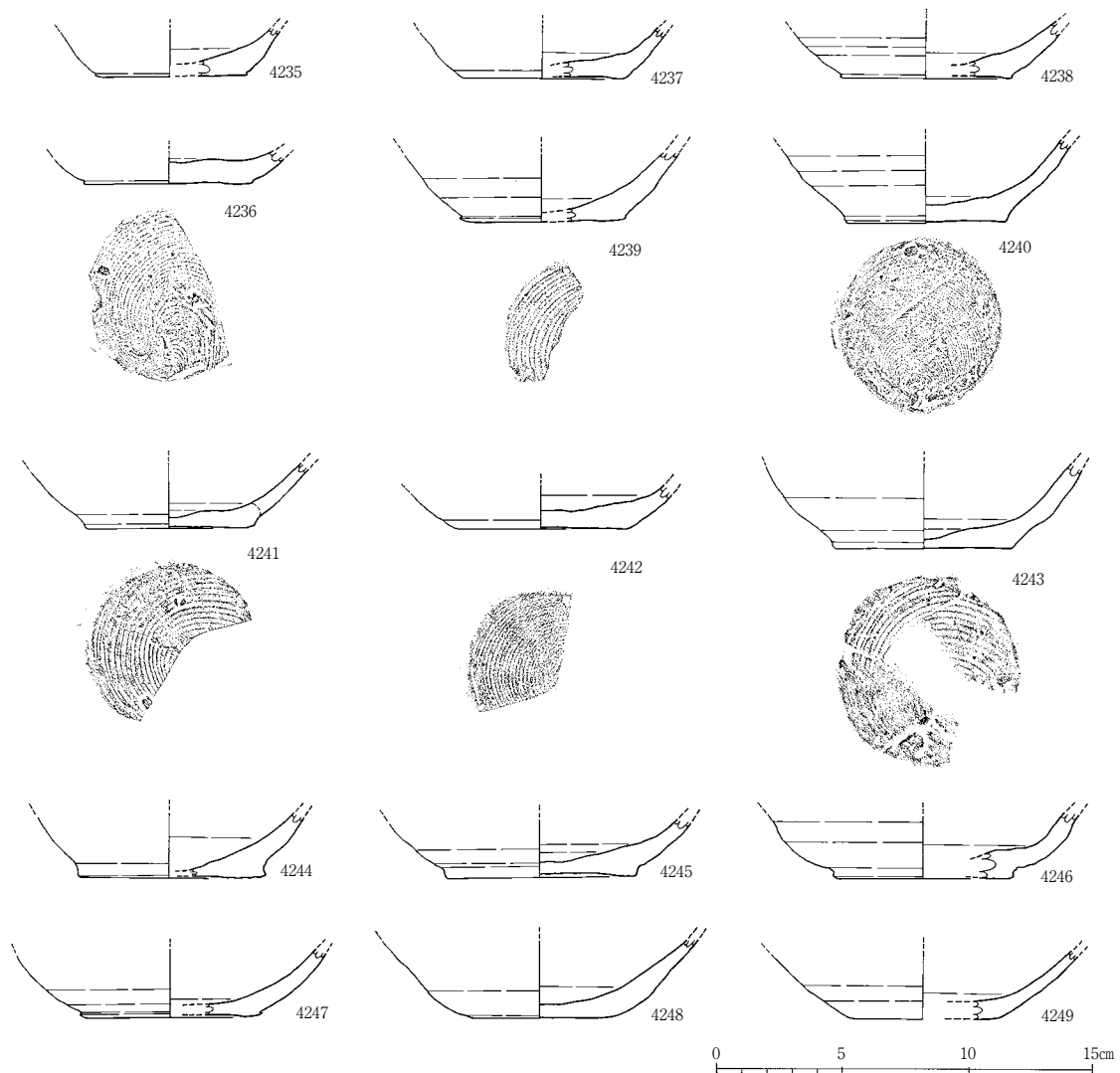


Fig.116 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器3)

形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は、内面がにぶい黄橙色ないしにぶい黄褐色、外面がにぶい黄橙色を呈する。4249は底径6.0cmを測る。体部の器壁は薄く、外上方にやや開く。成形はロクロ水挽成形で、器面は回転ナデ調整である。外底面には板状圧痕が残る。胎土は比較的精良である。色調は、内面が暗灰色、外面がにぶい黄橙色を呈する。4250～4253は体部がほぼ真直ぐのびる。4250は底部が完存するもので、底径6.4cmを測る。体部は底部から外上方へほぼ真直ぐのびる。成形はロクロ水挽成形で、器面は回転ナデ調整を施し、内底面に丁寧なナデ調整を加える。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色ないし褐灰色を呈する。4251は底径6.8cmを測る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は、内面が灰色、外面がにぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈する。4252は底径6.8cmを測る。器壁が厚いものである。外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面とも灰黄色を呈する。4253は底径8.0cmを測る。体部は底部からほぼ真直ぐのびる。成形はロクロ水挽成形で、器面は回転ナデ調整を行う。色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。4254は底径6.0cmを測り、底部には直立する高い高台が付く。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも灰赤色を呈する。4255・4256は柱状高台を有する。4255は底部が完存するもので、底径6.5cmを測る。高台は高さ1.5cmを測り、体部は屈曲して外上方にほぼ真直ぐのびる。内底面は高台内に落ち込む。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。4256は底部が完存するもので、底径6.9cmを測る。高台の高さは1.5cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施す。胎土には細砂を多く含む。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈する。4257・4258は中実の高台

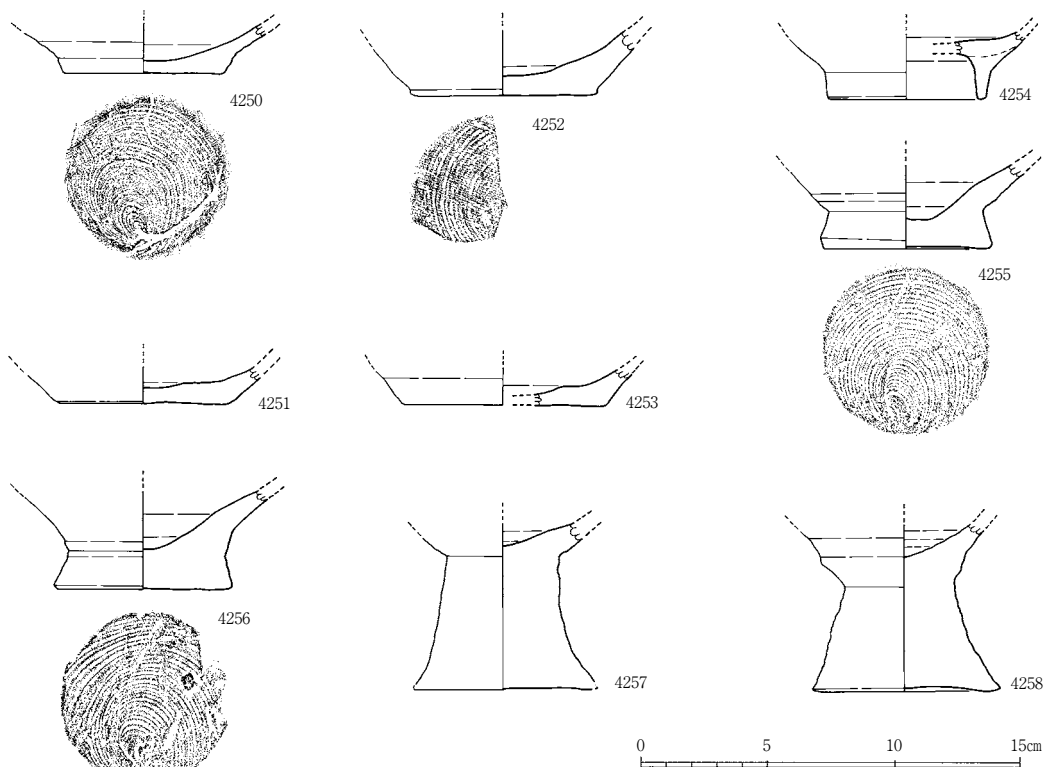


Fig.117 D区第Ⅳ層出土遺物実測図(土師質土器4)

2. 調査区の概要 (4)D区

を有するものである。4257は底径7.2cm, 高台高5.3cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、粗雑なつくりである。器面は回転ナデ調整である。色調は、内面が灰白色, 外面が黄灰色を呈する。4258は底径7.4cm, 高台高3.1cmを測る。体部は外上方にほぼ真直ぐのびる。成形はロクロ水挽成形で、高台外面はロクロ目が顕著に残る。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰白色を呈する。

4259～4287はほぼ全体の形状が復元できるものである。4259は底径10.8cm, 底径7.3cm, 器高2.7cmを測る小型のものである。器高が低く、体部はほぼ真直ぐのび、口縁を細く仕上げる。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は、内面がにぶい黄橙色, 外面が黄灰色を呈する。4260・4261は器高が低く、体部は底部から綾をもたず滑らかに内湾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。4260は口径14.8cm, 底径7.5cm, 器高3.4cmを測る。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。成形はロクロ水挽成形で、器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4261は口径15.6cm, 底径7.8cm, 器高4.3cmを測る。口縁部は肥厚する。成形はロクロ水挽成形で、底部の切り離しは静止ヘラ切りで、器面は回転ナデ調整である。色調は内外面ともににぶい黄橙色ないし灰色を呈する。4262～4268は器高が高く、体部がやや内湾して立ち上がり、口縁部が外反するものである。4262は底部が完存するもので、底径6.4cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、器面は回転ナデ調整である。胎土は細砂を比較的多く含む。焼成は良好で、内面が灰褐色, 外面が灰黄褐色を呈する。4263は焼成時の歪みが残るもので、口径13.4cm, 底径6.2cm, 器高4.7cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4264は口径15.2cm, 底径7.0cm, 器高5.3cmを測る。成形はロクロ水挽成形である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。胎土には細砂を多く含む。色調は内外面とも灰黄色を呈する。4265はほぼ完形のもので、口径15.0cm, 底径7.0cm, 器高4.6cmを測る。成形はロクロ水挽成形である。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4266は口径13.5cm, 底径6.0cm, 器高4.8cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。器面は回転ナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4267は口径15.0cm, 底径5.4cm, 器高5.0cmを測る。口縁端部は丸く仕上げる。器面は回転ナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。胎土は比較的精良で、色調は、内面が灰白色ないしにぶい黄橙色, 外面はにぶい黄橙色を呈する。4268は口径14.5cm, 底径7.1cm, 器高5.0cmを測る。底部は円盤状高台風となる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4269・4270は底部の器壁が厚く、体部は大きく内湾して滑らかに立ち上り、口縁部は器壁が薄くなる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。4269は底径7.0cmを測る。外底面には板状圧痕が残る。器面は回転ナデ調整で内底面にはナデ調整を加える。色調は、内面が黄灰色, 外面が灰黄色を呈する。4270は底径6.4cmを測る。器面は回転ナデ調整で内底面にはナデ調整を加える。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4271は口径15.2cm, 底径7.7cm, 器高4.7cmを測る。底部の器壁が厚く、口縁部は比較的ほぼ真直ぐのびる。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は、内面がにぶい橙色,

外面がにぶい黄橙色を呈する。4272～4281は体部がほぼ真直ぐのびるものである。4272は口径15.1cmを測る。体部の器壁は薄い。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部と体部の接合部で剥離する。器面は回転ナデ調整である。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4273は口径15.8cm、底径7.0cm、器高4.2cmを測る。器壁は薄い。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整である。胎土は比較的精良である。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が黄灰色を呈する。4274は口径14.3cm、底径7.5cm、器高4.0cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、体部の器壁は薄く、厚さはほぼ一定で、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。4275は口径

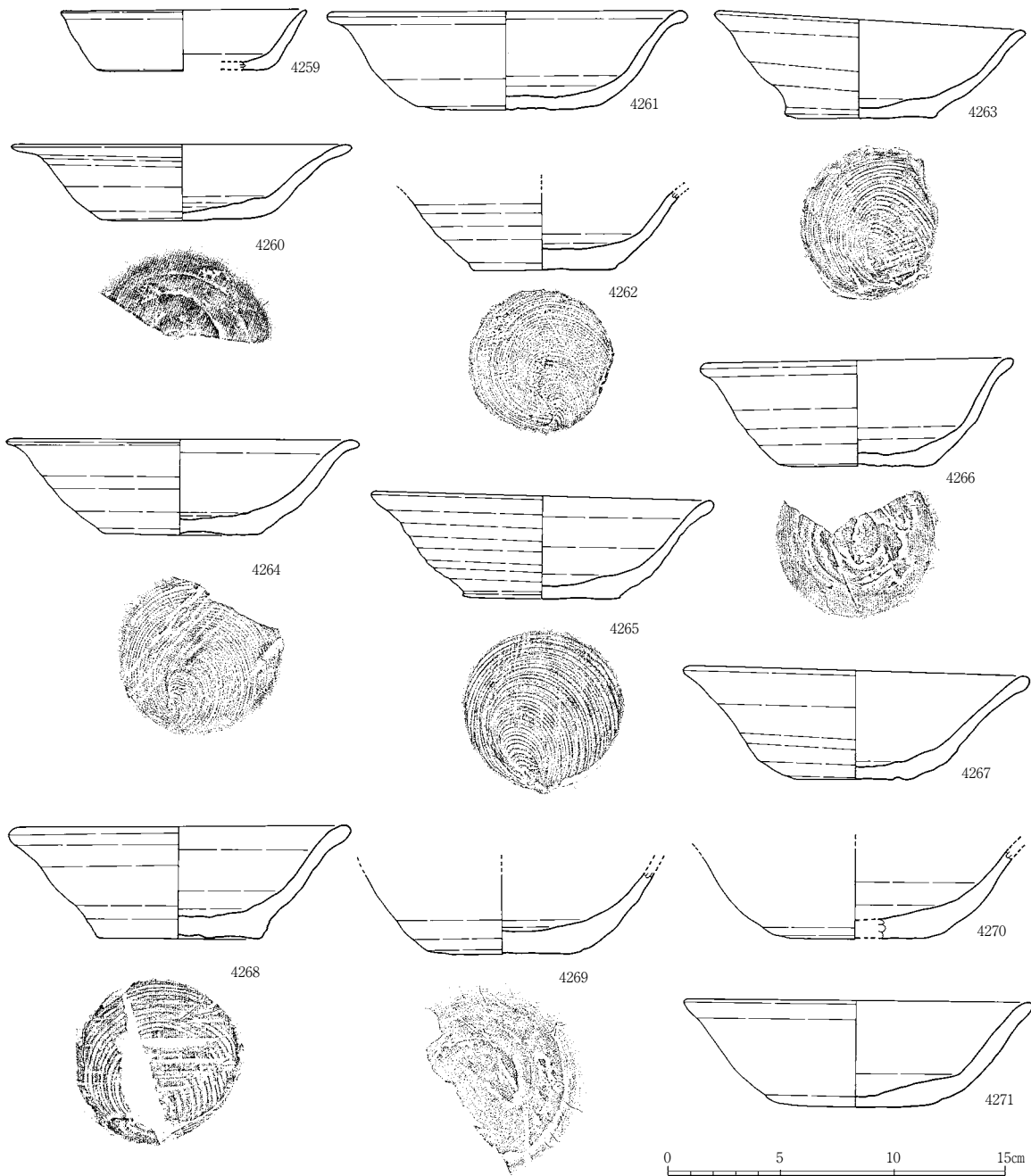


Fig.118 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器5)

2. 調査区の概要 (4) D区

15.6cm, 底径6.5cm, 器高4.3cmを測る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は比較的精良で, 色調は, 内面が浅黄橙色ないし黄橙色, 外面がにぶい橙色を呈する。4276は底部がほぼ完存するもので, 底径7.8cmを測る。器面は回転ナデ調整で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は内外面とも黄灰色を呈する。4277は口径14.7cm, 底径7.2cm, 器高5.0cmを測る。成形はロクロ水挽成形で, 器面には回転ナデ調整を施し, 内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内面には炭素の吸着した部分がみられる。色調は, 内面が灰白色, 外面がにぶい橙色を呈する。4278は口径15.4cm, 底径6.9cm, 器高4.4cmを測る。体部は外上方に大きく開く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 器面は回転ナデ調整である。色調は, 内面が黒褐色ないし灰白色, 外面が黒褐色ないし灰黄色を呈する。4279は底部がほぼ完存するもので, 口径15.4cm, 底径6.4cm, 器高4.7cmを測る。体部は外上方に開き, 口縁短部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 器面は回転ナデ調整

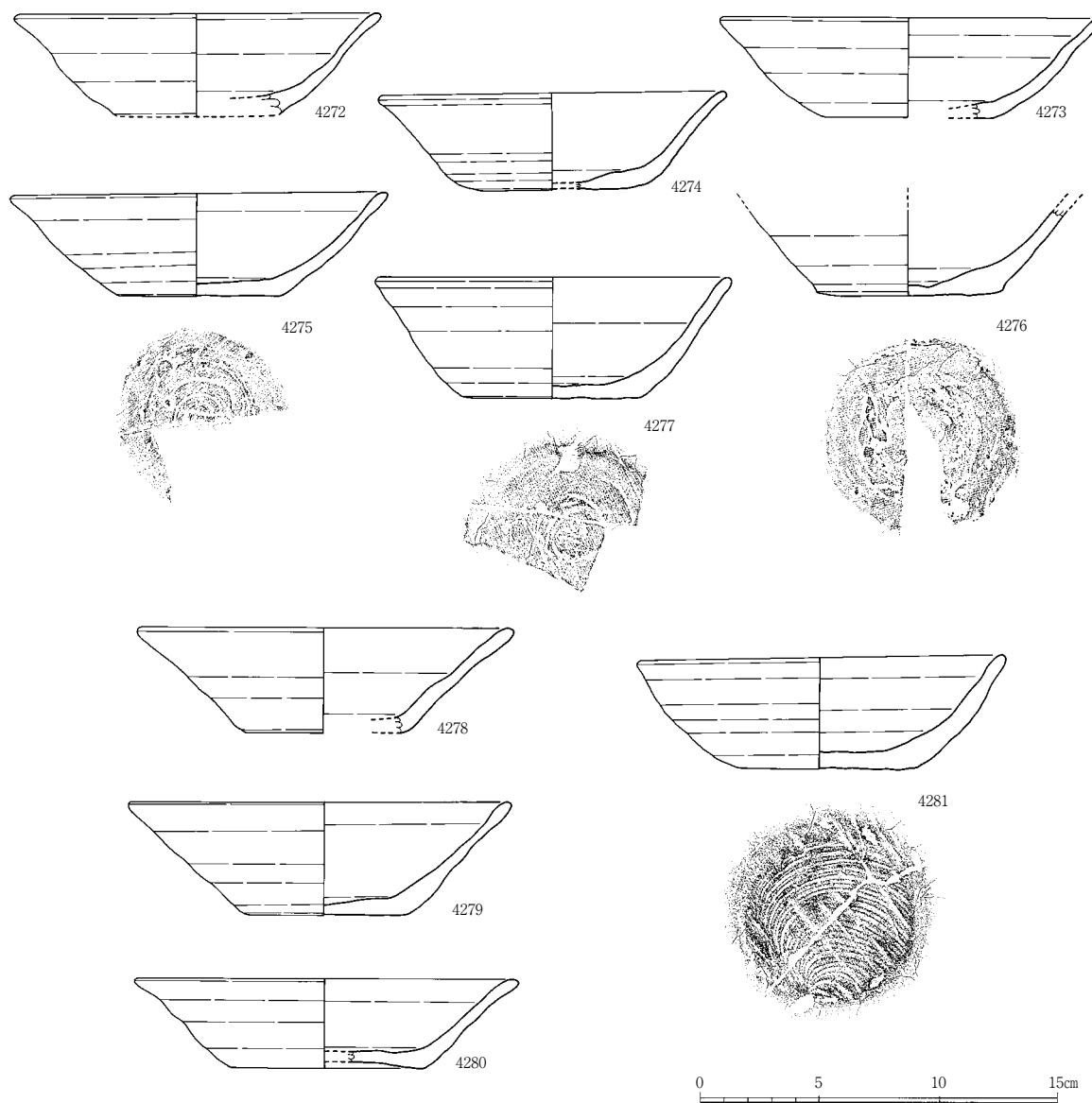


Fig.119 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器6)

である。胎土は比較的精良で、色調は、内面が灰黄褐色ないし黒色、外面が黒褐色を呈する。4280は口径15.8cm、底径8.0cm、器高3.7cmを測り、やや器高が低いものである。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4281はほぼ完形のもので、口径15.3cm、底径6.8cm、器高4.8cmを測る。器壁が他に比べてやや厚い。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には若干砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4282～4284は底部が円盤状高台で、口縁部が外上方にほぼ真直ぐのびるものである。4282は口径15.0cm、底径6.1cm、器高4.3cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4283は完形で、口径15.5cm、底径7.4cm、器高4.2cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は内外面とも浅黄色を呈する。4284はほぼ完形で、口径15.1cm、底径7.3cm、器高4.7cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、ロクロ目が顕著に残る。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4285は口径14.8cm、底径7.1cm、器高4.2cmを測る。体部は底部から内湾気味に上がり、口縁部に至る。成形はロクロ水挽成形で、ロクロ目が顕著に残る。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。外底面には墨書がみられ、「次」ではないかとみられる。色調は内外面とも灰黄色を呈する。4286は口径13.3cm、底径7.0cm、器高4.5cmを測る。体部は内湾気味に上がり、口縁部は外傾し、端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形でロクロ目が顕著に残る。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には細砂を

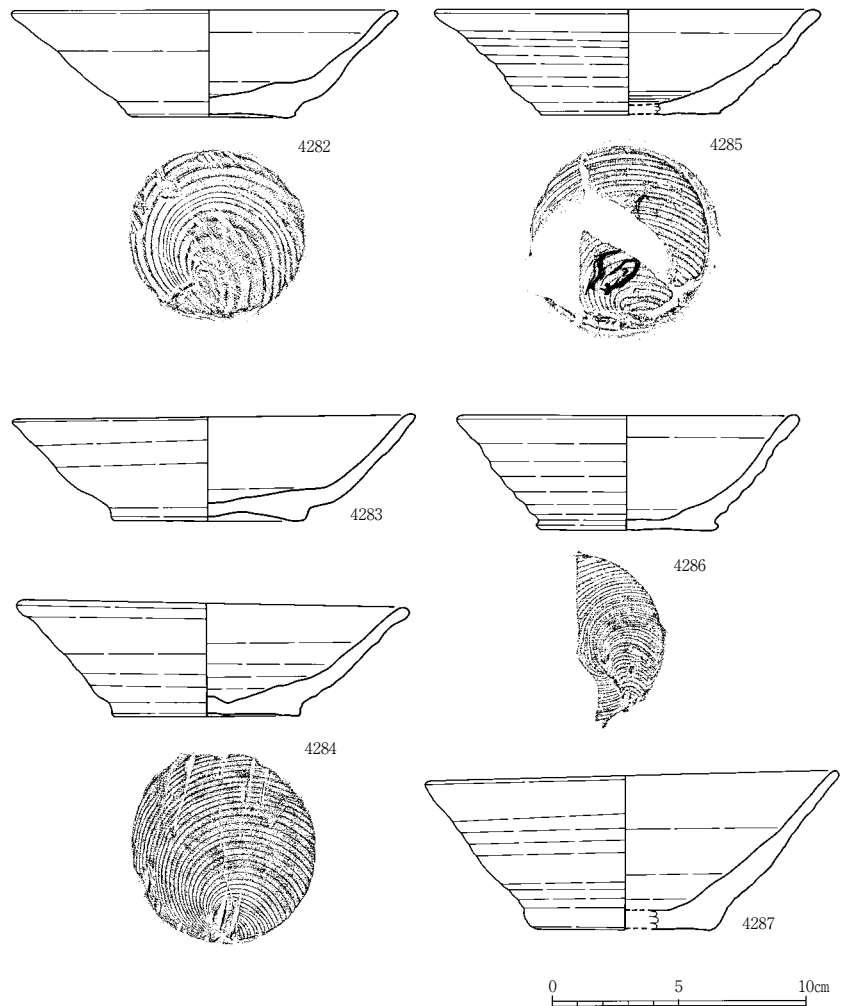


Fig.120 D区第Ⅶ層出土遺物実測図(土師質土器7)

2. 調査区の概要 (4)D区

多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4287は口径16.2cm、底径6.9cm、器高6.3cmを測る底部が深いもので、器面は外上方にほぼ真直ぐ上がる。成形はロクロ水挽成形で、器面は回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

4288～4356は小皿である。4288～4315は底部の切り離しが回転ヘラ切りとなっているものである。4288は器壁が薄いもので、底径4.8cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色ないし黄灰色を呈し、焼成は良好である。4289は底部が円盤状高台となるもので、底径5.1cmを測り、器面には回転ナデ調整を施す。胎土は比較的精良で、色調は、内面が黄灰色、外面がぶい黄橙色を呈する。4290は口径6.6cm、底径4.4cm、器高1.5cmを測る。口縁部は真直ぐのび、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4291は器壁が比較的厚く、底部が深いもので、口径7.6cm、底径4.4cm、器高1.8cmを測る。口縁部は斜め上方に上がり、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4292は口径7.7cm、底径4.6cm、器高1.6cmを測り、口縁部は斜め上方に外湾気味に上がる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし黄灰色を呈する。4293は口径7.8cm、底径4.8cm、器高1.3cmを測り、口縁部は斜め上方に真直ぐ上がる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。胎土は比較的精良で、色調は、内面がぶい黄橙色、外面がぶい黄橙色ないしぶい橙色を呈する。4294は口径7.8cm、底径4.8cm、器高1.2cmを測り、口縁部は斜め上方に真直ぐ上がる。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は比較的精良である。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし淡赤橙色を呈する。4295は底部が丸味のあるもので、口径7.9cm、底径4.8cm、器高1.8cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し、外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4296は口径7.9cm、底径4.9cm、器高1.6cmを測り、口縁部は若干外反する。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加え、外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4297は口径8.0cm、底径4.8cm、器高1.5cmを測り、口縁部は斜め上方に真直ぐ上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4298は底部が完存するもので、口径8.0cm、底径4.6cm、器高1.6cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し、外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4299は口径8.2cm、底径4.2cm、器高1.7cmを測り、底部の器壁が厚く、口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面には回転ナデ調整を施し、外底面には板状圧痕が残る。色調は内面はぶい橙色、外面はぶい黄橙色を呈する。4300は底部がほぼ完存するもので、口径8.3cm、底径5.4cm、器高1.2cmを測る。器高が低く、口縁部は短い。器面には回転ナデ調整を施し、外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4301は器壁が薄く、器高が比較的高いもので口径8.4cm、底径5.5cm、器高1.7cmを測る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし灰黄褐色を呈する。4302は口径8.4cm、底径4.8cm、器高1.9cmを測り、底部の器壁は厚く、器高が比較的高い。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色ないしぶい赤橙色を呈する。4303は底部の器壁が厚く、口縁部は薄く短いもので

口径8.4cm, 底径6.9cm, 器高2.0cmを測る。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。胎土は比較的精良で, 色調は内面はにぶい黄橙色ないし黒褐色, 外面は黒褐色を呈する。4304は器壁が薄く, 器高が低いもので口径8.6cm, 底径5.5cm, 器高1.1cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともいぶい黄橙色を呈する。4305は口径8.6cm, 底径6.5cm, 器高1.5cmを測り, 底部の器壁が厚く, 口縁部は短い。器面には回転ナデ調整を施し, 外底面には板状圧痕が残る。胎土は比較的精良で, 色調は内外面ともいぶい黄橙色を呈する。4306は底部が

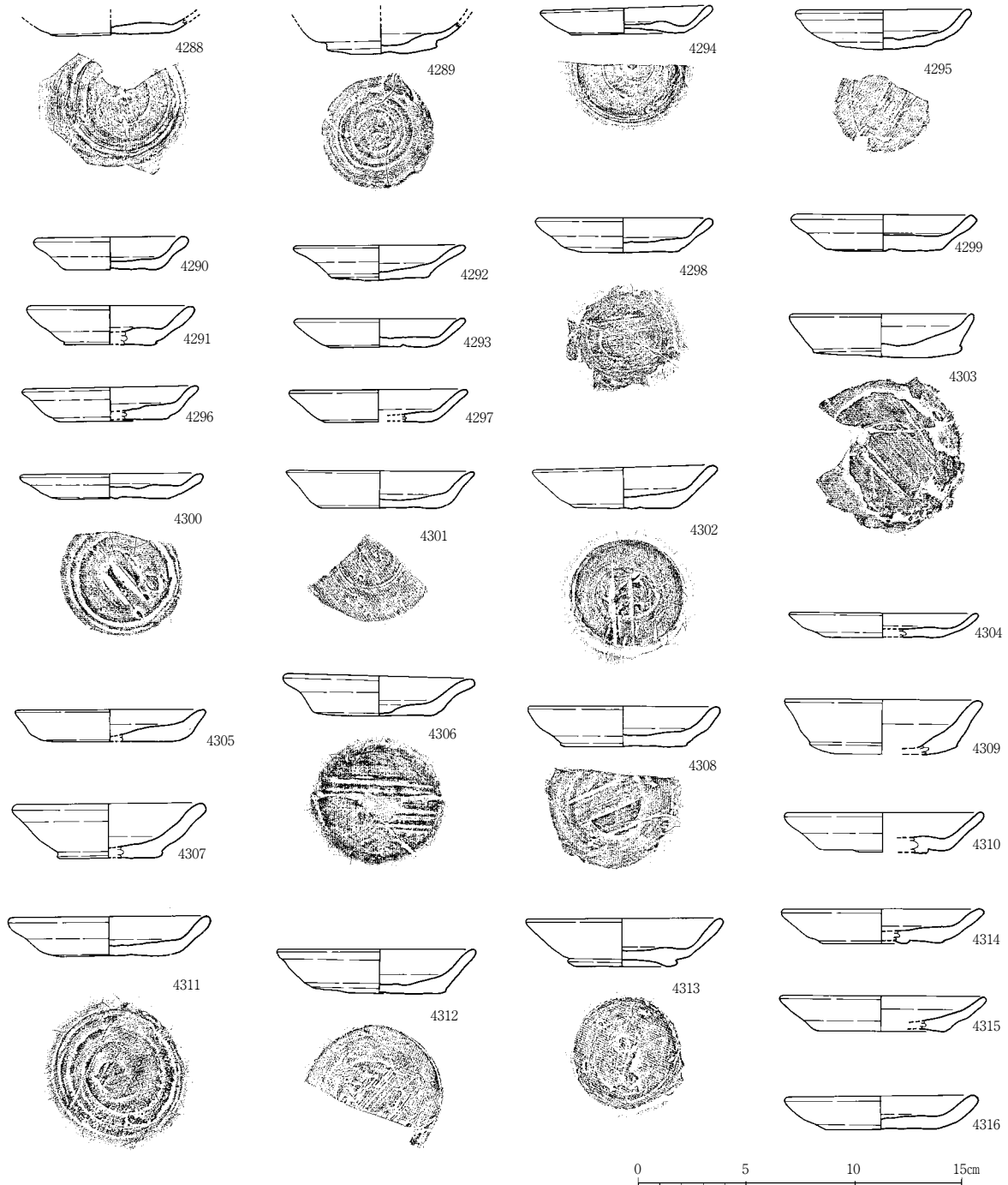


Fig.121 D区第XII層出土遺物実測図(土師質土器8)

2. 調査区の概要 (4) D区

完存するもので、口径8.6cm、底径5.3cm、器高2.0cmを測る。器高が高く、口縁端部を丸く仕上げる。器面は著しく磨滅し、底部の切り離しは不明瞭で、板状圧痕のみが残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4307は底部が深いもので、口径8.6cm、底径4.9cm、器高2.5cmを測る。口縁部は斜め上方に内湾気味に上がる。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は細砂を多く含む。色調は内外面とも黄灰色を呈する。4308は口径8.7cm、底径5.9cm、器高1.9cmを測り、口縁部は内湾して上がる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし灰色を呈する。4309は底部が深いもので、口径8.8cm、底径7.0cm、器高2.5cmを測る。口縁部は斜め上方に上がり、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4310は口径9.0cm、底径6.0cm、器高1.8cmを測り、口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないしにぶい赤褐色を呈する。4311は口径9.0cm、底径6.7cm、器高1.8cmを測り、口縁部はほぼ真直ぐ上がり、端部を丸く仕上げる。器面は回転ナデ調整で内底面にはナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4312は口径9.0cm、底径3.4cm、器高2.1cmを測り、口縁部はほぼ真直ぐ上がる。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4313は底部が完存するもので、口径9.0cm、底径5.0cm、器高2.2cmを測る。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし褐灰色、外面がにぶい黄橙色ないし灰赤色を呈する。4314は口径9.1cm、底径5.6cm、器高1.6cmを測り、口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4315は口径9.4cm、底径6.0cm、器高1.6cmを測り、口縁部はやや内湾する。器面は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし灰黄褐色を呈する。4316は器壁が比較的厚いもので、口径8.6cm、底径5.4cm、器高1.5cmを測り、口縁部は内湾する。器面には回転ナデ調整を施し、外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4317～4349は底部の切り離しが回転糸切りとなっているものである。4317は口径7.0cm、底径4.9cm、器高1.5cmを測り、口縁部は外上方に短く上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

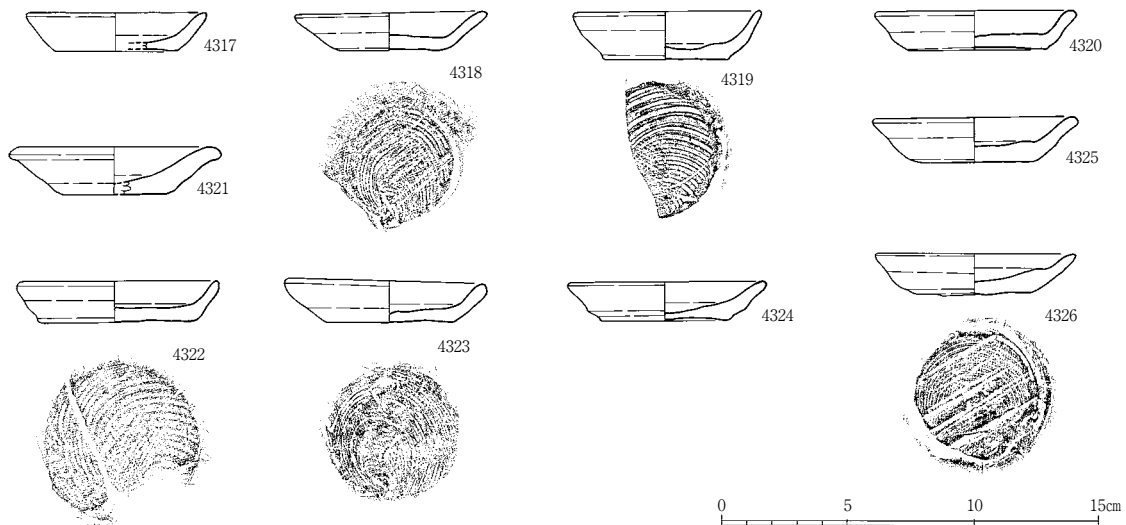


Fig.122 D区第Ⅱ層出土遺物実測図(土師質土器9)

4318は口径7.4cm, 底径4.4cm, 器高1.5cmを測り, 口縁部は外上方に短く上がる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。胎土には細砂を多く含み, 色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし灰赤色を呈する。4319は底部が比較的深いもので, 口径7.4cm, 底径5.0cm, 器高1.9cmを測り, 口縁部は内湾気味に上がる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。胎土は比較的精良で, 色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4320は口径7.6cm, 底径5.4cm, 器高1.5cmを測り, 口縁部は外上方に短く上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないしにぶい褐色を呈する。4321は器壁が厚いもので, 口径7.6cm, 底径4.2cm, 器高1.9cmを測り, 口縁部は斜め上方に上がり, 端部を横に摘む。器面は回転ナデ調整である。内面には煤が付着する。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4322は口径7.7cm, 底径5.9cm, 器高1.7cmを測り, 口縁部が外上方に上がる。器面には回転ナデ調整を施す。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4323は底部が完存するもので, 口径7.7cm, 底径5.1cm, 器高1.8cmを測り, 口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4324は完形で, 口径7.8cm, 底径5.1cm, 器高1.5cmを測り, 口縁部は斜め上方に短く上がり, 端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰黄色を呈する。4325は底部の器壁が比較的厚いもので, 口径7.8cm, 底径5.0cm, 器高1.7cmを測り, 口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい黄橙色ないし灰黄褐色を呈する。4326は完形で焼成時の歪みが残りに, 口径7.9cm, 底径4.1cm, 器高1.7cmを測る。口縁部は斜め上方に上がり, 端部を細く仕上げる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4327は底部が比較的深く完存するもので, 口径7.9cm, 底径5.0cm, 器高1.8cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4328は完形で, 口径7.9cm, 底径4.5cm, 器高1.8cmを測り, 口縁部は外反する。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4329は底部が浅く, 口径8.0cm, 底径5.8cm, 器高1.6cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4330は口径8.0cm, 底径5.0cm, 器高1.7cmを測る。口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ上がり, 端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は, 内面が浅黄橙色, 外面が浅黄橙色ないしにぶい橙色を呈する。4331は完形で, 口径8.0cm, 底径6.6cm, 器高1.8cmを測り, 口縁部は外上方に内湾して短く上がる。器面は摩耗するが, 外底面には板状圧痕が残る。内外面一部に煤が付着する。胎土は細砂を多く含み, 色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし褐灰色を呈する。4332は口径8.0cm, 底径6.5cm, 器高1.9cmを測り, 口縁部は短く斜め上方を向く。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4333は器壁が薄いもので, 口径8.1cm, 底径6.2cm, 器高1.2cmを測る。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4334は口径8.2cm, 底径4.8cm, 器高1.5cmを測り, 口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面が灰色を呈する。4335は

2. 調査区の概要 (4)D区

口径8.2cm, 底径4.4cm, 器高1.7cmを測り, 口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ上がり, 端部を丸く仕上げる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。内面には重ね焼の痕跡が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし灰黄褐色を呈する。4336は口径8.3cm, 底径5.5cm, 器高1.5cmを測り, 口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面とも灰黄色を呈する。4337は口径8.3cm, 底径6.2cm, 器高1.5cmを測り, 口縁部は短く, 端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4338は口径8.3cm, 底径5.6cm, 器高1.6cmを測り, 口縁部は外反し, 端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4339は口径8.3cm, 底径6.3cm, 器高1.8cmを測り, 口縁部は短く内湾して上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4340は口径8.5cm, 底径6.6cm, 器高1.5cmを測り, 口縁部は短く斜め上方に上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰黄色を呈する。4341は底部が浅いもので, 口径8.8cm, 底径6.5cm, 器高1.3cmを測り, 口縁部は斜め上方を向く。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4342は口径8.8cm, 底径5.3cm, 器高1.6cmを測り, 口縁部はやや外反する。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4343は口径8.8cm, 底径5.8cm, 器高1.9cmを測り, 口縁部はやや内湾して上がる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。色調は, 内面がにぶい黄橙色ないし褐灰色, 外面がにぶい黄橙色ないし黒褐色を呈する。4344は口径8.9cm, 底径5.0cm, 器高2.2cmを測り, 口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ上がる。器面は回転ナデ調整で内底面はナデ調整を加える。色調は, 内面がにぶい黄橙色ないし褐灰色, 外面がにぶい橙色ないし黒褐色を呈する。4345はほぼ完形で, 口径9.0cm, 底径6.6cm, 器高1.6cmを測り, 口縁部は短く斜め上方を向く。胎土には細砂を多く含み, 色調は, 内面が灰黄色, 外

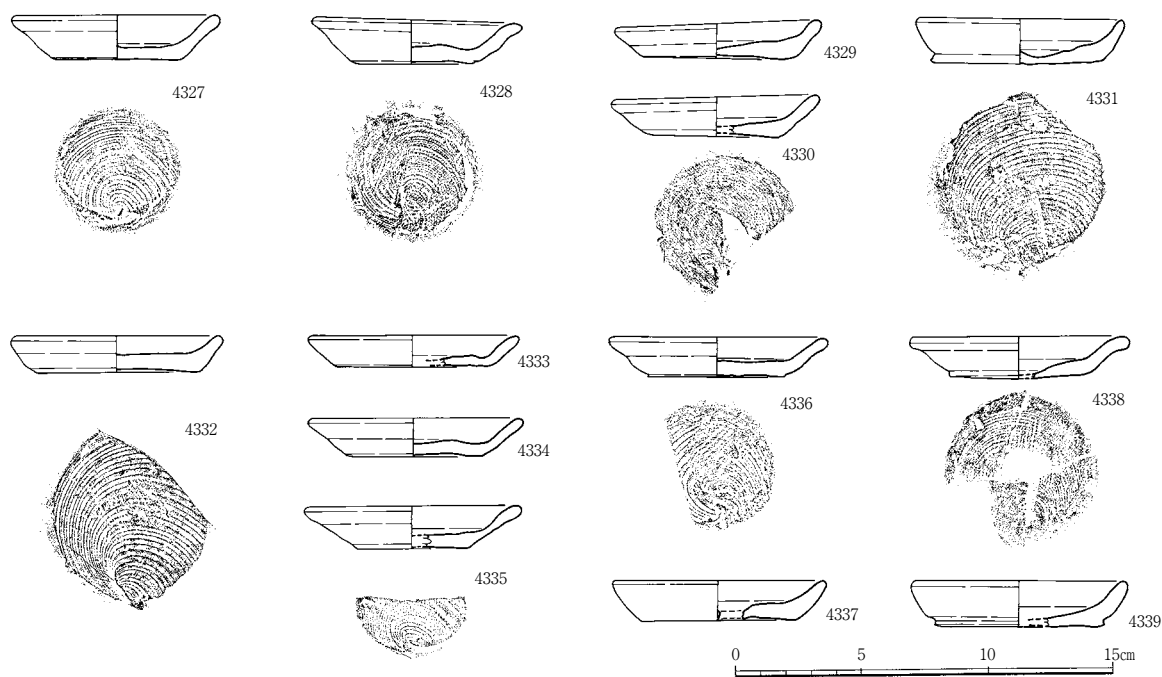


Fig.123 D区第Ⅱ層出土遺物実測図(土師質土器10)

面がにぶい橙色ないし黄灰色を呈する。4346は口径9.0cm, 底径6.9cm, 器高1.7cmを測り, 口縁部は外上方に短く上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4347は器壁が薄いもので, 口径9.0cm, 底径5.7cm, 器高1.7cmを測り, 口縁部が斜め上方にほぼ真直ぐ上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈する。4348は口径9.1cm, 底径6.0cm, 器高1.8cmを測り, 口縁部は外上方にほぼ真直ぐのびる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰黄色を呈する。4349は口径10.7cm, 底径8.5cm, 器高1.4cmを測り, 口縁部は斜め上方を向く。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4350は底部が比較的深いもので, 口径7.6cm, 底径4.6cm, 器高1.7cmを測り, 口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は著しく磨滅するため, 底部の切り離しと調整は不明である。胎土は精良で, 色調は内外面ともにぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈する。4351は口径8.3cm, 底径6.0cm, 器高1.7cmを測り, 口縁部は外上方へ上がる。口縁部には重ね焼の痕跡が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。4352は口径8.5cm, 底径6.9cm, 器高1.2cmを測り, 口縁部は斜め上方を向く。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4353は口径8.6cm, 底径5.8cm, 器高1.4cmを測り, 口縁部は斜め上方にのびる。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは器面が著しく磨滅するため不明である。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい黄橙色ないし淡赤褐色を呈する。4354は器壁の薄いもので, 口径8.7cm, 底径5.9cm, 器高1.7cmを測り, 口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4355は底部が比較的深いもので, 口径9.0cm, 底径5.0cm, 器高1.7cmを測り, 口縁部は内湾して上がる。器面には回転ナデ調整を施すが, 外底面は著しく磨滅しており, 底部の切り離し方法は不明である。色調は, 内面がにぶい黄橙色ないし灰黄褐色, 外面が灰黄褐色を呈する。4356

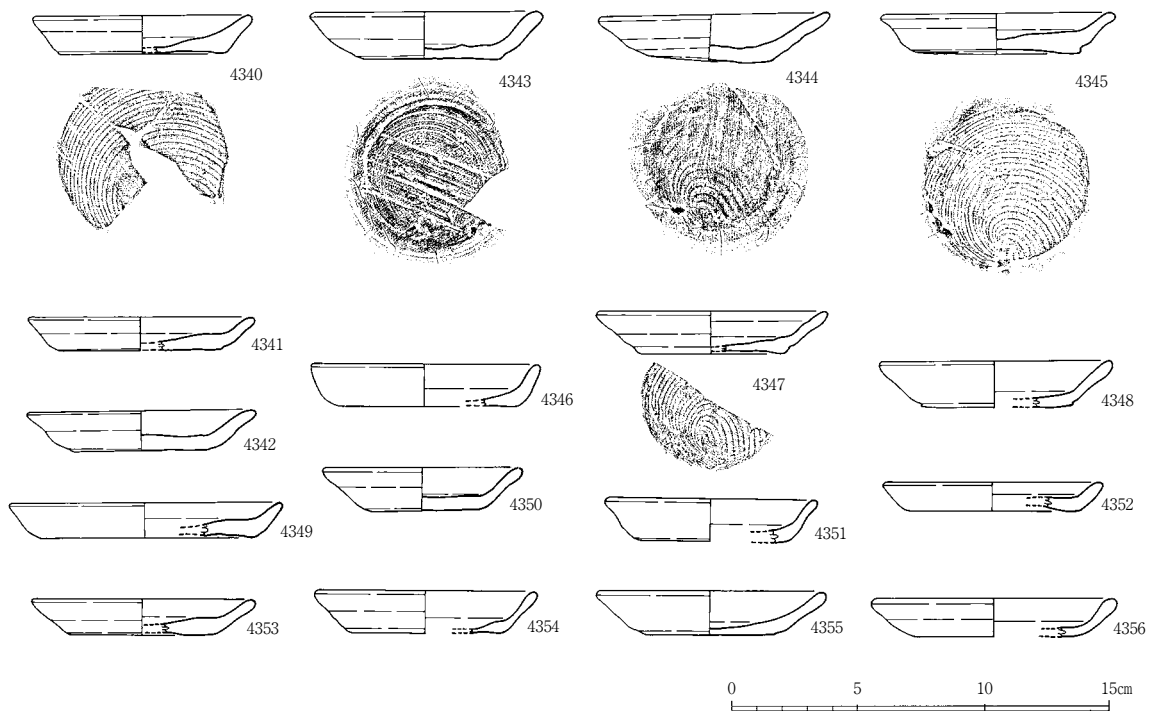


Fig.124 D区第XII層出土遺物実測図(土師質土器11)

2. 調査区の概要 (4)D区

は口径9.4cm, 底径6.4cm, 器高1.5cmを測り, 口縁部は斜め上方に短く上がる。器面には回転ナデ調整を施すが, 外底面は著しく磨滅しており, 底部の切り離し方法は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

4357~4377は椀である。4357~4359は体部が内湾して立ち上がり, 口縁部がほぼ真直ぐのびるものである。4357は口径15.2cmを測り, 器面は回転ナデ調整である。焼成は瓦器に近く, 炭素が吸着する。色調は内外面とも灰色ないし灰黄色を呈する。4358は口径16.1cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 器面は回転ナデ調整である。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面が黒褐色を呈する。4359は口径16.1cmを測る。調整は回転ナデ調整で内面と体部外面下半にナデ調整を加え, 体部外面下半には指頭圧痕が残る。焼成は良好で, 内面が灰黄褐色ないし暗灰色, 外面が褐灰色ないし暗灰色を呈する。4360~4362は体部が内湾して立ち上がり, 口縁部は外反し, 端部を肥厚するものである。4360は口径16.0cmを測り, 口縁端部を大きく肥厚する。調整は回転ナデ調整で内面に丁寧なナデ調整を加える。胎土には細砂を多く含む。色調は内外面ともにぶい黄橙色, 口縁部は赤褐色を呈する。4361は口径14.4cmを測り, 調整は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし灰色を呈する。4362は口径15.4cmを測り, 体部外面にはロクロ目が顕著に残る。色調は, 内面が灰黄褐色, 外面が灰黄褐色ないしにぶい橙色を呈する。4363~4367は底部が円盤状高台となるものである。4363は底径7.3cmを測る。内底面は若干落ち込む。調整は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は, 内面が橙色, 外面がにぶい橙色を呈する。4364は底径6.1cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。調整は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転糸切りによる。焼成は良好で, 須恵質に近い。胎土は細砂を多く含み, 色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4365~4367は内面にハケ目が残るものである。4365は底径7.0cmを測り, 体部は内湾気味に上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で, 器面には回転ナデ調整を施し, 内面にはコテ当てによるとみられるハケ目が残る。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し, 胎土は精良で, 焼成は良好である。4366は底径7.2cmを測り, 形態・成形技法・調整は4365と同じである。色調は, 内面が灰色, 外面が浅黄色ないし灰色を呈し, 胎土は精良で, 焼成は非常に良い。4367は底径6.9cmを測り, 形態・成形技法・調整は4365とほぼ同じであるが, 内面のハケ目は4365に比べ細く, 体部外面には指押えの痕が残る。色調は, 内面が黄灰色, 外面が灰色を呈し, 胎

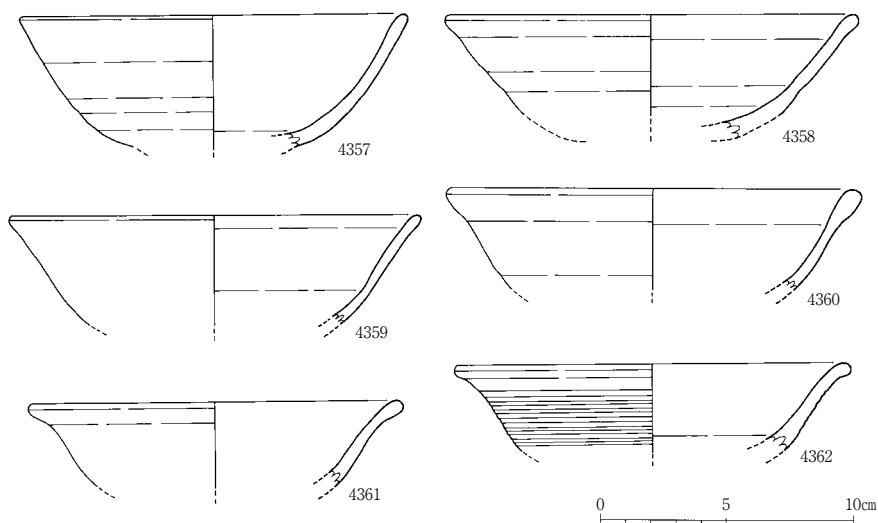


Fig.125 D区第Ⅱ層出土遺物実測図(土師質土器12)

土は精良で、焼成は良好で全面に炭素の吸着がみられる。4368～4370は輪高台を有し、底部が丸く、体部から口縁部が大きく内湾して上がるものである。4368は底径6.9cmを測り、底部には断面方形でハの字状に開く高台が付く。器面は回転ナデ調整で内面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられ、高台内はナデ調整を行う。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4369はほぼ完形で、口径14.6cm、底径7.1cm、器高5.7cmを測る。底部には断面方形でハの字状に開く低い高台が付く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。調整は回転ナデ調整で、内面はナデ調整、体部外面下半はナデ調整で、指頭圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし褐灰色を呈する。4370は底径5.6cmを測る。底部には断面逆台形で直立する低い高台が付く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。内面はナデ調整のち内底面にコテ当てによるとみられるハケ目が残る。外面は回転ナデ調整で、指頭圧痕が僅かに残る。高台内はナデ調整を行う。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4371～4375は底部がほぼ平らで、体部から口縁部がやや内湾して立ち上がるもので、体部下半に回転ヘラ削りを行うものである。4371は底径5.6cmを測る。底部には断面方形でややハの字状に開く高台が付く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部の切り離しは回転ヘラ切りでナデ調整を加える。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整、体部外面に回転ヘラ削りを行う。高台内には「得」の文字とみられる墨書が残る。胎土は若干細砂を含み、焼成は良好で、内外面ともにぶい黄橙色を呈す。4372は口径16.0cm、底径5.2cm、器高5.3cmを測る。底部には断面逆台形の低く直立する高台が付く。体部はやや内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、器面にはナデ調整を施し、体部外面下半には回転ヘラ削りを行う。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4373はほぼ完形で、口径15.7cm、底径6.0cm、器高6.2cmを測る。体部はやや内湾し、口縁端部を太く丸く仕上げる。底部には断面逆台形の直立する高台が付く。調整は回転ナデ調整で、内底面と体部外面下半にはナデ調整を加え、指頭圧痕が残る。体部下半には回転ヘラ削りを行う。高台内はナデ調整で、高台の端部には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし橙褐色を呈する。4374は口径15.8cm、底径6.0cm、器高5.4cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。底部には断面方形の直立する低い高台が付く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。調整は回転ナデ調整で、その後内底面

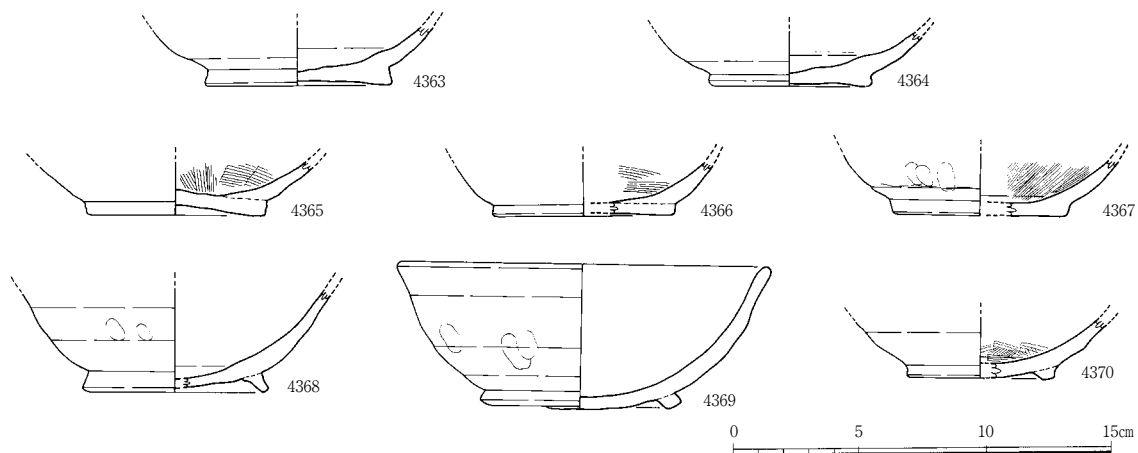


Fig.126 D区第VII層出土遺物実測図(土師質土器13)

2. 調査区の概要 (4)D区

にはナデ調整, 体部外面下半には回転ヘラ削りを行う。底部の切り離しは回転糸切りで高台内はナデ調整を行う。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4375はほぼ完形で, 口径15.7cm, 底径5.4cm, 器高5.2cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり, 口縁端部は丸く仕上げる。底部には断面蒲鋒状でややハの字状に開く低い高台が付く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。調整は回転ナデ調整

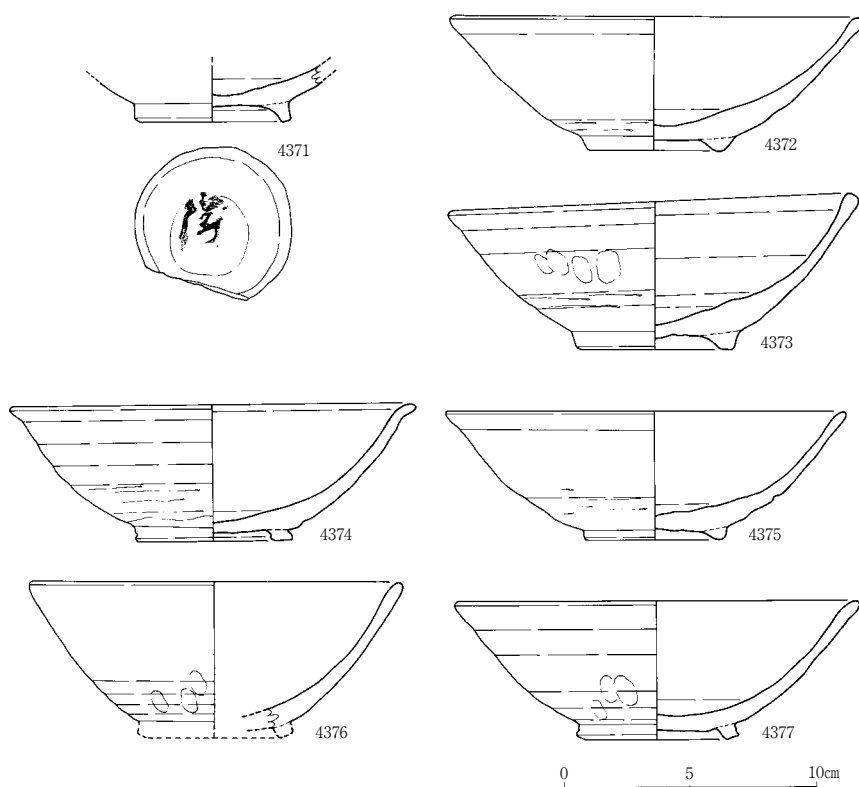


Fig.127 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器14)

で, その後内面は丁寧なナデ調整, 体部外面下半には回転ヘラ削りを行い, 高台内はナデ調整を施す。色調は, 内面がにぶい橙色, 外面がにぶい黄橙色を呈する。4376・4377は体部が内湾して立ち上がり, 口縁部がほぼ真直ぐのび, 体部下半には指頭圧痕が残る。4376は口径14.6cmを測る。調整は回転ナデ調整で内面と体部外面下半にナデ調整を行い, 体部外面下半には指頭圧痕が顕著に残る。色調は内外面とも暗灰色を呈する。4377は口径15.8cm, 底径5.6cm, 器高5.5cmを測る。底部には断面方形で, ハの字状に開く高台が付く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。調整は全面ナデ調整で, 体部外面下半には指頭圧痕が残る。色調は

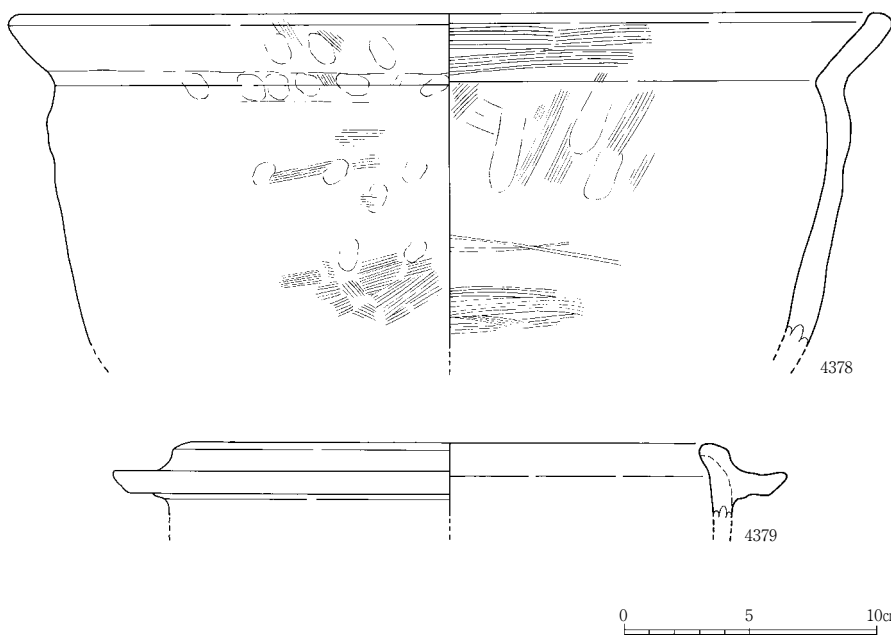


Fig.128 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器15)

内外面とも暗灰色を呈する。

4378は鍋で、口径34.1cmを測る。胴部は内湾気味に上方へ立ち上がり、頸部で屈曲して内湾する口縁部となる。体部はナデ調整で指頭圧痕とハケ目が残る。口縁部はヨコナデ調整、頸部外面は強いヨコナデ調整を行い、指頭圧痕が残る。胎土には5mm大の礫を含み、色調は、内面が黒褐色、外面が黒色を呈する。

4379は釜で、口径20.1cmを測る。器壁が薄く、口縁部は真直ぐ上方へ立ち上がり、端部を僅かに内傾させる。鏝は細く水平にのび、端部をやや上方へ摘み、細く仕上げる。調整はヨコナデ調整で、鏝の下部には煤が付着する。色調は、内面が灰黄褐色、外面がにぶい黄橙色ないし暗灰色を呈する。

白磁 (Fig.129-4380~4382)

4380・4381は碗である。4380は口径16.8cmを測る。器壁は薄く、体部は緩やかに内湾し、口縁部には小さな玉縁を有する。器面には光沢のある灰色味を帯びた白色釉を薄く施すが、ムラがある。胎土には黒色の砂粒を多く含む。4381は口径14.6cmを測る。器壁が非常に薄く、体部はほぼ真直ぐのび、口縁端部は細く仕上げる。器面には光沢のあるやや黄色味を帯びた白色釉を薄く施す。外面には貫入が入る。胎土には黒色の砂粒を含む。

4382は皿で、底径3.8cmを測る。体部は内湾して立ち上がる。やや緑味を帯びた白色釉を体部下半まで薄く施し、体部下半と外底面は露胎である。

青磁 (Fig.129-4383)

4383は碗で、底径6.4cmを測る。底部の器壁は厚く、断面方形の低い削り出し高台を有する。見込には片彫の草花文がみられる。器面にはオリーブ色の釉を豊付まで薄く施す。高台内は露胎で、赤褐色を呈する。胎土には黒色の砂粒を多く含む。

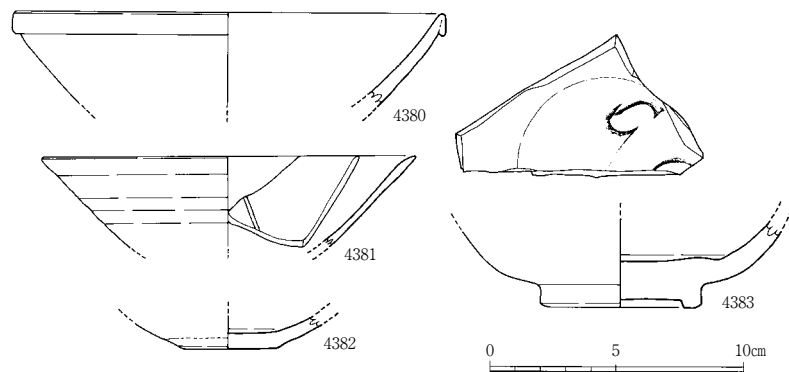


Fig.129 D区第XII層出土遺物実測図(白磁・青磁)

木製品 (Fig.130~132-4384~4399)

4384~4392は箸状木製品である。棒状に小割りにした後、角を取るように成形し、端部を細く、丸く加工する。木材は4388がコウヤマキ、4392がヒノキ科クロベ属クロベ、その他はヒノキ科ヒノキ属である。4384は両端を欠損し、残存長8.8cmを測る。4385は一部を欠損し、残存長11.6cm、全厚0.5cmを測る。断面は不整円形である。4386は一部を欠損し、残存長12.7cm、全厚0.7cmを測る。断面は八角形を呈する。4387は一部を欠損し、残存長14.0cm、全厚0.7cmを測る。断面は不整円形を呈する。端部は面をもつ。4388は一部を欠損し、残存長14.7cm、全厚0.4cmを測る。断面は不整形を呈する。4389は一部を欠損し、残存長16.5cm、全厚0.4cmを測る。断面は不整形を呈する。4390は一部を欠損し、残存長16.6cm、全厚0.6cmを測る。断面は不整方形を呈する。4391は一部を欠損し、残存長

2. 調査区の概要 (4) D区

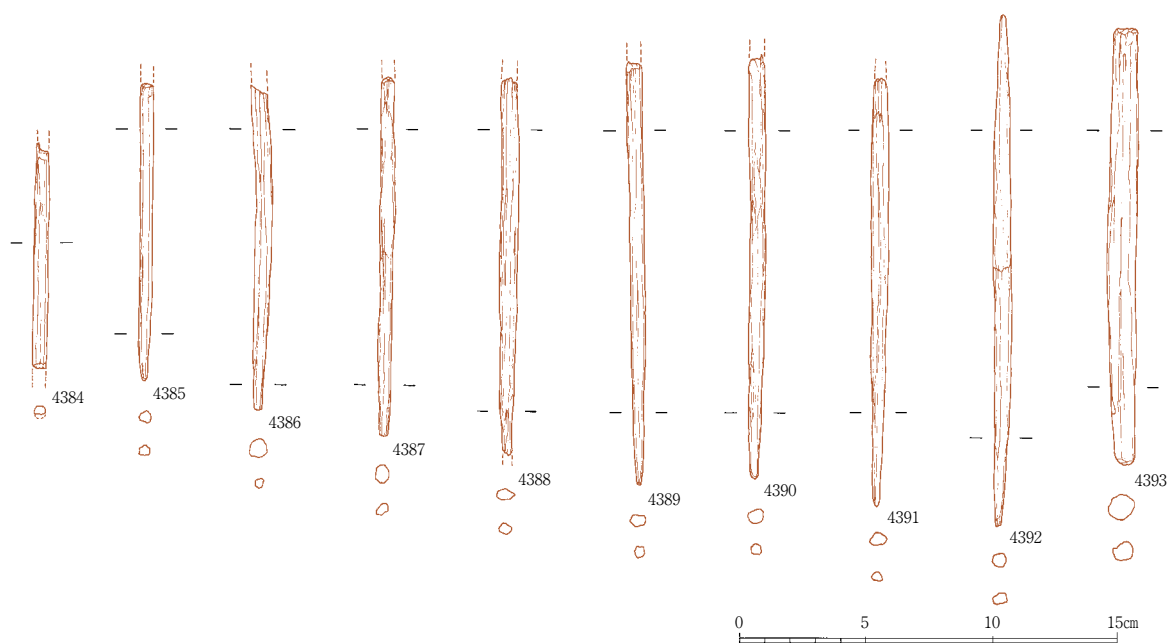


Fig.130 D区第XII層出土遺物実測図(木製品1)

16.7cm, 全厚0.5cmを測る。断面は不整形を呈する。4392は完形で, 全長19.9cm, 全厚0.5cmを測る。断面は楕円形を呈する。両端を細く仕上げる。

4393は棒状木製品である。完形で, 全長17.1cm, 全厚1.0cmを測る。一方の端部は細く加工し, 端面には押圧の痕跡が残る。もう一方の端部は平らな面を有し, 一辺0.3cm, 深さ1.7cmの方形の孔を穿つ。木材はヒノキ科ヒノキ属である。

4394は漆器の椀である。底部は完存し, 底径6.3cmを測る。高い柱状の高台を有し, 高台内を浅く丸く削る。体部は内湾して立ち上がる。総黒色系で, 全面に漆を施す。木材はモクセイ科トネリコ属である。

4395~4397は曲物の円形板である。4395は約2/3が残存し, 径7.6cm, 全厚0.6cmを測る小型のものである。端部は外傾し, 荒く加工する。木材はスギで柾目材である。4396は完形の底板である。径14.0cm, 全厚1.0cmを測る。柾目材で, 両面とも平滑に加工する。また両面とも黒色化する。側面は直立する面を有し, 3ヶ所に径3mmの穿孔がみられ, 1ヶ所には木釘が遺存する。木材はヒノキ科ヒノキ属である。4397は一部が残存し, 全長26.7cm, 全厚1.0cmを測る。残存部には径5mmの孔が2ヶ所, 半分を欠損するが中央部に径約1.7cmの孔がみられる。表面は平滑に加工するが, 炭化する。裏面は加工痕の凹凸が著しく残る。木材はヒノキ科アスナロ属で, 柾目材である。

4398・4399は編具の木錘である。4398は完形で, 全長13.9cm, 全幅5.2cmを測る。表皮が残存しており, 径約11cmの丸材の約1/3を使用したものとみられる。断面は五角形で, 二面は両端から中央へ向かって細く加工する。木材はブナ科コナラ属クヌギ節である。4399は完形で, 全長17.0cm, 全幅5.3cmを測る。両端には表皮が残存し, 長径5.4cm, 短径4.1cmの楕円形の木材を使用したものとみられる。端部から約3cm残し中央に向かって細く加工し, 加工部の断面はほぼ八角形を呈する。小口は多方向から中心に向かって粗雑に加工し, 凹凸が著しい。木材はシキミである。

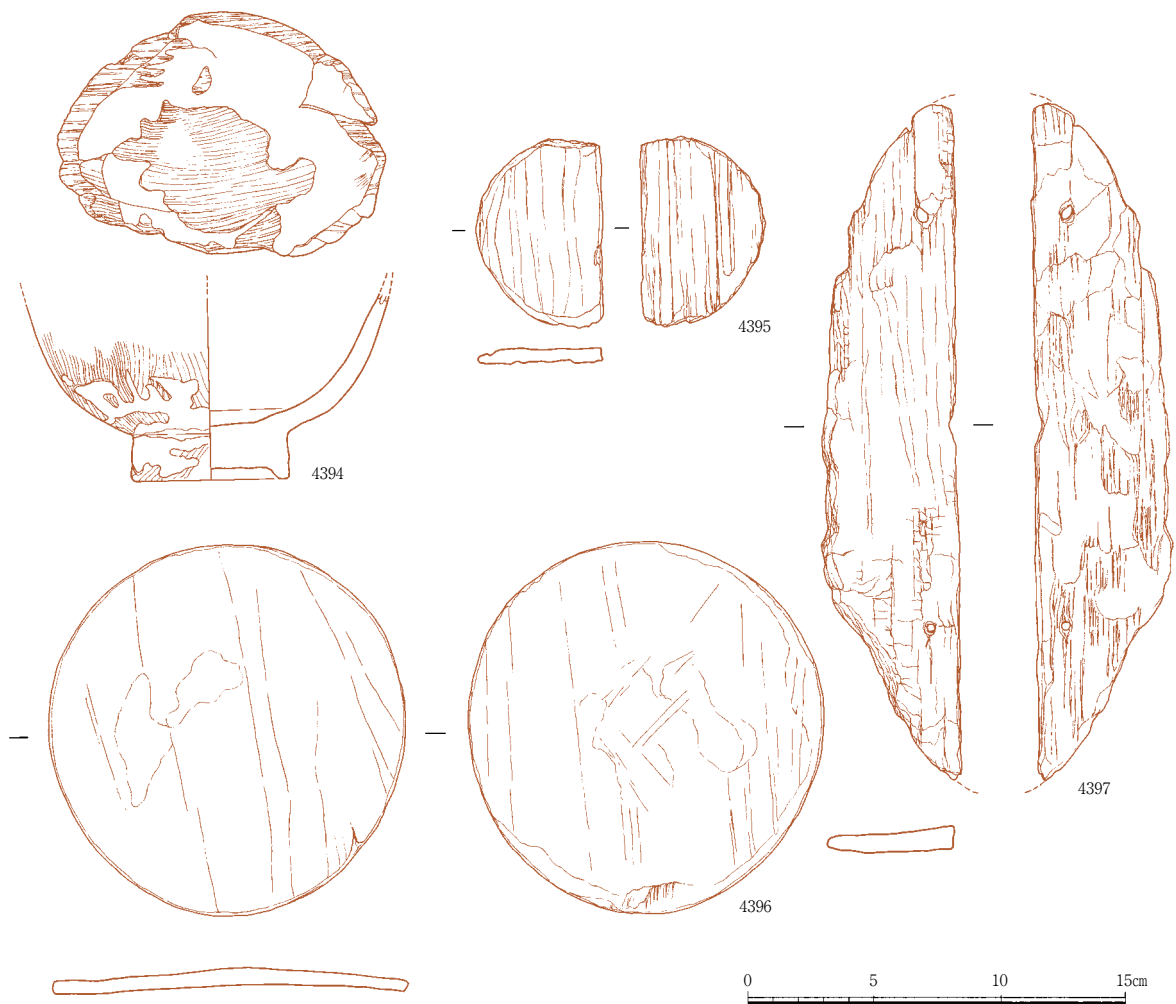


Fig.131 D区第XII層出土遺物実測図(木製品2)

第XIII層出土遺物

弥生土器 (Fig.133-4400~4402)

4400・4401は壺である。4400は口径26.0cmを測る。口縁部は外反し、端部を大きく外反させる。調整は外面と口縁部内面の一部にヨコ方向のヘラ磨きを密に行い、頸部にはヘラ描沈線が2条巡る。内面はナデ調整で、指頭圧痕が僅かに残る。色調は内外面ともにぶい橙色または灰褐色を呈する。4401は底径10.3cmを測る。底部は厚く、胴部はほぼ真直ぐのびる。調整は外面が細かいタテ方向のハケ調整で、部分的にヘラ磨きを施す。内面はナデ調整で、一部ハケ調整がみられる。色調は、内面が灰黄色、外面が灰褐色を呈する。

4402は甕である。胴部はほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁部は頸部から屈曲し、短く外傾する。口縁端部全面に刻目、

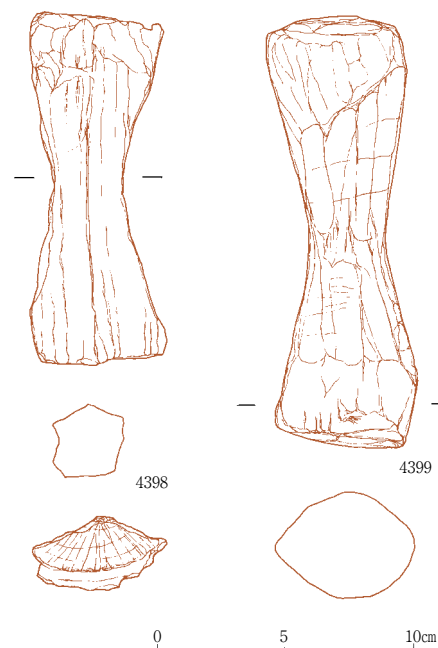


Fig.132 D区第XIII層出土遺物実測図(木製品3)

2. 調査区の概要 (4) D区

頸部外面にはヘラ描沈線が2条巡る。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は、内面がにぶい赤褐色、外面がにぶい褐色を呈する

土師器 (Fig.134-4403~4407)

すべて甕である。4403・4404は口径が小さいもので、頸部がくの字状に屈曲し、口縁部は短くのび、端部を丸くおさめる。調整は口縁部が強いヨコナデ調整、体部がナデ調整である。4403は口径13.1cmを測る。色調は、内面が褐灰色、外面が褐灰色ないし黒褐色を呈する。4404は口径13.4cmを測り、口縁部はやや内湾する。外面には煤が付着する。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面は褐灰色ないし黒色を呈する。4405・4406は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部はほぼ真直ぐのび、端部は内傾する凹面をなす。4405は口径15.6cmを測る。調整はヨコナデ調整である。色調は内外面とも黒褐色ないしにぶい黄褐色を呈する。4406は口径17.7cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ調整、胴部がナデ調整で僅かにハケ目が残る。胎土は細砂を多く含み、色調は、内面が黄褐色、外面が暗灰色を呈する。4407は口径29.0cmを測り、胴部は真直ぐ立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外上方にのび、端部を上につき上げる。調整は口縁部がヨコナデ調整、体部外面がタテ方向のハケ調整、体部内面がナデ調整である。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。

黒色土器 (Fig.135-4408~4411)

すべて椀である。4408は内黒の椀で、底径6.3cmを測る。底部には断面逆台形でハの字状に開く高台が付く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は全面ナデ調整である。胎土には細砂を含む。色調は、内面がオリーブ灰色、外面がにぶい赤褐色を呈する。4409~4411は両黒の椀で、全面炭素

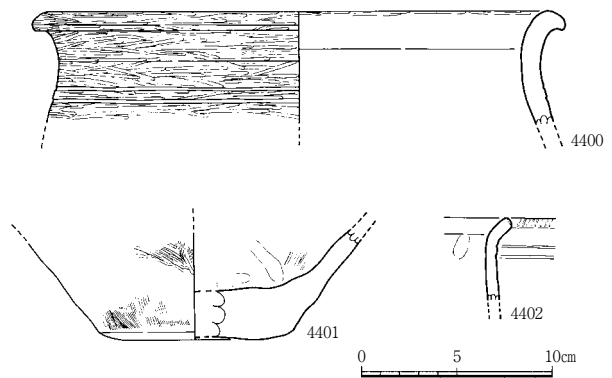


Fig.133 D区第Ⅲ層出土遺物実測図(弥生土器)

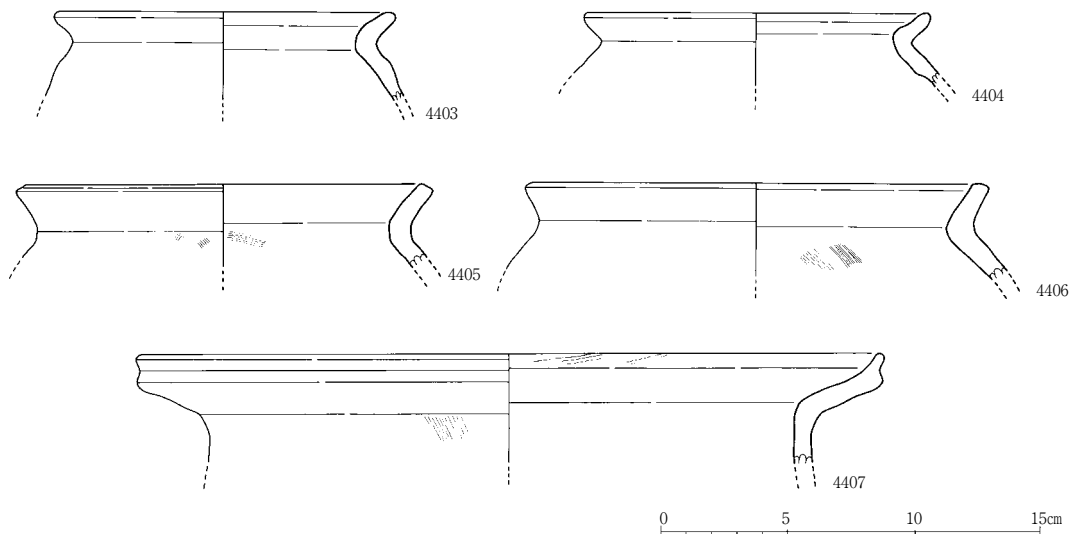


Fig.134 D区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師器)

が吸着する。4409は底径6.3cmを測る。底部には細くややハの字状に開く高台が付く。内面には幅2mmのヨコ方向のヘラ磨きが見られる。外面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は、内面が黒色、外面が黒色ないしにぶい橙色を呈する。4410・4411は断面三角形の高台が付く。4410は底径6.8cmを測る。

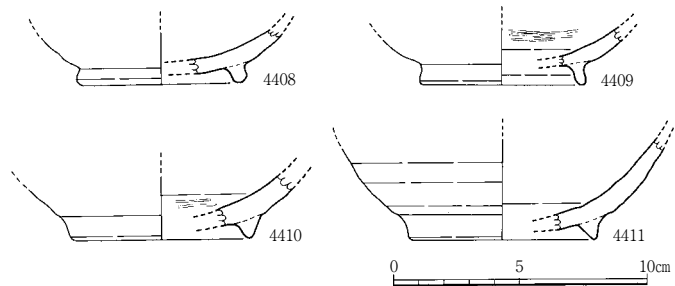


Fig.135 D区第Ⅲ層出土遺物実測図 (黒色土器)

器壁が厚く、体部は内湾して立ち上がる。調整はナデ調整、内面は僅かにヨコ方向のヘラ磨きが残る。焼成は良好で、胎土は細砂を含み、色調は、内面がオリーブ灰色、外面が黒色を呈する。4411は底径7.2cmを測る。やや器壁が厚く、体部は内湾して立ち上がる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。胎土には細砂を含み、色調は、内面が暗灰色ないし灰色、外面は黒色ないしにぶい黄色を呈する。

瓦器 (Fig.136-4412~4416)

すべて碗である。4412は口径14.9cmを測る。外面はヨコナデ調整が1段、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内外面とも幅1~2mmの細いヘラ磨きを行う。炭素は外面に部分的に残る。4413は口径15.0cmを測る。外面はヨコナデ調整が1段、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。内外面とも乱雑な

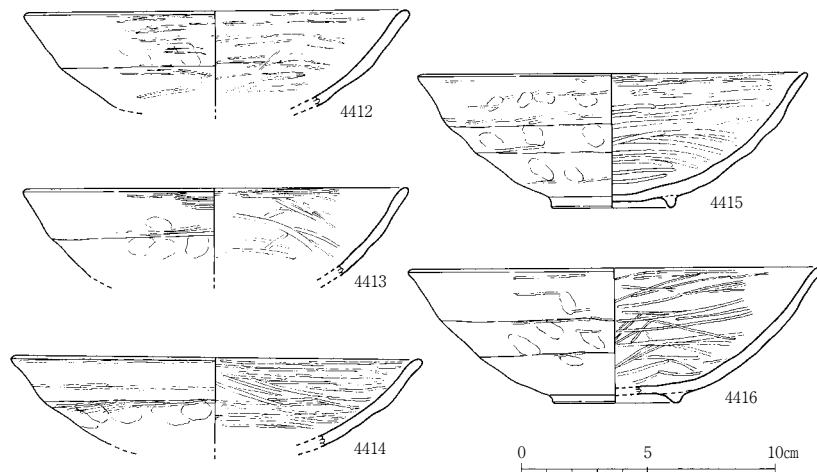


Fig.136 D区第Ⅲ層出土遺物実測図 (瓦器)

ヘラ磨きを行う。4414は口径16.0cmを測る。外面はヨコナデ調整が1段で、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。外面は部分的、内面は緻密にヘラ磨きを行う。焼成は良好で銀色に発色する。4415は口径15.2cm、底径4.8cm、器高5.3cmを測る。高台は断面三角形を呈する。外面はヨコナデ調整が1段、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。外面は部分的、内面は全面に幅3mmのヘラ磨きを密に行う。胎土には3mm大の礫を含む。4416は口径がやや大きいもので口径16.2cm、底径4.9cm、器高5.4cmを測る。高台は断面三角形を呈する。外面はヨコナデ調整が1段、体部下半はナデ調整で指頭圧痕が残る。外面には幅1.5mmのヘラ磨きが部分的に見られ、内面は幅1~3mmのヘラ磨きが比較的密にみられる。焼成は良好で銀色に発色する。

東播系須恵器 (Fig.137-4417~4422)

すべて碗で、体部は内湾し、口縁部は太く丸い。器面は回転ナデ調整で、口縁部には重ね焼の痕

2. 調査区の概要 (4)D区

がみられる。4417は口径16.6cmを測る。器面は回転ナデ調整で、一部ナデ調整を行う。焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰黄色または灰色を呈する。4418は口径16.9cmを測る。体部の器壁は非常に薄い。焼成はやや不良で、色調は、内面が灰黄色、外面が灰白色ないし灰色を呈する。4419は口径17.1cmを測る。胎土は2~3mm大の礫を含む。焼成はやや不良で、色調は、内面が灰白色ないし灰色、外面がにぶい黄橙色を呈する。4420は口径16.4cmを測る。胎土は細砂を多く含む。焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰白色ないし灰色を呈する。4421は口径15.8cm、底径5.3cm、器高5.5cmを測る。体部は若干内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は比較的精良で、焼成はやや良好である。色調は、内面が灰黄褐色、外面が灰黄褐色ないしにぶい黄橙色を呈する。4422は口径16.6cm、底径6.6cm、器高5.4cmを測る。器面は回転ナデ調整で、口縁部には重ね焼の痕が残る。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は細砂を非常に多く含む。色調は、内面が灰黄褐色ないし灰色、外面が褐灰色ないし灰色を呈する。

土師質土器 (Fig.138~145-4423~4514)

4423~4458は杯である。4423は口径16.3cmを測り、口縁部は外上方にほぼ真直ぐのび、端部を丸く仕上げる。器面は回転ナデ調整で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4424は口径15.4cmを測る。器高が低く、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反し、端部を太く丸く仕上げる。調整は回転ナデ調整である。胎土には細砂を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4425は口径15.6cmを測る。体部はほぼ真直ぐのび、口縁端部を丸く仕上げる。調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰黄褐色ないし黒色を呈する。4426は口径15.7cmを測る。器壁が厚く、体部はほぼ真直ぐのびる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整である。胎土には微砂を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4427~4436は底部の切り離しが回転ヘラ切りによるものである。4427は底径5.6cmを測る。体部はやや湾曲する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転

ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4428は底部が完存するもので、底径6.1cmを測る。体部はほぼ真直ぐのび、器面は回転ナデ調整で外底面には板状圧痕が残る。胎土

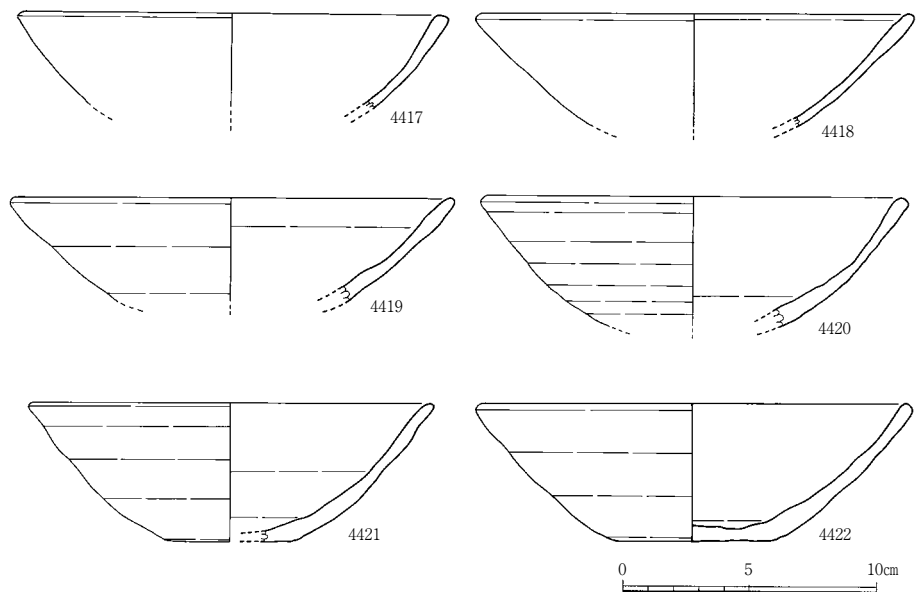


Fig.137 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(東播系須恵器)

には微砂を多く含み、色調は、内面が浅黄橙色、外面が橙色を呈する。4429は底径7.2cmを測る。体部は底部から斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がる。調整は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。内面の一部にヘラ磨きを行う。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面とも暗灰色を呈する。4430は底径6.6cmを測る。体部はほぼ真直ぐのびる。内底面にはロクロ目が残る。外底面は回転ヘラ切りの後に一部ナデ調整を加える。色調は、内面が黒色、外面が黒色ないし灰黒色を呈する。4431は底径5.6cmを測る。体部は底部からやや内湾して立ち上がる。器面は回転ナデ調整である。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともいぶき橙色を呈する。4432は底径6.7cmを測る。体部は外上方にのびる。調整は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。色調は内外面とも灰黄色ないし橙色を呈する。4433は底径7.2cmを測る。体部はほぼ真直ぐのびる。調整は回転ナデ調整である。色調は、内面がにぶき黄橙色、外面がにぶき黄橙色ないし褐灰色を呈する。4434は底径7.4cmを測り、体部は内湾して立ち上がる。調整は回転ナデ調整である。胎土は細砂を含み、色調は内外面とも暗灰色ないし褐灰色を呈する。4435は底径6.8cmを測る。体部は大きく内湾する。器面は回転ナデ調整である。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともいぶき橙色を呈する。4436は底径6.4cmを測る。底部の器壁は厚く、体部は底部からほぼ真直ぐ外上方にのびる。器面は回転ナデ調整である。胎土は細

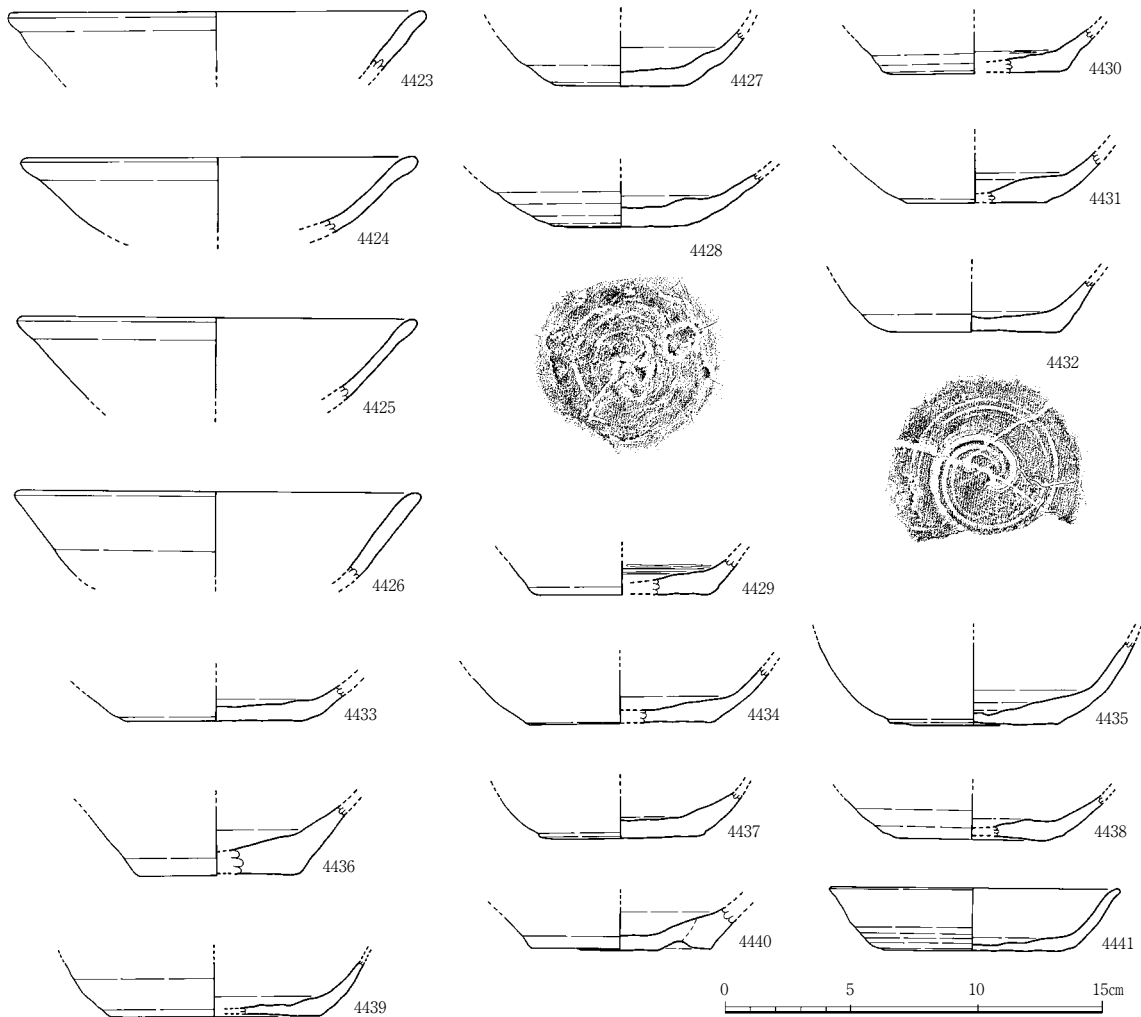


Fig.138 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器1)

2. 調査区の概要 (4)D区

砂を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4437は底径6.4cmを測る。体部は内湾して上がる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4438は底径6.0cmを測る。やや器壁が薄く、体部は内湾して上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。胎土は微砂を含み、色調は、内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。4439は底径8.2cmを測る。器壁は非常に薄く、体部は内湾して立ち上がる。器面は著しく磨滅するため、底部の切り離しと外面の調整は不明である。内面は回転ナデ調整である。色調は、内面がにぶい橙色ないし黒色、外面が橙色を呈する。4440は底径7.2cmを測る。体部は底部からほぼ真直ぐ立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、外底面には接合痕がみられる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4441は底部が浅いもので、口径11.4cm、底径6.9cm、器高2.4cmを測る。器壁が薄く、体部はほぼ真直ぐのび、口縁端部は細く仕上げる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土は細砂を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

4442～4445は小型の杯である。4442は口径9.8cm、底径5.4cm、器高3.4cmを測る。体部はほぼ真直ぐ立ち上がる。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土は細砂を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4443は口径10.6cm、底径6.4cm、器高3.3cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。4444は口径12.2cm、底径6.0cm、器高3.3cmを測り、底部が低い円盤状高台となる。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面とも明赤褐色を呈する。4445は口径12.0cm、底径6.7cm、器高4.0cmを測る。体部は底部からほぼ真直ぐのびる。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土は細砂を多く含む。色調は、内面がにぶい赤褐色ないし黒褐色、外面が明赤褐色を呈する。4446～4449は口縁部が外反するものである。4446は口径13.8cm、底径5.4cm、器高3.7cmを測る。成形はロクロ水挽成形である。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土は細砂を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4447は底部が比較的深いもので口径13.7cm、底径6.1cm、器高4.7cmを測る。体部はほぼ真直ぐ長くのびる。器面は回転ナデ調整である。胎土は微砂を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4448は口径16.0cm、底径7.6cm、器高4.3cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。色調は内外面とも橙色を呈する。4449はほぼ完形で口径16.9cm、底径7.7cm、器高4.8cmを測る。体部はほぼ真直ぐのび、口縁部を若干外反する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。胎土は比較的精良であり、焼成は非常に良く内外面とも黒色ないし灰白色を呈する。4450～4452は器高が高く、体部が比較的上方へ立ち上がる。4450は口径14.9cm、底径6.3cm、器高5.2cmを測る。体部は内湾して上がり、口縁部は斜め上方を向き、端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4451は口径15.8cm、底径7.8cm、器高5.1cmを測る。底部の器壁は厚く、

体部はほぼ真直ぐのび、口縁部を細く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色ないし黒褐色を呈する。4452は深い底部が完存するもので、口径13.8cm、底径6.0cm、器高5.6cmを測る。体部は上方へ高く立ち上がり、口縁部は外反し、端部を細く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4453は底部のみ残存し、底径7.1cmを測る。内底面が高台内まで落ち込む。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りとみられ、板状圧痕が残る。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4454～4456は比較的高い高台を有するものである。4454は高台が細く直立するもので、端部が欠損する。内面と高台内はナデ調整で、外面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも褐灰色ないし明褐色を呈する。4455は底径8.1cmを測り、

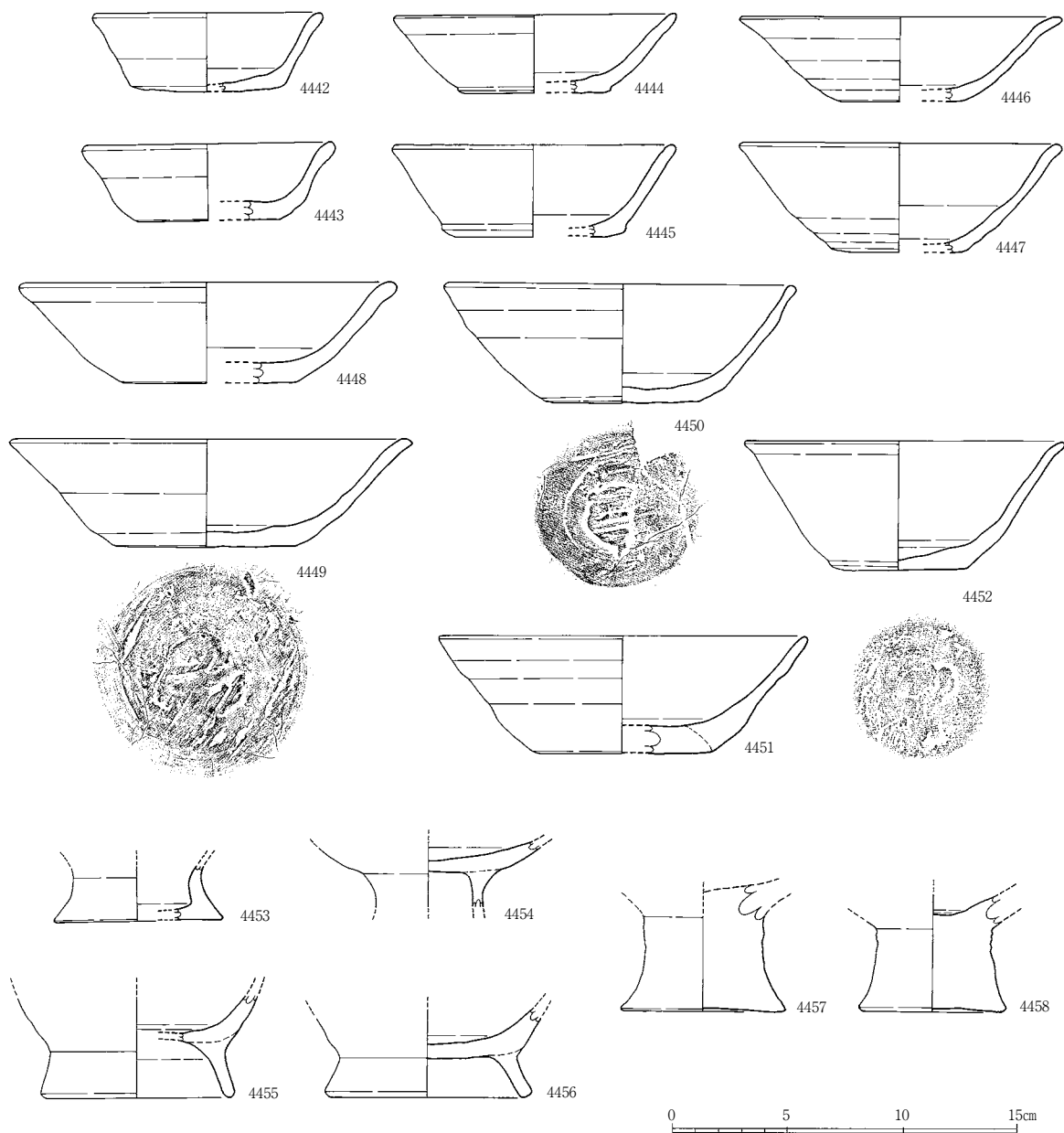


Fig.139 D区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師質土器2)

2. 調査区の概要 (4)D区

高さ2.5cmのハの字状に開く高台が付く。体部は内湾して上がる。外面は回転ナデ調整で、内面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4456は底径8.4cmを測り、高さ1.8cmのハの字状に開く高台が付く。体部は内湾して上がる。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4457・4458は柱状高台をなすものである。4457は高さ4.0cmの高台を有するもので、底径6.8cmを測る。成形はロクロ水挽成形で、ロクロ目が顕著に残る。器面は回転ナデ調整である。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4458は高さ3.6cmの高台がほぼ完存するもので、底径6.1cmを測る。器面は回転ナデ調整で、底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。色調は内外面とも灰白色を呈する。

4459～4488は小皿である。4459は口唇部を欠損するもので、底径3.8cmを測る。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。胎土は細砂を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4460も口唇部を欠損するもので、底径6.4cmを測る。口縁部は短く外反する。器面には回転ナデ調整を施す。色調は、内面が灰黄色、外面はにぶい黄橙色を呈する。4461は口径8.1cm、底径5.2cm、器高2.0cmを測る。口縁部は底部から外上方に短く上がり、端部を細く仕上げる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4462は口径8.2cm、底径5.0cm、器高1.5cmを測る。口縁部の器壁は薄く、斜め上方へほぼ真直ぐのびる。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは摩耗するため不明である。胎土は比較的精良で、色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい橙色ないしにぶい赤橙色を呈する。4463は口径8.3cm、底径6.0cm、器高1.5cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐ上がる。器面には回転ナデ調整を施す。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4464は口径8.9cmを測る。口縁部は斜め上方へ短くのびる。調整は回転ナデ調整である。胎土は細砂を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4465は口径9.0cmを測る。体部は斜め上方を向き、口縁部で小さく外傾する。調整は回転ナデ調整である。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4466は口径9.3cm、底径5.4cm、器高1.8cmを測る。口縁部は短く斜め上方にのびる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

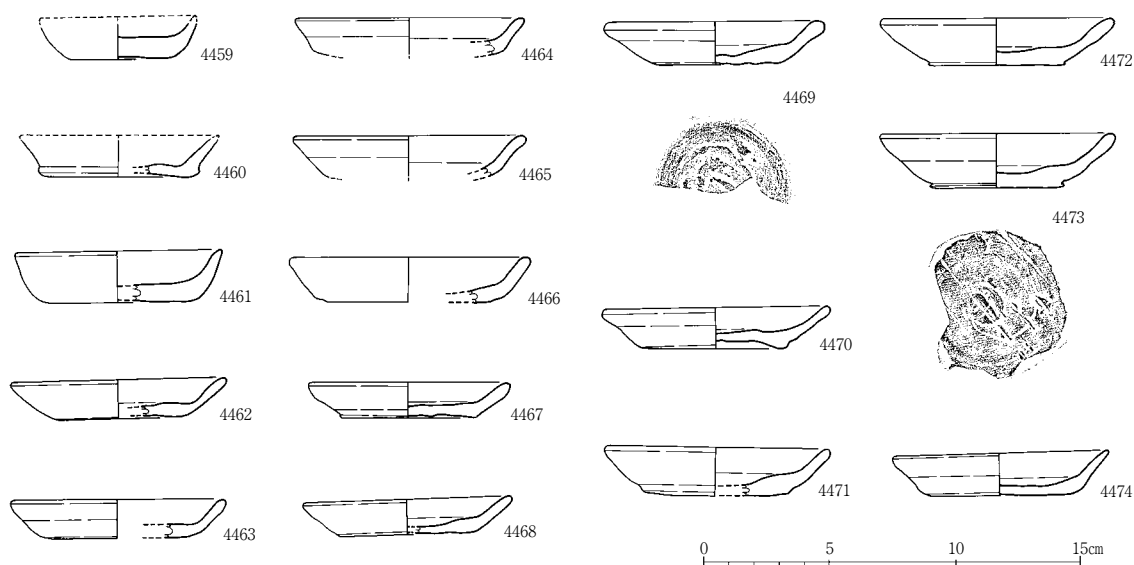


Fig.140 D区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師質土器3)

4467～4474は底部の切り離しが回転ヘラ切りとなっているものである。4467は口径7.8cm，底径5.4cm，器高1.3cmを測る。口縁部は短く斜め上方を向く。色調は，内面がにぶい黄橙色，外面がにぶい黄橙色ないし灰赤色を呈する。4468は口径8.1cm，底径5.2cm，器高1.4cmを測る。器壁が薄く，口縁部は短く斜め上方へのびる。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は細砂を多く含み，色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4469は口径8.3cm，底径4.8cm，器高1.7cmを測る。全体に器壁が厚く，端部は太く丸い。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4470は外底面が大きく窪むもので，口径8.8cm，底径5.5cm，器高1.6cmを測る。口縁部は器壁が薄く，内湾する。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4471は口径8.8cm，底径4.1cm，器高1.9cmを測る。口縁部は短く斜め上方を向く。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は精良で，色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4472は口径9.0cm，底径5.2cm，器高1.9cmを測る。口縁部は比較的長く外上方にほぼ真直ぐのびる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。胎土は比較的精良で，色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4473は4472と同形態のもので口径9.0cm，底径5.6cm，器高2.1cmを測る。胎土は精良で，色調は，内面がにぶい橙色，外面がにぶい橙色ないし赤褐色を呈する。4474はほぼ完形で，口径8.5cm，底径5.6cm，器高1.8cmを測る。器壁が薄く，口縁部は斜め上方のび端部を細く仕上げる。底部の切り離しは静止ヘラ切りで，器面には回転ナデ調整を施す。胎土は微砂を多く含み，色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4475は完形で，口径8.5cm，底径6.7cm，器高1.7cmを測る。底部の器壁は薄く，口縁部はほぼ真直ぐのび，端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは静止糸切りとみられる。色調は，内面が浅黄色，外面が浅黄色ないし灰色を呈する。4476～4486は底部の切り離しが回転糸切りである。4476は口径7.3cm，底径5.9cm，器高1.2cmを測る。口縁部は短く斜め上方を向く。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は精良で，色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4477は口径8.0cm，底径5.2cm，器高1.3cmを測る。器壁が薄く，口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐのびる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。胎土は微砂を含み，色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4478は完形で，口径8.0cm，底径6.0cm，器高1.7cmを測る。口縁部は短く外上方を向き，端部は丸く太い。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。外底面には板状圧痕が残る。胎土は精良で，色調は，内面が浅黄橙色ないし淡赤橙色，外面が浅黄橙色を呈する。4479は口径8.2cm，底径6.4cm，器高1.4cmを測る。口縁部は短く，上方へほぼ真直ぐのびる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。内面には煤が付着する。胎土は精良で，色調は，内面がにぶい黄橙色，外面が灰黄褐色を呈する。4480は完形で，口径8.3cm，底径5.1cm，器高1.6cmを測る。口縁部はやや外反し，端部を細く仕上げる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。胎土は微砂を多く含み，色調は，内面がにぶい黄橙色，外面が灰黄褐色を呈する。4481は口径8.4cm，底径6.5cm，器高1.3cmを測る。口縁部は短く内湾気味に上がる。器面には回転ナデ調整を施す。外底面には板状圧痕が残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4482は口径8.5cm，底径6.3cm，器高1.4cmを測る。口縁部は短く内湾気味に上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4483は口径8.7cm，底径5.5cm，器高1.7cmを測る。口縁部は比較的長く外上方にほぼ真直ぐのびる。

2. 調査区の概要 (4) D区

器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。胎土には細砂を多く含み、色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。4484は口径8.8cm, 底径6.6cm, 器高1.3cmを測る。底部の器壁が薄く、口縁部は短くほぼ真直ぐのびる。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4485は口径8.8cm, 底径5.4cm, 器高1.7cmを測る。口縁部は比較的長く、外上方にほぼ真直ぐのびる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。胎土は比較的精良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4486は口径

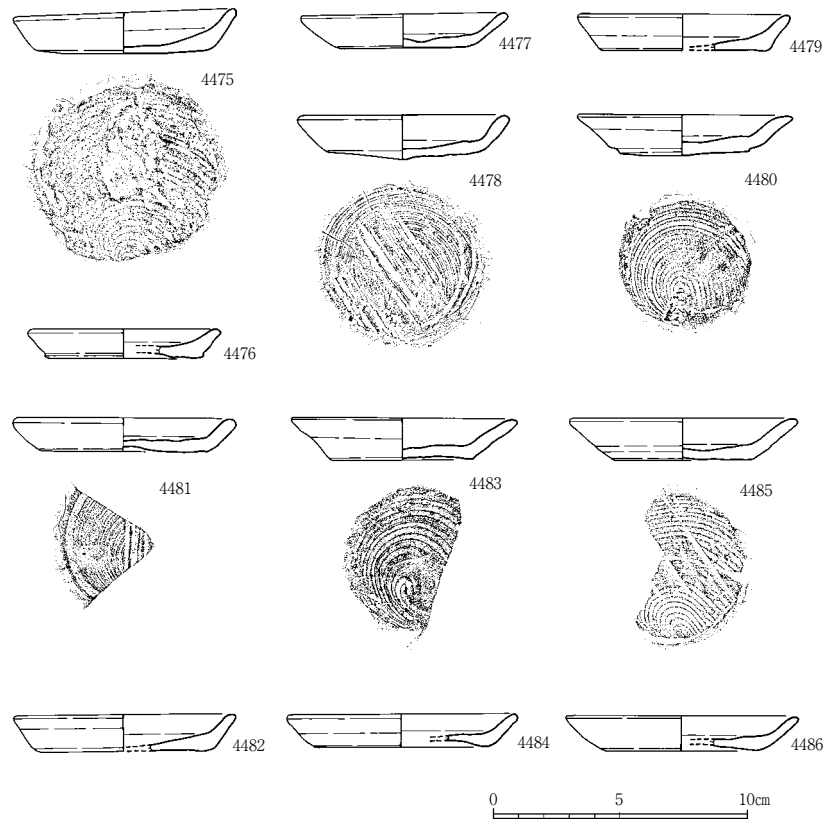


Fig.141 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器4)

9.0cm, 底径6.0cm, 器高1.4cmを測る。口縁部は内湾気味に上がる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4487は高台が付くもので、口径9.6cm, 底径5.1cm, 器高2.6cmを測る。口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ上がり端部を丸く仕上げる。底部には断面三角形の高台が付く。調整は回転ナデ調整である。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色ないし橙色を呈する。4488は比較的高い高台の付く皿とみられるもので、残存する高台高は2.2cmを測る。調整は回転ナデ調整である。胎土は微砂を多く含み、色調は、内面がにぶい橙色ないし橙色、外面はにぶい橙色を呈する。

4489～4491は皿である。4489は口径10.5cm, 底径8.0cm, 器高1.6cmを測る。口縁部は底部から緩やかに上がり、端部を丸くおさめる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4490は口径11.7cm, 底径5.4cm, 器高1.5cmを測る。口縁部は外反し、端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施す。外底面は摩耗するが、断面形態からみて回転ヘラ切りとみられる。胎土は若干砂粒を含み、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4491は口径12.3cm, 底径8.3cm, 器高1.5cmを測る。口縁部は器壁が厚く、ほぼ真直ぐ外上方

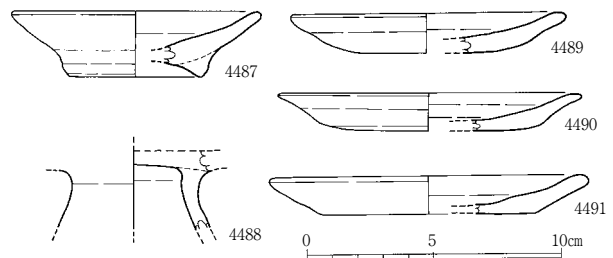


Fig.142 D区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器5)

へのびる。器面は著しく磨滅する。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

4492～4509は椀である。4492は口径15.7cmを測る。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。調整はナデ調整である。色調は内外面とも暗灰色を呈する。4493は口径16.0cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は外反する。調整は回転ナデ調整である。色調は、内面がにぶい黄橙色ないし黒褐色、外面がにぶい黄橙色ないし褐灰色を呈する。4494は口径14.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。調整は回転ナデ調整である。胎土は細砂を多く含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4495～4497は円盤状高台を有し、内底面が高台内に落ち込むものである。4495は底径7.7cm測り、体部はほぼ真直ぐのびる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。色調は、内面が灰色ないしにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。4496は底径8.0cmを測る。体部はほぼ真直ぐのびる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は細砂を多く含み、色調は内外面とも浅黄橙色ないし灰色を呈する。4497は底径7.1cmを測る。器壁が非常に薄く、体部はほぼ真直ぐのびる。調整は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、外面には火襷がみられる。焼成は良好で、内面が褐灰色、外面が灰黄色ないし黄灰色を呈する。4498・4499は円盤状高台を有するものである。4498は底径6.3cmを測る。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈する。4499は底径7.0cmを測る。高台は低く扁平で、体部はやや内湾する。調整は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。胎土は比較的精良で、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色ないし黒褐色を呈する。4500～4509は輪高台を有する。4500は底径6.8cmを測る。高台は断面方形で、直立する。体部は底部から大きく内湾する。器面は回転ナデ調整である。焼成は良好で、色調は内外面とも褐灰色ないし暗灰色を呈する。4501は底径7.6cmを測る。高台は断面逆台形で直立する。体部は底部から内湾する。器面は回転ナデ調整である。焼成は良好で、内面が黄灰色、外面がにぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈する。4502は底径7.2cmを測る。高台は断面逆台形で、直立する。体部は底部から内湾して上がる。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。色調は内外面とも橙色ないし灰色を呈する。4503は底径7.0cmを測る。高台は断面方形でハの字状に開く。体部は内湾して上がる。調整はナデ調整、

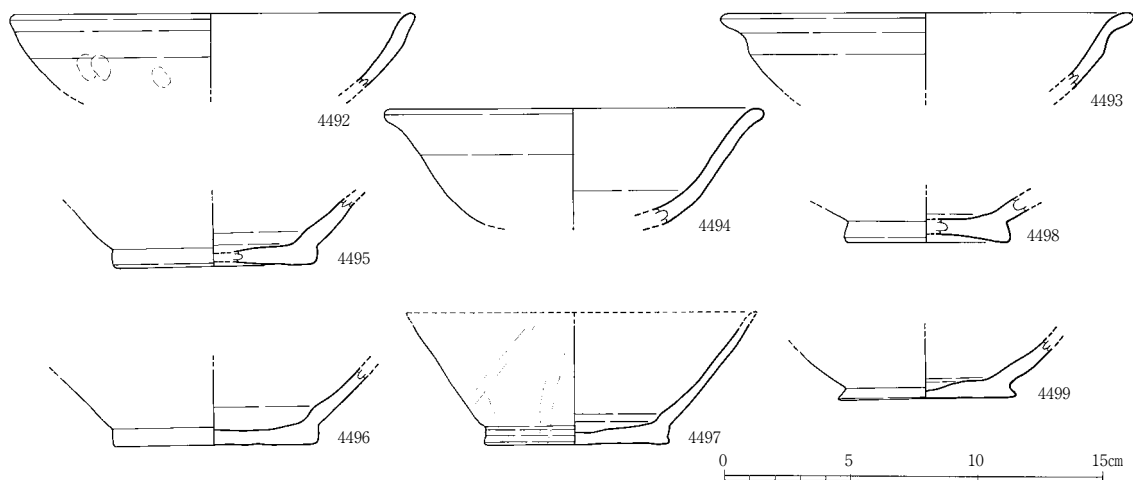


Fig.143 D区第Ⅷ層出土遺物実測図(土師質土器6)

2. 調査区の概要 (4)D区

体部外面には弱い指頭圧痕が残る。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。焼成は良好で、内面が褐灰色、外面が黄灰色を呈する。4504は瓦器に似たもので底径7.0cmを測る。高台は断面逆台形での字状に開く。体部は大きく内湾し、腰が張る形態である。外面はナデ調整で、指頭圧痕が残り、内面は丁寧なナデ調整で、内底面にはコテ当てによるとみられるハケ目が放射状に残る。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。4505は小さな高台が付くもので、底径5.9cmを測る。内底面には丁寧なナデ調整を施す。焼成は良好で、内面が灰黄色ないし黒褐色、外面がにぶい黄色を呈する。4506は底径6.1cmを測り、底部には小さな高台が付く。体部は内湾して上がる。器面には丁寧なナデ調整を施す。胎土は微砂を含むが、比較的精良である。色調は内外面ともなぶい黄橙色を呈する。4507は底径6.4cmを測り、底部には扁平な高台が付く。体部は内湾して上がる。調整は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。胎土は微砂を含み、焼成は良好で、内外面とも浅黄橙色を呈する。4508は口径15.7cm、底径5.2cm、器高5.8cmを測る。体部は内湾気味に上がり、口縁部は斜め上方を向く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。器面は著しく磨滅するため調整は不明瞭だが、僅かにナデ調整がみられ、体部外面には弱い指頭圧痕が残る。色調は内外面とも暗灰色ないし黄灰色を呈する。4509は口径15.5cmを測る。体部は内湾気味に上がり、口縁部は斜め上方を向く。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。調整はナデ調整、体部外面には指頭圧痕が残る。色調は内外面とも暗灰色ないし黒色を呈する。

4510～4514は釜である。4510は口径24.2cmを測る。口縁部は直立し、端部は内傾する浅い凹面をなす。口縁直下には幅1.8cmの鏝が巡る。鏝と口縁部はヨコナデ調整、鏝より下はナデ調整である。色調は、内面が暗褐色、外面が暗褐色ないし黒褐色を呈する。4511は口径25.6cmを測る。口縁部は内傾し、端部を丸くおさめ、外面には浅い凹線が巡る。鏝は幅1.7cmを測り、やや上方を向き、端部を丸くおさめる。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整で、指頭圧痕が残る。体部内面はナ

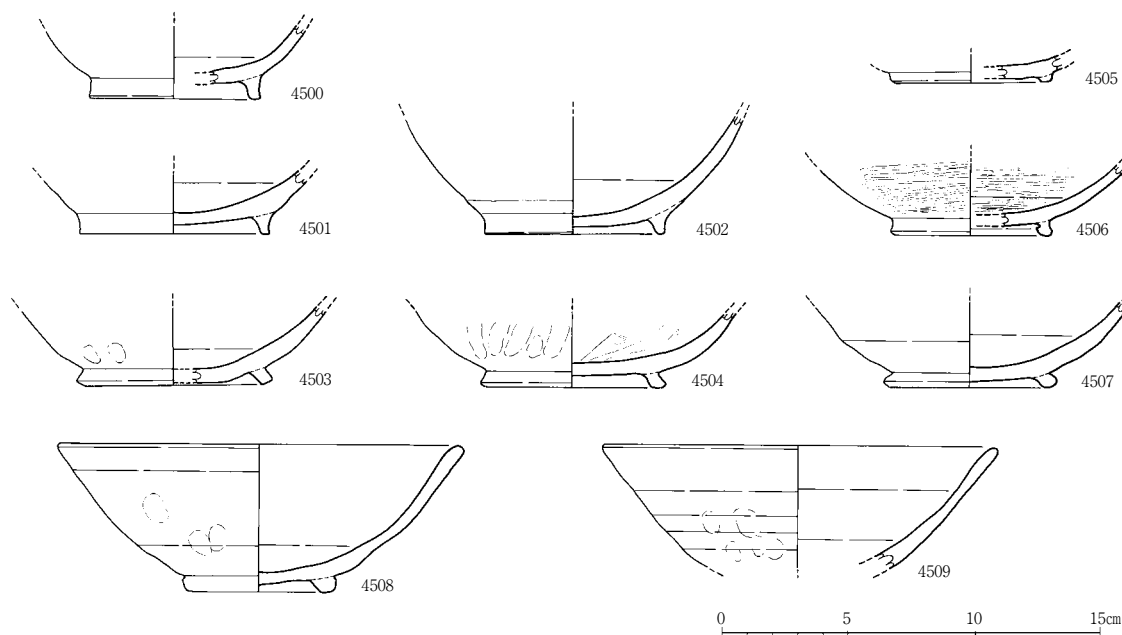


Fig.144 D区第Ⅲ層出土遺物実測図(土師質土器7)

デ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4512は口径20.0cmを測る。体部は真直ぐ上方に立ち上がり、口縁部は内湾し、端部を丸く細くおさめる。鏝は幅1.8cmを測り、やや上方を向き、端部を細く仕上げる。調整は口縁部がヨコナデ調整、体部外面はタテ方向のハケ調整、体部内面はナデ調整である。色調は、内面が褐灰色ないし暗赤褐色、外面がにぶい赤褐色ないし黒褐色を呈する。4513・4514は器壁が薄く、胴部は真直ぐ上方に立ち上がり、口縁部を僅かに内傾させ、端部を細く仕上げるものである。4513は口径24.2cmを測る。鏝は細く水平にのびる。調整はヨコナデ調整で、鏝下部には指頭圧痕が残り、煤が付着する。色調は内外面ともにぶい赤褐色を

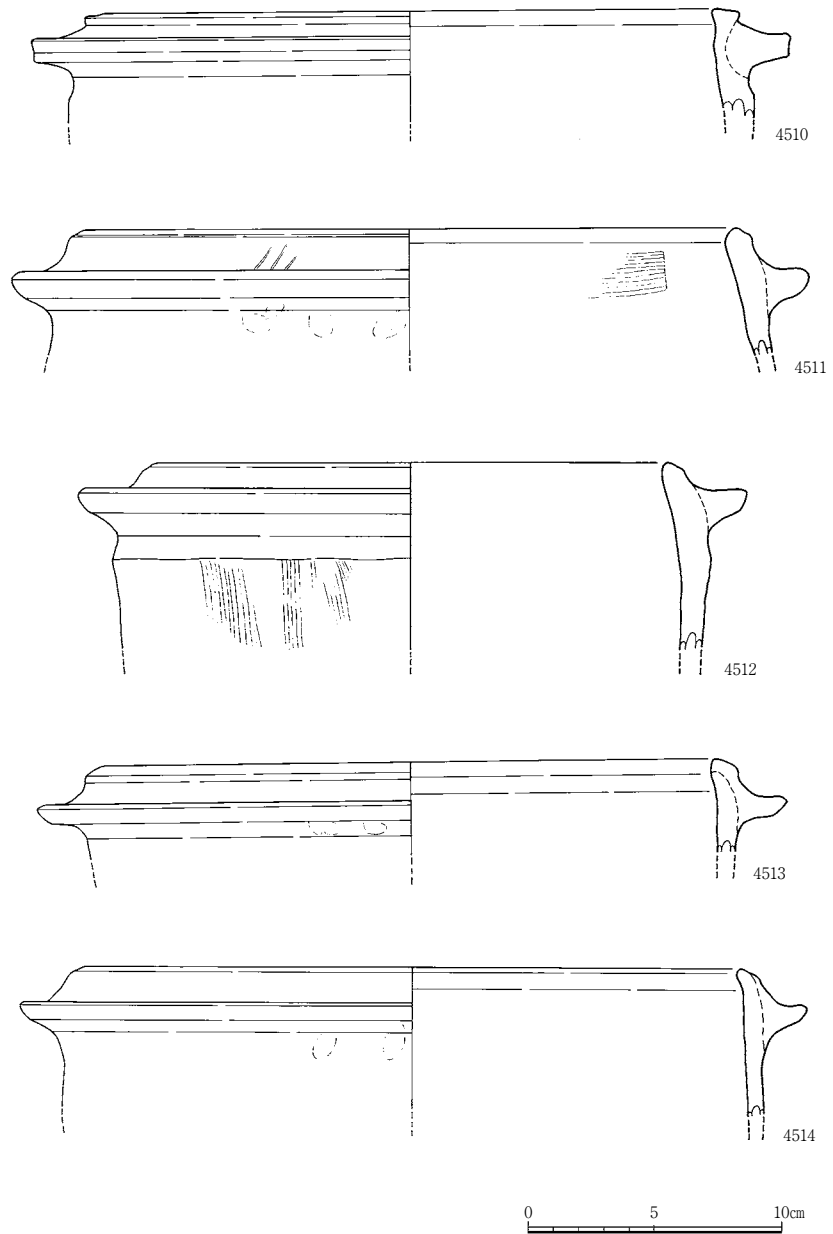


Fig.145 D区第Ⅳ層出土遺物実測図(土師質土器8)

呈する。4514は口径26.0cmを測る。鏝はやや上方を向く。調整は口縁部がヨコナデ調整、鏝の下部はナデ調整で指頭圧痕が残る。体部内面はナデ調整である。また、鏝の下部には煤が付着する。色調は内外面とも暗灰黄色を呈する。

白磁 (Fig.146-4515)

4515は碗の底部で完存し、底径6.3cmを測る。底部は直立する高い削り出し高台となる。見込には沈線状の浅い段が巡り、僅かに砂が付着する。器面には高台付近まで灰白色の釉を薄く施すが、釉には透明感がなく、気泡が多く入る。胎土には黒色の微砂を非常に多く含む。

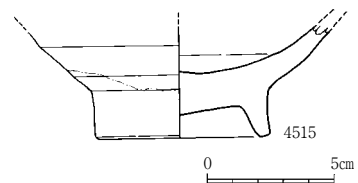


Fig.146 D区第Ⅳ層出土遺物実測図(白磁)

2. 調査区の概要 (4)D区

石製品 (Fig.147-4516・4517)

4516は叩石で、一部が残存する。残存部で1面に敲打痕がみられる。石材は砂岩である。4517は砥石で、両端を欠損する。断面は六角形を呈し、6面すべてを使用する。1面には研磨した痕跡が溝状に残存する。石材は砂岩である。

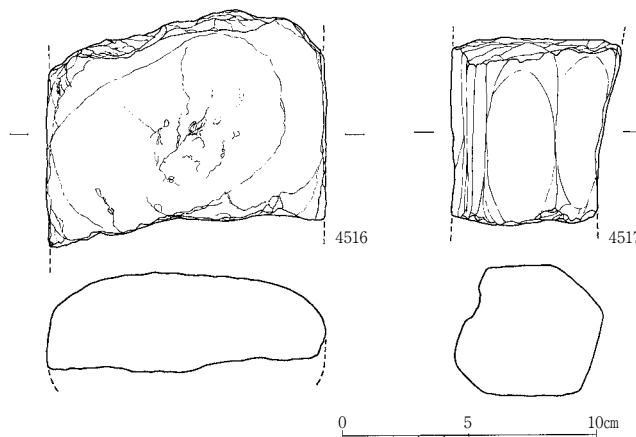


Fig.147 D区第Ⅲ層出土遺物実測図(石製品)

③ 遺構と遺物

i 中世

a. 柵列

SA-401

斜面部で検出した柵列である。西側の残丘に沿って湾曲し南北に走り、検出長56.20mを測り、さらに調査区外へ続く。柱穴は25個を検出し、楕円形または不整形円形を呈し、径19~96cm、深さ9~26cmを測る。埋土は黒色礫質砂で、やや粘性があり、5mm~1cm大の褐色の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片1点があるが、流れ込みとみられる。また、斜面部の上には丘陵を削平して作った平場があり、その平場を囲むように作られたものとみられる。

Tab.7 林口遺跡第Ⅱ調査地区-D区柵列計測表

遺構番号	規模			方向	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA-401	25	56.20	1.20~2.70	—	湾曲する

b. 土坑

SK-401

調査区の北東部で検出した土坑で、調査区外へ続く。平面形は楕円形とみられ、検出長1.42m、幅0.87m、深さ0.21mを測る。長軸方向はN-47°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は褐灰色礫質砂で1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、青磁片1点がみられるが、復元図示できるものはなかった。

SK-402 (Fig.148)

調査区の南部で検出した土坑で、一部暗渠に切られていた。平面形は不整形で、長径4.80m、短径1.62m、深さ12cmを測る。長軸方向はN-15°-Eを示す。断面は舟底状で、埋土は褐灰色礫質砂で1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片1点、須恵器片1点、瓦器片7点、土師質土器片140点、青磁片1点があり、弥生土器1点(4518)、東播系須恵器1点(4519)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.149-4518)

4518は甕である。如意形口縁で、口縁端部に刻目を施す。頸部外面にはヘラ描沈線が2条、その間

に刺突文がみられる。口縁部はヨコナデ調整, その他はナデ調整で, 外面は特に丁寧なナデ調整を行う。色調は, 内面がにぶい橙色, 外面が黒褐色ないし灰褐色を呈する。

東播系須恵器 (Fig.150-4519)

4519は片口鉢で, 口縁端部が欠損する。口縁部が外上方を向き, 端部を上下に拡張する。また, 口縁部には重ね焼の痕が残る。胎土には細砂を多く含み, 色調は内外面とも灰白色を呈する。

c.溝跡

SD-401 (Fig.151)

調査区西部の斜面部裾で検出した南北に走る溝跡で, 斜面に沿って大きく湾曲し, SX-401によって分断される。両端は調査区外に続き, 検出長は49.60m, 幅1.30~6.20m, 深さ18~59cmを測る。西側は特に自然地形を利用し, 明確な肩をもたない部分も見られるが, SX-401付近は明確な肩を有し, 深く掘削される。基底面は標高5.865~6.397mを測り, 北から南へ傾斜し, SX-401の南側が最も低い。埋土は黒色シルト層で, 5mm大の礫を若干含んでいた。出土遺物は弥生土器片220点, 土師器11点, 須恵器26点, 黒色土器2点, 瓦器7点, 東播系須恵器1点, 土師質土器片220点があり, 弥生土器11点(4520~4530), 土師器4点(4531~4534), 黒色土器1点(4535), 瓦器1点(4536), 土師質土器5点(4537~4551)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.152-4520~4530)

4520~4522は壺である。4520は肩部の破片で, 重弧文とみられるヘラ描きの湾曲する3本の沈線が残る。調整は外面がヘラ磨き, 内面がナデ調整で指頭圧痕が残る。色調は, 内面がにぶい黄褐色, 外面が褐色ないし明赤褐色を呈する。4521は底径9.2cmを測る。胴部は底部からほぼ真直ぐ立ち上がる。調整は外底面がナデ調整, 体部外面がヨコ方向のヘラ磨き, 内面がナデ調整で, 指頭

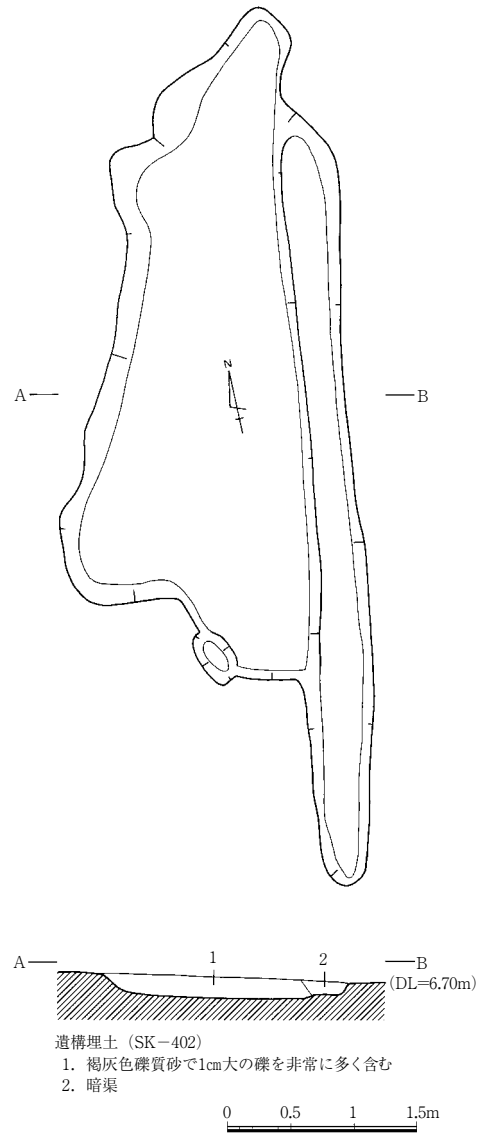


Fig.148 SK-402

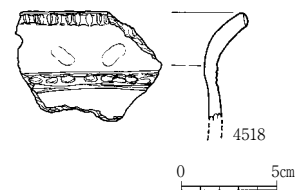


Fig.149 SK-402出土遺物実測図1

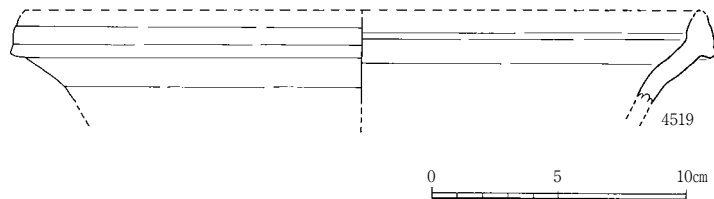


Fig.150 SK-402出土遺物実測図2

2. 調査区の概要 (4) D区

Tab.8 林口遺跡第Ⅱ調査地区-D区土坑計測表

遺構番号	平面形	規模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (m)			
SK-401	楕円形	1.42	0.87	0.21	N-47°-E	中世	
SK-402	不整形	4.80	1.62	0.12	N-15°-E	◇	

圧痕が残る。色調は、内面がにぶい黄
 橙色，外面が明赤褐色を呈する。4522
 は底径10.3cmを測る。体部は外上方に
 のびる。調整は外面がナデ調整，内面
 は著しく磨滅するため不明である。色
 調は、内面が橙色，外面が灰黄褐色な
 いしにぶい黄橙色を呈する。

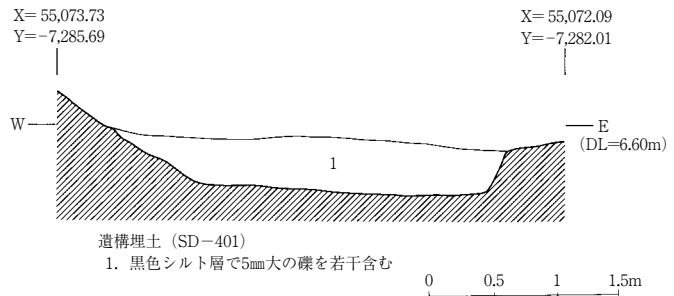


Fig.151 SD-401

4523~4530は甕である。4523~4526

は如意形口縁で口縁端部には刻目を施す。4523は口径21.6cmを測る。体部はほぼ真直ぐ上方にのび、口縁部は短く外傾する。口縁端部には僅かに刻目が残る。器面は著しく磨滅するが、部分的にナデ調整の痕跡が残る。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4524は胴部はほぼ真直ぐ上方にのび、口縁部は短く外傾する。調整は口縁部がヨコナデ調整，体部外面はタテ方向のハケ調整，体部内面はナデ調整である。外面には煤が付着する。色調は、内面が橙色，外面がにぶい褐色を呈する。4525は胴部が内傾して立ち上がり，口縁部が僅かに外反する。頸部外面下には3条のヘラ描沈線が施される。口縁部にはヨコナデ調整，体部外面にはタテ方向のハケ調整を施す。内面はナデ調整で、

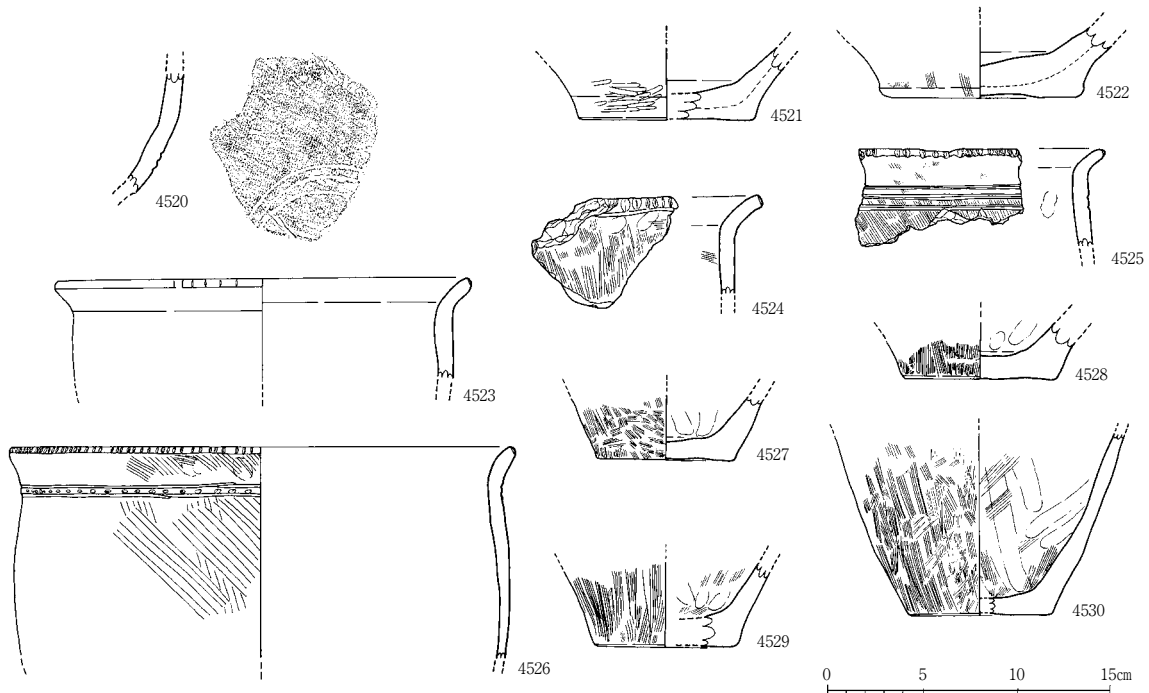


Fig.152 SD-401出土遺物実測図1

指頭圧痕が残る。色調は、内面が灰褐色、外面が褐色を呈する。4526は口径26.2cmを測り、胴部はやや内湾して上がり、口縁部は頸部から短く外反する。頸部外面にはヘラ描き沈線であまれた刺突文を施す。調整は口縁部がヨコナデ調整、体部がナデ調整で外面に粗い斜め方向のハケ調整を加える。色調は内外面とも橙色を呈する。4527は底径7.2cmを測る。胴部は比較的上方へほぼ真直ぐ立ち上がる。調整は全面ナデ調整、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。4528は底径7.9cmを測る。胴部は底部からほぼ真直ぐ立ち上がる。調整は外底面と内面がナデ調整、体部外面には細いタテ方向のハケ調整を施す。内外面の一部に煤が付着する。色調は、内面が灰黄褐色、外面がにぶい褐色を呈する。4529は底径7.0cmを測る。胴部はほぼ真直ぐのびる。調整は外底面と内面はナデ調整、体部外面にはタテ方向のハケ調整を施す。内面には指頭圧痕が残る。色調は、内面がにぶい褐色、外面がにぶい橙色を呈する。4530は底径7.0cmを測る。胴部はほぼ平らな底部からほぼ真直ぐのびる。外底面はナデ調整、体部外面は板ナデ調整、内面は強いナデ調整を行う。内面には煤が付着する。色調は、内面が褐灰色ないし黒褐色、外面が灰黄褐色を呈する。

土師器 (Fig.153-4531~4534)

すべて高台を有する杯で、体部は平らな底部から屈曲して外上方にほぼ真直ぐのびる。4531は底径8.3cmを測る。高台は断面逆台形状を呈し直立する。器面はナデ調整で、ヘラ磨きを行う。底部の切り離しはヘラ切りで、その後一部ナデ調整を加える。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面は

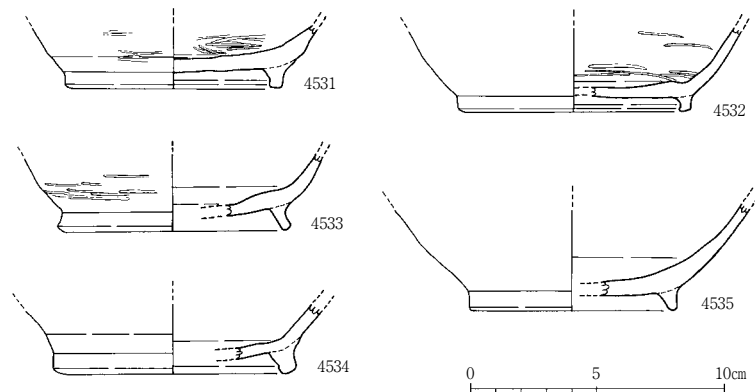


Fig.153 SD-401出土遺物実測図2

灰黄褐色を呈する。4532は底径8.8cmを測り、高台は真下を向き、高さ6mmを測る。底部の切り離しはヘラ切りで一部ナデ調整を加える。器面はナデ調整で、内面には僅かにヘラ磨きが残る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4533は底径8.7cmを測る。高台はハの字状に開き、高さ1.2cmを測る。調整はナデ調整で、外面は高台内までヘラ磨きを加える。器面は磨滅する。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4534は底径8.7cmを測る。高台は断面逆台形状を呈し、ハの字状に開く。調整はナデ調整である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

黒色土器 (Fig.153-4535)

4535は両黒の椀で、底径7.9cmを測る。高台は断面逆台形で、ハの字状に開く。底部はほぼ平らで、体部は底部から内湾して上がる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。胎土には微砂を多く含む。色調は、内面がオリーブ黒色、外面がにぶい赤褐色ないし黒色を呈する。

瓦器 (Fig.154-4536)

4536は小皿で、口径8.4cm、底径2.2cm、器高1.6cmを測る。口縁部は内湾気味に斜め外方へ短く上がり、端部を細く仕上げる。調整はナデ調整、底部には指頭圧痕が残る。色調は内外面とも暗灰色

2. 調査区の概要 (4)D区

を呈する。

土師質土器 (Fig.154-4537~4551)

4537~4542は杯である。4537は口径12.1cm, 底径8.5cm, 器高2.7cmを測る。器高が低く, 口縁部は短く上外方へほぼ真直ぐのびる。器面は著しく磨滅するため, 調整は不明である。色調は, 内面が橙色, 外面がにぶい黄橙色を呈する。4538は底径7.4cmを測る。底部の器壁はやや厚い。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4539~4542は底径が小さく, 器高が高い。体部は比較的上方にほぼ真直ぐのびる。4539は底径6.4cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 一部ナデ調整を加える。色調は内外面ともににぶい橙色ないし灰黄褐色を呈する。4540は底径6.6cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で器面には回転ナデ調整を施し, 内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土には微砂を多く含む。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい灰黄色を呈する。4541は口径11.4cm, 底径6.8cm, 器高4.2cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 底部は丸味がある。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。4542は口径11.0cm, 底径7.3cm, 器高4.5cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 一部ナデ調整を加える。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい橙色を呈する。

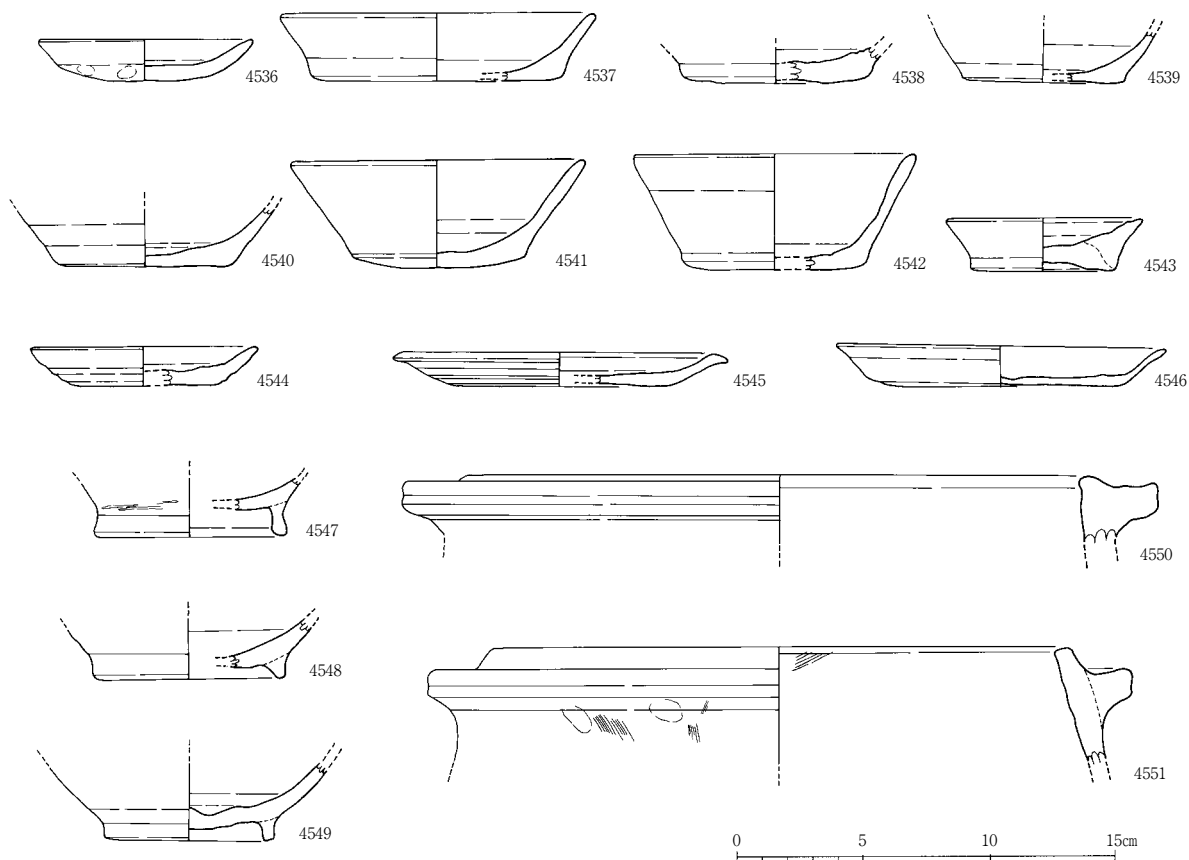


Fig.154 SD-401出土遺物実測図 3

4543・4544は小皿である。4543は口径7.7cm, 底径5.4cm, 器高2.1cmを測る。器壁が厚く, 口縁部は底部から斜め外方に短く上がり, 端部を細く仕上げる。器面は回転ナデ調整で内底面にはナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4544は口径9.0cm, 底径5.6cm, 器高1.5cmを測る。口縁部は斜め外方に内湾気味に短くのび, 端部を細く仕上げる。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられ, 一部ナデ調整を加える。色調は内外面とも黄灰色を呈する。

4545・4546は皿である。4545は口径12.3cm, 底径8.3cm, 器高1.3cmを測る。口縁部はやや内湾し, 端部を下方へ摘み出す。胎土には細砂を多く含む。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。4546はほぼ完形で, 口径13.0cm, 底径8.7cm, 器高1.7cmを測る。器壁は非常に薄く, 口縁部はやや外反する。底部の切り離しは静止ヘラ切りとみられる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。色調は, 内面がにぶい橙色, 外面がにぶい褐色を呈する。

4547~4549は椀で, すべて輪高台を有するものである。4547は底径7.3cmを測る。高台は細く, 直立する。底部は平らで, 器壁が薄い。外面はナデ調整で, 体部には僅かにヘラ磨きが残る。内面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。4548は底径7.1cmを測る。高台はハの字状に開き, 高さ1.0cmを測る。体部は底部から内湾気味に立ち上がる。調整は高台内がナデ調整, 体部外面は回転ナデ調整で一部ナデ調整を加える。内面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は, 内面が灰黄色ないし灰色, 外面がにぶい黄橙色を呈する。4549は底径6.7cmを測る。高台は断面方形で直立し高さ1.0cmを測る。体部は粘土紐の接合痕跡の残る底部から内湾して立ち上がる。器面は回転ナデ調整で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで一部ナデ調整を加える。胎土は若干礫を含むものの比較的精良である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

4550・4551は釜である。4550は口縁端部直下に断面方形の罫が水平に付く。調整はヨコナデ調整で, 罫下部には煤が付着する。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい黄橙色ないし黒色を呈する。4551は口径22.7cmを測る。口縁部は内傾し, 端部は外傾する平面をなす。罫は断面方形で, やや上方に向く。調整は外面がヨコナデ調整で, 罫下部には指頭圧痕とハケ目が僅かに残る。内面は著しく磨滅するが, 僅かにハケ目が残る。外面は煤が付着する。色調は内外面とも褐灰色を呈する。

SD-402

調査区の北東部で検出した溝跡で, 北側は調査区外へ続く。削平を受けており, 非常に浅く, 検出長12.45m, 幅2.15m, 深さ5cmを測る。主軸方向はN-60°-Eを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は褐灰色礫質砂で1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器3点(4552~4554)がみられた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.155-4552~4554)

4552・4553は杯である。4552は底径6.4cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がる。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は, 内面がにぶい黄橙色, 外面がにぶい橙色を呈する。4553は底径6.8cmを測る。体部はやや内湾して外

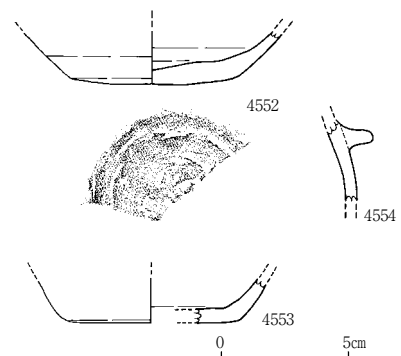


Fig.155 SD-402出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (4)D区

上方へのびる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。

4554は釜である。胴部は内湾し、外面には水平にのびる幅1.2cmの鐙が付く。調整は外面がヨコナデ調整、内面がナデ調整である。外面には煤が付着する。色調は、内面が浅黄橙色、外面が浅黄橙色ないし褐灰色を呈する。

d.ピット

P-401

調査区北部の斜面肩部で検出したピットである。平面形は方形で、長辺0.58m、短辺0.51m、深さ19cmを測る。埋土は黒色礫質砂で5mm大の褐色の礫を含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器1点(4555)があった。

出土遺物

土師質土器 (Fig.156-4555)

4555は杯で、底径7.3cmを測る。体部は内湾し、やや上方に立ち上がる。調整は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面がにぶい橙色、外面が橙色を呈する。

P-402

調査区中央部で検出した楕円形のピットで、長径0.38m、短径0.30m、深さ9cmを測る。SD-401を掘り込んでいた。埋土は灰褐色粘土質シルトで礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した流れ込みとみられる弥生土器1点(4556)があった。

出土遺物

弥生土器 (Fig.156-4556)

4556は如意形口縁の甕で、口径25.4cmを測る。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は頸部から屈曲して短く外傾する。口縁端部には刻目を施す。器面にはハケ調整を施し、口縁部にはヨコナデ調整、内面には強いナデ調整を加える。色調は、内面がにぶい橙色、外面がにぶい褐色ないし褐灰色を呈する。

P-403

調査区南部で検出した楕円形のピットで、長径0.34m、短径0.26m、深さ5cmを測る。埋土は灰褐色礫質砂で1cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点がみられ、土師質土器1点(4557)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.156-4557)

4557は小皿で、口径8.0cm、底径4.6cm、器高1.6cmを測る。口縁部は底部から内湾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りであり、口縁端部には重ね焼の痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。

P-404

調査区中央部で検出した円形のピットで、径0.42m、深さ0.26mを測る。埋土は灰色粘土質シルトで礫を多く含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片23点、青磁片1点があり、土師質土器1点(4558)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.156-4558)

4558は杯で、底径7.1cmを測る。体部の器壁は非常に薄く、やや内湾する。器面は摩耗するが、外底面には回転ヘラ切りの痕が残る。色調は内外面ともに黄橙色を呈する。

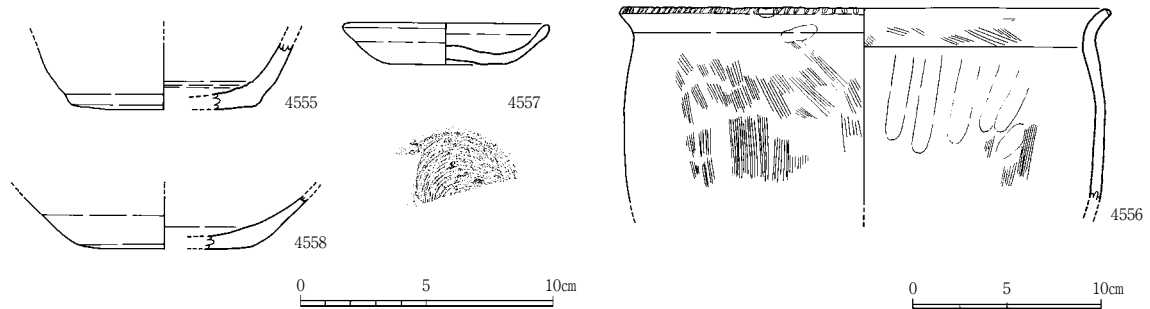


Fig.156 P-401~404出土遺物実測図

e.土橋状遺構

SX-401 (Fig.157)

調査区西部の斜面中央裾部で検出した土橋状の遺構で、斜面上部との比高差は1.23mを測る。SD-401を掘削する際意識的に掘り残した部分とみられ、全長2.75m、幅1.42~1.68mを測る。上面のSD-401の基底面との高低差は約0.55mあり、SD-401の中でもSX-401の隣接部分は特に深く掘削されていた。

また、西側に続く斜面部には、全長1.88m、幅1.80~2.10m、深さ10~20cmの範囲に地山である黄褐色礫層を断面舟底状に掘削し、掘削された部分には客土を版築状に固めており、上から暗灰黄色砂質礫のブロックと1cm大の礫を多く含む黄褐色砂質礫、1cm大の礫を僅かに含む黄褐色砂質礫、砂質土に小礫を混ぜたとみられる黄褐色砂質礫の堆積が認められた。さらにその両脇を全長2.34m、幅20~49cm、深さ16~45cmの規模で溝状に掘り込み、部分的にピット状に深くなる箇所が認められた。溝の埋土は明黄褐色の1cm大の礫を含む黒色シルト質粘土であった。土橋の延長上にあることから、斜面部に設けられた階段状の施設ではないかとみられる。前述の柵列と同時期に機能していたものとみられる。

なお、これらの遺構から遺物は出土しなかった。

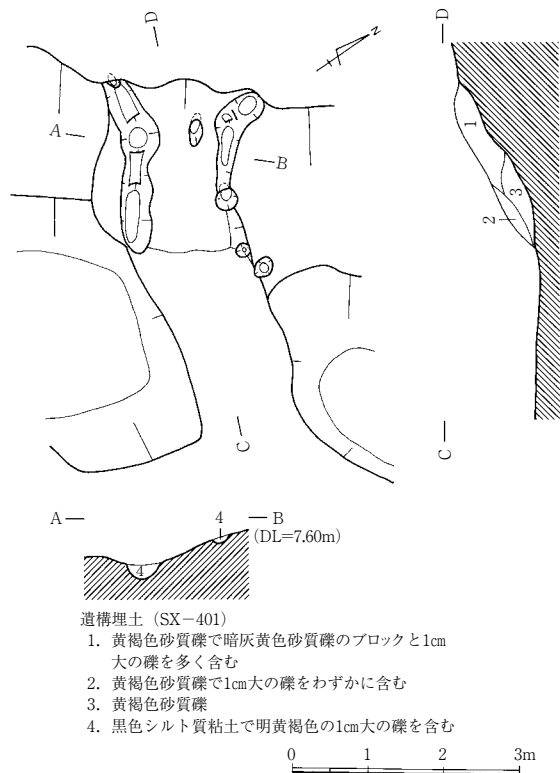


Fig.157 SX-401

2. 調査区の概要 (4)D区

註

- (1)『林口遺跡』－土佐市々道改良工事に伴う発掘調査報告書－土佐市教育委員会 1998.1

第Ⅲ章 蓮池城跡北面遺跡

1. 調査の概要

蓮池城跡北面遺跡は以前から周知されていた遺跡⁴⁾で、平成5・6年度に実施された高知県遺跡詳細分布調査の際にその範囲が明記された。丁度、南には蓮池城跡が所在する。

今回の工事予定区域は遺跡外であるが、東に隣接するため事前の確認調査を平成10・11年度に行った。その結果、遺跡の東でも遺構が確認され、遺跡の範囲が拡大することとなった。

(1) 調査の経過

今回の工事は国道56号線から土佐市バイパスへのアクセス道路建設に伴うもので、調査区域が国道56号線の北と南に分れた。調査区は調査順に北側にA区、南側にB・C区を設定した。

A区は土佐市バイパスの西端部分に当たり、平成10年度の確認調査で遺構が確認された箇所である。調査は平成11年4月21日から6月8日までの実働23日で、調査面積は762㎡であった。

B・C区は国道56号線の南側に当たり、南には土佐市消防署と市場があり、国道からの進入路によって分かれ、東側をB区、西側をC区とした。B区の調査は平成11年10月7日から10月13日までの実働4日で、調査面積は42㎡（延べ面積は64㎡）であった。C区の調査は平成11年10月4日から10月7日と10月14日から10月18日までの実働7日で、265㎡であった。

(2) 調査日誌抄

- A区1999年4月21日～6月8日
- | | | | |
|------|--|------|---------------------------------|
| 4.21 | トラバースポイントを設置する。 | 5.18 | 雨のため現場作業は中止する。午後より晴れたため平板測量を行う。 |
| 4.26 | トラバース測量を行う。 | 5.19 | 水汲みをする。午後は雨のため現場作業を中止する。 |
| 5.6 | 調査区南西部より機械掘削と併行して遺構検出を始める。 | 5.20 | 遺構の調査を終了する。 |
| 5.7 | 調査区西部の機械掘削と併行して遺構検出を行う。 | 5.21 | 遺構完掘状態の写真撮影並びに航空測量を行う。 |
| 5.10 | 調査区中央部の機械掘削と併行して遺構検出を行う。溝跡、ピット等を確認する。 | 5.24 | 雨のため現場作業は中止する。 |
| 5.11 | 引き続き調査区中央部の機械掘削と併行して遺構検出を行う。 | 5.25 | 水汲みを行い、平面測量を始める。 |
| 5.12 | 機械掘削を終了し、遺構検出を行う。ローリングタワーを設置する。 | 5.26 | 平面測量、レベル測量を終了する。 |
| 5.13 | 遺構検出と杭打ちを終了し、遺構検出状態の写真撮影を行う。遺構配置図の作成を始める。 | | |
| 5.14 | 遺構配置図の作成を終了し、埋土の確認を行う。ベルトコンベヤを設置し、遺構の調査を始める。 | | |
| 5.17 | 引き続き遺構の調査を行う。 | | |



Fig.158 発掘調査風景

2. 調査区の概要 (1)A区

5.27 雨のため現場作業は中止する。

5.28 調査区西部の攪乱を受けている部分を掘削する。

5.31 引き続き攪乱を受けている部分を掘削する。

6.1 引き続き攪乱を受けている部分を掘削する。

土層断面図の作成を始める。

6.2 引き続き攪乱を受けている部分を掘削する。

土層断面図の作成を終了する。午後より雨のため現

B区1999年10月7日～10月13日

10.7 調査を開始する。

10.8 検出作業を行う。その後検出状態の写真を撮影する。

10.12 遺構の調査を行う。完掘状態の写真を撮影し、平面測量とレベル実測を行う。その後下層の遺物包

C区1999年10月4日～10月7日, 10月14日～10月18日

10.4 調査を開始する。

10.5 遺構検出作業を行う。西壁, 北壁の土層断面図を実測する。

10.6 遺構検出作業が終了し, 検出状態の写真を撮影後, 遺構の調査に移る。

10.7 遺構の調査を完了し, 完掘状態の写真撮影を行う。その後平面測量とレベル実測を行う。

場作業は中止する。

6.3 攪乱の下より遺構を検出し, 遺構の調査を始める。

6.4 遺構の調査を行う。

6.7 雨のため現場作業は中止する。

6.8 遺構の調査を終了し, 遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面測量, レベル測量を終了し, すべて完了する。

含層の調査に移る。

10.13 下層の遺構検出を行い, 検出状態の写真を撮影後, 遺構の調査を行う。土層断面図の作成, 平面測量とレベル実測を行い, 調査を終了する。

10.14 東側を拡張し, 検出作業を行う。検出状態の写真を撮影し, 遺構の調査に移る。北壁の土層断面図を実測する。

10.15 遺構の調査を行う。

10.18 遺構の調査を完了し, 完掘状態の写真撮影, 平面測量, レベル実測を行い, 調査を終了する。

2. 調査区の概要

(1) A区

本調査区は蓮池城跡の北東部に位置し, 国道56号線の北側に当たる。調査前は宅地であったため調査区の全域で客土が認められ, 特に調査区の西側では著しく攪乱を受けており, 遺構も削平されていた。また, 地形は国道56号線のある南西部が高く, 調査区の北側に向かって緩やかに傾斜していた。遺物包含層は一部攪乱を受けているものの調査区のほぼ全域で認められ, 10～14世紀の遺物を包含しており, 蓮池城が機能していた時期より遡るとみられる。

① 層序

第I層 灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト層

第II層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト層

第III層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト層

第III'層 褐灰色(10YR6/1)シルト層

第IV層 灰黄色(2.5YR6/2)粘土質シルト層

第V層 浅黄色(2.5YR7/4)シルト層

調査区全域で20～90cmの客土が認められた。遺物包含層は第III層と第III'層で, 層位中遺構が検

出されたのは第Ⅲ層上面と第Ⅳ・Ⅴ層上面であった。

第Ⅰ層は調査区の西半でみられた土層で、厚さ10~20cmを測る。客土直下のため削平を受けたものとみられる。1cm大の橙色の礫と黄色粘土質シルトのブロックを含んでいた。

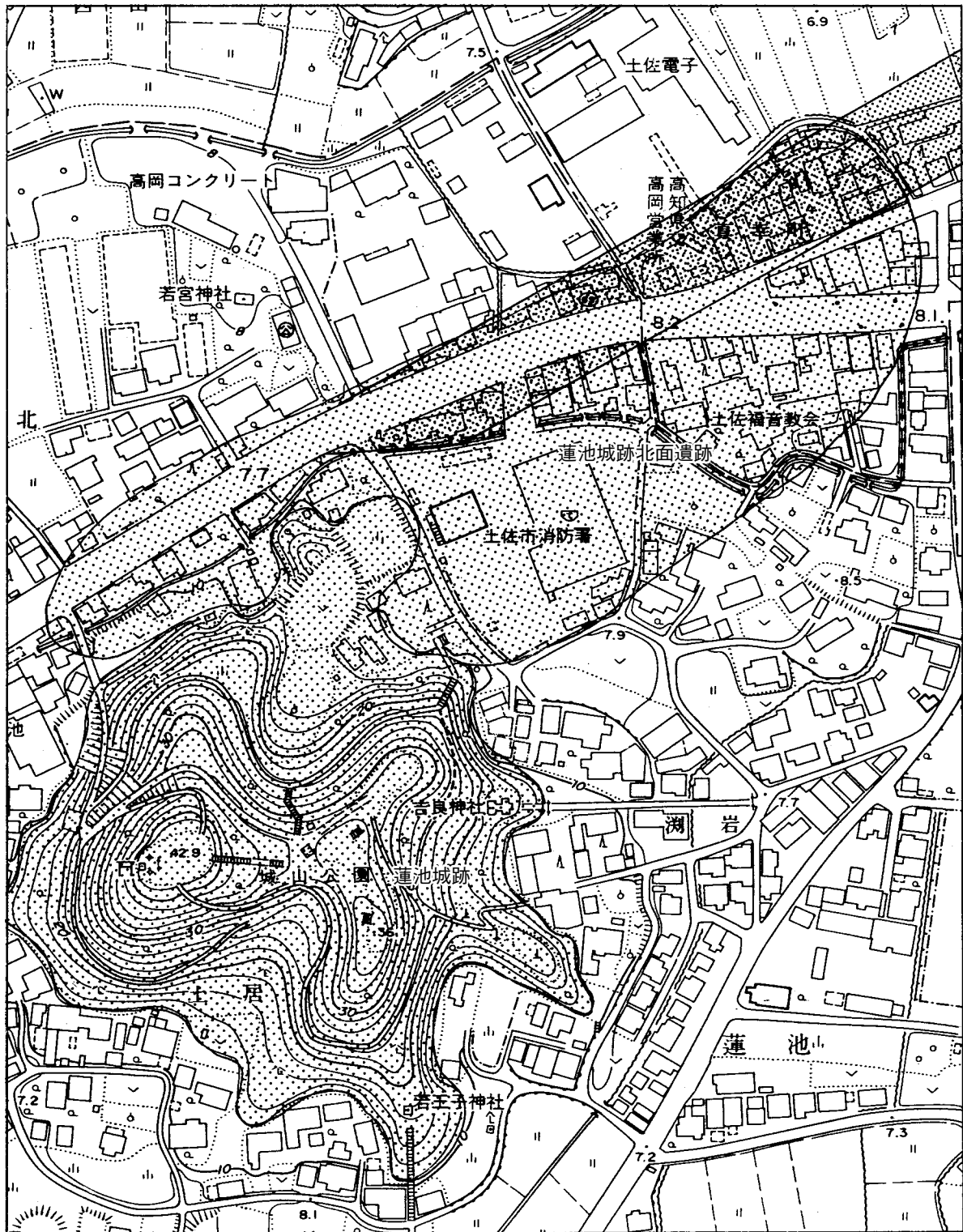


Fig.159 蓮池城跡北面遺跡の範囲と調査対象区域図 (S=1/2,500)

2. 調査区の概要 (1)A区

第Ⅱ層は調査区全域でみられた土層で、厚さ10～25cmを測る。客土直下の部分は粘土化し、5mm大の橙色の礫を多く含んでいた。

第Ⅲ層は中世の遺物包含層で調査区全域でみられた。厚さは15～25cmを測る。炭化物と2mm大のマンガンを多く含んでいた。出土遺物には瓦器、東播系須恵器、土師質土器、瓦質土器、青磁がみられるが、図示できるものはなかった。

第Ⅲ'層は調査区の北西部でのみ確認された土層で、厚さ約8cmを測る。第Ⅲ層が十分に土壌化されていない部分で、第Ⅲ層との境は不明瞭である。第Ⅲ層と同時期の遺物を含むが、第Ⅲ'層の上面と第Ⅳ層上面で遺構が検出されたため第Ⅲ層とは区分した。

第Ⅳ層は自然堆積層で、調査区の北西部以外でみられた。厚さは確認した部分で15～40cmを測る。3～5mm大のマンガンを含んでいた。



Fig.160 蓮池城跡北面遺跡の調査区設定図 (S=1/2,000) (公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す。)

第Ⅴ層は自然堆積層で、地形が高くなっている部分でのみ確認した。厚さは確認した部分で10～38cmを測る。3～5mm大のマンガンを含んでいた。

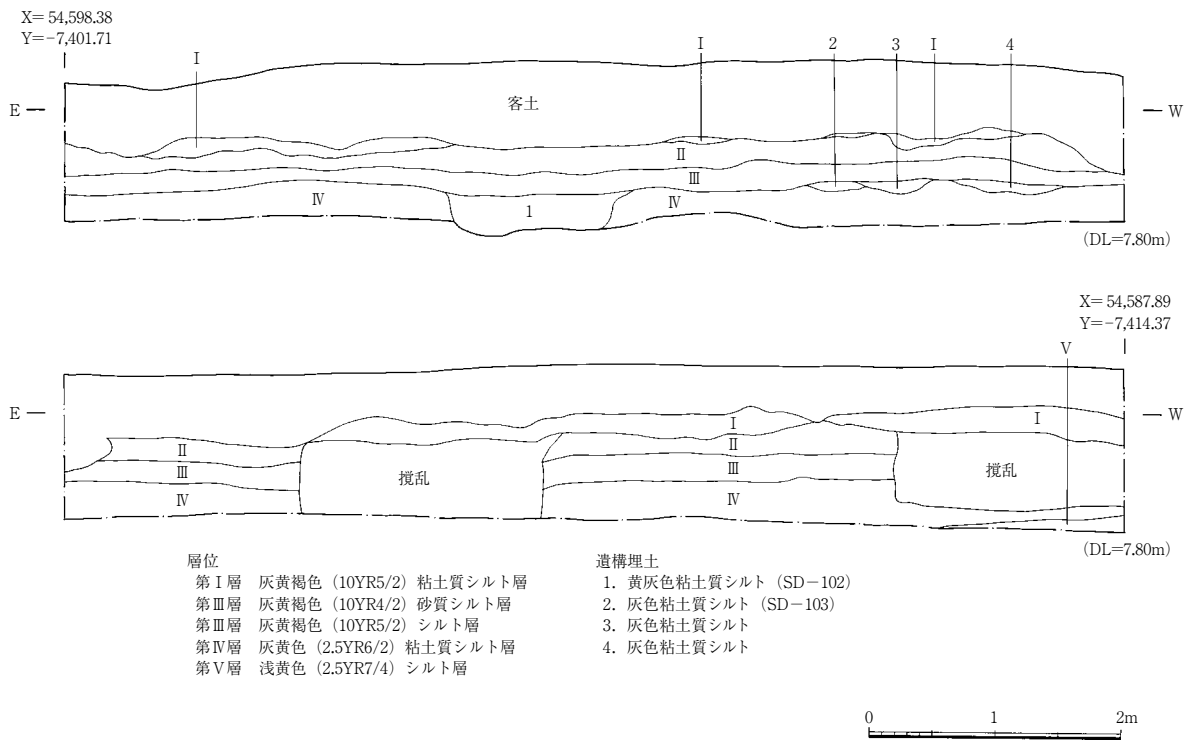


Fig.161 A区セクション図

② 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

青磁 (Fig.162-101)

101は龍泉窯系碗の底部で底径4.9cmを測る。底部は太く直立する削り出し高台となる。体部は内湾する。調整は回転ナデ調整で、見込にはロクロ目が顕著に残る。また、見込と体部の境には幅2mmの沈線が巡る。釉は黄味を帯びた緑色釉を高台の側面まで薄く施す。

近世陶器 (Fig.162-102)

102は碗の底部で底径5.6cmを測る。底部は器壁が非常に厚く、断面逆台形で低く直立する削り出し高台となる。見込には胎土目が2カ所残る。器面には黄味を帯びた緑色釉を一部高台内まで薄く施釉する。釉には透明感がなく、胎土には若干巣が入る。

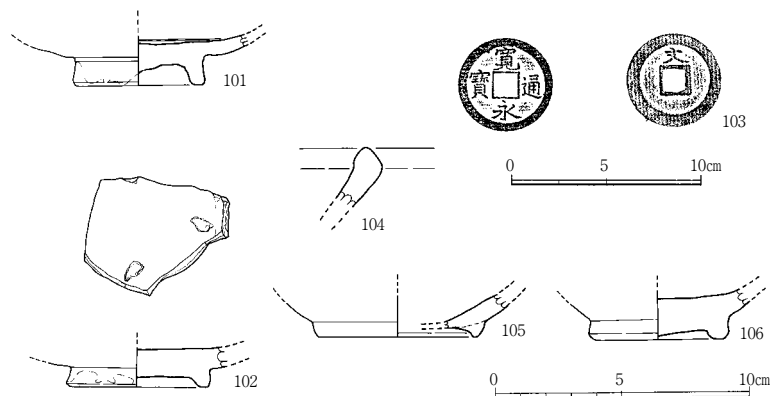


Fig.162 A区第Ⅰ・Ⅲ層出土遺物実測図(青磁・近世陶器・古銭ほか)

2. 調査区の概要 (1)A区

古銭 (Fig.162-103)

103は寛永通宝で、外径2.51cm, 穿径0.60cm, 重量4.0gを測る。背面には「文」字がみられる文銭で、
 鑄造期間は1668~1683年である。

第III'層出土遺物

東播系須恵器

(Fig.162-104)

104は片口鉢である。口縁部は直線的で、
 端部は上方に肥厚する。調整は回転ナデ調整で、口縁には重ね焼
 の痕がみられる。色調は内外面とも灰色を呈
 する。

土師質土器

(Fig.162-105)

105は椀で、底径6.2
 cmを測る。底部には断
 面三角形の高台が付く。
 体部は底部から内
 湾する。器面は著しく
 磨滅するため調整は
 不明瞭である。色調は
 内外面とも淡黄色を
 呈する。

青磁 (Fig.162-106)

106は龍泉窯系碗で、
 底径5.0cmを測る。底部
 は非常に器壁が厚く、
 低く太い削り出し高台
 が付く。器面にはオリ
 ーブ色の釉を高台の側
 面まで薄く施す。胎土
 には若干巣が入る。

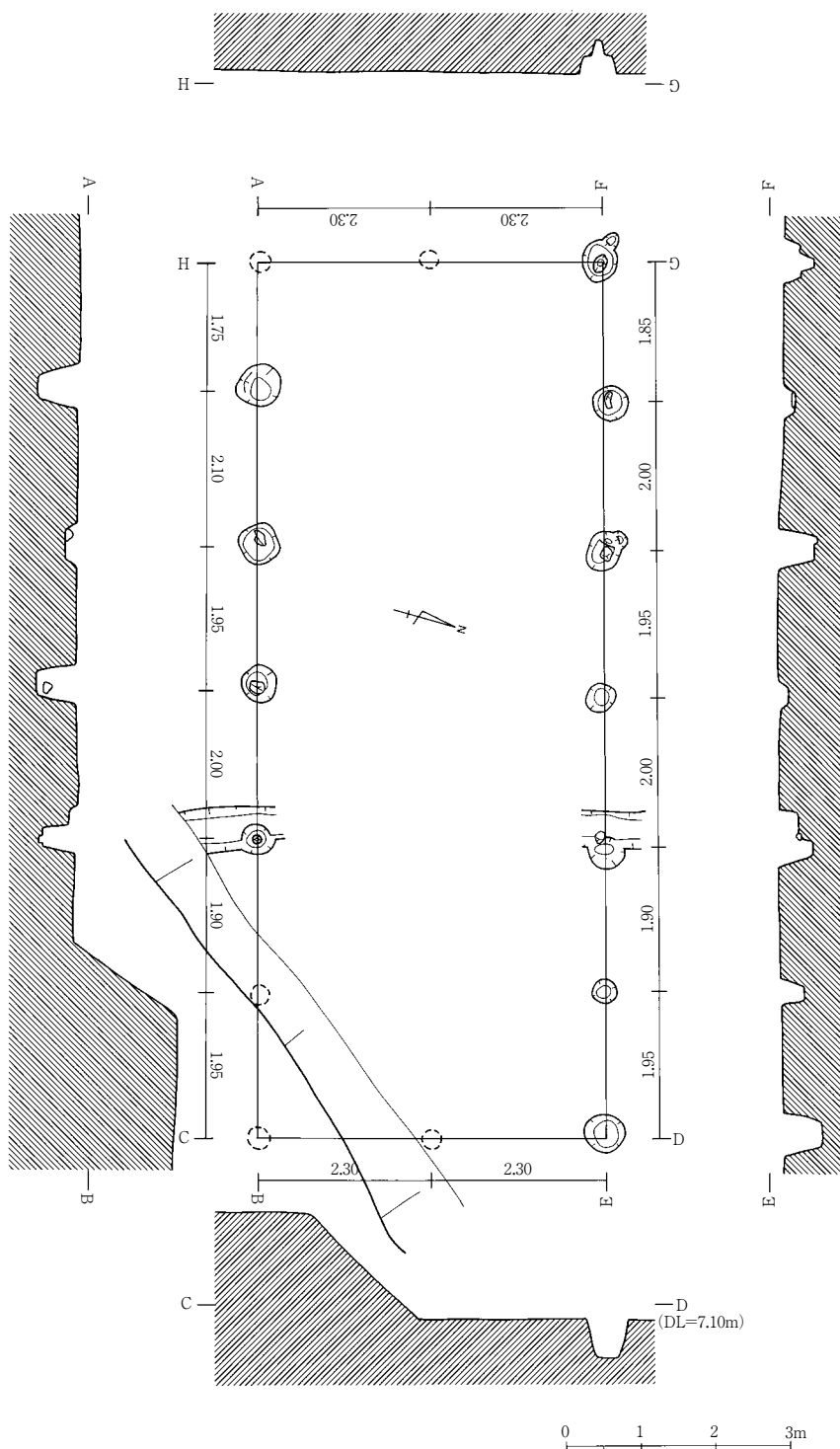


Fig.163 SB-101

③ 遺構と遺物

i 中世

a. 掘立柱建物跡

SB-101 (Fig.163)

調査区の南東部で検出した掘立柱建物跡で、南東部は調査区外へ続く。梁間2間(4.60m)、桁行6間(11.65m)の東西棟建物である。西妻柱の南と真中の柱穴は確認できなかった。棟方向はN-75°-Eを示す。柱間寸法は梁(南北)が2.30m、桁(東西)が1.75~2.10mを測る。柱穴は径32~50cmの円形または楕円形を呈する。柱穴の埋土は灰色粘土質シルトで炭化物と礫を含む。北側柱の西から2~4つ目の柱穴、南側柱の西から3つ目と4つ目の柱穴には礎板がみられた。出土遺物には土師質土器片70点、青磁片1点、土錘1点、鉄釘1点がみられるが、復元図示できるものはなかった。

Tab.9 蓮池城跡北面遺跡-A区掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規模				面積 (m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
	梁間×桁行	梁間(m)×桁行(m)	柱間寸法				
			梁(m)	桁(m)			
SB-101	(2×6)	(4.60) × (11.65)	2.3	1.75~2.10	53.59	N-75°-E	

b. 土坑

SK-101

調査区中央部で検出した不整楕円形の土坑で、一部攪乱を受ける。長径1.99m、短径0.82m、深さ9cmを測る。長軸方向はN-74°-Eを示す。断面は舟底状で、埋土は礫を含む灰色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器が15点みられ、土師質土器1点(107)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.165-107)

107は皿で、口径11.0cmを測る。器壁が薄く、口縁は斜め上方にほぼ真直ぐのび、端部を細く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。

Tab.10 蓮池城跡北面遺跡-A区土坑計測表

遺構番号	平面形	規模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK-101	不整楕円形	1.99	0.82	0.09	N-74°-E	中世	

c. 溝跡

SD-101 (Fig.164)

調査区の東部で検出した南北溝で、両端は調査区外へ続く。検出長10.80m、幅0.33~0.52m、深さ11~58cmを測る。主軸方向はN-14°-Wを示し、断面は逆台形を呈する。基底面は南(6.864m)か

2. 調査区の概要 (1)A区

ら北(6.561m)に傾斜する。埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-102 (Fig.164)

調査区の中央部で検出した南北溝で、両端は調査区外へ続く。検出長15.76m、幅0.77~1.16m、深さ0.27~0.74mを測る。主軸方向はN-16°-Wを示し、断面は舟底状ないし逆台形を呈する。基底面は標高6.600m前後でほぼ平らである。埋土は北部で黄灰色粘土質シルトとマンガンを多く含む明黄褐色シルトの2層に分層される。出土遺物には瓦器片6点、東播系須恵器1点、土師質土器片100点、備前焼1点、瓦質土器1点、鉄製の刀子1点、鉄滓1点がみられ、土師質土器2点(108・109)、備前焼1点(110)、瓦質土器1点(111)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.165-108・109)

108は杯で、底径7.8cmを測る。体部は斜め上方にほぼ真直ぐのびる。体部と内面は回転ナデ調整である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

109は甕である。頸部はくの字状に屈曲し、口縁は外傾し、端部を内側に折り曲げる。口縁部はヨコナデ調整、体部内面には板ナデ調整を施す。外面には煤が付着する。色調は内面が浅黄色、外面が灰黄褐色を呈する。

備前焼 (Fig.165-110)

110は播鉢で、口径32.8cmを測る。体部は斜め上方にほぼ真直ぐのび、口縁部は上方を向く。口縁部外面には浅い凹線が2条めぐり、重ね焼の痕が残る。調整は回転ナデ調整で、内面には10条の摺目がみられる。

瓦質土器 (Fig.165-111)

111は鍋の口縁部片で、口縁部はくの字状に屈曲し、短く外傾する。調整はナデ調整で頸部には指頭圧痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈する。

SD-103 (Fig.164)

調査区中央部で検出した南北溝で、南端は調査区外へ続き、SD-104に切られる。検出長15.08m、幅0.20~0.51m、深さ2~20cmを測る。主軸方向はN-14°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、基底面は6.950m前後でほぼ平らである。埋土は灰色粘土質シルトで礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片15点がみられ、土師質土器1点(112)が図示できた。

出土遺物

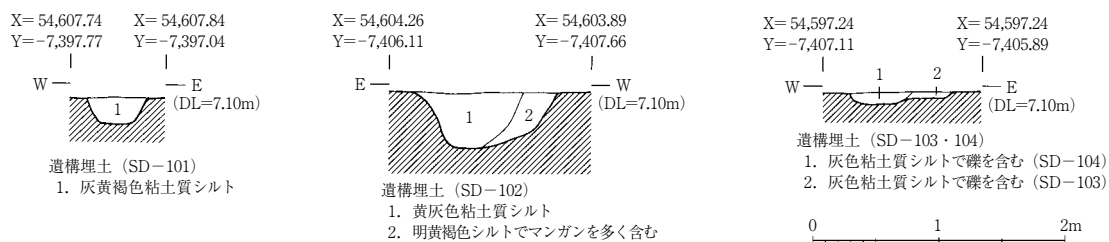


Fig.164 SD-101~104

土師質土器 (Fig.165-112)

112はほぼ完形の杯で、口径11.8cm、底径6.6cm、器高4.9cmを測る。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁は外傾する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。調整は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は、内面が灰白色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

SD-104 (Fig.164)

調査区の中央部で検出した南北溝で、南端は調査区外へ続き、SD-103を切る。検出長10.60m、幅0.26~0.66m、深さ14~16cmを測る。溝はやや湾曲し、主軸方向はN-12~21°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、基底面は6.900m前後でほぼ平らである。埋土は灰色粘土質シルトで礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片25点、備前焼1点がみられ、土師質土器2点(113・114)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.165-113・114)

113は杯で、底径5.8cmを測る。体部は斜め上方にほぼ真直ぐのびる。器面は著しく磨滅するため調整は不明である。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

114は小皿で、口径7.5cm、底径4.7cm、器高2.2cmを測る。口縁部は内湾し、端部を丸く仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

SD-105

調査区北西部の第V層上面で検出した東西溝で、両端は調査区外へ続く。攪乱直下で検出され、削平を受けているとみられる。検出長6.22m、幅0.33~0.43m、深さ10cmを測る。主軸方向はN-

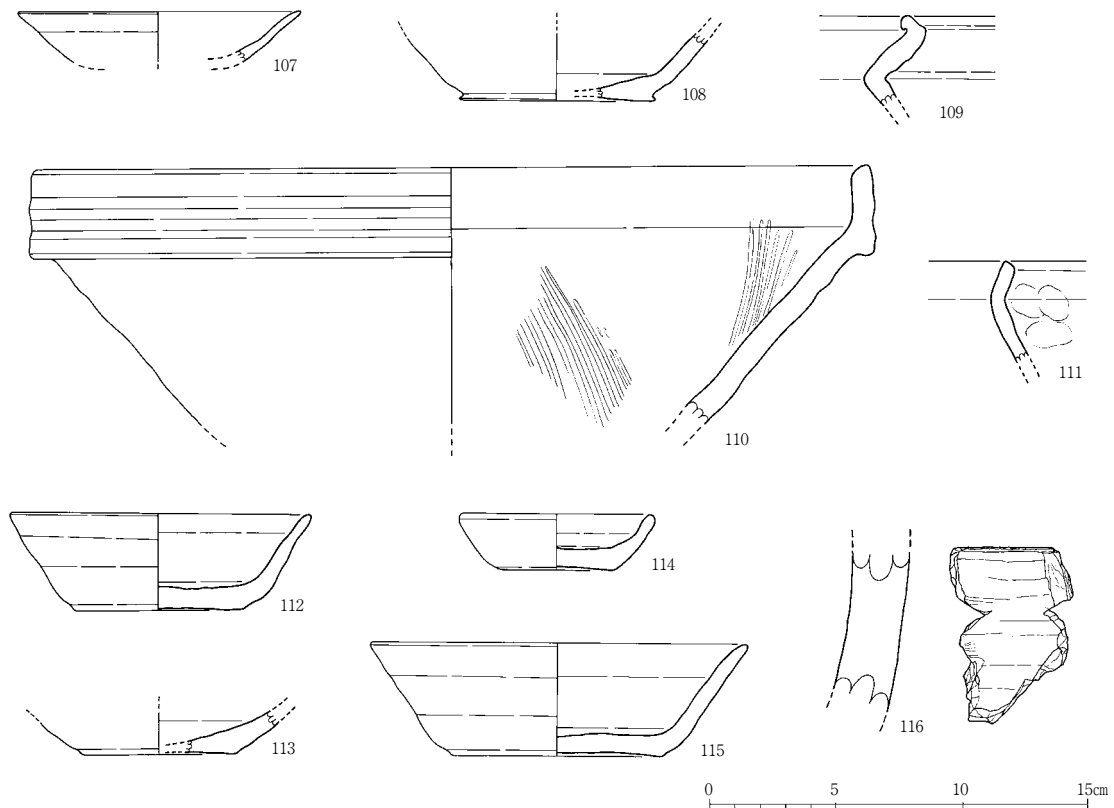


Fig.165 SK-101, SD-102~106出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1)A区

44°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、基底面は東(6.531m)から西(6.473m)に緩やかに傾斜する。埋土は褐灰色粘土質シルトでマンガンを含み一部粘土化していた。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片2点がみられ、土師質土器1点(115)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.165-115)

115は杯で、口径14.8cm、底径8.2cm、器高4.4cmを測る。口縁部は体部から外上方へほぼ真直ぐ上がり、端部を丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも橙色を呈する。

SD-106 (Fig.166)

調査区北西部の第V層上面で検出した東西溝で、両端は調査区外へ続く。攪乱直下で検出され、削平を受けているとみられる。検出長9.32m、幅0.28~0.42m、深さ16cmを測る。主軸方向はN-39~49°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、基底面は6.480m前後で、ほぼ平らである。埋土は褐灰色粘土質シルトで一部粘土化する。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片4点、石製品1点がみられ、石製品1点(116)が図示できた。

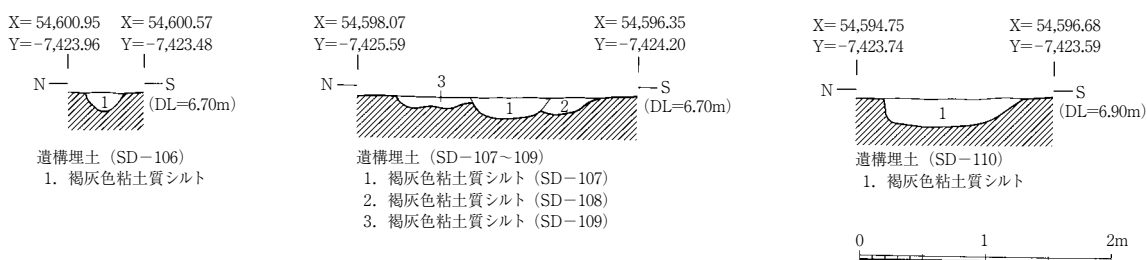


Fig.166 SD-106~110

出土遺物

石製品 (Fig.165-116)

116は滑石製の石鍋で、外面は幅の広いヨコ方向の加工痕が残り、煤が付着するが、側面2ヶ所にV字状の挟りがみられることから石錘として転用されたものと考えられる。

SD-107 (Fig.166)

調査区北西部の第V層上面で検出した東西溝で、西端は調査区外へ続く。攪乱直下で検出され、東端は削平を受けて消滅したともみられる。検出長7.95m、幅0.56~1.00m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-41~52°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、基底面は東(6.449m)から西(6.392m)に傾斜する。埋土は褐灰色粘土質シルトで一部粘土化する。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片14点、青磁片3点がみられ、瓦器1点(117)、青磁1点(118)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.167-117)

117は碗の口縁部と体部の破片で、外面にはヨコナデ調整が一段、体部外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面には幅2mmのヘラ磨きが見られる。

青磁 (Fig.167-118)

118は龍泉窯系の碗で、底径5.2cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は、内湾して立ち上がる。体部外面には回転ヘラ削りが施される。器面には一部高台内までオリブ色の釉を薄く施すが、焼成が不良で釉には透明感がない。

SD-108 (Fig.166)

調査区北西部の第V層上面で検出した東西溝で、西端は調査区外へ続く。攪乱の直下で検出され、東端は削平を受け消滅したものとみられる。北側はSD-107に切られる。検出長7.05m、幅0.43~0.81m、深さ18cmを測る。主軸方向はN-49°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、基底面は東(6.493m)から西(6.383m)に傾斜する。埋土は褐灰色粘土質シルトで一部粘土化していた。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片2点、石製品1点がみられ、石製品1点(119)が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.167-119)

119は石鏃で、全長2.25cm、全幅1.80cm、全厚0.30cm、重さ1.2gを測る。二等辺三角形を呈し、抉りは浅い。石材はサヌカイトである。

SD-109 (Fig.166)

調査区北西部の第V層上面で検出した東西溝で、南側はSD-107に切られる。攪乱の直下で検出されたため削平を受けているものとみられる。検出長6.40m、幅0.49~0.91m、深さ0.21mを測る。主軸方向はN-42°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、基底面は6.500m前後でほぼ平らである。埋土は褐灰色粘土質シルトで一部粘土化していた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片4点がみられるが、図示できるものはなかった。

SD-110 (Fig.166)

調査区北西部の第III層上面で検出した東西溝で、両端は攪乱によって削平を受ける。検出長2.59m、幅0.79~1.35m、深さ14~26cmを測る。主軸方向はN-48°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、基底面は6.600m前後を測る。埋土は褐灰色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、東播系須恵器1点、土師質土器片14点がみられ、東播系須恵器1点(120)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.167-120)

120は片口鉢の口縁部破片で、口縁部は上外方にほぼ真直ぐのび、端部を上方へ拡張する。調整は回転ナデ調整で、体部内面にはナデ調整を加える。色調は内面が灰白色、外面が灰白色ないし灰色を呈する。

e.ピット

P-101

調査区の中央部で検出した円形のピットで、径0.28m、深さ0.37mを測り、SD-104に切られる。埋土は灰色粘土質シルトで礫を含んでいた。出土遺物には

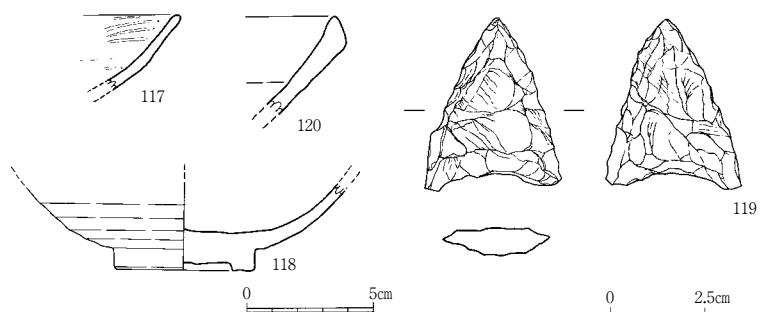


Fig.167 SD-107・108・110出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (2)B区

土師質土器片15点があり、土師質土器1点(121)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.169-121)

121は杯で、口径12.8cm、底径6.0cm、器高3.6cmを測る。体部は底部からやや内湾して立ち上がり、口縁部は斜め上方を向き、端部を細く仕上げる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは磨滅するため不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

f. 畝状遺構

SU-101 (Fig.168)

調査区の南部で畝間の痕跡を3条検出した。一部攪乱を受けるが、検出長15.40m、幅18~41cm、深さ5~18cmを測る。主軸方向は

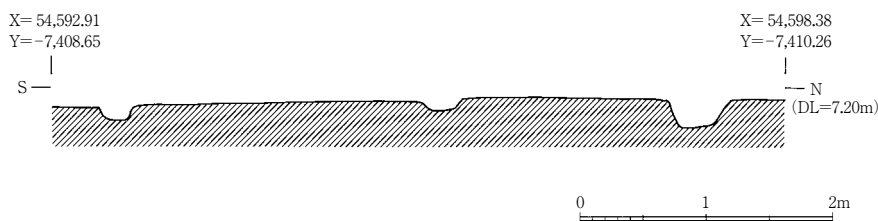


Fig.168 SU-101

N-72~74°-Eを示す。畝間は2.20~2.40m間隔で平行にのび、畝幅は1.80~2.20mを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器20点があり、南の畝間から出土した土師質土器2点(122・123)が図示できた。

Tab.11 蓮池城跡北面遺跡-A区畝状遺構計測表

遺構番号	規模				主軸方向 (NはGN)	時代	備考
	畝数(本)	検出長(m)	畝間幅(cm)	畝間隔(m)			
SU-101	3	15.40	18~41	2.20~2.40	N-72~74°-E	中世	

出土遺物

土師質土器 (Fig.169-122・123)

122は杯で、口径12.0cm、底径7.6cm、器高4.0cmを測る。体部は比較的上方にほぼ真直ぐに立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は回転ナデ調整で底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

123は小皿で、口径8.0cm、底径5.0cm、器高1.9cmを測る。口縁はやや内湾する。器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

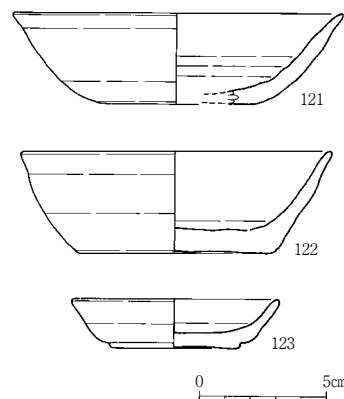


Fig.169 P-101, SU-101
出土遺物実測図

(2) B区

遺跡の南東部に位置し、東側の民家と調査区の南にある市場への進入路に挟まれた狭い調査区である。

① 層序

B区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 客土
- 第Ⅱ層 灰色(5Y4/1)粘土質シルト層
- 第Ⅲ層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト層
- 第Ⅳ層 灰色(5Y4/1)シルト質粘土層
- 第Ⅴ層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土層でマンガンを含む。
- 第Ⅵ層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土層でマンガン、炭化物を含む。
- 第Ⅶ層 黒褐色(10Y3/1)シルト質粘土層で1cm大の礫を多く含む。
- 第Ⅷ層 地山礫層

第Ⅰ層の客土は厚さ0.70~0.80mを測る。現況は宅地であったので、造成の際盛られたものである。

第Ⅱ層は宅地造成の際、削平された旧耕作土と考えられる。

第Ⅲ層は中世の遺物包含層で弥生土器、土師質土器が出土している。第Ⅳ層上面で検出した遺構の埋土となっている。

第Ⅳ層も中世の遺物包含層で、須恵器、弥生土器、土師質土器、青磁が出土している。第Ⅴ層上面で検出した遺構の埋土となっている。

第Ⅴ層から第Ⅶ層は自然堆積層である。第Ⅴ層上面が遺構検出面となっている。第Ⅷ層は地山の礫層で北方向に向って落ち込んでいる。

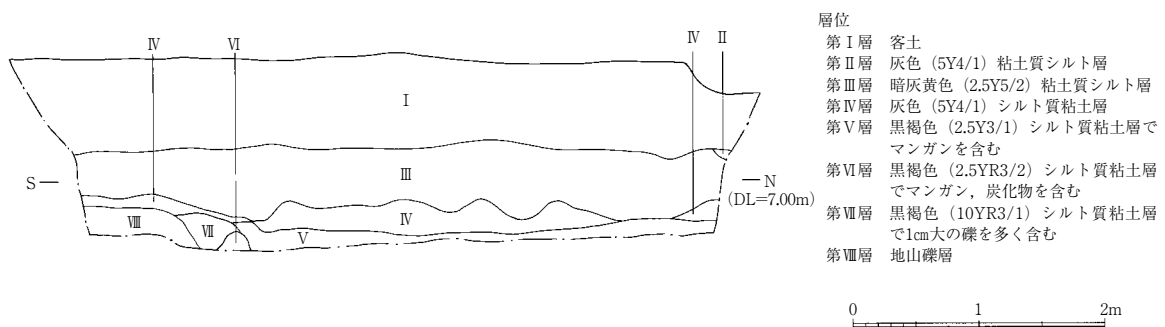


Fig.170 B区西壁セクション図

② 堆積層出土遺物

第Ⅱ層出土遺物

土師質土器 (Fig.171-201~204)

201・202は小杯である。201は口径7.9cm, 器高2.2cm, 底径3.6cmを測る。底部外面はやや窪み, 体部は斜め上方にはほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁端部を細く仕上げる。成形はロクろ水挽成形とみられる。調整は回転ナデ調整で, 底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し, 胎土には砂粒を含むが, 焼成は良好である。202は口径8.7cm, 器高2.6cm, 底径4.0cmを測る。底部外面はやや窪み, 体部は斜め上方にはほぼ真直ぐ立ち上がり, 口縁端部は細く仕上げる。成形はロクろ

2. 調査区の概要 (2)B区

水挽成形とみられる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

203は杯の底部破片で、底径5.6cmを測る。底部外面はやや窪み、体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がる。成形はロクロ水挽成形とみられる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

204は小皿で、口径10.0cm、器高2.3cm、底径5.6cmを測る。底部外面はやや窪み、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げている。成形はロクロ水挽成形とみられる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

第Ⅲ層出土遺物

土師器 (Fig.171-205)

205は皿の底部破片で、底径9.0cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、内外面にはヘラ磨きを施す。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

土師質土器 (Fig.171-206-213)

206は小杯で、口径9.0cm、器高3.1cm、底径4.0cmを測る。底部外面はやや窪み、体部は斜め上方に

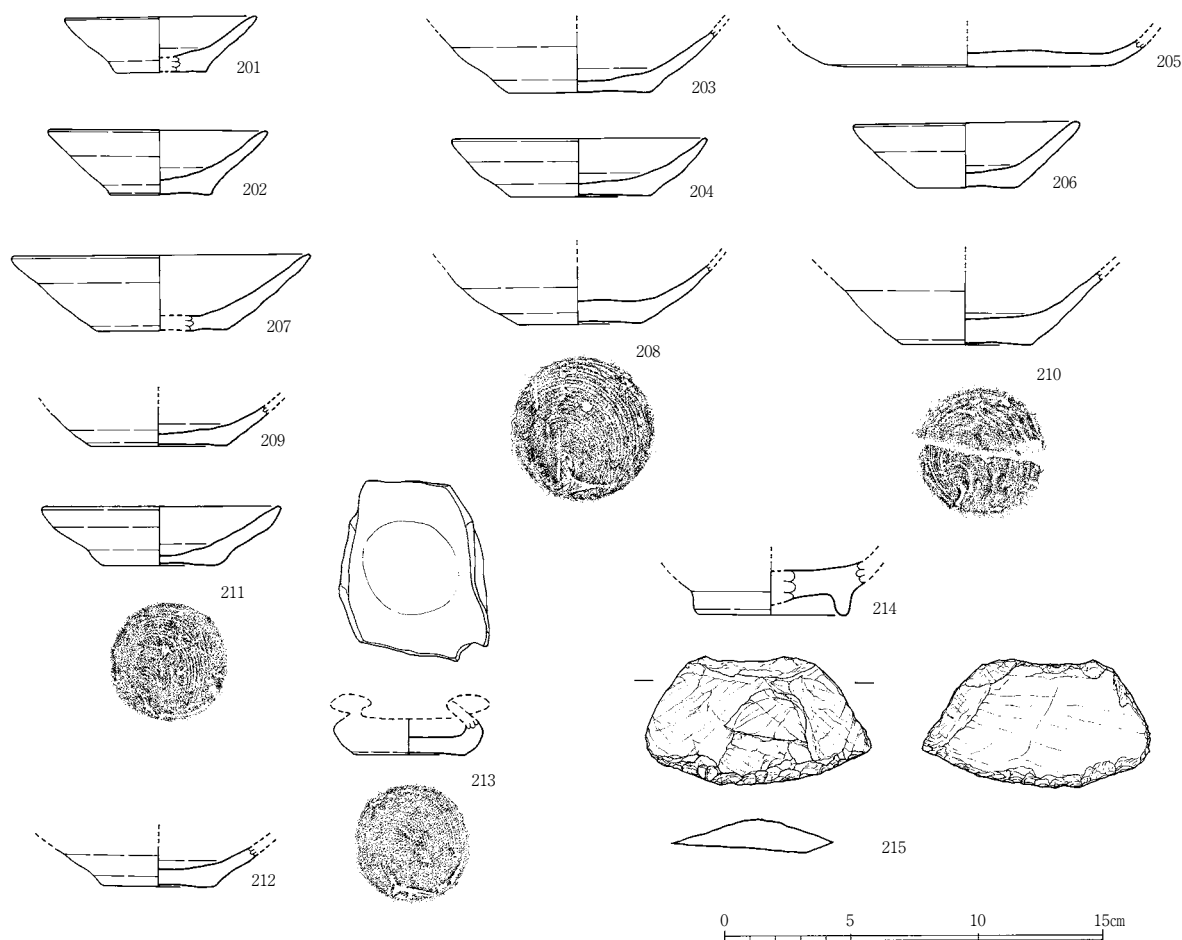


Fig.171 B区第Ⅱ・Ⅲ層出土遺物実測図(土師器・土師質土器・青磁ほか)

ほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。

207～210は杯である。207は口径11.8cm、器高5.0cm、底径5.0cmを測る。底部外面はやや窪み、体部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内面が灰白色、外面が黄灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。208～210は底部の破片である。208は底径4.8cmを測り、体部はやや内湾気味に立ち上がる。成形はロクロ水挽成形とみられ、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。209・210は体部がほぼ真直ぐ立ち上がるものである。209は底径5.4cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられる。底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。210は底径5.2cmを測り、成形はロクロ水挽成形とみられ、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

211・212は小皿である。211は口径9.4cm、器高2.3cm、底径4.6cmを測る。底部外面はやや窪み、口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部は細く仕上げる。成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、底部外面は摩耗が著しく不明である。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。212は底部破片で、底径4.4cmを測る。底部外面はやや窪み、口縁部は斜め上方にほぼ真直ぐ立ち上がる。成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は灰白色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

213は耳皿の底部破片で、底径4.4cmを測る。口縁部両端を大きく内側に折り曲げている。成形はロクロ水挽成形とみられ、調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。

青磁 (Fig.171-214)

214は碗の底部破片で、底径5.8cmを測る。底部外面には断面方形の高台を削り出す。器面には明緑灰色の釉を施し、胎土は精良で、焼成も良好である。

石製品 (Fig.171-215)

215はスクレイパーで、石材はサヌカイトである。全長4.9cm、全幅8.9cm、全厚1.3cm、重量50.1

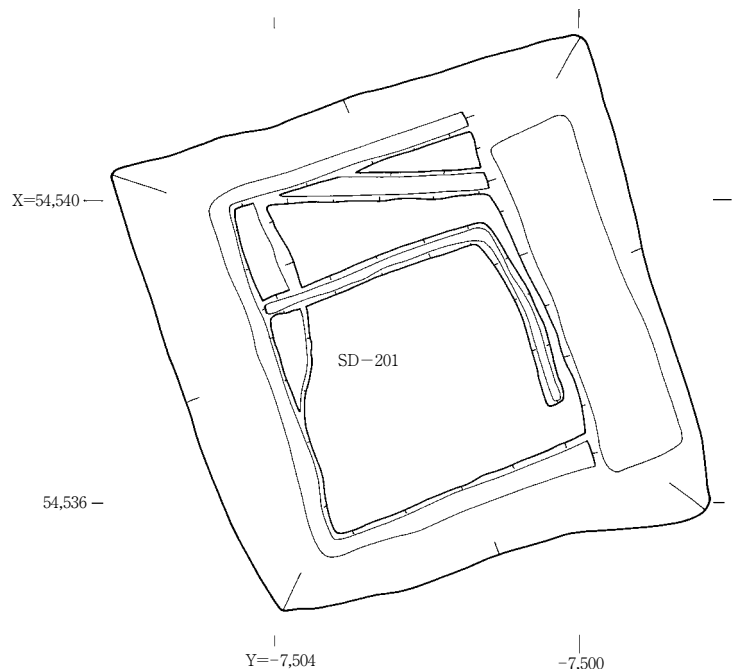


Fig.172 B区遺構平面図第1次検出面 (S=1/100)

2. 調査区の概要 (3)C区

gの横長の剥片を素材とし、裏面は自然面を残している。刃部は両刃である。

③ 遺構と遺物

i 中世

本調査地区では遺構検出面が2面あり、第1次検出面、第2次検出面とも溝が1条検出された。

a. 溝跡

SD-201

調査区西側で検出した溝で、溝の西肩は調査区外にあるため幅は不明であり、深さは約18cmで、約2.50mにわたって検出した。主軸方向はN-21°-Wで、南に向って傾斜している。断面はU字状を呈し、埋土は暗灰黄色粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-202

調査区西側で検出した溝で、西肩は調査区外にあるため幅は不明であり、深さは約12cmで、約2.30mにわたって検出した。主軸方向はN-21°-Wで、南に向って傾斜している。断面はU字状を呈し、埋土は灰色シルト質粘土で、出土遺物は皆無であった。

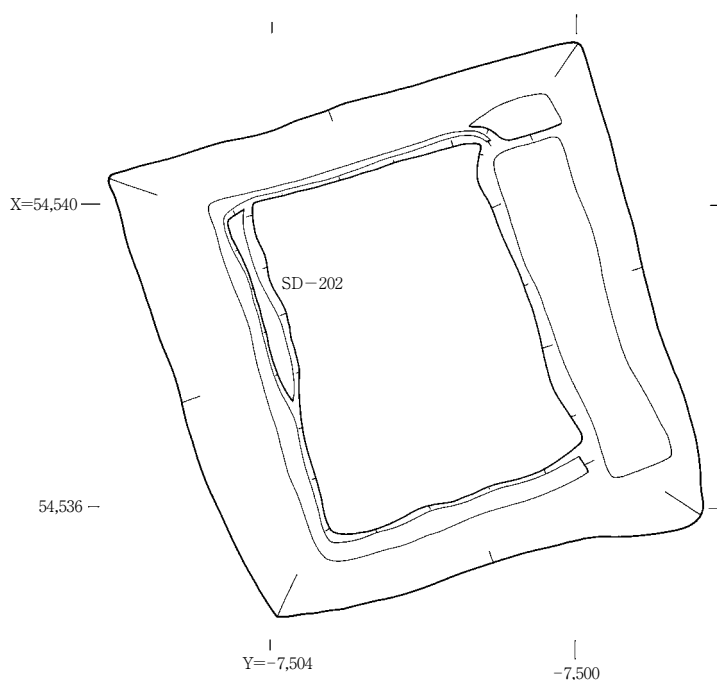


Fig.173 B区遺構平面図第2次検出面 (S=1/100)

(3) C区

遺跡の南東部に位置し、北の国道56号線と南の土佐市消防署に挟まれた東西に細長い調査地区である。

① 層序

C区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第I層 客土

第II層 灰色(7.5Y5/1)シルト層で1~3cmの礫を含む。

第III層 灰色(5Y5/1)シルト層でマンガンを含む。

第IV層 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト層

第V層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層

第VI層 灰色(5Y4/1)粘土質シルト層で炭化物を少し含む。

第VII層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト層

第VIII層 黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト層

第Ⅰ層の客土は厚さ0.40～0.70mを測る。現況はB区と同様宅地であったので、造成の際盛られたものである。

第Ⅱ層は旧耕作土である。

第Ⅲ層は自然堆積層で上層部にはマンガンの沈澱が認められた。

第Ⅳ・Ⅴ層は自然堆積層である。

第Ⅵ層は中世の遺物包含層である。炭化物を含んでいるが、西に行くに従って炭化物の含有量は少なくなる。

第Ⅶ・Ⅷ層は自然堆積層で、第Ⅶ層上面が遺構検出面となっている。東に行くに従ってマンガンの堆積が多くなり、褐色が濃くなる。西側は粘土化が著しく、遺構も検出されなかった。

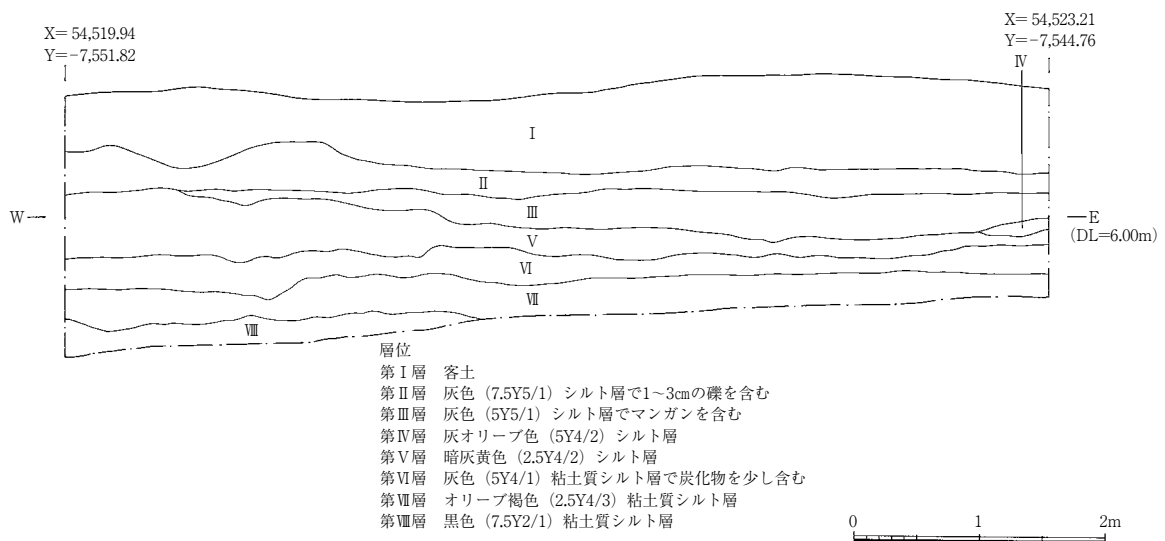


Fig.174 C区北壁セクション図

② 堆積層出土遺物

第Ⅴ層出土遺物

備前焼 (Fig.176-301)

301は挿鉢の底部破片で、底径11.2cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し、内面に条線が認められるが単位は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

石製品 (Fig.176-302～304)

302・303は五輪塔の水輪で、石材は302が砂岩、303が緑泥岩である。302は全高18.0cm、全幅27.4cm、重量17.4kgを測る。表面の風化が著しいが、底部の一部に磨きの痕跡が残る。303は全高14.0cm、全幅20.0cm、重量8.8kgである。表面の風化が著しい。

304は砥石で、石材は砂岩である。全長25.6cm、全厚7.6cm、全幅28.2cm、重量8.6kgを測る。平坦部に使用痕があり、その他の面は自然面を残している。

2. 調査区の概要 (3)C区

③ 遺構と遺物

i 中世

a. 土坑

SK-301 (Fig.177)

調査区西側で検出した隅丸方形の土坑で、長径1.66m、短径1.14m、深さ0.22mを測る。断面は舟底状を呈し、長軸方向はN-84°-Eで、埋土は灰色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SK-302

調査区南東部で検出した不整形の土坑で、SU-302に切られる。長辺3.50m、深さは約6cmを測り、断面は舟底状を呈する。長軸方向はN-69°-Eで、埋土は黄灰色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

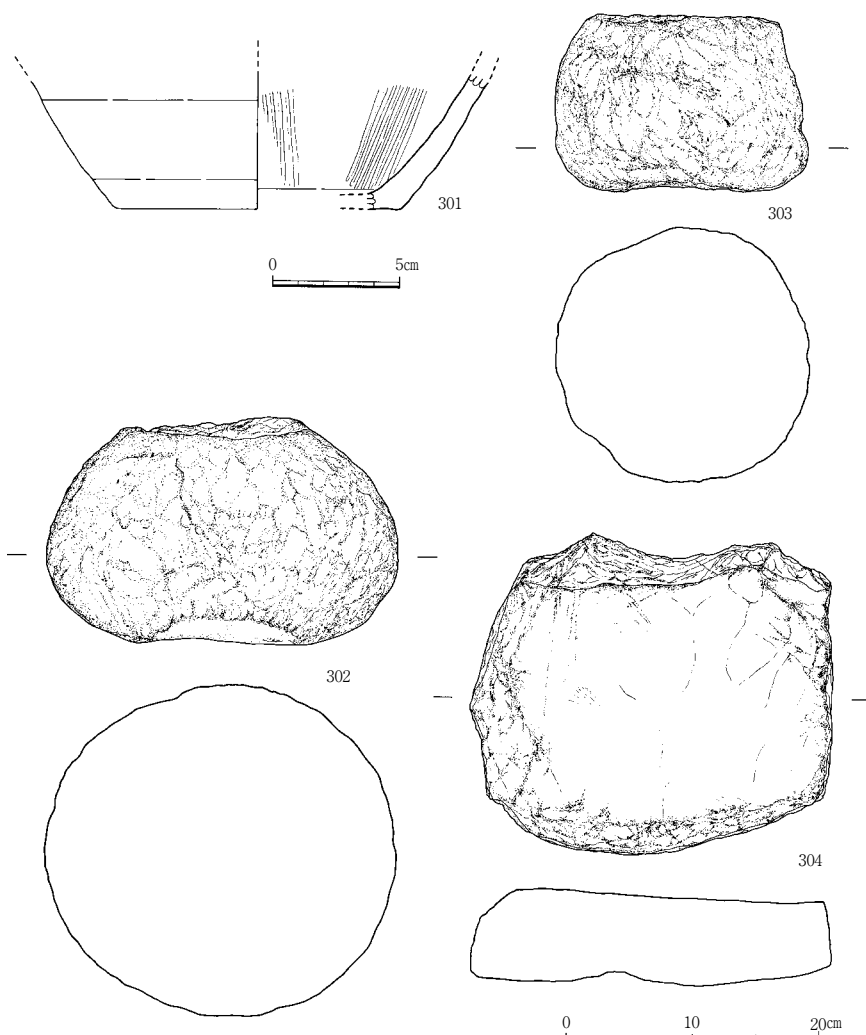


Fig.175 C区第V層出土遺物実測図(備前焼・石製品)

Tab.12 蓮池城跡北面遺跡-C区土坑計測表

遺構番号	平面形	規模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK-301	隅丸方形	1.66	1.14	0.22	N-84°-E	中世	
SK-302	不整形	3.50	—	0.06	N-69°-E	〃	

b. 溝跡

SD-301

調査区中央北側で検出した東西溝で、北肩が調査区外にあり幅は不明であるが、深さ3~6cmを測り、約3.30mを検出した。断面は舟底状を呈し、基底面は西に向って傾斜しており、主軸方向はN-61°-Eである。埋土は灰オリーブ色粘土であった。出土遺物は皆無であった。

SD-302

調査区中央北側で検出した東西溝で、北肩が調査区外にあり幅は不明であるが、深さ2~5cmを測

り、約2.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、基底面は西に向って傾斜しており、主軸方向はN-67°-Eである。埋土は灰オリーブ色粘土であった。出土遺物には土師質土器細片1点がみられたが、復元図示できるものではなかった。

SD-303

調査区北側で検出した東西溝で、溝の東側は調査区外へ続く。幅0.66~1.54m、深さ6~16cmを測り、約17.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、基底面は西に向って傾斜しており、主軸方向はN-66°-Eである。埋土は灰オリーブ色粘土であった。出土遺物には須恵器片6点、土師質土器片10点がみられ、須恵器1点(305)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.178-305)

305は甕の体部破片で、外面にはタタキの後にハケ調整、内面はハケ調整を施す。色調は内面が灰白色、外面が灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SD-304

調査区東部中央で検出した東西溝で、溝の大部分はSU-302に切られていると考えられ幅は不明であるが、深さは6~11cmである。西に向って傾斜していたと考えられ、主軸方向はN-76°-Eである。断面は舟底状と考えられ、埋土は黄灰色シルト層であった。出土遺物は皆無であった。

SD-305

調査区南東部で検出した東西溝で、北肩はSU-302に切られており、幅は不明である。深さは2~3cmで、約2.10mを検出した。西に向って傾斜しており、主軸方向はN-72°-Eである。断面は台形状と考えられ、埋土は黄灰色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

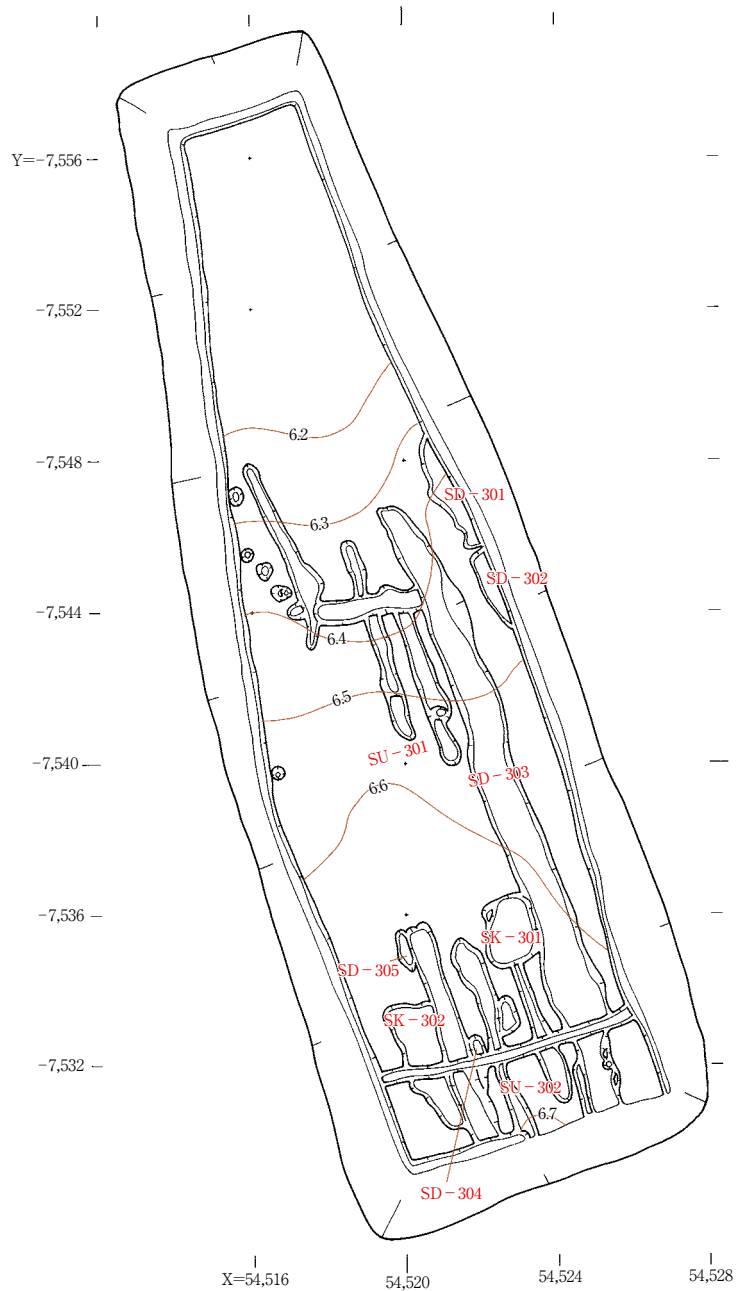


Fig.176 C区遺構平面図 (S=1/200)

2. 調査区の概要 (3)C区

c. 畝状遺構

SU-301

調査区中央部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を3条確認した。主軸方向はN-69°-Eで、最大長約5.6m、幅0.30~0.70m、深さ4~23cmを測る。畝間は0.40~0.70mの間隔でほぼ平行にのびており、畝幅は0.70~1.50mとみられる。埋土は灰オリーブ色粘土であった。出土遺物には須恵器片3点、土師質土器片6点、瓦器片3点がみられ、須恵器1点(306)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.178-306)

306は広口壺の口縁部破片とみられ、口縁部は外傾し、端部は内傾する凹面をなす。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内面が灰白色、外面が褐灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

SU-302

調査区東部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を3条確認した。主軸方向はN-70°-Eで、最大長約7.1m、幅0.22~0.84m、深さ4~9cmを測る。畝間は0.50~0.80mの間隔でほぼ平行にのびており、畝幅は0.70~1.00mとみられる。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物は須恵器片1点、土師質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

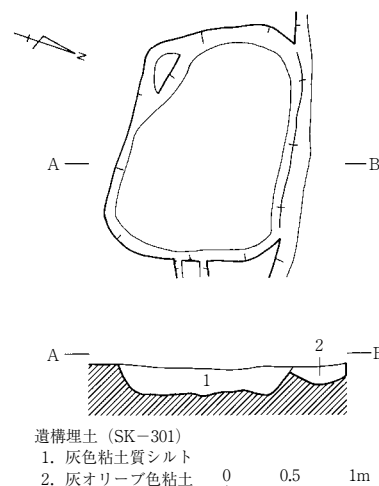


Fig.177 SK-301

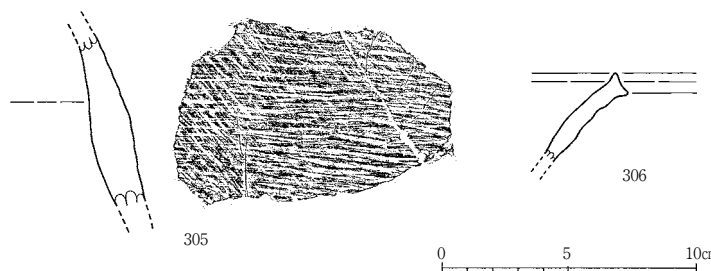


Fig.178 SD-303, SU-301出土遺物実測図

Tab.13 蓮池城跡北面遺跡-C区畝状遺構計測表

遺構番号	規模				主軸方向 (NはGN)	時代	備考
	畝数(本)	検出長(m)	畝間幅(cm)	畝間隔(m)			
SU-301	3	5.6	30~70	0.40~0.70	N-69°-E	中世	
SU-302	3	7.1	22~84	0.50~0.80	N-70°-E	〃	

註

(1)『全国遺跡地図-高知県-』昭和51年 文化庁には蓮池城史蹟北面遺跡として載っている。

第Ⅳ章 考察

1. 林口遺跡

(1) 中世

今回の調査で中心となる時期である。C区を除くほぼ全域で遺物包含層並びに遺構が確認されており、検出された遺構は林口城跡が存在する残丘からのびた微高地部分(A・B区)を中心に立地している。本調査地区の地勢をみてみると、本調査地区の西端、D区が位置する残丘の裾部には腐植土が厚く堆積しており、古代から中世にかけて低湿地であったとみられる。D区東側に位置するC区ではやや標高が高くなるものの地形は西側に向けて落ち込んでおり、低湿地からの立ち上がり部分であったものと考えられる。C・D区では調査区を取り囲むように低丘陵からのびる岩盤が確認されており、このことからC・D区は当時残丘に囲まれた部分であったことが伺い知れ、低丘陵と微高地に囲まれた低湿地であったと推察される。また、本調査地区の東側に位置するA・B区は微高地上に立地している。現在の市道部分が本調査地区において標高の最も高い部分であったとみられ、A・B区の市道に隣接する部分からは多くの遺構が検出されている。しかし、A区の東側は林口遺跡の東端を南流する火渡川に向けて傾斜すると共に徐々に検出面の標高が低くなり、確認された遺構も溝跡が中心となっている。このことからA・B区の西側が本調査地区の中心部であったと考えられる。

今回の中心の一つであるB区では掘立柱建物跡3棟、塀・柵列跡3列が確認されている。確認された建物跡SB-201~203のうち比較的大きな建物はSB-201・203であり、中でもSB-201はしっかりとした総柱の建物跡である。また、塀・柵列跡SA-201~203の中でSA-202はSB-202、SA-203はSB-203とそれぞれ主軸方向がほぼ同じであり、それぞれの建物跡に付随するものとみられる。また、これら3棟の建物跡のうち棟方向がほぼ同じであるSB-201・202はほぼ同時期とみられ、時期的には13世紀前後と考えられる。

一方、これら掘立柱建物跡や塀・柵列跡に関連する区画溝は検出されておらず、区画溝を伴わない建物群の可能性が高く、区画内に立地する建物群とは意味合いを異にするとみられる。岩井口遺跡¹⁾の例では、溝に囲まれた館を中心にそのまわりに家来(従者、家人)、さらに外側に下人という形で建物が配されていたと考えられており、本調査区で検出された建物跡は区画溝外に立地していた下人の住いであったと推定されるが、屋敷全体の調査が行われておらず明確ではない。

また、A区では屋敷を区画していたとみられる溝(SD-112)を検出したが、建物跡などは確認されなかった。A区の地勢をみると調査区中央部が火渡川に向けて搦鉢状に低くなり、南側がやや高くなっている。本調査区南約80mに位置する林口遺跡第Ⅰ調査地区A区では掘立柱建物跡12棟、塀・柵列跡10列が確認されており、屋敷地であったことが判明している²⁾。これら両調査区の標高をみてみると、第Ⅰ調査地区で掘立柱建物などが立地する部分が約6.90m、第Ⅱ調査地区A区で標高が最も高いのは調査区南部の約6.70mである。このことからA区から林口遺跡第Ⅰ調査地区に向けて緩やかに標高が高くなっている可能性が考えられ、本調査区で検出された区画溝内に存在するであろう掘立柱建物跡や塀・柵列跡は、A区の南部に展開していると推察される。また、林口遺

1. 林口遺跡 (3) 林口城跡関連遺構について

跡第Ⅰ調査地区A区で検出された区画溝(SD-1・2)は時期的には12世紀後半から13世紀にかけてのもので、本調査地区のA区で検出された区画溝(SD-112)も時期的には12世紀後半から13世紀にかけて存続していたと考えられ、この両調査区で検出された区画溝はほぼ同時期に存在していた可能性が高い。このことから林口遺跡では12世紀後半から13世紀にかけて溝に囲まれた屋敷地が数区画存在していたと推察される。

以上、今回の調査によって林口遺跡には12世紀後半から13世紀にかけて集落が営まれていたことが判明した。さらに、溝によって区画された屋敷跡が数区画存在したものとみられ、その周囲にはそれに付随する建物が点在していたものとみられる。(下村)

(2) 近世以降

まず、近世については遺構から出土した遺物が少なく、時期の判明するものは近世の遺物包含層(C区第Ⅲ層)から出土した近世初頭と近世中期～幕末の陶磁器類等に限られる。遺構では近世中期以降と考えられるC区の土坑2基、溝跡3条がみられるのみで、集落等を構成していたと考えられる遺構は確認できなかった。このことから当時は住居域ではなく耕作域ではなかったかと推察されるものの、前述のとおり低湿地が多く、耕作に適した箇所は微高地上など限られた部分ではなかろうか。

近代では、調査区全体に広がりをもせる暗渠がそれを特徴付ける遺構として挙げられる。本調査区に広がる暗渠は南北方向を基調としており、南北に22条、東西に5条を確認した。暗渠の間隔は2.60～15.00mで、検出時の標高は6.900～7.200mを測り、断面は箱形を呈するものがほとんどである。埋土を除去すると、竹管の敷設が確認でき、稀に竹管に代って土管を敷設する箇所もみられた。埋土には土師質土器や陶磁器類の細片などの遺物が混入していた。暗渠の時期は天神遺跡Ⅰ区、林口遺跡Ⅰ区等で確認された多くの暗渠と同時期で、戦後の食料難に食料増産等を目的として敷設されたものと考えられる。(伊藤)

(3) 林口城跡関連遺構について

林口城跡は南北約270m、東西約80～100m、標高26mを測る南北に細長い残丘上に所在し、掘切2条と曲輪とみられる部分が3ヶ所遺存する。現在は果樹園と墓地となっており、D区西側の尾根などは著しく削平されており、全般に後世の削平の影響がみられる。ホノギでは「教授谷」と「林口」に当たり、長宗我部地検帳では「三城」という記載があり、これが林口城跡に当たるものとみられ、三ツ城とも呼称されるが、城主等は不明である。また、詰とみられる部分には高岳親王の妻の墓と伝えられる五輪塔が残る。

林口城跡に関連するとみられる遺構が検出されたD区は林口城跡の東側の裾部に位置し、ホノギでは「奥屋敷」に当たるが、今回の調査では屋敷跡等に関連する遺構は確認されなかった。

今回の調査では残丘裾部で斜面を人為的に削平して造ったとみられる幅3.0～5.0mの犬走り状の平坦面³⁾を検出した。平坦面から約2.0m下には平坦面に沿って湾曲して巡る溝跡SD-401があり、自然地形を利用した箇所と明らかに人為的に掘削した部分がみられた。また、溝跡には一部意図的

に掘り残すことによって土橋状の遺構SX-401を造り出していた。この土橋状の部分から繋がる斜面部は両側を溝状に掘り窪め、砂質土に小礫を混ぜた土で押し固められ、柱穴と考えられるピットも確認しており、平端部に繋がる階段状の施設が存在したものと考えられる。平坦面の南と北は調査区外に続くが、北側の尾根は現在では一部切断され通路となっており、ここに平坦面が繋がる可能性が高い。南側は現在宅地になっており、著しく地形が改変されているため明らかではないが、北側と同様に尾根を切断して林口城跡の周囲を回っていた可能性も考えられる。今回検出した平坦面背後の斜面は傾斜がきつく、城へは傾斜の緩い丘陵の北側または南側に移動しなければ登城できなかったものと考えられる。また、斜面部にはピットが多数検出されており、平坦面に沿うように柵列が巡っていたものとみられ、階段状の施設の部分が出入口になっていたと考えられる。林口城跡の西側には「城ノ後」というホノギがあることから東側が正面であり、今回検出した遺構は林口城跡の出入口の一つではないかと考えられる。山城の裾部の調査はほとんど類例がなく、裾部の様相を知る上で貴重な資料となった。

時期については林口城跡に直接関連するとみられる遺物は出土していないが、第Ⅲ層より14世紀とみられる瓦質土器や14～15世紀とみられる土師質土器の釜が出土しており同様の時期とみられる。(田中)

(4) 古代から中世の遺物について

D区の第Ⅲ・Ⅺ～Ⅻ層からは古代から中世にかけての遺物が比較的多く出土している。D区は林口城跡の裾部に当たり、第Ⅻ・Ⅻ層には腐植土が多く含まれ、また、第Ⅺ層は土壌分析の結果から河川より流れ込んで浅く滞水する環境であったものとみられる。第Ⅺ～Ⅻ層からは各層で黒色土器、東播系須恵器、瓦器などが出土し、時期差は認められず、10世紀後半から13世紀にかけて長期間にわたり比較的狭い範囲にまとまって堆積したものとみられる。ここでは特に多く出土した供膳具について若干検討を加えてみたい。

黒色土器は6点出土している。すべて椀で形態等からみて在地産と考えられるもので、内黒のA類(4185・4408)と両黒のB類(4409～4411・4535)がある。A類は高台が断面方形を呈し、底径は6.3cmと7.3cmを測る。B類は高台が断面方形のものと同三角形を呈するものがあり、底径は6.3～7.9cmを測る。B類は県内では西鴨地遺跡⁽⁴⁾で1点出土しているのみであり、今後類例が増える可能性はあるものの現在は仁淀川右岸の土佐市のみで出土しており、仁淀川流域の地域色とみることもできよう。今回畿内からの搬入品はみられず、全体の形態がわかるものも出土していないが、底径は8.0cm以下と比較的小さく、11世紀代に位置付けられるものとみられる。

東播系須恵器は22点出土しており、椀が19点、片口鉢が3点と椀が大半を占め、1遺跡からの椀の出土数は県内でも比較的多い方である。今回出土した遺物の時期はⅠ-2～Ⅱ-2期⁽⁵⁾で、11世紀末～13世紀初頭とみられ、12世紀中葉～後半のものが中心である。また、隣接する天神遺跡⁽⁶⁾でも東播系須恵器の椀が7点出土しており、林口遺跡の周辺ではおそらく土師質土器の椀と共に一定量みられ、その後瓦器椀が取って代わるものとみられる。

瓦器は23点出土しており、椀が22点、小皿が1点と椀が大半を占める。形態的にはすべて和泉型

1. 林口遺跡 (4) 古代から中世の遺物について

で、Ⅲ-1～Ⅳ-2期⁷⁾に属し、時期的には12世紀中葉～13世紀中葉とみられ、12世紀末～13世紀前葉のものが多い。この時期の瓦器は近隣の天神遺跡⁸⁾や光永・岡ノ下遺跡⁹⁾、野田遺跡¹⁰⁾でもみられ、この時期になると周辺で多く集落が形成される。

土師質土器は比較的多く出土しており、形態分類を行ったうえで、成形技法等から検討してみたい。

まず、杯は形態から以下のA～E類に分類することができる。

A類 底径が小さく、器高が高いもので、口縁部は斜め上方に立ち上がる。口径は約10.0～12.0cm、器高は4.0cm前後を測る。(4116～4118・4137・4211・4212・4442・4443・4445・4539・4541・4542)

B類 器高が低く、皿に近い形態を呈するもので、口径は約11.0～12.0cm、器高は2.5cm前後を測る。(4058・4059・4441・4537)

C類 器高が低く、器壁が比較的厚く、口縁部が大きく開くものである。口径は約12.0cm、器高は3.0cm前後を測る。(4135・4136・4444)

D類 器高が高いもので、口径は約14.0～15.0cm、器高は5.0cm前後を測り、器高指数は32以上を示す。(4140・4266～4268・4277・4286・4287・4447・4450～4452)

E類 口径が大きく、口縁部が外へ大きく開くものである。口径は約14.0～16.0cm、器高は4.0～5.0cm前後を測り、器高指数はほぼ30以下を示す。(4044・4045・4057・4059・4138・4139・4141～4145・4260・4261・4263～4265・4271～4275・4278～4285・4446・4448・4449)

次に底部の切り離し手法と成形技法からみると底部の切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切り、成形技法には粘土紐巻き上げロクロ成形とロクロ水挽成形がみられ、古相と考えられるA～D類と新相とみられるE類に分けてその傾向をみる。

A～D類の底部の切り離しは、回転ヘラ切りが77%、回転糸切りが23%であるのに対し、E類のそれは回転ヘラ切りが43%、回転糸切りが57%を占める。隣接する天神遺跡においても12世紀代まで回転ヘラ切りが残り、物部川流域とは様相が異なることが指摘されている¹¹⁾。しかし、12世紀後半から13世紀前半と考えられるSK-112, SD-106, SD-112, SD-124, SD-201では回転ヘラ切りはほとんど見られず、少なくとも13世紀には回転ヘラ切りから回転糸切りに転換したものとみられる。

成形技法については粘土紐巻き上げロクロ成形の場合、底部と体部の接合痕が観察できるものや粘土紐の単位によって器面に緩やかな凹凸ができるが、丁寧な回転ナデ調整を行えば識別しづらくなる。ロクロ水挽成形の場合、未調整の場合や回転ナデ調整が粗雑な場合は器面に細かなロクロ目が残る、口縁部に向かって器壁が薄くなる傾向がみられるものの粘土紐巻き上げロクロ成形同様丁寧な回転ナデ調整を施している場合は判断が難しく、成形技法を判別しがたいものもあるが、一定の傾向は掴めるものと考えられる¹²⁾。これを踏まえて成形技法をみるとA～D類は粘土紐巻き上げロクロ成形が46%、ロクロ水挽成形が54%、E類は粘土紐巻き上げロクロ成形が52%、ロクロ水挽成形が48%を占める。先のSK-112, SD-106, SD-112, SD-124, SD-201においてもロクロ水挽成形が半数以上を占める。また、A～D類で底部の切り離しにヘラを使用するものは粘土紐巻き上げロクロ成形のものが60%であるのに対し、ロクロ水挽成形のものは85%を占め、ロクロ水挽成形とヘラを使用した底部の切り離しには何らかの関連があったことも考えられる。

これらは当然併存していた時期もあるが、概ねA～D類は11世紀後半以前、E類は11世紀後半～13世紀前半ではないかとみられる。11世紀後半以前から水挽による成形が一定量行われていたと言えよう。ロクロ水挽によって成形されたものの中には4441のように10世紀代とみられるものも存在し、10世紀にはロクロ水挽による成形が行われていたとみられる。

土師質土器の椀についてはA・B類の2類に分類することができる。

A類 円盤状高台を有するもので、内底面が高台内に落ち込むもの(1類)、落ち込まないもの(2類)がある。

A-1類 出土例は少ないが、底部の切り離しがわかるものはすべて回転ヘラ切りである。底径は7.1～8.0cmを測る。(4016・4495～4497)

A-2類 内面にハケ調整、コテ当てを行うものや重ね焼の痕が残るものがある。底部の切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りがほぼ同じ割合でみられる。底径は6.2～7.3cmを測る。(4363～4367・4498・4499)

B類 輪高台を有するものである。

B-1類 高台は断面方形を呈する高いもので、直立またはハの字状に開く。高台内はナデ調整または回転ヘラ切りの痕跡が残る。底径は6.8～8.1cmを測る。(4003・4076・4368・4369・4500～4504・4548・4549)

B-2類 高台は断面半円形または逆台形を呈する低いものである。高台内はナデ調整である。底径は5.6～6.1cmを測る。(4004・4167・4370・4505～4507)

B-3類 底部から体部にかけて非常に器壁が厚く、体部外面下半に回転ヘラ削りを行うものである。底部の切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りのものがある。底径は5.2～6.0

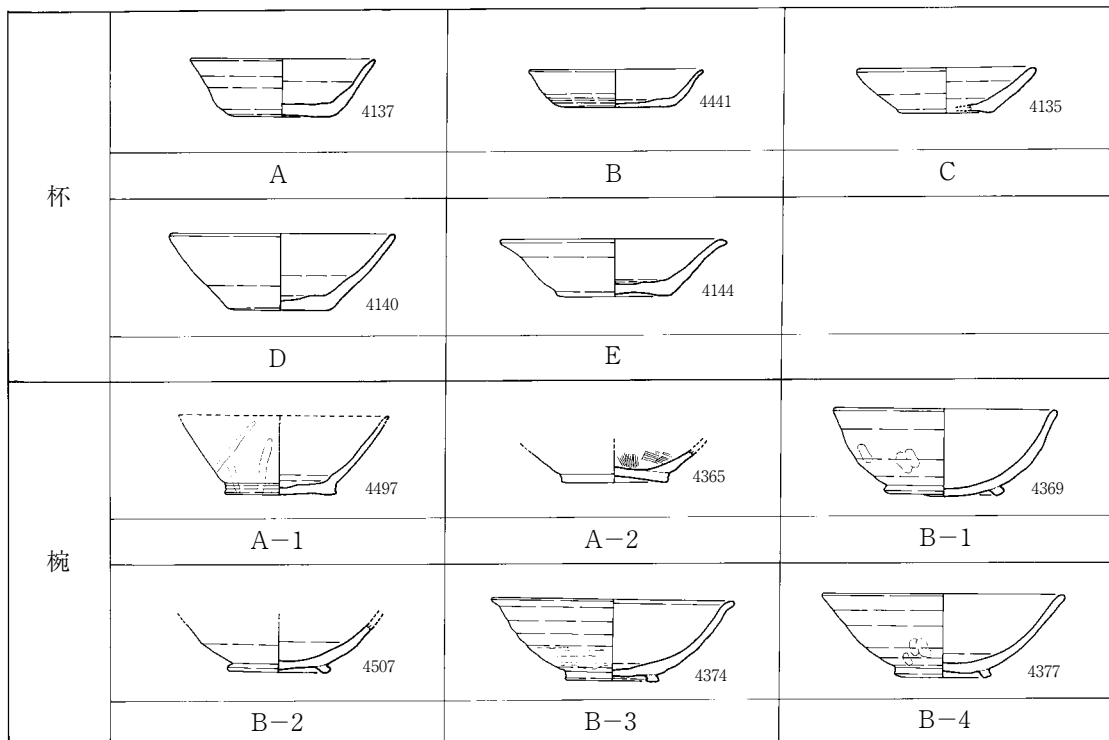


Fig.179 林口遺跡第Ⅱ調査地区-D区土師質土器杯・椀分類図

1. 林口遺跡 (4) 古代から中世の遺物について

cmを測る。(4077・4371~4375)

B-4類 底径が小さく、体部は腰が張らず、口縁部が直線的にのびるものである。ナデ調整で、体部外面下半に指頭圧痕が残る。また、全面炭素が吸着しているものが多い。底径は5.2~5.6cmを測る。資料が少ないが底部の切り離しは回転ヘラ切りのものが2点みられる。(4376・4377・4508・4509)

底部の形態がわかるものは39点みられ、A類が28%、B類が72%を占める。B類が主流を占めるがA類も一定量存在する。

まず、A類では、A-1類とA-2類では底径に違いがみられ、底部の縮小化が看守されることから時期的な差と捉えることができる。また、底部の切り離しについては、A-1類は県内では回転糸切りのものが多いが、今回はすべて回転ヘラ切りであった。一方、A-2類には回転ヘラ切りと回転糸切りの両方がみられたが、本遺跡の北東約2kmに位置する天崎遺跡¹³ではほとんどが回転ヘラ切りである。このことからA-1類、A-2類とも底部の切り離しが回転ヘラ切りから回転糸切りへ移行していくことが窺われる。

B類ではB-1類が11点、B-2類が7点、B-3類が6点みられた。B-1類はひびのきサウジ遺跡SE-1¹⁴、B-2類は高柳遺跡SK-1¹⁵に併行関係を求めることができ、B-1類とB-2類とは器形の縮小化が窺え、時期的な差と捉えることができる。調整は回転ナデ調整のものが多いが、1類、2類とも内面にハケ調整またはコテ当て、内外面にヘラ磨きを施すものが若干みられる。底部の切り離しは大半がナデ調整によって消えるため不明であるが、回転ヘラ切りのものはB-1類で5点、B-2類で1点みられ、回転糸切りのものはみられなかった。天崎遺跡や西鴨地遺跡においても同様で、回転ヘラ切りまたはナデ調整を加えるものが主体である。B-3類は6点あり、高台の形態は、方形、逆台形、半円形など様々である。底部の切り離しは3点がナデ調整によって消えるが、1点が回転ヘラ切り、2点が回転糸切りである。体部外面下半に回転ヘラ削りを加えるものは、奥谷南遺跡¹⁶、尾立遺跡¹⁷、コゴロク廃寺跡¹⁸など県内で広く出土し、B-1類とB-2類とは同時期に存在する。しかし、林口遺跡で出土しているB-3類は粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部から体部にかけて器壁が非常に厚く、中には膨れるものもあり、B-1・2類のように内面の滑らかさが見られないものがある。これはB-1・2類とは成形がやや異なるためとみられ、また、底部の切り離しが回転糸切りのものはB-3類のみにみられた。これらは底部が平らで、器高が低く、杯に回転ヘラ削りを加えて高台を貼り付けたとみられるものもある。B-4類は4点みられた。B-1~3類とは体部の形態が異なり、4508は口縁部のみ炭素が吸着し、他の3点は全面に炭素が吸着しており、黒色土器の可能性も残る。一方、今回黒色土器としたものは、土師質土器よりも底径が大きく、胎土には白色の砂粒を含むものであり、B-4類とは差異が認められる。ここではB-4類を土師質土器として捉えたが、今後資料の増加と共に黒色土器として検討する必要があると考える。

底部の切り離しについてみてみると、物部川流域では回転糸切りが多く見受けられるのに対し、仁淀川流域では回転糸切りのものは少なく、ほとんどが回転ヘラ切りであり、物部川水系とは様相が異なるようである。

これら土師質土器とした中には、焼成がやや異なるものがみられる。すなわち、焼成が非常に良

好で須恵器に近く火樺がみられるもの(4141・4497)、炭素が吸着するもの(4235・4357・4366・4367・4429・4434・4449)、4504は内面にコテ当てが見られるが焼成は瓦器と全く変わらないものである。椀についてはこのような還元焰焼成に近い、または軟質の須恵器とされるものは奥谷南遺跡²⁸などで多くみられ、天崎遺跡では須恵器に炭素が吸着したとみられるものや瓦器に似た焼成のものもあり、林口遺跡と似た状況を呈する。また、4351の小皿のように焼成が須恵器と全く変わらないものも存在する。このような土器は酸火焰焼成とは考えられず、簡易な窯で焼成されたものとみることができよう。

これらの中には墨書土器が5点あり、すべて底部外面に墨書されている。土師質土器の椀に「得」と書かれたものが2点みられ、しかも2点とも体部下半に回転ヘラ削りを施した椀である。2点は土師質土器の杯に墨書されたもので1点は「次」とみられが、1点は不明である。2点とも底部外面に回転糸切りの痕が残る。残る1点は県内では類例の少ない瓦器に墨書したもので、「新」または「斬」か「斯」とみられる。これら土師質土器はいずれも11世紀後半以降、瓦器は13世紀のもので、かつ、同時期とみられる蝙蝠扇の出土など後述しているように有力な勢力を持った者の存在がクローズアップされる。その人物がこれら墨書土器に何らかの関連があったのではなかろうか。(田中)

(5) 蝙蝠扇について

今回の発掘調査では蝙蝠扇と呼ばれる扇が出土した。これは高知県内初の出土であり、当時の服飾具を考えるうえで貴重な資料である。

まず、扇の歴史についてふれてみたい。招涼の具とされる団扇・扇の歴史は古く、扇の名が出てくる最も古い文献は、「とこしへに夏冬ゆげや裘 扇はなたず山に住む人」と草壁皇子の奉った歌が書かれている『万葉集』第9巻である。この『万葉集』は8世紀末には全巻完成したと考えられており、扇は8世紀代には存在していたことを示しているが、この歌に詠まれた扇は中国式の団扇であったと考えられている。扇も8世紀代に日本で発明されており、『和名類聚抄』には団扇と扇が区別されている。また、扇は万葉假名で「安布伎」とふられる。

扇には檜や杉の薄板を数枚重ねて、下端を綴じ、先端を白糸で繋げて扇にした檜扇(ひおうぎ)と、扇骨を数本重ねて、下端を綴じ、片面に紙を貼った蝙蝠扇(かわほりおうぎ)の2種類がある。檜扇は8世紀代に日本で発明され、10世紀代には中国に輸出されており、蝙蝠扇も9世紀代に発明されたと考えられている。檜扇がその材質から生じた名称であるのに対し、蝙蝠扇はその形が蝙蝠の手翼に類似していることから生まれたのではなく、「かみはり(紙貼)」から生じたものと考えられている。また、檜扇が冬扇と呼ばれ、蝙蝠扇は夏扇と呼ばれていたようである。

蝙蝠扇は、細骨扇と平骨扇の2種類があり、平骨扇には透しが彫られ、透扇と呼ばれていた。この透扇は11世紀代には葵祭に用いられていたようで、全ての骨に透し彫りが施されているものは「みなえりぼね」と呼ばれており、14世紀代には「皆彫骨扇」という漢字があてはめられた。この扇は『蒙古襲来絵巻』や『北野天神縁起絵巻』などに描かれている。また、将軍足利義政が熱田神宮に御神宝として皆彫骨扇を奉納している。この扇は骨の長さが約40cmで計12本あり、その骨には全て3ヶ所に透し彫りを入れてある。この透し彫りは「格狭間」と呼ばれるものである。この皆彫骨扇は

1. 林口遺跡 (5) 蝙蝠扇について

12～13世紀には若い公家や武士に持たれていたようである。そして軍扇として使われ、14世紀には対明貿易品として輸出されている。

次に前述したことを踏まえ、この扇の時期・形態についてみてみることにする。まず時期であるが、この扇が出土したSD-124からは土師質土器・瓦器・東播系須恵器・白磁・青磁などが出土し、白磁の碗(1335・1336)がV-4b類、青磁の碗(1337・1338)がI-2類であることから、12世紀中頃から後半にかけての時期が考えられる²⁰⁾。瓦器は全体が分かるものは出土していないが、底部の破片が出土している(1333)。これは底径4.4cmを測り、外底面には断面半円状の高台を貼り付けている。底部内面には平行線状のヘラ磨き、体部内面下半には円圈状のヘラ磨きを施している。これは和泉型瓦器碗とみられ、高台の形状や見込の暗文からⅢ期のもと考えられる²¹⁾。時期的には12世紀後半から13世紀前半にかけてのもので、青磁・白磁の時期とほぼ同時期である。また土師質土器の杯については成形が判別できるものは口クロ水挽成形が多く、底部の切り離しは回転糸切りである。口径・器高・底径が分かるものは8点(1305～1312)出土しているが、これらは口径11.7～14.2cm、器高3.7～4.6cm、底径5.8～8.0cmを測り、体部がやや内湾気味に立ち上がるものが1点ある以外、他は体部が斜め上方に直線的に立ち上がるものか、体部が直線的に立ち上がり口縁部が外反するものである。これらの形態的特徴は12世紀後半から13世紀前半のものともみられることからSD-124は12世紀後半から13世紀前半にかけて存続したと考えられ、この扇も12世紀後半から13世紀前半に服飾具として使用されていたと推察され、文献などで確認される時期と合致する。形態的にみてみるとこの扇は蝙蝠扇の皆彫骨扇で、6枚の骨が残存している。骨は厚さ約0.4cmで、末端から約1.7cmのところには要孔をあけ、なかに要が残る。骨の中程までは徐々に幅を減じ、中程から先は幅を広め「格狭間の形」の彫透しをいれる。末端は先を減じ、細く仕上げている。この形態の扇は伝世品として残っており、前述した室町幕府8代將軍足利義政が熱田神宮に奉納した扇と同じ形態のものと考えられる。

前述したように扇の歴史は古く8世紀頃から服飾具として使用されていたが、発掘調査で扇が出土するものは分解した破片が多く、全形をうかがえるものは少ない。主に畿内から多く出土しているが、多くは骨に透しをいれない平骨の扇(檜扇)である。出土例が多く散見されるのは、中央から左右に向けて長さを減じる11枚ほどの骨を1孔の要と綴紐によって綴合わせ、全開時には60度内外に開く檜扇である。この種の扇は平城京、平安京、滋賀県十里町遺跡から出土しているが、時期的には8世紀から9世紀のもので蝙蝠扇より古い²²⁾。蝙蝠扇は出土例が少なく、鳥羽離宮跡から1点出土している。この扇は透しが入れられていない平骨扇である²³⁾。時期的には12世紀から13世紀のようで、今回出土した林口遺跡の蝙蝠扇とほぼ同時期であり、出土地や前述した文献からみてもこれらの扇は貴族階級や武士階級が所有していたと考えられる。また、時期は下るが、草戸千軒町遺跡からも平骨の蝙蝠扇が出土している²⁴⁾。時期は14世紀前半と考えられており、この頃になると庶民にも扇が普及していたとみられる。

最後にこの扇の所有者について考えてみたい。平成8年度に発掘調査が行われた林口遺跡第I調査地区では溝で区画されたほぼ同時期の屋敷跡が確認されており、12世紀後半から13世紀にかけて存続していたことが判明している。また今回の調査でもほぼ同時期の屋敷を区画していたとみ

られる溝跡が検出されており、この地区に区画溝を伴う屋敷が数区画存在していたと考えられる。12世紀代にこの地域を支配していたのは蓮池権守家綱という人物で、『吾妻鏡』にはこの蓮池権守家綱は平清盛の子重盛の家臣であると記されており、『平家物語』の記述内容からみてこの蓮池家綱は権守といわれているように在地武士の有力者であったと考えられる²⁴。林口遺跡で確認された屋敷跡とこの蓮池家綱が直接結びつくとは言い難いが、ほぼ同時期であることから考えて林口遺跡の屋敷跡には蓮池家綱に関係する人物が居住していた可能性が考えられる。今回林口遺跡から出土した蝙蝠扇は前述したように皆彫骨扇であるが、他府県の出土地からみてもこのような扇を所有できたのは当時この地域でも有数の権力をもった人物かその人物に関係する人物であったと推察され、この扇の所有者は林口遺跡で確認された屋敷に居住していた人物ではなかろうか。このような扇は当時の武家にみられた貴族的な優雅さと武士的な武骨さを象徴していると考えられる。(下村)

(6) まとめ

今回の調査では、確認された遺構は平安時代末から鎌倉時代を始めとして近代にいたるものであった。以下本調査区を時代ごとに追ってみたい。

本調査区に初めて人の痕跡が認められるのは、平安時代末から鎌倉時代にかけての時期で、A区、B区を中心に多くの遺構が検出されている。本遺跡や周辺部に屋敷が造られ、中国を始めとして各地から搬入品が持ち込まれており、最も本遺跡が盛行していた時期である。しかし、室町時代に入ると林口遺跡第I調査地区の屋敷とは異なり、本遺跡に存在していた屋敷は廃絶してしまう。室町時代には屋敷は別の地へ移動してしまったとみられるが、この時期に本調査地区の北西に位置する残丘に林口城が築かれている。この林口城は具体的な築城時期、城主などは不明であるが、屋敷が廃絶されたあと軍事的な見地から、この地に城が築かれたものとみられる。

その後、近世中期まで人の痕跡は途絶えてしまう。近世中期以降には少数であるが遺構が確認されており、人の生活痕がみられるが実態は不明である。近世以降、本調査地区は耕作地に変化したと考えられ、昭和期には食料増産を目的として、湿田からより生産能力の高い乾田に変えるため多くの暗渠が埋設されている。現在は土佐市バイパスから四国横断自動車道土佐インターに向けてのアクセス道路が建設され、遺跡周辺の環境も大きく変化しようとしている。(下村)

2. 蓮池城跡北面遺跡

(1) 中世

今回蓮池城跡北面遺跡で確認された唯一の時期である。全域で遺物包含層並びに遺構が検出されているが、本遺跡で集落の中心となる掘立柱建物跡が検出されたのはA区のみであった。この建物跡は梁間2間、桁行6間の東西棟建物で、この建物の西側には溝跡(SD-102)が南北に走っている。この掘立柱建物の棟方向はN-75°-E、溝跡の主軸方向はN-16°-Wであるので、ほぼ建物跡と溝跡は直行し、この溝跡は掘立柱建物に伴うものとみられる。この掘立柱建物は規模から屋敷の母屋であると考えられ、時期的には12世紀後半から13世紀前半にかけてのものであり、林口遺跡で確認

2. 蓮池城跡北面遺跡 (2) まとめ

された屋敷跡とほぼ同時期である。また、建物跡の西側を走る溝跡の規模は幅0.77～1.16m、深さ0.27～0.74mを測る。林口遺跡第Ⅰ調査地区のA区で検出された区画溝は幅1.50～2.60m、深さ0.78～1.59mを測り⁸⁸、林口遺跡第Ⅱ調査地区のA区で検出された区画溝は幅1.98～3.16m、深さ0.19～0.37mで蓮池城跡北面遺跡A区で検出された区画溝より規模が大きい。また、溝跡の東側にはほぼ同時期とみられる畝状遺構(SU-101)が検出されており、畑作が行われていたと推察される。このことからこの溝跡は屋敷を区画する溝としての性格より居住域と生産域を区画する溝としての性格が強いのではないかと推察される。平成9・10年度に発掘調査が実施された天神遺跡第Ⅱ調査地区でも、13世紀頃の屋敷に付随する畝状遺構が検出されており、天神遺跡でも区画溝で居住域と生産域を区別していることが判明している⁸⁹。このことから本遺跡でも居住域と生産域は明確に区別されていたのではなかろうか。また、本遺跡を地勢的にみると北に向けて落ち込んでおり、低湿地からの立ち上がり部分に立地しているとみられる。本調査区を南北に縦断しているSD-102は、居住域と生産域を区画するとともに、低湿地への排水路の役目も担っていたと考えられる。

また、A区では珪藻分析を行っているが、遺物包含層である第Ⅲ層と検出面である第Ⅳ層からは珪藻がほとんど検出されず、本調査区に建物が造られていた時期は乾燥した環境であったことが判明しており、居住地に適した環境であったものとみられる。しかし、上層の第Ⅱ層では陸生珪藻が検出され好流水性種が伴っており、本調査区では屋敷が廃絶された後は、流水の影響を受ける低湿地に変貌しており、居住地として適さない環境に変化している。

本調査区は調査面積が狭く、確認された掘立柱建物跡も1棟のみであり、屋敷の全体像は判然としないが、天神遺跡と同様に当時の一般的な屋敷の形態を示しているのではないかとみられる。(下村)

(2) まとめ

今回の調査では平安時代末から鎌倉時代の遺構のみ確認され、この時期以前の遺構は確認されなかった。遺物ではスクレイパーが1点出土しているが、時期は明確ではない。本調査区は蓮池城跡がある残丘からのびた微高地に立地しているとみられ、天神遺跡や林口遺跡と同じ立地条件であると考えられる。両遺跡では古くは縄文時代後期から人の痕跡が確認されているが、本遺跡で人の痕跡が認められるのは平安時代末から鎌倉時代にかけての時代のみである。本遺跡には平安時代末から鎌倉時代にかけて屋敷が造られたとみられ、人間の生活痕跡が認められるが、林口遺跡のように戦国時代末までは屋敷は存続せず、廃絶している。戦国時代末期、本調査区付近は堀田であったと推定されており⁹⁰、土壌分析の結果からも判明しているように、鎌倉時代以降は低湿地あるいは水田と化し、屋敷は別の場所に移動したとみられる。

以後、人の痕跡は途絶え、近世中期まで耕作地に姿を変えたとみられる。高岡町は近世中期より後免、山田、野市、赤岡、中村と並ぶ六大在郷町として発展し、旧街道沿いに立地する本遺跡にも商家などが立ち並んでいたと考えられる。そして、明治以降、近代日本の始まりと共に高岡町はさらなる発展をとげ、本遺跡を含め周辺部は商業地、住宅地へと変貌し、現在本遺跡には基幹道路である土佐市バイパスが建設されている。(下村)

3. 結語

平成8年度から実施してきた土佐市バイパス建設に伴う発掘調査は本書をもって完了する。これらは当初計画されていた土佐市都市計画道路以西の調査地区で、光永・岡ノ下遺跡、天神遺跡、林口遺跡、蓮池城跡北面遺跡の4遺跡を調査対象としたものである。平成12年度からは東への延伸に伴って野田遺跡、京間遺跡の発掘調査が実施されており、さらに平成14年度以降は仁淀大橋までの最終区間での試掘調査が計画され、新たに遺跡が発見される可能性もあろう。

ここでは、先の4遺跡の調査成果をまとめ結語としたい。

まず、最初に挙げることができるのは、古代末から中世初めにかけての一連の遺構・遺物の発見であろう。各遺跡から屋敷を始めとした集落跡が確認され、多量の土師質土器や搬入品が出土した。中でも湖州方鏡、蝙蝠扇、完形の龍泉窯系青磁碗など県内では初出土品も少なくなく、これまで調査例が少なく不明瞭であった仁淀川右岸の様相も徐々に明らかになってきた。さらに、土師質土器を再検討し得る資料を得たことも大きな成果の一つである。また、在地産を示唆する瓦器の出土や高知平野中央部との様相の違いを示す土器の出土など地域性を指摘できる資料も多数得ることができた。地味ではあるが「はかけ」跡とみられる畝状遺構の発見も重要であろう。特に、古代、中世、近世の3時期の畝状遺構がほぼ同一箇所から重複して検出されたことは、その立地を考えるうえで注目され、中世のそれは溝によって屋敷とは区画された部分に作られており、生活域と生産域とが区分されていたことがわかる。

時代別にみても林口遺跡から縄文後期の突帯文成立期とされる松ノ木式の発見を挙げることができる。高知平野では初めての確認でもあり、その分布を考えるうえで重要であろう。弥生時代では、林口遺跡と天神遺跡から出土した前期前半の土器を挙げることができる。遺構は確認されなかったものの周辺部で集落が形成されていたことが推定される。遺構・遺物がまとまって確認されたのは後期後半で、住居跡を始め祭祀関連遺構を天神遺跡で確認することができた。住居跡が完全な形で確認されたのは土佐市ではこれが最初である。古墳時代では光永・岡ノ下遺跡で検出した祭祀跡を挙げることができる。居徳遺跡群との関連性や中村市具同中山遺跡群や古津賀遺跡などの祭祀形態との比較を行っていく必要もあろう。古代では、光永・岡ノ下遺跡から出土した暗文の土師器や緑釉陶器などを挙げることができる。官衙関連遺構の確認には至らなかったものの周辺部には必ず高岡郡の中心的施設が存在したであろうことが想像に難くない。近世では桶側を6段積重ねた井戸跡の検出を挙げることができよう。中世の井戸跡は田村遺跡群を始め比較的多くの調査例があるが、近世のものは少なく、井戸の変遷を考えるうえで注目されよう。

このような考古学的成果のみならず仁淀川右岸の遺跡の立地についてもその状況が判明した。すなわち、仁淀川に近い遺跡、具体的には光永・岡ノ下遺跡、野田遺跡、京間遺跡は仁淀川の南北に細長くのびる自然堤防上に立地し、天神遺跡以西の遺跡については低位段丘の残丘裾部およびそれからのびる微高地上に形成される。後者は低湿地と隣接しており、当時は比較的起伏した地形を呈していたものと推察される。

以上、これまでの成果を概略したが、現在も調査は続行中であり、新たな成果に期待される。

3. 結語

註

- (1) 廣田佳久「第V章考察」『岩井口遺跡，ニノ部遺跡・城跡』佐川町教育委員会 1995年3月
- (2) 『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－ 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年2月
- (3) 平端部北側は現況では幅約5mと広がっているが，その残丘斜面部は山止ブロック工事が行われており，幅が広がっているのはその影響とみられ当時は平端部南側と同じような幅ではなかったかとみられる。
- (4) 『西鴨地遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年3月
- (5) 森田稔「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995年
- (6) 『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年2月
- (7) 尾上実・森島康雄・近江俊秀「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995年
- (8) (6)に同じ
- (9) 『光永・岡ノ下遺跡』－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年11月
- (10) 『土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』として2001年度に刊行予定である。
- (11) (4)に同じ
- (12) (4)に同じ
- (13) 『天崎遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999年3月
- (14) 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』高知県香美郡土佐山田町教育委員会 1990年
- (15) 『高柳遺跡・高柳土居城跡発掘調査報告書』高知県香美郡土佐山田町教育委員会 1992年
- (16) 『奥谷南遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年3月
- (17) 『尾立遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年3月
- (18) 奈半利町教育委員会『奈半利町町内遺跡発掘調査概要報告書』 2000年3月
- (19) (13)(15)に同じ
- (20) 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年3月
- (21) 尾上実・森島康雄・近江俊秀「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年3月
- (22) 『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所 1985年3月
- (23) (5)と同じ
- (24) 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994年
- (25) 山本大「中世編」『土佐市史』土佐市
- (26) (2)に同じ
- (27) 『天神遺跡Ⅱ』－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－ 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年3月
- (28) 『日本城郭大系 第15巻 香川・徳島・高知』新人物往来社 1979年

参考文献

- 『高知県中世城跡分布調査報告書』高知県教育委員会1984年
『長宗我部地検帳高岡郡上の一』高知県立図書館1984年
矢野城樓『土佐の政所』高知県立図書館1963年
中村清兄『日本の扇』1942年 河原書店

第 V 章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. 林口遺跡

(1) 花粉分析

① はじめに

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解され難く堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があるが、地表に落下後、土壌中や多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

② 試料

試料は、II-B区西壁の第V層(試料4, 中世)・第VI層(試料5), II-D区第VIII層(試料6)・第XI層(試料7)・第XV層(試料8), SX-401埋土1(試料9)・埋土2(試料10)・埋土3(試料11)の計8点である。

③ 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1,500rpm, 2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300~1,000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。同時に寄生虫卵も観察した。

1. 林口遺跡 (1) 花粉分析

④ 結果

a. 分類群

出現した分類群は、樹木花粉23, 樹木花粉と草本花粉を含むもの3, 草本花粉23, シダ植物孢子3形態の計52である。これらの学名と和名および粒数をTab.14~16に示し、主要な分類群をPL.97に示す。また、花粉総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムをFig.180・181に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属, ツガ属, マツ属複雑維管束亜属, スギ, コウヤマキ, イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科, ハンノキ属, カバノキ属, クマシデ属-アサダ, クリ, シイ属, ブナ属, コナラ属コナラ亜属, コナ

Tab.14 林口遺跡第Ⅱ調査地区における花粉分析結果1

分 類 群		B区		D区					
学 名	和 名	4	5	6	7	8	9	10	11
Arboreal pollen	樹木花粉								
<i>Abies</i>	モミ属	—	—	—	1	3	—	—	—
<i>Tsuga</i>	ツガ属	—	3	—	2	5	—	—	—
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑維管束亜属	—	—	—	8	5	—	—	—
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	—	1	—	2	10	—	—	—
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	—	1	—	—	1	—	—	—
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae</i>	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2	—	—	—	3	—	—	—
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	—	1	—	1	—	—	—	—
<i>Betula</i>	カバノキ属	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	2	—	—	1	1	—	—	—
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1	2	—	1	5	—	—	—
<i>Castanopsis</i>	シイ属	31	11	—	9	43	—	—	—
<i>Fagus</i>	ブナ属	—	1	—	1	—	—	—	—
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	2	6	—	6	10	—	—	—
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	19	7	—	9	27	—	—	—
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	—	—	—	1	1	—	—	—
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	—	—	—	3	—	—	—	—
<i>Rutaceae</i>	ミカン科	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1	1	—	—	1	—	—	—
<i>Rhus</i>	ウルシ属	1	—	—	—	—	—	—	—
<i>Acer</i>	カエデ属	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Vitis</i>	ブドウ属	—	—	—	1	2	—	—	—
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Diospyros</i>	カキ属	—	—	—	1	—	—	—	—

ラ属アカガシ亜属, ニレ属—ケヤキ, エノキ属—ムクノキ, ミカン科, サンショウ属, ウルシ属, カエデ属, ブドウ属, グミ属, カキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科, バラ科, マメ科,

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属, サジオモダカ属, オモダカ属, イネ科, イネ属型, カヤツリグサ科, ミズアオイ属, タデ属, タデ属サナエタデ節, ギシギシ属, ソバ属, アカザ科—ヒユ科, ナデシコ科, アブ

Tab.15 林口遺跡第II調査地区における花粉分析結果2

分類群		B区		D区					
学名	和名	4	5	6	7	8	9	10	11
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
<i>Moraceae-Urticaceae</i>	クワ科—イラクサ科	1	—	—	33	—	—	—	—
<i>Rosaceae</i>	バラ科	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Leguminosae</i>	マメ科	1	—	—	1	4	—	—	—
Nonarboreal pollen	草本花粉								
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属—ミクリ属	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	1	—	—	—	—	—	—	—
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	—	—	—	—	1	—	—	—
<i>Gramineae</i>	イネ科	29	31	2	249	147	—	—	—
<i>Oryza type</i>	イネ属型	—	—	—	19	—	—	—	—
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	18	10	1	23	21	—	—	—
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Polygonum</i>	タデ属	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	2	—	1	1	—	—	—
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	アカザ科—ヒユ科	8	3	—	1	—	—	—	—
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	—	1	—	1	1	—	—	—
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科	7	—	—	3	1	—	—	1
<i>Geranium</i>	フウロソウ属	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Hydrocetyloideae</i>	チドメグサ亜科	1	1	—	—	9	—	—	—
<i>Apiodeae</i>	セリ亜科	1	1	—	1	2	—	—	—
<i>Justicia procumbens</i>	キツネノマゴ	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Valerianaceae</i>	オミナエシ科	—	—	—	—	1	—	—	—
<i>Lactucoideae</i>	タンポポ亜科	1	—	2	1	13	—	—	—
<i>Asteroideae</i>	キク亜科	1	—	—	2	7	—	—	—
<i>Xanthium</i>	オナモミ属	—	—	—	11	—	—	—	—
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	22	18	1	—	131	—	—	—

1. 林口遺跡 (1)花粉分析

ラナ科, フウロソウ属, チドメグサ亜科, セリ亜科, キツネノマゴ, オミナエシ科, タンポポ亜科, キク亜科, オナモミ属, ヨモギ属

[シダ植物孢子]

単条溝孢子, ミズワラビ, 三条溝孢子

[寄生虫卵]

回虫卵, 不明虫卵

b. 花粉群集の特徴

i II-B区

試料4および試料5の花粉群集の特徴は同様である。試料4・5では、イネ科, カヤツリグサ科, ヨモギ属の出現率が高くアカザ科-ヒユ科, アブラナ科の草本花粉, シイ属, コナラ属アカガシ亜属の出現率が高くコナラ属コナラ亜属の樹木花粉が伴われる。下位より試料5から試料4にかけては、イネ科がやや減少し, シイ属, コナラ属アカガシ亜属がやや増加する。

ii II-D区

下位より, 試料8ではイネ科, ヨモギ属の草本花粉が優占し, カヤツリグサ科やタンポポ亜科の草本花粉とシイ属, コナラ属アカガシ亜属の樹木花粉が伴われる。試料7では, イネ属型を含むイネ科が高率になり, カヤツリグサ科, クワ科-イラクサ科が伴われる。試料6は, 花粉がほとんど検出されない。

Tab.16 林口遺跡第II調査地区における花粉分析結果3

分類群		B区		D区					
学名	和名	4	5	6	7	8	9	10	11
Fern spore	シダ植物孢子	-	-	-	-	-	-	-	-
Monolate type spore	単条溝孢子	15	33	2	10	6	-	-	-
Celopteris	ミズワラビ	-	1	-	1	-	-	-	-
Trilate type spore	三条溝孢子	7	13	-	10	120	-	1	-
Arboreal pollen	樹木花粉	59	34	0	51	117	0	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2	0	0	35	4	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	90	67	6	319	335	0	0	1
Total pollen	花粉総数	151	101	6	405	456	0	0	1
	試料1cc中の花粉数	1.1	7.1	4.2	1.9	1.5	0	0	0
		×10 ³	×10 ²	×10	×10 ⁴	×10 ⁴	×10	×10	×10
Unknown pollen	未同定花粉	5	-	2	8	4	-	-	-
Fern spore	シダ植物孢子	22	47	2	21	126	0	1	0
Helminth eggs	寄生虫卵	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ascaris</i>	回虫卵	-	-	-	1	-	-	-	-
Unknown eggs	不明虫卵	-	-	-	1	-	-	-	-
Total	計	(-)	(-)	(-)	2	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

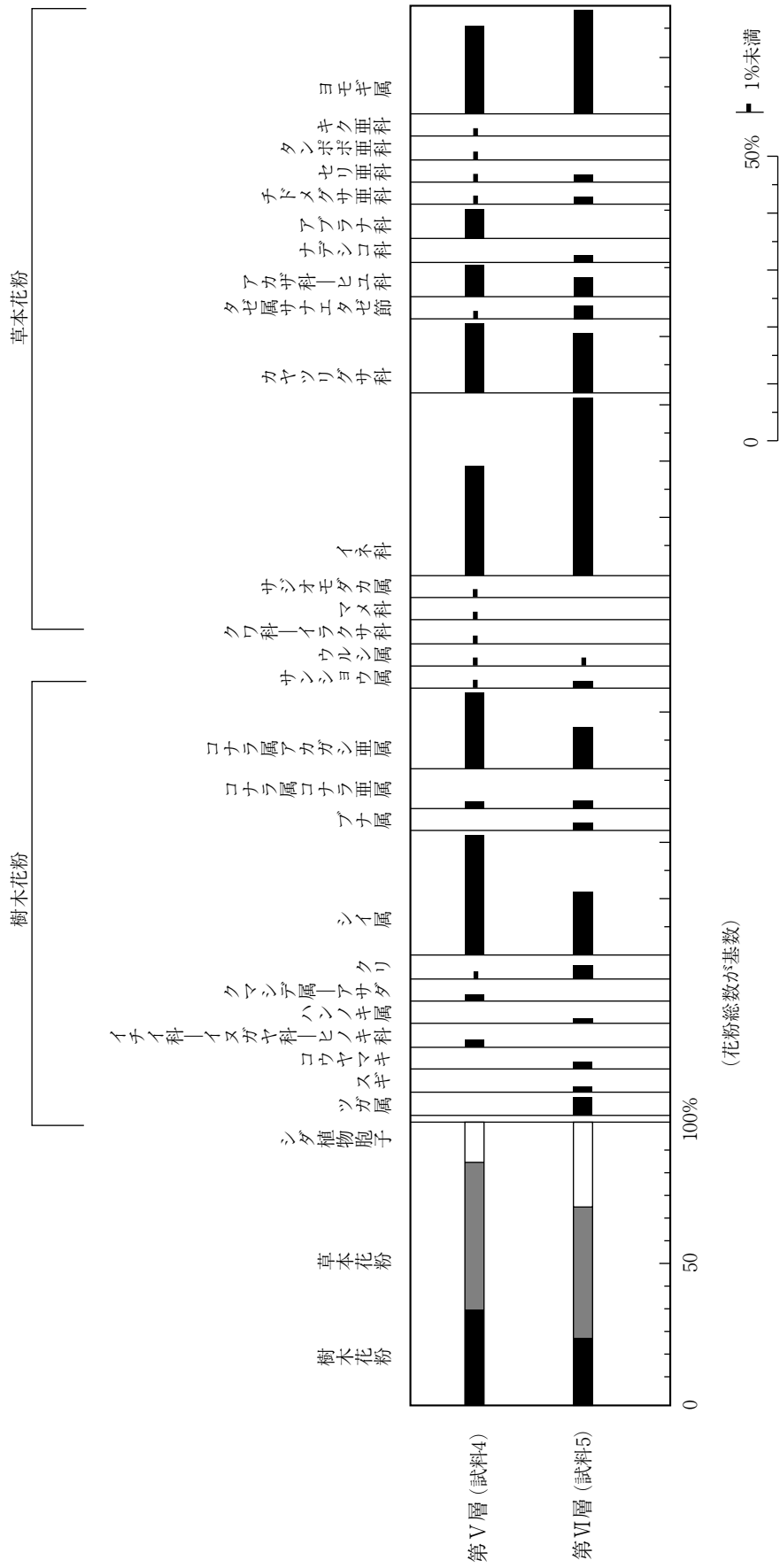


Fig.180 林口遺跡第II調査地区-B区における花粉ダイアグラム

⑤ 花粉分析から推定される植生と環境

i II-B区

第VI層(試料5)および第V層(試料4)の時期、花粉群集の特徴は同様である。周辺はイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の草本が多く繁茂し、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科なども生育していた。いずれの草本も人里植物ないし耕地雑草かそれを含む分類群であり、集落や耕地などの人為環境が分布していたと推定される。なお、アカザ科-ヒユ科とアブラナ科がやや多いことから、畑地が多い可能性がある。

樹木では、シイ属、コナラ属アカガシ亜属がやや多く、周辺地域にはシイやカシの照葉樹林が分布していたと推定される。

ii II-D区

下位より、第XV層(試料8)は、周囲にイネ科、ヨモギ属を主にカヤツリグサ科やタンポポ亜科の草本が繁茂し、これらの草本が人里植物ないし耕地雑草かそれを含む分類群であるため、集落や耕地などの人為環境が分布していたことが推定される。樹木ではシイ属、コナラ属アカガシ亜属が多く、周辺地域にはシイやカシの照葉樹林が分布していた。

第XI層(試料7)の時期になると、イネ属型を含むイネ科が増加し、堆積地ないし周囲で水田が著しく拡大したと推定される。クワ科-イラクサ科は、生態上から、カラムシのような人里植物が推定される。ソバ属が検出され、ソバなどの畑作も行われていたと考えられる。

第VIII層(試料6)では、花粉がほとんど検出されず、花粉などの植物性微遺体の分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境が推定される。

⑥ まとめ

林口遺跡の花粉分析を行った結果、中世およびより以前において、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科を主とする人里植物ないし耕地雑草が分布し、集落、水田、畑地の人為環境が広がっていたと推定された。森林植生としては、シイ(シイ属)やカシ(コナラ属アカガシ亜属)の照葉樹林の分布が推定された。

参考文献

- 中村純(1973)『花粉分析』古今書院, p.82-110.
- 金原正明(1993)「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎(1973)「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集, 60p.
- 中村純(1980)「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集, 91p.
- 中村純(1974)「イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13, p.187-193.
- 中村純(1977)「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号, p.21-30.

1. 林口遺跡 (2) 珪藻分析

(2) 珪藻分析

① はじめに

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し、水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

② 試料

試料は、II-B区西壁の第V層(試料4, 中世)・第VI層(試料5), II-D区第VIII層(試料6)・第XI層(試料7)・第XV層(試料8), SX-401埋土1(試料9)・埋土2(試料10)・埋土3(試料11)の計8点である。

③ 方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1gを秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5~6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600~1,500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数については珪藻被殻が100個体以上にまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

④ 結果

試料から出現した珪藻は、淡水生種47分類群である。計数された珪藻の学名と個数をTab.17・18に示し、主要な分類群をPL.98に示す。また、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムをFig.182に示す。珪藻分析結果はFig.182に示すように分帯の区分を行った。

i II-B区

西壁の試料4・5はほとんど珪藻は検出されなかった。

ii II-D区

試料6~8では、試料7から比較的多くの珪藻が検出された。試料7では、好止水性種の*Pinnularia subcapitata*, *Eunotia pectinalis* v. *minor*, *Pinnularia acrosphaeria*, 好流水性種の*Cymbella minuta*, *Navicula elginensis*, 不定性ないし不明種の*Navicula arvensis*の出現率が高い。*Pinnularia subcapitata*は陸生珪藻, *Eunotia pectinalis* v. *minor*は池沼湿地付着生環境指標種群, *Cymbella minuta*の中~下流性河川環境指標種群でもある。

SX-401の試料9~11では、試料9から珪藻が検出され、試料10・11はほとんど珪藻が検出されなかった。試料9では、*Pinnularia subcapitata*, *Navicula mutica*, *Nitzschia amphibia*, *Amphora montana*, *Pinnularia borealis*の陸生珪藻がほとんどを占め、他は低率である。

⑤ 考察

i II-B区

第V層(試料4, 中世)・第VI層(試料5)はほとんど珪藻は検出されず, 珪藻の生育できない乾燥した堆積環境が推定される。

ii II-D区

下位より, 第IV層(試料8)は珪藻がほとんど検出されず, 珪藻の生育できない乾燥した堆積環境が推定される。第XI層(試料7)では, 池沼湿地付着生環境指標種群を含む好止水性種と中～下流性

Tab.17 林口遺跡第II調査地区における珪藻分析結果1

分類群	B区		D区					
	4	5	6	7	8	9	10	11
貧塩性種								
<i>Achnanthes brevipes</i> v. <i>intermedia</i>	—	2	—	—	—	—	—	—
<i>Achnanthes hungarica</i>	—	—	—	—	—	1	—	—
<i>Amphora montana</i>	—	—	—	2	—	28	2	—
<i>Amphora ovalis</i>	—	—	—	2	—	1	—	—
<i>Caloneis bacillum</i>	—	—	—	6	—	—	—	—
<i>Caloneis silicula</i>	—	—	—	6	—	—	—	—
<i>Caloneis</i> sp.	—	—	2	3	—	—	—	—
<i>Cymbella gracilis</i>	—	—	—	2	—	—	—	—
<i>Cymbella minuta</i>	—	—	—	26	—	1	—	—
<i>Eunotia pectinalis</i> v. <i>minor</i>	—	—	—	31	—	—	—	—
<i>Eunotia pectinalis</i> v. <i>undulata</i>	—	—	—	2	—	—	—	—
<i>Frustulia rhomboides</i> v. <i>saxonica</i>	—	—	—	2	—	—	—	—
<i>Frustulia vulgaris</i>	—	—	—	2	—	—	—	—
<i>Gomphonema gracile</i>	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Gomphonema parvulum</i>	—	—	—	5	—	—	—	—
<i>Hantzschia amphioxys</i>	—	—	6	10	—	41	4	—
<i>Navicula arvensis</i>	—	—	—	37	—	1	—	—
<i>Navicula contenta</i>	—	—	—	3	—	8	—	—
<i>Navicula cryptocephala</i>	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Navicula cryptotenella</i>	—	—	—	—	—	6	—	—
<i>Navicula cuspidata</i>	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Navicula elginensis</i>	—	—	—	23	—	2	—	2
<i>Navicula elginensis</i> v. <i>neglecta</i>	—	—	—	7	—	2	—	—
<i>Navicula gastrum</i>	—	—	—	6	—	—	—	—
<i>Navicula gregaria</i>	—	—	—	—	—	4	—	—
<i>Navicula mutica</i>	—	—	2	7	2	55	2	2
<i>Navicula pupula</i>	—	2	—	3	—	1	—	—

1. 林口遺跡 (2) 珪藻分析

河川環境指標種群を含む好流水性種が優占し、河川より流れ込んで浅く滞水する環境が推定される。以上から、引水を行う水田の環境の可能性が高い。

SX-401では、埋土3(試料11)、埋土2(試料10)は珪藻が少なく、珪藻が生育しないか堆積されない環境が推定される。試料となった堆積物が礫であることから、微細な珪藻が堆積されなかったと考えられる。埋土1(試料9)は陸生珪藻が優占し、湿った土壌の堆積環境が推定される。

参考文献

小杉正人(1986)「陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植生史研究』第1号,

Tab.18 林口遺跡第Ⅱ調査地区における珪藻分析結果2

分類群	B区		D区					
	4	5	6	7	8	9	10	11
<i>Neidium affine</i>	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Neidium affine</i> v. <i>longiceps</i>	—	—	—	7	—	—	—	—
<i>Neidium bisulcatum</i>	—	—	—	3	—	4	—	—
<i>Nitzschia amphibia</i>	—	—	—	5	—	2	—	—
<i>Nitzschia obtusa</i>	—	—	6	—	—	—	—	—
<i>Nitzschia</i> sp.	—	—	4	3	—	11	—	—
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	—	—	—	16	—	—	—	—
<i>Pinnularia borealis</i>	—	—	—	1	4	17	—	—
<i>Pinnularia brevicostata</i>	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Pinnularia gibba</i>	—	—	—	3	—	1	—	—
<i>Pinnularia interrupta</i>	—	—	—	6	—	1	—	—
<i>Pinnularia microstauron</i>	—	—	—	7	—	1	—	—
<i>Pinnularia</i> sp.	—	—	—	3	—	3	—	—
<i>Pinnularia subcapitata</i>	2	—	22	44	—	83	—	—
<i>Pinnularia viridis</i>	—	—	—	7	—	2	—	—
<i>Stauroneis acuta</i>	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Stauroneis anceps</i>	—	—	—	6	—	—	—	—
<i>Stauroneis smithii</i>	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Surirella angusta</i>	—	—	—	1	—	—	—	—

貧-中塩性種								
<i>Rhopalodia gibberula</i>	—	—	—	—	2	—	—	—
合計	2	4	42	304	8	276	8	4
未同定	0	0	6	40	0	91	0	0
破片	14	4	16	896	156	355	16	4

試料1g中の殻数密度	0.4	0.8	8.4	1.3	1.6	1.1	1.6	0.8
	×10 ³	×10 ³	×10 ³	×10 ⁶	×10 ³	×10 ⁵	×10 ³	×10 ³

完形殻保存率 (%)	12.5	50.0	75.0	27.7	4.9	50.8	33.3	50.0

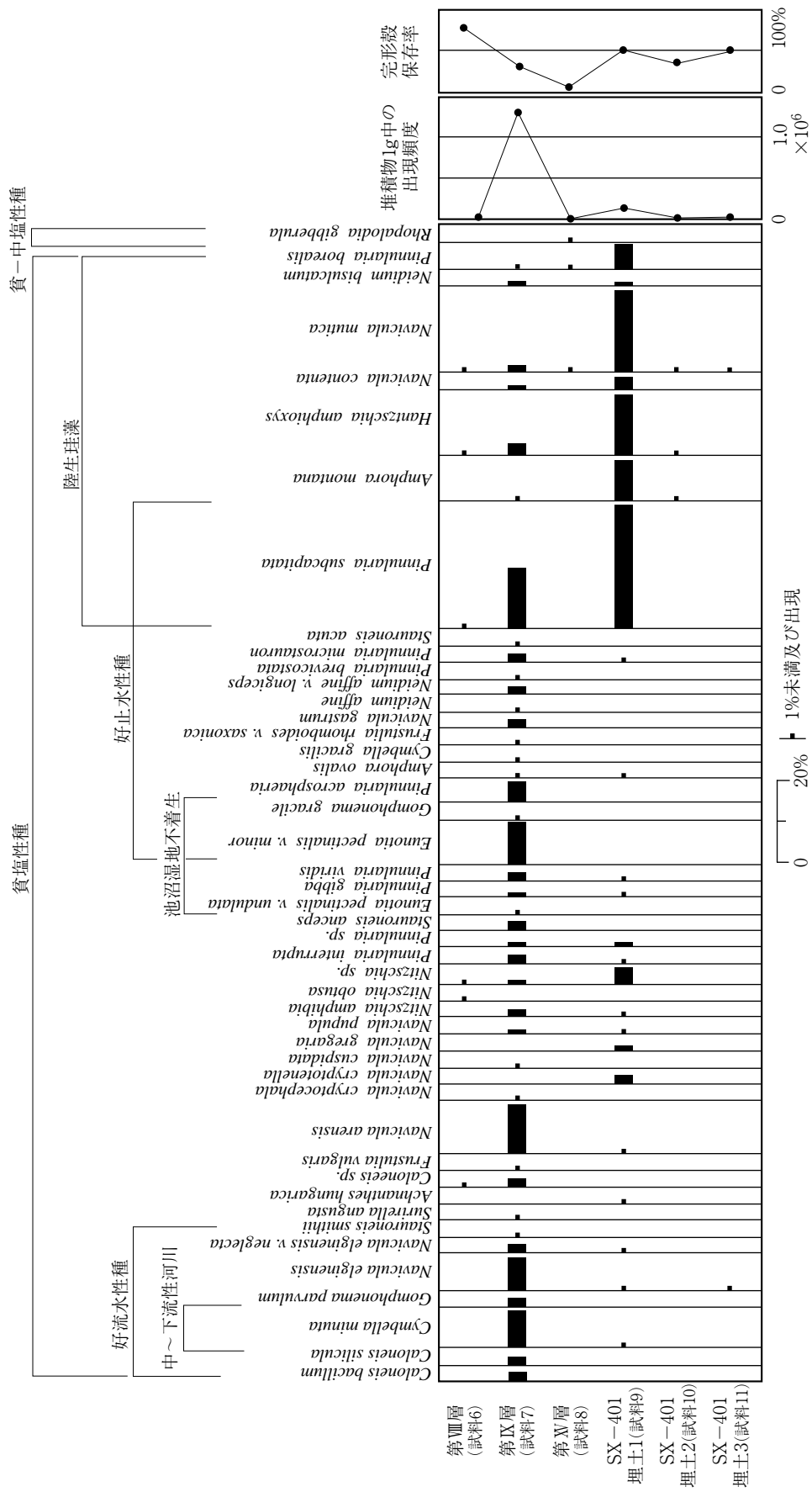


Fig.182 林口遺跡第Ⅱ調査地区-D区における主要珪藻ダイアグラム

1. 林口遺跡 (2) 珪藻分析

植生史研究会, p.29-44.

小杉正人(1988)「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27, p.1-20.

安藤一男(1990)「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示(1991)「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』9, p.23-45.

Asai,K.&Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p.35-47.

Hustedt, F.(1930) Bacillariophyta, Die Susswasser Flora Mitteleuropas,10 Gustav Fischer, Jena, 466p.

Patrick, R.eimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Patrick, R.eimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.



Fig.183 サンプリング箇所土層断面写真

2. 蓮池城跡北面遺跡

(1) 花粉分析

① はじめに

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解され難く堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があるが、地表に落下後、土壌中や多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

② 試料

試料は、蓮池城跡北面遺跡のA区南壁の第Ⅱ層(試料1, 灰黄褐色砂質シルト層, 中世), 第Ⅲ層(試料2, 灰黄褐色シルト層), 第Ⅳ層(試料3, 灰黄色粘土質シルト層)の3点である。

③ 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1,500rpm, 2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1,000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

④ 結果

a. 分類群

出現した分類群は、草本花粉3, シダ植物胞子2形態の計5である。これらの学名と和名および粒

2. 蓮池城跡北面遺跡遺跡

数をTab.19に示し、主要な分類群をPL.99に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔草本花粉〕

イネ科, キク亜科, ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子, 三条溝孢子

b. 花粉群集の特徴

試料1~3とも花粉が検出されないか、出現しないかであった。試料2・3からは、草本花粉のイネ科などが出現する。他にシダ植物単条溝孢子が出現する。

⑤ 花粉分析から推定される植生と環境

分析の結果、第Ⅱ層(試料1, 灰黄褐色砂質シルト層, 中世), 第Ⅲ層(試料2, 灰黄褐色シルト層), 第Ⅳ層(試料3, 灰黄色粘土質シルト層)からは、花粉が検出されなかつたか検出であった。花粉がほとんど検出されないため、A区の第Ⅱ~Ⅳ層の時期は花粉などの有機質微遺体の分解する乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定される。詳細は不明だが、第Ⅲ・Ⅳ層はイネ科やシダ植物の草本が生育していたと考えられる。

参考文献

中村純(1973)『花粉分析』古今書院, p.82-110.

金原正明(1993)「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎(1973)「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集, 60p.

Tab.19 蓮池城跡北面遺跡における花粉分析結果

分類群		A区		
学名	和名	1	2	3
Nonarboreal pollen	草本花粉			
<i>Gramineae</i>	イネ科	—	2	1
<i>Asteroideae</i>	キク亜科	—	1	—
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	—	1	1
Fern spore	シダ植物孢子	—	—	—
<i>Monolate type spore</i>	単条溝孢子	—	3	1
<i>Trilate type spore</i>	三条溝孢子	—	—	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	4	2
Total pollen	花粉総数	0	4	2
	試料1cc中の花粉数	0×10	2.8×10	1.2×10
Fern spore	シダ植物孢子	0	3	2
Helminth eggs	寄生虫卵	(—)	(—)	(—)
	明らかな消化残渣	(—)	(—)	(—)

中村純(1980)「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集, 91p.

中村純(1974)「イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13, p.187-193.

中村純(1977)「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号, p.21-30.

(2) 珪藻分析

① はじめに

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し、水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

② 試料

試料は蓮池城跡北面遺跡のA区南壁の第Ⅱ層(試料1, 灰黄褐色砂質シルト層, 中世)・第Ⅲ層(試料2, 灰黄褐色シルト層)・第Ⅳ層(試料3, 灰黄色粘土質シルト層)の3点である。

③ 方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1gを秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5, 6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600~1,000倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数については珪藻被殻が100個体以上にまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

④ 結果

試料から出現した珪藻は、淡水生種22分類群である。計数された珪藻の学名と個数をTab.20に示し、主要な分類群をPL.100に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムをFig.184に示す。

A区南壁の第Ⅱ層からは比較的多くの珪藻が検出されたが、第Ⅲ・Ⅳ層からはほとんど検出されなかった。第Ⅱ層では、*Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia subcapitata*の陸生珪藻が優占する。*Pinnularia subcapitata*は好止水性種でもある。他に好流水性種の*Navicula elginensis v.neglecta*などや*Navicula cryptotenella*などが低率に出現する。

⑤ 考察

以上の分析結果から、蓮池城跡北面遺跡のA区南壁では、下部より第Ⅲ層(試料2, 灰黄褐色シルト層)、第Ⅳ層(試料3, 灰黄色粘土質シルト層)は珪藻があまり検出されず、乾燥した環境が推定される。

2. 蓮池城跡北面遺跡遺跡

第Ⅱ層(試料1, 灰黄褐色砂質シルト層, 中世)は, 陸生珪藻が優占し好流水性種などが伴われることから, 陸生珪藻の生育する湿った土壌の堆積環境であり, 流水の影響のある堆積環境が考えられる。

参考文献

小杉正人(1986)「陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—」『植生史研究』第1号

Tab.20 蓮池城跡北面遺跡における珪藻分析結果

分類群	A区		
	1	2	3
貧塩性種			
<i>Amphora montana</i>	96	—	2
<i>Amphora ovalis</i>	—	—	2
<i>Caloneis silicula</i>	2	—	—
<i>Caloneis sp.</i>	—	2	2
<i>Cyclotella stylorum</i>	2	—	—
<i>Gomphonema parvulum</i>	—	—	2
<i>Gyrosigma sp.</i>	4	—	—
<i>Hantzschia amphioxys</i>	28	—	4
<i>Navicula cryptotenella</i>	8	—	—
<i>Navicula cuspidata</i>	2	—	—
<i>Navicula elginensis v. neglecta</i>	8	—	2
<i>Navicula kotschyi</i>	2	—	—
<i>Navicula mutica</i>	4	4	—
<i>Navicula sp.</i>	—	2	—
<i>Navicula v. undulata</i>	4	—	—
<i>Navicula yuraensis</i>	2	—	—
<i>Nitzschia amphibia</i>	2	—	—
<i>Nitzschia sp.</i>	6	—	16
<i>Pinnularia sp.</i>	2	—	—
<i>Pinnularia subcapitata</i>	14	2	—
<i>Pinnularia viridis</i>	—	—	2
<i>Surirella angusta</i>	4	—	—
真—中塩性種			
<i>Cyclotella stylorum</i>	2	—	—
合計	192	10	32
未同定	36	2	2
破片	376	54	94
試料1g中の殻数密度	7.5	2.0	6.4
	×10 ⁴	×10 ³	×10 ³
完形殻保存率 (%)	37.7	18.2	26.6

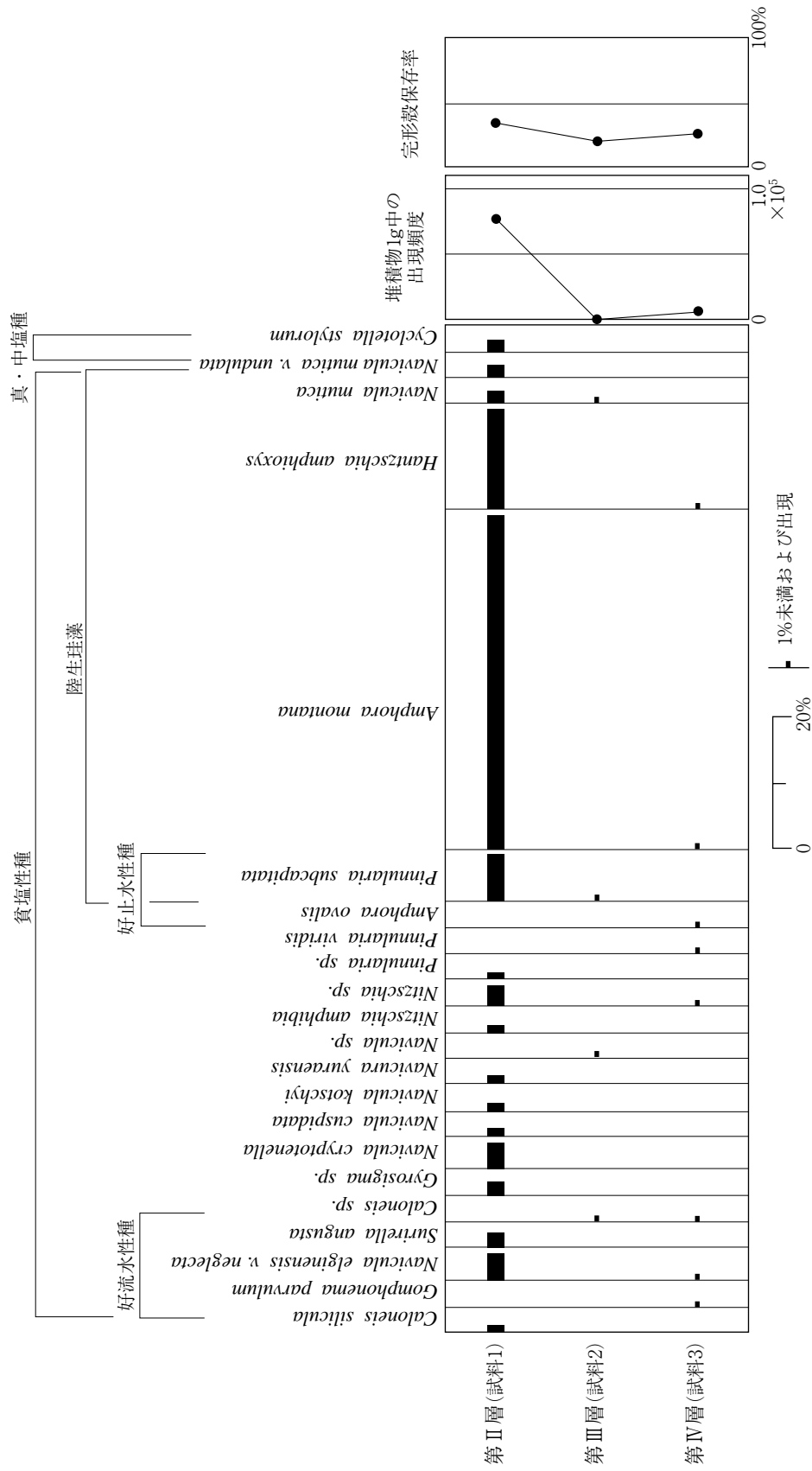


Fig.184 蓮池城跡北面遺跡-A区における主要珪藻ダイアグラム

2. 蓮池城跡北面遺跡遺跡

植生史研究会, p.29-44.

小杉正人(1988)「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27, p.1-20.

安藤一男(1990)「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示(1991)「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』9, p.23-45.

Asai,K.&Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p.35-47.

Hustedt, F.(1930) Bacillariophyta, Die Susswasser Flora Mitteleuropas,10 Gustav Fischer, Jena, 466p.

Patrick, R.eimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Patrick, R.eimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.

圖 版

林口遺跡第Ⅱ調査地区
(林口遺跡Ⅱ)



A区画像平面図(S=1/300)

PL.2



A区調査前全景(北西より)



A区調査前全景(南東より)



A区遺構検出状態(北西より)



A区遺構完掘状態(北西より)



A区遺構検出状態(南東より)



A区遺構完掘状態(南東より)



A区完掘状態(南上空より)



A区完掘状態(東上空より)

PL.6



A区南壁セクション1 (北東より)



A区南壁セクション2 (北より)



A区南壁セクション3 (北より)



A区東壁セクション (西より)

PL.8



SK-112(南より)



SD-112(西より)



SK-109(南より)



SK-112(南より)



SK-118(南より)



SK-112遺物出土状態(北より)



SK-112土師質土器(1202・1312)出土状態(北より)



SK-112土師質土器(1310)出土状態(北より)



SD-112(南より)



SD-112・124(東より)



SD-115(南より)



SD-141(南より)



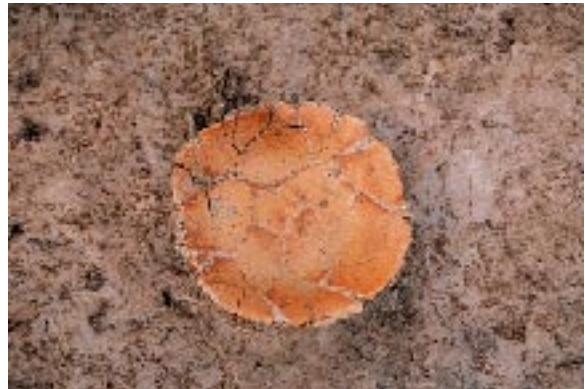
SD-148(南より)



SD-156(南より)



SD-157(南より)



SD-124土師質土器(1308)出土状態(南より)



SD-155遺物出土状態(南東より)



SD-108土師質土器(1256・1257)出土状態(南より)



B区画像平面図(S=1/250)



B区遺構検出状態(南より)



B区遺構完掘状態(南より)



B区遺構検出状態(北より)



B区遺構完掘状態(北より)

PL.14



B区遺構完掘状態(南上空より)



B区遺構完掘状態(西上空より)



B区西壁セクション(東より)



B区東壁セクション(南より)

PL.16



SB-201~203, SA-201~203(北より)



SD-201遺物出土状態(北東より)



SD-204遺物出土状態(西より)



SD-206遺物出土状態(東より)

PL.18



B区下層確認トレンチ北壁1(南より)



B区下層確認トレンチ北壁2(南より)



B区調査前全景(東より)



B区南西部完掘状態(北より)



B区南東部完掘状態(北より)



B区北部完掘状態(南より)



SK-201(南西より)



SK-203(南より)



SD-201・202(南より)



SD-201セクション(南より)



SD-203セクション(西より)



SD-203(西より)



SD-204(南より)



SD-204(北より)



SD-205(東より)



SD-205(西より)



SD-206(南より)



SD-206(北より)



P-202(東より)



B区北部ピット断ち割り状態(南より)



SP-201(西より)



SP-202(南より)



SD-201遺物出土状態(南西より)



SD-201白磁(2101)出土状態(西より)



SD-201土師質土器(2093)出土状態(北西より)



SD-201土師質土器(2087)出土状態(北より)



SD-201土師質土器(2096)出土状態(北西より)



SD-201土師質土器(2097)出土状態(西より)



SD-201土師質土器(2098)出土状態(西より)



SD-201土師質土器(2088)出土状態(北西より)



SD-205土師質土器(2106)出土状態(西より)



SD-205土師質土器(2107)出土状態(北より)



SD-206土師質土器(2108)出土状態(東より)



SD-206須恵器(2110)出土状態(南より)



C区画像平面図(S=1/250)



C区調査前全景(北より)



C区調査前全景(東より)



C区遺構検出状態(東より)



C区遺構完掘状態(北東より)



C区遺構検出状態(西より)



C区遺構完掘状態(西より)



C区遺構完掘状態(東上空より)



C区遺構完掘状態(西上空より)

PL.28



C区南壁セクション1(北より)



C区南壁セクション2(北より)



C区土坑セクション1(東より)



C区土坑セクション2(西より)



SK-301 · P-301(南より)



SK-302(東より)



C区土坑セクション(南より)



SD-301(東より)



SD-302(南より)



SD-302(東より)



SD-303(南より)



SD-304(東より)



D区画像平面図(S=1/250)



D区第Ⅲ層遺構検出状態(北より)



D区第Ⅲ層遺構完掘状態(北より)



D区第Ⅲ層遺構検出状態(南より)



D区第Ⅲ層遺構完掘状態(南東より)

PL.34



D区第Ⅲ層遺構検出状態(東より)



D区第Ⅲ層遺構完掘状態(東より)



D区第Ⅲ層遺構完掘状態(東上空より)



D区第Ⅲ層遺構完掘状態(南上空より)



D区第Ⅱ・Ⅲ層完掘状態(北より)



D区第Ⅱ・Ⅲ層完掘状態(北西より)



D区セクション1(南より)



D区セクション2(南より)

PL.38



SD-401(南より)



SX-401検出状態(東より)



SX-401セクション(北より)



SX-401完掘状態(南東より)



D区第Ⅲ層青磁(4086)出土状態(南より)



D区第Ⅲ層漆器(4087)出土状態(西より)



D区第Ⅵ層土師質土器(4144)出土状態(東より)



D区第Ⅶ層土師質土器(4283)出土状態1(北西より)



D区第Ⅶ層土師質土器(4283)出土状態2(北西より)



D区第Ⅷ層土師質土器(4449)出土状態(北西より)



SK-401(南より)



SK-402(南より)



1340

木製品(下駄)表



1340

木製品(下駄)裏

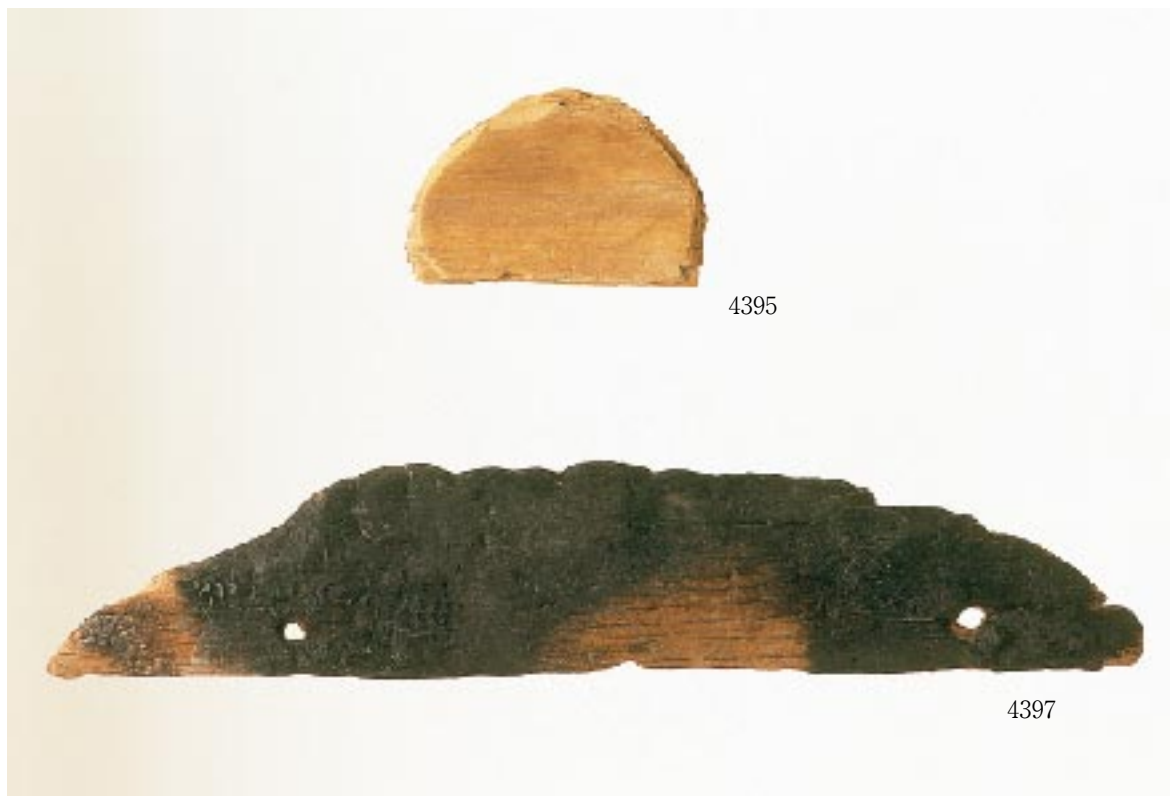
PL.42



木製品(扇)



木製品(箸)



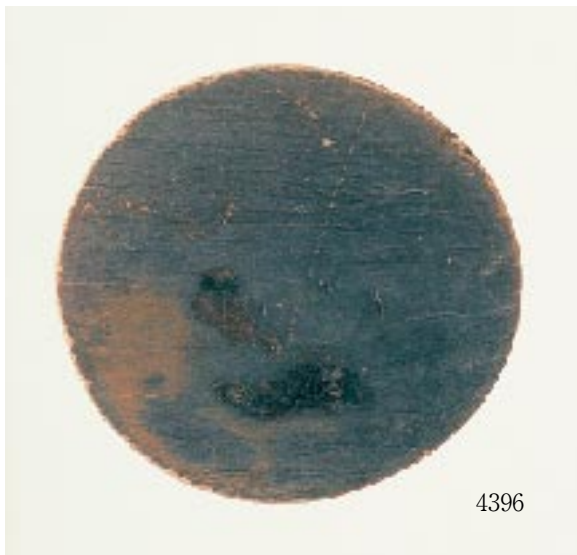
木製品(曲物)



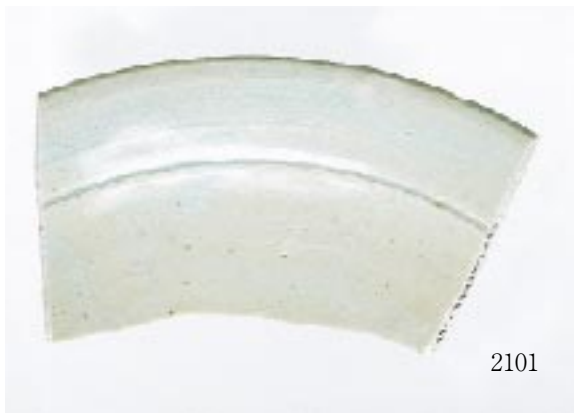
木製品(木錘)



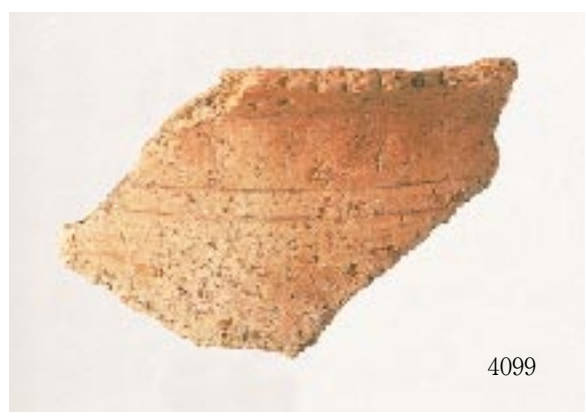
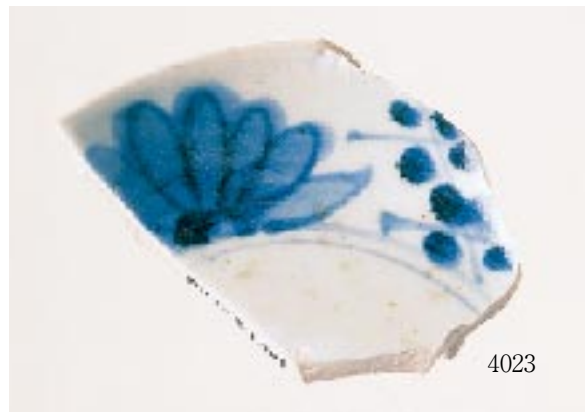
繩文土器(深鉢), 土師器(甕), 瓦器(椀), 土師質土器(杯・椀), 石製品(硯)



弥生土器(壺・甕), 土師質土器(杯・碗), 木製品(曲物)



弥生土器(壺), 土師器(長胴甕), 東播系須恵器(片口鉢), 土師質土器(羽釜), 白磁(碗), 青磁(碗), 土製品(土錘)



弥生土器(壺·甕), 瓦器(椀), 青磁(碗), 磁器(蓋·皿)



弥生土器(壺・甕), 土師器(甕), 土師質土器(釜), 石製品(鍋)



瓦器(小皿), 土師質土器(杯・小皿)



土師質土器(杯・小皿)



瓦器(碗・小皿), 土師質土器(杯・小皿), 石製品(砥石)



土師質土器(杯・皿・小皿)



瓦器(碗), 土師質土器(小皿)

PL.54



瓦器(碗·小皿), 土師質土器(杯·小皿), 青磁(皿)



瓦器(碗), 土師質土器(杯・小皿)



土師質土器(杯・小皿)



土師質土器(杯・小皿)



瓦器(碗), 土師質土器(杯・小皿)



土師質土器(杯・小皿), 古瀬戸(緑釉小皿), 青磁(皿)



土師質土器(杯・小皿)



土師質土器(杯・小皿)



須惠器(壺), 土師質土器(杯・小皿)



土師質土器(杯·小皿), 陶器(碗), 磁器(蓋·紅皿), 青花(皿), 銅製品(煙管)



土師質土器(杯・小皿)



瓦器(碗), 土師質土器(杯・小皿)



瓦器(碗), 土師質土器(杯·小皿·釜), 石製品(鍋)



東播系須恵器(碗), 土師質土器(杯)



土師質土器(杯)



土師質土器(杯)



土師質土器(杯・小皿)



土師質土器(小皿)



土師質土器(小皿)



土師質土器(小皿)



土師質土器(小皿)



瓦器(碗), 東播系須恵器(碗), 土師質土器(杯・碗), 木製品(碗)



土師質土器(杯・小皿)



土師質土器(小皿)



黑色土器(碗), 瓦器(小皿), 土師質土器(皿·小皿·碗), 白磁(碗)

蓮池城跡北面遺跡



A区画像平面図(S=1/250)



A区調査前全景(北東より)



A区調査前全景(南西より)



A区遺構検出状態(東より)



A区遺構完掘状態(東より)



A区遺構検出状態(北西より)



A区遺構完掘状態(北西より)



A区遺構完掘状態(北上空より)



A区遺構完掘状態(南上空より)



A区遺構完掘状態(西上空より)



A区遺構完掘状態(東上空より)



A区セクション1(北より)



A区セクション2(北より)



A区北西部遺構完掘状態(北より)



SB-101(東より)



SB-101礎板出土状態1(西より)



SB-101礎板出土状態2(東より)



SB-101礎板出土状態3(西より)



SB-101礎板出土状態4(西より)



SB-101礎板出土状態5(西より)



SD-101(南より)



SD-102(南より)



SD-102備前焼(110)出土状態(北より)



SD-103土師質土器(112)出土状態(北西より)



SD-103・104(西より)



SD-104(南より)



SD-110(西より)



SU-101(西より)



SU-101(東より)



SU-101土師質土器(122・123)出土状態(南東より)



SU-101土師質土器(122・123)出土状態(北西より)



B区調査前全景(南西より)



B区西壁セクション(東より)



B区第1次遺構検出状態(南より)



B区第1次遺構完掘状態(南東より)



B区第2次遺構検出状態(南西より)



B区第2次遺構完掘状態(南より)



C区調査前全景(東より)



C区北壁セクション(南より)



C区遺構検出状態(東より)



C区遺構完掘状態(東より)

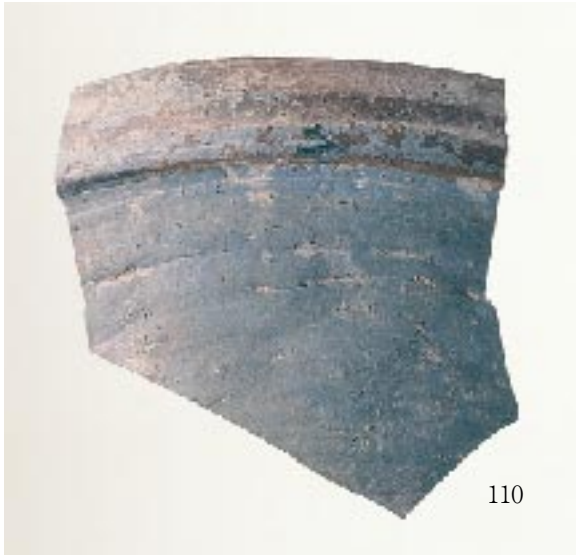
PL.94



C区拡張部遺構検出状態(東より)



C区拡張部遺構完掘状態(東より)

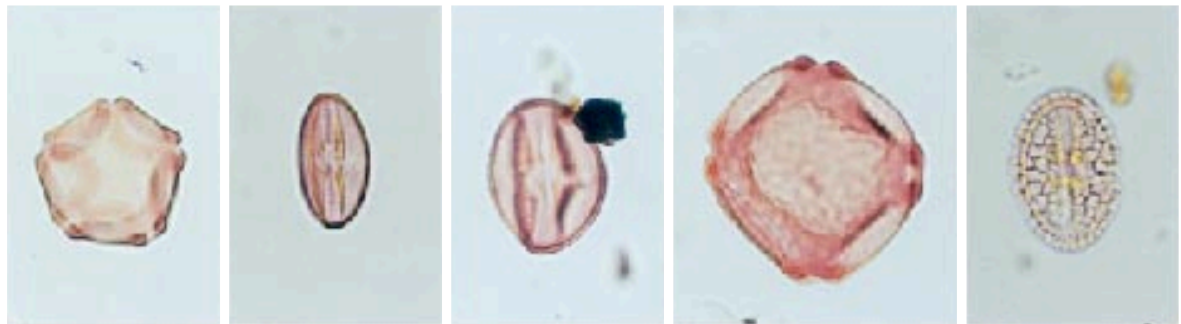


備前焼(播鉢), 石製品(鍋・石鏝)

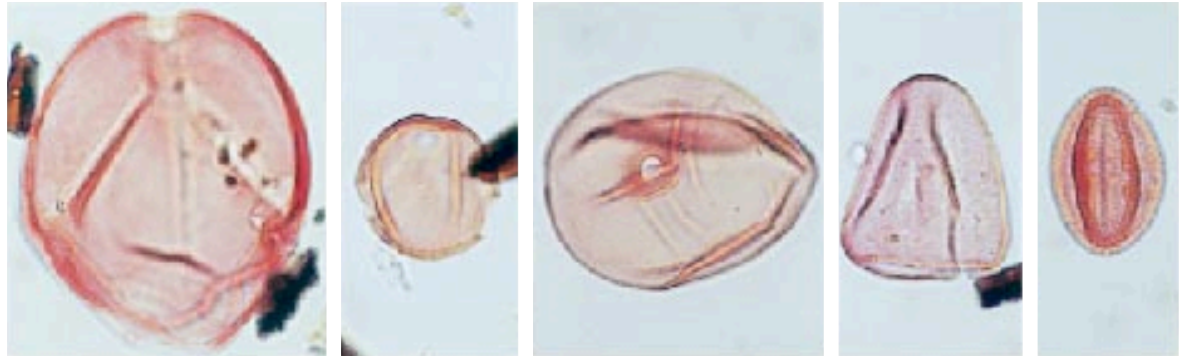


土師質土器(杯・小杯・小皿), 石製品(スクレイパー), 古銭(寛永通宝)

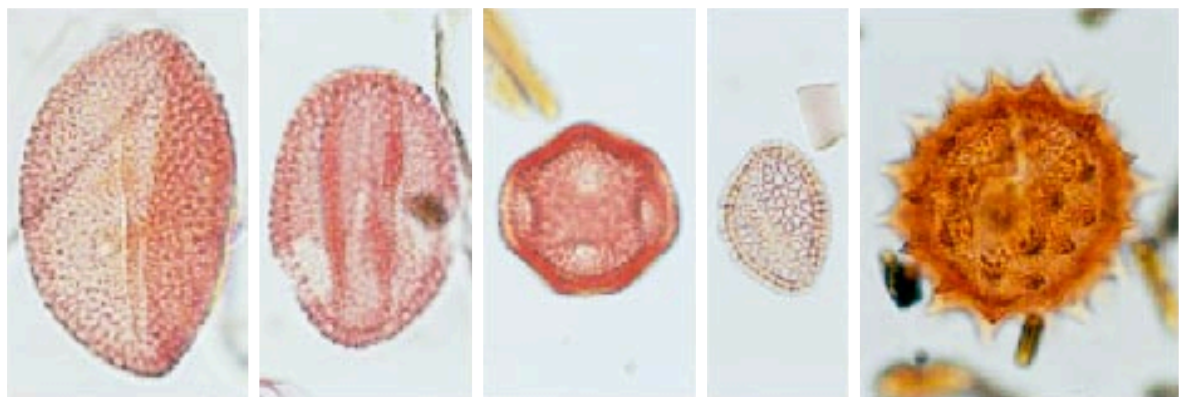
自然科学分析



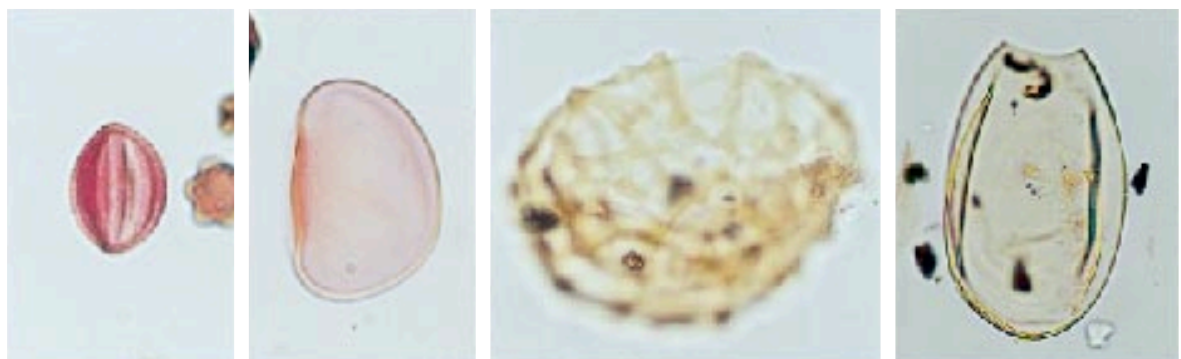
1 ハンノキ属 2 シイ属 3 コナラ属
アカガシ亜属 4 ニレ属-ケヤキ 5 サンショウ属



6 カキ属 7 マメ科 8 イネ科 9 カヤツリグサ科 10 タデ属



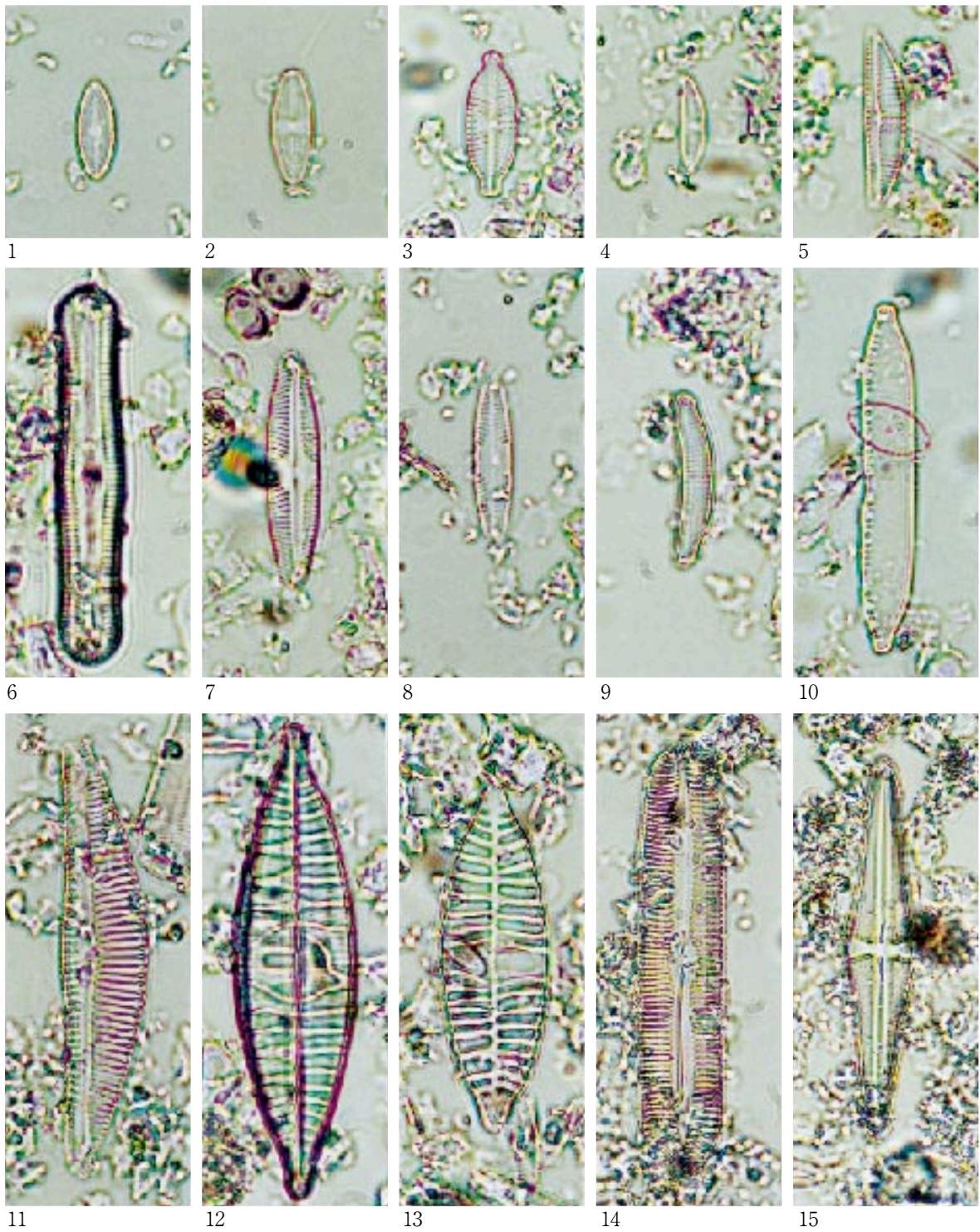
11 ソバ属 12 ソバ属 13 ナデシコ科 14 アブラナ科 15 キク亜科



16 ヨモギ属 17 シダ植物単条溝孢子 18 回虫卵 19 不明虫卵

— 10 μ m

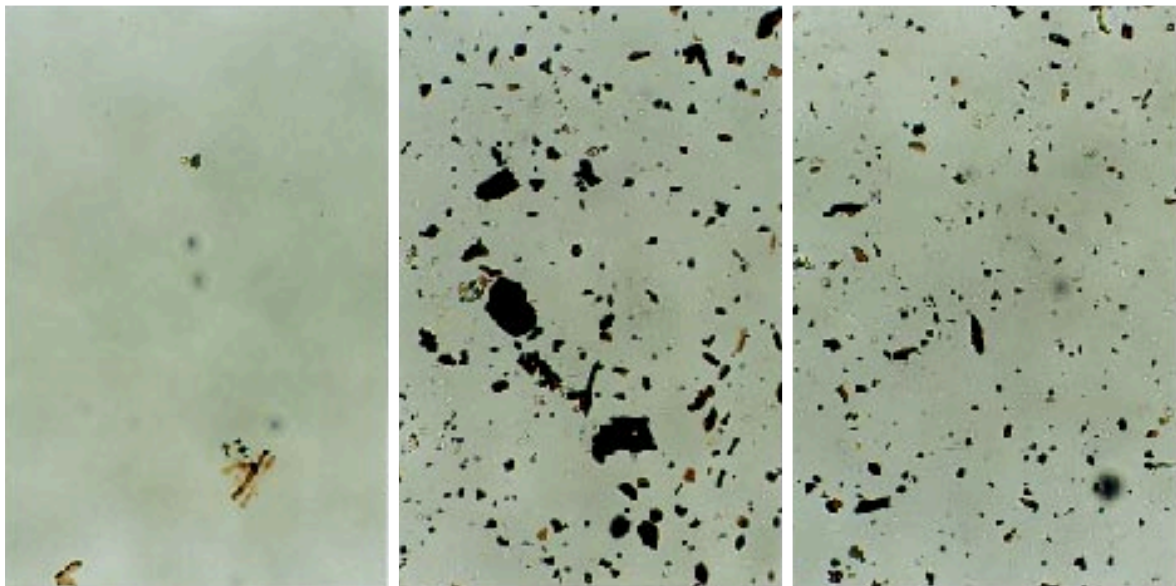
— 10 μ m



1-13 — 10 μ m 14-15 — 10 μ m

1. *Navicula arvensis* 2. *Navicula mutica* 3. *Navicula elginensis* 4. *Amphora montana* 5. *Cymbella minuta*
 6. *Pinnularia acrosphaeria* 7. *Pinnularia microstauron* 8. *Pinnularia subcapitata* 9. *Eunotia pectinalis* v. *minor*
 10. *Hantzschia amphioxys* 11. *Cymbella gracilis* 12. · 13. *Navicula cuspidata* 14. *Pinnularia viridis*
 15. *Stauroneis acuta*

林口遺跡第Ⅱ調査地区の珪藻

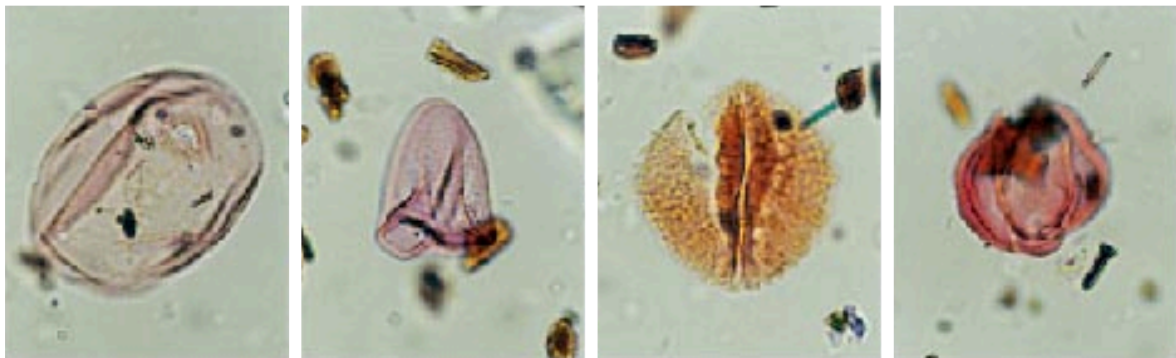


1 試料 1

2 試料 2

3 試料 3

100 μ m

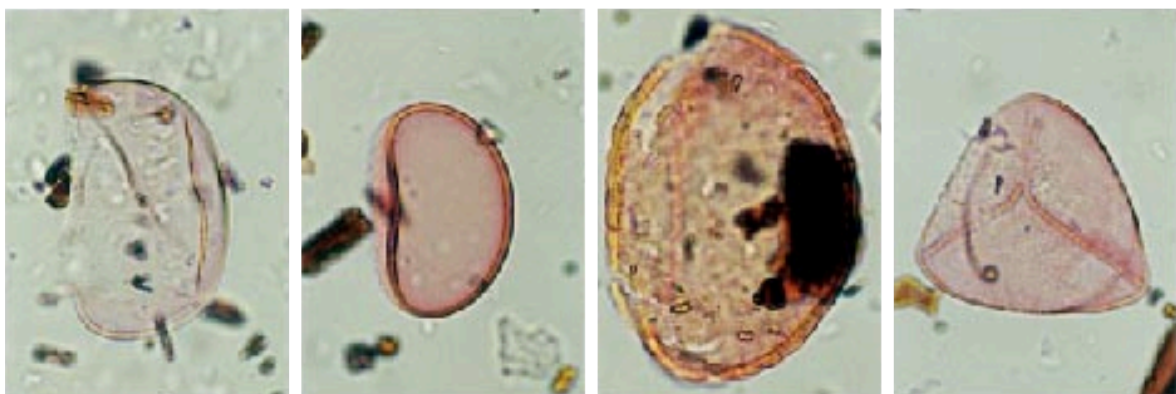


4 イネ科

5 カヤツリグサ科

6 キク亜科

7 ヨモギ属



8 シダ植物単条溝胞子

9 シダ植物単条溝胞子

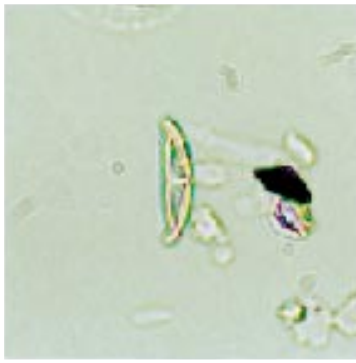
10 シダ植物単条溝胞子

11 シダ植物三条溝胞子

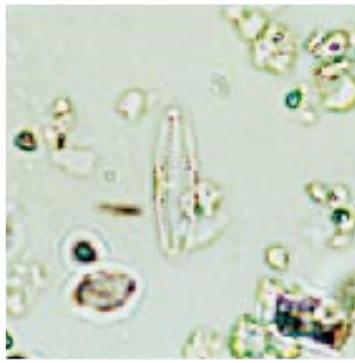
10 μ m

蓮池城跡北面遺跡の花粉・胞子遺体

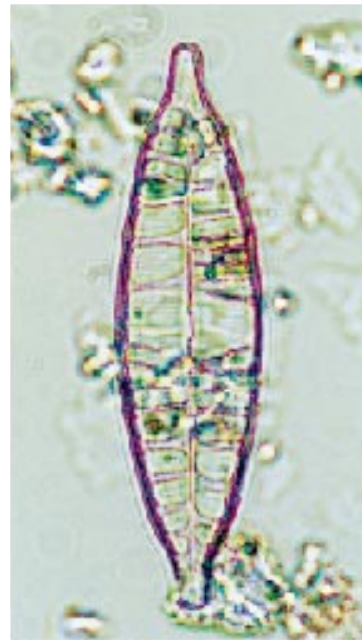
PL.100



1



2



3

1. *Amphora ovalis* 2. *Pinnularia subcapitata* 3. *Navicula cuspidata*

— 10 μ m

蓮池城跡北面遺跡の珪藻

報告書抄録

ふりがな	はやしぐちいせきに・はすいけじょうせきほくめんいせき							
書名	林口遺跡Ⅱ・蓮池城跡北面遺跡							
副書名	土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅳ							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第64集							
編著者名	廣田佳久・伊藤強・田中涼子・下村裕							
編集機関	(助)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2001年8月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はやしぐちいせき 林口遺跡	こうちけん 高知県 とさし 土佐市 たかおかちよう 高岡町	39205	050021	33° 29' 46"	133° 25' 20"	19990506 ＼ 19991224	5,339	土佐市 バイパス 建設
はすいけじょうせきほくめん 蓮池城跡北面 いせき 遺跡		39205	050036	33° 29' 32"	133° 25' 13"	19990506 ＼ 19990608 19991004 ＼ 19991018		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
林口遺跡	集 落	古 代		溝跡1条	土師器 須恵器	林口城跡東山麓部の土橋、屋敷を区画すると考えられる溝跡を検出する。また、集落縁辺部の低湿地、土坑から大量の土器、県内初出土の扇が出土する。		
		中 世		掘立柱建物 3棟 塀・柵列跡 3列 土坑 25基 溝跡 63条	土師質土器 瓦器 瓦質土器 黒色土器 東播系須恵器 常滑焼 備前焼 古瀬戸焼 白磁・青磁 石製品 木製品			
		近世以降		土坑 2基 溝跡 14条	土師質土器 磁器 陶器			
	城 跡	中 世		柵列 1列 溝跡 1条 土橋状遺構 1基	黒色土器 土師質土器 瓦器			
蓮池城跡北面遺跡	集 落	中 世		掘立柱建物 1棟 土坑 3基 溝跡 21条 畝状遺構 1群	土師質土器 瓦器 瓦質土器 東播系須恵器 備前焼 青磁 石製品	13～14世紀の屋敷跡、畝状遺構を検出する。		

本書作成データ

本書の作成には、MacOS9.1と以下のハードとソフト及びフォントを使用した。

まず、基礎作業はPowerBookG3/400とiBookSE、編集作業ではPowerMacintoshG4/733を使用し、原稿執筆とデータ処理にはJedit (PPC) 1.08 bとExcel2001を用いた。編集はすべてQuarkXpress4.1r2Jを使用した。なお、表組はExcel2001で作成したものをタブ変換しIllustrator9.02にFlexTableを介して取り込み編集しEPSデータとした。

第V章自然科学分析に掲載している表と挿図は納品されたExcelのデータ及びPICTデータをすべてIllustrator9.02で編集し直し、同じく挿図も再度Illustrator9.02で再トレースし、EPSデータとした。

フォントはすべてNewCIDフォントで、和文フォントにモリサワリユウミンL-KL・太ミンA101・中ゴシックBBB・太ゴシックB101・見出ミンMA31、欧文フォントにビブロスRmAlpha、TimeItalic、外字にエヌフォア外字DXを使用した。なお、字詰めはDr.カーニングを併用した。

また、入稿までの編集・校正作業はCOLOR LASER SHOT LBP-2260PSで印刷したもので行った。

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第64集

林口遺跡Ⅱ・蓮池城跡北面遺跡

土佐市バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

2001年8月31日

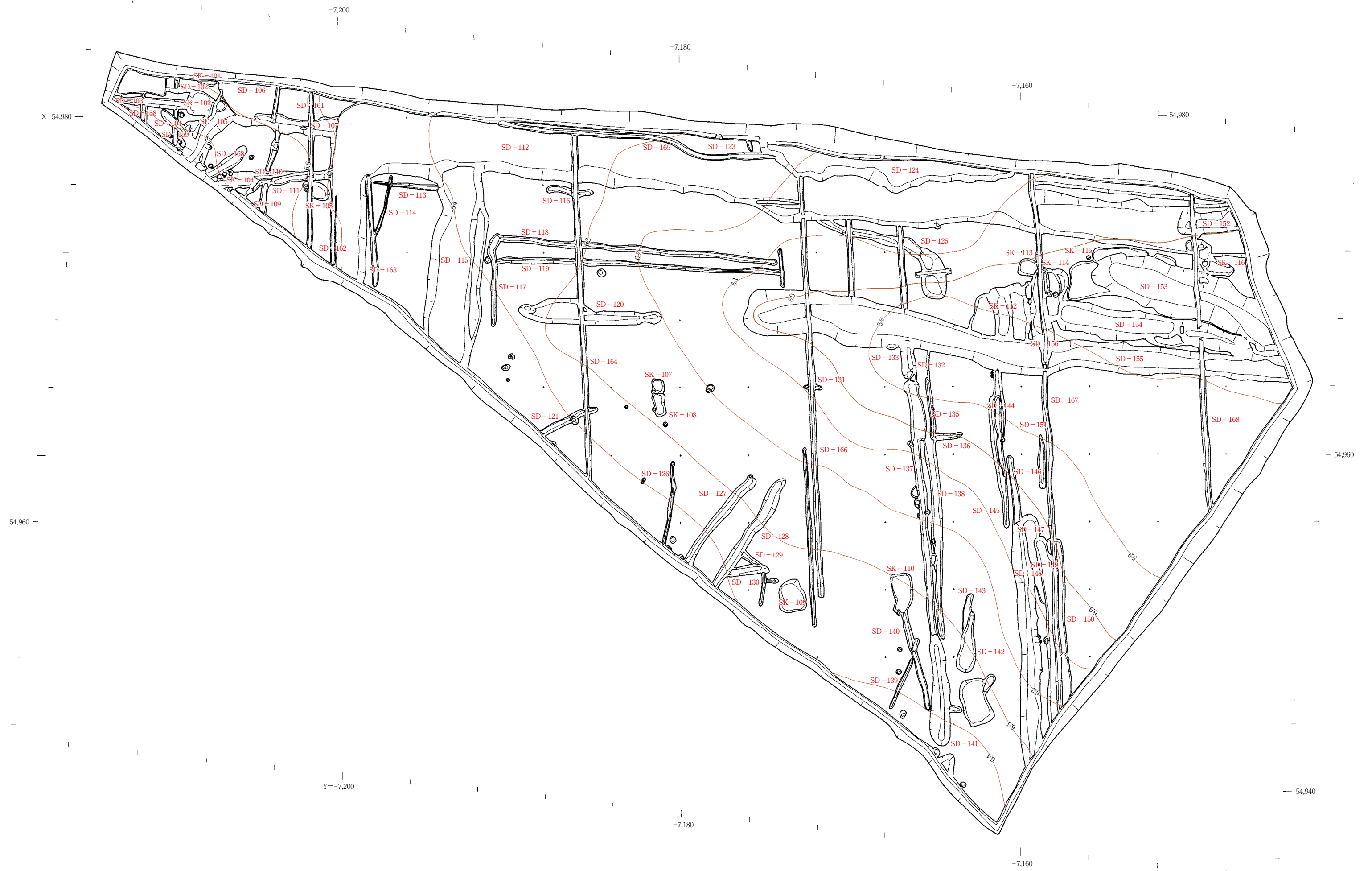
発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

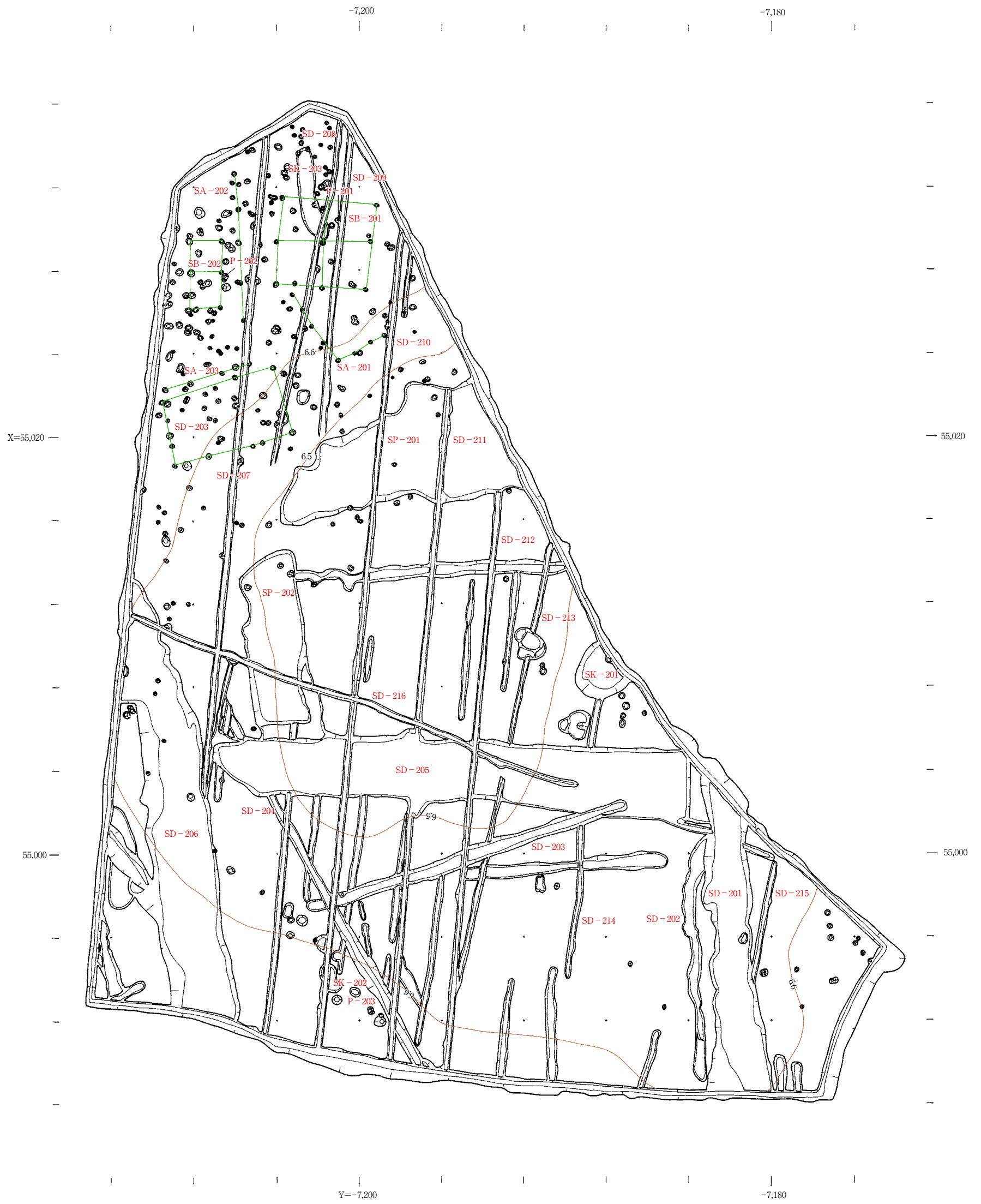
Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社

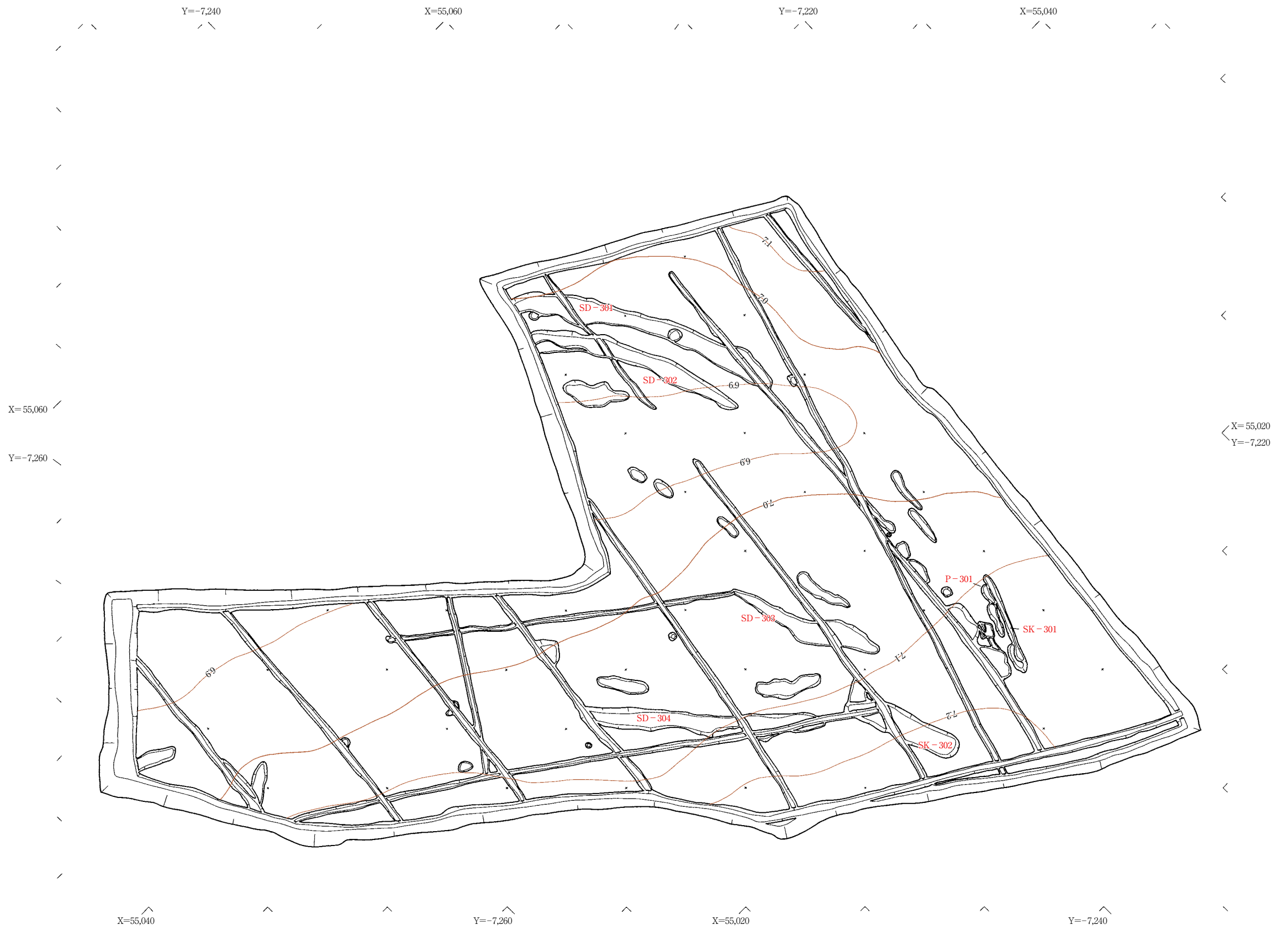
林口遺跡Ⅱ・蓮池城跡北面遺跡
付 図



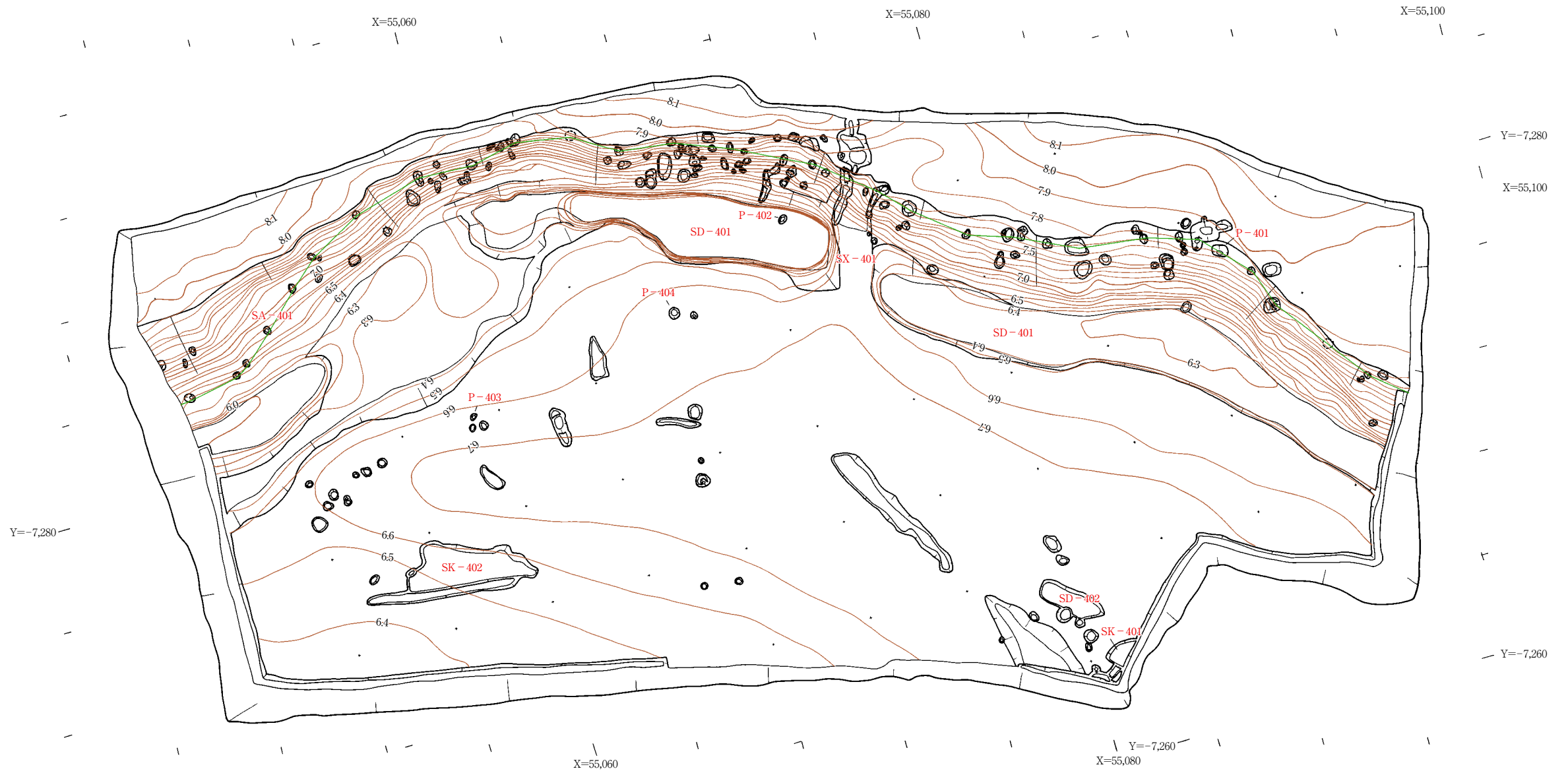
付图 1 林口遗址A区遺構平面図(S=1/200)



付图2 林口遗址B区遺構平面図 (S=1/200)



付图 3 林口遗迹C区遗构平面图 (S=1/200)



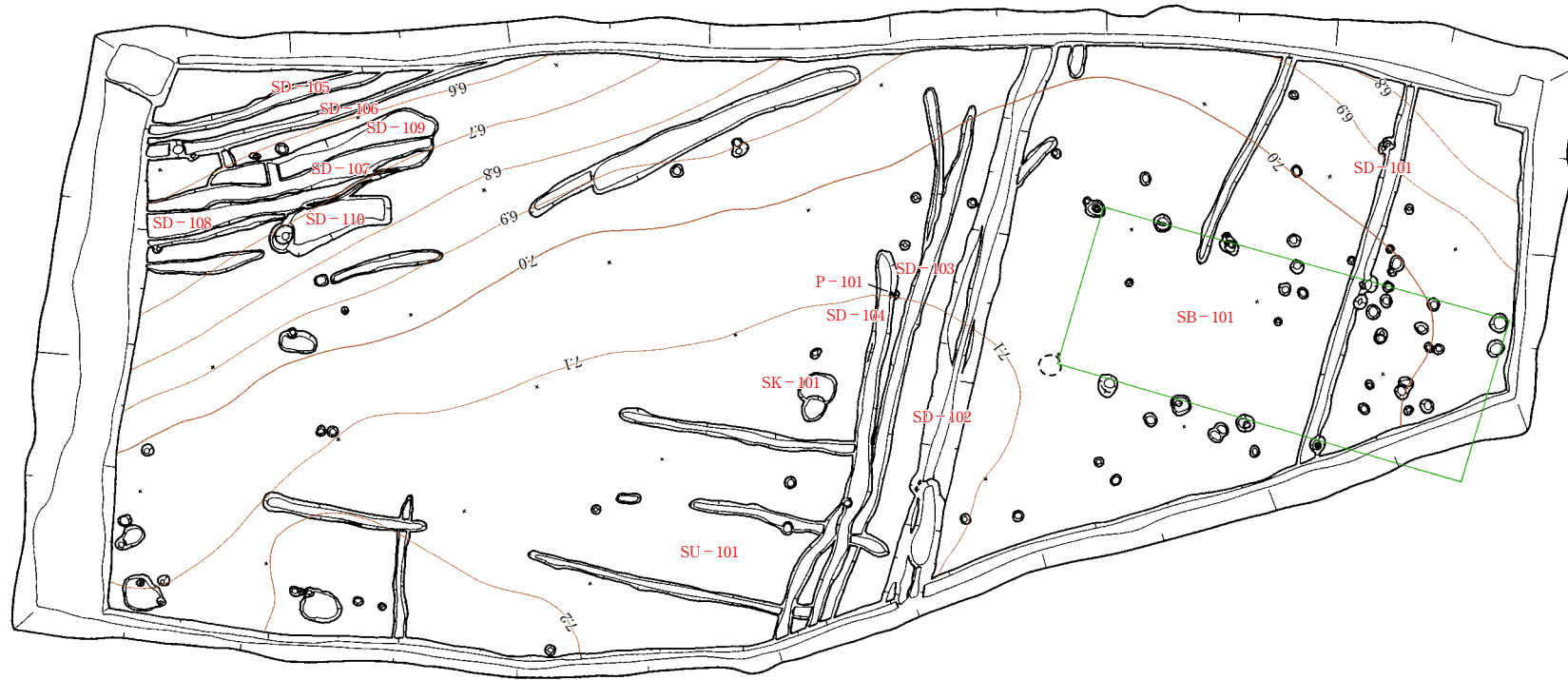
付图4 林口遗址D区遗构平面图(S=1/200)

X=54,600

-7,420

54,620

-7,400



54,620

54,580

Y=-7,420

54,580

-7,400

54,600

付图5 蓮池城跡北面遺跡A区遺構平面図 (S=1/200)